

昭和日本語方言の総合的研究

第三卷

方言文末詞〈文末助詞〉の研究
(下)



広島方言研究所

藤原与一

春陽堂

緒 言

ここに、方言文末詞<文末助詞>研究の下巻を発表する。

方言文末詞<文末助詞>の世界は、じつに広くて深い。追求してみても、私は、文末詞の研究大系の深大であるべきことを痛感する。——おそらく、他のどの品詞についても、この文末詞のばあいほどの深大な研究大系を見ることはできないであろう。

方言文末詞の世界にあっては、前後二つの大分野が見わけられる。一は、感声的文末詞と見られるものの世界である。二は、およそ非感声的と見られるものの世界である。下巻でとりあつかうのは後者である。私は、この世界に、かえて、文末詞のより深い世界を見わたすことができるかと考えている。

上巻・中巻を記述しておえて、いくらかの反省がある。その一つに、

記述の様式が、やや定式化してはいないか。

ということがある。この点に関して、いくらかの付言をしてみたい。私は、あくまで、方言文末詞研究の高次共時論的なたちばを重んじようとしている。このため、当然、事象・事項の、広域にわたる現実態の的確な把握が重視される。この把握は、あたかも、柳田国男先生教示の「国語の事実を明らかにする。」に該当するものである。私は、先生のご訓言の重さを思いかえしつつ、記述の業にいそしんできた。国語の事実を明らかにするためには、記述上の粉飾めいたものは、去りきらなくてはならない。こういう点で、私の、上巻・中巻での文末詞記述は、おのずから、既発表のようになった。

ものの全国状況についての約説は、私にとっては、一種の精説とも言うべきものであって、概観ではない。手もとの材料・資料をとりあげ、事象・事項を

広く深く見ることにつとめ、やがて、これらの資料群から、適切な事例をとりたてて、私は、高次共時論の精神にもとづく記述にしたがった。

この記述が、いきおい、文表現論の方向をとること、文表現～表現次元～の注視におもむくことは、言うまでもない。

この下巻にあっても、もとより、叙上の記述態度がつらぬかれる。ただし、とりあつかおうとする文末詞の現実にしたがって、下巻では、さらに記述の体をみがくことの努力がなされる。「どうすれば、よくこの文末詞の世界の深奥をえがきとることができるか。」——これは、私の夢寐にも忘れることのできない課題である。

私にとって、文末詞研究は、敬語法研究と一連のものである。両者は、あいまって、一大待遇表現法体系研究をなす。

方言敬語法研究の業をおえたあと、今ここに、文末詞<文末助詞>研究の業を、ひとまず完結しうるのは、われながらよろこばしいことである。

私は、ここで、あらたにまた、「文末詞の言語学」の進展に寄与すべきことを、自己につよく言いきかせたい。文末詞研究こそは、世界の諸言語にわたっての一般言語学的研究の好テーマの一つではないか。

※ ※ ※ ※ ※

本巻の刊行にさいしても、私はまた、多くのかたがたに謝意を表さないではいられない。

ご鞭撻をたまわる恩師ならびに諸彦に、つつしんで厚く御礼を申し上げる。土井忠生先生は、不断にご教導くだされ、なにくれとなく、ご深究の中のことを語ってくださる。そのつど、私は、厳乎たる学道に立たされる。まことにありがたいことである。

春陽堂書店社長，和田欣之介氏の，かくべつのおはからいには，ただただ深謝するばかりである。文字どおり出版困難のさ中，氏は，まったく犠牲的に，本書を出版してくださる。じつにかたじけない。

四恩に鳴謝しつつ，今，私は，この書を世にさし出す。

凡 例

- 1) 略
 2) 略 } 上巻凡例参照
 3) 略 }

4) 本文中の実例には、通常、アクセント符号がつけてある。傍線部が、より高く発音されるべきものである。傍線部分に「○○○○○○○○」のようなくぎれのあるばあいには、のちの傍線部分がより高めに発音されることをあらわす。

5) 実例を現代共通語で言いかえているものに“ ”があれば、その部分は、土地人の説明のことばか、それに準じうものかである。

この“ ”が、通常の説明本文の中に出ることもある。すべて、引用であることを明らかにしたものである。

6) 書中、他文献を引用し恩借するばあいに、著者名・発行所名、巻号・年月などを、省略することが多い。この『昭和日本語方言の総合的研究』の第一巻・第二巻の作業をおえてきたので、第三巻以降では、初二巻に依拠しつつ、本文中の文献出所記載の作業を簡略にする。委細については、本書、『方言文末詞〈文末助詞〉の研究』下巻の「引用(恩借)文献一覧」を参照せられんことを乞う。

一覧は、地方別(→県別)に整理してあり、各県内では、ものが、著编者アイウエオ順に排列されている。

目 次

緒 言	i
凡 例	iv

〔上巻〕

序 編	昭和日本語方言文末詞<文末助詞>研究 総論
本 編	昭和日本語方言文末詞<文末助詞>の統合的記述
序 章	記述方法
第一章	文末訴え音
第二章	文末詞「ヲー（オー）」
第三章	ナ行音文末詞
第四章	ヤ行音文末詞

〔中巻〕

第四章	ヤ行音文末詞 つづき
第五章	サ行音ザ行音文末詞
第六章	感声的文末詞「ダ」
第七章	「カ・カイ」の属
付 章	命令表現文での「ロ」と禁止命令表現文での「ナ」と

以下 本巻（下巻）目次

第八章	転成の文末詞	1
一	文末詞の広野	1
二	非感声系の転成文末詞	1
三	転成文末詞の生成	2
四	転成文末詞の諸領域	3

第九章 助詞系の転成文末詞	4
第一節 「ノ・ン」の属	4
一 はじめに.....	4
二 南島地方について.....	5
三 九州地方の「ノ・ン」.....	6
四 中国地方の「ノ・ン」.....	7
五 四国地方の「ノ・ン」.....	9
六 近畿地方の「ノ・ン」.....	12
七 中部地方の「ノ・ン」.....	15
八 関東地方の「ノ・ン」.....	17
九 東北地方の「ノ・ン」.....	19
十 北海道地方の「ノ・ン」.....	22
十一 おわりに.....	22
第二節 「ニ」の属	23
一 はじめに.....	23
二 九州地方の「ニ」.....	23
三 中国地方の「ニ」.....	25
四 四国地方の「ニ」.....	28
五 近畿地方の「ニ」.....	30
六 中部地方の「ニ」.....	33
七 関東以北地方の「ニ」.....	38
八 おわりに.....	40
第三節 「ト」の属	41
一 はじめに.....	41
二 「ト」の存立と活動	41
三 おわりに.....	56
第四節 伝達の「トイ」.....	56

第五節 「タイ」形文末詞	60
一 はじめに	60
二 九州方言の「タイ」の属	60
三 九州外での「タイ」形文末詞	74
第六節 「ダイ」形文末詞	77
一 はじめに	77
二 九州方言の「ダイ」の属	78
三 九州外での「ダイ」形文末詞	84
第七節 「デ」の属	85
一 はじめに	85
二 南島地方の「デ」ほか	87
三 九州地方の「デ」ほか	87
四 中国地方の「デ」ほか	92
五 四国地方の「デ」ほか	95
六 近畿地方の「デ」ほか	99
七 中部地方の「デ」ほか	104
八 関東地方の「デ」ほか	109
九 東北地方の「デ」ほか	111
十 北海道地方の「デ」ほか	114
十一 おわりに	114
第八節 「デア」「ヂ(ジ)ャ」「デワ」	115
一 はじめに	115
二 東北地方・北海道地方の「デア」「ヂ(ジ)ャ」	117
三 その他の地域での「デア」「ヂ(ジ)ャ」形	121
四 デワ	126
五 おわりに	128
第九節 「ガ(ガ)・ガイ(ガイ)」の属	128

一	はじめに	128
二	南島地方の「ガ」	130
三	九州地方の「ガ・ガイ」ほか	131
四	中国地方の「ガ・ガイ」ほか	138
五	四国地方の「ガ・ガイ」ほか	141
六	近畿地方の「ガ・ガイ」ほか	144
七	中部地方の「ガ・ガイ」ほか	147
八	関東地方の「ガ・ガイ」ほか	151
九	東北地方の「ガ・ガイ」ほか	153
十	北海道地方の「ガ・ガイ」ほか	154
十一	おわりに	155
第十節	その他の助詞系転成文末詞	155
一	「カラ」の属	155
二	「ケン」の属	159
三	「サカイ」の属	160
四	「トテ」の属	160
五	「トモ」の属	160
六	「バン」の属	161
七	「ヤラ」の属	161
八	「ニロ」の属	162
九	「カモ」の属	162
十	「バヤ」の属	162
十一	「ケレド」の属	163
十二	「ドモ」の属	164
十三	「バッテン」の属	164
十四	「ガニ」の属	165
十五	「コソ」の属	165

十六 「クライ」の属	169
十七 「マデ」の属	169
第十章 助動詞系の転成文末詞	170
第一節 総説	170
第二節 「ダ」の属	170
一 はじめに	170
二 「ダ」文末詞の存立と活動	171
第三節 「ジャ」の属	181
第四節 「ヤ」の属	190
第五節 「ナラ」の属	191
第六節 「ゲナ」の属	194
第七節 「べ(べ)」の属	195
第八節 「ケ」の属	197
第九節 その他	199
第十一章 動詞系の転成文末詞	202
第一節 総説	202
第二節 「テバ」「カシラ」「タラ」	202
一 テバ	202
二 カシラ	209
三 タラ	209
第三節 「言う」に関する文末詞	212
一 はじめに	212
二 トテ	212
三 テヤ テワ テラ テテ(テチ) テンガノ	213
四 チヤ チャ	227
五 チュー チョー	253

六	チ	チコ	263
七	テ		273
八	ツ	ツ	285
第四節		「申す」に関するもの	294
第五節		「思う」に関するもの	294
第六節		「見る」に関するもの	300
第七節		「ご覧」	304
第八節		「ござる」「ございます」の「ゴザ」	306
第九節		「来い」に関するもの	308
第十節		「シテ」	312
第十一節		「ある」に関するもの？	317
第十二節		結語	318
第十二章		形容詞系の転成文末詞	320
第十三章		形容動詞系の転成文末詞	322
第十四章		名詞系の転成文末詞	324
第一節		総説	324
第二節		「モノ」の属	324
一		はじめに	324
二		「モノ」文末詞の存立と活動	325
三		おわりに	342
第三節		「コト」の属	343
一		はじめに	343
二		「コト」文末詞の存立と活動	343
三		おわりに	357
第四節		「ワケ」「クライ」「トコロ」	358
第十五章		代名詞系の転成文末詞	363

第一節 総説	363
第二節 事物代名詞系の文末詞	364
一 はじめに	364
二 「コレ」の属	364
三 「ソレ」の属	372
四 何モ	377
五 おわりに	378
第三節 人称代名詞<自称>系の文末詞	379
一 はじめに	379
二 「ワタン」など	379
三 「ワイ」の属	380
四 「バイ」の属	402
五 「ワ」の属	415
六 「バ」の属	443
七 「オレ」の属	449
八 「ワレ」の属	450
第四節 人称代名詞<対称>系の文末詞	468
一 はじめに	468
二 コンタ コナ オンシ キサマ	469
三 「ワレ」の属	470
四 「オマイ」の属	474
五 「アナタ」の属	479
六 自称系と対称系	497
第十六章 副詞系の転成文末詞	498
一 はじめに	498
二 「ホンニ」の属	498

三 「ハヤ」の属	500
四 「ハー」「ヘー」の属	500
五 「モー」の属	510
六 「マヅ」の属	512
七 「ドーモ」の属	514
第十七章 接続詞系の転成文末詞	515
第十八章 感動詞系(文系)の転成文末詞	516
第一節 総説	516
第二節 「モシ」の属	517
一 「モシ」ほか	517
二 「シ」ほか	520
三 「モ」ほか	537
四 「ナ(ノ)(ネ)(ニ)モシ」「エモシ」の成形	541
五 「ナモシ」類	543
六 「ノモシ」類	562
七 <ネモシ>類	571
八 <ニモシ>類	574
九 <ヌモシ>類	575
十 「エモシ」類	576
第三節 諸他の感動詞系文末詞	578
一 「オイ」の属	578
二 「ヨイ」の属	580
三 「ホイ」の属	581
四 「コラ」の属	582
五 「ソラ」の属	583
六 「サラ」の属	586
七 「ホラ」の属	587

八 「ハラ」の属	590
九 「アッ」の属	591
十 「ハイ」の属	592
十一 ハテ デー ドレ (デー)	593
十二 「まあ」の属	594
十三 「ヤレ」の属	598
十四 別趣のやや長形のもの	606
十五 おわりに	607
結 語	609
あとがき	611
引用 (恩借) 文献一覧	
<上・中・下の三巻にわたる>	617
下巻索引	649
I 方言事象索引	649
II 事項索引	673

第八章 転成の文末詞

一 文末詞の広野

現代日本語に見られる、口頭表現での文末詞の活動は、瞠目にあたいするものがある。表現分子、文末詞の繁榮は、一大壯観とも見られる。その文末詞の存立は、感声系のもの・非感声系のものの両存によって、大広野を成している。

二 非感声系の転成文末詞

非感声系の文末詞は、転成文末詞とも称しうるものである。（「カ」は別問題である。）

文末詞に、転成の文末詞があり、しかもこれが、多彩多様、存立の盛大をきたしているのは、これ自体がすでに、文末詞研究上の一大問題になる。

なぜこうまで多く（本書にとりあげるように）、転成の文末詞が繁榮しているであろうか。これは、話し手たちが、文末詞をこのように多様に求めたということである。

人が、表現上、一個一個の文表現を、相手に投げかけていって、その訴えを有効に（効果的に）しようとするので、かく、文末詞は、転成の諸領域にわたっても、とりどりに生産されているのであろう。——訴えたい場面が多様であればあるほど、文末詞もまた表現心意に即応して多様多彩に製作される。

かえりみれば、文末訴え要素の要求は、どの言語民族にあっても、あって当然のことである。じじつ、世界の東西の諸言語に、表現上の訴え手段が見られる。同理によって、日本語にあってもまた、訴え手段が発達しており、しかも日本語生活でのばあいには、特定の訴え要素、文末詞が発達している。（これは、日本語の文法構造によるものである。）感声系の文末詞の発達が、非感声系の文末詞（転成の文末詞）の発達をさそったであろう。

三 転成文末詞の生成

人は、そうとうに自由に、転成文末詞を製作してきたようである。製作とは言うけれども、そこには生成の自然がありきたったと見られる。

どのように自然的に転成文末詞は製作されたか。生成の機縁はどういうところにあったか。また、あるか。

一つに、文表現上の途中の切れめに、転成文末詞生成の機縁がある。たとえば、「～だが、どうどう。」というセンテンスでの、「が」に文末詞化の機縁がある。「～だが」の言いかたを、「～だ^ガー。」などと言うと、この「ガ」は、文末詞的なものになる。文表現中のすべての接続助詞には、文末詞化の機縁があるとされよう。京都弁などで、「ナニナニヤケド。」(何々だけど。)とよく言われている。「ケド」の「ド」が「ド」とあって、ここに訴え然としたものが見られる。

文表現途上にくるのをつねとするすべての中止的要素は、みな、文末詞化の機縁をはらんでいるとしてよからう。

二つに、「何々だ。」「ナニナニジャ。」といった文終止法での終止要素「だ」「ジャ」といったものにもまた、文末詞化の機縁が認められる。すなわち、たとえば「だ」は、「ドコイクダー。」というようにもつかわれ、一種のつよいよびかけことばともされる。「だ」の文末詞化である。

もともと文末にあるものはまた、特定のよびかけ要素ともなりうるものであろう。

三つに、単純動詞の単純命令形、たとえば「来い。」といったようなものが、自由に文末に転用されて、特定のよびかけことば(文末詞)とされる。どの動詞もということにはなるまいが、文表現の訴えかけを効果的にするのに役だつ類の動詞ならば、とりどりのものが採用されてよいはずである。

単独の「来い」、これが文末に転用されるばあいは、「来い」が、文表現的なものであるとも見られよう。

四つに、「ほら」とか「もし」とかの、特定文表現習慣のものが、よく、文末詞に転用されている。この種のもの、簡小文表現形であるだけに、文末詞世界への持ちはこびは、きわめて容易であったこと（あること）が察せられる。

なおいくとおりのばあい考えられるが、転成の理は、すべて上来のもの、のばあいと同断である。なんらかの要素を文末におき、またはなんらかの要素の所在をもって文末とし、その要素を、人が、感慨（一詠嘆）をもって発言すれば、それはみな文末詞的なものになる。

四 転成文末詞の諸領域

助詞系の転成文末詞に、まず、種別の多いのが認められる。当然のことであろう。接続助詞にせよ格助詞にせよ、あるいは係助詞などにせよ、みな、これらは文表現上のくぎれめにたつものである。

代名詞系の転成文末詞もまた繁栄している。これも当然のことであろう。「わたし」とか「あなた」とかは、よびかけ要素としてかっこうのものである。——表現はつねに、対応の人間関係のもとでなされている。

形容詞・形容動詞といった形容語が文末詞にほとんど転成していないのは、もっとものこととして理解される。

副詞には、かなりの文末詞転成事実が見られる。

品詞上、感動詞として処理しうるものがまた、よく文末詞化している。

「もし」といったような、簡小文表現形が多い。これらは、特定慣用文をなしている。それだけに、これらは、文末の特定要素、文末詞になりやすい。特定慣用文の領域は、転成文末詞の観点から言って、注目すべき領域である。

第九章 助詞系の転成文末詞

第一節 「ノ・ン」の属

一 はじめに

能狂言「しろうん」(岩波文庫『能狂言 下巻』p.10)の中に、つぎの会話が見える。

シテ ヤア〜, こちの事で御座るか。何事で御ざるぞ。

アド いかにもこなたの事で御座る。聊爾な^(し)申事ながら, こなたはどれからどれへ御ざるぞ。

シテ 愚僧の。

アド 中^(なか)〜。

シテ みやこへ登る者で御座るが, 何ぞ御用ばし御座るか。

「愚僧の。」という問いかえしことばが見える。ここには, 問いの「ノ」文末詞が認められる。

この「ノ」は, 「のうのう」とよびかけたりする料の「ノ」文末詞ではなからう。格助詞「の」の起源の文末詞と解される。

現代のいわゆる共通語には, 主として女性がわに, 「どこへ行くんです^ノ。」「きのう行ったんです^ノ。」などの言いかたがさかんである。助詞系の「ノ」文末詞がよく流通していると言えよう。

「何々じゃない^ノ。」の「ノ」を略して, 「何々じゃない?」と言うことは, 今日, また流行的であろう。助詞系文末詞の省略の事実が顕著でもある。

助詞系文末詞「ノ」に相当する「ン」がある。「どこへ行く^ノ?」に対して, 方言界には, 「ドコイ^イ イケ^ン。」などの言いかたが存立している。「ン」

は「ノ」に相当することが明らかであろう。私どもは、「ノ」にならべて「ン」を、等しく文末詞形としてとりたてることができる。

文末訴え音と見られる「ン」もある。同時に、助詞系文末詞と見られる「ン」もある。——じっさいには、助詞系のものであることのわかりにくいばあいもある。

「ン」は「ノ」からきたものであろうか。文末詞としての「ン」の意味作用一般は、「ン」がまさに「ノ」に該当することを示している。

ところで、私自身の生活語経験によれば、郷里、内海大三島北部では、「ン」文末詞がおこなわれていて、「ノ」文末詞はおこなわれていない。私などは、「イツ キタ ン。」(いつ来たの?)というのをつねとしていて、「イツ キタ ノ?」の言いかたは有していない。こういうばあいは、「ン」は「ノ」からきたとすることがかならずしも容易ではあるまい。それにしても、大三島方言での問いことばの「ン」は、たしかに、問いの「ノ」文末詞に恰当している。

以下には、共時論的処置を重んじて、現段階の「ン」を、現段階の「ノ」にあわせてとりあつかうことにする。

二 南島地方について

この地方については、言うべきことがない。与論島出身の町博光氏も、本題の「ノ・ン」に関しては、うかんでくるものがないと言われる。南島地方に、問いの文末詞としての「ノ」形のもの、「ン」形のは、なさそうである。

ここに一つだけ関例事例のようなものをつけ加えてみよう。山下文武氏の「奄美大島方言 (一) (『鹿児島民俗』No.1 昭和29年4月)に、

アタラシ_ン。 おしいこと。 アタラシ_ャ。おしい。

というのが見える。「ン」のあるほうが、「おしいこと。」という感嘆文になっている。「ン」はどのような要素なのか。——特定のはたらきを示すもののようなのである。

三 九州地方の「ノ・ン」

九州に、いくらかの問題事実が見いだされる。

鹿児島県下には、薩摩半島東南部での、

○イッ バカモン ノー。

おおばかものめが！

がある。(瀬戸口俊治氏教示)「ノ」(助詞系)が、感嘆表現をささえているのであろう。なお、瀬戸口氏が、薩摩半島南部のこととして教示されたものに、

五歳の女の子に私「顔を洗ったら何する」女の子「メスプト」(めしを食うの)私「いい言葉使ってごらん」女の子「メシヲプーノ」少したって「ゴハンヲプーノ」又少したって「ゴハンヲタベルノ」

というのがある。これはあたかも、九州弁の「ト」文末詞が、いま問題にしている「ノ」文末詞に対応していることを示しているよう。

宮崎県下では、中部での言いかたに、「オル カノ。」(いるかね。)などがある。こういうのは、助詞系の「ノ」としてよいのかどうか。『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条には、

*m*オマイ ドコ イクノ

おまえは どこへ 行くのかい。

というのが見える。問いの「ノ」文末詞は、県下の中部・北部にかなりおこなわれているのか。

熊本県下については、いま私は、とりたてて言うべきものを持たない。

長崎県下の『長崎県西杵郡樺島方言』の、

タヨリノ コンジャツ タツチャ シンパイセジー マツトランノ。

便りが来なくても案じないで待つておいで。

は、問いの文末詞を示すものかどうか。県下に、「カノ」の、問いの言いかたが見られるが、「ノ」はどういうものか。かつて、島原港のことばとして教示されたものには、

○イラワ イリン。

というのがある。「魚はいりませんか。」であるという。「ン」が注意されるか。

佐賀県下については、今、記述すべき事例を持たない。

福岡県下の筑後で得た例には、

○ウチノ ジッチャンニ アワンヤッタ ノ。

うちのおじいさんに会わなかったね？

などがある。

北九州市域では、問いの表現や自得の表現や説明の表現での「ン」が、よく聞かれる。

大分県下にも、問いなどの「ン」がよくおこなわれているか。小野米一氏は、県南辺海岸部でのことば、

○ジブンノ ホーカラ オラブ、ソノ ナニモ チカッタン。

自分の 方から 叫ぶ その なに《力》も なかったんよ。

というのを教示せられた。大畑勸氏の「大分県南部の方言の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）には、

○ナンボグレ スン^ノ ノ。

いくらぐらいするの？（青女→同）直川

○オレイ パーット ヤッタリ ヌカッチョ^ン ノ。

ぼくがばあっとやったら、つきささったの。（小男→同）宇目

などの「ノ」例が見える。——助詞系の「ノ」文末詞であろう。県北にも、「ドコデヤン^ノ。（どこですの？）」などの言いかたがおこなわれている。「ノ^ン」形が目される。

四 中国地方の「ノ・ン」

山陽がわでは、問いの「ン」が、かなりおこなわれているのか。

まず山口県下に、問いなどの「ン」がある。『全国方言資料』第5巻の「山口県都濃郡都濃町」の条の、

m………… アレガ ニエングラエン コトー オボエチヨルン
あれが 2円ぐらいの ことを 覚えてますよ。

は、説明の「ン」を見せている。周防東部の事例には、

○マツリニャー イカン ノ。

祭りには行かないの？ (青男→中男)

というのがある。「イカン ノ」の「ノ」が問いの助詞系「ノ」文末詞であろう。——そのあとに単純感声の「ノ」文末詞がついている。さきに九州域では、「ノ」に対応する「ト」を見たが、山口県下では、「ノ」に対応する「ソ(ホ)」が見られる。「行く ノ？」に対応する言いかたに、「イク ソ？」がある。

広島県下には、問いの「ン」がよくおこなわれている。——東京語の問いの「ノ」文末詞に該当するものである。問いでない時にも、

○フターツホド ダメン ナッタ。ナーヨニ シタン。

二つほどだめになったわ。なくしたのよ。(小女間)

など、「ン」のよくおこなわれるのが見られる。「ノ」形もおこなわれている。『全国方言資料』第5巻の「広島県庄原市山内町」の条に見える、問いの「ノ」の一例は、

*m*オジーサン オッテノ

おじいさん いますか。

である。

○ドコイ イク ノ。

どこへ行くんですか？

は、県によくおこなわれる一つの言いかたであろう。「ドコイ イク ノ。」というだけでも問いの表現である。「ンノ」の「ノ」は、どういう「ノ」であろうか。ことによると、「ドコイ イク ノ。」の言いかたが、しぜんに、「ドコイ イク ノ。」になったかもしれない。「ドシタ ノ。」(どうしたの?) からも、「ドシタ ノ。」ができやすかったのではないだろうか。

岡山県下にも、「ン」がよくおこなわれている。島嶼部の一例は、

○ソレ ドー ス ン。

それどうするの？

である。県北の「岡山県真庭郡勝山町神代」(『全国方言資料』第5巻)での一例は、

f………… ドコ イッターァン キョー
どこへ 行ったんですか、 きょう。

である。

○コレ ダレ ノン。

これ、だれの？ (女性間)

は、県西南島嶼部での「ノン」である。

島根県下に関しては、今、記述すべきものを、私はほとんど持たない。石見地方は、広島県下に似ていようが、出雲地方は別趣かもしれない。「ノ・ン」の使用が、すくないのか。神部宏泰氏は、隠岐道後の例、

○イツ イカシャル ノ。

いつおいでになるの。 (小男)

などを教示せられた。

鳥取県下では、『鳥取県方言辞典 後編』に、

の〔助詞〕 問い 「行くの」

ん〔助詞〕 問い 「行くん」

の記事が見られる。

五 四国地方の「ノ・ン」

愛媛県下では、瀬戸内海域島嶼の、

○バカタレ ノー。

ばかもめが！

を、まずあげたい。(私自身の郷里方言での事例である。)[ノ]が、感嘆表現に役だてられたものである。「バカタレ ガー。」(ばかたれめが！)とも言い、

「ガ」「ノ」がならびおこなわれている。(——「ノ」の言いかたのほうが、より古風であろう。年輩の男性に用いられる。今日では、そのおこなわれることが、かなりすくなくなつたようである。) この「ノ」が、「ガ」と同格の地位のものであることは、言うまでもなからう。「ノ」は、助詞系の文末詞であることが明らかである。おなじく、私の郷里方言では、「これですか?」とたずねる時、老人は、「コレ^ノ?」と言いがちである。この、問尋表現での「ノ」は、この地でそだった私には、「これの何々」などで「の」に近いものと思われる。「コレ^ノ」(これね?)などの、私なども少年時代よく言った言いかたでの「ノ^ー」もやはり、単純感声の「ノ」文末詞ではなくて、助詞系の「ノ」文末詞かと思われる。いわゆる単純感声の「ノ」を用いて、単純な問いにすることがあまりない。

○エー^ノ カノ。

いいかね?

などの「カノ」の問いのばあいにも、私の語感では、「ノ」が、助詞系の文末詞である。県下に、問いの「ン」がよくおこなわれており、『全国方言資料』第5巻の「愛媛県温泉郡川内村井内」の条に見られる、

f………… ヨッターーガ モー タチズメデナー スリヨッタン

4人が もう 立ちづめでねえ すっていたもんだ。

など、問わないばあいのものもある。(松山弁などでは、上例のような「ン」が顕著である。) 問いの「ノー」(やはり助詞系)もおこなわれており、「ノン」もある。なお私は、かつて南予でも、

○ト^ノクサイ ヤツ^ノ。

とろいやつめが!

の言いかたを聞きとめている。感嘆表現の「ノー」である。

高知県下では、『全国方言資料』第5巻の「高知県香美郡美良布町」の条に、

m………… シモエ アキニ イタン

下へ あきの働きに 行った。

というのが見える。——説明表現での「ノ」相当の「ン」である。「ン」のこういう用法が、四国的なものでもあろうか。土佐弁で、一つ、問いの文末詞「ノ」に相当する「ガ」文末詞が目される。こういう言いかたがある。

○オト^ーサー^ン。ド^ーンテ ハヨ トマ^ッテ クレン ガ^ー。

お父さん、どうして早くとまってくれないの？（幼男→父中男）

これは、高知発松山行の国鉄バス車内で、日も暮れはててのころ、松山着をまちわびる土佐坊やが述べたことばである。「クレン ガー」の「ガ」は、逆接の接続助詞などではないことが明らかであろう。

徳島県下には、「ノ」よりも「ン」がよくおこなわれているか。県北での「ン」例は、

○ハチジ^ンサ^ンジ^ップ^ンニ ノリナシ^タン。

八時三十分に乗りにさったの？（バス乗車のこと）（中女間）

である。県南での「ン」例は、

○アノ ヒトガ ヨ^ッチャ^ンクイ キ^トッ^タン。

あの人によっちゃんの家へ来ていたの？

である。県南での中学生女の、私への問いの言いかたには、「ユ^ニ ヌ^ル ナ^イン。」（お湯がぬるくはないですか？）などがある。県南の地には「ノン」もあるらしい。金沢治氏の『終のうた』には、海部弁の「イカン^ン（行かんの？）」などが見える。

香川県下に、やはり「ノ」があり、「ン」がある。丸亀での「ノ」の一例は、

○ゴ^ハン タベモ^ッテ シ^ンブ^ン ヨ^マンノ。

“ごはんをたべながら新聞を読むのはよしなさい。”

である。これには、「のよ」の「ノ」が見える。問いの「ノ」は、島嶼部にも見える。「ン」の例は、『讃岐方言之研究』の、

ドコエイク^ン 前の「ドコエイク^ンエ」の省略であらう。

などである。なお、同書には、「ド^ーセル^ノイ。」というの見える。

六 近畿地方の「ノ・ン」

兵庫県下に、問いの「ノ」のおこなわれることはいちじるしい。淡路南部での一例は、「ドケー イク ノー。」(どこへ行くの?)である。問尋表現のための「ノ」が、県下に広くおこなわれている。清瀬良一氏の「神戸方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)には、問いの「ノ」や、反駁の「ノ」、賛成の「ノ」などが見える。氏は、「『ノ』は、概して、おんなことば的である。品は、中以上である。」と言われる。この品位の指摘は、重要であると思う。こういう品位で、「ノ」の近畿地方でおこなわれているのが注目される。私が、淡路北部で聞いた一例をあげるなら、

○ナニ ホシー ノ。ナニ コーテ クレン ノ。

何がほしいの?何を買ってくれるの?

がある。——これは店屋のおばさんが、おさない買い物客にやさしくたずねているものである。「ノ」の問いの上品な表現は、やはり、近畿地方でのよい心得でのもの言い(——教養あることばづかい)とも言うべきものか。「ノ」に関連して「ノン」もあり、これもまた広くおこなわれているようである。清瀬良一氏は、さきの「神戸方言の文末助詞」で、

○ナン ション ノン。エー。(青男→小女)〔疑い〕

などを示され、「ノン」に、「問い」や「なじり」や「合点」などの用法のあることを言われ、

「ノン」は、男女ともにもちいるが、おんなことばとしての感じがつよい。「ノ」よりも、概して、うったえがつよい。中品程度である。と説いていられる。県下に、疑問の「ノンカ」「ノンヤ」などもおこなわれている。「ン」の県下におこなわれることもまた一般的である。——多く、問尋表現に役だてられている。

○マルチャン カータナ ドレジャッタ ン。

まるちゃんが買ったのはどれだったの? (小女問)

は、但馬南部での一例であり、

○ソガニ セン^下 ナル^ン。

そんなに長いことになるの？ (中男→老女)

は、淡路南辺、沼島での一例である。

大阪府下にも、問いの「ノ」が、よくおこなわれているようである。——多くは、下降調に発言されていよう。「読んでください。」も、「ヨンデ クレマヘン ノ。」などと言われている。「ノ」が、返事ことばにも用いられており、「ソーデン ノ。」(そうですのよ。)などの言いかたがよくなされている。府下に、「ノン」もよくおこなわれているようである。木谷蓮吟氏の「翻訳大阪ことば」(牧村史陽氏編『大阪弁』第二集 清文堂書店 昭和23年4月)には、

弓子「(前略) 横浜のニューグランドで、御飯戴いて、それから三浦半島を廻りたいのん……」

などの実例が見える。府下に、「ン」もまたさかんのようである。「ソース マダ アル ン。(ソースまだあるの?) (娘→母)」は、池田市での一例である。(山本俊治氏教示)「どう しナハッタ ン?」なども、よく言われていよう。

○わしは ボヤキマヒタ ン。

わしはぼやきましたんですよ。

は、府南での、自己の意を言う「ン」である。さて、大阪府中心の事象として、今、別個にとりたてるべきものに、「ノヤ」からの「ネン」がある。「アキマヘン ノヤ。」(あきませんのです。)などの「ノヤ」が、「アキマヘン ネン。」になっている。「ネン」が、さらに「ネ」ともなっている。上例に見られるような「ノヤ」は、一種の複合形文末詞と見てもよいのではないか。「ません」のつぎに「ノ」がきて、さらに指定断定助動詞の「ヤ」がきたのだとしても、「ます」ことばのおおったあとでの「ヤ」助動詞は、語性上、いくらか不調和の存在でもある。このような「ヤ」と助詞「ノ」との複合態は、もはや文末詞機能発揮者とされるであろう。じっさい、「ノヤ」のはたらきは、文末詞のはた

らきのようにになっている。吉岡たすく氏の「共通語教育のあり方」(『方言と文化』)に見える、近畿地方での言いかた、

森岡 うちのお母さんな、ちょっとヒステリーやねん でもな、お手伝い
なんかしたらね、ときどき優しくしてくれるときある。

には、指定断定の助動詞「や」の下に、「ねん」がきていて、「ノヤ」相当の「ネン」の文末詞然としているさまが明白である。「ノヤ」もそうであるが、「ネン」は、いよいよもって、文末詞に熟成されているであろう。「ツヤ ネン。」(そうなんだ。)などの言いかたも、ここにあげておきたい。

和歌山県下にも、問いの「ノ」がよく見られる。「オン ノ。」(いるの?)といった調子である。問いの「ン」もまた、県下によくおこなわれている。『和歌山県方言』にも、「イヌン 帰りますか」などが見える。県南での、

○オキヌケ イテ キテ ン。

朝、起きがけに(“特別、朝早く”), 行ってきたんだよ。
の「ン」は、大阪府下などでも見られるものであるが、どういう用法の「ン」とされるものであろうか。

三重県下にも、問いの「ノ」がよくおこなわれており、「ドコイ イク ノ。」(どこへ行くの?)などの言いかたがなされている。伊賀で、幼女から聞いたことばには、

○ネーチャンワ イッテウ ワ。モ^ー イッテウ ノ。

姉ちゃんは行ってるわ。(演芸会に)もう行ってるの。

(幼女→小女)

というのがある。——これは、相手の言に応じたことばであった。県下に、問いの「ン」もまたよくおこなわれている。

○イマ ユータノ^ニ。キ^ートラ ヒンダー ン。

いま言ったのに。聞いていはしなかったの?

○アンタ ドコイ イカンス^ー ン。

あんたはどこへお行きですか?

は、伊賀での例である。

奈良県下にも、問いの「ノ」、問いの「ン」がよくおこなわれている。『大和方言集』には、「何処へ行くノン。」も見える。

京都府下にも、「ノ」「ン」がある。

滋賀県下も、だいたい、京都府下同然である。

七 中部地方の「ノ・ン」

福井県下の若狭について、「ン」の問いの例をあげるならば、

○オチャ[↑]バ[↑]ッカリ カー。ゴハン イル ン。

お茶ばかりかい？ ごはんいるの？ （老女→孫幼女）

などがある。越前の、問いの「ノ」の例をあげるならば、

○シゲキチャン。ナンデ トマンナハラレン ノ。

“しげきちゃん。どうして泊まって行けないの？”（中女→青男）

などがある。

石川県下にも、問いの「ノ・ン」が見られる。『全国方言資料』第8巻の、「石川県輪島市海士町」の条に見られる、

fアレア ドーモコーモ ナランゲーワケノ サザェオ クテ

あれは どうにもこうにも ならないんですよ、 さざえを 食って。

での、「ワケノ」の「ノ」は、どういう「ノ」であろうか。

富山県下にも、「ダンニ モロタ ン。」（だれにもらったの？）などのように、問いの「ン」がよくおこなわれているらしい。

越前から越中にかけての地帯には、問いの「ノ」に該当する「ガ」がよくおこなわれている。愛宕八郎康隆氏調査の例をお借りするならば、能登北端での例には、

○コレ トレン ガ。

これ取れないの？

などというのがある。越中例には、

○チニ アム ガー。

何を編むの？ (小女→青男)

などというのがある。「ガ(ガ)」という助詞系文末詞のおこなわれることは、別に諸方言に多い。それは、「ガ」助詞の語意をひいた「ガ(ガ)」文末詞である。今、北陸に見る、「ノ」該当の「ガ」のばあいは、まったく「何々な ノ？」というように解して適切なものであろう。「ガ」助詞のよくおこなわれる北陸地方に、この特異な文末詞が認められるしだいである。

「新潟県佐渡郡羽茂村大崎」(『全国方言資料』第8巻)には、

*m*アー フロ アルノン

ああ、ふろが あるのかい。

などというのがある。問いの「ノ」が「ノン」になっている。問いや説明の「ン」が越後にも認められるらしい。

岐阜県下・愛知県下にも、助詞系の「ノ」文末詞がおこなわれている。黒田敏一氏の「名古屋地方の方言『ナモ』の研究」(『方言』第一巻第四号)には、

今、起キイと思つて居る所だーノン。

というのが見える。この「ノ」はどういう「ノ」であろうか。

静岡県下では、問いの「ノ・ン」、説明の「ノ」がかなりよくおこなわれているようである。伊豆半島での説明の「ノ」は、

○ヤッテタ ノ。インマデ。

やってたの。今まで。 (老女→中女)

などである。『全国方言資料』第3巻の「静岡県掛川市上西之谷」の条から、問いの例をひくなら、

*m*デ イクラニ ナルノー

それで いくらに なりますか。

などがある。浜名湖畔の問いの「ン」例は、「誰ん行くン?」「面白かったン?」(清瀬良一氏教示)などである。

長野県下・山梨県下にも、助詞系「ノ」文末詞がおこなわれている。長野県

下の、飯田市での例は、

○ドコエ イク フナー。

どこへ行くの？

○ワシ カナー，ワシャー マチー イク フナー。(これは、上の問いに対する応答である。)

わたし？わたしは街へ行くんですよ。

などである。

八 関東地方の「ノ・ン」

関東地方には、助詞系の「ノ」文末詞のおこなわれることがさかんである。問いの「ノ」、説明・告知の「ノ」がよく見られる。「ン」形もまた、「ノ」に随伴してほどほどにおこなわれている。

神奈川県下には、問いの「ノ」がさかんであろうか。県西での一例は、

○ドコイ イク ノー。

どこへ行くの？

である。

「東京都三宅村坪田」(『全国方言資料』第7巻)の条には、

m………… ジャ テマシテ モラッカナーッテ コー ユー²⁾

「では 手助けして もらおうか」と こう 言うんだ。

2) 「ノ」に強いプロミネンスがある。

が見られる。都内の本土部一般では、「ノ」が、女性によくおこなわれていよう。おとなが小さい子どもに対してのばあいなどでは、男性もまたやさしく「ノ」の言いかたをすることが多い。(共通語の助詞系の「ノ」文末詞の流行も、だいたいこうしたものであろう。)『全国方言資料』第2巻の東京都の条には、

フケッコーデ ゴザイマスヨ ソレガ ナニヨリデ ゴザイマスノ

けっこうで ございますよ。それが 何よりで ございます。

というのが見えている。ところで、今日の東京語での、若い女性の言いかたに

は、「何々じゃ ない ノ？」というのが、「何々じゃ ない？」と言われがちである。「いいじゃ ない ノ？」も、「いいじゃ ない？」と言われている。つまり、「ノ」が省略されている。この傾向は、いよいよさかんなようである。（共通語によった文章の会話にも、これがよく見られる。）「ノ」助詞の、一種の美感は、失われたか。一方から言えば、現代っ子に、たくみな省略法が採用されたということでもあろうか。「ノ」がはぶかれても、その表現の文末の声調には独特のものがあって、これがしばしば表現の魅力にもなっている。

○ドンナノガ アル ノ。

どんなのがあるの？

これは、問いの「ノ」の一例である。つぎのは、告知の「ノ」の一例である。

○グラグラ シテン ノ。

ぐらぐらしてるの。

『千葉方言 山武郡篇』には、「疑問ヲアラハス助詞」の「ん」の指摘があり、「有ルん」の実例が見える。

埼玉県下にも、問いの「ノ・ン」、説明の「ノ」がよくおこなわれている。「ノ」のおこなわれざまは、東京都下のに酷似している。

○ワタシガ ヨク ユージャ ナイ ノ。

わたしがよく言うじゃないの。(ほれ、あのことを) (老女)

は、県東部での一例である。問いの「ン」は、秩父地方によく見られる。『全国方言資料』第2巻の「埼玉県秩父郡両神村」の条には、

m………… セガレワ テガミオ ヨコッターン

むすこは 手紙を よこしたかい。

というのがある。『秩父の伝説と方言』には、「するのか。」の「スル^ン」も見られる。

群馬県下に、問いや説明の「ノ・ン」がさかんである。問いの「ン」は、県下にいちじるしいものか。

○マッツグ クダル ン。

まっすぐくだるの? (中男間)
 ○ケンチャン。ドコイ イッテルン。

健ちゃん。どこへ行ってるの? (老女→孫小男)

などがある。

栃木県下にも、「ノ・ン」がさかんである。

○アンヨ デキンノ。

は、老女から幼女への、「そう、あんよができるの。」との言いかけ表現である。

○センセーナノ。

そう、あんたは先生なの。(領得)

これは、県北で私が土地人から言われたことばである。

○ナンジニイダノ。センセー。

何時に行くの? 先生。(中学生→先生)

これは、問いの「ノ」の一例である。問いの「ン」も、県下によくおこなわれている。

茨城県下にもまた、「ノ」がよくおこなわれている。県の南北に、東京語流の「ノ」がよく聞かれる。

九 東北地方の「ノ・ン」

東北の状況は、関東の状況によくつづくものである。問いの「ノ」、説明(あるいは報知あるいは述懐)の「ノ」、受けひきの「ノ」といったものが、よく見られる。

福島県下の例を、『全国方言資料』第1巻の「福島県相馬郡石神村」の条に見るならば、

fナンダ ハエーコト ドコサ イッチサノ²⁾

なんだ 早いこと どこへ 行って来たの。2) イッテキタ>イッチタ>イッチサ。

などがある。——問いの「ノ」である。会津北部の例は、

○ユ[ü]ミ[i]コチャーノ。ナニ[i] シニ[i] キ[kçi]タノ。

ゆみこちゃん。何しに来たの？ (中女)

○アゲー ハンカヅ[ü] アッタ ノ。

赤いハンカチがあったの。(説明) (老女)

などである。

宮城県下の、問いの「ノ」の例は、

f ナーニ ホンナニ イソガスィノ

何が そんなに 忙しいんですか。

などである。(『全国方言資料』第1巻「宮城県宮城郡根白石村」の条)

○ミ[i]セダケ カッサッタ ノ。

店だけ貸しなされたの？ (老女→中男)

は、私が仙台市で聞いたものである。松島湾岸で聞き得たものには、

○コノ ヤローッコ ノー。トーチャン キ[kçi] タラバ ショーブ サセ
ッカラ ナー。

この野郎め！ 父ちゃんが来たらおしつけをさせるからなあ。

などがある。「この野郎っ子」とのよびかけことばをしめくくっている「ノ」は、助詞「の」に淵源するものではないか。

この種の、よびかけ表現での助詞系「ノ」文末詞は、諸方に見られるはずである。——東北地方にはかぎらない。「憎いやつの！」といったような表現は、かなり一般的でもあろう。

宮城県下で、小学生などからは、「アノ ヒトノ ウチ ネー。ウント カネモチナ ノ。」(あの人の家はねえ。うんと金持ちなの。)といったような、東京語ふうのしぜんな言いかたが聞かれもする。——本県下に限られることではなからう。宮城県下で、私どもがよく耳にする文末詞に、「ノッシャ」がある。「どこへ 行グ ノッシャ。」などと言われている。この「ノッシャ」にも、助詞系「ノ」文末詞が認められる。(ちなみに、「シャ」は、「シァ」であろう。「シ」は「モシ」の「シ」であって、「ァ」は、文末付随の訴え音であると思われる。)

山形県下にも、問いの「ノ」、受けひき・説明の「ノ」などのおこなわれることがさかんである。山形市西南の一例は、

○イ[ī]ツ[ü] キ[kçī]タノ。

“いつ帰ってきたの？” (老女→青女)

である。『山形県方言集』に、「したん」の指摘があり、

「君あの犬はA君のだど」「あゝんだがしたん。」(「君あの犬はA君のだと」「あゝ左様ですか」)

の例文が見える。「したん」に見られる「ん」は、今の問題の文末詞と見うるものなのかどうか。

秋田県下での一例は、

fナムハギダベ ナート モラタノ

「なまはげ」⁴⁾でしょう なんと (もちを) もらったね。

4) 12月31日または1月15日の夜、鬼の面をかぶり、ワラのけだしを腰につけた若い衆が大きなワラグツをはいて家々をおとずれる行事。

である。(『全国方言資料』第1巻「秋田県南秋田郡富津内村」の条)

岩手県下の例は、

○ナジョーニ[ī] コガシ[ī]タノ。

ごはんを“どんなに”(“どの程度に”) 焦がしたの?

○モツタイ[ī]ナイ[ī] トモウ トキ[kçī] モ アリャンス[ü] ノ。

もったいないと思う時もありますねえ。(初老女→中女)

などである。

青森県下にも、東西に、問題の「ノ」がよく見られる。

mマ ジコモ マー ジダイア カワレバ コシタモンダベナー ド

まあ わたしも まあ 時代が 変れば こういうものだろうな と
オモテルノ

思っていますよ。

は、『全国方言資料』第1巻の「青森県南津軽郡黒石町」の条に見えるもので

ある。

十 北海道地方の「ノ・ン」

北海道地方の状況もまた、東北地方のと同調のものである。「ノ」の説明が、「ノネ」にもなっている。

○バンガタニ ナレバ、ツリニ クル ノ^ノネ。

夕方になれば、釣りにやってくるんだよね。 (52女→)

は、『礼文島言語調査報告』に見える一例である。鈴木淳一氏の、北海道諸地点について調査して下さった結果にも、問いや説明などの「ノ」の通用・流行の事実が見られる。鈴木氏が、十勝のことばとして示された、

○オトツツァン ドコエ イッキョツタン。

お父さんはどこへ行ったか。

では、「ン」が見られる。

十一 おわりに

問いや説明などの「ノ」は、およそ関東的(→東国的)なものではないか。「ン」は、どちらかという、関西的なものとしうるかと思う。「どうしたノ?」というのは東の人である。西の人は、「どーしたン?」と言う。瀬戸内海域にうまれた私なども、問いの「ノ」や説明の「ノ」は、まったく異域のことばであるように思っただけだ。

文末詞「ノ・ン」は、このように一まとめにしうるものではあるけれども、ものと通用との実態に、上述のような東西差が見られるのは、注目すべきことである。用語の地方的慣性には、しばしばふしぎなものがあり、にわかにはその理由を解明することができないけれども、そうしたことが、方言風土の地方的基質によるものであることはたしかであろう。

第二節 「ニ」の属

一 はじめに

助詞の「に」が、文末詞化している。「に」は、なんらかの言いきりの場所に立ちうるものであるゆえ、これの文末詞化のことも、当然おこってよいわけである。

助詞系の「ニ」文末詞については、旧来、中部地方や近畿地方の現象について、いくどか述べたことがある。元来、私は、ナ行音の感声的「ニ」文末詞にひかれて、「ニ」音の聞こえるものに広く注意したのであったが、中部地方を見るうちに、やがて、感声的文末詞「ニ」とは区別される「ニ」文末詞を知った。これの盛行をたずねるにつけても、当「ニ」文末詞が、多くは「のに」的な意をひく文末詞であることが理解された。本節にとりあげるものは、まさに、この方向その他の助詞系「ニ」文末詞である。

この、助詞系の転成文末詞に関しては、佐藤虎男氏に、「転成文末詞『ニ(ニ一)』について」(『国文学攷』第五十七号 昭和46年11月)のご発表がある。氏は、私の囑に応じて、この方面の研究をも進められた。今、私は、佐藤氏の論文に敬意を表しつつ、私の進めてきた作業をとりまとめることにする。

二 九州地方の「ニ」

「大分県臼杵市諏訪津留」(『全国方言資料』第9巻)に、

*m*モー ヒマッシャーニー

もう 日がた〔経〕っているものだから。

とある。「〜から」とされている「ニ一」は、「のに」的なものであろうか。上のような言いかたから、「ニ一」文末詞が成立するのであろう。安倍蓉子氏

が、大分県駅川町辛島方言の例として教示された、

○フミトッチャン。モノスゴ オモシリン ニー。

ふみとしちゃんは、ものすごくおもしろいの。(小女→幼女)

○アー、ソコ フンデカ ワーリン ニン。

ああ！そこをふむといけないのよ。(石けり遊び) (小女間)

なども、「のに」的な「ニ」文末詞を受けとらしめるものではないか。「ニン」とあるのも注意される。大分県地方には、こういった「ニ」の用法が、かなり認められるのか。阿南光彦氏が、大野郡朝地町市万田方言の例として教示されたものにも、

○ワタシドー ミランキ シラン ニー。

わたしなんか、見なかったから知らないんですよ。(老女間)

などがある。

「福岡県筑上郡岩屋村鳥井畑」(『全国方言資料』第6巻)には、

f………… アキラメネャ ドグイ シューニ アンタ

あきらめなければ どう しましょか、 あなた。

というのがある。岡野信子氏の「島郷生活語における形容詞—その構成と表現」(若松高等学校郷土研究会『研究紀要』第10集)にも、

○オイシカランデ ドゲ シューニ。

おいしくなくてどうしよう、勿論おいしいよ。(中女→娘)

というのが見える。これらでの「ニ」も、文末詞的な役わりを演じようとしているものではないか。——助詞系「ニ」文末詞が指摘されるようになるであろう。

白石寿文氏教示の肥後八代市方面のことばにも、

○ソバッテ ドギャン シューニ。

そうだけどうしようか。(どうもでけん) (中女間)

というのがある。九州域に、「どう シューニ。」「どう シューニ。」の言いかたは、よくおこなわれていよう。なんらかの文末詞化が、こういう「ニ」に認

められそうである。いな、人はこれらに、すでに「ニ」文末詞を認めているかもしれない。

長崎県下で聞いたものには、「〜の ムスコダニ。」(〜のむすこであるよ。)がある。

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条には、

fノガ³⁾ ツ エドナンド クビ キタトニ ネッカ ヒトガ
うちの 井戸なんか くみに 来たんですよ。 全部の 人が。

3) 言いまちがい

というのが見える。薩摩半島東南端での一例は、

○コソ チケモンナ カラカ ニ。

この漬けものはしょっぱいわね。(中女→青男)

である。(瀬戸口俊治氏教示)

三 中国地方の「ニ」

山口県下には、問題とすべき「ニ」が、比較的よく聞かれるか。『全国方言資料』第5巻の「山口県都濃郡都濃町」の条には、

f………… ショージョ ヤブリテワ アリマセンニー

障子を 破る人は ありませんよ。

とある。「ありませんよ」とされている「アリマセンニー」の「ニー」は、文末詞と見てよいものか。「(のに)」的なものであろうか。(防府市のことばにも、知人教示の、

○ヨー シランニー ホンマ。

というのがある。「よく知らないよ。ほんとに。」ということであろう。「ニー」は、分別してとりたててよいものではないか。「(のに)」的なものである。(周防大島のことばにも、

○ソソナ コト シラン ニー。

そんなことは知らないよ。

というのがある。「のに」的な「ニー」かと思われる。もう一例、

○モイッペン アゲニ イクン ニー。

“もういちど安下<地名>に行きますよ。”

というの、ここにある。(二例、国安巧氏の教示による。)

岡野信子氏によるのに、氏は、山口市内で、「ナガシタニ ヨイ。(永下さんよい。)」との言いかたを聞かれたという。氏は、

これは「ニ」の一文字で「永下 ヨイ」よりは丁寧な呼びかけとなっている。

と説かれる。ここに、特定のよびかけことばになっている「ニ」文末詞がある。じつは、この種の「ニ」文末詞は、かねて私も、自己の生地、瀬戸内海大三島北端のことばづかいとして、たびたび指摘したものであった。郷里では、

○トナリ ニー。

もし、となりの人さん？(このように言いあらわしてみるほかはない。)

○コチラ ニー。

こちらのだんなさん？

の二つの言いかたが、とくに慣用されてきたようである。——今日は、ほとんどこれらがなくなっている。(姓のもとに「ニー」をつけることは、ほとんどなかったようである。) いずれにしても、格助詞「に」が文末詞化したものと見られる。

中国地方では、広島県下にも、格助詞系のよびかけ「ニ」文末詞があって、旧広島市内でも、

○トナリ ニー。

などの言いかたが聞かれた。大三島のことばは、山陽系のものである。それゆえ今は、山陽方面に、特定のよびかけことばになっている格助詞系の「ニ」文末詞が認められるとされようか。四国地方では、この種のを、私はいまだ聞きとめ得ていない。さて、中国四国をはなれても、いまだこの種の「ニ」を聞きとめ得ていない。格助詞「に」を文中に用いて、待遇品位のよい言いかた

をかもす表現習慣は古来のものであろうけれども、そういう「に」を分立させて文末詞ふう用いることは、さまで世の広い習慣にはならなかったようである。

本節の初頭以来、「のに」的などと称してきたものは、接続助詞系とされるものにほかならない。

山口県下に、「のに」的なものなど見られた「ニ」文末詞があったのにつづいて、広島県下にも、同方向の「ニ」文末詞がよく見られる。

○マゴノ トコエ ナンペンデモ イッチョリマス ニ。

孫の所へいくどでも行ってますよ。(老女→青男)

○ヨガ アケルマデ オドリマス ニー。

夜が明けるまで踊りますよ。(盆おどり) (老男→青男)

は、安芸島嶼蒲刈島での例である。江田島で聞き得たものには、

○ミギオ トーリマシタ イニ。

右を通りましたよ。(老女→藤原)

○ワジャー イーマス デーニ。

私は言いますよ。

というのがある。これらでは、かなり自由に用いられている助詞系文末詞が認められようか。『全国方言資料』第5巻の「広島県庄原市山内町」の条には、

m………… アガーニ ナンギュー スル キニャー ナリュー ナランニ
あのように 刻苦勉励を する 気には なりはしない。

というのが見える。こうして「ニ」は、諸地域でかなり利用されているのであろうか。岡田統夫氏の「備後地方の『モー』ことば」(『国文学攷』第二十七号)の中には、

○エーツガ ナンデ イキマンモー ニー。

あいつが、どうして行きましようよ。(反語) (老男間)

などの、「ニー」例が見える。「のに」的などとは言えない「ニ」ではあるが、助詞系の「ニ」であることは明らかであろう。

『全国方言資料』第8巻の「島根県周吉郡中村伊後」の条には、

m………… マグレタ フリシタチュニ

気絶した ふりをしたそうだ。

などが見える。助詞系「ニ」文末詞がとりたてられようか。(上のは、「のに」的な「ニ」かもしれない。) 隠岐方言にくわしい神部氏の教示例には、

○ワラッテ ゴザッタ ニ。

笑っていらしたよ。

などがある。出雲地方の状況はどうなのか。——石見には「ソガダ ニー。」(“そうですよ。”) などがある。

『全国方言資料』第5巻の「鳥取県倉吉市国分寺」の条には、

m………… コガーニ ハヤー シンナハラートワ オモットラナンダニ

こんなに 早く 死になさるとは 思っていなかったのに。

とある。温泉地、三朝の例には、

○コタツニ アタラント サムイ ニー。

こたつにあたらないと寒いのにねえ。(中女→青男)

などがある。(室山敏昭氏教示) こういう「ニー」が、しげく女性に用いられるという。室山敏昭氏教示の県下東伯郡内の、

○ダイタイ オマヤー ヤケダ ニ。

大体お前はやけくそだよ。(青男→青女)

では、「ニ」の文末詞のさまが、ことに明らかであろう。県東、因幡奥でも、

○メズラジッテ イワレマス ニ。

(この松を) めずらしいって言われますよ。

などと言われている。

四 四国地方の「ニ」

伊予弁での、

○チガワイデ カラニー。

ちがってるよ。 (小男間)

には、「カラニ」文末詞が認められるか。これの「ニ」は、文末詞然としている。内海大三島での、

○ナニガ コー ニ。アイツガ。

なんで来るものか。あいつが。 (老男→中男)

には、明らかな「ニ」文末詞が認められる。

高知県下に関しては、佐藤仙一郎氏の「土佐方言の記述語法」(『方言研究』第4輯)に、安芸郡付近の女のことばとされる、「あるニー。(ありますよ。)」[知らんニー。(知りませんよ。)]「いかんニ。(いけませんよ。)]が見られる。氏は、

この両者は次のやうに「のに」といふ意味をあらはす時もある。往ぬればええに。(帰ればよいのに)

とも説明を加えていられる。県下の他地域にも、おなじような「ニ」がある。

徳島県下では、

○ナント カコー ニ。

なんと書こうかしら。

○マー ドー ショー ニ。

まあどうしましょう。 (中女間)

などの言いかたが見られる。助詞の「に」が、ここに文末詞化していると見られよう。金沢治氏は、『阿波言葉の辞典』で、

ソナナ時ハ洋服デイカントニ [そんな時には洋服でいくべきであったのにね]

の記述をしていられ、また、

ナント書コーニ [何と書こうかしら] (海部, 三好, 美馬, 親)

ドウショーニ [何としようかしら] (〃)

などの記述をしていられる。

香川県下では、中部で、私も、

○モ一 ナンネンニ ナロー ニ。

結婚してもういく年になろうか。 (老男→藤原)

○ナンノ シラベニ キタンジャロ ニ。

何のしらべに来たんだらうか。

○サー, ドー ショー ニー。

さあ, どうしようか。

などの例を聞きとっている。これらの「ニ」を見るにつけても, どういう種類の助詞からのものであろうかと考えさせられる。

五 近畿地方の「ニ」

この地方では, 東に寄るにしたがって, より多く問題の事象を見ることができる。

兵庫県下, 淡路では (——阿波に関連する地域ではあるが), 問題とすべき「ニ」を, 私はとらえていない。播磨地方についても, 西の岡山県下でと同様, 言うべきものを私は持たない。「どう しょう ニ。」などはあるか。今石元久氏は, 丹波多紀郡丹南町杉での調査例,

○カナワン ニー。

かなわないよ。

を教示された。

大阪府下に関しては, 佐藤虎男氏の「大阪府方言の研究(3)―泉南郡岬町多奈川方言の文末詞(二)」(『大阪教育大学 学大国文』第十八号)に,

○ナゼヤロ ニト

なぜだらうかなと

○ナンデヤロ ニナー。

なぜだらうかなあ。

などを見ることができる。

『和歌山県方言』には, 県北の「ドゲシヨウニ (どうしませう)」が見える。

和歌山県南部の西牟婁郡内のことばには、

○ナツトー ユードー ニ。

“どう言うだろうか。”

というのがある。（“ニのあとに疑問の気もちをふくんだ余韻を残している。”という。）『全国方言資料』第4巻の「和歌山県東牟婁郡古座町」の条には、

mモ トンブラレモ³⁾ー チョードー ナンヤニ アテラー サ⁴⁾ サン
 もう とんぼまぐるでも ちょうど 何だね わたしたち 30代
 ジューダイニー ナニヤー トッテカラ アノー コノ キンカイ コン
 に なんだ 取ってから この 近海には 来な
 モノ 3) 標準名は「ピンチョウ」。まぐるの種類でひれが長いのが特徴。
 いもの。 4) 言いさし。

とある。「ナンヤニ（何だね）」が見られる。

奈良県下では、南部の吉野郡の東部で聞いたものに、

○ソーヤ ナー。ドー ショー ニー。イケタラ イク ワー。

そうだねえ。どうしようかしら。行けたら行くわ。（中女）

などがある。『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都神村」の条には、

fンマニ ソヤニー

ほんとに そうですよ。

などとある。

三重県下に、問題の助詞系「ニ」文末詞のさかんなことは、本節のはじめに引用した佐藤虎男氏の論文に明らかである。県内の諸多の方言文献のそれこれにも、「ニ」の指摘が見られる。（「イコニ」の「行きませう」、「行くに」の「行きますよ」など。）私が伊賀で聞き得た実例は、

○コノ センセイワ ヒロシマダイガクノ センセイヤ ニー。

この先生は広島大学の先生なんだよ。

○ナバリー イコ ニー。

名張へ行こうよ。

などである。第一例の「ニー」は、「のに」的なものであるか。伊賀で教示されたことであるけれども、「ツヤニー。」（そうですよ。）は、“伊勢ことば”であるという。津を中心として「ニー」がよくおこなわれていると言う人もあった。私が志摩半島で聞いた一例は、

○エー トコロデス ニー。

いい所なんですよ。（国崎の灯台の所のながめのよさを言う。）

（中男→藤原）

である。県下に、やはり、「のに」的な「ニ」のおこなわれることがいちじるしいか。とはいいいながら、「ハヨ イコ ニー。」（“早いところ行こうか。”）など、「のに」的とは言われない「ニ」の、そうとうにおこなわれていることも、認めざるを得ない。

○ハヨ イコ ニサー。

“早いところ行こうか。” “はよ行きましょうよ。”

などともある。県下で、「ニ」は、男女老若によく用いられている。

京都府下では、京都市内北地に「コノマエ イワッタ ニー。」（このまえ“言われたでしょう？”）がある。福知山方面に「ウチラー シラン ニー。」（わたしらは知らないわ。）がある。

丹後半島内で聞いたものには、

○コー ヤッテ メンメンニ ポートルマス ニ。

こうやってめいめいで（蠅を）追ってますからね。

（老女→中女）

がある。

滋賀県下、湖西方面には、問題がすくないか。湖東が「ニ」を見せがちかと思われる。——これは岐阜県下の「ニ」の流行につながるものであろう。湖東、南部の甲賀郡での「ニ」の一例は、

○イコ ニー。

行こうよ。（“友をさそう時”）

である。

近畿東傍の「ニ」の様相につづいて、東海道方面の、顕著な「ニ」分布が開けている。

六 中部地方の「ニ」

福井県下には、若狭にも越前にも、問題の「ニ」はさほど見いだされないのか。

『石川県方言彙集』に、

に ヨ 「そうですよ」ヲ「そうですに」トイフガ如シ 金・石
との記事が見える。ここに言う「に」も、おそらく助詞系の「に」であろう。長岡博男氏の「金沢市地方の方言『に』の一考察」（『方言』第三卷第一号）に、
敬語法の場合使用せられるのが次に述べ様と思ふ「に」である。

用例、高い山や[◎]に（高い山だね）

ほや[◎]に （さうですね）

とある「に」も、助詞系のものか。当地方に、感声系の「ニ」文末詞かと思われるものがあることは、さきに述べたとおりである。（第三章第五節）感声系のと助詞系のとの区別はむずかしい。あるいは、助詞系の「ニ」の頻用のうちに、感声系と思われる体の「ニ」が成立したかもしれない。（——「ネ」から、感声系の「ニ」が成立したかもしれない。）ともあれ、県下に、助詞系の「ニ」文末詞の広くおこなわれているのが指摘される。「ガイニ」（「ガイニ」）「ガエニ」（「ガエニ」）「トイニ」「ワイニ」などの語形もよく見られる。能登半島での「ガイニ」例は、

○サカシマニ ハル ガイニ。

さかさにはいるのよ。（海女のこと） （老女→藤原）

などである。「ガイニ」が「ゲニ」「ゲニ」ともなっている。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条に見られる、

fオラーニ (mオーイ) ウー コドモア ンマレタテアン³⁾

いますか。 (はい。) こどもが 生まれたそうですね。

3)「テアン」は「テガイ」の転

の「オラーニ」の「ニ」は、どういう「ニ」なのであろうか。

富山県下にも、助詞系の「ニ」文末詞が見られる。『全国方言資料』第3巻の「富山県氷見市飯久保」の条には、

fアー ソーカイニ

ああ、 そうですね。

の例が見える。これは、了解を表明する「ニ」であるが、富山市西北郷の、

○ンチャョーガ オラレンデモ ジョームガ オンニ。

社長がいられなくても常務がおるよ。 (中男→老男)

○アレ イソガシー ガニ。

あれは“いそがしいのに”。 (中女→老女)

は、「のに」の意を思わせる告知の「ニ」である。県内に、「のに」系の「ニ」は、よくおこなわれているらしい。「ガイニ」もある。

新潟県下の越後にも、「のに」系の「ニ」が認められるようである。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

mドシテ マー シガダ ネーニ

どう言っても まあ 仕方が ありませんね。

などである。

岐阜県下・愛知県下となって、この地方にはまた、「のに」系の「ニ」のおこなわれることがいちじるしいようである。美濃北部の実例は、

○オガワイ イッテ ミテ オイデ。エー トコヤ ニ。

小川へ行って見ておいでよ。いいとこですよ。 (老男→藤原)

○イッテ ヤスンデ 下さい。アツイ ニー。

行ってやすんでください。暑いですから。(暑いですよ)

(中男→藤原)

などである。『全国方言資料』第3巻の「岐阜県郡上郡白鳥町石徹白」の条に

見られる、

mアー ドーカシテ ソーダンシテ ドーカ ドーデモ タノムワイニ
ああ、 どうか 相談して どうか、 どうしても 頼みますよ。

の「ワイニ」は、どういう「ニ」を示すものであろうか。愛知県下に関しては、佐藤虎男氏も先掲論文で、

総体に愛知県下には「ニ(ニ一)」文末詞がすこぶる盛んである。ただし、それは告知のそれであって、勧誘の表現を仕立てるものは聞かれない。と述べていられる。告知の「ニ」がおこなわれているのは、すなわち「のに」系の「ニ」がおこなわれているということであろう。私も、中部地方には、「のに」系の「ニ」がよく分布していると見ている。愛知県下渥美半島での実例は、

○タカ[↑]イ トコ フ[↑]キヤーン ニ一。

高い所は拭けないわ。(母に訴える。) (小女→中女)

(ただし、カード検閲の識者は、「フキヤーン」のところに、「ふきはしない」と注せられた。)

である。渥美町立伊良湖岬中学校で見ることができた「方言表」には、

ええにい いいと言うのに

というのがあった。

静岡県下にも、「のに」系の「ニ」がよくおこなわれているらしい。御前崎近くでの調査例は、

○オ[↑]イーイ。オ[↑]イー。何々を モラッタ ニ一。

おおい。おいしい。何々をもらったよ。(はなれているのへよびかけて告げる。) (小学生三女間)

○(家にいれば) ユイタイ コト ユー ダニ。

言いたいことを“言ってこまる”。(姪のこと) (中女→中男)

などである。「ダニ」が見られる。——中部地方によく見られる特色形である。

『全国方言資料』第3巻の「静岡県掛川市上西之谷」の条に見える、

fア ソーダニ

ああ、 そうですね。

では、「ダニ」とはあるが、この「ダ」は、指定断定の助動詞と見られるものである。後藤一日氏は、『遠州の方言』で、

「～だよ」の確かめの意味で「～ダニ」とか「～ニ」を使う。

と述べていられる。伊豆半島南端で、私が得たものは、

○ナミワ シズカデ アッタ ニ。

波は静かであったから。（「海あそびは、よかったですよ。」と話しかけたところ。） （老女→青男）

○ソノ トキャ ニギヤカダ ニ。

その時にはぎやかですよ。 （老女→藤原）

などである。

長野県下に、「のに」系の「ニ」がよくおこなわれており、かつ「ダニ」の聞こえもいちじるしい。北信例は、

○ソーダ ニー。

そうだよ。 （中女）

○ウチノ ホーガ スズシー ダニ。

自分の家のほうがすずしいよねえ。（出てこなくてもいいじゃないか。）
（老男→中男）

○（上がっておくれ。） アソコワ スズシー ガダニ。

上がっておくれ。あそこはすずしいからね。

○イー ダンニ。イー ダンニ。

いいんですの。いいんですの。 （中女間）

などである。南信では、『上伊那方言集』に、

に（助） 強意につかう（そうだに） 上伊那郡全域

とある。伊那市周辺で聞いたものには、

○ソーダ ニー。

そうだよ。

がある。飯田市で聞いたものには、

○カーサン オユーガ ワイタ ニ。

母さん、お湯がわいたよ。

や、

○キョーワ ガッコエ イカン ニ。

きょうは学校へ行かないよ。

○オトナリノ オバサン キタ ニー。

おとなりのおばさんが来たよ。

などがある。土地の人は、この種の文末の「ニ」について、“「ヨ」と意味はだいたいおなじ。ただ、「ヨ」は、おやが子に向かい言うことば、「ニ」は子がおやに向かって言うことばとといったようなちがいがある。”と語っている。また人は、“「ニ」のほうがしたしみがある。「ヨ」なんてよりも「ニ」のほうが、この地としてホンマのことば。”と言ったりもしている。下伊那で、私が聞いたことばには、“おもには女が子どもに。ていねいに言う時は男も。”というのがある。——男性発言の一例は、「ヤマモ タクサン アル ニ。」(山もたくさんあるのですよ。)である。

つづいて、山梨県下にも、同趣の「ニ」が見られる。清水茂夫氏の「奈良田ことばの語法」(『奈良田の方言』)には、

ニ) イカイ犬ダットーニ。(大きな犬だった)

ソガーノコター シノーニ。(そんなことは致しません)

このニはノニの意味が稀薄で、余情を持った感動を表わすのである。

とある。『全国方言資料』第2巻の「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」の条にも、

m………… ハヤイドーデ クイタクモ ナイニ

早いので 食べたくも ないんだ。

などとある。私が山梨県西南部山地内で聞いた一例は、

○コドモー オモウラ ニ。

子どもを思うだろうにね。(同情して言う。) (中男→藤原)
 である。「ニ」はやはりよいことばのようであった。) 深沢泉氏の『甲州方言』
 には、

「人のぶにまでよくをかいてとらなくてもよからずに」
 の例文が見える。『全国方言資料』第2巻の「山梨県北都留郡上野原町西原」
 の条に見える、

f………… ジョーブニ ナルト モッターニナー
 丈夫に なんと 思ったのにねえ。

には、「のに」そのままの「ニ」が見えて有益である。

中部地方の助詞系「ニ」文末詞の地域に、「ンナ」などの文末詞も見られる。
 「ンナ」ほかは、佐藤虎男氏も言われるとおり、「にな」ほかのものであろうか。
 助詞系「ニ」文末詞の複合形の一つが、ここにもあることになる。

近畿の南・東にも、「ンナ」が注目される。

七 関東以北地方の「ニ」

関東地方ともなると、総体に、助詞系「ニ」文末詞を示すことが、比較的よ
 わい。

中部地方南部に直続する神奈川県下には、問題の「ニ」があって、日野資純
 氏は、

「ニ」=「イ^ニニ^ニ（行くよ）」、「^ニニ^ニ（あるよ）」等。(話手の
 かるい感動を表わす。足柄上郡のみに分布)

と記述しておられる。(「方言文法論の実践—相模方言を例として—)『神奈川県
 方言辞典』にも同趣の記事が見える。ところで、川崎市方面にも「そんなこ
 とはない ダニ。」などの言いかたがあるか。

東京都に属する伊豆諸島の大島のことばにも、

○オネガイシマス ニ。

お願いしますよ。

○タノミマス ニ。

たのみますよ。

との言いかたがある。教示者は、“おばあさんたちがよくつかう。”と説明してくれた。八丈島にも青ガ島にも問題の「ニ」があるらしく、飯豊毅一氏は、「八丈島方言の語法」で、

○アカカレバ ヨカロオニ。赤ければよかったのに。

などの例をあげていられる。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町中之郷」の条にも、

fオカキサマノ マチテ アロニ

お客さまが 待って いるんですから。

などとある。また、同第7巻の「東京都利島村」の条には、

m………… テツラーダケ テツダッテヤロニ

手伝うだけ 手伝ってやるよ。

というのが見える。

千葉県下にも助詞系の「ニ」文末詞が認められる。房総半島南部の天羽近くで得た事例には、

○いいだんによー。(いいじゃないかよ。)

というのがある。『全国方言資料』第2巻の「千葉県香取郡小見川町神里」の条には、

fモッテ イッタ ホーガ セワ ナカッペーニ

持って 行った ほうが 面倒が ないでしょうに。

というのが見える。

つぎに、埼玉県東部では、私も、助詞系「ニ」文末詞のかなりいちじるしいものを聞いている。

○オンナデモ オレッテ ニー ニ。

女でも「オレ」って言うよ。(中学生二男間)

○サイ^{~~~~}シュー^{~~~~}カイ^{~~~~}ダ^{~~~~} ニー。

最終回だよお。(中学生男間)

などというのがその例である。「〜ダ ニー」が聞こえる。(なお、このほうでは、つぎの説明も聞かれた。“「まだ行かないでしょう？」と言われて、「イッチャッタ ニー。」と答える。”)

中部地方につらなって、関東地方内にも、ほどほどに助詞系文末詞「ニ」が分布しているというわけか。

北の群馬・栃木・茨城の三県地方にも、その「ニ」が認められる。

東北地方・北海道地方は、一般には、助詞系「ニ」文末詞が注目されないありさまであろうか。福島県会津北部で聞いたものには、

○ブル^{~~~~}[ü]ー モッテ ク^{~~~~}[ü]ル^{~~~~}[ü] ニ^{~~~~}[i]ー。

ブルー色のを持ってくるよ。

があり、山形県東部で聞いたものには、

○ホラ^{~~~~} ホラ、アイスクリームをたべるの？サム^{~~~~}[ü]イ ニ^{~~~~}[i]ー。

ほらほら、アイスクリームをたべるの？さむいのに。

がありなどするが、他に私は、まとめて述べるほどのものを持たない。——上の山形県下の例などは、「ニー」が単純に「のに」をあらわしているかもしれない。が、「のに」系の「ニ」文末詞としうるものが、北海道内でも、聞かれはする。

八 おわりに

助詞「に」の文末詞化することはしぜんであるとしても、そのおこなわれかたには、全国的に見て、かなりの偏頗がある。「のに」的な「ニ」文末詞が考えられる点では、なによりも「のに」の意の「に」接続助詞の分布に、すでに偏頗があったとしなくてはなるまい。

人のことばの地方的異相の成立には、存否を見ておもしろい状況があるけれ

ども、存否の理由づけは容易でない。「のに」的な「に」接続助詞を採る、採らないも、容易には理由の解明しがたいことである。

しばらくは結果の分布に着目して、地方相のできかたを凝視するほかはない。

第三節 「ト」の属

一 はじめに

今日、助詞系と見られる「ト」文末詞は、共通語上にも、そのおこなわれることのいちじるしいものがある。「もうすんだんです^ト。」（もうすんだんですってよ。）などと、ものごとを伝え言うのに「ト」が慣用されている。もとより、方言生活でも、諸方でこの「ト」が用いられている。ただし、地方によっては、ことに小地域について見たばあい、この種の「ト」が、さほどおこなわれていない地域もあろう。私などの郷里方言（瀬戸内海大三島肥海方言）では、こういう「ト」がほとんどおこなわれていない。「トイ」がおこなわれている。（私自身、現在も、「ト」をつかうことがほとんどない。「テヨー」を言う。「トイ」は、家庭でときに口にしている。）

助詞の「ト」が文末詞化するのには、当然のことであろう。「ト」助詞は、話しのくぎりめに位置するものだからである。「何々ではないと、こう言いましたね。」などと言われるばあいの「何々ではないと、」というのを見ても、「ト」はまさに文末詞化の契機を見せていることが明らかである。

諸方言に「ト」の生態を見るのに、わけても注目されるのは、九州方言である。

二 「ト」の存立と活動

はじめに南島地方を見る。奄美大島名瀬では、

○クリ[ī]ヤ ワン ムンダリョッ ト。

これは私のものですよ。

のような言いかたもなされている。この「ト」は、文末詞「ト」を思わせるものかどうか。田畑英勝氏の「奄美」(『言語生活』第七十一号 昭和32年8月)には、

アンマとぅジュウ 心配しんしょんな アンマとぅじゅ、米とぅてい、
^{まむ}豆とぅてい、みしょらしゅっと、ハレ、みしょらしゅっと——(お母さん、
 お父さん、心配なさらしないで下さい、ね、お母さん、お父さん、米も豆も
 うんと収穫して何一つ生活の心配なく食べさせてあげますから)

との記事が見える。この最後の「ト」は何であろうか。奄美大島本島のことばには、なお、

○ワンヤ ショーランタッ ト。

私はしはしませんよ。(目上に言う。)

との言いかたもある。これを聞かされた時には、“「ト」がつくとつよい否定”との説明があった。

与論島では、

○イキューン [↑]ドー。

行きますよ。

などと言われている。これの教示者は、私に、“「ドー」は意味をつよめる助詞”と説明した。南島に、「ト」音が「ド」になる習慣はなからう。ここの「ド」は「ゾ」だと、与論島出身の町博光氏は言われる。

ちなみに、「ぞ」の「ド」のおこなわれることは南島にいちじるしい。

さて、九州方言下では、「ト」の聞こえの文末詞がさかんにおこなわれている。

伝達表現の「ト」(格助詞系)もあるけれども、九州にとくに注目されるのは、準体助詞「ト」の文末詞化したものである。これが九州のほぼ全般によくおこなわれている。以下には、主として、そのさまをたずねてみよう。

まず、鹿児島県下に(——島嶼部にもわたって)、準体助詞系の「ト」文末

詞がさかんである。県下で一般的に、

○マダ イッペンモ イッテ ミモハン ト。

(主人の任地へは) まだ一度も行ってみませんわ。

のような言いかたがおこなわれている。説明・告知の「ト」である。「〜で
ございますよ。」の「…………… ゴラス(シ) ト。」も、通用いちじるしいもの
である。「アッ トカ。」は、「あるのか。」に相当する。「ト」は、「の」にあたる。
——「ト」は、本来、準体助詞である。それが、「トカ」とあって、文末詞
の役わりを演じており、「ト」そのものがまた、文末詞の役わりを演じている。
「ト」文末詞の用法には、問いや抗弁・命令などもある。

○オッカナ オラ テノ ヅヂガン トー。

お母さんは私をつれて行かないの? (幼女→母おや)

は、命令のばあいの一例である。(瀬戸口俊治氏教示)「タチャン ト。」は、
「お立ちよ。」といった程度の、ていねいな命令表現である。「ト」に関する複
合形には、「トヨ」があり、「トヤ」もある。硫黄島の、「コンタ ワイガ シ
タ トヤ。」は、「これはおまえがしたのか。」とのもの言いである。

宮崎県下にもまた、準体助詞系「ト」文末詞の頻用が見られる。(「これはお
れのだ。」の意の、「コリャ オレガッ チャ。」のところに、「オレガトチャ」
が見とられる。こういう、「の」相当の「ト」準体助詞が文末詞化している。) 説
明・告知・肯定といったような「ト」がしきりにおこなわれており、問いや
命令の「ト」がおこなわれている。「コリャ オリガッ 下。」(これはおれの
だよ。)は、県中部での告知の「ト」である。「アンネー。ワタシワ ココニ
カケトッタ ト。」(あのね。わたしは《自分の帽子を》ここに掛けてたのよ。)
は、県中央部西奥での説明の「ト」の一例である。

○ウシン コガ オッ トー。

牛の子がおるの?

は、問いの「ト」の一例である。(上の問いに対する返事には、「オラン。」が
聞かれた。) 問いに、「キョンパンワ ノマンデ イー ツ。」(今晩は薬を飲ま

んでいいの?) というようなものもある。「ト」に関する複合形には、「ト(ツ) ヌ」[ツカ]「トド」などがある。「ドー シナッタ ツカ。」(どうなされたの?)「オラ シェン トド。」(わしはしないよ。)などと言われている。橋口巳俊氏教示の、県中央部での言いかたに、

○アッヂャ ワカラン トトー。

あれではわからないんだってさ。(青男→中女)

のようなものがある。これでの「トトー」には、「トー」の、伝言表現の「ト」が見えるか。

熊本県下全般にも、前二県と同趣の「ト」がよくおこなわれている。八代市域の、「オバサンノー ト。」は、「おばさんですよ。」である。五家の荘で聞いたものには、「コリャ ワタシン ト。」(これは私ですよ。)がある。「ワシンジャ ト。」は、熊本市南郊で聞いたものである。

○シランジャッター トー。

知らなかったのです。

は、天草での一例である。天草では、「ヂャッ トー。」(“そうですよ。”),「ヂャイ トー。」(相手に応じてうなづくことば)などがよくおこなわれている。さて、天草には、「ト」の「トン」もおこなわれている。「そうだ。」は「ヂャッ トン。」である。「シェンシェーン オッ トン。」(先生がいらっしゃるよ。小学生五男→藤原)などもある。県下に「ト」の「ツ」もおこなわれており、県中部でも「コラ ワシガ ツ。」(これはわしのです。)などと言われている。「ツ」が、問いの表現にたつことはなさそうである。「ト」が、問いの表現にたつことは多い。「ドギャー シタ ト。」(どうしたんだよ。)は、県南での一例である。阿蘇山南麓の、

○アンタ カカル トー。

は、「あんた税金がかかるの？」との問いことばである。「ト」に関する複合形の文末詞には、「ト(ツ)ネ」「トキヤー」などがある。「ワラー ドケー イク トキヤー。」(おまえはどこへ行くのかい?)は、天草での「トキヤー」例

である。

長崎県下にも、同様、準体助詞系「ト」文末詞がいちじるしい。西彼杵半島で、「ヨー ガス 下。」は、「ようございますわ。」である。五島列島で、「ユー 下。」は、「言うよ。」である。長崎県下にも「トン」がある。島原にあり、長崎市域にあり、五島列島にあり、苅岐にもある。『全国方言資料』第9巻の「長崎県苅岐郡郷ノ浦町里触」の条には、

f………… トシオリカル アタイ キキオッタットン

年寄りから わたしは 聞いたものですよ。

とある。「トヨ」から「トン」のできることもありはしなかったか。『島原半島方言集』に見える、「Aサンタチャ、ゴツンイカルギナトン（Aさん達は、たえず行くのですとき）」の「トン」は、伝言表現のものか。問いの「ト」も県下によくおこなわれている。「ドケー イッ ト。」（どこへ行くの？）は五島での一例である。「オトーサン ドコエ オイデニ ナッタ 下。」は対馬での一例である。「ト」の「ツ」も、県下にいくらかおこなわれている。『苅岐島方言集』にも、「ト」についての、「助辞『の』に当る。『ツ』とも云ふ。」との説明が見える。対馬の「トキチャンチ ニカイ アガンナ チ。」（“時ちゃんたら二階へ上がるなと＜母ちゃんが言っているよ。＞”）は、「チ」が伝言表現のものになっている。本県下の「ト」に関する複合形文末詞には、「トヨ」「ト（ツ）カ」「トカナ」などがある。

つづいて、おなじく肥前の佐賀県にも同趣の「ト」がおこなわれている。説明の「ト」は、「ソヤナ イワン 下。」（そうは言わないんだよ。）（岡野信子氏教示）などのようであり、問いの「ト」は、「ドヤン スル ト。」（どんなにするの。）などのおこなわれている。「ト」が「ツ」ともある。別に「トン」があって問題視される。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条には、

mアスケ タノ ナキャー ン デチョル ヤツントバー ウ トッテ
あそこには 田の 中に 出ている やつを 取って

クレロテチ コナエダカル イヨラシタトン

くれと この間から 言っておられたから。

とある。「トン」はどのような起源のものか。本県下の「ト」に関する複合形文末詞には、「ト(ツ)カ」などがある。岡野信子氏教示の唐津市神集島方言の「……, ワレー コッチャ ナカッ チェー。(……, 悪いことじゃないんだぜ。)」は、「チェー」が「トゼ」複合形を示しているか。

福岡県下全般に、九州に独自の「ト」文末詞がよくおこなわれている。『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条には、

fウラエ ハイットリマスト

裏に はいっていますよ。

とあり、「ト」が「よ」と言いかえられている。説明・告知の「ト」、問いの「ト」が、よくおこなわれている。

○明後日 モッテ クッ トー。

あさって持ってくるよ。

は、筑後南部での男児のことばである。

○ヤッパリ ソシタラ ベツニ オラッシャッタ ト。

やっぱり、そしたら、別にいなさったの？

は、筑前糸島半島での問いの「ト」である。「ト」のむすびによって、命令的な気もちを表現することもある。

○モー アツカワン ト。

もう、そんなにいろわないの！（やたらに瓶のふたをいろっているのに対して言う。）

は、おやが、おさない子に向かっていましめることばである。県下で「ト」が「ツ」にもなっている。「ノロデ ソメタ ツ。」(のろく粘土を水でといたもの)で染めたの。中男→青女は、筑後川口、大野島での一例である。「ト」に関する複合形には、「トヨ」や「トネ」がある。筑前東部などには、「ツヨ」「ツカ」も見られる。「アー アン トキ ヌッタ ツカ。」(“ああ、あの時塗っ

たのか。”老女→中男)は、その「ツカ」の一例である。

大分県下には、上来広く見られた九州独自の「ト」文末詞が、あまり見られないかのようである。ところで、日田盆地などには、問題例があるらしい。大畑寛氏は「大分県南部の方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、「ナガレボン ドキ オツル ト。ホジニ カタル ト。(ながれ星はどこにおちるとおもう?星にくわわるとおもう。小女→小男)」の事例をあげていられる。野津町で聞かれた孤例とされるこれでの「ト」は、どういう「ト」なのであろうか。『全国方言資料』第9巻の「大分県臼杵市諏訪津留」の条には、

*m*フンナ カッテ イヌット

では 借りて 行くよ。

などが見える。——本来の「ト」文末詞なのであろうかどうか。県下に、別に、伝達の意の「ト」文末詞はおこなわれている。『大分県方言の旅』第一巻には、「オリャーキョーワ、オイターカイモンニ イチクート。(おれはきょうは、大分<市>に買物に行つて来よう。と。)」というのがある。(夫の出かけるのを送る時のことばであるという。)—格助詞系の「と」であろう。ひとりがたりふらの「と」になっている。

中国地方には、準体助詞「ト」はおこなわれていない。したがって、準体助詞系の「ト」文末詞が認められることはない。この点で、九州地方との大きな相違がある。

格助詞系の「ト」文末詞のおこなわれることが、おおそ単純である。伝達の意の「ト」が、おもにおこなわれている程度である。

山口県下では、伝達の「ト」が、伝達の意をあらわす「トイ」とよくなるんでいる。

広島県下の「ト」例は、「アンニャー ヨー ベンキョー シテン ト。」(あの人をよく勉強をしなさんですって。中女間)などである。「ト」の使用を見ていると、これによって、いくらかのへだてた気分が表現されるようでもあ

る。——単純率直な伝達にはとどまらないばあいがある。(情のさめた伝達になることがある。)

広島県下に、「ハヨ一 イカント。」(“早く行きなさい。(せきたてる)”)などの言いかたもある。「イカント」が「行きなさい」と言いかえられもするが、じっさいは、「イカント」ではなくて、まさに「イカント」である。これは、「ト」接続助詞によってしめくくられている一話部にとどまっている。接続助詞「ト」は、文末詞化していない。

岡山県下にも、伝達の意の「ト」がおこなわれている。

鳥根県下にも、鳥取県下にも、伝達の意の「ト」がおこなわれている。

○ゲタ コーチャンサイ ト。

げたを買ってくださいってよ。

は、石見での一例である。

四国地方には、伝達の意をあらわす「ト」のおこなわれることの、中国でよりはいちじるしいものがある。

愛媛県下に、広く伝達の「ト」がおこなわれている。(——ところで、瀬戸内海大三島での、私の郷土方言では、およそ伝達の「ト」がないと言える。「トイ」がおこなわれている。p.41)

ところで、愛媛県南に、独特の「ト」があって注目される。準体助詞の「ト」はおこなわれていなくて、「ト」文末詞につぎのようなものがある。

○チョット アケー ト。ハヨ一。

ちょっとあけろよ。早く。(汽車の窓) (青男間)

「と言う」「と言えば」などのばあいの「ト」が文末詞化している。

南予大洲市近くのことば、「アノ ザマヲ ミー ヤ。」(あのさまを見ろよ。)の「ミー ヤ」に隣っては、「ミー ト」がおこなわれている。制止の「シナト一。」(するなよ。)、勸奨の「オシナト一。」(しなさいよ。)などは、よく聞かれるものである。こういうばあい、「ト」の効果はつよいものようであ

る。人は、しつこい時には「ト」をつける、などと言っている。が、ほかに、「アソバン カト。」(あそばないかよ。)などとも言われており、「コナイダ ヨワッタ トー。」(このあいだはよわったよ。)などとも言われている。要するに、南予の独特の「ト」が、制止・禁止や命令、告知・説明や問いに用いられていて、いずれのばあいにも、「ト」のおさえの効果がよわくない。

高知県下西南部は、南予に隣る所である。南予のとおなじ「ト」がいくらかはおこなわれているか。大西志典氏の「十和村方言メモ」(『幡多方言』第十号)には、

タイソイ、だらしい、いや、「もう一回走って来いと」——「またや、タイソイねえ」

との会話例が見える。「来いと」は命令表現か。高知県下全般に、伝達の意をあらわす「ト」がよくおこなわれている。「何々だってよ。」は、「……ジャト。」である。

○トードー エー ヤラザッタ ト。

とうとうようしなかった“ということだよ”。

は、県中央部海岸での一例である。土居重俊氏『土佐言葉』の中の、「物部村旧槇山村・土佐村旧森村・仁淀村長者あたりで使用する。」とされる、「ナニシヨッター (何をしていたの)」での「トー」は、文末詞の問題にはなるまい。

徳島県下に関しては、とくにつぎの一事象が指摘される。県北域内に、「ホレビャー セン ト。」(“それぐらいしなくてさ。”)などの言いかたがあるという。——人は「ト」を文末詞と見ている。金沢治氏の『阿波言葉の辞典』では、「ホレ ビャー セン ト」が「それ位 出来ないで(どうするものか)」とされている。金沢氏によるならば、「セン ト」のくぎりかたはむりとされよう。くぎらない「セント」は、「ト」が、本来、接続助詞である。さて、こういう接続助詞の「ト」が、文末詞化しようとはしているのか。別に、本県下に「イッキョッ トー。」(“行ってたぜ。”)などの言いかたが見いだされる。

香川県下での、伝達の「ト」の一例は、

○ウソガ カザンデ イカンノヤ ト。

牛がそのへんの物をかいで、行かないんだって。

である。

近畿にも、準体助詞「ト」はおこなわれていなくて、格助詞「ト」はふつうにおこなわれており、したがって、伝達の意をあらわす「ト」が見られる。これのおこなわれることは、各府県下にいちじるしい。

兵庫県下の、「ト」文末詞のよくおこなわれる中に、「ナ[↑]ンヤ トー。」というのがある。(清瀬良一氏「神戸方言の文末助詞」『方言研究年報』第一巻)——これは、「男児がけんかをするときに、言いかえしのことばとして」とされるものである。淡路例「ナヘナ マタ。モット ハヨ・コント。ウモビヤ スンドラ。」(なぜですかまた。もっと早く来なくちゃ。もうびやの時期はすんでますよ。)での「コント」は、「ト」接続助詞の見えるものであるが、「ト」が、ほとんど文末詞化しようとしてはいないか。

大阪府下の伝達の「ト」のいちじるしいことは、多く言うまでもない。ところで、榎垣実氏の『京阪方言比較考』に見える、「あっちい行っとう！」などの「とう」は、別個の「とう」であろう。榎垣氏は、「とう」について、「標準的な語法ならば『てね』に当るものだろう。」との説明をされている。牧村史陽氏の「大阪弁集成」(同氏編『大阪弁』第三輯)には、「ちよつとそれ取つとオ(取つて頂戴)」などが見える。

和歌山県下では、伝達の「ト」のよくおこなわれる中に、『和歌山県方言』の、「……トー 助 トイに同じ。」というような説明も見える。『和歌山県方言』には、別に、

アツトウ ありました。

の記述が見える。「ました」とされる「トウ」は、どういうものなのであろうか。「イト 行きました 居ました」ともある。

三重県西南部での伝達の「ト」の例をあげるなら、

○ヤマガミマデ ホン、ハシリキッタ ト。

やまがみまで、ほんに、走りきったよ。

などがある。——伝達の「ト」だけれども、ここでの抑揚は下降調になつていて、「ト」はきれいな短呼である。鈴木敏雄氏の「志摩町越賀・和具の会話」(『三重県方言』13)に見える、「いくらぜに持てたんと。(おかねは何程もつていつたのか。)」では、「のか」と言いかえられている「ト」が見える。(ものはやはり「という」的なものであろうか。)

奈良県下では、伝達の「ト」の多い中に、南部で、非伝達の「ハー、オーキニト。」(これはどうもありがとうね。)というようなのも聞かれる。上の例は、私に対する老女の謝辞であった。格助詞の「ト」が、表現のまとめの地位にたつ時、そのしめくくりの機能が、こういうふうに、相手に自己を直接訴える文末詞機能にもなってくるのであろう。

京都府下・滋賀県下については、特記すべきことがない。

さて、人がみずから自己の行動や感懐を宣言する時、「わしも 行こうっト。」などと「ト」を用いるのは、近畿にも一般的なことだろう。

中部地方にも、全般に、伝達の意の「ト」文末詞がよくおこなわれている。石川県加賀での一例は、

○オジーサン 下ヒタ ト。

おじいさんはどうしたかってよ。(私が孫女におじいさんのことを聞いた。) (老女→孫幼女)

である。馬場宏氏の『能登木郎方言考』には、「食べたよ=食べ 下」などが見える。岩井隆盛氏の「石川県金沢市彦三一番丁」(『日本方言の記述的研究』)には、「見ントント(ないよ)」などがある。

富山県下のことは略して、新潟県下に行けば、新潟市域のことは「イヤ オレ ソコマデワ ワカラン ト。」(大橋勝男氏による。)などが見られる。この「ト」は、文末詞的なものと見られるのではなからうか。押見虎三二氏は、県

南，秋山郷の調査結果から，「ト」文末詞の例と，「トイ」文末詞の例とをならべ示された。

長野県下に関しては，『上伊那方言集』の，

と（助）疑問の語（どうしたと？） 上伊那郡全域

との記事を見ることができる。佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」には，「ナナヤット（やるな） ナナ行[↑]ット（行くな）」などというのが見える。

静岡県下の伊豆半島南部で私が聞いたものには，「どこへ？」と問う，「ド[↑]コエ ト。」がある。「こっちの磯へ。」という時は，「コッチノ イソイ ト。」である。（アクセント失）山口幸洋氏の「井川村方言の語法実際」（『東条操先生古稀祝賀論文集』）には，

「な[↑]に[↑]って？どこへ行く[↑]って？」のような反問のしかたを，たびたび
<ナント，ド[↑]コエ[↑]イト>のような形で聞いた。

との記述が見える。

「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」（『全国方言資料』第2巻）には，

f………… ウッコシカラー クラクテ キトー
打越からは 暗くて 来たよ。

などが見える。——これは別の「トー」であるけれども。石川緑泥氏の「山梨県河内方言」（『方言と土俗』第四巻第九号）には，「誰[↑]ントウモ，サウ，云ツ[↑]タッタウ。」とある。
(トオ)

関東地方にも，伝達の意の「ト」がある。「トサ」もある。「ト」のむすびも，しばしば「トサ」の感じのものである。栃木県下での一例は，

○チ[↑]ヨコネー。オヂ[↑]チャ[↑]ンガ ナー。ヨ[↑]ーガ アンダ トー。

千代子ねえちゃん。おじちゃんがねえ。用があるんだってよ。

である。関東の東北方面には，「ト」の「ド」も聞かれる。

千葉県下では，かつて，

○ア[↑]タンデス トー。

というのを聞いたことがある。これが、「あたるんですよ。(風がその家
に)」の意のものであった。自己の意を直接相手に持ちかける「ト」が、ここに
あろう。

「なんだ ト？」などの「ト」は、やはり関東に一般的なものであろうか。

東北地方にも、全体に、伝達の「ト(ド)」がよくおこなわれているよう
である。——「トサ」の感じのものようである。

福島県下の会津での一例は、「アガラッセー トー。」(上がりなさいってよ。)
である。「ト」は、下降調の短呼にもなる。複合形に「トッショ」がある。武井
孝子氏の「会津民譚と方言」(『方言』第四巻第五号)には、「昔あるところに、
爺さまと婆さまがあつたとつしよ。」などとある。「トッショ」はどういうで
きのものであろうか。「ッ」は「もし」の「シ」か。「シ」に「ヨ」がついたか。
『全国方言資料』第1巻の、「福島県相馬郡石神村」の条には、

f………… ホシテ アノ イグダト
そして 行くんだよ。

とある。『福島県方言辞典』には、「ハイットー [句] 他家に入る時の挨拶、今
日は(は入るぞ)」などが見える。このように、自己の意を相手に直接に持ちか
ける「ト」が見られる。本県下に、この種の「ト」は、かなりよくおこなわれ
ているのか。「ナッダ トー。」(なんだって?) などというものもある。

宮城県下にも、伝達の意の「ト」がよくおこなわれており、しかもまた、自
己の意を相手に直接に持ちかける「ト」もよくおこなわれている。『仙台の方
言』には、伝達の意の「ト」に関して、「とす」の複合形も見られる。

「まづ〜、おうちなかのお娘であらんすとす」(まあ御親戚のお娘さ
んでいらつしやいますつて)

などとある。「とっしゃ」の語形も見られる。

「あの家ふくしいとっしゃ」(あの家はものもちなさうだ)

などとある。「とすか」の複合形もある。本書に見られる、自己の意を相手に

直接に持ちかける「ト」の例は、

「おらえの屋敷、こんでなりきずいぶんがすと」(うちの屋敷にはこれでも果樹がだいぶありますよ)

などである。著者、土井八枝氏は、こうした「と」をすべて「よ」と言いかえていられる。私が仙台市で聞きとめた、自己の意を相手に直接に持ちかける「ト」表現の例は、

○ワラ シ[i]ネー[↑]ンデ ガス[ü] トー。

わしはしないんですよ。

などである。「トー」については、“ことわることば”との説明があった。)松島湾岸で、私が聞きとめた「ト」例には、

○ナンボカ ナオ[↑]ッテンデス[ü] ト。

(私のことばも) いくらか“直っています”。(老男→藤原)

などがある。——「ト」は「よ」だとの説明もあった。この老男は、「〜ですよ」の意で、しばしば「〜[↑]デス[ü] ト」と言った。この地で、一泊した家の主婦は、夜分外からおそく帰った私に、「オチャ イレンナ ヨス[ü] ト。」(お茶を入れるのはよすよ。——もう寝るんだらうから。)と言った。

山形県下でも、一般に伝達の「ト(ド)」がよくおこなわれており、「何々だト。」は「何々だ ド。」と言われがちである。「何々したんだ トー。」などと、老女たちの言うのを聞くにつけても、東北弁の一種の味が感じられる。

○ニ=[i]=[i]ンマ[i]イ[i]ノ チ[i]ンギ[gcɪ] シ ク[ü]レタ モノ
デス[ü] ト。

二人前の賃金をくれたものですよ。(老女→藤原)

は、酒田市で聞いた老女の発言例である。「ド」に関する複合形に「ドハ」などがある。

秋田県下にも、「ということだ」と伝達する「ト(ド)」がよく聞かれる。「何々だ ド。」もよく言われている。複合形「ドシ」もある。「シ」は「モン」とよびかけるものか。「イ[i]ダ[↑]ッケ トー。」(いたって?)というのは、受

けて聞く（問う）「ト（ド）」を見せているものである。

岩手県下にも、伝達の「ト（ド）」がふつうにおこなわれている。

○ポーット アガッタンダ ド。

ぼうっとして上がったんだって。（火の玉の話し） （中女）

などがある。『岩手方言の語彙（旧伊達領）』には、「ド」についての「と
ことだ」との解説があり、さらに、「ミダド 見たか」などというのが見える。
「ド」で、問いかえしている。——秋田県下に見られたものと同様である。『全
国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条には、つぎのがある。

m………… コノ ナスビャ ナンボ シットー

この なすは いくら するのかい。

青森県下でも、「とさ」などとも言い換えられる伝達の「ト（ド）」がよくお
こなわれている。「何々 ツ[ü]ッタンダ ドー。」（何々と言ったんだって。）
などがある。

○ユ[ü]サ ハイレバ マイネ ドー。

湯にはいれば“いけないんだってよ”。 （老女）

は、津軽西部での一例である。この地で私は、土地の人が、“「ド」は「だそう
だ」だ。”と言うのを聞いた。「あつたとさ。」が「アッタ ドー。」と言われる
など、「ドー」あるいは「ド」のところで、文アクセントは低調であったりする
のが注目される。この種のことは、東北地方に見うる一特色であろうか。青森
県下の「ド」にも、問いかえしの「ド」がある。訪問あいさつの「いるかい？」
は、「イ[i]ダ ド。」である。（「イ[i]ダ ガイ[i]。」にちかいものである。）
『全国方言資料』第1巻の「青森県三戸郡五戸町」の条には、

*m*ソー オメーダチャ ハー ムギ ホシタト

ほう あなたのうちでは 麦を 干したんですって。

などがある。私が八戸市で聞いたものには、「アワチガッタ ドー。」（会わな
かったかい？）というのがある。またしても、「ド」が、文アクセントの低調
下にあることが注目される。

北海道地方にも、伝達などの「ト（ド）」がおこなわれている。「トサ」ともある。

○ママ イラネ ド。

（赤ん坊が）ごはんはいらなんだって。 （55男→妻）

は、『礼文島言語調査報告』に見られるものである。

三 おわりに

格助詞「ト」あるいは接続助詞「ト」が文末詞化するのには、通常・平凡の事項と言うことができよう。この種のものが、広く全国的に見わたされるのも当然のこととされる。

この状況下において、九州地方が、準体助詞系の「ト」を見せるのは、はなはだしく特異である。準体助詞の「ト」を保有するから、それ系の「ト」文末詞ができたのであると言えよそれまでであるけれども、文末詞利用習慣のその特異性は、九州方言の歴史を深く考えしめるものである。

伝達表現のために、「ト」文末詞を利用することは、今後も変わることがないであろう。平凡の文末詞が必須のものとして活用されることになる。

九州地方の準体助詞系のものは、将来どういう運命をたどっていくのであろう。九州地方にかぎらず、どの地方にあっても、命令表現などに用いる「ト」は、漸次おこなわれることがすくなくなるかもしれない。

第四節 伝達の「トイ」

伝達の「ト」に相当する「トイ」がある。

「トイ」は「トヨ」からできてよいものであろう。「ゾヨ」から「ゾイ」ができるようにである。

「トイ」はまた、「ト」からできてよいはずである。「ト」が「トー」と発

言されるうちに、「トー」が「トイ」になるということもありうることである。

本節にとりあつかう「トイ」は、共時論的に言って、「トヨ」に関係ない「トイ」である。これは伝達用の「トイ」であって、これの用法は、共時論的に言って、「ト」の用法にはなほだ近いものである。「トイ」の「ト」からの成立の可能性は、大きく認められる。

ところで私の生いそだった「内海大三島北部肥海方言」では、伝達用の「ト」はおこなわれていないと言ってよく、「トイ」がもっぱら伝達用に用いられている。（「早う 来い トー。」<早く来いってよ。>などの「トー」は、私などには、まことになじみのうすいものであり、——少年時の気もちになって思えば、異様なものでもある。）ではあるけれども、用法上「ト」と「トイ」との同似を認めることは、方言人としての私にも容易である。

なおここに付言するならば、私の郷里方言には、文末詞「トヨ」は全然存在しない。——旧時も存在しなかったろう。「トヨ」などには、私ども、いちじるしい異和感をおぼえる。

このようではあるが、今日の諸方言上での「トイ」を見るのに、これは、一種特定のものとしておこなわれている。「トイ」は、ひとまず、「ト」からはなして見てよいものようである。このゆえに、私は、「トイ」のとりあつかいを、「ト」の属のとりあつかいからはとりわけてみた。

「トヨ」の認められる九州地方にも、伝達表現用の単純な「トイ」は、一般に見られないようである。

九州南部には「のさ」の「トイ」がある。これはまったくの別ものである。

上村孝二氏の「薩南諸島方言語法資料」には、甌島の「アッカー ムソーニムシー カンチカレタモンヤ。カノコーダトイ。」などが見える。「カノコーダトイ。」は「蚊が食ったのさ。」であるという。「トイ」は、非伝達の「トヨ」的なものであろう。（硫黄島での「トヨ」例は、「イケン シタ トヨ。」<どうしたのか。>などである。）

単純伝達用の「トイ」は、主として関西域に存立しているものか。

中国地方には、「トイ」利用の生活がごく一般的である。

山口県下に、「トイ」利用はきわめてさかんである。複合形の「トイナ」「トイノ」「トイネ」「トイヤ」などがまたよくおこなわれている。

○スクナー ノガ アリマシタ トイノ。

すくないのがありましたということですよ。(選挙での票数のこと)

(老女→中男)

は、周防での問いの例である。山口県長門方面では、「トイノ」からの「テーノ」などが聞かれるらしい。

「トイヤ」は、広く中国地方によくおこなわれている。広島県下では、「ナシジャ トイヤー」(あれだってよ)というのが、一種の間投文になっている。岡山県下では、「トイナ」が熟しているのであろうか。なお、本県下では、「トイ」の「テー」も聞かれるのか。

山陰地方内にも、「トイヤ」のおこなわれることがいちじるしい。「トイナ」「トイノ」もある。

四国地方にも「トイ」がよく根づいている。

○アシヨイ イカシニャ イカシノジャ トイ。

あそこへ行かなきゃいけないんだってよ。(教員の赴任) (老女)

は、讃岐中部での一例である。「トイナ」「トイヤ」の複合形も認められる。

近畿地方にも広く、単純伝達用の「トイ」が認められる。「トイナ」「トイヤ」などともある。

○ホイタラ イチネンジュ アル トイナ。

そうしたら、一年じゅうあるってよ。(中男)

は、播磨での「トイナ」例である。

○ドーライ エライ モンニ ナッタ トイヤー。

たいしたえらいもの(者)になったということだよ。(老女)
は、丹後での「トイヤ」例である。『田舎』第三号に見える、近江の童謡には、
京の京の大仏さんの仏の数は三千三百三十三体、御座るといの。
というのがある。

中部地方も、北陸地方には「トイ」が認められる。近畿地方の亜流域としての
福井県下・石川県下・富山県下が問題域となっているのは注目すべきこと
である。

石川県下では、「トイネ」複合形のおこなわれることがいちじるしいか。む
ろん、「トイ」もおこなわれている。「トイノ」「トイヤ」もある。

○ムコ トットル トイネー。

(どこのだれそれは)婿をとってるってよ。(老女間)
は、能登半島での「トイネ」例である。

富山県下にも、「トイネ」がよくおこなわれているらしい。

私はかつて、飛騨高山市で、「ケンチジサンガ ミエルンジャ トイナー。」
(県知事さんが見えるんだってよ。)との言いかたを聞いたことがある。当地方
も、北陸に関係の深い所なのであろうか。

以上のほかの、国の東部地域では、私は、単純伝達用の「トイ」の常用をほ
とんど見いだし得ていない。

しかしながら、伝達の「ト」のおこなわれる所には、時とばあいによって、
「トイ」の自然発音もおこってよいのではないか。

青森県津軽で聞いた、

○イ[i]ク[ü]ササ ツ[ü]カル フ[ü]ネダ トイ[i]ヤ。

戦につかう船だトイヤ。(青森入港の自衛艦のことを言ったもの)
での「トイヤ」は、どういう「トイヤ」なのであろう。

ともあれ、現存の「トイ」分布が、西に偏在し、しかも関西本位にこれが存在するのは、注視すべきことである。ものは、だいたい近畿中心のものだったろうか。

いずれにもせよ、伝達表現の「トイ」は、現勢を見るのに、今後に榮えていくことはなさそうである。「トイ」の音感には、独特のものがあるか。

第五節 「タイ」形文末詞

一 はじめに

九州方言には、由来「タイ」「バイ」文末詞の活動がさかんである。九州弁といえば、人々は、「タイ」「バイ」文末詞を思いおこしたりするほどではないか。ここに、力説すべき、「タイ」の属の文末詞(また、「バイ」の属の文末詞)がある。

「タイ」の形をとる文末詞が、なお、本州の東西などに見いだされなくはない。この点をふまえれば、「タイ」形文末詞は、広く全国諸方に見られるとも言える。本節では、「タイ」形文末詞を総覧しよう。

既述の「ト」文末詞・「トイ」文末詞について、ここに「タイ」文末詞をとりたてることは、妥当とされよう。「タイ」もたしかに、[t]にはじまるものである。しかも「ト」を内蔵するものと考えられる。(後述)九州方言に関しては、「ト」文末詞につづき、「タイ」文末詞の属をとりたてるのが適切である。

二 九州方言の「タイ」の属

九州方言の文末詞といえば、まず、「タイ」文末詞と「バイ」文末詞との相関がとりたてられる。九州っ子は、——九州出身の方言研究者たちも、しぜんのうちに、この両者をあわせ見がちであろう。両者の機能の相違をきびしく見

つめる研究者たちも、一方においては、「タイ」と「バイ」との密接な連関をよく認めている。この種のことは、意義ぶかいものがあるのではないか。つぎのようなことが言えるのではないかと、私は考える。両者には、機能差が認められるにはしても、その出自上には、親近関係があるのではないかと。成立に親近関係があったにしても、できた「タイ」と「バイ」とは、音相のはなはだ異なったものである。この差異は、両者の機能差をみちびくことにもなったのではなからうか。

機能差を問題にする。神部宏泰氏は、早く、

「バイ」の機能が、いわば、話者中心の判断の一方的な「もち出し訴え」を基本とするのに対し、「タイ」の機能は「客体認用の判断措定」を基本とすると言える。

と述べていられる。(「九州方言における文末詞『バイ』『タイ』について」『熊本女子大学 国語国文学論文集』第5集 昭和42年2月) 私は、「バイ」は「ワイ」からのものと思ふ。「ワイ」は「私」を意味するものである。「バイ」文末詞が、「一方的な『もち出し訴え』を基本とする」ものであるのは当然のこととされよう。「タイ」は、「客体認用の判断措定を基本とする」点では、その出自を、「バイ」の出自とは、おおいに異にするかのようである。「タイ」の現実の機能価値にしたがえば、私どもは、「タイ」の出自を、「ワイ」などとはちがったものの方向に求めたくなる。

「タイ」の機能に関しては、なお、『九州方言の基礎的研究』の中に、

一般に、「タイ」は、表現内容に対する話し手の判断意図を、客観的に措定し、これに、ある普遍性を付与しようとする機能に特質が認められるとの叙述を見ることができる。九州っ子でない私には、ここに付言しうことは、なにほどもない。ただ、一・二の経験をつけそえてみることにしよう。一つに、筑後っ子の友人が、「タイ」と「バイ」とで私をテストしたことがある。“これこれのばあいには「タイ」か「バイ」か。”というのである。私は、すべ

ての設問に合格した。私の答えた基準はこうである。設問に、「私」的な発想のつよばあいは「バイ」を言うことにした。安心して「バイ」がつかえるのではないばあいに、「タイ」をつかった。さて二つに、福岡県人から、近ごろ聞いたことである。——「いいわよ。」のばあいは「バイ」をつかうという。「いいのよ。」だったら「イーッ タイ。」と言うという。（「タイ」は、“相手に意をおくもの”でも“相手を主体にするもの”でもあるという。）（「バイ」は手まえを主体にするようである。）福岡県人は、“ぜひ来てもらいたい時には「タイ」をつかう。もしよかったらと相手のつごうを聞く時は「バイ」をつかう。”とも言った。私の経験であるが、「それはそうだよ。」の言いかたの時は、「ソリャ ソー タイ。」となるのがつねである。当然というような時に「バイ」の出ることはない。熊本市から南下しての近郡の一友人は語った。“「ダ」も「ジャ」もつかわぬ。”“「ダ」も「ジャ」もない。”“「ヤ」もない。”と。指定断定の助動詞の終止形がつかわれてよいところで、「ソー タイ。」などと、「タイ」がつかわれているので、このような発言がなされるのであろう。この発言者は、“「タイ」は相手に向けて言う。「ネー。ソーダロー？ きみ。」という気もち。「バイ」は自分に向けて言う。自分の内部で推量する。「ヨカ バイ。」は、自分の内部で認める言いかたである。”とも語った。

ここでいよいよ、「タイ」の起源の問題にはいらなくてはならない。

私は、以前、「トヨ」>「トイ」が「タイ」に転化したか、との愚考を開陳した。「トイ」>「タイ」は音韻論的には認めやすい転化である。しかしながら、今日、考えを整理してみるのに、「トヨ」文末詞のよくおこなわれる薩隅地方には、現に、問題の「タイ」文末詞が成立していない。かつ、肥筑の、「タイ」文末詞のよくおこなわれている地方には、「トヨ」文末詞の習慣もまずはなければ、「トヨ」からの「トイ」のおこなわれているいちじるしいようすも見られない。肥筑地方での「タイ」については、「トイ」起源を考えることが適切ではないと判断される。私の旧考はあらためなくてはならない。

天草下島東北岸には、「五百人バカリ イッタダス トイ。」(五百人ばかり行ったそうですよ。)とのことばづかいがある。これには、まさに、「タイ」相当の「トイ」が見られる。が、おそらくは、既成の「タイ」が「トイ」に化せしめられているのではないか。『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条に見られる「*f* ソート^{そうですね。}ツイ」の「ツイ」も、「タイ」からのものではなかるうか。肥後五箇荘では、かつて、「ていねいことばを ツカワン コトニ ナッテ クル トイ。」(ていねいなことばをつかわないことになってきますよ。)との言いかたを聞いたことがある。これも、「タイ」が「トイ」になっているのか。(私は、以上のような事例に接するにつけても、「タイ」起源について、「トヨ」>「トイ」>「タイ」の過程を考えたりしたのもあった。)

旧の私の「トイ」>「タイ」の説については、早く、上村孝二氏のご意見をもらされ、“「トワイ」>「タイ」ではないか。”と語られたよしである。(神部宏泰氏による。)林田明氏も、“「トワイ」>「タイ」の説を支持する。”と言われたよしである。(おなじく神部宏泰氏による。)近来は、上野智子氏の同意見も聞くことができた。土地の人たちの、自己の言語体験に立脚した起源考には——どのばあいにも、傾聴すべきものがある。今日は、私も、「トワイ」説にかたむいている。(とはいいいながら、私にも、ここに、一つの述懐すべきことがあった。九州の「タイ」について、昭和三十三年二月に、『『とわい』>『タイ』あるか?』とのカード記録を試みている。水上田鶴子氏の、筑後川口、佐賀県大宅間の方言についての発表を聞く席でのことだったようである。——氏は、その席で、「安いよ。」の「ヤスカ タイ。」や、「また降ってきた ワイ。」の「マタ フッテ キタ タ。」などを発表せられたようである。)

「トワイ」の現実態が九州方言内におこなわれることは、ほとんどなさそうである。その点では、「トワイ」>「タイ」を言うことがかならずしも安全とはされないけれども、「タイ」の地域に「ワイ」のおこなわれることは、現に、そうとうにいちじるしいものがある。(「ワイ」顕在とともに、「ワイ」陰在化

の形で。)「ワイ」は、「ト」と契合して、「トワイ」のあとかたをとどめることなく、早くも「タイ」をひきおこしてしまったか。

いずれにもせよ、「タイ」に、九州方言にいちじるしい、準体助詞系の「ト」文末詞の内在するらしいことは、想察にかたくない。——「タイ」の中に「ト」の要素とでも言いたいものがある。(この点からも、私は、「トヨ」起源を考えさせられもした。)準体助詞系の「ト」のさかんな所に、じっさい「タイ」文末詞もさかんにおこなわれている。「タイ」は、格助詞系の「ト」「トイ」文末詞とは明らかに性格の異なったものである。——九州方言に格助詞系の「トイ」の分布は多くない。「トイ」は、ただに、伝達・伝聞の意味作用を発揮する。この種の「トイ」だけを保有する、私自身の生活語のばあいにしても、私は、その中で、九州の「タイ」とこれとの大きな距離を感じる。私どもの生活語には、九州方言にいちじるしい準体助詞系の「ト」文末詞は、たえてなかったらしいのである。九州方言下では、その準体助詞系「ト」文末詞がとり用いられて「タイ」がつくられたので、その「タイ」は、指定断定助動詞の役わりを代行しうるものにもなったわけであろう。

「タイ」が「トワイ」からのものとすれば、肥筑の地方で「タイ」と「バイ」とがよくつれあっているさまも、いかにもと了解することができる。

上説をまとめてつぎのように述べてみたい。九州方言下に、「ワイ」文末詞がひろくおこなわれてきた。——薩隅地方にもである。準体助詞系「ト」文末詞のおこなわれることもまた同様である。九州南部では、「トワイ」のおこなわれることがなかったが、いわゆる肥筑地方のうちではいつしか「トワイ」熟合の契機が生じ、これはただちに「タイ」に転化していったものと見える。かつ、肥筑地方の内では、「ワイ」>「バイ」転化もおこった。かくして肥筑地方の内には、「ワイ」に関する二変化形が見られることになった。いうまでもなく、「タイ」「バイ」は、旧形の「ワイ」に対する新形である。九州方言下の南部地方にはずれた所に後次の新形が生じて、それらが隆盛であるのは、もっとものことのように思われる。肥筑の地方で、「タイ」と「バイ」とはまさに兄

弟姉妹の存立関係にある。土地人たちの意識内でもまた二者の契存が明らかであろう。さて、「バイ」と「タイ」とに用法差が認められるのは、まさに「バイ」が「ワイ」からの単純変化であるのに対して、「タイ」が「ト」を内在せしめたからであろう。（——文表現の「タイ」どめは、文表現の「ト」どめにも似たところがある。）

九州方言下での「タイ」の分布に関しては、『九州方言の基礎的研究』の「文末詞『タイ』『バイ』」の図を参照せられたい。同図には、熊本県下、長崎県下、佐賀県下、福岡県下での「タイ」「バイ」相関の分布が明らかである。福岡県東部の豊前ともなれば、この分布がなく、つづいて大分県下のだいたい、
「バイ」「タイ」の分布を欠く。豊後西北域に、西がわに関連する「バイ」「タイ」分布が見られ、かつまた宮崎県下の西北部にも、熊本県下に関連する「バイ」「タイ」分布が見られる。宮崎県下では、なお、「バイ」が、県北の東寄りにも見られるが、このことは、「ワイ」から「バイ」が単純におこりやすいことを示してはいないだろうか。（「トワイ」>「タイ」の生成は、一曲折をへたものとされよう。——その曲折を見せたところに、肥筑地方の方言性があったとも言われようが。）

準体助詞系「ト」文末詞のさかんにおこなわれる九州南部地方に、分布上、「タイ」成立の認められない事態については、どのような解釈をほどこせばよいのか。私には良考が思いつかない。瀬戸口俊治氏によれば、薩摩での言いかたに、「ヨカトヂャイ ガ。」の「ヨカタイ ガ。」がある。大隅半島東岸で私が聞いたものには、「ヨカッ チャイ。」「ヨカッ タイ。」というのがある。——「ヨカッタイ ナー。」は、「それはよかったなあ。」である。「ヨカッ タイ。」は、「ヨカトヂャイ。」までさかのぼらせることのできるものであろう。このように薩隅の地方にも、北の「タイ」ことばに、一見まぎらわしく思われる「タイ」が見え、かつ、「タイ」形そのものの成立は可能であることがうかがわれるが、肥筑地方のと同様の「タイ」文末詞は、醸成されていない。事象

成立の地域差には、まことに、解きたい謎にも似たものがある。地域地域での音韻地盤と、地域地域での関連事象の存立様態とによって、地域間による、ものの存否差も見られることになっているのであろう。

鹿児島県下に関しては、『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県薩摩郡上甕村中甕」の条に見える、

fモドイギヤニャー ソイカラ オシゴロー シヨイモンタターイ
 帰りぎわには、 それから こぎくらべを したよねえ、
 f………… イッカカ シヨイモンタターヨ
 何日か していたものですよ。

などがあることを、ここに指摘しておきたい。「ターイ」などは、どういふものなのであろうか。薩摩西南部の笠沙半島では、かつて私も、「ヨカ タンガ。オバサン。」(いいですよ。お婆さん。)との言いかたを聞いた。「ヨカ タンガ。」については、“「いいですよ。」の意味の時もある。”とも聞かされた。この「タン」は何だろう。鹿児島県下にも、肥筑地方での「タイ」に比肩しうる「タイ」や「タン」があったとしたら、これは別して興味ぶかいことである。

宮崎県下中部西奥の調査のさいは、人々が、“「タイ」は全然ない。肥後は言うが。”と言っていた。

肥筑地方の「タイ」文末詞の用法に関しては、そこに、指定断定助動詞代理の機能も大きいことを、ここにあらためてとりたてておきたい。

熊本県下の一中年夫妻の語るところは、こうである。“「ダ」も「ジャ」もつかはぬ。「ヤ」もない。「そりゃそうだ。」は「ソリャー ソギャン タイ。」である。「これは花だ。」は「コラ ハナ タイ。」である。「きょうはいい天気だ。」は「キョーワ ヨカ テンキ バイ。」である。「いやですよ。」は「イヤ バイタ。」である。”「タイ」も「バイ」も、指定断定助動詞代理の機能を発揮している。

「タイ」に、関連の諸形がある。また、複合形文末詞の諸形がある。これらのことは、以下の、「タイ」に関する地方記述の中で明らかにする。

諸転形や複合形が多彩であるのは、すなわち、「タイ」文末詞の盛行をものがたるものでもあるか。

肥筑地方の「タイ」文末詞の実態を見る。(宮崎県西北部・大分県豊後西北部のふくまれることは既述のとおりである。)

熊本県

熊本県下に、「タイ」文末詞のおこなわれることは、まことにさかんである。その用法の通常のもは、「何々だよ。」「何々ですよ。」の「よ」を思わしめるものであろう。ところで、県南の、薩摩に近い所では、

○ウチー キテ ヨカロ タイ。

“家へ来てくるかの意。”

などの言いかたも聞かれる。“たずねる意になっている”ところに「タイ」が出ています。——やはり、「タイ」が、気がするく、きまったのにちかいようなことを言うのに、広く用いられているというわけか。この地で、人々が、私に気がするく、「チノードッテ ハナイテ イク トキ タイ。」(つれだって話して行く時ですよ。)とも言ってくれた。天草下島北部で、やはり私が受けたことばに、「イトコなどに 言ーマス タイ。」というもある。土地人相互間の「タイ」文末詞の表現は、通常、上品というものではない。

さて、熊本県下に、「タイ」に類する「タエ」「タウ」がある。「タ」がある。(「ター」と言われがちでもある。)この「タ」に関しては、「タイ」文末詞に比定することを避ける考えかたもあるかと思われるが、今はひとまず、「タ」を「タイ」に比定しておく。熊本市ではかつて、「ヌシが イクテラ エー タ。」(きみが行くならいいよ。)について、「タイ」の「タ」だとの説明を受けたこと

がある。天草ではよく文末の「ター」が聞かれる。女性に多いありさまでもある。土地の一教師は、「ター」は「タイ」だとせられた。天草に、「タイ」の「ター」もあるのか。『全国方言資料』第6巻の「熊本県上益城郡浜町」の条には、

mソルバッテン マー ハテタケン シアワセタエ
それでも まあ 終わったから しあわせだよ。

とある。

さて、ここに注目されるのは、「タイ」に類する「タン」である。

○シチャー オリトロ タン。

“下へ降りとろう。” (中男)

は、天草下島牛深の人の発言したものである。「パイ」に類するものには「バン」があり、「タイ」に類するものには「タン」がある。いま、自由に考えるとすれば、「タン」を、「タイ」「ター」などの変形と見ることも、不可能ではない。じっさいに、「タン」がむぞうさにつかわれて、「タイ」「ター」の用法に近いこともある。しかし、ここに別にとりあげられるのは、「タン」を「タナ」からのものとする考えかたである。次下の諸県にも「タン」が見られるので、順を追って追求してみよう。

熊本県下の「タイ」に関する複合形の文末詞には、「トタイ」がある。阿蘇山南麓での一例は、

○ナカダチ シヨル トタイ。ヤスコサンノ イモトバ。

結婚の仲だちをしてるんだよ。安子さんの妹を。

である。「モンタイ」複合形もおこなわれている。「タイナ」があり、「ターナ」がある。「タイタ」もある。

長崎県

本県下にもまた、「タイ」文末詞が、じつによくおこなわれている。「タイ」

と「バイ」との相違については、平戸出身の教師と島原半島出身の教師との談合せられたのを引用することができる。“「バイ」は、自分に言い聞かせるので詠嘆の意味がある。「タイ」は念をおして指示するものだ。——わかりきっている。肯定のわかりきっている時に「タイ」をつかう。「シレタ コッ タイ。」(知れたことだよ。)が「タイ」のよい例である。「タイ」には、「それぐらいのことはわからんか。」とか、「当然」「もちろん」とかの意がある。”

五島列島での私の経験では、最西南の地でなど、「バイ」は出ないがちで、「タイ」がかなりよくつかわれていた。

○オマエガ ソー アンナラ シヨ^ンナカ タイ。

“そういう希望であるなら、いたしかたがない。”

は、「タイ」の一例である。県下で、「タイ」が「ターイ」ともよく言われている。

「ヨカ タイ。」は、「ヨカ テー。」にもなっている。この「テ」が「チ」にもなっている。

本県下にも、「タイ」ならぬ「タ」がおこなわれており、「ター」の形にもなっている。西彼杵半島での一例は、「アタレバ ヨカ [↑]ター。」(上がっているにあたればいいよ。)である。この地で人は、「………… トランバ ター。」(“………… とらなくてはならないだろう。”)というのを、「………… トランバ タイ。」とも言いかえた。五島列島での、私の経験では、じつに、「タイ」が「タ」にちかく聞こえたりした。

本県下に、広く「タン」形が見わたされる。——「タイ」用法にちかい「タン」用法もかなりあるのか。ところで、『長崎方言集覧』には、「タン」についての、「タナと同一の意味を有す。」との説明が見える。(本書に、「タノ」についての「タナ」と同一の意味を有すとの説明も見える。)[タン]について、「タナ」あるいは「タノ」からの形成が考えられるのか。

本県下の「タイ」に関する複合形に、「トタイ」があり(「トターイ」ともあり)、「ッタイ」がある。「ナンタイ」もあるらしい。「タイナ」もよくおこなわ

れている。「キョーワ シェンキョ タイナ。」(きょうは選挙日だよ。)はその一例である。「タイナ」の「イ」の弱音化も聞こえる。「ターナ」複合形もある。

『老岐島方言集』には、「たーい」についての、

「たーナ」と同意。同輩又は以下に対する語。

との説明が見える。私が五島列島で聞いた「タナー」は、「タイナ」同様のものであったか。「タイナー」の「タナー」は、「アナタナ」の「タナ」にまぎれる。県下に「タイノ」「タイネ」もある。西彼杵半島で聞いた、

○ヨッテ チャナリ ヌーデ イケバ ヨカ タマー。

寄って茶なり飲んで行けばよかタイ、まあ。(老男→客)

の「タマー」は、「タイマー」にちかいものであるうか。

さきの、島原半島出身の教師は、「ソー タナー。」(“そうにきまってる。”)などの「タナ」について、“[「タナ」は卑しくない。上の者に小さい者がしたしんで言う時などにつかう。”とも説明せられた。この「タナ」は、「アナタナ」の「タナ」であろうか。『長崎方言集覧』の説明に見える「タナ」「タノ」も、「タ」が「アナタ」の「タ」であるとしたら、これらも、「タイ」の問題から除外すべきことになる。しかしながら、肥筑の現実に、「タン」はほとんど「タイ」同様に用いられていることも認められるのではないか。(ことによると、土地っ子のむぞうさな平常感の中にも、「タン」を「タイ」に比定する心があるかもしれない。)

佐賀県

佐賀県にも、老若男女に、「タイ」文末詞がさかんである。「ターイ」と言われることも多い。(こうした長音化が本県下では特徴的でもある。)[キンターイ。“([金]でしょう?)<仏像のこと>”]は、小学生三女の発言例である。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条には、

fダーレモ トリニャ イラッサンケン ハヤカガ カチターイ

だれも 借りには いらっしゃらないから、早いものが 勝ちですよ。
などというのが見える。

本県下にも「ター」がある。「トー」もあるのか。別に、「タイ」の「テー」もある。さて、「タン」もおこなわれている。県東部での一例は、

○ダイジャロカ オモト[↑]ッタ タン。

“きのう会った人はだれかと思ってたらあなたでしたか。”

(初老女→隣家主人)

である。私が県南で聞いたものには、「ノコ[↑]トッタ ワケ タン。」(残ったわけタン。)などがある。——私は、このような「タン」の、さりげなくつかわれるのを聞いて、「タン」を、「タイ」同様のものかと思った。ところで、そういう私が、佐賀の「タン」について、早く、「タナ」も考えているのを自身のカードで知ることができる。岡野信子氏も、「タン」は「タナ」からとされるようである。『佐賀県方言語典一斑』を見るのに、これには、

「タン」は「ダ」「ダヨ」などの意にて「バン」とほぼ同じ意であるけれども、これは自身が然か思ふのにあらずして事物が然る意を人に表はす場合に用ひらるゝ様である。

とある。本県下の一知友は、“答えに使用される”『『タイ』の一群』として、「タイ・ター・タン・タンタ」を教示せられた。

本県下の「タイ」に関する複合形の文末詞には、「トタイ」がある。つぎに、「タイナ」「タイノ」「タイネ」「タイヨ」「タイエ」がある。「こうこういうばあいにつかう タイナ[↑]ター。」という「タイナター」の複合形には、「ナアナタ」の「ナタ」が認められよう。単純な「タナ」形は、本県下のばあい、「アナタ」系のものであるか。「タンタ」複合形のものは何系のものか、判断がむずかしい。——「タイ」にちかい「タン」と「タ」との複合形なのか、「アナタ」の「タナ」の「タン」に「タ」がついたものか。(ただしこのばあいは、「アナタ」が重複することになる。)いずれにもせよ、「タンタ」のおこなわれることはいちじるしい。県東部に、「タンモ」(「モ」は「もし」の「モ」)もある。佐

賀弁の、

○オリャー ワカラン パンタイ。

わしはわからないよ。(反発的に言う返事のことば)

の「パンタイ」は、めずらしい複合形であろう。

福岡県

福岡県下にも、「タイ」がよくおこなわれている。ただし、加来敬一氏の「福岡県方言の語法」(『北九州国文』第五号)によれば、

この語は前項の「バイ」よりもやゝ使用地域が狭い。

とのことである。筑後には「タイ」がさかんであり、「何々という コトデス タイ。」などともある。筑前西部での、いちじるしい「タイ」の一事例は、「ミンナ セニャー タイ。」(みんなしなくてはよ。)である。この地方の人で、“「バイ」は近親間の親密な人に。「タイ」も気やすい時に。”と語ってくれた人もある。「バイ」と「タイ」とを区別していないおもむきが見られもしたのであった。ところでまた、つぎの説明を聞かせた人もあった。“「アリヨルゲナ バイ。」(あるそうなんだよ。)を、「アリヨルゲナ タイ。」と言うと、よそのことになる。「タイ」と言うとはそごとのゴタル。”岡野信子氏は、「北九州生活語の文末助詞」(『研究紀要』第六集)で、

女の子達は驚きあきれたという感情の表現に「マー タイ」と感動詞に連ねて用いるが、これは北九州のみであろうか。

と言われる。

筑後には、「ワリゲサン アスビ クッ ター。」(“おまえの家へ遊びに行くよ。”など、「ター」が見られる。筑後に、「タン」もおこなわれている。大牟田弁にも、「ヨカ タン。」などとある。筑後に、「タンモ」複合形も聞かれる。

本県下の、「タイ」に関する複合形の文末詞には、「トタイ」があり、「ッターイ」がある。「タイナ」「タイノ」「タイネ」もある。

大分県

大分県下では、豊後西北部の日田郡・玖珠郡に「タイ」が見られる。日田地方では、「知ラン タイ。」などが一般的であるという。玖珠郡下の一知友は、「ソリャ ソー タイ。シヨーガ ネー タイ。」（それはそうだよ。しょうがないよ。）などの例について、

同輩以下に対する低待遇価の表現である。軽い意味であって、独りで合点するような語気がある。

との説明をくだしてくれた。おなじ玖珠郡下でも、「タナー」とあるのは、「アナタナ」系のものであろう。『大分県方言の旅』第三巻には、「タン」についての、

タンはタナーのさらにくずれた形。アンタナー→タナー→タン。宇佐郡長州町ではタンが普通。

との説明が見える。

以上、肥筑地方に隆盛な「タイ」の属を見てきた。九州方言の、あからさまな九州色として、早くも指摘できるのが、「バイ」「タイ」表現であろう。「タイ」は、現に、すこぶる隆盛である。肥筑地方の人々の、日々の表現心情は、「タイ」に（「バイ」にも）、どれほどつよよきさえられていることであろうか。

かさねて、「タイ」と「バイ」との相違を考えてみる。「何々ですよ」「何々だよ」とも言いかえられる「タイ」の表現には、ふだんのおちつきとゆとりとがあろうか。こだわるところのない平静さがあるとも言えるか。

さて、「タイ」の属は、九州東がわの斜面にはおこなわれていなくて、この状況が、なだらかに中国・四国につづいている。

三 九州外での「タイ」形文末詞

文末詞としての「タイ」の、独自のものの存立と活動とは、以上のように、九州、肥筑地方本位に見わたされる。

しかしながら、九州外にも、外形上、「タイ」であるものの、文末詞としての存立が、見いだされないことはない。今、その事例をたどっていくことにしよう。

中国、山口県下には、問題の「タイ」文末詞がある。神鳥武彦氏によるのに、平群島には、「フッタ トモエタイ。」(雨が降ったようです。中女→老女)との言いかたがあるという。周防東部にも、「ソーデ アリマス ター。」(そうですよ。老男→青男)のような言いかたがある。(荒巻大拙氏教示)「よ」と言いかえられている「タ」は、どういうものであろうか。

今石元久氏は、播州赤穂市域内でのことば、「マズイデス ター。」(まずいですよ。老女→今石氏)を教示せられた。

北陸の能登で、私は、「タイ」形文末詞を聞きとめている。半島東部南がわ宇出津では、「ドーヤ タイ。」(どうだい?), 「ダメヤ タイ。」(だめだよ。), 「イッパイ ヤラン カタイ。」(いっぱい飲まないかよ。), 「オキタ カタイ。」(起きたか。お早う。男ことば)などの言いかたがなされている。「タイ」が問にも用いられている。どういうものなのか。

富山県下にも「タイ」がある。富山市を出ての西北部で聞いたものには、

○ユートッテャカモシレン タイ。

あんた言うておられるかもしれない。

などがある。土地の人に、「タイ」はむかしからのことばだと語る人があった。ところで、私のカードを検閲した識者は、この「タイ」に疑問をさしはさんでいられる。が、私は、ここで、「タイ」をたびたび聞いた。「ソーヤ タイフ

一。」は、「そうだノー。」にちかく、相手に肯定をうながすものだという。「ア
トカラ イク タイ。」(あとから行くよ。)の「タイ」は、男に多いことばで、
“乱暴なつかいかた”であるという。(ここのところを、「イク ワイネン。」
とえば、“女性的”になるという。)『全国方言資料』第3巻の、「富山県氷
見市飯久保」の条にも、

mハヤー ヤッテキタタイ
もう 仕事をすませて来たよ。

というのがある。「よ」とされている「タイ」が見える。東条操先生のご令室
は、かつて、石動のことばとして、「いま 行く タイ。」を教示された。『砺
波方言の研究』にも、「一冊デモ買ヲータイ」などが見え、『富山県方言集成稿
(二)』にも、

おったい おりますよ

が見える。

『静岡県方言辞典』には、「いやったいやれ(イヤナコトヨ)」というのが見
える。「たい」をとりたてることができるものなのかどうか。

長野県下にあるという「早くこっちへ来タイ。(こっちへおいでよ。)」など
の言いかたは、「〜タ」の助動詞表現の認められるものである。

関東地方、栃木県東南部内で、かつて私が聞いたことばに、

○ソーデ ゴザス タイ。

そうでございますよ。(老男→藤原)

というのがある。返事のことばであった。どういう「タイ」なのか。——用法
上では、この「タイ」は、九州方言下のものによく似ている。

東北地方内にも、一・二の問題がある。

齋藤義七郎氏の「山形県北村山郡東根町」(『日本方言の記述的研究』)には、
tae についての、つぎの説明が見える。

東村山郡山寺・高瀬村附近のみの用法。

「佐藤の家どこだタエ」「佐藤テ，二人いたタエ，チチ^ハコナガ（小さいのか），オツケナガタエ（大きいのか）」（tae は本来第2人称代名詞）この「タエ」は，外形が「タイ」に似ているけれども，別置すべきものであることは言うまでもない。

秋田県下に問題事例がある。かつて私は，秋田県男鹿半島の船川町で，「ドーカ タ^マム[ü] シ[i]タイ。」（どうかお願いしますよ。）などの言いかたを聞いた。「シ」をかるくつけると上品になるとのことであった。“タイがつくと敬語になる。”とのことであった。（「ドーカ タ^マム[ü] シ[i].」がやや低い言いかたである。）この「タイ」は，どういうものなのであろうか。田沢湖近くの生保内で聞いたことばには，「イヤ ソ^コ=[i] アル[ü] ベ^ッター。」というのがある。これは，「針をとってくれ。」と言って，「針はない。」と返事され，「いや，“あるだろう。あるはずだ。”」と言いかけたことばである。人は，「ベ^ッター」をとりあげて，“おそらくのことはわかって言うことば。”と述べた。問題視すべき「ター」がある。「ある ベ^ッ」は「ある ベー」か。『秋田方言』には，「べた」をとりあげての，「…でせうよ。」との解が見える。「た」は「よ」にあたるものか。

『青森県五戸語彙』には，「タイ」をとりあげての，

目上に対していう場合などに過去形の動詞の下に付する。過去完了の「タ」に感動のイ（イとエとの中間音，敬語の場合のみ用う）を添えたものか。来たタイ（来たことができましたよ）。という説明が見える。この「タイ」は，助動詞系の文末詞とされようか。北の野辺地町で聞いたことばには，「オッカネ コトー アリ[i]マシ[i]タ タイ[i].」（恐ろしいことができましたよ。）などがある。

転じて南島を見る。かつて私が，沖縄本島国頭郡下の人から教示されたものには，「あがいんそーれータイ。」（お上がりなさいませよ。）などというのがある。

ある。「タイ」がつけば、ていねい・上品のことばづかいになるとのことであった。『沖縄語辞典』には、tai の条下に、

目上に話しかける時・呼びかける時などに女が発する敬語。さらに高い目上には tari という。

との説明が見える。仲宗根政善氏は、宮古西里方言について、

なお、沖縄方言の丁寧をあらわす間投助詞サイ（男性が用いる）、タイ（女性が用いる）の如き助詞もない。

と言われる。（「宮古および沖縄本島方言の敬語法」『沖縄自然・文化・社会』）ここに見られる「タイ」は、どういうものであろうか。

奄美大島などで聞かれるものには、「ワ[↑]ンヤ シヤ シラン ター。」（私はしはしないよ。）などがある。こういう「ター」と沖縄本島の「タイ」とは、どのように見あわせたらよいものであろうか。

第六節 「ダイ」形文末詞

一 はじめに

九州方言下に、また、「ダイ」という、特定の文末詞がある。外形だけなら、「ダイ」形とされるものが、九州外にもある。が、九州方言下での「ダイ」文末詞の存在と活動とは、全国諸方言上、まさに刮目されるものである。

この「ダイ」文末詞が、九州方言下にあっては、既述の「タイ」文末詞と、かなり多く、分布を等しくしている。人は、「ダイ」をもって、「タイ」の“濁音化”と見ることも、すくなくない。

私は年来、この「ダイ」に接して、その本性がどういうものであるかを、つきとめかねてきた。「タイ」にちかいものかとも見られるが、また、「タイ」とはかなりちがったもののようにも思われる。なによりも、大きな問題となるのは、「ダイ」形の文末詞が、「タイ」や「バイ」を存せしめない九州南部地方に

存在することである。ものが、肥筑地方の「ダイ」とは別のものでもあるのだったら、問題は小さくなるけれども、今にわかには、別のものとすることができない。

地方によっては、「タイ」>「ダイ」のばあいもあるのだろうか。要するに今、私には、「ダイ」成立の事情が不明である。

ここではまず、九州南部方言下について「ダイ」形の文末詞を見、やがて、肥筑地方本位の「ダイ」文末詞を見ていこう。

二 九州方言の「ダイ」の属

鹿児島県下の状況は、つぎのとおりである。

上村孝二氏は、「鹿児島県下の表現語法覚書」で、「ダイ」につき、

このドに似ているが感動をこめるダイという助詞も県下一般に用いられ、推量体が続けて、シモスメ^シダイ(為ます)、ヨカロダイ(よかる)と言う。甌島では現在形にもつづく、行ク^クダイ(行く)。これは勧誘である。ダイは「ぞよ」の訛形であろう。

と言われる。

「ぞよ」からのものとすれば、「ソヨ」>「ソイ」>「ドイ」>「ダイ」の変化がおこったことになろうか。

私が調査し得ている諸事実も、大部分、推量表現のものである。实例は、

○ダイサーモ オヂャハンヂャンスロ ダーイ。

どなたもいらっしゃらないでしょうね？

○モー ネヂャ デモスメ ダイ。

もう熱は出ませんでしょうよ。

などである。「ダイ」は「ダー」ともあり、短く「ダ」ともある。複合形では、「ダイナ」「ダニ」などが見られる。

ところで、種子島の知友がその生活語について教示してくれたのによると、「あれを見ろ。」に相当する言いかたに、「ア^アリョー ミテン ダー。」というの

がある。この「ダー」は、どういうものなのであろうか。——上記のとおなじものであるとすると、これは、推量ではないばあいである。

熊本県下にはいっても、県中部での、

○クルマワ コヤノ トコロマデデッショ ダイ。

車は小屋の所まででしょうよ。(「どこまでのぼるの?」に対する答え)

など、推量の「ダイ」文末詞が見られる。天草島での例は、「ヨー ゴザッジュ ダイ。」(ようございましょうよ。)などである。天草のこの発言に関しては、“「ダイ」ではなくて「ダー」だ。”と言う人があった。県下の南北にこうした「ダイ」があつて、かつ、県下に勧誘の「ダイ」「ダー」「ダ」がある。天草での、「早くごはんをたべよう。」は、「ハヨ シマオ ダイ。」「ハヨ シマオ ダー。」である。八代方面の「行こうよ。」は、「イコー ダ。」である。なお、県下の南北には、意向を言う「ダイ」「ダー」「ダ」がある。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には、

f………… サー イマ キバローダ
さあ いまこそ かせごう

というのが見える。(意向を言い勧誘を言うものであつても、その形態は、いわば未来形をとるものである。これらと推量表現のものとは、形態が同様である。——この点で、鹿児島県下と同似のものが熊本県下にも存在すると見ることがゆるされようか。)

八代市二見地方のことばについて白石寿文氏の教示せられるところによると、そこでは、「ドギヤント ダイ。」(どんなものかなあ。——自分で一応考えている。)などの言いかたがおこなわれているという。これなどは、ことかわつた、「ダイ」の用法ではないか。『全国方言資料』第6巻の「熊本県熊本市中唐人町」の条にも、

f ダケン ヤッパ サンセンノ チクワー カウ ホガー アクルヒマデデ

だから やはり 3 銭の 竹輪を 買う 方が 翌日まででも
ン ネマランワケダイ

腐らないわけですよ、

というのがあつた。この、「ワケ」という名詞でとめた言いかたを受けてはたらく「ダイ」は、「タイ」のはたらきにさも似ている。

県南には、「ダイ」に相当する「ダン」もある。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には、

f ヨサリ オローダンノーッテ ウチエンデ

「夜 織りましようね」と 内縁で

というのが見える。

長崎県下となると、推量表現の「ダイ」（「ダー」も）のおこなわれることがさかんである。『平戸方言語法草案』には、「必ズ推量ノ助動詞ノ終止形ニ接続ス」とある。西彼杵半島例は、

○ユタンボ イレンデモ ヨカロ ダー。

湯たんぽを入れなくてもよからうよお。

などである。

ところで、県下に、意向を言う「ダイ」もある。『島原半島方言集』には、「ナカシューダイ（泣かせるぞ）」があり、かつ、「もう行こうダン」など、「ダン」も見える。

『統壱岐島方言集』には、「タイ、ダイ」についての、

念を押し、余情を添へるだけで、疑問を表す事はない。体言、活用言の連体形、他の助詞につく

との説明が見える。ここには、「ダイ」の自在な用法が見える。著者は、「タイ」と「ダイ」とを関係の深いものと見ていよう。『対馬南部方言集』には、「ダ」についての、

女子の友人間に行はれる疑問詞。……か？ 「来んダ」は「来ませんか」、

「いたダ」は「行きましたか」「行かんダ」は「行きませんか」、
「いたとダ」は「行つたのですか」、
「いやダ」は「いやですか」
との記事が見える。これはどういう「ダ」なのであろうか。

県下に、「そげんダイ」(『島原半島方言集』)などの、「タイ」によく似た「ダイ」も見られる。

「ダイ」に等しい「ダン」のことは、すでにふれた。県下に、「ダン」は、かなりよくおこなわれているらしい。「ダイ」が「ライ」になつたりもしているのか。「ラー」もある。

県下の複合形には、「ダナ」などがある。

佐賀県下にも、やはり、推量表現の「ダイ」「ダー」が、よくおこなわれている。

○ソヤン ヨケー キタラ ヌッカ^ーデッショ ダイ。

そんなにたくさん着たら暑いでしょうよ。

は、唐津市城外ことばの一例である。“「ダイ」「ダー」(「ダン」も)は推量につき、婉曲に推量している。それとなく相手の気もちをはかろうとしている。”と説く人もある。

意向を言うものもある。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条に見える例は、

f サンプンキナリャ ワカッチョール オリガ デャーチ ヤローダイ
散粉機ならば わかっています。わたしが 出してあげましょう。
などである。——こういう時に、「ヤロー タイ。」などと「タイ」がくるのであろうか。

『佐賀県方言語典一斑』には、

「タイ」「タン」は想像の助辞より続く場合には「ダン」「ダイ」と濁るとの記述が見える。

本県下に、「ダン」形も、かなりおこなわれているらしい。複合形に、「ダン

タ」「ダンモ」がある。県東筑後河口の大詫間で、「ホンニ ハヤカ ダンタ。」は、「ほんとうに早いですよ。(老男→中男)」である。——これは、推量の言いかたではない。

福岡県下となると、——肥筑地方のうちであるとはいえ、「ダイ」のおこなわれかたが、ややよわくなっていくようである。ただし、筑後には、肥前・肥後に対する関連もあってか、推量表現の「ダイ」がよく見られる。「キツカロダーイ。」(“おきついでしょうね。”)などとある。(ちなみに、人は、“キツカロタイ。」は「きついだろう。」で、「ダイ」よりもいくぶん同情とぼしき時に「タイ」を言う。”と語った。)「ソゲン シュー ダー。」(そんなにするだらうよ。)などともある。筑後に「ダン」も見られる。

さて、県下も東部、豊前域の「福岡県筑上郡岩屋村鳥井畑」(『全国方言資料』第6巻)にも、

*m*バーサン イマ モドッタダイ

ばあさん いま 帰ったよ。

などが見いだされる。岡野信子氏は、「北九州生活語の文末助詞」(『研究紀要』第六集)で、「アイツコンチコトモ シラント ダイ。(彼奴こんな事も知らないんだな)驚異」などの例を出してられる。だんだん、「ダイ」文末詞が自由につかわれているのか。

大分県下では、県北の豊前域に、

○ショーギョーン ホージャロ ダイ。

(出身は)商業科のほうだらうよ。 (老女→中女)

などの言いかたがある。これは推量表現のばあいであるが、そうでないばあいの「ダイ」も見える。国東半島にはいつの「ダイ」例には、「オダー(わしは) お菓子やら スカン ダイ。」というようなものがある。

豊後の南北に「ダイ」が認められるようであり、東南辺での例には、

○ダーサンノ ネキー オッタンヂャロー ダイ。

じいさんの そばに おったんでしょ よ。

というのがある。(小野米一氏教示) 豊後に、非推量表現のものもある。

宮崎県下となると、まず、南部に、推量表現の「ダイ」「ダー」が見られる。このことは、鹿児島県状況に深く関連するものであろう。北部となって、岩本実氏『日向の高千穂方言』に、

若い人の間では、「行コダ」(行こうや)「ツーダイノーダ」(走って帰ろうよ)

との指摘がある。

以上が、九州方言下での、「ダイ」の実情である。「ダイ」形のおこなわれることは、肥筑をこえて、広域にわたっている。

今、薩隅地方の状況を考慮するかぎりには、「ダイ」を、にわかには「タイ」にむすびつけることができない。用法上、薩隅地方の「ダイ」と肥筑地方の「ダイ」とには、かなり、共通性も認められるのではないか。「タイ」からはなれた「ダイ」のありさまを見ることもできるようである。それにしても、九州方言下に広く存在する「ダイ」を、みな「ぞよ」の転になるものと見てよいのかどうか、あやぶまれる。

「ダイ」は「タイ」からと考える人たちは、おもに、肥筑方言に関して、「タイ」「ダイ」の用法の近似をとらえていられるのであろう。私も、たしかに、双方に用法の近似があるとも見ている。(それでいて、「ダイ」に推量表現の作用のつよいのを、特別視したこともある。)濁音化ということは、肥筑方言下にも、まれなことではなさそうである。「タイ」の「ダイ」を、認めてよいこともあるのだろう。

「タイ」を「ト・ワイ」からのものとする考えかたを前において、あえて一考を試みるならば、「ダイ」についても、これを、「ト・バイ」からの

ものかと考えることも、できなくはなさそうである。ちかごろの小考である。(ただしこれは、肥筑地方に関してのことにとどまる。)

起源は不詳であるが、今日も、九州方言下に、「ダイ」「ダー」(「ダ」も)「ダン」の一群の文末詞が、かなりよくおこなわれている。これが、九州方言下の表現生活にあって、表現気分の独特のささえ手になっていることは、上述したところに明らかであろう。

三 九州外での「ダイ」形文末詞

山口県長門北部の青海島で聞いたものには、

○イカニャー ナランソニ アノ ヒトワ イカダッタ ダイ。

行かねばならないのに、あの人は行かなかったよ。

などの言いかたがある。「よ」に該当する「ダイ」が認められる。しかし、これは、上に九州方言内に見てきた「ダイ」とはちがって、「ダ」助動詞関係の「ダイ」ではないか。山陰に関連する長門北部のことである。助動詞系の「ダイ」形文末詞があっても、ふしぎではないように思われる。

山口市内でも、かつて、中年女性間の会話に、「ソレデモ エカロー ダイ。」(それでもよかろうよ。)というのが出たのを聞いたが、この「ダイ」もまた、上の、九州方言下の「ダイ」とは関係のないものと思われる。(こうした「ダイ」が、山口県下に、かなりおこなわれているのか。——それにしても、「ダ」の自由な運用ではある。山陽地方では、この点、山口県下がぬぎん出ている。)

ついでに、島根県下石見北部の「ダイ」をあげておく。「チンテ トメタ ダイ。」(“どうしてとめたのか。”)などとある。

中部地方内・関東地方内にも、文末詞の「ダイ」が認められるが、これもまた、助動詞系のものである。

東北地方にも、青森県下の「南部」地方などで、「ダイ」文末詞が聞かれるけ

れども、これもまた、助動詞系のものと見られる。『青森県五戸語彙』には、「ダイ」が指摘されていて、

「よ」に当る。敬語になる。それでもよござりますダイ（それでもようございましょうよ）。

との説明が見える。

九州外での「ダイ」形文末詞は、すべて、九州方言の「ダイ」の属のほかのものである。こういう点でもまた、九州方言状態の特異性が知られる。

第七節 「デ」の属

一 はじめに

「デ」もまた文末詞化している。

格助詞の「デ」は、文中にあってなんらかのくぎれめにたつ。このような要素が、文末特定要素となって文末詞化するのは、当然のことである。「ここで……………」の「ココデ」を、私どもが、「ココ[↑]デー？」と発言したとするか。格助詞「デ」が訴えことば然としてくる。

接続助詞の「デ」もまた文末詞化する。文中の、大きくくぎれめにたつものだからである。「アトカラ 行クデ、待ットレ ヨ。」（あとから行くから、まっているよ。）での「アトカラ 行クデ」が、言いさしの文表現にされたとするか。接続助詞「デ」が、文末で、訴えの効果を発揮するようになる。

格助詞「デ」、接続助詞「デ」からの文末詞生成からすれば、助詞系転成文末詞の考えかたを設定することが、いかにも容易である。

この種の「デ」文末詞が、おおよそ、全国的に認められるようである。ただし、これの分布は、関西系の地域にまずつよく、中部地方にも、かなりさかんなものがある。

地方によって、おこなわれるものが格助詞系であるか、接続助詞系のものであるかは、当該地域ごとにこれをたずねることにしたい。

助詞系「デ」文末詞の意味作用には、告知あるいは通告、了解ないし応答、問いなどがある。地方によって、おこなわれかたに傾向がある。

告知の「デ」に関しては、東京語本位の（共通語本位にもなっている）「ゼ」が想起される。「イク ^{ゼー}。」（行くよ。）と告げる合図のことばづかいなどでの「ゼ」に、告知の「デ」は吻合している。——品位上のことは別として。

諸方言上では、「ゼ」の分布が、さしての問題にはならない。

助詞系文末詞「デ」の使用品位に関しては、また、各地域について、くわしく見る必要がある。いずれにしても、「ゼ」ならぬ「デ」が、それぞれの地方にあって、郷土弁の生活を有力にささえていることは、言うまでもない。

「デ」は、所によって、ときに「ヂ」とも発言されている。

助詞系の「ト」文末詞と、ここに言う「デ（ヂ）」文末詞とを集合すれば、私どもは、タ（→ダ）行文末詞をうんぬんすることもできる。〔t〕〔d〕など、歯ぐき音の破裂音が、文末特定の訴えことばの形成にあずかっているのは、注目すべきことである。強度の大な音声は、訴えに役だつことが大であろう。

なお、「デ」に関して考えてみたいことがある。山陽地方には、

○ソリャ ^ヂチガウ ^デ。

それはちがいますよ。

などの、ていねいな「デ」がおこなわれている。（当地方に、接続助詞の「デ」はないから、これも、格助詞系の「デ」と見られる。「デ」は、このように、自由に運用されている。）「デ」の敬意感には、「デス」の敬意感に通じるものがあるかと考えられる。母おやが子に、海をゆびさして、「ウミ ^{デー}。」（海ですよ。）と説明した時にも、「デー」に、「です」の気分がやどるかのようである。ともかく、「デ」文末詞の敬意性が認容される。——（「デ」が敬意性をもってつかわれるばあいなどは、ことに、「デ」の文末詞用法が明白だとされよう。）

「デ」文末詞に関しても、「デは(デワ)」など、複合形が指摘される。この種の複合形に関しては、節をあらためて述べることにしよう。

二 南島地方の「デ」ほか

奄美大島本島には、

○オッカン ハヨ ゴハン カモ ディー。

お母さん早くごはんをたべようよ。

などの言いかたがある。この「ディー」は「で」に相当するものであろうか。

——これは、さそいのことばか、催促のことばか。

喜界島のことばには、「ホーイ。」(訪問のことば)に対する応答のことば、

○タル デー。

がある。「だれで?」というのであろうか。ここには問いの「デ」が見られる。同島の、

○ナーメー チャーッカイ デー。

あなたはどこへですか?

の「デ」も、問いの意になっている。人は、「デー」の問いが「ヨー」の問いの上に位すると言っている。

沖縄本島北部、国頭での、「アリンデー。」は、「あれを見よ。」との意のふつうの言いかたであるという。「アリンデー。」は「アリミンデー。」なのか。「デー」はどのようなものなのであろう。

与那国島の比川方言には、高橋俊三氏によれば、

○バーン デンキヤ ヌーン アガラヌン ディヤ。

私たちの電気は(メーターが)まったくあがらないんだ。(初老男)

などの言いかたがある。これの「ディヤ」に「デ」を見るか。(p. 171)

三 九州地方の「デ」ほか

九州地方に、「デ」がよくおこなわれている。

鹿児島県下には、広く、告知の「デ」とも言ってよさそうな「デ」文末詞の慣用がいちじるしい。

○タノンミャゲモン ^ノデ。

おたのみ申しますよ。(お願いいたしますよ。)

などが代表例である。接続助詞系の「デ」と見られようか。薩摩半島南部の一例は、

○イヤ、モ イッザイモイ デー。

いや、本当にもう結構ですから。(老男→老女)

である。(瀬戸口俊治氏教示) 大隅半島の一例は、

○カンヌッサンヂャ デ。

神主さんだから。(宮地さんのうちの広いことを言う。)

である。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県揖宿郡山川町岡児ヶ水」の条には、

*m*アー チュレガ アッタロデー

ああ 連れが あっただろうから。

とあり、「から」の「デー」が見られる。いずれにしても、「デ」がしきりに用いられるので、用法が自在化しているということか。

○メー^トシ メー^トシ, ゴワン ^ノデ。

まいとしまいとし、ございますよ。(台風の来ることを言う。)

のばあいにも、「ゴワン デ」を「ゴワス ヨ」と言いかえても見せるありさまである。自由な「デ」の使用が、県下の屋久島にもよく見られる。硫黄島の一例は、

○タノンモイ ^ノデ。

である。「デ」が「ヂ」にもなっている。瀬戸口俊治氏は、薩摩半島東南端の氏の郷土語から、

○ヒガ アタロツナトカイ ゾズ セアセン デー。

日光が当りそうなのから成就(仕上げる)なさいな。

(老女→老男)

(藤原注 葉たばこを早くかたづけることについて言う。)

との例をあげ、「セアセン デー」を「しはしないで」とせられた。「デ」の「ヂ」は、大隅地方にも見られる。

宮崎県下にも、「デ」があつて「ヂ」がある。

○インデ クッ デー。

帰ってくるからね。

は、県中部西奥での「デ」例である。

○オリモ イク デ。

おれも行くよ。(青男間)

は、中部東方での事例である。この「ヂ」は、何助詞系のものであろうか。「ヂヨ」などの複合形も認められる。これに、告知の気分はつよい。接続助詞系と見られる「デ」に関しては、「デオ」の複合形も見られる。この種のもは、日向南部に認められる。——連大隅的である。

熊本県下でも、南部には、連薩摩的に、接続助詞系の「デ」が認められる。

○シラケテジャ デ。

素面だからね。(アクセント失)

などとある。人吉方面にも、この種の「デ」がよくおこなわれている。天草方面にも、

○シェンデ ヨカ デー。

“しなくてよろしい。”

など、「デ」がよくおこなわれている。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条に見える、

m………… マタ アオーデー

また 会いましょう。

でも、「デ」文末詞が指摘されようか。——これは何系の「デ」であろう。

長崎県下にも、「デ」がよくおこなわれている。『嶋原半嶋方言の研究』には、「美しかで(ぜ)」などが見える。五島列島での言いかたは、

○コッパ ヤッ デー。

これをやるよ。

などである。佐世保市域の例には、

○ジャンケン シュー デー。

じゃんけんをしようよ。 (小学生男)

などがある。西彼杵半島内がわで私が聞いたものには、

○ソーデッショ ^{ヂー}デー。

そうでしょうよ。

などがある。——「デ」の「ヂ」が見られる。県下に、多く、告知の「デ」がおこなわれている。壱岐・対馬では、「デ」がよくおこなわれて、しかも、問いの「デ」も見える。——何助詞系のものであるかは定かでない。

佐賀県下では、告知の「デ」がよくおこなわれているらしく、複合形「タイデ」なども見られる。——『全国方言資料』第6巻の「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」の条には、

m……… キモンナー チー ヨグレタイデ
着物が 少し よごれたよ。

などとある。

○コリャー アンタン シタッタロー デー。

これはあんたがしたんでしょう？

は、唐津市城外ことばでの問いの「デ」である。

○ソギャン シュー デー。

そのようにしようよ。 (老女間)

は、県南でのさそいの「デ」である。「デ」文末詞は、何助詞系のものなのか。

筑後南部での告知の「デ」の例は、

○シューシゴエン ダスト, チョット ヨカ ウシノ オリマシタ デー。

十四・五円出すと、ちょっとよい牛がおりましたから。

などである。「デ」は、接続助詞系の文末詞か。『全国方言資料』第9巻の「福

岡山三井郡善導寺町」の条には、

*m*ソーナラー イテクルケンデー

それでは 行ってくるからね。

というのが見える。「デ」文末詞をとりたててよいのか。同「善導寺町」の条に、

f………… オヤデン ナンデン バカン ゴツ ユーモンデ

親でも 何でも ばかの ように 言いますよ。

ともある。この「デ」も注目される。『全国方言資料』第6巻の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」の条には、

*f*アッ キョワ ドケ イキョルデ

きょうは どこへ 行くところですか。

などがあり、問いの「デ」が見られる。この地方には、問いの「デ」がよくおこなわれているか。北九州市方面には、さそいの「デ」もおこなわれているらしい。

大分県下は、「デ」のさかんな所である。その品位はわるくない。『大分県方言の旅』第3巻には、「中津市旧市内」のことばとその説明、

[アンタ行クデ], [ウン, 天気ガイーデーワシモ行クデー] という会話の中で、最初の [デ] は [ますか], 次のは [ので], 最後のは [ますよ] の意味になります。

が見える。最初の「デ」は問いの「デ」である。「天気ガイーデー」の「デー」が「ので」であるのなら、この「デ」は、接続助詞の「デ」である。(接続助詞系の「デ」文末詞が認められることになるのか。) 上の最後の「デー」は、告知の「デ」と見られる。県下に、告知の「デ」がさかんである。国東半島の例には、

○スイチョル [↑]デー。

すいてますよ。(すきですよ) (中女間)

などというのがある。告知の「デ」の中に、「そがなことは ナカロー デ。」

(そんなことはなかりょうよ。)などの、想察の告知もある。告知の「デ」が、「レ」音に転じてもいる。『全国方言資料』第9巻の「大分県臼杵市諏訪津留」の条には、

f マー タノンマスレ カヒテ クランシ

ああ 頼みますよ。 貸して ください、

というのが見える。問いの「デ」もある。「イカソ [↑]デー。」(行きませんか?)は、中津市での一例である。県下の「デ」文末詞の複合形には、「ンデ」などが見られる。大分県下にさかんな「デ」文末詞の状況によく接続するのが、中国地方(——直接的には山口県地方)の状況である。

四 中国地方の「デ」ほか

中国地方全般に、「デ」文末詞がさかんである。その、おこなわれる品位は、低くはない。ときによっては、「デ」文末詞が、親愛敬語法とでも言いたいような役をになっている。用法上、なかんづく隆盛なのは、告知表現の用法である。

山口県下の「デ」については、品位が低いと言う人もあるけれども、一般には、「多少ともていねいである。」と見ることができよう。(——これは、広く関西地方についても、言ってよいことかもしれない。一つ、「デ」文末詞にそのような言語感情のこめられているのは、方言世界での、おもしろいできごとである。)本県下に広くおこなわれる告知ないし説明の「デ」の、周防島嶼での一例は、

○シラン [↑]デー。

知らないよ。

である。祝島には、

○マー [↑]ケンチジガ クル ントイデー。

まあ、県知事が“来るんじゃそうじゃ”。

などの言いかたがある。「トイ」文末詞のもとに「デ」があって、めずらしい複

合形が見いだされる。県下に、さそいの「デ」もかなりおこなわれている。問いの「デ」も、周防によく見られるようである。『全国方言資料』第5巻の「山口県都濃郡都濃町」の条には、

mオバサン キツ クレンデー

おばさん 来て くないかね。

などがある。『周防大島方言集』には、「デ、デエ」が、「疑問の助詞『か』」に当る。」とされている。「デ」の言いかたが、あるいは告知になり、あるいは問いや応答になるさい、「デ」表現の音調が、よく、その表現差標を示すであろう。本県下の、「デ」に関する複合形の文末詞に、「デヤ」「デヨ」があり、「ソデ」「モンデ」がある。

○チョット イッテ グル デヤ。

ちょっと行ってくるよ。

は、「デヤ」の一例である。

○オマイ イッチャー イケン ソデ。

おまえは行ってはいけないよ。

は、「ソデ」の一例である。

広島県下には、告知の「デ」のおこなわれることが、別して優勢であろう。親近の感をもってこれがよく用いられている。

○アノ ヒトガ エラカロー デ。

あの人がつらかるうよ。 (中女)

ともなれば、これは想像の告知である。安芸地方に、「マー、マチチュー モノワ エー モン デ トモータ。」(まあ、町というものはいいものよと思った。)というような言いかたも聞かれる。これの「デ」は、告知性はよわい。「デ」の頻用のうちに、こういう用法もできているしだいかな。県下に、さそいの「デ」もある。「シットラーデー。」(知ってるさ。)などという反抗・反駁の表現での「デ」は、文末詞の「デ」ではない。打消の「いで」助動詞を考えしめるものである。本県下の複合形には、「デヨ」「ンデ」などがある。

岡山県下にも、「デ」の、告知本位の用法が多いだろう。他県下でと同様、小さい人が「デ」をつかうと、やわらかみややさしみが感得される。県北での、さそいの「デ」の一例は、

○エンリョ センド クラー デー。

遠慮しないでたべようよ。

である。備中島嶼の、香川県にもっとも近い真鍋島で聞いた、夜のあいさつことばには、「オシマイ デー。」がある。ほぼ、「おしまいですか？」にあたるうか。本県下の複合形に、「ンデ」などがある。

島根県下にも、告知本位の「デ」がよくおこなわれている。

○エンヤダ デー。

いいやだよ。(いいえですよ。)

は、島根半島北岸での一例である。出雲南部で聞いた老女の発言には、「コゲナ ジョートーデ ゴザイマス デ。」(こんな上等でございますから。)というのがあった。「デ」接続助詞が認められるのか。すると、当地方の「デ」文末詞については、接続助詞系が考えられてよいのか。それはともあれ、出雲では、「デ」文末詞の「ヂ」形が目される。

○チ [tsü] ートダー ツ[ü]マリャ セザッタ ヂ[i]。

ちっとも“つまらなかったよ”。

などとある。「ヂ」文末詞のおこなわれることはさかんなようである。『言語生活』第三十五号に載せられた「全国珍語奇語集」の「島根県」(岡義重氏)の条には、

もうはえこーからジーちこたえわんジ (もうこれからはジーということ
は言わないよ)。

というのが見える。藤木敦氏は、“「デ」をつかうと、村の人は、「ちょっとえらそぶっとる。」と言う。「デ」は、議員さんとかなんとか、見識のある人がつかう。”と語られている。「ヂ」の用例を提示せられた藤木氏に、「デ」「ヂ」対応の観念は明らかである。神部宏泰氏は、出雲での、

○オデーサン オラッシュャンス [↑]デ。

おじいさんはいらっしゃいますか？

などの問いの「デ」を教示せられた。出雲での複合形には、「ヂ[i]ネ」がある。「マッチューマシ[i]タ ヂ[i]ネー。」は、“まっておりますよ。”であるという。石見には「デヨ」がある。出雲に、「ヂ[i]ヨ」もある。隠岐に「ヂヤ」「ヂヤ」「ヂャ」があつて、注目される。(神部宏泰氏の教示による。)[「デ」単純形もおこなわれているという。

鳥取県下にも、告知の「デ」がよくおこなわれている。因幡奥の一例は、

○ユガイナ ホータイワ オイシャサンデモ シテ ゴザリャー セン [↑]デ。

こんなほうたいはお医者さんでもしてらっしゃりはしないわよ。(若い母おやが、その子のけがをしたのへ、ほうたいをしてやりながら、いばって言う。)

である。さそいの「デ」もあり、問いの「デ」もある。因幡で聞いたものに、「アンダイー デ。」(脚がだるいから。)との言いかたがある。——「デ」接続助詞が認められるのであろうか。とすれば、「デ」文末詞にも接続助詞系が考えられることになる。本県下での複合形には、「ンデ」「ダデ」「ヂヤ」などがある。

五 四国地方の「デ」ほか

四国地方も「デ」文末詞のさかんな所であるが、わけても愛媛・香川・徳島の三県に、これが隆盛である。用法上、問いの用法の多いのは、四国がわの大きい特色とされよう。その問いの用法のばあいの「デ」の品位は、かなりよいものである。

愛媛県本土部では、問いの用法がさかんである。——主として中予以東に隆盛であろうか。「イク デー。」(行くかね?), 「クレル デー。」(くれるかね? くれますか?), 「ユー デー。」(言う? 言いますか?)などと、かんたんな言いかたがよくおこなわれている。問いにはなつても、文アクセントは下降調

にもなるのが、特徴として注目される。南予の北部での一例は、

○センセイ ドー デー。

先生、どうですか？ (中男→土地の教師)

である。「マダ デー。」(まだですか?) などとも言われている。南予の一男性の語ったことばには、“[アンタ ドヨイ イク ンデー。](あんたどこへ行くの?) は、松山付近で言う。”というのがある。愛媛県下に属する内海島嶼の中の大三島では、私など、「デ」を問いにつかうことがない。——告知の「デ」ばかりがおこなわれている。しかもこれは、上昇調の文アクセントにおわるものである。品位は、かなりよいものである。愛媛県中予などにも告知の「デ」が見え、南予の「愛媛県北宇和郡津島町」(『全国方言資料』第5巻)にも、

m……… カブリャ フラレンデー

いやとは 言えないよ、

などが見える。県下の複合形には、「ノデ」「ンデ」が見られる。「ドヨイ イク ンデー。」(どこへ行くの?) は、東予での「ンデ」の一例である。南予の北域の一隅には、

○イケン ガヂヨ。

いけないよ!

などの言いかたもおこなわれている。「デヨ」の「ヂヨ」が見られる。県東部には「ワデ」もあるのか。

高知県下は、「デ」文末詞のよわい所のようなものである。愛媛県南部(南予)によわいのとつながるものが、ここに見られるというわけか。一知友は、県下の「ゼ」文末詞について、“「ゼ」は、ときに「デ」になる。”と説明してくれた。しかしながら、私の、県中部海岸での調査例、

○ノザキラ ドー デヨ。

“野崎のうちはどうかね?”(下宿に適当な家のことを言う。)

(老女→中男)

などでの「デヨ」は、本来の「デ」と「ヨ」との複合形かと思われる。この地

で聞いた単純形「デ」の例は、

○ソ^ナコト シタラ イカ^ンデー。

そんなことをしたらいけないよ。(中学生二女)

である。「デ」があるとする。これは、「ゼ」によく対応するものにちがいない。県西南部の幡多郡地方では、「デ」のおこなわれることがあまりないか。

徳島県下には、問いの「デ」のおこなわれることが、きわめてさかんである。「エキ^デー。」(駅ですか?)「ア^エーヘ^ナンダ^デー。」(会えはしなかったね?)などと、「デ」が、きわめて日常적으로おこなわれている。(「レ」になることもあるのか。)

○コ^ッチー イレトコ^ーデ。

こちらへ入れておきましょうか?(ていねいな発言) (妻→夫)

○ム^キマシ^ョーデ。

皮をむきましょうか?(初老女→藤原)

などは、県南での、もっともしぜんに用いられている「デ」の例である。問いの「デ」のはばは広く、したがってまた、品位にも、多少の上下がある。問いの「デ」が、問いの形による勧誘あるいは命令などにもなっている。

○オ^キャクサンガ オイ^デトル。コン^パンワ イ^ワン^デ。

お客さんが来てらっしゃるのよ。「こんばんは。」ってお言いなさい。は、後者の一例である。「デ」を告知に用いることはあまりない。ところで、『阿波言葉の辞典』には、

ソコヘオイトキデ [そこへおいておきなさい]

などの言いかたが見え、また、

オヤ^ニコーゴザンス^デ[特] あいさつ語 今日^はは雨^模様^{です}ね

などの言いかたが見える。——告知の用法としては、かなり特定化した用法と見られようか。一般的と云うる告知では、「デヨ」の複合形が広く愛用されている。

○シ^ェンシ^ェガ コ^ラレマシ^タデ^ヨ。

先生が来られましたよ。

○シェン^シェガ キテ ツカハ^ッッタ デヨ。

先生が来ていただきましたよ。

など、「デヨ」は県下にさかんである。さて、この「デヨ」が「デヨ（ジョ）」にもなっている。

○ソユ コトー シリマ^セン ジョー。

そういうことは知りませんよ。

など。土地の有識者は、この文例カードに注記して、「シランデヨ」と書いてくださった。「イケ^ン ジョ。」（いけませんよ。女先生→児童）、「ソー^ジョ。」（そうだよ。そうですよ。）など、「ジョ」は、「デヨ」から、しぜんにできてきているらしい。「ジョ」の表現価は、厳密に言えば、「だよ」の表現価と「ですよ」の表現価との中間くらいのところに位するものか。本県下の、「デ」に関する複合形の文末詞として、最後にあげるべきは、「ンデ」「ンデヨ」「ンデイヨ」「ワデ」、「デイナ」「デゾ」「デカ」「デカイ」などである。

香川県下にも、問いの「デ」がよくおこなわれている。「アレ デ。」（あれですか？）「コンビラ デー。」（金比羅ですか？）などとある。「ソー デ。」（そうですね？）は、問いの態の応答である。県下に、一方、告知の「デ」もよくおこなわれている。——「ゼ」に相応している。

○モー、パン モッテ アルイ^タラ イカン デー。

もう、パンを持って歩いてはいけませんよ。

（若い母→おさな子）

は、県中部での一例である。「デー」が「レー」になまることもあるのか。（定かではない。）本県下の、「デ」に関する複合形の文末詞には、まず、「ゾデ」がある。

○ホンマ ゾデー。

ほんとうだよ。（老女→中男）

などと言われている。

「ゾデー」が「ゾレー」にもなっているのか。「タ^カイ コト ナイ^ンゾレー。」（高いことはないんですよ。）などとある。県中部では、「「レー」は女がよくつかう。男なら「ゾ」でできる。」などと言われている。「「ゾ」でおわるのは、身うちやしたいものに。」などと言われているのからすると、「ゾレー」の「レー」は、「デー」に等しいものと解することができるようである。それにしても、ここでは、一方で、「レー」に「ワレ」形の「レ」を思ってもみなくてはならないか。

「カデ」複合形がよくおこなわれている。「カレ」もある。「ア^ッタ カ^レー。」（あったかね？）などと言われている。

同地で、私は、老男の、「ゴ^{バン}チョーレ ノー。」（五番町でねえ。）との発言も聞いた。「レ」は「デ」であろう。

複合形の「ガデ」もあり、「ンデ」もある。別に「ワデ」もある。愛媛県東部との連関が思われる。

四国地方の助詞系「デ」文末詞は、格助詞系のものであろうか。「デ」が、明確に、接続助詞としての用法を見せることは、四国に一般的ではなからう。

六 近畿地方の「デ」ほか

近畿地方に、「デ」文末詞のおこなわれることはさかんである。これは何系のものであろうか。中部地方に、「わたしは 達者だデ、……………」などと、明白な「デ」接続助詞がおこなわれているのに対しては、近畿地方では、「わたしは 達者やさかい（さかいに）、……………」などの「サカイ」ことばが一般的であろう。もっとも、「サカイデ」などともあって、「デ」が問題視される。「ア^カンヤ デ。」（いけないよ。 制止あるいは否定）などの「デ」は、どういうものなのであろう。これだけのものと言うならば、「デ」は、接続助詞系のものかとも見られる。

ともあれ、近畿には、問いの「デ」が、比較的よわいようである。四国のばあいとはちがう。

兵庫県下に、問いの「デ」はよわい。告知の「デ」がさかんである。「アカヘン [↑]デ。」(だめだよ。)などは、代表的な言いかたであろう。告知して念をおす。全県下に告知の「デ」がさかんであり、ことに但馬には、これが隆盛である。

○ムカシノ コッチャ [↑]デー。

むかしのことですからね。

は、淡路での一例であり、

○ヒトガ ワラワンス [↑]デー。

人が笑いなさるよ。(そんなことを言ったら。)

(年寄りの女のことば)

は、播磨中部での一例である。

○ツギー タノンマス [↑]デー。

つぎでたのみますよ。(中男→女性車掌)

は、但馬での一例である。但馬南部には、「イロー [↑]ジー。」(さようなら。子どもの辞去のことば)など、「デ」の「ジ」もあるのか。本県下の複合形では、「ンデ」「デカ」などが見いだされる。

大阪府下でも、おもに告知の「デ」が注目される。

○イヤヤ [↑]デー。ハマチャン。

いやだわよ。はまちゃん。

などがある。「ハヨ [↑]ジー デ。」(早くしなさいよ。)などがあるのを見るかぎりでは、「デ」に接続助詞系を想定することはむずかしい。『大阪弁の研究』には、

「買ひで」は「買ひィな」よりも少し丁寧な物云ひである。

とある。府下の問いの「デ」としては、「ソレ ナン [↑]デー。」(それなあに?)などの言いかたがあろうか。南河内郡下で聞いたものには、

○ナンデレ [↑]デー。

“なぜか? どうしてか?”

との言いかたがある。「ナンデン デー。」(“どうしてですか?”)というものもある。

○ドコイ イクン デ。

どこへいくのか。(青年・男同士)

は、山本俊治氏の「大阪方言における文末助詞(池田市のことばを中心として)」(『方言研究年報』第一卷)に見られるものである。大阪府下の複合形には、「ンデ」などがある。

和歌山県下では、全県下に、告知の「デ」のよくおこなわれているさまが見られる。「デ」は「よ」と言いかえられる。県中部の一例は、

○ココ アンタ ヒトリシ アルイテ ミナ。ヨッポド タイクツナ デ。

ここをあんた、ひとりで歩いておみよ。よっぽど退屈だよ。

である。「アカン デー。」(いけないよ。)などは、慣熟したものである。「何々ヤ(だ) デ。」の言いかたも、全県的なものである。問いの「デ」もおこなわれているのか。「もらったの?」が「モータ ンデー。」と言われている。「デ」が、県南部寄りの地域では、[dze]とも発音されている。

○イヤセン デ[dze]ー。

言やしないよ。

などとある。「デ」が「ジ」ともあるか。『和歌山県方言』にも、

アルジイ あります。

などが見える。「ジ」に関しては、「デ」からの「ジ(デ)」か「ゼ」からの「ジ」か、定かでないものがある。県南辺の、

○チガウ リー。

「チガウ デ。」“ちがいますよ。”

とあるのでは、「デ」の「リ」がくみとられようか。本県下の、「デ」に関する複合形には、「ンデ」「デヤ」「デヨ」などがある。

三重県下にも、告知の「デ」が広くおこなわれている。志摩半島での一例は、「オラ イク デ。」(わしはもう帰るよ。)である。「何々ヤ デ。」も、県下に

広く見られる。県南には、「 \sim ジャ デ」がある。『全国方言資料』第4巻の「三重県北牟婁郡海山町」の条には、

fアー マー ヒルジャ²⁾デー

ああ、もう 昼ですよ。

2) [de:]

とある。県下に、問いの「デ」もおこなわれている。伊勢南部例は、「ド $\overline{\text{コイ}}$ イク $\overline{\text{ンデー}}$ 。」(どこへ行くの?)などである。県南紀州の内には、

○ド $\overline{\text{コイ}}$ イク $\overline{\text{ンデー}}$ 。

“どこへ行くのかい。”(同等以下に)

というもある。「 $\overline{\text{ソーヤ}}$ $\overline{\text{デー}}$ 。」(そうやで。)などともある。なお、紀州尾鷲地方のことばでは、

○ $\overline{\text{タカイ}}$ $\overline{\text{リー}}$ 。

高いですよ。

などというのものもあるのか。複合形には「 $\overline{\text{ンデ}}$ 」があり、「 $\overline{\text{ワデ}}$ 」がある。また、「 $\overline{\text{デヤ}}$ 」があり「 $\overline{\text{デヨ}}$ 」がある。「 $\overline{\text{デヨ}}$ 」が「 $\overline{\text{ジョ}}$ 」にもなっているか。県下紀州西辺の「 $\overline{\text{ジョ}}$ 」例は、

○ $\overline{\text{アノ}}$ $\overline{\text{ヒトワ}}$ $\overline{\text{ジョーズ}}$ $\overline{\text{ジョ}}$ 。

あの方はじょうずよ。

である。「 $\overline{\text{ワデ}}$ 」の例もかかげる。

○ $\overline{\text{スカレテ}}$ $\overline{\text{イル}}$ $\overline{\text{ワデー}}$ 。

(村内くんは) すかれているんだよ。(告げる。)

県下の「 $\overline{\text{イツデモ}}$ $\overline{\text{ヨロシードスデ}}$ 。」(いつでもよろしいですから。)といったような言いかたによるかぎりでは、「 $\overline{\text{デ}}$ 」文末詞は、接続助詞系のもと思われる。「 $\overline{\text{フベンヤデー}}$ 。」(不便だから。)などというのからも、「 $\overline{\text{デ}}$ 」文末詞の接続助詞系が思われやすい。それにしても、問いの「何 $\overline{\text{デ}}$?」などというようなのを見ていると、このようなのは、かならずしもすぐには接続助詞系を思わなくてもよいありさまと解される。

奈良県下にも「 $\overline{\text{デ}}$ 」文末詞のおこなわれるさまがいちじるしい。「 $\overline{\text{アカン}}$ $\overline{\text{デ}}$

一。」(いけないよ。)といった調子である。男女に「デ」がつかわれている。「達者だよ。」は「タッシャヤ デ。」である。問いの「何 デー。」などもおこなわれている。複合形「ンデ」による問いもおこなわれている。複合形には「デヤ」「デヨ」もある。

京都府下の全般に、また、「デ」文末詞がよくおこなわれている。丹後での例は、

○ドコデモ アルデ シュー デー。

どこにでもあるでしょうよ。(中男→藤原)

などである。丹後にも「アカン デー。」の言いかたがある。「〜ヤ デ」の言いかたも、府下に広くおこなわれている。(北の丹後にもある。)さて、丹後北岸での「ジキニ アガッテ シマウ デー。」(くなすやきゅうりなどの木が>すぐにあがってしまうので。)などの言いかたを見るにつけても、「デ」文末詞の接続助詞系であることが思われる。府下に問いの「デ」もある。

○ネーサン。ドー スル デー。

姉さん。どうする？ (小女→二十歳代女性)

は、丹後での一例であり、

○ユーベ カガ イヤシタ デー。

ゆうべ蚊がいましたか？ (若妻→夫)

は、京都市内での一例である。府下の複合形には、「デヨ」などがある。

滋賀県下にも、広く、「デ」がおこなわれているふうである。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県犬上郡多賀町萱原」の条には、

m ホンデ モ オータスカリヤガ タノム デー

それでは もう 大助かりだが、 頼むよ。

とある。土地ことばとしては、「デ」は、わるいことばではない。湖西中部の一例、

○ココニ オッタラ アカン デ。

ここにいたらいけないよ。

も、やさしい言いかたである。土地の人も、“「デ」は、「ゾ」よりはやさしくひびく。”と言っている。「～ヤ デ」の言いかたも見られる。「デ」は、おおよそ接続助詞系のものであろうか。

近畿地方に広く見られる「デ」文末詞は、総体に、「ゼ」に比肩せられるものである。「ゼ」との対応を考える時、「デ」に、低くはない品位が想察される。そうはいっても、用法しだいということもある。

七 中部地方の「デ」ほか

福井県下の「デ」状況は、近畿地方によく接続するものである。(当地方の「デ」の出自も、接続助詞「デ」ではないか。)

○ムカ^アシヤ ミチ ウラ^アデシタ デー。

むかしはみんな(自分のことを)「ウラ」と言っていましたよ。

は、若狭での一例であり、

○チーモ シラン^ア デ。ポーワ。

何も知らないよ。ぼくは。(小男→大男)

は、越前福井市方面での一例である。「～ヤ デ」の言いかたもよくおこなわれている。越前で、「ホン^アトヤ ザ。」(ほんた。)と「ホン^アトヤ デ。」とでは、後者のほうが品位がよいという。本県下の、「デ」に関する複合形には、「ンデ」「デヤ」「デヨ」などがある。

石川県下・富山県下となると、「デ」のおこなわれかたは、福井県下でのほどではないのか。それにしても、石川県下に、「ロ^アクジューヤ デー。」(六十歳だよ。)などと、「～ヤ デー」もおこなわれている。能登での「デ」例は、

○ワシ^アチュー デ。

自分のことを「わし」と言うよ。(小男→教師)

などである。『全国方言資料』第8巻の「石川県輪島市海士町」の条には、

m………… コレア オヤエ イワレンデ

これは¹⁾ 親にも 言われぬよ。 1) 夜遊んで歩いて、昼疲れたことを指す。

というのが見える。石川県下にも、富山県下にも、おもに告知の「デ」がおこなわれているのか。

○オクスリヤサン アリマス デー。

おくすり屋さんがありますよ。(藤原の問いに答えてのことば)

(老女)

は、富山県中部での一例である。富山県下で、「ナーン ツカイマセンガヤデー。」(“いいえ、さしつかえありません。”<私どもが、「おじゃまいたします。」とあいさつしたのに対する返事>)などの言いかたがおこなわれている。「ガヤデー」は「のだから」であるという。(土地有識者教示) 当地の「デ」文末詞も、接続助詞系の文末詞とされようか。

新潟県下には、わりによく「デ」がおこなわれているのか。「ゼ」が「デ」に転じたとする考えもある。県下南寄りでの、文末詞色の明らかな「デ」例は、

○オキナエデ イー デー。

起きなくていいよ。(中女)

である。「～だ デ」の言いかたが、比較的よく見られる。『全国方言資料』第2巻の「新潟県中魚沼郡津南町結束」の条には、

f…………… ロクニン シンダテンダデー

6人 死んだということですよ。

などとある。(——当地方の「デ」は、接続助詞系のものであろうか。) 県南辺、秋山郷のことばには、「ハー ソーインデスデ (はあそういうんですよ。)」などがある。(押見虎三二氏教示) 県北の粟島に関しては、剣持隼一郎氏の「粟島浦村の言語(-)」(『高志路』201号)に、「ンゴデー (行こうぜ)」というのが見える。佐渡では、「デ」の「レ」が聞かれるのか。『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡畑野村後山」の条には、

f…………… ローレイ

どうですか。

とある。本県下の、「デ」に関する複合形には、「デヤ」「デヨ」などがある。

中部地方の南がわに転じると、接続助詞系の「デ」文末詞がよくうかがわれるようである。岐阜県下に、それがさかんである。本県下に、告知の「デ」のおこなわれることがいちじるしい。美濃北部での一例は、

○ハタサモ、オドリマシタ デー。

畑佐も、おどりましたよ。(むかしの盆おどりの話し)

(老女→藤原)

である。岐阜市一老女の発言例は、「ドーノ コーノ ナュー アルキマス デ。」(しゃにむにあっちこっち歩きますわよ。)である。県下で、「～ヤデ」の言いかたもさかんであり、「デ」接続助詞が明らかである。「～ジャデ」もある。(要するに、接続助詞「デ」がよくおこなわれている。)県下に、問いの「デ」もある。複合形には「デナ」などがある。『全国方言資料』第3巻の「岐阜県吉城郡古川町黒内」の条には、

f ミチガエルグライヤジュナ ワカエウチト ミルトナーア

見違えるくらいですよね、 若いときと 比べてみますとね。

というのが見える。

愛知県下の状況は、岐阜県下によくつづいている。接続助詞「デ」がよくおこなわれており、この「デ」で終止する文表現の発せられることが多い。

○ケブリガ ホーボカラ デルデー。

煙が方々から“出るから”。(中女→幼男)

など。したがって、「デ」が遊離して、やがて文末詞化することにもなったはずである。谷亮平氏の「豊橋方言の音声と語法」(『方言』第二巻第四号)には、

イッテミナワカランデ 行って見なければ分らないのでね

とある。

静岡県下の状況も、愛知県下によく似ている。「～ダデ」や「～たデ」の言いかたがいちじるしい。そういう「デ」が、やがて、

○ダーレダッテ ヤリャー デキマス デー。

だれだってやればできますから(できますよ)。

のようなかたちであらわれると、文末詞を思わせるものになってくる。『全国方言資料』第3巻の「静岡県掛川市上西之谷」の条には、

fアーン エーノダデ コドモモ コレデ ヨロコブデ
はあ、 いいものだから こどもも これで 喜びますよ。

とある。伊豆半島南部で聞いた「ヤ^ーダ^ー デ^ー。」は、「いやだよ。」と説明された。

長野県下にも、「〜ダデ」（だから）の言いかたがあり、その「デ」接続助詞が、「アトカラ イク^ーデ。」（あとから行くから。）のように用いられている。当地方に「デ」文末詞がとらえられるばあい、それは接続助詞系とされる。『全国方言資料』第2巻の「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条には、

mイッテクルデ
行って来るよ。

とあり、「デ」を「よ」ととっているのが見られる。『信州上田附近方言集』にも、

デ（助） 「ゾ」にあたる語。

の記事が見られ、『下高井の言葉』にも、

イコウ^ーデ 行きましようよ。人を誘う意味を強めるためのもので、同意を求める気持も入っている。

との記事が見られる。ところで、『信州方言読本 語法篇』には、

北信の川中島地方では、この「です」に当たる方言に「で」があります。（中略）ちようど「です」に当たる云い方なのでありますが、「です」から「で」となったと考えるよりは、「でごわす」、「でやす」から移って「で」となったと考える方が、この地の方言状態から見て自然であると思われま
す。

との解釈も見える。いずれにもせよ、人々も、「デ」文末詞を認めている。北信方面の「ソ^ーダ^ー ジ^ー。」（そうだよ。）などの「ジ」は、「ゼ」からのものか、「デ」からのものか。松本市付近では、「ジ^ー」は目上に言われるものだという。

この点からするかぎりには、「ジ」は、「デ」からのものかと察せられる。本県下の、「デ」に関する複合形の文末詞には、「デヤ」「デヨ」などがある。

山梨県下にも、接続助詞の「デ」がよくおこなわれており、甲府市方面には、問いの「デ」がよく見られる。

○ドー シタ デー。

どうしたの？

○オトーサン ドコイ イッタ デー。

お父さんはどこへ行ったの？

などとある。山梨県西南部での、

○タビー。イクモン デー。

たび？いく文なの？（店の主人→買いに来た男性）

も、問いの「デ」を示すものであろう。奈良田方面には、

f………… ゴムシンドーニ キテ クレデ

お願いだから 来て 下さい。

のような「デ」がある。（『全国方言資料』第2巻「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」）「クレデ」（ください）の言いかたがよくおこなわれているようである。

——命令あるいはあつらえの表現になっている。「西山村方言の語法」（『（山梨）西山村総合調査書』）には、

奈良田では依頼を表わす終助詞デーがあるが、湯島にはない。

との記事があり、

このデーは依頼を表わすのに用いる。目下の者に対して「起きろ」と言って寝ているのを起すのに対して、目上には「起きデー」と言う。更に依頼の心をこめては「起きて クレデー」となるのである。

との記事もある。奈良田の「デー」は、よく、人々に注意されているようである。『甲州方言』などに、

墨で書かで一。（墨で書きなさい。）

のような「デー」の用法も見える。奈良田で、「デヨ」などの言いかたもおこ

なわれているらしい。

八 関東地方の「デ」ほか

総じてこの地方には、「デ」が、さまではおこなわれていないようである。
——中部地方の比ではなかろう。

東京語では、「～ダデ、」などという「デ」接続助詞は、通用されていないであろう。これとともに「デ」文末詞も、一般に、見いだされないようである。「どうどうしてるんで、どうどう。」というような言いかたがあっても、「それはなあに？」の意の「ソレ ナン [↑]デ。」などの言いかたはおこなわれていないであろう。

ところで、神奈川県下西部では、

○コンダナ ヨカッタ [↑]デ。

こんどのはよかったよ。(消毒の薬のこと) (老男→中男)

などの言いかたを聞いたことがある。「デ」は、告げる「デ」とでも言いたいものようであった。

伊豆諸島には、問題としうる「デ」があろう。『全国方言資料』第7巻の「東京都利島村」の条には、

m…………… ミズニー ⁴⁾ コマッタデ

水に 困ったよ。

4) {mid²u}

があり、また、

m…………… ドコエ デテキタデ

どこへ 出て来たのか。

がある。伊豆大島にも「デ」がある。「三宅島及び御蔵島方言の語法」(『国学院雑誌』第五十九卷第十・十一号)に見える、

神着方言で〔ワレガモンダジヨ〕と言うと、坪田方言と異なり「お前のものだよ」の意味である。

の記事にも、「デヨ」相当の「ジヨ」を見ることができようか。

「千葉県安房郡富崎村布良」(『全国方言資料』第2巻)には、

fデャー ノム ゴドモ ナラネッペデー

それでは 飲む ことも できないでしょうよ。

などというの見える。やはり問題としうる「デ」である。私は、上総南辺で、老女の「アッダー [↑]デー。」(あれだデ。)というのを聞いたことがある。——「デ」はどういう「デ」であろうか。

埼玉県下は、西部の「埼玉県秩父郡両神村」(『全国方言資料』第2巻)の条に、

f………… ソコントカー ツエーモンダデ オマー

その点は 強いものですよ、 あなた。

などというの見える。『埼玉方言の語法』では、「ソラ イグデ。」などが「秩父・児玉」のものとされている。県東部の調査で私が聞きとめたものには、

○ソレ ナン [↑]デー。

それなあに？

○ソーダンベ [↑]デー。

そうだろうよ。

などがある。人は「デー」を、“つよめていることば”だとし、対等以下につかうものだとしている。(とはいいながら、小学校児童が先生に向かって、「センセー。オレ [↑]ネー。オハナシト 何々ト、カミジバイト ヤル [↑]デー。」などとも言っている。)「デ」について、“「ゼ」と似ている。”“「ゼ」のほうが上品。”“在の人が、「デ」のほうをよく言う。”などの説明も聞かれた。県下の方言文献にも、この種の「デ」が見える。

群馬県下に、また、「デ」がかなりおこなわれているのか。諸方言文献に「デ」が見え、『全国方言資料』第2巻の「群馬県勢多郡大胡町」の条には、

mイマ ケー¹⁾ッチタデー

いま 帰って来たぜ。1) [keit:ʃʈadeː] と聞こえる。[~teki~] をひとつづきに発音した結果。というの見える。私が前橋市近くで聞いた例には、

○ジューゴフンの あいだに ヨマナクチャ ダメダ デ。

十五分のあいだに読まなくちゃだめだよ。(一人の、読まない人に言う。)

などがある。『桐生地方に於ける方言訛語調査』には、

いムで(句) 「よいですよ」の意。

との記事が見える。斯林不二彦氏教示の、桐生ことばでの例は、「だめだで一。(おい駄目だぞ。)[うん、だけどきたないで。](ウン、だけどきたないワヨ。)などである。

栃木県下・茨城県下には、言うべきものがあまりなさそうである。関東地方も、とかく、西寄り三地帯が問題になるのか。

九 東北地方の「デ」ほか

単純に「デ」文末詞のおこなわれることは、いちじるしくない。ただし、次節に述べる「デァ」などはそうとうによくおこなわれているから、かれこれ合わせると、東北地方に、助詞系の「デ」は、なにかとよく見られることにもなる。

今は、単純に「デ」文末詞と見られるものを追跡してみよう。

『福島県棚倉町方言集』には、

「はや、おっつけ来べでえ」

「そおだごと、すんなでえ。そおでねえんだでえ」

などが見える。「デー」文末詞であろうか。いわゆる浜通りには、注意すべき「デー」があるのか。高木稲水氏の「磐城方言考(二)」（『方言』第五卷第三号）には、

おっきなはらしたっけがら、まだ おどめかがえだんだっぺえで（大きな腹をしてみたやうですから、また妊娠したのでせうよ。）

とある。——「〜ペー」のあとに「で」がきている。

『山形県方言集』には、

俺に菓子ちつとばかりくれで。(僕に菓子を少し許り下さいよ。) 庄内, 最上
村山

んで行かうで。(さうで行かうよ。) 庄内, 村山
置賜

わえそれせだがで。(お前それが出来るか。) 庄内

などの「デ」文末詞例が見える。庄内地方には、こうした「デ」文末詞がよくおこなわれているらしい。『全国方言資料』第1巻の「山形県東田川郡黒川村」の条には、

mエマ ¹⁾キタッデ

いま 帰ってきたよ。

1) [kçita]

とある。本県下の、以上のような「デ」例や、さきの福島県下の「デ」例を見るにつけても、東北地方での「デ」文末詞には、地方的特色の顕著な用法が認められる。「デ」の出自は、何と見たらよいのであろうか。『山形県方言集』には、

そげなこと、おら、父さ、やんにやえじ。(そんなこと僕は父に言はれませんよ。) 村山
置賜

というもある。「よ」とされている「じ」は、「で」の転でもあるのか。「じ(ぢー)」は、他の方言文献にも見える。

『仙台の方言』には、

「まいたりまいたり遅刻もしたつかえんから、今日は早目に出す^てで」(毎回遅刻もしたくないから、今日は早目に出ませうよ)

などの「デ」例が見える。たしかに「デ」文末詞がおこなわれていよう。さて、この仙台のは、何系の「デ」か。

秋田県南部の横手市域で私が聞いたことばには、

○ハイサ ヘーッテ ダンス[ü] [↑]デー。

(衣類の端が) 灰にはいっていますよ。(朝、宿のいろりばたで)

(小学校低学年女→藤原)

というのがある。「デー」との訴えがなされているのであろう。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条には、

マイヤ ソズ マズ ババ ウチサ カエルデ ハー

いや それでは まあ ばあさん、家に 帰りますよ はあ。

とある。こうした「デ」が県北にもおこなわれている。『秋田むがしこ』には、
「村の人達さなんもねえども誰れも鼻風邪^{かぜ}一つひかねえように、まめで暮
すように、おれの方で、^ほ気付^(そ)けでやるでえ。」

というのなどが見える。男鹿半島で聞いたことばには、

○ソク[ü]タラ コトー ハッヅ[ü]クガナ デー。

そんなことするなよ。

というのがある。“「デー」はつけことばで、はぶくこともある。”とあった。
『秋田方言』には、

あにゃも来るでお（兄も来るといふことだ）

などの「でお」の指摘がある。『秋田むがしこ』には、^(子 供)「わらしこ ^(出来ないと言うも)出来ねでお
のね」などの言いかたが見える。「でお」は「でおの」からのものではなかるう
か。『秋田方言』には「でおな」もある。「という」にあたる「で」は、本来、
「て」であろうか。『秋田方言』に、「でおな」についての「ってね」の言いか
たも見える。おなじく『秋田方言』に「そだじ」も見えるが、この「じ」も、
「といふ」に言いかえられている。したがって、ここに「デ」文末詞のないこと
が明らかである。

岩手県下で聞かれることばに、「トッテ ケデ」(とってくれ)などがある。
「ケデ」は、「デ」文末詞をとらしめるものではなくて、「くれ、おくれ」の意
の「ケレ」を思わせるものであろうか。

青森県「南部」地方の南方で聞いたものには、「コレ ヤッテデ ケデ」(こ
れをやっておいておくれ。)[ヨンデ ケデ。(読んでくれ。)]などがある。土
地の人は、「ケデ」と「ケロ」とを対照した。ところで、『津軽方言えはがき』
第一輯には、つぎのような会話が見える。

与作「ソエデ、ナニ、カルヤデ」それで、何を買うのか

倉吉「タゴ、カルヤデ、ナ、ヤー」尻を、買うのさ、君は、さ

与作「ワナ、ベンヂャ、カルヤデ」僕か、スケートを、買うのさ
 「デ」文末詞が認められよう。私が県東部の八戸市で聞いたことには、「ワー
 デ ネー デ。」(わしではないよ。)というのがある。「デ」はどういうものな
 のか。「デ」文末詞がとりあげられるのだとしたら、これは接続助詞系のも
 のであろうか。(「オラデ ネー。」との言いかたもある。)

十 北海道地方の「デ」ほか

『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条には、

*m*アー シタラー ユッコー ワカシテデリャ ハエッテ ハー スング
 ああ、それでは ふろを 沸かしているなら はいって すぐ
 ナンダネ ネルデ ハー
 なんだね 寝るよ。

というのが見える。鈴木淳一氏教示の稚内弁には、「今日は寒いね。」の「キョ
 ーハ サミイ デ。オイ。」(青年男子)がある。『北海道方言集』には、

そうだで そうですの意

との記事が見え、『北海道風土記 童戯と方言』には、

そでねえで そうではない

などの記事が見える。小野米一氏その他の北海道調査結果にも、たとえば礼文
 島の、

○ネコバ フンダデ。

猫を踏んだよ。(56男→妻)

などが見える。小野氏ほかの調査結果には、「デヤ」文末詞も見える。

十一 おわりに

「デ」文末詞は、広く、全国的に見いだされる。用法の委細を別とすれば、
 「デ」は、西系のものとも東系のものとも言うことができない。

「ゼ」文末詞が「デ」になったこともあるかもしれないが、現実の「デ」文

末詞の広い存在は、本来的な「デ」文末詞の存立を思わせやすい。——「デ」文末詞の分布領域は、「ゼ」文末詞の分布領域をこえてもいる。

「デ」の属は、文末詞界の、一つの大きな項目をなす。しかしながら、今日の共通語習慣の中では、「デ」文末詞が榮えていない。——ほとんど、その地位を得ていないであろう。このことは、「デ[de]」の音感・音効果にも関係があるのではなからうか。おそらくは、将来にわたっても、共通語界に、「デ」ほかの文末詞が優勢になることなどは、ありにくいであろう。

「デワ」など、あるいは「デア」など、「デ」の下に他の特定要素のくる複合形の文末詞を、節をあらためてとりあげる。

第八節 「デア」「ヂ(ジ)ャ」「デワ」

一 はじめに

東北地方に「デア」文末詞がある。「ヂ(ジ)ャ」文末詞と併存する。

この「デア」が、「デ」の属の問題になる。もし、「デア」が、「デ」に関する単純な変化形であつたら、これを前節中に処理したのであるが、「デア」形は、さほど単純なものとは思われない。したがって、私は、これをあらためて考究することにして、ここに第八節をたてた。

すでに古く、私は、この「デア」文末詞（「ヂ(ジ)ャ」文末詞も）をとりあつかっている。とりあえずは、「国語諸方言上の『ダ』『ジャ』『ヤ』（『広島大学文学部紀要』第15号 昭和34年3月）を参照せられたい。

「デア」文末詞とされるものと、これに隣る「ヂ(ジ)ャ」文末詞とは、次のようなものである。——津軽半島例である。

○コレ ヨンデ ケへ[ε] デャ。

○コレ ヨンデ ケへ[ε] ギャ。

これを読んでおくれなよ。

○ナンボ アツ[ü] ジャ。

とつても暑いね。

「デア」と「ヂャ(ジャ)」とが並立している。またの例は、

○ワ コンニャ 下サモ イガネ ジャー。

○ワ コンニャ 下サモ イガネ デァ。

わたしは今夜はどこへも行かないよ。

である。「ヂャ」と「デア」との対応については、土地人が、「デア」「ヂ(ジ)ャ」のどちらもつかうが、「ヂ(ジ)ャ」のほうが格がよい感じがする。「ヂ(ジ)ャ」はあらたまつて言う時のもので、「デア」はくだけて言う時のものである。「ヂ(ジ)ャ」は普通階級よりもちょっと上の知識階級(高等小学校卒業以上ぐらい)がつかうが、全部とまではいかない。若いものどうしの間では「デア」と言う。在郷のほうでは「ヂ(ジ)ャ」と「デア」との区別を意識していないらしく、「デア」のほうがもっぱらおこなわれている。」と教えてくれた。

要するに、この地方に、「デア」「ヂ(ジ)ャ」文末詞の存立することは歴然たるものがある。

私は、以前、これらの文末詞を助動詞系のものかを見た。——用法と外形とにひかれてのことであつた。それにしては、「ダ」の東北地方に「ヂ(ジ)ャ」のあることがふしぎである。助動詞の「ダ」と「ヂ(ジ)ャ」とが両立するわけはあるまい。ものが助動詞然としていても、それは文末詞としての安定形であつて、起源は何か他のものではないか。

私自身の生活語に、

○ワシデモ セージャ。

わしでもするさ。(つよい抗弁)

がある。この「セージャ」は、「せいでは」との言いかたに成つたものではないか。しかも今は、「セージャ」の「ジャ」が文末特定の訴えことばふうのものにもなっている。(p. 124) こんなことを考えるうちに、東北の、訴え力のつよ

い「ヂ(ジ)ャ」についても、「デは」を思うようになった。

近来、「デは」説を教示せられたのは、知友の小林泰秀氏である。氏は、私の年来の疑問を聞きとられたうえで、つぎのように答えられた。“「イグジャー。(デアー。)」は「行きますよ。どうですか。」だ。答えるほうは、「ンダガー。」と言う。「デア」「ジャ」は「では」だと思う。「何々ではどうですか。」というような気もちのものだと思う。”なるほど、「ではどうですか」なのか。

「では」起源だとすれば、「デア」は一種の過程形であり、「ヂ(ジ)ャ」は終着形・安定形である。人々が、「デア」の言いかたよりも「ヂ(ジ)ャ」の言いかたをよいものとするのは、「ヂ(ジ)ャ」が安定形であるのによることか。——できあがった形なら、いかにも、すっきりとした形と受けとられるはずである。(「デア」形であるうちは、人々がとかく、これから、「では」の元郷を思いだしやすかったろう。そのばあいの、やや不安定の「デア」文末詞の感よりは、「ヂ(ジ)ャ」となった文末詞の感のほうがすっきりとしたものだったろう。)

さて、「では」起源が肯定されるならば、本題の「デア」「ヂ(ジ)ャ」文末詞は、まさに「デ」の属のものとされる。「では」に即して言えば、「デア」「ヂ(ジ)ャ」もまた、「デ」に関する複合形の文末詞である。

「デア」に関して、「てや」の説もあることを記しておきたい。

二 東北地方・北海道地方の「デア」「ヂ(ジ)ャ」

問題の「デア」「ヂ(ジ)ャ」文末詞のよくおこなわれているのは、東北地方である。ことに北奥に、これらの存立することがいちじるしい。

わけでも、さかんにこれらがおこなわれているのは、青森県下においてである。全般に、「デア」はくだけて言う時のもの、「ヂ(ジ)ャ」はあらたまって言う時のもの、とされていてがちである。「ヂ(ジ)ャ」はつかって「デア」はつ

かわないと言う人もすくなくない。「ヂ（ジ）ャ」「デア」の用法は、はばが広い。むしろ、自由にこれらがつかわれているとも言える。命令・あつらえや禁止に用いられることは、ことにさかんであろうか。断定や完了の表現にも、よくこれらが用いられている。さらに、自己の思いを言うのにも、ただの説明にもこれらが用いられており、問いにも用いられている。『全国方言資料』第1巻の「青森県三戸郡五戸町」の条には、

m………… サー ツギノ アサマサ ナッタトコロア サンジャクモ フト
 さあ 次の 朝に なったところが、 3尺も 一度
 ケアニ フッタモンダデア ノッコト ユキア
 に 降ったものだ。 どっさりと 雪は。

とある。八戸市で私が聞いた一例は、

○イーヤ、アワネ デャー。

いいや会わないよ。

である。ここでは、「コッチャ コー デャ（ジャー）。「（こっちへ来いよ<来てくれないか>。）について、「コッチャ コー。」は命令的で、「デア」がつくと、たのむこちになる。「コー」と言っても来ない時に、「デア」をつける。これで、「来てくれないか。」とのこちになる。「デア」と「ヂャ」とは等価値である。いいことばではない。」との説明があった。津軽半島で聞いたものには、

○コトシ[ī]モ イー イネダ デャ。

ことしもいい稲だよ。（車中から沿線の稲田を見て言ったことばである。） （老男）

というのがある。——老男のしぜん会話に「デア」が出た。「ダ」助動詞のものと「デア」文末詞である。「では」起源を思わせやすからうか。「イダ デャー。」（いるよ。<「いるか。」に対する返事>）は、下北半島での一例であり、「アジ [ī]マジ[ī] ジャ。」（気もちがいいな。）は、十和田湖畔での一例である。県下で、「ヂャ」のおこなわれることも多いようである。

○コツツァー キ [kçi] へ チャ。

こっちへおいでよ。

は、弘前市での一例である。

岩手県下にも、「ヂ(ジ)ャ」「デア」がよくおこなわれている。「岩手県九戸郡種市町中野」(『全国方言資料』第7巻)の一例は、

m………… シャグエンニ マゲデクンセァデアー
100円に まけてくださいよ。

である。県中央部での例は、

○ソツタナ コト ヤメロ デァ。

そんなことやめろ。(大人→小人)

○ソソ[↑]タニ[i] イッペー キ [kçi] タラ アツ[ü]ガッベ チャ。

そんなにたくさん着たら暑かるう? (“推しあてて言うばあい”)

などである。後者例では、「ヂャ」に「では」が看取しやすいようでもある。県南、一ノ関のものには、

○ハヤク[ü] トッテ ケライ チャ。

早くとっておくれよ。

などがある。

秋田県下にもまた、「ヂ(ジ)ャ」「デア」がよくおこなわれている。(「デア」の勢力もつよい。) 県北、東能代の一例は、

○ソー スッナ チャ。ヤメレ チャ。

そんなにするなよ。やめろよ。

であり、県南、横手の一例は、

○ソ[↑]ダバー, アシ[i]ター ワガラネー ゴトガ アツタラ, デソワデ キ
[kçi]ーテ ケレ デァ。

だったら、あしたわからないことがあったら、電話で聞いてくれよ。

である。男鹿半島での例には、「オラー シ[i]ラネー デァ。」(おれは知らないよ。)などというのがある。『秋田方言』には、

でゃ は強く指定するか、反抗の意を表はす。

「れぁ」ともいふことがある。

との記事が見える。

山形県下となると、「デァ」「ヂ（ジ）ャ」文末詞のおこなわれることが、上来の諸県下に比してややよわかるうか。それにしても、県下に広く、「デァ」が認められるようである。『山形県方言集』には、「おらだもえぐであ。（僕等も行くよ。）」が、庄内・村山・置賜の三地方におこなわれるとしてある。山形市を出ての西南方で私が聞いた「ヂ（ジ）ャ」の例は、

○ココマデ ナラッタ ヂャ。

ここまで習いましたよ。（「どこまで習いました？」との、先生の問いへの答え）（小学生女→女性教師）

などである。老女も、「イッパユエー ケー ヂャ。」（たくさん食べよ。）などと言っていた。県下の東西に「デァ」「ヂ（ジ）ャ」がある。『全国方言資料』第7巻の「山形県東田川郡朝日村大鳥」の条には、

f………… マダ ユンダギ²⁾ャ モッテゲジャ

また 必要な時は 持ってお行きなさい。2)「ユンダ トキワ」のつまった言い方。「用の時は」の意。

が見える。

県下に、「デァ」とは区別すべき「デャ」がおこなわれているようである。外村繁氏の作品「東北」（『中央公論』昭和25年5月）には、「……。けんども、先生、こんな気遣ひ娘ば負かすとは、いかにも大したもんだでや……。」などの言いかたが見える。

宮城県下には、問題の事象が見がたいのか。

つづいて福島県下にも、「デァ」「ヂ（ジ）ャ」などがなさそうである。

このさい、いわゆる北奥が注目される。北奥に関連しては、山形県下が北奥的である。これらの全体と宮城県下・福島県下との対立を考えてみる時、つぎのような解釈ができなくはない。福島県下は、しぜんのこととして、関東地方との流通をよくしてきたであろう。その福島県下によくつづくのが、宮城県下

である。「デア」「ヂ(ジ)ャ」は、関東域にもおこなわれていない。(ただし、茨城県下には「デア」などはあるのか。) 関東地方でのそうした状況にひきつづいて、福島県下・宮城県下が非「デア」地帯となっている。——あるいは、この地帯が、状況の新化を示すのか。福島県西半域は、本県下の、関東との交渉ということからすれば、ややその交渉量のすくないらしい地域である。その方面に直続して、山形域がひらけている。

さて、北海道での「デア」文末詞の存在は、北奥での、その隆盛の波を受けたのによるものであろう。『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条には、

mアッパー イマー ヤマガラ キタデア
かあさん いま 山から 帰ってきたよ。

とある。「礼文島言語調査報告」には、

○デケー モンダ デャ。

大きいものだよ。 (58男→)

というのが見える。

「デア」もおこなわれている。

土居重俊氏の「北海道方言素描」(『方言研究』第五輯)には、

デアー(……しないよ)書カンデア〔蘭越〕

との記事が見える。

三 その他の地域での「デア」「ヂ(ジ)ャ」形

出自はともあれ、「デア」「ヂ(ジ)ャ」の外形を示す文末詞が、以下のように見わたされる。——その範囲は、そうとうに広い。

八丈島には、

○オンナジゴン ワカク オジャロ ジャ。

“おなじようにお若いですね。”

のような言いかたがおこなわれている。ともかくここに、「ヂ(ジ)ャ」文末詞が指摘される。飯豊毅一氏も、「八大島方言の語法」(『ことばの研究』)で、“文末助詞ジャには押しつけがある。”とされる。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町宇津木」の条には、

m………… シゴトノ クルシカロー²⁾ コトオ オモイデン シャベッテ ミ
 仕事の 苦しかった ことを 思い出に シャベって み
 ヤロージャー³⁾

ようじゃないか。

2) 形容詞の「カロー」は過去の意味を表わす。 3) 上昇調

などが見られる。「じゃないか」とあるのからすると、「ジャー」は「では」かに思われもする。同第7巻の「東京都八丈町大賀郷」の条には、

f………… バカサレテ ミンノーワデア³⁾
 化かされて みたことはありません。 3) 「デア」は [dæ]。

とあって、「デア」形が見える。

青ガ島にも「ヂ(ジ)ャ」形文末詞があるらしく、『くろしおの子(青ガ島の生活と記録)』にも、

「あが東京へ行きたくなっきゃ。島にあって百姓そどうじゃ。百姓はだれ
(するのだ)
 んもまけんなか」

などの「ジャ」が見える。

『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村神着」の条には、

f………… ウシマデ ヒッパッテク サワギオ シタッチュージャー
 牛まで 引っ張って行く 騒ぎを したということですね、
 アン トキニャーヨー
 あの ときにはねえ。

とある。「では」の「ジャー」か。

新島のことばには、「ダイム イヤ シマー ジャ(ジャン)。」(だれもいやしないだろうよ。)というのがある。

「では」の「ジャ」の文末詞化は、注目すべきものである。日野資純氏は、

「相模方言の素描」(『国語学』第九輯)で、

「そうではないか」は全県に $\overline{\text{ワー}}$ ジャンカがあるが(但し足柄上及中郡西部稀少)、半島ではその外に $\overline{\text{ワー}}$ ジェン又は $\overline{\text{ワー}}$ ジェンがある(三浦郡返子町、同南下浦町、同三崎町、同初声村、横須市^{キヌダサ}衣笠町、三浦郡葉山町)。主として幼少年が使うものであって、そのジェーは恐らくジャンカの変化形であろう。

と説いていられる。「ではないか」の「ジャンカ」は、このあと、中部地方によく見られるものである。「ジャンカ」が「ジャン」となって文末詞化する。「ジャン」からは「ジャ」ができて、文末詞化している。上のように、「ジェー」などともなれば、ものはいよいよ文末詞然としてくる。

静岡・愛知・長野・山梨の諸県下に、主としては「ジャン」、ついでは「ジャ」が、よく見られる。——「ジャ」は「ジャン」からのものなので、双方が関連して存在しがちなのであろう。静岡県下の「ジャン」は、「 $\overline{\text{ユッタ}}$ $\overline{\text{ジャン}}$ 。」(言ったじゃないか。)などである。「ジャン」に「ジャンカ」(ではないか)がくまれるとしても、「ジャン」そのもののはたらきは、文末詞のはたらきと言えるものになっている。高瀬徳雄氏の「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」(『方言研究年報』第一巻)には、

○ $\overline{\text{ホレ}}$ ミン、 $\overline{\text{テッパ}}$ ジャン、

それぞらん、手放したぞ、(じゃないか) (幼・女→同)中

<主に小>誇示する気持。

が見える。「じゃないか」と注しながらも、「手放したぞ」との言いかえをしていって、氏はこれを正面にたてていられる。愛知県三河での例は、「 $\overline{\text{コレ}}$ 、 $\overline{\text{ミズイロ}}$ $\overline{\text{ジャン}}$ 。」(“これ、水色だよ。”)である。三河には、「ジャン」とともに「ジャイ」もあるのか。山梨県下での一例は、「 $\overline{\text{クライ}}$ $\overline{\text{ジャン}}$ 。」(暗いじゃないか。)である。甲府ことばでは、「ジャン」はよくつかわれるという。「ジャン」は、目上の人に対してはつかわないで、同等以下の人につかうとい

う。「オシエテ ヤレバ イー ジャン。」は、「教えて “やればいいのに”。」であって、“とがめがすこしはいつている。”という。『信州下伊那郡方言集』には、「ちゃんと見てゐるジャン！」の例が見え、

ジャン！ ではありませんか！ 「反抗的に言ふ語」

とある。

「ジャン」とともに「ジ(ヂ)ャ」が上記諸県におこなわれており、静岡県下では、まず、熱海沖の初島に、

○ソソナニ キタラ アツカロー ジャ。

そんなに着たら暑かろう？

などの言いかたがある。伊豆半島内の一例は、「ハヤク オマンマニ シベー ジャ。」(早くごはんにしようよ。)である。御前崎で、「ウラガヤイタラ キレーニ ナッタ ジャ。」を聞いた時は、「うら返したらきれいになったじゃないの。」との解説教示があった。愛知県下でも「ジ(ヂ)ャ」がよく聞かれる。山梨県下となると、これは、比較的聞きにくいのではないか。私が県西南部で聞いたものには、「アン チャー。」(飲め。)[「ヤスン チャー。」(やすめ。)]がある。長野県下の『上伊那方言集』には、

じやー (助動) ……ではないか(行くじやー)

との記事が見える。信州中部例は、「ヨク キタ ジャー。」(よく来たね。)などである。

『静岡県島田方言誌』には、

アラジャー あるよ 有るよ

とある。これとおなじような言いかたは、瀬戸内海大三島で、私なども、してそだった。「アラジャー。」である。たしかに「あるさ！」といったようなことばづかいなのであるが、少年時代、「アラ」と「ジャー」とをわける気もちなどは、つゆなかった。今、「アラジャー」(有らいでは)「イカージャー」(行かいでは)、それに、先掲の「セージャ」(p.116)などの郷土ことばを思いだすにつけても、「では」の「ジャ」がくっきりとしたものに感じられ、したがっ

て、「ジャ」が、——その上部にあることばの形態にはかかわりなく、文末詞ふうのものと受けとられる。「ジャ」が、山陽地方に見いだされもする。さて、安芸南部ともなると、「エー ジャー。」(いいじゃないの?)のような言いかたが、ことに女性によくおこなわれている。「ジャ」は文末詞になっている。(p.184)

中部地方に「デア」形もある。私が伊豆半島北部で聞いた一例は、

○オメ^ーァー ドコイ イク デ^ァァ。

おまえさんどこへ行くの? (“懇意な間がら”)

である。どういう「デア」なのであろうか。「ダ」助動詞的なもの、ということもありうるか。望月誼三氏の「静岡」(『方言の旅』)には、「静岡市の在方の農家のおばあさんたちの話」が見え、中に、

(上略) イーノバッカ ソレーテ モッテッタデ^ァァ。(良いのばかり揃えて 持って行ったんだよ。

とある。『全国方言資料』第7巻の「静岡県安倍郡井川村田代」の条には、

m………… ニケ^ァァーモ マットモ アッタッデ^ァァ
2度も もっと あったよ、

とある。ともかく、本県下に、「デア」形がかなりおこなわれているらしい。西にくだっては、『名古屋方言の語法』に、

横着ワ オク デ^ァァ 横着はおよしなさい

というのが見える。北陸に、問題の「デア」が見いだされる。(新潟県下のは、「デア」ではなくて「デア」なのだろうか。)富山県下で、東部の言いかたには、

○コリ^ァァ オラノ ガデ^ァァ。

これはわしのだよ。

などがある。土地の人は、「デア」に「です」を対置した。「デア」は、「ダ」助動詞的なものであるか。県下南部の一例は、

○オマイ ドコイ イク ガデ^ァァ。

おまえさんどこへ行くの？

である。人は、この言いかたに、「オマイ ドロイ イク ガヨ。」を対置した。県西部にも「デア」がある。つづいて、石川県能登に「デア」があり、まず、

○アッコニ ウマレタ モンデア。

あそこに生まれたものだ。

などの、助動詞「デア」が見える。(愛宕八郎康隆氏教示)「デア」の文末詞化はどうか。興味ぶかいことに、能登半島にあい応じているかのような地域、丹後半島にも「デア」が見いだされる。

○ドロイ イテ キナッタ デャー。

どこへ行ってきなさったの？ (幼男→老男)

は、「デア」文末詞である。「ナニ シニ イク デャー。」(何しに行くの?)

は、四十歳代の男性が私に言ってくれたことばであった。どういう出自の「デア」であろうか。指定断定の助動詞は、一般に「ダ」である。丹後半島を出はなれると、これより西では、おおよそ、「デア」形を見ることができない。

四 デワ

明らかな「デワ」形が、関西に見いだされる。ただしそれは、「では」であるか、「でワ」であるか。

『京阪方言比較考』には、作品『まんじ』での例、「あんた 此処で待ってでわ」などが見える。

四国の徳島県下には、「でワ」かと思われる「デワ」ことばがさかんである。主として北域で、「イク デワ。」(行きます。)[ホーデワ。(そうです。)]「シラン デワー。」(知らないよ。)[ナイン デワ。(ないんです。)]などの言いかたがよくおこなわれている。北域も、西寄りに、この種の言いかたが、よりさかんか。もっとも、全般に、「デワ」はおとなのことばのようである。この種の「デワ」について、「では」を考えることはむずかしいように、私には思われる。一知友は、“「ワ」が全層に用いられるのに比して「デワ」は”との説明

のしかたをした。宮城文雄氏は、「全国珍語奇語集」の「徳島県」の部（『言語生活』第三十五号）で、

デワ 「今夜映画に行ケヘンデ」「行クデワ」軽い敬意を表わす。

と記述してられる。私も祖谷の徳善の一農家で、たび重ねて「…………… デワ。」の応答を受けたが、やはり、「デワ」がわるくはないことばのように思われた。多少とも敬意にかかわるものとされる「デワ」は、「ワ」が「は」ではなくて、「わたし」系の「ワ」であろう。もっとも、別に、私は、“「デ」は対等以下に言う。”との説明も聞かされた。いずれにもせよ、北域（キタガタ）には、“デワデワ イワン デワ。”と言われるほどに、「デワ」がよくつかわれている。ところで、南域内にも、「デワ」が聞かれなくはない。私が南部西方山地で聞き得たものは、

○ムカシノ シワ ユータ デワ。

むかしの人は言いましたよ。

などである。——ここに、「イーマス ワ。ホリャ。」（言いますわ。それは。）などの言いかたもある。（また人は、「ワ」と「デワ」とを比照した。）ちなみに、『全国方言資料』第5巻の「徳島県那賀郡延野村雄」の条に見える、

fコレ ニアウデァー

これ 似合いますか。

での「デァー」は、「デワ」には無関係のものである。「デ」は同様の「デ」であるが、「ァ」は、私の言う文末訴え音の「ァ」に相違あるまい。

徳島県下と同様の「デワ」が、香川県下にもいくらか見いだされるようである。県東部例は、「コンヤワ ドコッチャ イカン デワ。」（今夜はどこへも行かないよ。）などである。

愛媛県東部には、「ワデ」はあっても（p. 96）、「デワ」はない。「ワデ」の「ワ」は、「わたし」系の「ワ」であろう。

このように見てくると、近畿・四国には、「では」系の「デワ」形はなさそうに思われる。

五 おわりに

「では」の言いかたが文末詞化しているのは、発想上から言えば、国の東西に認められる事実のようである。なるほど、文表現中の「では」という要素は、およそ各地に普遍的一般的なものである。しかも、「では」の表現のところで、文表現はくぎられるものしぜんであるから、「では」が、国の東西で文末詞化したことも、しぜんのことと解される。

ところで、「では」系ではない「でワ」がぬきんでて徳島県下にさかんなのは、どうしたことなのであろうか。「デ」文末詞のさかんなことは、四国全般に認められる。その「デ」に「ワ」を複合せしめることが、徳島県下での特定事であった。どのような文末詞を、どのように複合せせるかもまた、はなはだ地域的なものようである。方言風土の、こまかな地域性が指摘される。

第九節 「ガ(ガ)・ガイ(ガイ)」の属

一 はじめに

私どもは、電話のさい、つい、“私はだれなのですが。”と言う。「ガ(ガ)」どめのセンテンスは、日本人の電話ことばの一特色でもあろう。これによっても、「ガ(ガ)」が、おもしろい、文の言いきりになることは明らかである。——言いきりになって、しかも「ガ(ガ)」が、なにほどかの訴えことばになっている。「ガ(ガ)」の文末詞化傾向である。

文表現中のふしめ、話部のくぎりめになる助詞は、文末詞化しやすい。

「ばかたれめ！」と叱る時、方言では、人が、「バカタレ ガー。」(このばかたれめ!)などと言っている。格助詞「ガ」が、文末詞用にたてられている。電話ことばでの「私はだれなのですが。」のばあいには、接続助詞「ガ」が文末詞化しようとするものである。今日、諸方言上に見られる「ガ(ガ)」文末詞には、

およそ上述の二系のもの、格助詞系のものと接続助詞系のものとが見られる。

方言文末詞「ガ(ガ)」とならんで、方言文末詞「ガイ(ガイ)」がある。「ガイ(ガイ)」はおそらく、「ガ(ガ)」の発展形であろう。「ガ(ガ)」表白の強調が、「ガイ(ガイ)」をひきおこしたであろう。「ガ(ガ)」が、強調というのではなくても、「ガー(ガー)」とも発音されれば(これは、開音節言語の日本語での通有のことである。)、その「ガー(ガー)」はしぜんにも、「ガーイ(ガーイ)」「ガイ(ガイ)」にもなったであろう。先日のこと、ラジオ小説「まんざくの花」の初回を見聞きしたら、最初に、横手駅を言う「ヨコテイ。」「ヨコテイ。」が聞こえてきた。「テ」が長く発音されて「テー」と言われると、そのいきおいの余るところで、「イ」音がひきおこされる。

複合形文末詞「カエ」から「カイ」がおこることもあったろう。同様に、「ガ(ガ)エ」から「ガイ(ガイ)」がおこることもあったかもしれない。「ガイ(ガイ)」の成立には、上に述べたのとこれとの、二すじの道が考えられもする。

しかし、たとえば、私の生いそだった郷土方言(瀬戸内海大三島の方言)のほあいは、「カエ」の言いかたがない。——いったいに「エ」文末詞がおこなわれていない。その中で、「ガイ」は「ガ」とともにおこなわれている。(「カエ」もなく、「カイ」はよくおこなわれている。)

「カイ」「ガイ(ガイ)」については、これらの、「カ」「ガ(ガ)」からの派生が考えられやすい。

「ガイ(ガイ)」は、音訛をおこして、「ガエ(ガエ)ー」「ギャ(ギャ)ー」「ゲャ(ゲャ)ー」「ゲ(ゲ)ー」などになっている。

「ガ(ガ)・ガイ(ガイ)」に関する複合形の文末詞としては、「ガ(ガ)ナ」「ガ(ガ)ノ」「ガ(ガ)ネ」「ガ(ガ)ヤ」「ガ(ガ)ヨ」、「ガ(ガ)イノ」「ガ(ガ)イネ」「ガ(ガ)イヤ」「ガ(ガ)イヨ」「ガ(ガ)イエ」、「ガ(ガ)イゾ」などが、まず注意される。「ガ(ガ)」や「ガイ(ガイ)」に上接するものの認められる複合形文末詞は、通常、見がたい。

二 南島地方の「ガ」

この地方におこなわれる「ガ」形文末詞については、さきに、「カ・カイ」の属をとりあつかう時にいくらか述べた。「ガ」が問いに用いられている。(中巻 p. 415) そこに見た、沖縄本島での事例に加えて、今、沖縄本島国頭地方の事例をあげるならば、「クリワームンエシガ。」(“これは私のです。”) などがある。——これは問いの表現にはなっていない。「ガ」には、こうして諸用法のものが見られる。国頭の“「先生が来た。」と人に注意する時”の言いかたは、「シンシーガチューンガ。」である。ところで、ここにも、問いの表現にはたらく「ガ」もおこなわれており、「チャーサガ。」(どうしたんだ?) などとある。

『喜界島方言集』には、「ガ」についての、

疑問の助詞。か。ヨに同じく何、如何等の疑辭及び人、場所、方角等の不定称が上に来る場合にのみ用ひられるが、ヨが動詞過去形中「チ」「ヂ」「ティ」「ディ」形語尾に附くに対し、これは「チャ」「ヂャ」「タ」「ダ」語尾に附く。

との記述がある。私が喜界島の人から聴取し得た实例は、

○ヤ^ーカチ チ^ー クリ^ェン^ドー ガ。

家へ来てくれるか。

などである。ところで、ここにも、「これは私のです。」の「ウレ^ワー ムン^デン ガ^ー。」などの言いかたもある。——問いの表現ではないばあいの「ガ」である。

つぎに、大島本島に、

○ク^リャ ナ^ームガ シ^ャーオ^タ ム^ンダ^リョ^ーロ ガ^ー。

これはあなたがなさいましたものでしょう？

のような「ガ」が見られる。「ガ」が問いに役だっている。人も、“聞く時は「ガー」がつく。”と言っている。

徳之島にも同趣の「ガ」があり、

○タルーマ ッモリーエラダタロー ガー。

だれもいらっしやらなかつたろうねえ。

などと言われている。ところで、「ウガサンガ^ン キチカー アツッハーレリュス ガー。」（“そんなにたくさん着たら、暑いですが。”）の例については、人が、「暑いですが」と教えるものだとして説明してくれた。——“もうすこし脱ぎなさい。”との意のものであるという。「ガ」の文末詞としての特定の作用は、明らかであろう。「ワンヤ サン ガー。」（わしはしないよ。）というのは、問いとは反対のばあいである。

与論島でもまた、

○イチャ シャービタン ガ。

どうしたんですか？

のような「ガ」がおこなわれている。「ワナ ガンドゥ ナイジ ガ。」（“私はそうなるがよお。”）のような言いかたもある。（沖縄本島やその属島で、問いの「か」の意の「ガ」がおこなわれていることは、さきに、「カ」の条でふれた。）

与那国島比川方言のものでは、高橋俊三氏教示の、「ヌーバー キブン ガ。」（何をしているのか。青男→小達）、「オヤジャ ヌンディ ワン ガイ。」（おやじは何のためにいらっしやったのですか。初老女→中女）、「タン アンブトゥ ブラヌン ガエ。」（誰も遊ぶ人がいないねえ。小男→高橋氏）などがある。

南島方面に、「ガ」などに関して、問いの用法とそうでないものが見られる。

三 九州地方の「ガ・ガイ」ほか

九州方言下に、「ガ・ガイ」の用法の注目すべきものがある。

まずは鹿児島県下に、「ガ・ガイ」の生活の、色あざやかなものが見わたされる。委細はつぎのようである。

鹿児島県下に、接続助詞系の「ガ」文末詞のおこなわれることがきわめてさ

かんである。「コヤ ナゴ エモサン ガ。」(“これは、長く会わないですね。”)のような言いかた(これは薩摩北部での一例である。)を見れば、文末詞化している「ガ」が接続助詞系のものであることは、容易に認めることができよう。この種の「ガ」が、県下に広く老若に用いられ、老幼男女のどんな人に対しても、これが言われている。この「ガ」文末詞は、おしつけぎみのつよいものになっている。「ガ」音の効果が、しぜんにそこに出ているのであろう。さて、本県下での「ガ」は、一つに、「よ」の言いどめ同様に用いられることが多い。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条にも、

f…………… モッテ イダッデ ヨカガ
…………… 持って 行っても いいですよ。

とある。大隅半島東岸の内之浦で聞いたことばには、「アツビー コン カー。」(あそびに来ないか。)に対する「クイ ガー。」(行くよ。)がある。「よ」相当のものとして「ガ」をつかうことが、じつに自由である。県下全般で、「ゴアンガ。」(ござんすよ。)なども、よく慣用されている。『大隅肝属郡方言集』には、

チャガチャガ その通り〜。

というのも見える。

○アタシャー コンニャ ドゲモ イッモサン ガ。

わたしは今晚はどこへも行きませんよ。

は、薩摩半島南辺での一例である。県下の諸島にも、こうした「ガ」がよくおこなわれている。県下で、「ガ」が、つよい自己主張、あるいは断言にも用いられる。反動的に言うばあいの「ガ」も見られる。「よ」相当の言いかたのとなりには、「わ」相当の言いかたや「ね」相当の言いかたもある。大隅例の「マコチ スッチャ ガー。」は、土地の人が、「ほんとうにすぎだわ。」の意のものだと説明してくれた。薩摩半島での「ユ キタ ガー。」は、土地の人が、「よく来たねえ。」だと説明してくれた。薩摩半島西岸の笠沙半島で私が聞きとめた「チャン ガ。」は、“そうですね。”であった。

ところで、県下の「ガ」の用法の一つに、「オッカン ハヨ ゴハンヌ クガ。」(母さん、早くごはんをたべようよ。)というようなものがある。ここには、さそいの表現の「ガ」が見られよう。「たべましょうよ」とさそう言いかたは、「タモン ガ」である。こういう「ガ」も、問いの「か」に関係のあるものではなくて、上来のに等しい「ガ」であろうか。

「ナユ シオッタ ガ。」(何をしていたの?)の「ガ」は、「カ」の濁音化したものであろう。問いの「カイ」からの「ガイ」「ゲー」「ゲ」も見られる。

県下での「ガ」の用法の、いま一つの大きな流れをなすものは、つよく推量したり、つよく同意を求めたりするばあいのものである。トカラ列島の宝島では、「ソゲン ズンバイ キヤレバ アツ ゴザッド ガ。」(そんなにたくさん着なざったら暑うござんしょうよね。)などの言いかたがなされている。大隅半島南部に例を求めらば、

○コラ オマイガ シャッタド ガー。

これはあんたがしなざったんでしょ!?

などがある。これらの「ガ」は、「カ」の濁音化したものではなからう。おしつよく推察して問うところに、訴える力のつよい「ガ」が出ている。推量の「〜タロ」「〜ツロ」「〜ド(ドー)」を受けて「ガ」のむすびのはたらくセンテンスが、県下に、じつによくおこなわれている。「ヨカ下 ガー。」は、“いいだろうが。”である。「ガー」に相当する「ガイ」もある。

○ソガンマデ タイテ キトレバ アツカンド ガイ。

そんなにたくさん着ていれば暑かろうよねえ。

は、種子島での「ガイ」の一例である。この種の「ガイ」が「ゲー」になってもいる。「ダイモ オランチャッタロ ゲー。」(だれもいなかったらうよねえ。)など。

薩隅地方に、なお、格助詞系の「ガ」文末詞が見られる。瀬戸口俊治氏は、薩摩半島東南端での事例、「ヌ エ ゲ サツ ガ。」(間拔者めが。中女→幼女)「バガ ガー。」(馬鹿め。老男→幼女)を教示せられた。格助詞系「ガ」文末

詞のおこなわれることは、県下に、どの程度のものなのだろうか。大勢をなすものは、接続助詞系の「ガ」文末詞であろう。

宮崎県下の状況にも、おおよそ、鹿児島県のに似たものが見られる。私が、県中部西奥の調査にしたがった時は、土地っ子が私にものを説明して、“何々です ガー。”と言うのがよく聞かれた。（土地の識者は、私に、“「ガ」は「止メコトバ」だ。”と説明してくれた。）青島の手まえで聞いたものには、「イツモ セワバツカリ ナル コツチャ ガー。」（いつもおせわにばかりなることですね。）というあいさつことばがある。——接続助詞系の「ガ」が明らかであろう。県下の南部中部には、こうした「ガ」がよくおこなわれている。

「ガ」に類する「ガイ」もある。橋口巳俊氏教示の中部例は、「オリャ シラン ガイ。」（おれは知らないがなあ。小男→小男）などである。氏はまた、「ガエ」も指摘してられる。「ガナ」や「ガヨ」も、ここに合わせかかげておいてみようか。

『全国方言資料』第6巻の「宮崎県日南市飫肥町」の条には、

*m*ソッデ イガ ソッデ イーガ

それで いいよ、それで いいよ。

などである。私がかつて飫肥町で聞きとめたものには「モー ネター デヤ セン ガー。」（“もう熱は出ない！”——「だろう」ではないとのことであった。）などというものもある。「ガ」文末詞がはたらけば、とかく、決定的な意味作用があらわれるわけであろう。

本県下にも、「ね」と言いかえてよい「ガ」がおこなわれてもいる。「サミ ガ。」は「さむいね。」であるという。

つぎに、また、本県下でも、つよい推量などを言う「ガ」がよくおこなわれている。『全国方言資料』第6巻の「宮崎県東臼杵郡南方村」の条には、

*f*ハー アリャ フツグワイタン デタ トキヂャローガ

ああ あれは 福川板の (荷が)出た ときでしょう。

などとする。飢肥町での一例は、

○ダレン オリャ センガッタロ ガー。

だれもいなかったらう!?

である。推量に、「ガイ」もあり「ガエ」もある。(ときに、人は、「ガ」どめが、余情的な表現になるとも見ているようである。しかしながら、「ガ」そのものは、つよい調子を出すものと解されるべきであろう。)

本県下にも、格助詞系の「ガ」文末助詞が見いだされる。「ナケベン ガ。」(泣虫が。青女→小男)などがある。(橋口巳俊氏教示)『日向国小林地方日を中心とせる方方言雑纂』には、「ぬけが。(阿呆よ)」というのが見える。

接続助詞の「ガ」も格助詞の「ガ」も、ともに、どこにあっても、文末詞化の趨勢をはらんでいるわけか。

熊本県下以北にも、ほぼ、上の二県下で見えてきたのにつらなる傾向が見わたされる。接続助詞系の「ガ」文末詞のおこなわれることは、依然として、熊本県下以北の諸県下にもいちじるしい。「よ」「ね」、あるいは「わよ」などと言いかえられる「ガ」が、よく、諸県下に見られる。

熊本県南の一例は、

○キュワ ダイブン ドンバラノ フトカー ガ。

今日はずいぶん腹が大きいじゃないね。(老女→小女)

である。(白石寿文氏教示)阿蘇山南麓での一例は、「イーマス ガ。」(言いますよ。)である。熊本県下で、「ガ」が「ガイ」ともある。「ガ・ガイ」が、反発的なつよい言いかたにもなる。天草下島西岸で聞いたものには、

○ジコモモンジャッデー ガ。

りこう者だから。

などがある。「デー」の言いおさめを受けて、最後に「ガ」がはたらいている。やはり接続助詞系の文末詞とすべきものなのか、どうか。長崎県下での、「よ」に相当する「ガ」の例は、『全国方言資料』第9巻の「長崎県壱岐郡郷ノ浦町

里触」の条の、

m………… モー オーキナ メー オータゲ キョーワ

もう ひどい 目に あったよ、きょうは。

などである。——「ガイ」の「ゲ」が見える。筑前糸島半島での、同種の「ガ」例は、

○オラー クサー。イマニ、ココノ コトバ、ツカイキラントガ イッチョ
— アル ガー。

わしはね。いまだに、このことばの、つかいこなせないのが一つあるよ。 (老男)

などである。老幼にわたって、こういう「ガ」が、諸方でよくおこなわれている。大分県国東半島の「わ」の例を出すならば、

○ホントー。シランジャッタ ガー。

ほんとね？わたし知らなかったわ。

がある。(大分県下には、「ガエ」複合形などもある。——「ガーエ」などとも言われている。)

つぎに、つよく同意を求めたり、おおいに推量したりする「ガ・ガイ」が、これまた熊本県以北の諸県下に、よくおこなわれている。同意を求めて問うことにもなる。推量して問うことにもなる。「ガ」と「ガイ」とでは、おもに「ガ」がおこなわれていよう。熊本県下での例は、「ジキ ワカルド ガ。」(すぐわかるだろう!?)「ソギャー シタド ガイ。」(そんなに“したでしよう”!?)である。「〜ド ガ(ガイ)」は、鹿児島県下につづいて、熊本県下のかなり北部にまで見いだされる。おおかたは、同等以下の者に言われていようか。熊本県下に、「ガヤ」の複合形もある。長崎県下での同種の「ガ」例は、五島列島の、

○ンドンモ トリ キタツジャロ ガ。

きみたちもとりに来たのだろう!?

などである。壱岐や対馬にも、こうした「ガ」がよく見られる。五島に、「ガ」

の「ガン」も見られる。佐賀県下での、同種の「ガ」の例は、「スルロー ガ。」(するだろう!?) などである。「ガイ」もおこなわれており、唐津市神集島には、

○ムカシ アン センソーノ アリマシツロー ガイ。ムカシノ。

むかし、あの、戦争がありましたでしょう!?!むかしの。

がある。(岡野信子氏教示)「ガイ」の言いかたは、「ガ」の言いかたよりも、品位がやや高くなるという。福岡県下での一例は、「イキヨリマッショ[↑]ー ガー。」(行ってましよう!?) である。——この文表現は、区長さんが、私によびかけて語ったものであった。ていねい気分の表現にも「ガ」が出る。それにしても、「ガ・ガイ」の言いかたには、念をおすこちがつよい。(ときには反発までして同意を求め、「ガ」と言うことがある。) 大分県豊後での一例は、

○ムシロ イマ ネガ ヨカロー ガ。

蕙は、今、値がいいでしょう!?! (中女→初老女)

である。県下に、「ガイ」とともに「ガエ」もおこなわれている。「ガン」もある。「何々チューロー ガン。」(何々と言うだろうがい!?) というのは、県南で私が聞きとったものである。

格助詞系の「ガ」文末詞も、熊本県以北に見いだされる。ただし、その分布は、比較的淡いか。天草の「キョーノ アツサ ガー。」(“きょうはとくに暑い!”) との言いかたは、きれいな格助詞系の「ガ」文末詞を見せたものである。肥後中部で、

○ナーン ガー。ボツボツ タイ。

なあにさ。ぼつぼつだよ。(相手の言を否定する体)

(中男 電話)

ともある。長崎県下、五島での一例は、「コン カッテァカンニャジン ガ。」(この言うこときかずに!) である。福岡県筑後の柳川市で聞いたものには、

○カーチャンノ キチガイサンゴタロ ガ。

母ちゃんの気ちがいサンゴタロが!

がある。格助詞系の「ガ」文末詞のおこなわれかたには、かなりの制約が見ら

れるようである。そのはずであろう。「ガ!」と言いさず表現は、どぎつきの効果をおこしがちだからである。

四 中国地方の「ガ・ガイ」ほか

まず、接続助詞系の「ガ」文末詞がよくおこなわれている。それも、みづから説明して「よ」と言いあらわすのにあたる「ガ」のおこなわれることがいちじるしい。「ガイ」も、山陽本位におこなわれており、山陰本位には「ガン」がある。

山口県下には、こうした「ガ」と「ガイ」とがならびよくおこなわれている。「メーラン ガー。」(見えないな。青女)は、周防平郡島での一例である。(国安功氏教示)周防には「ガノ」複合形もおこなわれており、これは、広島県下のとよく関連している。長門で、「ガイ」の「ゲー」も見られる。長門西北岸で聞いた、

○コリャ ジョーズ ゲー。

は、「これはじょうずだな。(孫が紙に船を描いたのを見て言ったものである。この発言者、初老男は、「何々と言う ゲ。」<何々と言うよ。>とも発言していた。)」の意のものであった。

広島県下でも、「どう どうしております ガ。」(どうどうしていますよ。), 「バイ イリマス ガー。」(二倍いりますわよ。老女→藤原), 「アガーナ モチー シャー セン ガー。」(あんなものは、食ったって、死にはしないよ。幼男間)などと、「ガ」がよくつかわれている。「ガノ」複合形のおこなわれることはさかんで、「チョット ソコデス ガノ。」(ちょっとそこですがね。)などとある。「ガイ」もかなりよくおこなわれている。「ガイ」の「ゲ」も、なくはない。

岡山県下にも、「よ」などと言いかえうる「ガ」がさかんにおこなわれていて、子どもたちも、「ビククリシタ ガー。」(びっくりしたわよ。)などと言っている。『全国方言資料』第5巻の「岡山県真庭郡勝山町神代」の条には、

m………… ミナ クーシモートルンジャガ モドッテミリャ

みんな 食ってしまっているんだよ 帰って来てみると。

とある。「ガヤ」複合形もあり、一方、「ガイ」もよくおこなわれている。[ai]連母音相互同化のさかんな岡山県地方にも、こうして「ガイ」文末詞は特立してもいる。美作奥には、鳥取県下との関連もあってか、「ガン」形も見いだされるようである。

鳥根県下でも、「よ」と、発音者が念をおしていく「ガ」がよくおこなわれており、ことに「ダガ」との、特異な複合形がよくおこなわれている。出雲奥での一例は、

○ヂ[i]ガ^ワル[ü]ーテ イ[i]ケマシ^ンダガ^ー。

(私は)痔がわるくていけませんですよ。(こまりますよ。)

(老男→藤原)

である。石見の状況は、総じて、広島県安芸に類するものである。隠岐には、出雲に等しく、やはり、「ガ」「ダガ」がさかんである。

鳥取県下の状況は、出雲地方のに類する。「ガ」に関しては、困幡に「ダガ」の「サガ」があり、別に、「ガヨ」の複合形のおこなわれることがいちじるしい。「サガ」の一例は、

○ナンデス サガ^ー。

あれでございますよ。(発文) (老女→藤原)

である。——「ダガ」の頻用のうちに「ダ」>「サ」の音訛をおこしたものと思われる。(私どもには、聞くだに「サ」であるが、土地っ子にその録音を聴いてもらうと、「ダ」と言っていると言うのである。)[「ガヨ」複合形は、「ガヨ^ー」と発音されるのが特色である。「ガン」形のおこなわれることも、本県下での一大特色であろうか。県下の諸方言文献にも「ガン」の記載が見える。

中国地方に、つよく同意を求める「ガ」または「ガイ」もよくおこなわれている。

○イヤ、イッチョルサジャロー ガイ。

いや、きつと行ってるのだろう!?

は、山口県長門での一例である。長門地方に、「ガイ」の「ゲー」も聞かれる。

広島県下では、「出るだろう!？」との意の「ヂョー ガ。」の言いかたが特色的である。——「出る」動詞の語幹も変じている。備後地方にも、「ソージャリマンモー ガー。」(そうでありましょ!?)などの言いかたがいちじるしい。広島県下では、「ガイ」の「ゲー」は聞かれない。

岡山県下にも同種「ガ・ガイ」がおこなわれていて、「ゲー」は通常おこなわれていない。[ai] 連母音相互同化のさかんなこの地方であるのに、「ガイ」のばあいはいかくべつと見える。(東隣近畿には、[ai] 連母音相互同化がなくて、「カイ」>「ケー・ケ」の変化はおこっている。東西、妙な対応である。)

さて、山陰の出雲地方以东となると、もっぱら「ガ」形がおこなわれている。出雲での一例は、「テモチデンキダー ガー。」(手持ち電気<懐中電灯>だろう!?)である。

中国地方に、格助詞系の「ガ」文末詞も認められる。『隠岐島方言の研究』には、

「こなよぼけの爺かまが^{ゲー}つ」爺かまが^ッと読むべし。老人を罵る時、デーカマといふ。デーカマガ^ッと云へば、馬鹿老人なるかな、といふ位の意とある。山陽地方では、「ばかたれ ガー。」(このばかものめ!)などの言いかたが、今もかなりよくおこなわれていよう。(「バカタレ ガー。」は、周防祝島で聞いたものである。)広島弁の「マエニャ フ^{ゲー}ジューナ コト ガー。」は、「以前は不自由なことたら!」との意のものである。

語形分布に関して、ひとこと付言する。山陰本位には「ガイ」形が見られなくて、かつ、そこは「ダガ」複合形がよく見られ、また、「ガヨ」も特色的である。ものの有無に関する、地域的なつれあい現象が注目される。

五 四国地方の「ガ・ガイ」ほか

四国の愛媛県下には、「ガ・ガイ」文末詞のおこなわれることがいちじるしい。まず、「主人は モー カエリマス ガー。」（主人はもう帰りますよ。）など、「よ」と言いかえうる「ガ」がさかんである。県南辺地域には、

○コレ ワシンガヤ ガー。

これはわたしのですよ。

のような言いかたも見られる。最後にくる「ガ」について、土地の人は、「「ガ」がハマル（はいる）ことが、このへんで耳ざわりだ。この地域だけのものである。」などと言っている。この地域にはなお、「ワシガノガニ。」（“私のだけに！”）などの言いかたもよく聞かれる。県下一般で、「ガ」とともに「ガイ」の言いかたもよくおこなわれている。東予弁で、「ソガニ ユワレン ガイ。」というのは、「そんなに言ってはいけないよ。」との制止・禁止の表現である。「ガイ」からの「ゲー」もできており、松山弁その他の中予弁には、「ゲー」もさかんである。「ナキヨル ゲー。」は「泣いてるよ。」である。老少ともに「ゲー」を言っている。「ガ」に対する「ガン」が、別にできている。これは、東予内に見いだされる。「キシガ キタ ガン。」（汽車が来たよ。）と言えば、「ガン」は、やはり、なにほどこかの強調になってくる。さて、「ガ・ガイ」を用いて、相手の同意を求めたり、相手のことを推量したりする、広義の問いの表現も県下にさかんである。

○モー コトバ エーカゲン ワカツロー ガ。コレダケ シャベッタラ。

もうことばは、そうとうにわかったらう!?これだけしゃべったら。

（老女→調査者たち）

は、北の瀬戸内海島嶼での「ガ」例である。「ガ」の問いは「ガー」ともなり、また、「ガイ」ともある。「ガイ」の問いが本県下での一特色であり、「ガイ」に似た「ガエ」もある。（「ガイ」からのものもあるう。）「ガイ」に近い「ゲー」がまたおこなわれている。松山弁での一例は、「ワカルマイ ゲー。」（わから

ないでしょう!?)である。「ワカルマイ ゲー。」の言いかたは、「わからないでしょう!?’ほどにいてねいなものではなさそうである。けれども、女子高校生間でのことばづかいを聞く時には、これが、「わからないだろう!?’などであるとは思われない。敬語法の語句のない方言表現法の、待遇表現の微妙さがここにある。)

なおここに言うならば、[ai] 連母音相互同化、[ai]>[e:]のおこなわれることが一般的ではない当地方(→四国地方)にあって、文末詞形の「ゲー」は、このようにおこなわれている。注目すべきことである。文末詞での転訛は、一種特定のものであるか。

愛媛県下に、問いの「ガン」も、いくらかはおこなわれているのか。本県下の、「ガ」に関する複合形の文末詞としては、「ガナ」がなかんずくさかんである。中予地方での例は、「下ナッ^タラ エー^フジャ ガナ。」(どなったらいいんですよ。)などである。(このばあいも、「エー^フジャ」<いいのだ>とあるけれども、「ガナ」にむすばれて、表現法は、「〜ノダ」の言いかたの、「〜ノデス」的なものになっている。)他の複合形に「ガヤ」や「ガヨ」があり、北部内海島嶼の一部には、「ガレ」もある。

○ド^コイ イ^キマ^リョール ンカシランガ。

どこへ行っていやがる<進行態>かな?

は、瀬戸内海大三島での、「ガ」におわる長大文末詞を認めしめるものである。

高知県下の状況も、全般的には愛媛県下に類していよう。「よ」と言いかえてよい、説明ふうの「ガ」、あるいは「ね」と言いかえてもよい「ガ」(肯定表現の「ガ」)がおこなわれており、その種の「ガ」の「ガイ」もまた、よく聞かれる。「ナン^チャー セー ヘン ガイ。」(なんにもしはしないよ。)は、「ガイ」の一例である。土居重俊氏の『土佐言葉』には、

オラー ドーイ^タチ ノムガン(おれはどうしても飲むさ)〔田野町〕
のように、「ガン」が見える。問いの「ガ」もおこなわれており、「〜ジャロガ」、または「〜ツロー ガ」などとある。県下の複合形としては、「ガヤ」

「ガヨ」などがある。

徳島県下の状況は、高知県下のに似て、かつ、「ガ・ガイ」の勢力がいかにかよわめであろうか。それにしても、いろいろな用法の「ガ」が認められることは、前二県下同様である。

○ソ^ーコイ イ^ット^ッタ ガ^ー。

“底へはいっとったがよ。”（茶びんの底に茶の葉が）

（中学生二女→母中女）

は、説明の「ガ」の一例である。この種の「ガ」の「ガイ」とともに、「ガエ」もある。「ガイ」の「ゲー」もある。その短呼の「ゲ」もおこなわれている。『阿波言葉の辞典』には、問いの「ガ」についての、

疑問の意だが単純な疑問でなく相手に同情し、相手の立場をみとめ、しかも反面に相手を責めている。

との説明が見える。「ガ」の方言相をよくとらえたものであろう。“「ガー」がつくと、粗雑なことばになる。”と、県南の人は、かつて私に語った。「ゲー」の問いも、けっして上品なものではなからう。本県下での、「ガ」に関する複合形の文末詞に、「デガ」というのがある。「オ^タシャ^ー オ^ブケ^タ デガ。」（“わたしは驚いたですよ。”老女→青男）は、他地方には見がたいものである。

香川県下の状況は、おおよそ、徳島県下のに類していようか。ところで、「ソ^レ、イ^カン ガ^ー。」（それはいけないねえ。＜人の、病気で寝ていることについて言う。＞）などの言いかたは、また、西の愛媛県内にも見られるものである。本県下には、「～^{ジャ} ガ^ー」よりもむしろ、「～^ノヤ ガ^ー」がよくおこなわれているか。

○カ^ナリ ホ^ラ、コ^ゼニガ ト^レヨ^ー ガ^ー。

かなりほら、小ぜにがとれるだろう!?

は、県中部での、推量して問う「ガ」である。問いに「ガイ」もおこなわれている。本県下の複合形では、「ガデ」がとりたてられる。これまた、他地方には見がたいものである。——徳島県下のは「デガ」である。（となりあわせの二

県でありながら、その間に、どうしてこのような対立相が見られるのであろう。語を重ねる好みのちがいでいっても、これはあまりにも単純なちがいである。）

○センセー トコ ヨーケ アロー ガデ。

“先生の所にもにしき松がたくさんあるんでしょう!?”

(中女→初老男)

は、香川県下中部での「ガデ」例である。これは推量しての問いの表現になっている。「ソーイ ナー。イネン ガデー。」(そうなのよ。いねないわ。)など、自己の意を言うのにも「ガデ」が用いられている。「ガデ」の「デ」が、「レ」にもなっているか。「ヒロタ ガレー。」(ひろったわよ。)などとある。

格助詞系の「ガ」文末詞は、四国に、今日、さほどにはおこなわれていないのか。愛媛県南の一例は、「コノ アイゾカレ ガー。」(この「くだらんことを言うやつ」ったら!)である。香川県下の一例は、「コノ ホッコマイ ガ。」(“このホッコものが!”と言って叱ることば。”「ホッコ」は「ばか」のことである。)である。

私ども、いわゆる調査者には経験することができないありさまであっても、民間日常のくだけた方言生活の中では、なお、各地方でなにほどかずつ、格助詞系「ガ」文末詞がおこなわれているかもしれない。

六 近畿地方の「ガ・ガイ」ほか

近畿の状況は、四国のと似たようなものであろうか。

格助詞系の「ガ」文末詞は、四国でのばあい以上にすくないのではなからうか。

説明の(あるいは自己の意を言う)「ガ」が近畿諸県におこなわれている。兵庫県下、但馬には、「〜ジャ ガー」などの言いかたがさかんであり、

○ムカシモンジャデ、イマスンジャガ。

むかしものですから、言いますんですよ。 (老女→藤原)

などがある。阪神地方などでは、「ガー」と言っつよく言いかえすことばづかいもよく聞かれよう。和歌山県下には、「ガ」と言いきすよりも「ガエ」と言いあらわすことが、むしろ多いか。「ガエ」は「ガ+エ」のものなのか、「ガイ」からのものなのか、判然としないことがすくなくなかろう。県南には、「ソーヤゲー。チガウ ゲー。」(そうなのよ。ちがうわよ。中女→夫中男)などと、「ゲー」も言われている。「ゲヤ」の複合形もある。三重県下でもまた、いわゆる説明に、「ガイ」がよく用いられている。「ガイ」にまぎらわしい「ガエ」もある。「ガイ」相当の「ゲー」もある。——ただしこれは、おもに南部域に認められがちのものか。奈良県下・京都府下・滋賀県下では、説明には「ガ(ガ)」が一般的であろう。彦根ことばでの一例は、

○ココ コー イク[↑]トサイガ、ヨロシー ガ。

ここをこう行きますと、よろしいですわ。 (中女→藤原)

である。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県犬上郡多賀町萱原」の条にも、

m シチ ジュ ー ゴ ニー ナラレタンスガ

75歳に になりましたよ。

などがある。

「奈良県天理市の方言」(『天理市史』)には、

例えば平坦部の「セヤガー」(そうだがね)は山間部では「セヤゲー、セヤギー」となる。

との記述が見える。私も、県南東部の調査で、「ガイ(ガイ)」のよくおこなわれるのを聞いている。明らかな「ガ+エ(「ガエ」も)」もある。『全国方言資料』第4巻の「奈良県山辺郡都祁村」の条には、

m テ ッ テ モ ラ ワ ニ ャ カナワソゲ

晴れてもらわないと かなわないよ。

とある。

兵庫県下にも、説明や反駁などの「ガイ」がおこなわれている。——そ

の「ガイ」がやわらげられれば「ガイナ」である。「ガイ」の「ゲー」も播磨に聞かれる。「ソナ コト ハテ シラン ゲー。」(そんなこと、まあ、知らないよ。)などとある。「ゲー」は男女におこなわれている。

説明や反駁ではなくて、相手の注意を喚起する言いかたの「ガ」も、近畿におこなわれている。山本俊治氏の「大阪方言における文末助詞(池田市のことを中心として)」(『方言研究年報』第一巻)には、

○ソナ コト シタラ アケヘン ガ。

そんなことをしたらだめじゃないか。(五十・父→子)

というのが見える。

明らかに相手に同意を求める言いかた(広義での問いとされる言いかた)がまた、広く、近畿によくおこなわれているようである。兵庫県下では、「ガ(→ガー)」「ガエ」などとあり、大阪府下にも「ガエ」が見られる。例によって、ここに、純粹の「ガイ」から変化した「ガエ」も考えられるか。和歌山県下に問いの「ガイ」がいちじるしく、「ガエ」もまたいちじるしい。『和歌山県方言』には、県南の「エエンジャゲノ よいんでせう」が見え、県北の「オツタゲン ありましたでせう」が見える。三重県南部にも、「ガイ」の問いがよくおこなわれているらしい。奈良県南部も、おおよそ同様のようである。京都府下・滋賀県下では、同意を求める問いに、「ガ」のおこなわれることが一般的か。「ガ」文末詞の「ガン」形は、兵庫県下・三重県下などに見いだされるようである。

近畿地方の、「ガ」に関する複合形の文末詞では、兵庫県播磨に「ガイエ」などもある。

○ソナ コト チョットモ シラナンダ ガイエー。

そんなことはちっとも知らなかったんだよ。

などとある。近畿に、広く、「ガナ」複合形が認められよう。和歌山県下には「ガンダ」があり、「ガイシ」がある。「ソラ ウソジャ ガンダ。それは嘘

ですよ。」などと言われているという。(〈那智町〉村内英一氏「文末助詞の考察」『和歌山県方言』には、県北域の「アロガイシ あるだらう。」などの指摘が見える。「ガヤ」も、近畿の諸方におこなわれているか。三重県南には「ガレ」などもある。京都府丹後方面ともなれば、「ダゲー」がある。

○ソ^コニ ヒルガ オ^ッテ ショーガナイデス ダゲー。

そこに蛭がおってしょうがないんですよ。 (老女→藤原)

などの言いかたがなされている。『滋賀県方言集』には、「ソーヤガサ さうですがね」などの「ガサ」が見える。

七 中部地方の「ガ・ガイ」ほか

中部地方には、北陸地方に「ガ(ガ)・ガイ(ガイ)」のおこなわれかたのいちじるしいものがある。岐阜県下・愛知県下は、北陸について、多少とも連関西的であり、静岡県・長野県・山梨県となると、「ガ・ガイ」の問題が小さくなる。——これは関東地方の状況によくつらなることか。

福井県下に、「^トーチャン ^イッテモタ アトヤ ^ガー。(父ちゃんは出かけてしまった後だよ。)」などの言いかたがよくおこなわれている。(愛宕八郎康隆氏による。)石川県下では、能登地方に「ガ(ガ)」のよりいちじるしいものがあるか。「^コレ ^トレン ガ。」(これはとれないよ。)は、能登半島西北端での一例である。「ガ」の言いとめは、やはり、そうとうにつよい言いかたになろう。「^ナーモ ナカ^ッタデス ^ガー。」(“ひとつもありませんでした。”)というのでは、「なんにも」の意の「^ナーモ」と文末の「^ガー」のむすびとが、よく対応している。富山県下にふつうの「ガ」を、一中年女性の、私に対する発言例で見ると、「はい、アリ^マセン ^ガー。」(ありませんのよ。)というのがある。愛宕八郎康隆氏教示の「^ヘンジ スル コ^ッチャ ガ。」(返事を“しなさいよ。”)は老女の発言である。もとより、小人たちも「ガ」を言っている。新潟県下も富山県近くでの事例は、「^キョーウ ア^ツイ ^ガー。」(きょうは暑

いなあ。)などである。県南、秋山郷での一例は、「オチャデモ ヤラネーデ
ワルイッケガ。(お茶でもあげないで悪かったかね。)」である。(押見虎三二氏
による。)越後ならびに佐渡に、「ガ」のむすびが多い。「〜ダ ガ」ともな
りがちである。『全国方言資料』第2巻の「新潟県糸魚川市砂場」の条には、

m………… オラ ワラッタ コトガ アルガダガ
 おれは 笑った ことが あるんだよ。

などとある。「〜ダ ガ」が「〜ダン(ッ) ガ」ともある。さて、越後には、「越後のガンはくわれないガン。」“新潟のガンことば”などの言いぐさがある。「そう言うんだよ。」「そうなんだよ。」が「ソイガンダ。」と言われており、「ソイガン。」とも言われている。「アノ ガン。コノ ガン。」などの言いかたもおこなわれているらしい。こうした「ガン」は、上来、見てきた「ガ(ガ)」ことばとは、本源を異にするものであろう。「ガン」の「ガ」は、「の」に相当するものと思われる。岐阜県下に一般的な「ガ」を、美濃での一小女の発言例に見るならば、「これごらん。カオガ ウツル ガー。」(顔がうつるよ。——きれいな石を出して見せる。)というのがある。「ガ」は「ガン」とも言われているか。「アイマシテテンダ ガー。」(会いませんでしたよ。)は、私が高山市で聞いたものである。愛知県下にも、「サンマイモ アル ガー。」(三枚もあるよ。)などと、「ガ」がよくおこなわれていて、かつ、「ガン」も、尾張・三河に、そうとうによく見られる。「そうだよ!」は「ソーダ ガン。」である。「わたしはそんなことは知らないよ。」は、「ワジャー ソソナ コタ シランガン。」である。静岡県下にも、「コロボソイ ガ。」(心ぼそいよ。老女間)のような言いかたが聞かれはする。(この例では、土地の人が、「ガ」は「よ」だと説明してくれた。)長野県下にも、『全国方言資料』第2巻の「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条の、

m………… マタ ヤスマンテモラウガ
 こんど 休ませてもらうよ。

などが見られはする。本県下での、「そうだ。」の意の「ソイ ガ。」は、新潟

県下の「ガンことば」へのつながりを見せるものであろうか。富山県下にも「ソイ [↑]ガ。」（“そうです。”）がある。「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」（『全国方言資料』第2巻）にも、

m………… アーノ クサトリイ イクドーガー
あわ[粟]の 草取りに 行くのだよ。

などの言いかたが見える。

叙上の「ガ（ガ）」は、通常、共通語での「よ」あるいは「ね」に似た用法のものである。

同種の用法——説明的な言いかた——にたつ「ガイ」は、次下のように見わたされる。福井県下に、「ヒロ ナッテマス ガェー。」（広くなってるんですよ。）などの「ガイ」変化形が見え、「ゲー」も見える。石川県下にも、「ガイ（ガイ）」「ゲー（ゲー）」「ゲ（ゲ）」がよくおこなわれている。「ガエイ」などもある。「ナマエモ シラン ガエイ。」（名まえも知らないよ。）は、金沢市での一例である。

○オラ オドリ シラン ゲー。

わしはおどりを知らないよ。

は、能登西岸での「ゲー」例である。富山県下にも、「ガイ」以下のものがよく聞かれる。『富山県方言』には、

げ 「よ」の意「ね」の訛なるべし、終止法を承く

との記事が見える。新潟県下にも「ゲ」などがある。岐阜県下でも、「ガイ」「ゲー」「ゲ」などが見られる。愛知県下ともなると、「ガイ」はおもに「ギャー」「ゲァー」などである。静岡県下・長野県下以東ともなると、とりたてべきものがあまりなさそうである。

同意を求めて問い、推量して問うといった類の用法にたつ「ガ（ガ）・ガイ（ガイ）」が、なにほどこまた見わたされる。福井県下に「ガ」「ゲ」があり、

石川県下に「ゲー(ゲー)」「ゲ(ゲ)」がよく見られる。「ガイ(ガイ)」もある。「ツヤロ ガイ。」(そうだろう!?) などとある。富山県下にも「ゲー(ゲー)」「ゲ(ゲ)」がよく見られる。「ガイ」もよくおこなわれていて、東部例では、「アルガダロー ガイ。」(あるだろうがい!?) などとある。

北陸地方に、比較的よく、問題事象が見られよう。ところで、新潟県下ともなると、それがややうすいかのようでもある。ただし、『さとことば』には、「がえ」についての、

他の言へること、思へることをうちかへして、わが言ふことに同意を要求する語「於れが言うた通りだらうが江」

との記事が見える。

岐阜県下・愛知県下・静岡県下・長野県下・山梨県下の方面には、同意を求めて問うたりする「ガ・ガイ」の用法が、いちだんと見にくいのか。ただし、尾張のことばにも、「コレ ダレガ ヤブッタ ダ。オマイダラズ ガー(ガイ)。」(これはだれが破ったか。おまえだらうねえ!?) などの言いかたがある。三河にも同種の「ガ」などが見いだされる。

中部地方での、「ガ(ガ)・ガイ(ガイ)」に関する複合形の文末詞は、つぎのようである。

福井県下に、「ゲノー」「ゲノ」「ゲヤ」「ガイシ」などがある。

○コンバンワ ドコイモ イカン ゲノー。

今晚はどこへも行かないわよ。(老女)

は、越前海岸での一例である。石川県下に、「ガノ」「ガエイネー(ガエイネー)」「ゲーネー(ゲーネー)」「ゲネー(ゲネー)」「ガエーシ」などがある。「ガイチャ」「ゲチャ」「ゲッチャ」「ガイトコト」などの言いかたもなされている。富山県下にも、「ガイネ」「ゲネ」「ガイチャ(ガイチャ)」などがおこなわれている。

○「コン カヤー。」 ユー ガイチャ。

「コソ カヤ。」(来ないか。)って言うのよ。(中女→藤原) などとある。新潟県下にも、「ガネ」「ガヨ」「ガヤ」などがある。岩井隆盛氏の「直江津から佐渡へ」(『方言の旅』)には、富山県下から新潟県下へはいつてのすぐの市振のことば、

ハンカクサイ (アホらしい) ダラ (馬鹿) なことしたガイゲ (のですよ)。というのが見える。

複合形も、やはり北陸路に、いろいろのものが見られがちである。愛知県下・岐阜県下のものでは、「ガイモ」「ギヤモ」などがある。『飛驒のことば』には、

——がいぞ (接尾) ——ですよ。——のだよ。(そい——。)(山家地方) との記事が見える。

以上、複合形に関しては、諸用法のものをまとめかけた。

中部地方には、格助詞系の「ガ」文末詞は、あまりおこなわれていないのではないか。

八 関東地方の「ガ・ガイ」ほか

関東地域には、「ガ・ガイ」の勢力がきわめて(と言ってもよいくらいに)よわい。これは、西の中部地方の東域の状況によくつらなるものである。

ところで、八丈島には、問題とすべき「ガ」がある。八丈島方言の調査にしたがわれた先覚諸氏が、「ガ」文末詞を指摘してられる。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町大賀郷」の条に見える、

m………… ミー イカローガ

見に行つたよ、

などの「ガ」が、問題の「ガ」である。同7巻の「東京都八丈町宇津木」の条にも、

m………… マンノヒトン ミセタク オジャロガー

いまの人に 見せたい ですね。

などである。飯豊毅一氏は、「八丈島方言の語法」(『ことばの研究』)で、

この方言においては「行った」はイコオガ、イカライ、イカラ、イカランの順序で、ていねいさがうすれると考えることができる。

と言われる。「ガ」の表現法は、注目すべきものである。『方言誌』第一輯(八丈島方言)〈丸尾芳男氏 八丈島中之郷村において調査〉には、「飲みながら、ゆつくり話しませうよ。」が「ノモ^テエー、ユツクリ、ハナシヤロガン。」とされている。「ガン」形もある。「ガン」が「ガーン」などとも言われている。飯豊毅一氏は、かつて私に、八丈島方言の「ソゴンドロガイ。(そのようですね。)」というのを教示せられた。

私が、伊豆諸島の大島の人から聞き得たものには、「キョーワ サブイ ナー。」「キョーワ サブイ ガー。」(きょうはさむいねえ。)などがある。「ガ」は子どももおとなもつかうという。(「どこへも行かないよ。」は「ドホエモイガナイ ガ。」)『全国方言資料』第7巻の「東京都利島村」の条に見える、

m………… ハンジトヨガ イタランノーガ
ハンジというのが いたでしょうが。

では、推量して問う「ガ」が見られるのであろうか。

千葉県下・埼玉県下については、言うべきものがない。

関東内では、群馬県下の桐生市方面その他が、ぬきん出て、注目されるのか。知友、斯林不二彦氏は、桐生ことばについて、「アッ、Tサンガ クル ガー。(アッ、Tさんが来るよ。)」など、「ガ」文末詞の用例を、多く教示せられた。諸方言文献に、桐生市その他に関する、「ガ」の記事や用例を見ることができる。上野勇氏は、「群馬・埼玉」(『方言学講座』第2巻)で「ガ」について、

群馬の桐生・山田・新田・佐波では、ソーダガ・モージキスムガのように、「よ、ね」と同じように使っている。

と述べていられる。群馬県下に「ガン」もある。

栃木県下にも、なにほどか「ガ・ガイ」がおこなわれているのか。茨城県下のことは、今、定かでない。

関東北域では、問いなどの「カ・カイ」も「ガ・ガイ・ゲー」などと発音されがちである。これらが、若干、本題の事象にまぎれもする。

関東地方の格助詞系の「ガ」文末詞については、今、私に、言うべきものがまったくない。

九 東北地方の「ガ・ガイ」ほか

関東地方の「ガ・ガイ」微弱の大勢につづくのが、東北地方である。諸県下を通じて、言うべきものがすくない。

各県下に、「カ・カイ」の濁音化、「ガ・ガイ」はさかんである。「ゲ」もあり、「カエ」の「ガエ」もある。この種の濁音化の大勢におおわれて、本題の「ガ・ガイ」文末詞は、かげをうすくしてもいるか。

今、私は、福島県下・宮城県下・山形県下・秋田県下については、「ガ・ガイ」文末詞としてとりあげるべきものをほとんど持たない。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、

fサー フル フル ソノヒニ マズー エー フッタガー
さあ 降るわ 降るわ その日に もう 降ったね、

とある。「フッタガー」は、問題の「ガ」をとらえしめるものであろうか。

岩手県下も「カ・カイ」の濁音化がさかんであるが、中で、私は、県下の、
○ヨコマデ モッテ コナイタッテ イー ガー。

ここまで持ってこなくなっているよ。 (初老女→中女)

○オー モー ヨゲーデ ゴザンス[ü] ガ。

“もうたくさんです。” (“ご馳走なんか、しいられた時。”) (中女) などをとらえ得ている。前者は県南での例であり、後者は県中部、東寄りでのものである。「ガ(ガ)」の言いかたが、多少とも強調の表現になっている。さて、『全国方言資料』第1巻の「岩手県宮古市高浜」の条にも、

f カンズルーヤノ シタツァー ソレンス スー アノ フターリ ナゴゼ
 勘次郎屋の 人たちは ほらねえ あの ふたり 死んで
 ースガ⁴⁾

しまったんですよ。

4) 「なんぞございます」の転であろう。

とあり、他の県内方言書にも本題の「ガ(ガ)」や「ゲー」が見える。本県下でこのようにした状況に類するものが、他県下にもあるのかどうか。

青森県下に、また、「カ・カイ」の濁音化がいちじるしい。しかし、本県下については、今、私に、本題の「ガ・ガイ」文末詞の活動についての、述べるべきものがない。本県下でのいわゆる濁音化については、一つ、述べておいてみたいことがある。県内の方言関係諸文献には、

ガ 疑問助詞「か」にあたる。

などの記述が見える。「ガ」は疑問の意をあらわすものだ、といったような解も見える。一識者は、「疑問を示すもの」として「ガ」を教示せられ、これが「か」にあたることは、ほとんど意識せられないありさまであった。人は、国語の「カ」を意識しても、それとは別個に疑問用の「ガ・ガイ」文末詞を把持しているかのようである。「カ・カイ」の濁音形は、これほどに、当地方で、固有形然としているものなのか。

東北地方に、格助詞系の「ガ」文末詞は、通常、おこなわれていないのではなかろうか。

十 北海道地方の「ガ・ガイ」ほか

北海道地方にも、広く、「カ・カイ」の「ガ・ガイ・ギャー・ゲー」がおこなわれているらしい。

本題の「ガ・ガイ」文末詞のおこなわれることは、まず、東北地方のに似たりよったりのものであろう。『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

f………… コリャー アシタ ミセルガー
 これは あした 見せようね。

というのが見える。

十一 おわりに

「ガ・ガイ」文末詞は、中部地方以西によく生きているものであろうか。東国方面では、「ガ」が出てきたとおもったら、それは主格助詞でなければ接続助詞そのものであって、「ガ」どめになっけていても、それは接続助詞「ガ」での言いさしであろう。近畿以西の諸方言では、そういう言いさしの「ガ」助詞が、独自の効果の「ガ」になった。そのような、「ガ」のはたらかせかたをしたのが、近畿以西の方言風土であったと言える。中部地方では、わけても北陸の地が、「ガ・ガイ」をよく見せて、近畿への連関を示している。

関西系の地域に、広く、「ガ・ガイ」文末詞がおこなわれており、かつ、この地域のうちに、格助詞系の「ガ」文末詞も認められる。

「ガ・ガイ」文末詞の表現効果には、一定のつよいものがある。「ガ・ガイ」の音効果にもよることであろう。強調の表現のために、「ガ・ガイ」文末詞の利用されることは、あって、おおいによいことのようにも思われる。しかし、今日の状況では、すでにこれが、共通語の地位にはたっていないと見られよう。今後、に、「ガ・ガイ」文末詞の利用が、全国にわたって活発化するだろうとは、想察しかねる。

第十節 その他の助詞系転成文末詞

一 「カラ」の属

接続助詞の文末詞化するの、もつものことであろう。接続助詞は、文中、

大きな中間休止点をなすものである。

順接の接続助詞「カラ」にも、文末詞化のことが見られる。この種のことは、「カラ」接続助詞を常用する東国域に、よく見られる。『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村神着」の条には、

f………… コンヤノ²⁾ ジシンヤー ヘンダカラー

「今夜の 地震は 変だよ。」

2) [kɔsjanɔ]

というのが見える。「ヘンダカラー」が「変だよ」とされている。大橋氏教示の千葉県下でのもの、「サケ ノンダ ホーガ イーダカラ。(酒を飲んだ方が、いいのだから。)」での「イーダカラ」の言いかたにしても、「ダ」が文末詞的地位にあるので、つぎの「カラ」も、したがって文末詞的地位にたとうとするもののように見られる。関東地方での、「カラ」(北部では「ガラ」とも)接続助詞の言いとめになる文表現は、多く、「カラ」(または「ガラ」)の特定文末部を見せようとしている。栃木県下での「ゲンリョーガ アッタ モンダ カラ。」(原料があったものですからね。)などのばあいは、「カ」にアクセントの高音部があって、「カラ」の、特定文末部の様相が、とらえやすくなっている。茨城県北での一例、

○オレ ケシゴム モラー ガラ。

おれが消しゴムをもらうからね。 (小男間)

では、「ガラ」の特定文末部が見られよう。「カラ」は文末詞化せしめられようとしている。

東北地方になると、諸方言文献にも、文末の「カラ」を「よ」と言いかえてるのが見られる。福島県下の『会津若松市方言集稿』には、

エンカラ 行くよ、行きますよ

などが見られる。『全国方言資料』第1巻の「福島県相馬郡石神村」の条にも、

mイヤ メッケンダラ ユツテヤッカラ

いや 見つけたら 言ってやるよ。

というのなどが見える。同県下に、「カラ」のむすびの発展形「カラシ」(「ガ

ラシ・カラッ」も) も見える。『仙台の方言』には、

「いムから、いムから、あんだしなくてもいムから、おれすから」(いムよ、いムよ、あなたがしなくてもいムよ、わたしがするよ)

などの言いかたが、よく見られる。『全国方言資料』第1巻の「岩手県宮古市高浜」の条には、

mキョーワ ハマエ イッテクルガラ
きょうは 浜に¹⁾ 行ってくるよ。 1)「漁に」の意。

などがある。秋田県下でも、「カラ」「ガラ」が文末詞「よ」の役わりをなしている。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条にも、

mババ サンジョ モテキタカラ
ばあさん 3升 持ってきたよ。

などとある。

今、青森県下の例をあげることはできないが、北海道地方のものでは、『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条に見える、

fンダー サギー チョット カエラッガラ
それでは さきに ちょっと 帰りますよ。

などをあげることができる。

東国地方に関連の深い長野県下などにも、やはり文末詞調になった「カラ」がある。佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」には、

アルンダカラ(カラニアクセントがある時は、「あるんだよ」といふ強めになる)

とある。『全国方言資料』第2巻の「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条に見える、

m………… コノ ヤマン ナカワ ゼニヤ ネーダカラ
この 山の 中は……。お金が ないんだもの。

も、「ネーダカラ」が「ないんだもの」とされている。——「カラ」は文末詞調のものであろう。

非東国系の地方の、中国山陽地方や九州地方のうちには、「カラ」接続助詞ではない「カラ」格助詞の文末詞化が見いだされる。たとえば広島弁では、「エツト ダーテカラ。」（まあ、たくさん出して！ 中女→小女）のような言いかたがなされており、「テ」接続助詞に、「カラ」格助詞がつけ加えられている。この「カラ」は、遊離して、文末詞的なものになろうとしている。「ワンデモ セーデカラ。」（わたしだってするわよ。）などの「カラ」にしても、格助詞系の「カラ」の文末詞化を思わせるものである。

今日、広島っ子の若い女性などが、「どうどうしたカラ」などと言っている。「ケン」「ケー」を順接の接続助詞とするこの地で、共通語の「カラ」がとり用いられており、しかもそれが、文末詞ふうのものとしてされている。（文末詞化のことにささえられて、「カラ」共通語の採択が、しぜんにおこっているとも言えようか。）

このようなことは、山口県下にも見られる。

さて、岡野信子氏の「助詞『カラ』の生態——若松市島郷地区における——」（『北九州国文』第七号）には、

○シツトルダケ オシエタラ エーデ カラ。

（知つてるだけ教えればいいじゃないの。教えなさいよ。）これは非難をこめた命令である。

などの言いかたが見える。やはり「カラ」が、問題としてとりたてられよう。大分県南で私が聞いたものには、「ユイエーヂ カラ。」（そりゃ言うさ。）などがある。——「カラ」の文末詞ふうのものが認められよう。「カラ」が「カリ」ともあり、やはり県南の「オレーヂ カリ。」（いますよ。もちろん。）などが見られる。（池田勘氏による。）宮崎県下にも、「カラ」からの「カイ」などが見られる。

鹿児島県下での「センセガ キタガラ。」（先生が来たから。先生が“来たぞ”。）などの言いかたにも、「カラ」接続助詞の文末詞化傾向が認められようか。

二 「ケン」の属

中国地方のことばづかいには、順接の接続助詞「ケン」の文末詞化傾向が見いだされる。広島県の『江田島町史』の「方言」の条には、

マー ドーヒタン コンニャー ワリーケン（中央の女子）
まあ、どうしたの。この人は悪いよ。

などの例が見られる。山陰地方でも、

○ナガ^ーエ^ーコト シマス ジャケ^ー。
長い間しますんですよ。（老女→藤原）

などの言いかたが見いだされる。

四国の言いかたにも、「カワン ケン。」（“買えばいいのに。買いなさいよ。”）などの言いかたがある。

九州、博多ことばなどでの「スカンチャケン。」（“この人いやなのよ！”）というのにも、「ケン」の文末詞化が見られようか。林田明氏の「長崎市方言の文末助詞」には、

○ジ^ット シ^トランバ。テバ ヒカ^ント。タワ^ルッ ケン。

じっとしていなさい。手をひかないで。たわれるよ。（初老女→幼男）
などの言いかたが見える。『全国方言資料』第9巻の「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」には、

fマ ベントーワ コケ^ー シコー^チョルケ …… タマゴドム
まあ 弁当は ここに 支度してありますよ。 卵を
イェ^ーチ イレ^チョルケン
焼いて 入れてありますよ……。

とあり、「長崎県上県郡上対馬町鱒浦」には、

mアー ソルジャ ドーカ オネガイ シマスケ^ー
ああ それでは どうか お願い しますよ。

とある。福岡県下にも、同趣の「ケ」があり（「キ」もあるか。）、大分県下に

も、問題としうる「キ」がある。『大分県方言の旅』（第一巻）には、「ホリデン ワリーワー、トモダッチャーキー。（でも悪いわ、友だちだもの。）」などの例が見える。

三 「サカイ」の属

近畿弁の接続助詞、「大阪サカイ」などと言われる「サカイ」も、順接の接続助詞として利用されるうちに、それが、文末詞ふうに用いられたりしているか。「何々サカイ」が、「何々サカー」などと言われているのでは、「サカー」の文末詞色が見られるようである。

四 「トテ」の属

文語ふうの「とて」が、特定の用いられかたのもとで、文末詞ふうのものになっている。愛知県知多半島で私が聞いたことばには、「エーエー ダイジョーブデス トテ。」（ええええ、だいじょうぶですとも。）というのがある。『名古屋ことば』には、「君も行くのか 答 行くとて」との言いかたが見える。

五 「トモ」の属

東京弁には、「そうだ トモ。」などの言いかたがいちじるしかろう。関東地方には、こういう「トモ」文末詞が見られ、東北地方にもまた、おなじ「トモ」文末詞が見られる。『福島県方言辞典』には、「ヨーガストモ（ようございませとも）」などが見える。

北海道にも、この種の「トモ」が認められる。

長野県下にも、『全国方言資料』第2巻の「長野県上伊那高遠町山室（旧三義村）」の条の、

fアー ソートモ

ええ、そうですとも。

などが見える。ところで、越後北部の新発田では、

○ヤハリ ソー ユー ヨー デス トモネー。

やはりそう言うようですトモねえ。

というような「トモ」を、私は聞いた。この方面には、こうした、おだやかみをあらわす「トモ」がおこなわれている。富山県下では、「ソー デス トモ。」(そうですとも。)など、つよく応じる「トモ」が聞かれる。

近畿地方にも、つよく応じる「トモ」がおこなわれている。

ここに特記すべきは、中国地方北海の隠岐に聞かれる「モ」である。神部宏泰氏の「隠岐島五箇方言の文末助詞」には、

○カワッチョリマス モ。マルデ カワッチョリマス モ。

かっていますとも。まるでかっていますとも。〔むかしとは〕

(老男)

などの事例が見える。「トモ」が「モ」とされたのか。それにしてはひとり隠岐に、この種の事態の見られるのが注目される。(方言上の形態省略のさまざまは、成立も分布も、まことに逆睹しがたいものがある。)

六 「バシ」の属

林田明氏の「長崎市方言の文末助詞」には、

○ソゲン ユータ バーン。

そんなに言った? (少女→少女)

の例が見え、「バーン」が、“文末助詞的に用いられてもいる。”とされている。

七 「ヤラ」の属

「アレ ナニ オッシヤイマス ヤラ。」(あれ何をおっしゃいますやら。)など、「ヤラ」が文末詞ふうに使われてもいる。こうした「ヤラ」が、諸方言の中に見いだされる。

八 「ニロ」の属

肥前平戸のことばづかいには、

○オトツツァー ドケ イカシッタ ニロ。

おとつっあんはどこへいらしたのかな？

というのがある。人は、この「ニロ」と「ナ」や「カ」とを、同類のものとして
 いる。筑後の柳川市でも、私は、“勉強せんか。”の「ベンキョセン ニロ。」
 を聞いたことがある。——「ニロ」が特定文末部ふうに発言された。望月克巳
 氏の「ことばじりに残る代名詞」（『言語生活』第二十六号）には、

昔は武士が目下の者に向けて「居んにろ」（いるか？）とか「為んにろ」
 という具合に使っていたそうだ。このニロ、ジロは二人称代名詞「なれ」
 （汝）と関係がありそうだ。

とある。

小田寛次郎氏の「佐賀県藤津郡久間村地方方言」（『方言誌』第十四輯）には、

あれも犬かね アイモインヂヤイロ

などというのが見える。私が、長崎県西彼杵半島で聞いたものには、

○………… ヨメン ナル カイロ。

…………嫁に“なるかいね”。（“嫁になれるかね。”）

などがある。

「ニロ」や「イロ」の語源については、私に、いまだ言うべきものがない。

九 「カモ」の属

「そうかもしれない。」などの「カモ」が、文末詞ふうに用いられてもいる。
 「………… カモ。」など。

十 「バヤ」の属

越後弁には、「ナニウツロバヤ（どうしてうつるもんか）」などの言いかたが

ある。山形県の庄内弁にも「バヤ」がある。(上巻 p. 578・580) こういう「バヤ」は、文末詞ふうのものであろうか。(起源のことは保留する。) 井上一男氏は「種子島方言研究」(『方言』第三卷第七号)で、

「ばや」を用ふる事がある。「ユカンバヤ」の如き。

と述べていられる。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県薩摩郡上甕村中甕」の条には、

fムカシン カタモ ナカゴト ナッテシマイモシタトバヤ
昔の 形も なくなって しまいましたんですよ。

というのが見える。

岡野信子氏は、昭和52年6月29日の『中国新聞』紙上に、「バヤ」についての、

下関市吉見の浜で「カゼガ ハエニ マワッチョル バヤ(南風に変わっているよ)」を耳にした。バヤは“私の思いはこうなんだよ”と訴えかけることばで、九州のバイにほんとによく似ている。バヤを言う地域は狭くて、吉見から豊浦町小串にかけての漁業集落と蓋井島とである。この地域は、漁業の上で九州の筑前域と交渉が深かった。バヤことばは九州のバイとかかわるものであろう。九州のバイは今日もかなりさかんであるが、この北浦のバヤには衰退の色が濃い。

の記事をかかげられた。

岡野氏などの「バヤ」は別として、古語の「行かバヤ。」(八重山方言にもこれがあるという。)などの「バヤ」にいくらか近いものが方言に見いだされたとしたら、それは今、この位置においてみてもよいかと思われる。

十一 「ケレド」の属

電話でのことばづかいに、「もしもし。私はだれそれです ケド。」というのがある。「ケド」は、「ケレド」と同様、逆接の接続助詞であるけれども、上のようなばあいは、「ケド」が文末詞ふうのものになってもいよう。「ケレド」や「ケンド」や「ケンドモ」「ケドモ」なども、文末詞ふうのものにされようとも

している。

十二 「ドモ」の属

出雲弁には、「ナラ^チョリ[i]マス[ü] ダドモ。」(ならってますけど。)などの言いかたがある。「ダドモ」が文末詞ふうになっている。「けれども」の意の「ドモ」が、やはり、文末詞ふうのものとされようともしている。

○藤山君などは アレ^{デン}タ ドモ^ネー。

は、越後北部でのものである。長野県北での一例は、「シ^{ジュ}ー ヨ^{ッタ} ドモ。」(しじゅうお宅に寄りましたけど。)である。

○ナン^ア オカ^{マイ}モ デキ^ネー ドモ。

なんのおかまいもできませんけど。(中女→初老女)

は、富山県下での一例である。

○ヨ^ー ゴザ^ンシ[i]タ ドモ。

ようございましたけど。

は、岩手県下で聞いた、ていねいなことばづかいである。東北地方や北海道地方には、「ドモ」のこういう用法がよく見られよう。

九州の南部や西部には、「ドモ」の「ドン」がある。

○下^の トー^{サン}ナ オレ^バ ヨカ^{ッタ} ドン。

下のトーサン<人名>がおればよかったんだけど。

(中男→老男)

は、宮崎県下での一例である。

十三 「バッテン」の属

九州弁での「バッテン」がまた、問題になる。林田明氏は、「長崎市方言の文末助詞」で、

○マー^ダ イカ^ジ オル^{ケン}, イッ^{ペン}ドマ イカ^ニャントオモト^ッ 下^バッテン。

(海水浴に) まだ行かないでいるから、一度ぐらいは行かねばならないと
 思っているのよ。(初老女→青男)

との文例のあつかいをしていられる。熊本弁などでも、「なかったです バッ
 テン。」といったような文表現がなされる時、逆接の接続助詞「バツテン」は、
 文末詞ふうのものとされがちである。

十四 「ガニ」の属

愛媛県南の内には、「そうだのに！」の意の「ソーノ ガニ。」との言いか
 たがある。「ガニ」が文末詞ふうのものになっていよう。「チガウ ガニ。」(ち
 がうのに!)「コッチ キタラ エー ガニ。」(こっちへ来たらしいのに!)
 など、「ガニ」が広く用いられている。

富山県下にも、似た「ガニ」がおこなわれている。『富山県方言集成稿(二)』
 には、

むっちゃんどこへ行つたろかね ——そこにおつたがに。

というのなどが見える。

十五 「コソ」の属

文表現上、係助詞「コソ」を言った所で文を終止させれば、「コソ」は、特定
 の訴えことばになりやすい。諸方言内に、文末詞化した「コソ」が見いだされ
 る。山本靖民氏の「神奈川県方言資料」(『方言』第三卷第四号)には、

シッテコソ 知りません

とある。私が、周防祝島で聞いたものには、

○イエィ コトバドモナラ コソ。

いいことばなんかならよ。(——こんなことばをどうするのか?)

(中女→藤原)

というのもある。土居重俊氏の「土佐方言語法(下)」(『方言』第七卷第八号)
 には、「幡多郡下川口村では次の如き強意用法がある。」とあって、「ハヨーコ

イト[・]コソ (早く来いつたら)「ハシレトコソ (走れ, 走れ)」が見える。

「コソ」は、方言上、「クソ」にもなっている。『伊予松山方言集』には、「おどれクソ。(おのれ糞)」などが見える。県下、瀬戸内海島嶼には、「シッテクソ。」(知るものか。)などがある。阿波南部では、「ダレクソ。」が「だれが知るものか。」である。こうした「クソ」が中国地方にもあり、近畿のうちにも見いだされる。岐阜県美濃で私が聞いたことばには、

○カマ^ウナ ヨー。ヨ^ーワ ナイノニ ク^ソ。

そんなところをいろいろのではないよ。用はないのにクソ。

(老女→孫小男)

というのがある。九州佐賀県下などでも、同種の「クソ」が聞かれる。「オイガマケクソ。」(おれの負けだよ。)などとある。

九州の福岡県下・佐賀県下・熊本県下・長崎県下・大分県下には、「コソ」に関する一群の特定文末詞がよくおこなわれていて注目される。

福岡・佐賀・熊本・長崎・大分の諸県には、「クサ」がよくおこなわれている。「クサ」は、「コソわ」からのものであるだろうか。あるいは、のちに述べる「クサイ」からのものかもしれない。いずれにしても、「コサ」などの形ではなくて「クサ」になっているところに、ものの、文末詞としての存立が明らかである。「クサ」は、なかんずく、福岡県下によくおこなわれていようか。「アノクサクサ。クサカクサクサ。」(あの草はね。くさい草ね。)との言いぐさがある。「クサ」が、「バイ」や「タイ」とともによくおこなわれている。筑前糸島半島での実例は、

○ソヤケンクサ。

それだからね。

○ソレカラクサ。アノクサ。イネノクサ。

それからね。あのね。稲のね。

○ヘー、シマスクサ。

へえ、(田植えも) しますとも。(老男→藤原)

などである。県下に、「クサ」の使用のきわめて自在なものが見られる。佐賀県下にも「クサ」がさかんである。「そうだ。」は「ソギャン クサ。」である。中年の婦人も、「それは、佐賀弁 クサ。」などと言っている。熊本県下は、福岡県筑後につづいて、おもに北寄りに「クサ」が見られるのか。ちなみに『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県薩摩郡鹿島村鹿島」の条には、

fメシモ ク²⁾ッシェンドクサ

「飯も 食べさせないぞ」と

2)「食わせんぞこそ」の意。

というのが見える。「コソ」に関するものが、なお広く見いだされるのであろうか。それはさておき、長崎県下にもいくらか「クサ」が見いだされるらしい。佐世保市のことばには、「ノリトジンジャ クサ。(祝詞 神社だよ。小学生男間)」などの言いかたがあるという。『続老岐島方言集』には、「クサナ」複合形も見え、「ヘツパク云ワンチチヨカクサナ。」などとある。大分県下では、とくに西北域の内に、「行った クサ。」などの言いかたがある。——県下の一般では、「クサことば」は聞きかねる。以上、一団の地域におこなわれる「クサ」は、おおよそ、対等者以下へのもの言い用に用いられることが多いものであろうか。

「クサ」にならんで、「クサイ」がかなりよくおこなわれている。「クサイ」は「クサレ」からのものか。その「クサレ」は、「コサレ」からのものに相違あるまい。九州地方に、「コサレ」形の文末詞化したものは見いだされない。が、「クサレ」形は、大分県豊後の内に、「イトコヂ クサレ。(従兄弟ですよ。)」などというのが見いだされる。(池田勘氏による。)[「クサレ」はかなり下品であるという。長崎県五島列島内にも「クサレ」があるか。

「クサイ」文末詞は、筑後にかなりさかんである。かつては久留米の人が、「久留米は「ア^ア クサイ」で、かならず「イ」をつける。「ア^ア クサ」はいなかだ。」と言うのを聞いた。筑後南部の「クサイ」例は、「コガ ヌッカ クサイ。」(ここがあたたかいよ。)などである。——「クサイ」は同等以下によく

つかうという。佐賀県下にも、「クサイ」がよくおこなわれているらしい。「クサイ」が「サイ」にもなっている。熊本県北域にも、「クサイ」があり、「サイ」がある。

○アタリマエ クサイ。

あたりまえですとも。

は、阿蘇山南麓によく聞かれる「クサイ」の一例である。筑後内には、「アノクサイ。」「アノッサイ。」も見いだされる。

つぎに、「クサイ」相当の「クサン」が、福岡県下・佐賀県下に見られる。「オリャクサン。」(わしはね。)は、筑後での一例である。筑後に、「アノッサンデス。」というもある。——これについては、“[アノクサン]”の意で、目上の人に言う。目下には「アノクサイ。」との説明があった。佐賀県下での一例は、「[↑]ニャクサン。」(“さて。”“ほかでもない。”)である。佐賀県内にも、“[クサン]”のほうが、「クサイ」よりも、もの言いがやや上。”との考えかたがある。筑後には、「アノクサンモ。」(あのね。)など、「クサンモ」複合形も見られる。「モ」は「もし」からのものであろう。佐賀県下では、「クサンタ」がよく聞かれる。

○フトカ ミチノクサンタ。ア[↑]モンナター。

大きな道のね。あるものね。

は、県南での一例である。「クサンタ」は、「コソ^{あなた}アンタ」であろう。

「クサイ」の変形「クシャー」「クセー(クシェー)」などが、佐賀県下に見いだされる。はなれて、福岡県東部にも「クセー(クシェー)」が見いだされる。『全国方言資料』第6巻の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」の条には、

m…… コリヨリ ウエガ アツェクセー オドーワ

これより 上が あるものか、 おれたちは。

とある。このほうの、「クサイ」はおこなわれていない地域での「クセー(クシェー)」は、「クサイ」に関するものというよりも「クサ」に関するものであろうか。判然とはしない。大分県下にも、豊前のうち、豊後北部のうちに「ク

「セー（クシェー）」が見いだされる。中津市のことばでの一例は、「シツチェ
クシェー。」（“ぜったい知らん。”）である。

以上、主として九州北半方面のうち、「コソ」関係の諸形が群がり存在している。複合形には、なお、佐賀県下に「クサナ」「クサマイ」（「マイ」は「オマイ」か。）などもある。

おもえば「コソ」の言いかたが、文末詞の世界に、よくもこうして自由に展開せしめられたものではある。

十六 「クライ」の属

福井県下のことばづかひに、「そうだとも。」の意の「ホジャ クライ。」「ホヤ クライ。」がある。「クライ」が文末助詞化しようとしてはいないか。（「それは明るいとも。」は、「ホリャー アカルイ クライ。」である。）大阪弁にも、「オマス（オマッ） クライ。」（“もちろんありますよ。”）などの言いかたがある。近畿に広く、こうした「クライ」が認められようか。

十七 「マデ」の属

『名古屋方言の語法』には、「マーツィートロー マデ（もう着いてるだらうよ）」「待ットリャ エー ダロー マデ（待つてゐればいゝだらうよ）」などの文例のあつかひが見える。

※ ※ ※ ※ ※

助詞系文末詞の世界ははなはだ広い。助詞そのものが多様だからに相違あるまい。

転成文末詞の世界を見わたして、助詞系文末詞を見さだめたのは、適切な処理であったと考える。

第十章 助動詞系の転成文末詞

第一節 総説

助動詞の「ダ」その他が、転じて文末詞ともなり得ているのは、当然であろう。

たとえば、

きみ、何にする？

↓↑
ぼくはコーヒーだ。

という会話があったとする。「ぼくはコーヒーダ。」との言いかたでの「ダ」には、相手に対する、なんらかの訴え性におい出ている。

助動詞系の文末詞といえば、これはおのずから、種別に限りがあることは、また明らかであろう。「ダ」「ジャ」の二者が代表的なものである。その他では、「ヤ」「ナラ」以下のものが、いくらか認められる程度である。

第二節 「ダ」の属

一 はじめに

指定断定の助動詞「ダ」のおこなわれることは、主として、日本の東半域においてである。したがって、明らかに助動詞系「ダ」文末詞とされるものもまた、同地方内におこなわれるのが認められる。

山陰地方は、関西にあっても、また、「ダ」文末詞をよく見せている。

指定断定助動詞出自の「ダ」文末詞としうるもののほかに、他出自の「ダ」文末詞、また出自不明と今は言うほかはない「ダ」形文末詞がある。——これ

らは、近畿以西に認められる。

二 「ダ」文末詞の存立と活動

南島方面に関しては、町博光氏の「与論島朝戸方言の文末詞」に、

○sufup̄ fitfan̄ da: (中女→複)

<汗も 為た ダー。>

汗も作ったんだよ。

などの事例が見え、

指定・断定の助動詞「だ」からの転成と考えられる [da:] には、話者の主張性がこめられる。

との説明が見える。

高橋俊三氏が与那国島比川方言について教示せられたものには、

○ba-ŋ̄ denkyā̄ nu-ŋ̄ agā^hsu^hn̄ diyā.

私たちの電気は(メーターが)まったくあがらないんだ。(初老男)

というのがある。「ディヤ」の言いかたがしてあって、「あがらないんだ」との説明が加えられている。「ディヤ」は「ダ」関係のものかどうか。

九州地方には、明らかに助動詞系と認められる「ダ」文末詞は、ほとんどおこなわれていないようである。——本来、指定断定の助動詞「ダ」はおこなわれない所がらである。

ところで、「ダ」形文末詞としうるものは種々に見いだされる。西がわには、肥前域を中心として、南北に、「ダイ」文末詞が見わたされ、これが「ダー」「ダ」ともなっている。この種のもは、大分県下にもある。肥前では、「ダイ」「ダン」「ダー」がおこなわれていて、

○yoka^hrō diyā.

“いいことじゃないですか。”

など、これらは“すべて推量形につく”などと言われている。

「ダンモ」「ダンタ」「ダナ」などの複合形もある。

用法には、なお、他のものもある。いずれにしても、この種の文末詞は、「ダイ」文末詞などとも合わせて観察することのできる、非助動詞系のものに相違あるまい。(p. 78)

肥後天草例には、

○ヤキュー シュー ダ。

野球をしようよ。

との言いかたがある。人からこう言われると、“おしつけられたような気もちになる。”という。こういう「ダ」は、感声系の「ダ」文末詞かのものであるが、判然としない。(上来の「ダイ」「ダ」の「ダ」かもしれない。) 肥後の人、荒木秀氏は、「ダ」形文末詞について、

「……だ」と言うのが、指定と全く違った意味には用いられることがあります。然し、これは、同等の人や目下の人に限って使います。「魚つりに行こうだ。」の場合、「魚つりに行こうよ」と云う意です。

との説明を寄せられたことがある。

上の、九州の「ダイ」とおなじと見られるものが、山口県下にも見いだされる。県西北部の一例は、

○だれそれは イカザッタ ダイ。

だれそれは行かなかったよ。

である。県東部内の一例は、

○マコト ウソジャ ナー ダイ。

“ほんとに、うそじゃあないよ。” (中男 独話的)

である。山口県下は、明らかに「ダー」助動詞をおこなわない所である。「ダイ」の存立は、九州なみのものなのであろう。県下に、「ダイ」相当の「ダ」もあるか。

広島県下となると、この種のもものがもはや見られない。

中国地方の山陰道には、出雲、隠岐から因幡にかけて、助動詞系の「ダ」文末詞の盛行が見られ、なお、この傾向が、東に、丹後半島までたどられる。

島根半島での一例は、

○コレー、ナニ[i] シ[i] チョー ダー。

これ、何をしてるか。

である。出雲に接続する石見東部にも、この種の「ダ」が見られる。これらの地方には、「ダ」の「ダイ」もおこなわれている。

○コーユ[ü]ー モー コシ[i] ラエマシ[i] タ ダイ。

こういうものをこしらえましたよ。 (老男→藤原)

は、出雲奥での一例である。

隠岐の一例は、

○アエモ ルスダ ダ。

あの人もるすだよ。 (老男→中女)

である。(神部宏泰氏教示)『全国方言資料』第8巻の「島根県知夫郡西の島町黒木字字賀」の条にも、

f エヘッ タガイニ タノンマスダ

お互いに (よろしく) 願いますよ。

と見える。

鳥取県での、西部での一例は、

○アイツ[ü] ガ イチ[i] バン カライ ダ。

あいつがいちばん性根がわるいよ。

であり、東部での二例は、

○ドコニ[i] イッタ ダ。

どこに行ったか。(問い)

○ハヨ イヌル ダ。

早く帰るさ。(一種の命令表現) (老女→孫幼女)

である。

○メズ〔ü〕ラシ〔i〕ー ヒ〔i〕トガ キ〔i〕トラレル〔ü〕 [↑]ダ。

めずらしい人が来ていられるよ。

は、因幡奥での一例であり、老人間で私のことが問題にされたものである。

鳥取県下にも、「ダ」の「ダイ」が見られる。例は、

○アダノ クルチュワ ナニカラ アダガ クル ダイ。

仇が来るというのは、何から仇が来るのか。 (中男)

などである。

指定断定の助動詞「ダ」の分布は、山陰地方につづいて、広島県北・岡山県北にも見られる。——陰陽にわたる、ごくしぜんの流布であろう。このゆえにまた、山陽がわにも、助動詞系の「ダ」文末詞が認められる。広島県北の一例は、

○ソレカラ オキテ インダ ダー。

それから起きて帰ったよ。

であり、岡山県北の一例は、

○ミチビキマツガ ツツイトル ダー。

導き松（道案内の松）がつづいてるよ。

である。「ダイ」の形は、岡山県下に見られる。

但馬での傾向は、因幡のにつづくものである。京都府下の北部にはいり、丹後半島での実例を見るなら、

○シェンシェー、ドケー イグ ダー。

先生、どこへ行くの？ (小学生六男→先生)

○へー、シヤワセデアリマス ダー。

はい、(火事のないのは) しあわせでありますわ。

(中女→藤原)

などがある。

以上、「ダ(ダイ)」文末詞のおこなわれる地域に、「ダナ」「ダイヤ」「ダカ」「ダデ」「ダワ」などの複合形も見いだされる。

○ナンボ アル ダーナ。

いくらある？（いくらあるのかい？） （青男問）

は、因幡での「ダナ」例である。

○イチリグライノ トコイ イク [↑]ダデー。

一里ぐらいの所へ行くのでね。

は、丹後半島での「ダデ」例である。

鳥取県東部では、

○ワザワザ コライタデス サカ。

わざわざ来られましたか？ （中男→藤原）

など、「ダカ」の「サカ」も聞かれもする。

四国地方は、指定断定の助動詞「ダ」を持たない所である。したがって、助動詞系の「ダ」文末詞は見ることができない。

ただ、「ダ」形の文末詞として検出しうるものをとらえるとなれば、この地方内にも、非助動詞系の「ダ」文末詞が認められる。

ことに四国東部の徳島県下には、この種のものが優勢である。（中巻 「第六章 感声的文末詞『ダ』」参照。p.400）念のため、ここにも事例をあげるならば、

○この稗の中には、モミ アルンジャ [↑]ダ。

この稗の中には、糲があるんですわ。 （中女→藤原）

などがある。「ジャ」助動詞のおこなわれる地域にあって、このように、「ダ」文末詞が見えている。動詞命令形の言いかたを受けむすんで、「ダー」のたちはたらくことも多い。

香川県下にも、いくらか、同種の「ダ」文末詞——感声的文末詞——が認められる。（中巻 p.402）

愛媛県南にも、高知県内にも、問題の事実が、なにほどかあるらしい。

中巻 p. 403以下にも記述したとおり、近畿地方にも、四国東部に対応する和歌山県地方に、等しく感声の文末詞「ダ」が認められる。(まれに、これが「ラ」にもなっている。) 介在する淡路島内にも、「ダ」が見いだされる。(これらのことについても、中巻 p. 403 以降を参照。) 四国・紀州は、南海道の地である。ものが、上述のように分布しているのは、まさに注視すべきことである。

和歌山県新宮市での事例をあげてみるならば、

○ソーヤ ダー。

“そうや ノー。” (初老女)

○ソリヤー セーヨーシヤ ダー。

それは西洋紙だよ。(説明する。念をおす。) (老男)

などがある。人は、“「ダ」は、同輩から目下に。目上にはつかわない。”と言っている。指定断定の助動詞「ヤ」がおこなわれていて、そのもとに「ダ」が出ている。——文末詞に相違ない。「ダー」を「ノー」と言いかえているのもおもしろい。和歌山県地方には、「ワダ」の複合形もよくおこなわれている。

三重県紀州分にも同種の文末詞がある。

○ヘビヤ ハタケニ アタリイタ ワダ。

“蛇が畑にうねっておった (のたくっておった)。”

は、南牟婁郡下の一例である。

奈良の十津川方面にも、同種の「ダ」があるか。私が、新宮で、十津川人から聞き得た一例は、

○アレオ ミー ダ。

あれを見るよ。

(「アレ ミー ヨ。」というのも教えられた。)

である。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条には、

mゴ ゴジョ イテモダ ヒトヨサ ナカイ トマライ イカナンダ
 五条へ 行っても 1晩 途中で とまらなければ いけないか
 イジャッテノーラ

らねえ。

とある。

中部地方以東は、「ダ」助動詞のよくおこなわれる所である。

中部地方に、助動詞系の「ダ」文末詞がよくおこなわれている。——ことは、山陰地方でのばあいと同様である。

ところで北陸地方は、助動詞系の「ダ」文末詞を見せることがすくない。福井県奥の勝山ことばには、

○カラダ^フ カタイノガ イチバンヤ ダ。

(小さい時分は、) からだのじょうぶなのがいちばんだわ。

(母おや間)

との言いかたがあるか。(昭和33年、NHK放送で聞いたものである。) 富山県下にも、似たような「ダ」があるらしい。

愛宕八郎康隆氏の教示によるのに、越中福野町では、

○ソナチ コト ユー モンデ ナイ ダハン。

そんなことを言うものではない ダハン。

との言いかたがなされているという。

新潟県下の、南寄り奥地で私が聞き得たものに、

○シンデ シマッタ ダ。

死んでしまったよ。(老女→藤原)

というのがある。『全国方言資料』第2巻の「新潟県糸魚川市砂場」の条には、

f………… マイニチ マイニチ オリャ ナガメテ ミトラーダ

毎日 毎日 わたしは ながめて みていますよ。

というのがある。

岐阜県下ともなれば、

○キレイニ アラエル ダー。

きれいに洗えるよ。(かる石で洗えるとの説明) (小女→藤原)

などの言いかたが、ふつうに聞かれる。

愛知県下に、「ダ」がさかんである。「ダイ」「ダン」もある。——「ダン」は三河におこなわれがちか。

○ドー シロイダ ダー。

“そんなことをやってなんだ。”

は、三河奥での「ダ」例である。愛知県下での、「ダ」に関する複合形の文末詞に、「ダナ」「ダネ」「ダヨ」「ダカ」「ダワナ」などがある。

静岡県下にも、助動詞系「ダ」文末詞がさかんである。「ダイ」ともある。

○「ウラ」<自称>が、つい、デチャウ ダイナー。

「ウラ」ということばが、つい、出てしまうよねえ。 (老女)

は、御前崎近くでの一例である。三河寄りには「ダン」も聞かれる。本県下の、「ダ」に関する複合形の文末詞には、「ダネ」「ダノ」「ダヤ」「ダヨ」「ダゼ」「ダニ」などがある。

長野県下にもまた、助動詞系の「ダ」文末詞がさかんである。「ダイ」ともある。

○オレワ コレ タベラレネー ダ。

おれはこれをたべられないよ。

は、北部での「ダ」の一例である。東筑摩郡下で聞いた例には、

○アレワ マダ ニブソクダ ダ。

あれはまだ煮不足だよ。(さっきの家でたべたふきの佃煮のこと)

(老女→老男)

がある。県南の飯田では、「ダ」文末詞を聞くことができなかったように思う。『全国方言資料』第2巻の「長野県上伊那郡高遠町山室(旧三義村)」の条には、

m……… ソンナ ジダイモ アッタダー

そのような 時代も あったんだ。

とある。本県下での、「ダ」に関する複合形には、「ダカ」「ダニ」「ダワネ」などがある。

○ムカシワ ソイ コト イッタ ダワネー。

むかしはそういうことを言ったよねえ。

は、「ダワネ」の一例である。

山梨県下にも、同種の「ダ」「ダイ」がよくおこなわれている。

○ドー シタ ダイ。

どうしたの？

などとする。本県下の複合形には、「ダヨ」「ダカ」「ダワ」その他が見られる。

関東地方もまた、助動詞系の「ダ」文末詞の、およそさかんな所である。

——「ダ」助動詞の盛行と「ダ」文末詞の成立とは相関的である。

関東南部例は、神奈川県下の、

○コノ クレーナ ミガ ナル ダー。

このくらいな実になるよ。 (中男→藤原)

千葉県下の、

○わたしの上も いくらも イル ダー。

わたしの上も、いくらもいますよ。 (九十八歳の老女→藤原)

である。「ダー」と、長呼の発音のなされることがいちじるしい。よびかけの気分は、しぜんに、こういう発音をうながすのであろう。複合形には、「ダヨ」「ダカ」などがあり、「ダーカイ」などともある。

東京都下の伊豆諸島にも、たとえば新島で、

○ドー シタ ダヨ。

どうしたんだ。

などとする。『全国方言資料』第7巻の「東京都利島村」の条には、

fアー ヤケタトキニ イタダー

焼けたときに いましたよ。

とある。諸島に「ダ」文末詞が見られ、『伊豆大島方言集』には、

行くダーン 行くか、行くだな。

ともある。「ダガ」などの複合形もあるらしい。

関東北部の「ダ」文末詞のいきおいは、どの程度なのであろうか。南部でのほうが、いきおいがよりつよいかのようにも思われる。北部の栃木県北では、かつて若い男教員氏が、「那須村でも那須山のふもとの大沢へゆくと全然ことばがちがう。「これはりんごだ。」というも、「リンゴダダ。」と言っている。」と、ふしぎそうに語るのを聞いたことがある。

関東北部ないし関東地方に、「ダ」の「ダイ」もおこなわれている。

東北地方には、助動詞系の「ダ」文末詞が、おおよそよわいありさまのようである。

ただし、福島県下には、——関東からのつづきでか、「ダ」「ダイ」などのおこなわれることが、そうとうにいちじるしい。「ダン」もある。飯豊毅一氏は、「福島県における文末助詞——岩瀬郡天栄村を中心として——」（『方言研究年報』第一巻）で、

○ナニ シテ キタ ダイ。

なにをしてくれましたか。 （壮年男→同輩）

などの例をあげていられ、「「ダ」は対等以下に用いられる。丁寧や敬意を表わすには「ダイ」・「ダン」が用いられる……。」とも述べていられる。

○ドゴサ イダ ダ。

どこへ行くんだ？

は、県西部での一例である。本県下に関する諸種の方言文献に、「ダ」文末詞が見られる。問いや説明の表現に、よく、「ダ」文末詞が用いられている。

山形県下での一例は、

○マメタン ナンボ モラウ ダ。

豆炭はいくらもらうんだ？（ねだんのこと）

（店屋の主人→妻）

である。

秋田県下の一例は、

○ターグチサン、マダキタダー。

田口さん、また来たな。(また来たことを気やすくむかえることば)
(中女→中男)

である。

宮城・山形・岩手・秋田の四県では、あえてくらべて言うならば、日本海がわ二県のほうが、よりよく、「ダ」を見せるのであろうか。

青森県下の東部では、『五戸の方言』の、

わ(私)、えっつも(何時も)、へておごてますだァ。(言って怒って居りますよ。)

などがある。東部の南辺で私が聞いたものには、

○オラ ナーンモ ワカラナーダ。

わしは“何も知らない”。

などがある。青森県下一般には、「ダ」文末詞がよわいようである。

北海道地方についても、今、私は、「ダ」文末詞について言うべきものを、ほとんど持たない。

第三節 「ジャ」の属

助動詞系の「ダ」文末詞があるならば、また、「ジャ」文末詞があってもよいはずである。

それはともかく、外形「ジャ」の文末詞が諸方言に見いだされる。——ものが何であるかは、そこそこについて見よう。

九州地方に、広く、「ジャ」形文末詞が見いだされる。

鹿児島県下に、「鹿児島県枕崎市鹿籠」(『全国方言資料』第6巻)の、

mオダ トイノバンニハガッチャー コメンメシチャ ナカモ
 おれたちは おおみそかの晩にしか 米のご飯というものは ないも
 ンチャッタチャー
 のだったからねえ。

などの言いかたがある。助動詞系の「ジャ」であるのかどうか。種子島には、
 「モ イカンバ ジャイ。」との言いかたがあり、これは、「もう行かねばじ
 ゃよ。」であるという。(瀬戸口修氏による。)

宮崎県下については、今、言うべきものがない。

「肥後南関方言類集 用言篇」(『方言と土俗』第四卷第八号)には、「人ん
 来たジャ(お客が来たよ。)」などの文例が見える。助動詞系「ジャ」文末詞を
 とらえしめるものであろうか。

長崎県下の五島では、

○モ ネーチャ デンジャロ ジャー。

もう熱は出ないだろうなあ。

○イワン ジャン。

“言わないですよ。”

などの言いかたがなされている。文末詞と見るのに難のない「ジャ」が、この
 地方でよく聞かれる。(「何々ではないか。」の「何々ジャン カ。」の「ジャン」
 が、大きく転用されていって、「ジャン」文末詞や「ジャ」文末詞になった、と
 いうのであるか、どうか。)長崎市のことばには、「ヨシ、イク ジャン。」(よ
 し、行くぞ。)などがある。『全国方言資料』第9巻の「長崎県下県郡敵原町豆
 酸」の条には、

fマー コイガ イッチナ ナンギジャタジャー

まあ これが いちばん 苦勞でしたねえ。

とある。

佐賀県下でも、私どもは、よく、「ジャ」形文末詞を聞くことができる。県
 南の「キツカッタ ジャー。」では、人が、“「ジャー」は、「きつかったよ。」

の「よ」よりももつつよい。いかにもきつかったということ。”と語った。佐賀市のことば、「¹行^タ ジャー。」の「ジャー」は、“確定したことば。確信を持ったことば。”であるという。県東南隅のことばには、

○ハーノ ワルカ モンナ ノクサン^タ。カマレ^ン ジャ^ン。

“歯のわるい者はネ。かめないよ。”（「うみたけ」を）

（老女→中男）

というのがある。

福岡県下でも「ジャ」形文末詞がよく聞かれる。筑後の、

○マ^ダ ア^モー ナ^リマ^ス ジャ。

まだ甘くなりますよ。（みかんのこと） （老女→藤原）

筑前の、

○ワ^タシ^モ サ^カモ^トガ^イニ^ャ ネ^ンジュ^ー ア^スビ^ニ イ^キヨ^リマ^ス ジャ。

私も坂本さんのうちには、年中あそびに行ってますよ。

など、助動詞系のもではなからうか。「ジャン」形もある。

大分県下にも、「ジャ」形文末詞がある。「大分県南海部郡上野村」（『全国方言資料』第6巻）の一例は、

fソーズリ^ャー アン^タ ヤッ^パリ ノミ^チエ^ワ イ^キマ^スヂ^ャー

そうすれば あなた、やはり 酒好きは 行きますよ、¹⁾「飲み手」。

である。ところで、大畑勘氏は、「大分県南部の方言の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）で、

○ト^ギガ ネー ^ヂャー。

ともだちがないじゃないの。（青女→青ら）

（あいてのいいぶんに、つよく抗議するいいかたである。）

の例をあげていられ、「ヂャー」について、“出自は、「では（ない）→では→ヂャー」であろう。品位はひくい。女性だけのことばのようである。”との解を示していられる。

中国地方の山陽がわには、「ジャ」形文末詞がかなり見られる。

山口県下に、「ジャ」形文末詞のおこなわれることが多い。ところで、これらは、「ではないか」などの「では」に近いものようである。

広島県下の「ジャ」形文末詞も、多くは、「ではないか」などの「では」起源のものか。それにしても、「どこにあるか？」と聞かれて、「そこにあるじゃないの。」と答える、

○ソ^ニコ^ニ アル ジャー。

などの「ジャ」は、在ることを強調して訴えているので、もはやこれが、助動詞系ふうの「ジャ」と見られてもよいようである。尾道市のことば、「知らないわ。」の、

○シ^ラン ジャー。

というのにも、助動詞系文末詞ふうの「ジャ」が見られる。

純粹の助動詞系「ジャ」文末詞は、見いだされにくいのか。(——九州地方についても、「ジャ」形文末詞の起源には再考すべきものがあるか。)

岡山県下の、

○ソイ^{ジャー} ヤメニ スル ジャー。

それじゃあやめにするさ。

などは、どういう「ジャ」であろうか。

山陰の島根県下には、言うべきものがない。「ダ」助動詞のよくおこなわれる所だからである。

鳥取県下には、おなじく「ダ」助動詞のよくおこなわれている所ながら、

○ヨ^{ケー} デテ オリマセン ジャー。

たくさん出てはけませんわ。(老女→藤原)

のような「ジャ」形文末詞も聞かれる。——助動詞系「ジャ」文末詞ではないのだろう。

中国地方の「ジャ」が、多く、「では」起源の「ジャ」文末詞だとしたら、これはまた、よく熟して、単純強調の、助動詞系文末詞ふうの「ジャ」になった

ものではある。

愛媛県下に、「わしでも セイ ジャ。」「わしでも セー ジャ。」(わしでもすることができるよ。)などの言いかたがある。この「ジャ」も、「では」起源のものではないか。

四国地方一般に、助動詞系文末詞「ジャ」は認められない。

近畿地方でもまた同様である。——近畿ではことに、とも言えよう。

しかし、近畿地方にも、「ではないか」の「では」に近い「ジャ」や「ジャン」は、よく見いだされる。

○ドナイ シタ チャー。

どうしたんだい？

は、京都府西北での一例である。

今東光氏の作品『闘鶏』には、

河内者はそないな阿呆な錢は使わんじや

などの文が見える。

但馬南部での一例は、

○ハシライ キズ ツケタラ ドナイ スル ジャー。

(そんなことをしていて、) 柱へきずをつけたらどうするんだ！

(おや→子)

である。

奈良県十津川の、

○アラウ マモ ナー ジャ。シゴトバーカリデ。

洗うまもないよ。しごとばかりで。 (妻→夫)

は、どういう「ジャ」であろうか。

三重県下にも、滋賀県下にも、「ジャ」形文末詞が見いだされる。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県高島郡朽木村」の条には、

mナ¹⁾ンニモ ナシヤジャ

何にも なしだよ。

1) [ja]に近い[sa]。老人のせいか。

というおもしろい例が見られる。

中部地方の、主として西半地方に、「ジャ」形の問題事例がよく見られる。

福井県下の若狭に、

○ウミモ アルンジャ。

海もあるのかね? (老男→藤原)

などの言いかたがある。「では」の「ジャ」ではなかるうか。助動詞では「ヤ」のおこなわれる地域である。ただ、「ロクナ コトバモ シラン ジャ。」(ろくなことばも知らないんですよ。)のような言いかたになると、「ジャ」は、いかにも文末詞然としており、「では」起源などが考えとりにくい。

福井県の越前のことばには、

○アノ センサー、ガニマタ チョット ナオッタ ジャ。

あの先生、がにまたがちょっと直ったよ。

(中学生女間)

などがある。

石川県下、金沢市のことばには、

○ワジャ コンニャー ドコイモ イカン ジャー。

わたしは今夜はどこへもいかないよ。

などがある。加賀東南部のことばには、

○ヨメ モラウト モー アスベン ジャ。

嫁をもらうと、もうあそべないよ。

などがある。能登路にも、

○モー アメア フッテ クルモ スレン ジャ。

もう雨が降ってくるかもしれないよ。

などの言いかたがある。北陸に、このように広く「ジャ」が認められるが、こ

れが「ジャ」助動詞系のものであるのかどうか、私は、確然としたことを言うことができない。能登半島東北部の南岸での言いかた、「イン ジャ。」「エーン ジャ。」(もうたくさん。けっこう。)での「ジャ」は、助動詞系のものではなさそうである。この発言をした人たちが、一方では、「ハイダルイ ヒトヤ。」(たよりない人だ。)との言いかたをしていた。

富山県下、伏木港での女性会話、

○オトマシテ キラレン ジャ。

もったいなくて(りっぱすぎて)着られないよ。

での「ジャ」は、どういう「ジャ」であろうか。富山県下に、「ジャ」文末詞がかなりいちじるしい。男の子たちも、

○ナ シラン ジャー。

“いいえ、知らないよ。”

などと言っている。

新潟県下にも問題の「ジャ」が見える。県西南辺での一例は、

○オラ マタ ソンナン コタ ナイトモタ ジャ。

わしはまた、そんなことはないと思ったよ。

である。越後、中部近くの西南部では、女性も「オラモ シラン ジャー。」(わしも知らないよ。)などと言うのを聞いた。当地方は、もはや「ダ」助動詞の領域である。おなじく「ダ」助動詞の領域である佐渡にも「ジャ」文末詞があって、やはりこれが問題である。——もとはといえば、「では」系のもではなからうか。しかしながら、現実の用法には、「では」を思わせないもの、思わせにくいものがある。

岐阜県下は、だいたい、「ジャ」助動詞がおこなわれている。当県下での、

○ホンデ ジモ ナーニモ シラズニ トーッタ ジャ。

それで、字も何も知らないで通ったよ。(この世を)(学校時代の不勉強を言う。) (老男→藤原)

などは、あるいは、助動詞系の「ジャ」文末詞を見せるものとされるのか。

愛知県下は、「ダ」助動詞がおこなわれている。しかし、尾張にも、

○キョーワ ドケー デカケル ジャ。

きょうはどこへ出かけるかね。

などの言いかたがある。三河にも同様の「ジャ」がある。

静岡県下にも同様の「ジャ」があつて、たとえば伊豆半島では、

○サカナ ツッテ キタ ジャ。サカナ ツッテ キタ ヨ。

魚を釣ってきたよ。魚を釣ってきたよ。(一青年が二匹の魚を釣って通るのを言う。) (老女問)

などの言いかたが聞かれる。上例には「ジャ」と「ヨ」との対応が明らかである。「ジャ」の言いかたが「タジャ」と、かるやかに「タ」につづけられているのが注目される。「ダ」助動詞領域のこの方面に、このような「ジャ」がおこなわれている。おそらく非助動詞系のものであろう。ことによっては、「である」の「であ」から「ダ」ができるのとほぼ同時に「ジャ」がうまれたかもしれないけれども(—そのような可能性を想定することはできるけれども)、これは、私としては、念のために考えてみることである。

長野県下にもかなりいちじるしい「ジャ」文末詞、山梨県下にも見られる「ジャ」文末詞、いずれも、助動詞系とはしがたいのであろう。信州諏訪湖畔で聞いた、

○ヨク キタ ジャー。

よく来た“なあ”。

では、“[ジャナイカ]のここちがある。来られないところをむりしてきた。”との説明があつた。「ジャ」に「では」は感じられないか。

関東地方にも、問題の「ジャ」がある。おそらくは非助動詞系のものであろう。——「では」系のものか。

まず伊豆諸島内に、こうした「ジャ」が認められる。『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村坪田」の条には、

f………… ユムシ ニンキャラナランジャヤー

夕飯を たかなければならないんですよ。

などがある。新島のことばには、「コラー イシガ シタズラ ジャ(ジャン)。」
(これはきみがしたんだろうね?)などの言いかたがある。——「ジャ」は「ジャン」ともなりやすいのか。八丈島のことばには、

○アスワ トンメデーニ オキテ ヤマエ オジャロー ジャ。

“あすは朝早く起きて山へ行きましょう。”

○オンナジゴン ワカク オジャロ ジャ。

おなじようにお若いですね。

などがある。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町大賀郷」の条には、

*m*ツケヤラバ ヨク オジャロジャン

お使いになれば よう ございましょう。

ともある。——「ジャン」が見られる。

青ガ島にも、同様の「ジャ」がある。

関東内の所々に、「ジャ」文末詞があるのか。手もとの資料には、埼玉県下の「ジャ」、群馬県下の「ジャ」、栃木県下の「ジャ」などがある。

○ジャンケン ジョー ジャー。

“じゃんけんをしょう!”

は、群馬県下での一例である。「では」は考えやすかるう。関東本土内に「ジャン」もある。

東北地方では、北奥に、「ア下デ キ[kçi] ジャ。」(あとで来なさいよ。)などの「ジャ」がよくおこなわれている。これは「では」系のものであろう。

かつては、私はこれを助動詞系のものかとも見たが、今は、それを訂正しなくてはならない。(p. 116)

北海道に見られる「ジャ」、

○ンダ。キューコーデ イケバ[↑] イー ジャ。

そうだ。急行で行けばいいよ(さ)。 (中男間)

などの言いかたも、やはり、北奥と同様のものであろう。

助動詞系の「ジャ」文末詞を考定することはできるものの、じっさいに、確然とこれのおこなわれるさまは、さほどには見られないのかと思う。

それにしても、「ダ」助動詞の盛行の中に、文末詞「ジャ」が存立し得て、発言の文末尾に「ジャ」の聞こえもいちじるしいのは、注目すべきことである。「ジャ」助動詞の盛行の中には、「ダ」の聞こえの文末詞のおこなわれることが、通常は、ほとんどない。

第四節 「ヤ」の属

助動詞「ヤ」も、「ダ」助動詞・「ジャ」助動詞と同様、文末にたちうるものである。「ヤ」助動詞の文末詞化も、おこって当然であろう。(「ジャ」助動詞が「ヤ」形をとるにいたったのも、「ジャ」助動詞の、文末での訴え性がなお特定化したということでもあるか。)

しかしながら、「ヤ」文末詞とすべきものは、あまり認められないのが現状である。

大阪府河内のことば、[↑]「ソーダヒヤデ。」(そうですよ。)では、「のよ」に合わせると、「ヤデ」がとりたてられる。この「ヤ」は、もともと、「ジャ」相当の助動詞であろう。「ヤデ」は文末詞としてよいか。

佐藤虎男氏は、三重県北部での、氏の郷里方言の例、

○サッ[↑]サト タツ ヤ。

“さっさと立つじゃ。”(命令表現)

を教示せられた。「ヤ」は、助動詞「ヤ」を思わせるのか。「カッテニ[↑] イク

「ヤサ。」というのにも「ヤサ」文末詞が見られるのか。なお氏は、「ミミズデ
ツル ヤワ。(みみずで釣るんだよ。)」というのも教示せられた。

石川県下の加賀東南部で私が聞いたものに、

○コー シテ モッテ アルク ヤー。

“こんなふうにして持って歩くのです。”

などがある。当地方にも、「ヤ」助動詞がよくおこなわれている。「ヤゾ」「ヤカ」文末詞も認められる。

第五節 「ナラ」の属

助動詞「ダ」の活用は、「ダラ・ダッ・ダ・(ナ)・ナラ」とされている。

おもに関西地方におこなわれている文末の「ナラ」は、おおよそ、文末詞ふうのものと見られようか。とすると、「ナラ」は、助動詞系の転成文末詞とすることができる。

「ナラ」は、中国地方の山陽がわによくおこなわれている。「ドコイ イク
ンナラ。」(どこへ行くのかい?)は、一つの代表例である。(このばあい、「イ
クン」<行くの>を体言的なものと見て、「ナラ」だけを文末詞と見ることもでき
よう。が、「ドコイ イク ン。」<どこへ行くの?>ともよく言われていて、
これでは、「ン」は明白な文末詞である。「ンナラ」の複合形文末詞を認めるこ
とが適切であろう。)

山陽でも、広島県下がことに、「ナラ」文末詞をさかんに見せていようか。
「ナラ」が「ナイ」ともなっている。「ダレ ナイ。」(だれか?)のばあいも、
明らかに「ナイ」が文末詞である。

岡山県下にも、「ナラ」文末詞がそうとうにさかんである。

○ドー シタ ンナラ。

どうしたのか？

は、備中島嶼での一例である。「ダレ ナラナ。」(だれなの?)などの言いかたもあるらしい。

四国の愛媛県下にも、「ナラ」がかなりよくおこなわれている。「ナン ナラ。」は「何か?」である。「ナラ」が「ナー」にもなっている。内海の愛媛県島嶼では、「ダレ ナリャー。」(だれだい?)などの言いかたも聞かれる。「ナラ」に対する「ナリャー」は、「なれば」を思わせもするか。

高知県下にもまた、「ナラ」がかなりよくおこなわれている。土居重俊氏の『土佐言葉』には、

イツ モンテ キタナラ (何時もどってきたのか)〔旧長者村〕
がある。

徳島県下にもまた、「ナラ」がかなりさかんなようである。「ドシテ ナラ。」は「どうしてさ?」(小女→小男)であるという。県下で、「ナラ」が「ナイ」にもなっており、「ナ」にもなっている。

○アレオ セート ユーノニ、ドシタ ナラ (ナラ)。

あれをせよと言うのに、どうしたんだ?

は、「ナ」の一例である。

香川県下には、「ナラ」のおこなわれることがすくないのか。

西の九州地方には、「ナラ」「ナイ」はおこなわれていないらしい。

巻岐のことは、「ヨイ、ナン シオル トナイ。」(よい、何してるのだい?)との言いかたの「ナイ」は、「ナ」の「ナイ」であろう。

『島原半島方言集』の、

ドケイカストナイ 何処にお出かけになりますか
というのに見られる「ナイ」も、同様のものであろう。

転じて近畿地方を見るならば、まず兵庫県下に、「ナラ」がある。

○ソ[↑]ナ シワ ナンボ ナラ。

その梨はいくらね？ (老女間)

は、淡路島北部での一例である。淡路島の南の沼島に、「ナラ」の「ナイ」がある。淡路島には、さきに愛媛県下で見た「ナリヤ」もある。播磨西部の一例は、「ナン ショーン ナラ。」(何をしてるんだい?) である。

大阪府下の和泉での例には、「ナニ ユー シナエ。」(何を言うのか。) などがある。

近畿南部の三県に、「ナラ」のおこなわれることがいちじるしい。和歌山県下に「ナラ」がよくおこなわれており、「ナライ」ともある。また、「ナラ」が「ナイ」にもなっている。「ナン」ともある。

○カズチャン、ドコイ イク シナン。

かずちゃん、どこへ行くの？

は、新宮でのものである。(ここでは、「カ」の「カン」も聞かれる。) 三重県下には、南部に、「ナラ」(「シナラ」も)「ナライ」(「シナライ」も)「ナイ」(「シナイ」も)がある。

○「ケー」 ユーナ ナンノ コト ナイ。

「ケー」というのはなんのことだい？ (老女間)

は、三重県紀州西南部での「ナイ」例である。

○オヤジャ ドコイ イタ シナイ。

おやじさんはどこへ行ったんだい？

は、志摩東岸での「シナイ」例である。

奈良県下も、南部吉野郡に、「ナラ」(「シナラ」も)「ナイ」(「シナイ」も)が見られる。吉野郡東部には、

○ワンラ ドコイ イク シナラカ。

“おまえらどこへ行くのか。”

との言いかたもあるという。

北陸，加賀では，

○ナンジャッタイナイナラー。

との言いかたを聞いたことがある。(事例がよくわからないので，わかち書きは試みない。)人は，“「あれ何だったっけかなあ。」というひとりがたり。”だと説明してくれた。これの「ナイ」「ナラ」は何であろうか。

問題の「ナラ」は，国の東部には見いだされない。

第六節 「ゲナ」の属

「何々じゃゲナ。」などの「ゲナ」は，「そうだ」の意の助動詞とされよう。

しかし，「～ジャ」の言いきりがつよい時は（あるいは，「～ヤ」の言いきりがつよい時は），そのあとにきた「ゲナ」が，文末詞ふうにもなることがあるか。それは問題としても，つぎのようなばあいはどうであろう。

博多近くの人かと思われた人の発言に，

○ミゴトラス ゲナ。

みごとだそうですよ。（老男→老女）

があったという。(岡野信子氏による。)「ミゴトラス(ダス)」との言いかたを受けて，「ゲナ」が用いられている。「～です」敬語法のあとに用いられた「ゲナ」である。こういう「ゲナ」は文末詞的ではないか。

肥前・肥後のうちには，「トゲナ」の言いかたがある。『熊本県南部方言考』に見える一例は，

ソゲンアットゲナ (そんなにあるのだそうだ)

である。「トゲナー」は，文末詞の地位にあるものと見られようか。

転じて，〔(豊橋市)細谷で聞いた『花咲じじい』(『土のいろ』復刊第十号昭和33年4月)には，

ソイデ オヨッテノン イアー クラデ プチ殺イテ マツノ根ッコエ

イケトイタダゲナ。

の事例が見える。これには「ダゲナ」が見られる。

第七節 「べ（ぺ）」の属

主として関東・東北・北海道に見られる、いわゆる「べーべー」ことばの「べ（→ペ）」が、ときに文末詞の様相を呈するようでもある。

「できるだろう。」が、栃木県下でなど、「デキッペー。」と言われている。「お母さん、早くごはんをたべよう。」（さそい）が、伊豆の大島で、「オッカサ
ン ハヤク メシオ クーペー。」と言われている。このような「ペー」や「べー」は、助動詞の地位にあることが明白である。ところで、『北海道漁村方言の研究（渡島半島南茅部）』に見える、

モットモネー ハマノシトワ ミンナ コラモンダペー

（笑）もっとも 浜の人は みんな こんなものだろう。

ともなると、「コラモンダペー」の「ペー」が、やや遊離的なものにも見られてくる。「ペー」が「だろう」にあたるよりも、「だろう」の「ろう」にあたるからである。「〜ダペー」の言いかたは、東北・関東に多い。こんな点で、私どもは、「べーべー」ことばの地域に、なんとなく「ペー」の文末詞的なものを感じたりすることもある。

土地っ子も、ときにそうではないか。福島県会津では、人が、「ソーダペー。」を「ソーダ シー。」にならべており、「ペー」の言いかたを「シー」の言いかたの下位のものとしている。

「ペー（ペー）」の言いかたの前部に敬語法の言いかたがきたばあいには、この語順ゆえに、「ペー（ペー）」の文末詞らしさを認めることができる。東北地方の東半地方に、こうしたものが見られる。宮城県松島湾岸で聞いた、「ソーデ ガシ[i]タ ペー。」では、これが、「そうでしたか？」にあたるかと思われた。「ペー」は文末詞的であった。（「ガシタ」は「ゴザイマシタ」の縮約形で

ある。) 仙台弁の例は、

○タイ[↑]テイ ヨガス [↑]ペー。

たいていいいでしょうよ。(老女→中男)

などであった。「ヨガス」と言いまとめられているので、そのあとの「ペー」が遊離的である。——と、外来者は感得する。仙台人自身も、「ホン[↑]デガス [↑]ペー。」を「そうでしよ[↑]よ。」と解説するありさまである。「ペー」に「よ」の気分がやどっているか。岩手県中部での一例は、

○シ[[↑]i]ンゴ[↑]ドモ ハカ[↑]ドリヤンス[[↑]ü]ッ [↑]ぺ。

しごと(手つだいがあると)はかどりましようね。

(中女→藤原)

というのである。「ペ」は、前の言いかたを受けて推量を意味するけれども、「ペ」の上げ調子にも明らかなおり、ここで、特別の訴えのさまが明らかである。「[↑]ペ」表現法には、文末詞の役わりもはらまれてきていよう。青森県東部の野辺地町のことばには、

○ソッ[↑]タラニ[[↑]i] ヨ[↑]ゲ キ[kç̥i] ヤシ[[↑]i]タラ ヌ[[↑]ü]グ[[↑]ü] ゴザリ
[[↑]i]マス[[↑]ü] [↑]バイ。

そんなにたくさん着なさたらぬくうございましょう？

との言いかたがある。「ヌ[↑]グ ゴザリマス」の言いかたを受けての「[↑]バイ」には、「行く[↑]ペー」などのばあいの「ペー」に比して、なんらかの遊離性が認められはしないか。「[↑]バイ」とあって、なんだか、ものが、訴えことば然としている。

以上の問題例に関しては、説くところに合わせて、いったん、文末部をわかち書きにした。

津軽半島で聞いた一例には、

○ワカン[↑]メー[↑]ビョー。

わからないだろう。

がある。「[↑]メー」の下の「[↑]ビョー」は、文末詞的なものになってはいないか。野辺地町で聞いたものには、

○オレサ キ [kçi] テ ケレネ エ ガベガ。

わしのうちに来てくれるかね。

がある。「ケレネ」は「くれるに」であろう。「エ ガベガ」は、「いいだろうか」であろう。「エ ガ」が「いいか」とすると、そのつぎにきた「ベ」は、妙な位置にたった助動詞であろう。その下にも「ガ」(か) がきているのだから、今は、「ガベガ」をまとめて文末詞ふうのものと見るほかはないのではないか。

福島県東南隅での、車上で聞いた一例には、

○イラネガッペー。

がある。「いかないか？」というのに近いような意味のものであったかと思われる。「ガッペー」が、ひとまとまりの、文末詞ふうのものとされはしないか。

第八節 「ケ」の属

助動詞「ケ」がある。過去や回想をあらわすとされている。関東地方や東北地方・北海道地方には、助動詞「ケ」のおこなわれることがことにさかんであろう。

ところで、この「ケ」が、ときに文末詞ふうでもある。「ケ」は、助動詞としても、そもそも異形ではないか。はなはだしい異形でもあるので、これは、文末独自の遊離成分と化しても、当然のことかと察せられる。私は、主として東北地方のうちに、「ケ」の、文末詞ふうのものが(文末詞ふうと見れば見うるものが)見いだされるように思う。助動詞「ケ」の用法の自在化とともに、これの文末詞化ということもおころうとするのであろうか。

菊沢季生氏は、「宮城県方言文法の一斑」(『国語研究』第二巻第四号)で、

最後に、複語尾の「けり」が簡単なケとなって、恰も終助詞の様に使はれる事があるのを附加して、此の拙い文章にけりを付けようと思ふ。その実例を一つだけ示すと、

イインタッケ（言ひましたよ）

と述べていられる。

飯豊毅一氏は、「福島県における文末助詞——岩瀬郡天栄村を中心として——」（『方言研究年報』第一巻）で、「行¹グ ツケ。」を「行くということだよ。」の意であるとしていられる。

『全国方言資料』第7巻の「山形県東田川郡朝日村大鳥」の条には、

fワドモ デアッテミダバ イネヶケ
あなたたちが 出てみたら いなかったのですか。

とある。「ケ」のところに、「のですか」が見られる。

『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条には、

fトー シミヤクニ イン¹タケ
おじさん 炭焼に 行ってきたのですか。

1) イッテキダ>イッテタ>イテダ>イシタ

とあって、「イシタ」のあとに「ケ」が見られる。この「ケ」は、ずいぶん遊離的ではないか。

岩手県中部で聞いたものには、「オゴ¹ヶケー。」がある。これについて、人は、“怒るにきまっている。かならず怒る。”と説明した。「ヶケー」は、つよめということのようにであった。

『津軽方言えはがき』第二輯には、

「ナンモ、ハテネキャ」 なんにも はいっていませんよ
というのがある。「キャ」が「ヶケ」に等しいものなら、ここにも問題の「ケ」があるとされよう。私が青森県「南部」の南方で聞いたものには、

○アッ¹コ シ[i]メレバ エンダヶケー。

あそこをしめれば“いいんだよ”。

がある。これにも遊離性の「ケ」が認められはしないか。『全国方言資料』第1巻の「青森県三戸郡五戸町」の条にも、

fフン テンキャ ワリドモセ² ホッコア デテマシタヶケ

ふん、天気は 悪いけれども 穂は 出ましたよ。

2) 「セ」は間投の助詞。

とある。津軽で私が聞いたものには、

○ソ^センダ^セケ^セァ。

“そうです。”

などがある。「ア^セッ^セタ^セッ^セケ^セァ。」(“あったよね。”)などの言いかたもよくおこなわれているが、「ソ^センダ^セケ^セァ。」の「ケ」も、上のに等しいものであろうか。

『北海道風土記童戯と方言』には、

なんだけ 何んであつたらうか
が見える。

「ケ」は、関東について中部地方にも見られる。文末詞の観点から問題視しうる「ケ」が、中部地方内にもあるだろうか。

第九節 その他

『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町大賀郷」の条には、

⁵⁾
mホントーダラー

ほんとうだよ。

5) (hōnto:dara:)

とある。「ダラ」の「ラー」は、どういう性質のものであろうか。

橋口巳俊氏によれば、宮崎県中部東方には、

○オ^セリ^セモ イ^セカ^セザ^セー。

おれも行かなくちゃ。

などの言いかたがある。この「ザー」は、助動詞とすべきものであろう。さて、同地に、「ア^セレ^セ ザ^セ。」(あるよね。)などの言いかたがあるという。橋口氏は、この「ザ」を特立してられる。——どういう「ザ」であろうか。

石川県加賀で私が聞いたものに、

○ムスメ キョッテ オッザー。

“娘に「清」っていうのがおるじゃないか。”

というのがある。この「ザー」を、文末詞ふうのものとすることができるかどうか。

山口県長門市で聞いた、

○ナケンニャー アルカー ザ。

自動車がなければ歩かなくちゃ。

での「ザ」も、問題の「ザ」である。

「ずは」とか「ずば」とかの「ザ」は、関西中心に、今日もいくらか認められるようである。

奈良県南，十津川の、

○モー ジキニ クワザー。

は、「もうすぐ食いましょうよ。(食うてもよかるう。)」の意のものであるという。

金沢ことばには、

○ワジャー ソンナ コター キカン ザー。

わたしはそんなことは聞かないよ。

がある。——十津川のと同種の「ザ」であるのだろうか。

信州北部には、

町エ行カザア (町へ行きませう)

などの言いかたがある。(「信州北部方言語法(上)」)

「ズ」というのでも、つぎのような出かたであれば、文末詞ふうのものとも見られようか。『全国方言資料』第2巻の「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条には、

*m*スジャ マー イッテクラズ

それじゃ 行って来るぜ。

と見える。——「来るぜ」の言いかたが注目される。

伊豆半島北部で聞いたことばには、「あれを見なさい。」の「ア^リョー ミ^ニャン。」がある。この地に、これとならんで、

○ア^リョー ゴ^ランニャ^エン。

あれを^ゴらん^ニャ^エん^ニ。

の言いかたがおこなわれている。「ゴラン」の下の「ニャエン」は、文末詞ふうである。人は、“「ニャエン」は、ちょっとあらたまて言う。”と説明している。老年層のものであるらしい。

長崎県平戸島の「シ^ラン テ^アス。」「シ^ラン チ^アス。」(知りません。)では、「テ^アス」「チ^アス」の、どれほどかの文末詞化が認められようか。

「信州北部方言語法(上)」には、

寒カナカッタカシカ (寒くはなかつたですか)

の言いかたが見える。「シカ」のところに、なにがしかの(「です」助動詞の)文末詞化が認められようか。

『奈良田の方言』には、

これが奈良田の七不思議のいと(31)の二羽鳥のいわれそ(32)。

(31) うちの (32) いわれだよ。

とある。「だよ」と言いかえられている「ソ」が注目される。

『山形県方言集』には、「此の品物は十銭だおわ。(此の品物は十銭ださうです。)」という文例が見える。「〜ダ」のもとの「おわ」は、文末詞然としていよう。(「——さうです」にあたるという。)

第十一章 動詞系の転成文末詞

第一節 総説

動詞出自の転成文末詞がある。すなわち、文の表現内容のまとまりを、ことあらためて相手に訴えかけるのに、動詞出自のものをもってするという、特定の方法が成立している。

単純な「ネ」や「ヨ」などをもってする訴えかけは、いわば、「さげび」かけ的なものとも見られる。これに対して動詞系の文末詞、たとえば「テバ」といったようなものになると、これによる訴えかけは単純ではない。文末詞そのものに、本来の動詞の意義が内在するので、こういう文末詞をもってする訴えかけは、おのずから、特定の効果を持ったものになる。——「テバ」であれば、「と言えぱ」の意が相手に伝わるので、この伝達効果はけっして単純なものにはとどまり得ない。

動詞系文末詞には、これ自体の、独自の存在理由がある。人はしぜんに、この存在理由によりかかりつつ、言いかえれば、動詞系文末詞を利用しつつ、日日の方言生活で、会話表現の能率を高めてきている。

日本語の文表現の構造の一態を成すものとしうる動詞系文末詞の諸相を、以下に見ていきたい。

第二節 「テバ」「カシラ」「タラ」

一 テバ

「と言えぱ」に由来する「テバ」がある。

この新文末詞は概して東国系のものと見られようか。関東・奥羽の地域には、「テバ」のおこなわれることがさかんである。(東北地方では「デバ」とも発音されがちであるけれども。)しかし、他地域内にも「テバ」がないことはなく、まずは九州地方内のそれが注目される。

林田明氏は、「長崎市方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

○イカ^ン テバ。行かないというのに。(幼男→中女) <全>

○ナカ^ンチャ ヨカ^カ テバ。泣かないでよいじゃないか。(青男→少男) <全>
などの例をあげて、

「テバ」には動詞「いう」の意味が内包されている。一般的に老若男女の別なく用いられる。

と述べていられる。

橋口巳俊氏は、宮崎県児湯郡下について、

○オリヤ シラ^ン テバ。

おれは知らないってば。

(“うるさく何度もきかれて、このことばをなげつける。”)

○モ コリカ^{リヤ} セ^ン テバ。

もうこれからはしないってば。

(“くどい忠告に困りはてて悲鳴をあげる。”)

などの例をあげていられる。これらに、「と言えバ」の「テバ」が明らかであろう。

一つの問題事例をここにかけろ。喜界島のことばに、「ハヤク ヌブリ [↑]バ。」(早く^{上がれよ。}上がりなさいよ。)などというのがある。——命令する言いかたであるという。「アリバ ミリ^バ。」についても、「ミリ^バ」は“見れってば”であるとの説明があった。この島に見られる「バ」も、「テバ」的なものであるだろうか。町博光氏の「与論島朝戸方言の文末詞」(『方言研究年報』統一)にも、「?ama:ti pai ba:。(中女→幼女) <向こうに 行け パー。>向こうに行るときなさいよ。」などの「バ

一」が見え、また、「パー」に似た「ポー」も見える。八重山のほうにも「バ」があるらしい。なお氏は、「[tʃiba][tʃi:ba][tibo]（て言えば）」もとりたてていられる。

つぎに、中部地方の新潟県下に「テバ」のおこなわれることがかなりさかんである。越後北部で、

○ヤダッ テバー。

いやだつてば。

○デンワダ テバ。

電話だつてば。

などと言っている。新潟市で、

○ソーヤンダ テバネー。

“さようでございます。”

などと言っている。県下に、「オヤオヤどうしやうバ」（『越後方言考』）などの「バ」もある。

山梨県下にも、「テバ」の通用がある。

東海道がわにも、たとえば浜松方面になど、「テバ」がおこなわれているか。

関東地方に「テバ」のよくおこなわれていることは、多く言うまでもなからう。『全国方言資料』第7巻によるのに、「東京都三宅村坪田」にも、

fソーダッテバー

そうでしたよ。

などとある。関東地方の「テバ」は、命令や勧誘や拒否やつよいよびかけなどなどに用いられており、「テバ」の役わりは大と見られる。

○イーッテバ。

いいつてば。

は、拒否表現での「テバ」の一例である。さて、このような言いかたは、かならずや、関東系・東国系のものであろう。「とよば」をつづめた「テバ」の

独特の効用が、この地方で、ことに明らかなように思われる。

『茨城県方言集覧』には、

わるいっちば 悪シト言フニノ意 新治郡

というのが見える。「ちば」が注意される。

奥羽にもまた、「テバ」のさかんなものがある。

福島県下の「テバ」例は、会津の、

○ヤ^ーメ^ロッ テバ。

やめろってば。

などである。『福島県棚倉町方言集』には、

「そおだ^ってば。そおで^ねえ^ってば。良え^ってば」

などとある。

宮城県下の「テバ」例をあげる。

○カー^チャ^ン デ^バー。

お母さんったらあ。

は、県南の一例である。

○^ンナ ^ゴド ^ナェ^ンダ デバ。

そんなことはないんだってば。

○ヤ^ンダ デバ。

“いやだ。”

は、県北の例である。県下に「デバ」の言いかたが多い。「デバヤー」などとも言われている。土井八枝氏の『仙台の方言』には、

これねす、わだっしやどこのうちなかの娘でござりすてば（これは私の親戚の娘でございますよ）

などの言いかたが見える。「テバ」の用法には諸相があるとみえ、上には、つよみのない「テバ」が見える。「テバ」の慣用が深まるのにつれて、これが、ただの、「ですよ」の「よ」程度にも用いられることになるのであろう。『仙台の方

言』に、

「ほんにのっつおでござりす、よっくおしえさして使って頂きたござりすてば」（本当に野育ちでございますから、よくお教へ下さってお使い下さいませ）

のような実例も見えている。県下で「デバサ」などとも言っているか。

「デバヤ」「デバサ」などでは、「デバ」の言いかたをつよめようとする意図がうかがわれる。

山形県下の「テバ」例は、庄内の、

○ワ^ダシ[i]ワ^コンヤ^ドコサモ^イギマン[i]ネー^テバ。

わたしは今夜どこへも行きませんよ。

○ソ^ゲタ^コド^ス[ü]ンナ^テバ。

そんなことをするなってば。

などである。本県下では、「テバ」の言いかたは、庄内によくおこなわれているのか。「テバ」は「デバ」になるのが通例らしい。

秋田県下にも「デバ」がおこなわれているようである。『秋田方言』には、県南、由利郡の「そだでば（さうですよ。）」、県北、山本郡の「そしなでば（さうしてはなりません。）」などが見える。

岩手県下にも「テバ（デバ）」がよくおこなわれている。県中部東方での一例は、

○セ^ワシ[i]ー^テバ。

うるさいってば。

である。かつて盛岡の旅宿では、こういうことがあった。主婦がその子をさがして、「イツ子。イツ子。」とよんだ。すると他の子が、

○ベン^ジョイ^イダ^デバ。

と答えた。この時、主婦が、ことばのしつけとして言ったことは、“便所へ行ったてばとはなんだ。「ベン^ジョ^デス。」と言わなきゃ。”というのであった。

県南で聞きとめた一例は、

○アッヂ^{〔i〕}ズッ^{〔ü〕}ト アイデンダ デバー。

あっちの車両はずっと席があいているのによお。(となりの車両から来た婦人が言う。)

である。県下の諸方言書にも、「デバ」の事例が見える。『遠野方言誌』には、

「……と言ふのに」なぜ爾かせぬかの意を含む

とあり、

「トイヘバ」の二重約即トイの約チ、チへの約テ

とある。八重樫真氏の『岩手県釜石町方言誌』(日本民族研究会 昭和7年3月)には、

但「デバ」がつくと多少鄭重の意を含むことになる。「ズバ」は主として在方漁師の語で「デバ」に同じ。

と見える。「ズバ」にも「と言う」があるのか。

青森県下の東西にも「テバ」が見られる。

○ソッタラ^{〔i〕}ス^{〔ü〕}ル^{〔ü〕}チ デバー。

そんなにするなッてば。(叱る時)

は、県東、野辺地町での一例であり、

○シ^{〔i〕}ロシ^{〔i〕}マダ デバ。コフ フ^{〔ü〕}ト。

広島だそうだよ。この人は。(初老の男性が、車中で、私のことを、その周囲の人々に言う。)

は、津軽半島での一例である。「テバ」には、「と言えば」というほどでもない、いわば、中身のゆるいものもあるのか。

○ホッド^{〔i〕}イネンダ デバ。

ほんとにいないんだッてば。

は、弘前市内での、つよい「テバ」の一例である。県下に「デバ」のよくおこなわれる中で、「デバナ」の言いかたもおこなわれている。『分類方言辞典』の「小詞」の中には、

「デバセァ」 てば。念を押して告げる助詞。青森県。

の記事が見える。(永田吉太郎氏の『方言資料抄 助詞篇』<自家版 昭和8年11月>によるものであろう。)ゆるい「テバ」などに関連するものであろうか。県下に、「バ」というものもある。『青森県方言集』には、「バ(感)」についての、

①疑問の感動詞。例、ドダバ

②意を強める感動詞。例 ソダデバ。

の記事が見える。感嘆の「バ」もある。なお、さきの山形県下や宮城県下にも「バ」がある。

北海道に関しては、『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条に見える、

*m*アイマー アキラメテイルッテバ

まあ あきらめているよ。

などを引用することができる。小野米一氏編の『北海道漁村方言の研究』(渡島半島南茅部)、『礼文島言語調査報告』にも、「テバ」「デバ」が見えている。

「テバ」の発想は、一種のじれったさを表明しようとするものであろう。この種の言いかたが文末の訴えことばにのぼされるのは、当然のことと思われる。生活の現場には、じれったさの表明を必要とすることがすくなくないからである。

それにしても、「テバ」が、まずは東国的なもののように分布しているのはどうしてであろう。「テバ」に類するものに、「と言やあ」の「チャ」などがある。「チャ」などは、西国にもすくなくない。(東国にも多い。)してみれば、「と言えバ」的発想法は、東西にあるとされる。ただ「と言えバ」の「ば」助詞をよく温存するのが、わけても東国地方だと言えよう。(「そうすれば」のばあいでも、関東では「ソースレバ」と言っており、関西では「ソースリャー」と言っている。)東国地方は、「ば」の、前者への熟合をきらっているのか。(この種の熟合習慣一般が問題になる。)

二 カシラ

「カシラ」という文末詞も成立している。「か知ら」起源のものであろう。

○アラ, ワルカッタ カシラ。

あら, わるかったかしら。

などと言われている。「カシラ」が、これなりの、感動のよびかけことばになっている。女性流の感動であろう。静かにあるいはやさしくあるいはあやぶみの気もちで、「カシラ」が言われている。

共通語での「カシラ」文末詞に該当するものが、諸方言上で、「カシラン」の形でおこなわれてもいる。

f………… ホントニ デェルノンカシラン

ほんとに 出るのかしら。

は、『全国方言資料』第6巻の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」の条に見えるものである。

○オバサン ドコエ オイトイトクレタ カシラン。

おばさんどこへおいといて下さったかしら。

は、豊橋方言について、高瀬徳雄氏の教示せられたものである。

東京都中心に「カシラ」がよくおこなわれていることは、言うまでもない。塚田芳太郎氏の『千葉方言 山武郡篇』（千葉方言刊行会 昭和9年5月）には、「かしら」「かしらん」が見えるとともに、「かすら」も見える。

死ンかすら 死ぬかしら

出来ッかすら 出来るかしら

などとある。

三 タラ

共通語上にもいちじるしい、いま一つの文末詞に、「タラ」がある。

○早く しろっ たら。

などの言いかたが慣用されている。

「タラ」は「と言ったら」の約になるものであろう。「タラ」の言いかたは、もどかしさ・じれったさをあらわす。したがってこれは、上品語とはなりがたいのがつねであらう。

「タラ」文末詞は、本来、東京語中心のもの、あるいは関東的なものと見てよいか。東北地方内にも、これが見いだされる。斎藤義七郎氏の、『方言学講座』第2巻に寄せられた「宮城・山形」には、

タラ!。 (オレモエグ^ハッタラ! エゲスカネ^ハッタラ!)
俺も行くつてば! いけすかないこと!

との記事が見える。——山形県東根市方言のことである。

『名古屋方言の語法』には、

ソナ 横着 シテ ワ イカン ッタラ そんないたづらしてはいけ
ないつてば

などの実例が見える。「タラ」は、だいたい、東国地方本位のものであろうか。

しかし、福井県若狭にも「タラ」がある。永江秀雄氏は、私にくださった方言記録「福井県遠敷郡上中町に於ける方言」で、

「あかん^ハタラ」「早^{はよ}う 行け^ハッタラ」

などの言いかたをとりたてていられる。

関西内にも、「と言ったら」をそのまま言いあらわした「チュータラ」は、なにほどかおこなわれている。

○ハヨ コイ チュータラ。

早く来いったら。

などと言われている。「チュータラ」が「ユータラ」ともある。「ユータラ」のばあいには、「と」が消去されている。が、「ユータラ」も「チュータラ」も、ともに、「と言ったら」をにおわすことが顕著である。そういうのではなくて、「と<言う>」のすがたをよくは見せなくなっているのが、東国地方本位の「タラ」である。

関西地方には、格助詞「と」をぬかしてももの言う習慣がある。「寺田さんという人が」も、「寺田さんいう人が」と言う。いわゆる「と」ぬけ現象である。これは関東人の注意をひきやすい。しかるに、一方では、関東系の地域にも、「と言ったら」の「タラ」がある。こういう方式、つまり、特定結果の「と」ぬけ法をとるのが、関東系の言いかたであるとされようか。

ここに一つ、つけそえてみたいことがある。関西地方で(北陸も)、たとえば宇和島弁だと、

○ドー シナハッタラ。

どうなさいました？

などと言う。こういう時、「タラ」のむすびが、しぜん、相手がたの聞き耳をとらえがちである。その点で、「タラ」が、文末の訴えことば同然の効果を示しがちでもある。高知県下でも「どうしたのか。」と問う時、

○ドー ヒタラ。

などと言っているが、このような「タラ」も、文末の訴えことば同然にひびきやすい。

そうではあるが、この「タラ」が「来いっ タラ。」などの「タラ」とは混同すべくもないものであることは言うまでもない。

第二節にとりあげた「テバ」「カンラ」「タラ」を通観するのに、そのことばの言いおわりは、すべて〔a〕音になっている。これは、意味の大きいことではなかるうか。相手に訴えかけることばが、「テバ」などの文末詞である。つよく明瞭に訴えかけようとするれば、人はしぜんに、聞こえの明白な音形態をえらんでいくのではなかるうか。しぜんの好みも、このような結果を招いているのだと考えられる。

第三節 「言う」に関する文末詞

一 はじめに

「テバ」も、「タラ」も、ともに「言う」に関する文末詞である。

第二節では、まずは共通語上にもよくおこなわれるものを、動詞系文末詞の、わかりやすい事例としてとりあげようとして、「テバ」「カンラ」「タラ」の三者をとりたててみた。

今は、あらためて、諸方言上に、「言う」に関する文末詞を見わたすことにする。「言う」に関する文末詞が、そうとうに多く見いだされる。そのおこなわれることが、また、諸地方にわたっている。

「言う」ことに関して、文末詞化がいちじるしいのは、もっとものことと考えられる。「言う」は、当方から先方へのはたらきかけをあらわすものである。文末の訴えことばとして、「言う」の言いかたをすれば、これによって、話し手は、ものごとをよくおさえていく気もちを、先方にじゅうぶん伝えることができる。

以下、「言う」に関するものを、順次、見ていこう。

二 トテ

「と言って」などに相当するかと思われる「トテ」がある。

兵庫県播磨のことばでは、

○ソーソー、ソーダス トテ。

そうそう、そうですとも。

などというのがある。愛知県尾張のことばでは、知多半島で聞いたものに、

○エーエー ダイジョーブデス トテ。

ええええ、だいじょうぶですとも。

などというのがある。

「トテ」は、方言上、「とも」と言いかえてよいものになっている。このような「トテ」は、どちらかと言えば、関西方面に分布していようか。

三 テヤ テワ テラ テテ (テチ) テンガノ

テヤ

全国にわたって「テヤ」出現例を見るのに、「言う」に関するものではないかと推考してみるべきものが、多いように思われる。一方、「テ」文末詞に単純に「ヤ」文末詞が添加されたかと思われるものもある。

以下には、ともかく、出現する「テヤ」をとりあげて、その実情をしらべてみることにしたい。

九州地方では、まず薩摩に、

fハン モー オソ ナイモステーヤ

もう 遅く なりますのにね。

のような言いかたが見いだされる。(『全国方言資料』第9巻 「鹿児島県薩摩郡上甕村中甕」)この「テヤ」はどういうものであろうか。

宮崎県中部の言いかたに、

○ミランカッタ テヤー。

“見かけなかったって。”

などというのがある。(橋口巳俊氏による。)氏は、“探し物を知らないと言われて落胆する。困惑の体である。”と説明される。この「テヤ」は、「と言やあ」に近いものではなからう。『全国方言資料』第6巻の「宮崎県東臼杵郡南方村」の条には、

m_1 ソ⁵⁾ンチャケ ソン ナンチャガ ドキョー カマエチヨラニャー イマ
それだから 度胸を すえていないと、 いま

ユーゴツ ソツヂェ クワンニャランチャー

言ったように それで 食べなければならぬんだ。 5) (n)

との「チャー」が見える。これは、「と言やあ」に関係のあるものか。

長崎県下にも佐賀県下にも、「テヤ」の「と言やあ」出自のものは、見いだしがたいようである。「テヤ」文末詞はよくおこなわれているが、それは、助詞の「テ」の文末詞化したものと、「ヤ」との単純な複合になるものようである。

中国地方となると、ようすが異なってくる。

『山口県方言調査』に見える「ステチャツタテヤ（なくしたとき）」などは、「と言やあ」に近いものではなからうか。——よくはわからない。

広島県下、安芸の、

○アレニャー チョット イワリャー ヘン テーヤ。

あの人にはちょっと言われはしないよ。

に見られる「テーヤ」は、「と言やあ」にあたりはしないか。

岡山県下の備中、真鍋島の、

○ソレジャ テヤー。ダイブン トラレル ワイ。

それだよ！だいぶん金をとられるよ。

というのに見られる「テヤー」も「と言やあ」ではないか。

千代延尚壽氏の「石州中部地方に於ける接尾語と接頭語」（『方言』第三卷第一号）には、

行くてや。は行くといふことよの意である。行かんなしてや。といふのは「行かないのかそれは何故か」との意であるから、形は同じでもこのや[○]は疑問の助詞であって前記のて[○]やとは其意を異にしている。

とある。このように説明されている「行くてや」の「てや」は、「と言やあ」からのものであろうか。同論文に見える、

あがア しなんな てやーさうしなざるな

の「テヤ」は、「と言やあ」をよくあらわしてはいないか。

島根県出雲の、

○シャキダ テヤー。

“上等だなあ。”

(島根半島北岸での子どものことば)

の「テヤー」は、どういう「テヤー」であろうか。神部宏泰氏は、「隠岐島五箇方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一卷)のご手稿で、

○ボクンヂャ ネー テヤ。

ぼくのではないってば。

と記述してられる。「てば」と説明してられるのが注目される。——神部氏は、「テヤ」の言いかたを詠嘆的とも言われる。

鳥取県下には、「テヤー」がある。生田彌範氏の『西伯方言集』には、これが、「だそうな。」と説明されており、「アゲスーダテヤー(あのようにするのだそうな。)」のような例がとりたてられている。「テヤー」は、単純に、「テ」に「ヤ」がそえられたものであろうか。室山敏昭氏は、東伯郡羽合町の方言から、

○ツレテ イッタルッ テイヤ。

“(映画に) つれて行ってやるってさ。”

のような例をとりたててられる。「てさ」と説明されているのからすれば、これも「テイ」へ「ヤ」がそえられたものかと思われる。

四国となって、愛媛県下に属する内海大三島の「テヤ」例が、最初にあげられる。

○オコッテ ヤッタ テヤ。

おこってやったよ。(おれは)

○ワシモ ヨー シラン テヤ。

わしもよくは知らないんだがなあ。

などの「テヤ」は、たぶん、「と言やあ」からのものであろう。ただし、「テ」

に「ヤ」が単純にそえられてできた「テヤ」が、やがて「と言やあ」的な意味作用を發揮するようになったというようなことも、あるかもしれない。

「と言やあ」の「テヤ」の成立とともに、「テヤ」的な「テヤ」も成立した、ということがあっても、むりではなからう。

『宇和島語法大略』には、「テヤ」についての、

オッカサンテヤ（お母さんてば）

などの如く呼び据ゑる時に用ゐる。又

キレイナテヤ（いや美しいよ）

などの如く、先方の反対をいふ時にも用ゐる。

などの文例が見える。ここの「テヤ」は、「と言やあ」的なものではなからうか。増田実氏の『南宇和方言の性格』にも、

“そんなことしてもいけんてや”

などの「テヤ」が見える。武智正人氏の『愛媛の方言』には、

テヤ そんなこというなテヤ

などの記事が見られる。杉山正世氏は、国立国語研究所『日本方言の記述的研究』に寄せられた「愛媛県宇和島市」の記述の中で、

テヤ①終止形に続き、主張する意をあらわす。「そうテヤ」。(九島に多い。)②迫るように呼びかける。「お母さんテヤ」「のうテヤ」③相手の意に抗して主張する。「そがなこた無いテヤ」「厭テヤ」④願望する。「私^{ウチ}にも見らしテヤ」

と述べていられる。この中にも、「と言やあ」的な「テヤ」が見られはしないか。——もっとも、「テ」に単純に「ヤ」のそわったものが、そのような意味作用を發揮するようにもなっているかもしれない。

四国地方には、「どうどうしテヤ。」(どうどうしてよ。〈たのみ〉)式の「〜テヤ。」表現法がさかんである。これは、上来、問題にしてきている「テヤ」の外のものである。

徳島県下にも、問題の「テヤ」があるか。金沢浩生氏は、

○モー ネー テヤ。

“もう寝なさいったら。”

などの例を教示せられた。氏は、“下灘地方にあるもの。「くり返して言わせるな。」という気持。”と言われる。氏が、「ったら」と説明したく思われる「テヤ」は、「と言やあ」的なのではないか。

近畿地方にも、「～テヤ。」式の表現法がよくおこなわれている。そのほかに、今、問題とすべき次下のものがある。

田中万兵衛氏の『淡路方言の研究』には、

なんぼ探してもないてや（無いといふのに）

というような記事が見える。氏は、

といふを約めててといふ。云ひ方によって疑問の意になる。それに同じく疑問助詞やを添へたのがてやである。

とも言われる。清瀬良一氏は、「神戸方言の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）で、「アカン テ。アカン テ。ナンボ ユーテモ アカン テーヤ。」（青男一中男）の言いかたをとりあげられ、「購読を依頼にきた新聞屋に、ことわるところである。」と説明していられる。『和歌山県方言』に見える、

イヤテヤ 嫌だ

の「テヤ」は、どういう「テヤ」であろうか。「と言やあ」的のようでもある。同書には、「イヤヤテヤ 嫌だ」ともある。

『三重県方言資料集 志摩篇』の記事、

てや①助詞＝強め（加）「いかんテヤ」

②助詞＝願望・命令「行こやテヤ。歩けテヤ。行くなテヤ」

というのは、「と言やあ」の意のくまれる「テヤ」を示していようか。玉岡松一郎氏も、「志摩崎島方言集」（『方言』第五卷第九号）で、

テヤ ませう（願望）・なさい（命令）「イコヤテヤ」・「アルケテヤ」・
「モテテヤ」・「行クナテヤ」

と記述してられる。私もかつて、三重県志摩半島の東岸で、

○ユー テヤ。

言うさ。(抗弁)

○ムッカシ コタ ネーンヤ テヤ。

むずかしいことはないんだよ。

などの言いかたを聞いたことがある。ここの「テヤ」は、どういう「テヤ」なのであろう。「と言やあ」系のものなのか。福田学氏は、「熊野方言における文末辞について」(『三重県方言』第8号)で、

マテ テヤ(神志山村)

というのをかかかてられる。

「奈良県吉野郡十津川村小原」(『全国方言資料』第8巻)には、

f………… ヒライ イテ キタテヤ ミナ

拾いに 行って 来ましたよ、みんな。

の「テヤ」例が見られる。

井上正一氏の『丹後網野の方言』には、「『よ』を『テヤ』また『チャ』という。」との記事があり、「行こうテヤ。」「行くなテヤ。」などの例が見られる。ここに「テヤ」と「チャ」との対置されているのが注目される。

煤垣実氏の「志摩方言——文例訳利用の一例——」(『近畿方言双書』第一冊昭和30年4月)には、

アルケテヤ(歩けてば) 和具

イクナテヤ(行くなってば) //

イコヤテヤ(行こうよってば) //

の記事が見られる。ここでも、「テバ」の言いかえが注目される。

中部地方では、『福井県方言集』に「ソージャテヤ(さうだとも)」というのが見え、「『テヤ』は『といへば』の約」との解説が見られる。

石川県能登半島の西岸で、私が得た例に、

○ここらは、ジカンガイニ アヅケニ キタリ スルガデス テヤ。

ここらは時間外にあずけにきたりするのですよ。(銀行の人の話し) というのがある。馬場宏氏の「木郎方言考(其の二)」(『国語方言』第四号)には、

行ったよ=行ったテヤ 食べたよ=食べたテヤ

などの事例が見える。「テヤ」は「やや卑語」のようである。愛宕八郎康隆氏は、能登東北端部の例、「ワールイ コッチャ テヤ。」(悪いことですね。)というのを教示せられた。岩井隆盛氏は、国立国語研究所『日本方言の記述的研究』に寄せられた「石川県金沢市彦三一番丁」の記述の中で、「ミンテヤ(見ないよ・見ないというのに)は奥能登である。」と述べていられる。愛宕氏は、「能登島向田方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、「テヤ」を動詞系の文末詞とされ、

○ソーシテ クラ[↑]ーシトッタ テヤ。

の実例について、「そのようにして(まずしく)暮していたってばよ。(老女→青男)」と説明していられる。

『さとことば(新潟)』には、

てや〔辞〕 云々と言ふよの意「見て来たてや」

。とよの転なるべし。

との記事があり、また、

てや。 言の終止せるに接続す。

見て来たてや

はやうあ江べてや

とある。

岐阜県下の美濃奥で、私が聞いた「テヤ」例は、

○ワソガ シジューグライナ トキヤッタ カシランテヤ。

わたしが四十歳ぐらいの時だったかしらねえ。

などである。『岐阜県方言集成』には、郡上郡の条に、

てやなあ〔句〕　といふになあ。

と見える。

長野県西北部で、私が聞いた「テヤ」の一例は、

○アキオ^ーヤ。　アキオ^ーテヤ。

秋雄や。秋雄ってば。　（老女→孫小学生三男）

である。「テヤ」は「と言やあ」的なものではないか。『信州方言読本 語法篇』にも、この方面に関しての、

ちがうてや（違うよ。）

といった事例が見られる。

関東地方では、八丈島が問題視される。早いころの諸調査報告にも、「テヤ」（「テイヤ」も）の実例が見え、近くは飯豊毅一氏の「八丈島方言の語法」（『ことばの研究』）にも、

○イキンジャッテエヤ。

行かないということだ。

○イキンナカッテエヤ。

同上。

などが見える。ここの「テエヤ」「テイヤ」は、伝聞の意をあらわすものらしい。としたら、ここには、「と言やあ」的なものは、たいてい、考えることができないのであろう。

千葉県下では、『千葉県方言 山武郡篇』に、「エーってや（善いとき）」というのが見え、「伝聞ヲアラハス助詞」とある。

東北地方ないし北海道地方には、おおよそ、上来のにつづけて問題視すべき「テヤ」がないようである。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条に見える、

mマズ　ゼモ　ナモ　エ　マズ　タダ　モテケテヤ

まあ お金も なにも いい、 まあ きがねなく 持っていけよ。
 の「テヤ」は、「と言やあ」的なものであるか。しかし、秋田県下以外では、
 とかくの例を、私は、見だし得ていない。

「チャ」（と言やあ）のさかんな東北に、「チャ」同然の「テヤ」もよくおこ
 なわれているなどということは、ないのがしぜんであろうか。

「テヤ」に関しては、追求すべきことが多い。今のところ、私は、現地に
 「テヤ」が見つかるごとに、その「テヤ」の実質を問わなくてはならないと考
 えている。

「と言やあ」からの「テヤ」があるだろう。同時にまた、「テ」に単純に「ヤ」
 のそわったものが、じっさいに「と言やあ」的な意味作用を発揮していること
 もあろう。このへんがはなはだ複雑である。

いずれにもせよ（——また、どういう出自のものであるのにもせよ）、でき
 た「テヤ」が、「テヤ」としてはたらいっているのは、表現法として、とくに注意
 すべきものである。「テヤ」の形が、独特の意味作用を発揮している。

テワ

『愛媛の方言』には、中予、野忽那島の「こんなもの食われるテワ」との言
 いかたが見える。「テワ」が、「ものか」の意のものとするれば、「テワ」には、
 「言う」動詞が内在しているかとも想察される。

徳島県下にも「テワ」があり、これは、

○アメガ ドシャヌケルンヤ テワ。

“ざあざあ降ってくるんだとき。”

などと言われている。人は、この「テワ」について、“人から聞いて、また伝
 える。”などと言っている。他例、

○アイタノ バンヤ テワ。

は、「明晩だって。(中女間)」だと言う。(金沢浩生氏による。)[テワ]に、「と言う」がふくまれてはいないか。『阿波言葉の辞典』には、「テワ〔助〕ト言ウワの約(南方) 無責任な嘲笑や非難を含んだ噂話、 北方の「チューワ」に対する語」との記述が見える。

淡路島にも「テワ」が見いだされる。由良町で聞き得たものは、

○ドコソコイ カミナリ オッタ テワー。

どこそこへカミナリが落ちたってということだわ。

○ヒソクソク スタ テワナー。

“貧乏になった。”というわねえ。

などである。『淡路方言研究』にも、「てわ」が見え、「といふ事だの意味に使ふ。」との説明が見える。そこにあげられた例は、

奉公はつらいもんじやてわ、のお。

である。

『三重県方言資料集 志摩篇』には、「えーてわい よいそうだ(和)」などの記事が見える。ここの「てわい」も、「言う」の内在を認めしめるものか。

『くろしおの子(青ガ島の生活と記録)』には、

父ちゃんは三十九日も見んじゃろう年があらっていわ。
(見なかった) (あったという)

との記事が見える。参考までに、これをここにかかげておく。

そういえば、共通語でも、「あとから来るんだって。」などの言いかたがなされている。こういう、言いむすびの「テ」が文末詞であることは、もはや認めやすかろう。「テ」は、伝聞の意をあらわす。「テ」には、「と言う」関係の言いかたが内在していよう。「あったっ ^テテ？」との問いかえしことばのばあいの「テ」にしても、よく、「と言う」をくみとらせるようである。(——「テ」形の成立が問題であって、これは、ただの「テ」助詞利用とは見がたい。)

『全国方言資料』第2巻の「新潟県中魚沼郡津南町結束」の条に見える、

f………… ツレメー シタンノフダテ

つらい目を みたんだそうですね。

も、いま、問題にしている「テ」を示してはいないか。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

m………… コイバシニ コイタテーン

コバシ⁴⁾で こいたそうだ。

4) 千歯の小型のもの。稲をこく農具。

というのが見える。「テ」が「テーン」とあるのか。

瀬戸口俊治氏が、広島県倉橋島南岸地で得られた、

○ホー ヨテー。

“そうよ。”

○キフー イッタ フヒ(イ)テ。

“きのう行ったのよ。”

での「テ」も、ここにあげてよい「テ」であろうか。——それにしても、用法に特色がある。

テラ

『五戸の方言』には、「テラ」がとりあげられており、これが、

「と云ってらア」「と云って居らア(るわい)」の略された形。

と説明されている。例には、「行ったテラ(行ったと云ってたわ)」などがあげられている。「テラ」文末詞がとりたてられよう。

おなじく東北の、『山形県方言集』には、「んだでら。」についての「さうだそれ。」との解が見える。「でら」が問題になる。『出羽方言研究彙報』第一輯の宮良当壮氏「山形県方言調査の思ひ出」には、

Mudziki tomo sompinjtomo žiū:dera.

ムジケともソンピンとも云ふよ。(つむぢまがりを)。

というのが見える。これらの「デラ」は何であろうか。

榎垣実氏の「近畿地方 大島」(NHK国語講座『方言と文化』)には、

ホイテ ヒャクシゴジュッパイ トッテキタン テラ。(それで、百四五

十杯取って来たのだとか。)

というのが見える。この「テラ」は、「とやら」式のものであろうか。——東京語などの言いかたに「うそ言ってらあ」式の言いかたがある。こういう「テラ」は、文末詞になっていないのだろう。

テテ (テチ)

神部宏泰氏によるのに、隠岐島内では、

○ツク^リマ^ス テテ。

つくりますとも。 (老女)

○シ^ェンシ^ェガ コイ テテ^ー。

先生がこいって。 (小男一同)

などの言いかたがおこなわれていると 言う。(同氏「隠岐島五箇方言の文末助詞」『方言研究年報』第一巻) ここには「テテ」文末詞が認められよう。「とやう」の内在するものである。用法には、上二例のとおり、二様が認められる。藤木敦氏教示の出雲南部での「テテ」例には、つぎのものがある。

○エ^ーカゲ^ン ヤメ^チョケ テテ。

いいかげんでやめておけたら。

○ソ^{ゲー} イ^ッタ^テテテ, ア^シタ^ワ ア^メダ テテ。

そんなに言たって、あしたは雨ということだよ。

中国地方に、「そんなに言たって、……。」の「言たって」にあたる言いかた「ユータテテ」が、多く見いだされよう。この「テテ」も、もともと、「と言って」であろう。

瀬戸内海島嶼の大三島で、私などは、少年時から、

○ソ^ガニ ユ^ータ テテ。

そんなに言たって!

などの言いかたをしてきた。人々は、今もよく、「^ード^ーテテ」(なんともまあ

それはそれは)とか、「ドッテ」(それはそれは)とかの副詞をつかってもある。「テテ」は、「と言う」をふくむものであろう。この「テテ」をつかった、

○アル テテ。ナン テテ。

あるとも。なんとも。(ひじょうにたくさんあることを言う。)

(上の言いかたは、ほとんど一センテンスなみのものになっている。)

などの言いかたもおこなわれている。

『伊予松山方言集』には、「テテ」についての、「口で言ひ表はし難いことを含む。」との説明が見え、つぎのような例が見える。

熱いテテ。(熱いことは口に言へない)

太^{おと}いテテ。(太いことは口に言へない)

近畿の三重県西南端で聞いたことばに、

○ドシタンナラ オマイ。イカニヤ テテ。

どうしたのだいおまえ。なんとまあ。(けがをしてかえてきた子に対しておやが言う。)

というのがある。この「イカニヤ テテ。」について、土地の人は、“まあ一種の感嘆詞”，“思わぬようなことをやったばあいなど。”と語ってくれた。「テテ」は「と言って」式のものではなからうか。(じっさいは、「と言っても」のようなものかもしれない。)

『石川県方言彙集』や『^{普通語}対照 金沢方言集』や『松任地方の方言』には、「いかなてて」という成句が見える。——「どういたしまして。」というものだという。ここの「てて」も注目される。馬場宏氏の『能登木郎方言考』には、

「と云うの？」=すぐ来る^{テテ}?

「と云うのか！」(驚声)=何！死んだ^{テテ}！

などの事例が見える。当地方で「テテ」は、さらに「テテナ」「テテヤ」「テテケ」などとも言われており、また、「カテテ」「カテテヤ」「カテテヨ」「カテテケ」などとも言われている。

愛宕八郎康隆氏教示例の、能登半島東北端部、珠洲市の「テテ」文末詞例は、

○バーサン マゴノトシモ シラン テテ。

ばあさんは、孫の年も知らんてよ。 (老女→青男)

である。

私が、能登半島西岸で聞いたものには、

○ウルサイノ ナンノ テテ。

“「うるさいったらありゃしない。」という意。”

というのがある。

『富山市児童言語調査』第四集には、

あいさに町へ出りや用事あるててあるてて。

との文例が見える。「あるてて」の「てて」は、文末詞と見てよいものであろう。

中部地方南部では、ここに、愛知県西北部の「テテ」例がある。

○クタブレテクルデ ノロマヤーカ テテ。

くたびれてくるから乗ろうかと言ってね。 (老男→佐藤氏)

佐藤虎男氏の教示せられたものである。

「テテ」文末詞、あるいは文末詞的な「テテ」は、主として関西系のものであろうか。「テテ」を文末詞にしていくような発想が、主として関西地方に根づいているらしいことは、興味ぶかい事実である。

「テテ」に相応する「テチ」になると、これは九州域のものである。能田太郎氏の『肥後南ノ関方言類集 用言篇』には、「テチ」についての、「と(いふ)に当る、」との説明が見え、「東京さん行くテチ。」などの例があげられている。『全国方言資料』第6巻の「熊本県上益城郡浜町」の条には、

m_1 ムスコマゴテチナー

男孫だそうですねえ。

との言いかたが見える。同第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条に見える、

m ソギャンダッタテチサリ

そうだってねえ。

の「テチサリ」というのは、どういうことばなのであろうか。岡野信子氏教示の唐津市神集島方言の例には、

○シチジュージッサマ ハチジュージッサム カシノ コト イワシタ
テチ。

七十・八十の爺様が昔のことを言われたと言って、先生がよそで話されるのよ。 (老女→夫)

というのなどがある。

テンガノ

これもここにあげておこう。岩倉市郎氏の「南蒲原郡昔話(二)——新潟県南蒲原郡葛巻村其他——」(『昔話研究』第二号)には、

婆さは『さうか〜』と言ふて、大きな焼めしを拵へたてんがの。爺さは喜んで山へ行つたてんがの。

というのが見える。「てんがの」の「てん」には「と言う」が認められはしないか。——「昔あつたてんがな」は、水沢謙一氏の昔話書名にもなっている。

四 チヤ チャ

「と言やあ」相当の「チヤ」または「チャ」を見る。これの存在は、国の全域にわたる。ただし地方によって、その存在に厚薄があり、中部地方と東北地方とは、「チャ」の、わけてもさかんなものがある。

「チヤ」と「チャ」とは、分布に、明確な区別を認めることができない。二者は双生児にも似たものであろう。所によっては、「チヤ」と「チャ」との両方が見られもする。以下には、これらおのおのの存立にしたがって、その実情を見ていくことにする。

九州地方を見る。この地域には、「チヤ」または「チャ」のおこなわれること

が、さほどにはいちじるしくなさそうである。

鹿児島県下では、

○ナイ スッ チャ。

“何をするんですか？”

などと言っている。

○コゲン スッ チャイ。

“こうするのですよ。”

などと「チャイ」の聞かれることもある。「ナイ スッ チャ。」は、「何をす
る トチャ。」からきたものであろうか。「コゲン スッ チャイ。」も、「コゲ
ンする トチャイ。」であるのか。このようだと、「チャ」が聞こえても、語源
は別のもつとされる。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊本郡南種子町島
間小平山」の条に見える、

f ホーヨチャー

そうよ。

などとある「チャー」は、どういう「チャ」であろうか。（この種子島出身の
瀬戸口修氏の教示せられたものは、「オヨ チャー。」である。）——上の「小
平山」の条には、²⁾「セッセンチャー」（とつても。）ともある。

2)「所詮」の意。

宮崎県下には、比較的よく「チャ」がおこなわれているか。

○マテ チャ。

は、「までというのに。」である。

○イラン コツ スンナ チャ。

つまらぬことをするなというのに。

などと言っている。（橋口巳俊氏による。）県下に「チャ」の言いかたもあるら
しい。——「トチャ」の「チャ」もあるか。『全国方言資料』第9巻の「宮崎県
西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条に見られる、

f………… トッテン ヨーイナ コッチャ ネットチャ

とても 容易な ことでは ないですよ。

の「ネッチャ」の「チャ」は、どういう「チャ」であろう。

熊本県下にも「チャ」「チャ」がかなり見いだされるようである。

○マホ^ーチャン ^ーチャー。

マホちゃんってば。（“何回もよびかけても返事せぬ時に”との説明があった。）

というのは阿蘇山南麓で聞いたものである。ここでまた、人が、

○ダイシン^ンインマ^ダチャ イ^タ チャ。

大審院までは行ったよ。

（“「チャ」は「行った」ということをつよめて言う。”）

などと言っていた。県南でもまた「チャ」「チャ」が聞かれる。

○コッチ ^マワシテ イ^ク チャ。

こっちへまわしていくんだよ。

は、天草下島南端での一例である。（あるいは、この「チャ」は「トジャ」なのか。）

長崎県五島では、返事ことばの「^ン チャ。」（“何を言うのか。”）というのを聞いたことがある。——“これが返事になってしまっている。”のだという。（「^ン カ。」とも言うそうである。）五島で、

○ヨ^ロシン ナ^カ ^ーチャー。

“よくもないといえば。”

などとも言っている。佐世保市方面には、「ウチ ^モラ^ワレン ^ン チャ^ン。」（私もらえないんだもの。）などの言いかたがあるという。

佐賀県下については、今、言うべきものを持たない。——「チャ」があるか。

福岡県下では、北九州市方面で、

○ア^トカラ ヤ^ル チャ。 少女→妹

（あとであげるつたら）

などと言っている。（岡野信子氏「助詞『カラ』の生態——若松市島郷地区における——」『北九州国文』第七号）岡野氏はこの方面で、多く「チャ」（てば）

(ったら)の実例をとらえていられる。堤妙子氏は「北九州の『ち』『ちゃ』」(『言語生活』第四十八号)で、

「母ちゃん、母ちゃんちゃ」などのよびかけや、「お水汲んでちゃ」などの命令や「そうちゃ」「それっちゃ」等々のような同意を表わす「あいづち」の類にいたるまで、別に意識しないで軽くつけている。

と述べていられる。

福岡県下に、

○ワタシヤ ルスバンデシタツチャ。

私はるすばんでした。

など、「トヂ(ジ)ヤ」の「チャ」がよくおこなわれている。「と言やあ」の「チャ」と「トヂ(ジ)ヤ」の「チャ」とが混在している。(「チャ」の上に促音が出ていれば、このほうは「トヂ(ジ)ヤ」からのものである。)

大分県下には、

○ソージャ チャヤ。

そうだよ。

など、「チャ」がよくおこなわれているようである。「チャ」が「チャー」ともある。

○イヤ, ログヂチャ オシー チャヤ。

いえ、六時といえはおそいってば。(青女→青ら)

は、大畑勘氏「大分県南部の方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)に見える「チャ」例である。

つぎに、中国地方を見る。

山口県下に、「チャ」「チャ」のおこなわれることがいちじるしい。長門西北部の例は、

○ホント チャー。

ほんとだよ。

○ソ^ナナ コ^トー ス^ナッ チャ。

そんなことをするな^{って}ば。

などである。「チャ」と「チャ」^とが混然とおこなわれている。「チャ」の言いかたに、

○コ^ンド ヤ^マイ イ^コー ヤ^ナーチャ。ナ^ーチャ。

こんど山へ行こうよ^{ねえ}。ねえ。

のような、同意を求める表現になるものもある。しかし、この種の「チャ」もまた、そのもとが「^と言^{やあ}え^ば」であることは明らかである。山口県下には、東西に「チャ」「チャ」が見え、周防島嶼にも「チャ」「チャ」が聞かれる。周防本土東部での例は、

○マ^テ チャ。

までというのに。

○ハ^ー エ^ー。ナ^クナ チャ。

もういいよ。泣くな^{って}ば。

などである。なお、山口県下での特色ある言いかたとして、

○ソ^レッ チャ。

そうだよ。

をあげることができる。

広島県下にも「チャ」が見いだされる。「チャ」もある。

○ヤ^ンナ チャ^ー。

するな^{って}ば。

は、安芸北部での一例である。本県下に「イヤー」の言いかたもある。

安芸の、

○ス^ナ イ^ヤー。

するな^{って}ば。

のような言いかたは、「イヤー」にすぐに「言^{やあ}」が認められる。——このさい、「^と言^{やあ}」の「^と」は内在していないのが注意される。いわば「ト」ぬけ

である。このような「イヤー」の言いかたでしめくくられる文表現の品意は高くない。そうであって、じれったさの気もちがよく表現される。「イヤー」の言いかたは、しばしば「ヤー」にもなっている。こうなれば、ものはますます下品になる。

岡山県下にも、「チャ」「チャ」がいちじるしい。

○チャーダイ。チャーダイッ チャ。

ちょうだい。ちょうだいってば。

は、備中島嶼での「チャ」例である。——この地方では、「チャ」よりも「チャ」が聞かれる。県下に、どちらかといえば、「チャ」のほうが優勢であろうか。ところで、北部の作州では「チャ」がよく聞かれる。

○カッター カヒタリ ヒテ ツク チャ。

借りたり貸したりして搦くんですよ。

は、作州西部での「チャ」例である。「チャ」の二音節は、ゆっくりめにはなく、むしろ早めに発音されている。——それだけ、「チャ」に近いとも言える。鳥取県下には、「チャ」がよくおこなわれている。

○イケンッ チャ。

いけないよ。

は、伯耆東部での一例である。(室山敏昭氏による。)鳥取県下に、「チャ」もなくはないのか。

鳥根県下に関しては、今、私は、言うべきものを持たない。ここの状況は、広島県下のとはちがうのか。

広島県下と岡山県下とでは、岡山県下に「チャ」のさかんなのが目だつ。この状況と鳥取県下の「チャ」状況とが相関するのであろうか。

四国地方全般、「チャ」「チャ」の存立は、おおよそ中国地方なみであらうか。香川県下の事象は、今、これとって、とりたてることができない。おそらく「チャ」などの存立が微弱なのであろう。

つづいて愛媛県東部がまた同様である。愛媛県中部になると、たとえば、松山ことばに、

○ゼッタ^イ トルナ チャ。

ぜったいにとるなってば。

などの言いかたがある。愛媛県南部となると、「チャ」が比較的さかんである。

○ソガイ イウタチ イケン^イ チャ。

そんなに言ったっていけないよ。

などと言われている。このような「チャ」のおこなわれたかたは、しぜんに、高知県下の「チャ」の流布につながっている。

高知県下は、「チャ」「チャ」の比較的よくおこなわれている所である。県中部南岸での例は、

○ワシガ スル^ル チャ。

わたしがするよ。(責任をもってするということ)

○チンガウ^ウ チャ。

ちがうわよ。

などである。男女に「チャ」「チャ」がおこなわれている。「チャ」が、

○ド^ー チャ。

どうだって？

などのように問いことばにも自由につかわれている。県下に、「チャ」と「チャ」のおこなわれることが混然としており、どういふばあいには「チャ」がおこなわれるということなどが言いにくいようであるが、県下総体には、「チャ」が優勢であろう。「チャ」と言うよりも「チャ」と言うほうが、「と言やあ」の気分を、より克明にあらわしうるのだろうか。(——念おしの気味がよりつよかろうかと思う。)

○イカン^ン チャ。

いけないってば。

などでは、禁止の気もちの表明が、ずいぶんつよいようである。それにしても、

一発言者の表現中に、「チャ」の言いかたと「チャ」の言いかたとが、前後して出たりもするか。

徳島県下にも「チャ」が認められる。金沢治氏の『阿波言葉の辞典』には、

チョットモミエンツチャ

〔さっきからそういってるじゃないか一寸も見えぬって…。〕強辞などの例が見える。——上例の「ミエンツチャ」のばあい、「チャ」の前に促音がある。この種の発音になることが多いらしい。金沢浩生氏も、

シナハレツ ^ハチャ。

“なさいったら。” (半田のことば)

などの例を教示された。

つぎに、近畿地方の「チャ」「チャ」を見る。全般的には、当地方にも、「チャ」「チャ」は隆盛ではない。

兵庫県では、北の但馬の「チャ」が注目される。

○ハヤ セン カツチャー。

早くしないかってば。

は、但馬北海岸での一例である。

因幡から但馬へは「チャ」がつづいているのであろう。なお、このつづきは、東にもたどられるようである。丹後半島でも、「チャ」「チャ」がおこなわれている。

○ボクノダッ チャ。

ぼくのだってば。

など、促音をはらんで「チャ」のあらわれることもある。

○トイー ヤマエ イクダ チャ。

遠い山へ行くんです。(しごとに)

○トーイカーッタ チャ。

ずいぶん遠かったのよ。

は、「チャ」の二例である。丹後に「チャ」は比較的多いか。

大阪府下に関しては、今、かくべつに言うほどのものがない。

和歌山県下も、まずは同様である。『和歌山県方言』に、

アルチャ ありますよ。

などの記事が見えもするが。(東牟婁郡の事象のよしである。)

奈良県下については、『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条に見えるもの、

m………… アノー オーノヘン アノ タンダッチャ

大野あたり、あの 谷だけだよ。

を引用することができる。この「チャ」はどういう「チャ」であろうか。

京都府南部の綴喜郡田辺町には、

○ナニ シテッ チェーン。

“何してるのや?”

との言いかたがあるという。この「チェーン」はどういうことばなのであろうか。「と言やあ」的なものがふくまれているのかもしれない。すくなくとも「チェ」のところには「と言う」的なものがふくまれているのではなからうか。

三重県下に若干の「チャ」が見いだされる。南部の北牟婁郡下には「チャ」がある。高田昇氏の「三重県北牟婁郡尾鷲方言」(『方言誌』第十五輯)には、

ヨインジャツチャー よいのだと言ったら(しつこいね)位の意

との記事が見える。中野朝生氏も「北牟婁地方の助詞について」(『三重県方言』第8号)で、

「ハヨイコッチャ」は須賀利等の漁師間で使われる男性語である。

と述べていられる。

私は、伊賀で、つぎのような「チャ」を聞いている。

○ウチノ トナリニ ナー。エヒメケンカラ 来た人が イマスノヤ チャ。

私のうちのとなりにね。愛媛県から来た人がおりますのよ。

この「チャ」は、まさに、上来、問題にしてきた「チャ」であろう。——それ

にしても、「チャ」はかるくつけそえられるものになっている。

倉田正邦氏の「桑名武家ことば語彙」(『三重県方言』第2号)には、

ワッタツチャ 物をワったとき。

などの記事が見える。

つぎは、中部地方である。この地方には、「チャ」ことばのおこなわれることがいちじるしい。

中部地方内も、福井県下の若狭は、あまり「チャ」を見せないようである。越前となって、——北陸路のまさにこのあたりから、「チャ」ことばがさかんである。『全国方言資料』第3巻の「福井県丹生郡織田町笈松」の条には、

m………… ドーシタッテ トシヨリジャデー マー アン アヤマチデモ

どうしたって 年寄りだから、 けがでも

シテ ナガビクンカー ヨカラズット アキラメター マー イー

して 長引くのよりは いいだろうと あきらめて、

(*f* ウーン) イルンデスチャー
いるんですよ。

とある。私も、この織田の地の調査で、「チャ」を多く聞いている。寺横武夫氏は、足羽郡のことば、

○ホンナコト セントオケッ チャン。

“そんなことしないでおきなさい(というのに)。”

などというのを教示せられた。「チャ」が「チャン」とある。「アンマリ オコンナッ チャン。」(あんまり怒るなつてば。)などとも言っているという。「チャ」が「チャン」とあるのは、もっとものことに思われる。「チャ」と言うて強調する気もちは、しぜんに、「チャン」の発音をもひきおこしたであろう。

石川県下に、つづいて「チャ」がさかんである。『石川県方言彙集』には、

おこちや ヨセ(止メヨ) 鳳

まとちや マッテキナサイ 鳳

とある。岩井隆盛氏が、国立国語研究所の『日本方言の記述的研究』に寄せられた「石川県金沢市彦三一番丁」の条にも、

見ンチャ（ないよ）

などがある。石川県東南辺の「チャ」例をあげよう。

○カイテ ゴザッ チャ。

これは「書いてありますよ。」である。（中女の言 預金者の男性への説明のことば）

○ヨ一、カンガエテ ミルト、ワカッ チャ。

よく考えてみるとわかるさ。（中男）

などとも言っている。『全国方言資料』第3巻の「石川県石川郡白峰村白峰」の条には、

mア一 モーハヤ スンダワッチャ

ああ、もう すんでしまったよ。

などともある。この方面では、「チャ」を「チャヤ」とも言っている。たとえば、

○チーワ デタ チャ。

“いや、血は出たってことだ。”

○タケデ アタット デカイ ナル チャ。

竹であたると、（その動物は）大きくなるよ。

など。問いのばあいにも、「カチャ」などと言っている。「チャヤ」は、しばしば「チャ」に近くも聞こえる。「チャ」と言うか「チャヤ」と言うかの区別などは、話者たちに、あまり意識されてはいないのであろう。（したがって、「チャヤ」の分布域などは、全国的に見ても、ほとんど画定することができないありさまである。）能登半島域にも「チャヤ」がさかんである。「自分らはした。」ことを相手がたに強調するのにも、

○オラチャー シタガヤ チャ。

などと言っている。「チャヤ」は、“たたみかけて念をおす”ことばであるという。

○ヒヤカサレル ワケヤ チャ。

ひやかされるわけですよ（だよ）。

などと、「ワケヤ」という言いきりの下にきている「チャ」などを見ていると、「チャ」の、訴えことばであることが、よく理解される。

○トットキノ コトバ ダソー チャ。

とっておきのことばを出しましょう。

というような意志表現のばあいにも、「チャ」の、特別の訴えことばであることが明瞭である。以上の三例は、半島西岸部でのものである。北海岸、輪島の一例は、

mウ アンタノ バンモ オドッチャー

翌日の 晩も 踊るんだよ。

である。（『全国方言資料』第8巻「石川県輪島市海士町」）『全国方言資料』第3巻の「石川県輪島市名舟町」の条には、

mオレチャー マ ナンダイニ キタッガイチャー

わたしは まあ 難題³⁾に 来たんだよ、 3)「無心」の意。

というのが見える。ここに出ている「チャー」は「チャー」に近いものであろうか。（能登西岸でも、私は「チャ」を聞いた。）能登半島東域にも広く「チャ」が見わたされる。

つぎに、富山県下となって、「チャ」のさかんに用いられるさまが見わたされる。大田栄太郎氏は、『方言の旅』の「富山」の条で、

良いちゃ番茶お母ちゃんにいうチャと言った揶揄的な語さえ生れて童謡的にいわれている。

と述べていられる。東条操先生夫人からお聞きしたことばには、「出町のチャーチャー」というのがある。（夫人は富山県出身のかたであった。）古く、富山県教育会編『富山県方言』にも、

ちゃチャー「よ」の意

とある。かつて私は、伏木と高岡との間の電車で、

○何々を ヤッテ ミタンヤ チャ。

何々をやってみたんだよ。

というのを聞いた。「ヤ」助動詞のあとにきている「チャ」である。これの文末詞であることは明白であろう。伏木港の「チャ」例をあげるならば、

○コマットッ チャ。

“こまっているんですよ。”

などがある。県下南部で私が聞いた「チャ」例は、

○ドーハイノ モンノ ユー コトバデス チャ。

同輩のもの言うことばですよ。

などである。県東部で聞きとめたものには、

○ソーデス チャ。

そうですね。

○ソコニ タットラッセ。タットラッセ チャ。

そこに立っていなさい。立っていなさいってば。

などがある。(前者例について、人は、「ソーデス ネー。」の意だとも説明した。)なお、黒部駅前では、

○ハーイ。ワカッタ チャー。

はあい。わかりましたよお。(三十八歳のお手つだいさん→宿の男性)

などを聞いている。かつて南極に派遣された、立山町の人は、“南極こそ腕のみせどころですちゃ。”と言っていた。(31年9月4日の『朝日新聞』)県下で、「チャ」は「チャイ」にもなることがあるらしい。富山市郊外でのその一例は、

○オラー ハズカシー チャイ。

わしははずかしいよ。(中男)

である。複合形の文末詞には、「カイチャ」「ガチャ」「ガイチャ」などがある。

○イマ イク ガーチャ。

いま行くってば。(つよく答えるもの)

には、「ガーチャ」が見られる。「ガチャ」が「ガッチャ」となるばあいもある。

新潟県下では、まず佐渡に「チャ」がきわめてさかんである。「サドノ チャ
ワ ノメン チャ。」(佐渡の茶は飲めんチャ。)などと言われている。例の佐
渡おけさには、「来いチャ、来いチャで二度騙された。またも来いチャで、騙
すのか。」という文句などもあるという。佐渡北部での「チャ」例には、

○ナントリデモ アリマスッ チャ。

いくとおりでありますよ。

○コドモガ ミテ キタ モンダッ チャ。

子どもが見てきたものですよ。

などがある。水津での一例は、

○アノ モンガ ユートッタッ チャ。

あの者が言ったのさ。

である。人は「チャ」につよい郷土感をおぼえ、「チャ」を言うと、しっくり
とした気分になるという。念おしのことばの、念をおす気もちのかるくなった
ところに、このことばの、ある種の品のよさもできているようである。さて、
越後となっても、だいたいには、広く「チャ」が認められるのか。北の粟島に
も「チャ」がある。(「どうどうしてくれ。」の「…………… クリャ チャ。」な
ど。)西南方での実例は、

○ヤー、ソー スルナー チャー。

やあ、そうするなよ。

などである。当地方の「チャ」は、越中の「チャ」によくつづくものであろう。
このほうとともに佐渡にも「チャ」がさかんなのは、分布上、まさに注目にあ
たいすることである。直江津方面の「チャ」は、

○ソーダ チャ。

そうですね。そうだね。

などである。「ソーダッ チャ」などともある。土地の人は、“佐渡と似かよっ
ている所は西頸城だ。”などとも言っている。(越後内でも、「チャ」はつかわ
ぬとされている所もあるのか。)越後北域での「チャ」の例は、

○イッテ コイ チャ。

行ってこいよ。

などである。「くれ。」を「くれっ チャ。」とも言っている。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」には、

fイテ マズ ヤスメッチャ。

家へ帰って まあ 休みなさい。

とある。劔持隼一郎氏は、「粟島浦村の言語(-)」(『高志路』201号 昭和39年4月)で、

ヨンデクレチャ (読んで下さい老人→校長)

アツタマーツゴーシテキテクレチャ (あしたマア都合して来て下さい)

アソビニキテクレチャ (遊びに来て下さい)

などの言いかたを示していられる。なお、同氏は、「ツァエ」の言いかたもとりあげていられ、これについて、「強めの意に丁寧さが加わった終助詞かもしれない。次の『ツォ』に丁寧さの加わったものであろう」と述べていられる。新潟県下での「チャ」に関する複合形の文末詞としては、「カチャ」が注意される。といっても、私が持っている実例は、佐渡のものである。そこでは、

○オマヱイ スシ ク カッチャ。

あんたすしたべるね?

などと言われている。「カ」と「チャ」とをむすびあわせば、念をおす気もちはずよくなる。やがてこれが、さほどつよい気もちでもなく、さりげなくつかわれるようにもなって、用法の拡大がおこったろう。——どのようにかるくつかわれたとしても、もとの念おしの味わいは、ぬげきれないことでもあろう。

南下して、岐阜県下を見る。『岐阜県方言集成』によれば、恵那郡の、

いかんちゃあ〔句〕 いけないといへば。

郡上郡の、

おれないっちゃ 僕のですよ。

など、美濃に「チャ」が認められる。

愛知県下では、今のところ、指摘すべきものが私にない。

静岡県下では、山口幸洋氏の『静岡県本川根方言の文』に、

ドーシルコヅラッチャ

少ないがこのような「ッチャ」が認められる。「〜といえば」(東京の「ってば」に相当か)に出自を求めることができるものだけに表現を強調する意味をもつ。

との記事が見られる。私の聞きとめた清水市方面の一例は、青女発言の、

○カマン チャ。

(「さしつかえない。」の意のものだったようである。)

である。——ここには「チャ」が見られる。『方言と文化』の「中部地方」(金田一春彦氏)には、

そうさあ。昔から言うじゃんか。コイに上下の差別はねえっちゃあ。

との記事が見える。——静岡市近郊の対話である。伊豆半島南部で私が聞き得たものには、

○オイ チャ。

(返事ことば)

の例がある。

長野県下では、まず北部によく「チャ」がおこなわれている。佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」には、

ソレデイイッチャ (それでいいよ)

違ウッチャ (違ふよ)

などの例が見える。『信州上田附近方言集』には、

オケッチャ(句) 止めよ。打捨ておけよの意。

などの例が見える。私が県西北部で得た例は、

○トリニ タメトイテ ヤル チャ。

にわとりに(馬鈴薯のくずを)ためといてやるさ。

(老女→孫の小学生三男)

○マ^タ タマゴ ヨコス チャ。

(そのくず馬鈴薯をやれば), また卵をくれるさ。

などである。信州の南部にも「チャ」が見られる。中部東方には、

オケチャ(句)よしなさい。捨ておけ。

がある。(『信州佐久地方方言集』)長野県下の「チャ」の使用は、命令形の言いかたのもとにつかわれるのに限られたものではない。本県下の「チャ」に関する複合形の文末詞では、「カッチャ」(かチャ)がよくおこなわれている。「ワッチャ」もある。

f ホントニ ウレシワッチャー

ほんとうに うれしゅうございます。

は、『全国方言資料』第2巻の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条に見えるものである。

山梨県西南部での「チャ」の例は、

○ヒトツ クレ チャー。

一つくれよ。

○ソリャ, ドーカ シテルッ チャ。

それは、どうかしてるよ。(中女)

○ヨク イッタッ チャ。

(そのことばは、むかしから)よく言ったよ。

などである。県下の他地方にも「チャ」があるらしい。県下の一種の表現法に、

○ノボッテ アタッチャー。

上がって(こたつに)あたってはいかが?

などとの言いかたがある。こういうばあいの「チャー」は、「ては」の言いかたのものである。深沢泉氏は『甲州方言』で、

尊敬の意をふくめた勧誘の語に「チャー」がある。

と述べていられる。

中部地方に「チャ」はよくおこなわれているが、関東地方には、「チャ」のおこなわれることがすくない。北の東北地方には、「チャ」のそうとうにおこなわれているのが見られる。関東域は、中部地方と東北地方との間にあって、やや、異質的である。

とはいいいながら、関東西北部の群馬県下には、「チャ」のおこなわれることの、かなりさかんなものがある。このことは、中部地方と東北地方との、「チャ」分布のつなぎと見られるものである。群馬県下については、中沢政雄氏などの調査がある。中沢氏は、『NHK国語講座』昭和30年6・7月号の「群馬県」の条で、

群馬県の中でも、北部西部の利根郡とねや吾妻郡あがつまのことばはいろいろな特徴を持っています。(中略)「ヨクミレッチャチャ (よく見なさいよ)」

と述べていられる。私が得た、利根郡片品村の一例は、

○そうだっちゃ (ちやは幼児一小学生が多く使用する)

である。「チャ」が「チャイ」ともなっているか。中沢氏の「群馬県利根郡片品村言語調査報告」(『季刊国語』昭和24年度 1)には、

チャ、チャイ=キチャンチャ (来てごらんよ) キテミレッチャ (来て見なさいよ) ヤーチャイ (いやですよ)

と見える。『全国方言辞典』の補遺篇には、

いげっちゃ 人が出て行く時に出すお茶。「イゲッチャでも飲んでってくん」群馬県勢多郡。

との記事が出ている。「イゲッチャ」はもともと「行げッ チャ。」であろうか。文末詞の「チャ」が「茶」に転用されている。こういうしゃれ口もおこなわれるほどに、文末詞「チャ」はよくおこなわれてきたということなのであろうか。

群馬県に隣る、東の栃木県にも「チャ」があるか。かつて、県東北部の黒磯方面を調査した時、土地の識者が、その著作の郷土誌を私に示された。中に、

ソウダツチャ ソウデアルトイフ

ソウダツチャア ソウダラウ

などというのがあった。

上の両県のほかでは、諸県に、「チャ」の見るべきものがあまりない。——と、今の私は言わざるを得ない。

『千葉方言 山武郡篇』には、

エッチャー 善いとさ

読メルッチャー 読めるとさ

などの記事が見えはする。——「チャー」が「伝聞ヲアラハス助詞」とされている。

神奈川県下や東京都下にも、「チャ」が、なくもないのか。

秩父市教育委員会編『秩父の伝説と方言』に見える、

よくクデルなあ。さっさと仕事を片づけちゃ。

の「ちゃ」は、今、問題にしてよい「チャ」なのかどうなのか。

東北地方に、「チャ」はそうとうおこなわれているものの、その分布には、以下に述べるとおり、片よりがある。

福島県下には、「チャ」があまりおこなわれていないようである。ただ、この地方の方言書などには、問題とすべき記事が見いだされる。『福島県棚倉町方言集』には、

「そおなんだっ ちゃ。東京え、行ったんだっ ちゃ。」

とある。福島県安積中学校『方言調査資料』には、

サウダベッチャ (さうでせう)

とある。県西北辺で見ることのできた方言記、たかはしきよし氏の『ふるさとのことばあつめ』には、

ソーナベッチャ そうだろウヨ

わかんべっちゃん 解明出来るだろウ

とあった。「チャ」「チャ」(また「チャイ」)がある。「サウダベッチャ (さうでせう)」などとあるのからすれば、「チャ」はかなり自由につかわれるもので

あることが察せられる。

北上しての宮城県地方は、東北地方内でも、なかならず「チャ」がよくおこなわれていて注目される。広くつよく「チャ」がおこなわれ、仙台弁でもこれがいちじるしい。——当地域での「チャ」は、古くからおこなわれてきたものらしい。『細倉の言葉』には、

「行ケツチャ」（行けヨ 行ケツテバ）

とある。ここに「チャ」と思われるものが見られ、しかも、それが、「テバ」と言いかえられている。当地方に、「と言やあ」式の「チャ」のおこなわれていることがたしかであろう。

当県内に、「チャ」と「シャ」とが見わたされる。「シャ」と「チャ」とは語態が似ているけれども、実質はおおいに相違するものであろう。「シャ」は、「もし」と「し」という文末詞が「シャ」と発音されたところからできたものであろう。

宮城県北の一識者は私に語ってくれた。「サー アガライン チャ。」（さあ、おあがりなさいよ。）の「チャ」は、“ためらっているのを、しいて慫慂する気もちのものだ。”と。——「サー アガライン ヤ。」との言いかたのほうが一般的なものだとのことでもあった。県下例を、南北にわたってあげてみる。

○ンダイツ チャ。

そうだよ。

などの言いかたは、県下の全般によくおこなわれているか。松島湾岸の実例は、

○タイシ[i]タモンダ チャ。イチ[i]イチ[i]カク[ü]ンジャ。

たいしたものですな。いちいち書くのでは。 （中女→藤原）

○ガツコサ イッタベツ チャ。

“学校に行ったよ。”

などである。石巻弁の一例は、

○オラ ヤンダ チャ。

おれはいやだよ。

である。仙台弁に関しては、“仙台ベツチャ”（「センダイベツチャ」など）との言

いぐさがおこなわれている。まこと、仙台人は、“チャーッテ 言ワネッ チャ。”などとも言っている。もとより、「〜ペッ チャ」の言いかたもよくなされており、それが、「〜ペッ チャ」ともなっている。(「〜ペ チャ」ともある。)土井八枝氏の『仙台の方言』には、

あの人、信用ないのあたりまえだえっちゃ。(あの子の信用のないのは当然よ、)

などの言いかたも見えている。『東北方言集』には、

めっちゃあ〔助動〕(べっちやの再転)ではないか、又はだらう

などとも見えてもいる。県下南方の白石市方面には、「〜ペッ サ」の言いかたがあるという。――菊沢季生氏は、「宮城県方言文法の一斑」(『国語研究』第二巻第四号)で、

所が、白石町附近では特に「白石ベッサ」とて注目される様に、ベッチャをベッサの形態で言ひ表はしてある用例から考へると、此のチャは念を押して言ふ終助詞で標準語のサに当る様に思はれるから、白石附近の特例が却ってその原形を保持してあるものではなからうか。

と言われる。当方の「サ」は、じじつ、どういふものであろうか。さて、「チャ」ことばの用語品位をたずねるなら、『仙台市史』6の方言篇に、

以上のベッチャ・ペッチャ・エッチャは仙台弁に類出し、語感上仙台弁をきたないものになっているが、これらの語は必ず对人的に用いられ、単に「べ」というよりも丁寧ないい方で敬語の範疇に属する。敬語の意はチャに存するが、…………。

との記事が見つかる。私がかつて、仙北出身の小学校教師から聞いたところによると、「チャ」は“ソマツな言いかた”である。

○コンヤ チョッコラ キ [kçi] テ ク [ü] ニン チャ。

今夜ちょっと来てくださいよ。

など、「チャ」と言うとき、“したしみが深まる。”のだともいう。最後に、「チャ」に関する複合形の特別なものが注意される。「チャナ」「チャネ」「チャヤ」な

どがある。

○ツダ^ノベ チャナ。

“そうであろうな。”(推量)

は、「チャナ」の一例である。

○カーネッ チャヤー。

たべない!

は、「チャヤ」の一例である。

○ア^ツチャー イグ[ü]ベ チャヤ。

“あっちへ行こうじゃないか。”

などの言いかたでは、「チャヤ」のつかいかたの自由さが認められようか。

山形県下でも、全般に、「チャ」ことばがよく聞かれる。宮城・山形と、奥羽の一定部位に、——東西にわたって、「チャ」ことばがとくにいちじるしいのは、観察して興味につきない様相である。まず、『山形県方言集』には、

べちや bēcha 連続語 でせう 庄内, 最上
村山, 置賜

とある。

あつちや, えぎでえちや。(あつちに行きたいなあ。) 庄内, 最上
置賜

などの用例が見える。県南、置賜地方に関しては、横山辰次氏の「山形県置賜方言語法」(『方言』第五卷十二号)があり、「すカネ チャ(一)(いやですよ)」などの用例が見え、

チャ tʃa, これは女が余計に使ふやうである。

とある。なお氏は「チェ」も記述していられ、「ホカエナゴド ヤ^ンダ ベ^チエ(そんなことは嫌にきまつてあるよ)」などの例をあげていられる。私は、米沢市の北の在郷で、

○オレワ ログ[ü]ジュ[ü]ー イチ[i]ダッ シャ。(老女→藤原)

わしは六十一ですよ。

との言いかたを聞いた。これに見える「シャ」は、「チャ」と区別されるべきものであろう。「シャ」は、「もし」の「し」の系統のものであろう。山形市中心

の、いわゆる村山地方でも、「チャ」は、女性に用いられるものか。さて、齋藤義七郎氏は、

親が子どもに対して「学校におくると悪いから早くエゲ(行け)」と命令的に言うべき所を「早くエグンダ」(普通更に終助詞をつけて「エグンダナ」「エグンダヤ」「エグンダチャ」という)と語尾下り調に言うと、やわらかい婉曲な勧奨的表現となって、(早く行ったらどうか、早く行きなさいよ)という情愛こもった感じがする。(『勧奨的語法『〇〇ンダ』『言語生活』第七十八号)

と言われる。県東北部の最上地方よりも県西北域の庄内地方に、「チャ」の一段とさかんなものがある。三矢重松氏の『庄内語及語釈』にも、「庄内ちやに最上べといふ諺の通」とある。ところで、三矢氏の書には、「あの花明日は咲くちや」などの用例が見える。『言語生活』第二十二号(昭和28年7月)の「ことば風土記」の欄には、大井五郎氏の「庄内はおちゃのでどころ」というのがある。その中に、民謡の、

出羽の庄内おちゃのでどころ
じじちゃばばちゃで
あらおぼげだちゃ……

というのが見える。私が聞き得た庄内弁の「チャ」例をあげるなら、

○コッチャ コイ チャ。

こっちに來いよ。

○コッチャ コッ チャ。

こっちに來い!

などがある。庄内、旧大山町での例の一つには、

○コレ ワダシ[i]ノダー チャ。

これはわたしのだよ。

がある。人は、この表現の「チャ」について、“これがつくと、すこしだめをおす気もちで。”とも、“つよめる”とも説明してくれた。庄内南部での一例は、

○ソゲ イッペー キ [kçi] タラ アヅガロー チャ。

そんなにたくさん着たら暑かるうね？

である。

秋田県下にも、南北に「チャ」が見られる。県下方言に関する諸方言書が、「チャ」を指摘している。私が、象潟へんで聞き得た実例は、

○ヤイ ヤー。ヤイ ヤ。イーッ チャー。

いや。いや。いいってば。(こう言って、しいて三十円を渡す。)

(中女間)

である。田沢湖付近で聞き得た一例は、

○オレダッ チャー。

おれたよ。(電話)

である。

岩手県下にもまた、「チャ」がよくおこなわれている。南部の一ノ関弁での実例は、

○アッチャ イゲ チャー。

あっちへ行行ってば。

などである。『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条には、

mキョアー オラー ミンツァワノ マツサ エッテミテ コンベッチャ
きょうは おれ 水沢¹⁾の 町に 行ってみて くるよ。

とある。岩手県東南部の気仙郡にかかわる『気仙方言誌』にも、

ソダベッチャ……そうだろう。

1) 水沢は収録当時の水沢町(昭和29・4・1水沢市となる)で、この辺の中心都市

などの例が見え、「チャ」についての、

～だとき。～だとよ。[例]「いぐべっチャ」(行こうとき)

という記事が見える。花巻市あたりも、「チャ」をよく言っている。“農家で「チャ」をよくつかう。したしみが出る。下品ではない。”との説明も、私は聞いている。

○イッヅ〔ü〕モ オセワン ナッテラン チャ。

は、「いつもお世話になってますよ。」であるという。花巻方言の絵はがきにも、「チャ」がとりあげられている。花巻北方の一例は、

○ソダン チャ。

そうだよ。(そうですよ。)

である。小松代融一氏の『岩手方言の語彙』にも、「旧伊達領」の部に「チャ」があがっており、これが「ね」「よ」とされている。「ベッチャ」は「だろろうよ」とされている。さて、岩手県下で、とくに注意されるものに、「花巻マッチャ^注」などと言われている「マッチャ」がある。

注 東条操先生の『日本方言学』にも、これのご指摘がある。

さきの『気仙方言誌』では、

マッチャ……～ますよ。〔例〕「そらそごにあるマッチャ」

との記事が見られる。これによれば、「マッチャ」の「マッ」は「ます」である。小松代融一氏もまた、さきの『岩手方言の語彙』で、

マッチャー ……ますな(よ)

そごにあんマッチャー(そこにありますよ)

としていられる。なお、小松代氏は、『方言学講座』第2巻に寄せられた「岩手」の条で、

「けァるんチェ(チャ)」(帰るヨ)、「そだん^{チェ}」(そうだヨ)、「そだマッ
チャ(そうデスヨ)

としるしていられる。「チャ」とともに、「チェ」もあるのか。(さきの『岩手方言の語彙』にも、「旧南部領」の「アルンチェ 有るよ」などが見える。)以上に「マッチャ」を見てきたが、人が「花巻マッチャ」などとも言うのからすると、とかく「マッチャ」が、一全体としてまとめ受けとられているさまが知られる。「そだマッチャ」などとあると、「だ」の言いきりがよく利いているので、「マッチャ」はしぜん、まとまったつけそえことばのように思われてくる。

青森県下にも「チャ」があるのか。『青森県方言訛語』には、

までへちや (お待ちよ)

などとする。

東北地方を通観するのに、まずはこの地方が「チャ」文末詞をよく存する所と見られ、ついでは、南北両辺（福島県下・青森県下）を除く中間の大地帯が、ことによく「チャ」をおこなっている所と見られる。

北海道地方にもまた「チャ」がかなり見いだされるようである。——「チャ」は、東北風土によく合ったことばづかいなのでもあるか。『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

フンボゴデモ　メシエデケラッシャエチャー
赤ん坊でも　見せてくださいよ。

とある。鈴木淳一氏によるのに、西岸の留萌では、

ドウカタノムッチャー

と言っている。なお氏は、「タノムッチャハ旭川地方ノ青年男子ニモヨクキカレルトバ。」と説かれる。

全国諸方言にわたって、「チャ」「チャ」を総攬した。動詞系文末詞では、これらが、わけても大きい勢力を成すものかと思われる。「と言やあ」の、一種、おさえたような言いかた（そういう強調の言いかた）は、どこのだれにも必要なことだったのであろう。人間は、言っては言い、言っては言いして、相手にものごとをのみこませようとしたがるものである。

それにしても、全国諸地方で（——また一地方でも）、地方により地域によって、「チャ」「チャ」のおこなわれかたの大小があるのは、上述のとおりである。

中部地方や東北地方に「チャ」のいちじるしいのからすれば、「チャ」文末詞は、国の東半に、より優勢であるとも言えることができるか。（「と言やあ」の「テバ」が、東国的なものであることも、ここに思いあわされる。）しかし、「チャ」はむしろ近畿以西に認められがちでもある。

「チャ」は、たしかに現在も地方にそうとう優勢である。けれども、この種の言いかたを将来の標準語法にたてることは、適切でないだろう。今の共通語生活一般の状態から察すれば、その自覚的な言語生活は、「チャ」ことばなどを排するであろうと思われる。

五 チュー チョー

チュー

「と言う」の明らかな「チュー」文末詞がある。これは、[u]母音におわるものなので、聞こえの効果はさして大ではないけれども、かく言う「チュー」が、たしかに動詞系文末詞として成立している。おそらくは、「と言う」との訴え成分が、対話的には有効なので、こういう文末詞が成立したのであろう。

南島方言に、特異な「チュー」がある。町博光氏の「与論島朝戸方言の文末詞」(『方言研究年報』統一)には、

○nuttju:. (少男→同)

<何 チュー。>

なんだよ！ 反抗する時の慣用表現である。品位は下となる。

○ma:dʒin mu:ʃu ?ikipo:ti tʃu:sa. (老女→複)

<一緒に 皆 行きポーて チューサ。>

一緒に全員で行ったんですってさ。[tʃu:sa]によってしたてられた伝聞表現である。

などの実例が見える。

九州地方に、「チュー」がかなり認められる。

まず、吉町義雄氏の「吐噶喇諸島方言(宝島)」(『旅と伝説』昭和15年4月号)には、

ダイカガ錢ヲ、ヨコンヘンデ、ノーネエータチュ。

というのが見える。種子島のことばには、

○シテ クレン チュー。

“してくれないでしょうか。”

○ウトーテ クレン チュー。

“歌ってくれないでしょうか。”

などの言いかたがある。「クレン チュー」は、「クレー ヤ」よりも、すこし
ていねいであるという。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町
宮之浦」の条にも、

mアメ チュー コタ キク ゴタ ネー ゴテ ナッタチュー イマ
雨 という ことは 聞き たく ない ように なったよ、 いま。

—

というのが見える。薩摩半島東南部には、瀬戸口俊治氏によるのに、

○コラー ハヨ オキレ チュ。

おい、 早く 起きろ よ。

との言いかたがある。氏は、「チュ」の下に、言いかえの「よ」をおいていられ
る。いわゆる鹿児島弁には、「何々だ チュワ」の慣用表現法がある。

鹿児島県下と熊本県下には、「チュ」がよくおこなわれている。熊本県下
の昔話の語りには、「チュワイ」「チュモン」が見られる。本県下に、「チュワ
ー」（「チュア」）「チュイ」などもよくおこなわれている。天草での「チュー」
の一例は、

○モー ヨカッ チュー。

“もういいだろう。”

である。

長崎県下の広くにも、「チュー」が見られるようである。「チュッ」の言いき
りになることもある。「チュナ」などもある。

佐賀県下にも、「チューモン」「チューモ」「チュータイ」などが見える。吉

村一男氏の「佐賀県東松浦郡唐津市方言集」(『方言誌』第十四輯)には、「もう公園の桜も満開ださうですね。」というのが、

モーコーエンノサクラモーパイサイトルチューテ。

とある。——これでは、「チューテ」を文末詞と見ることができるのかどうか。

福岡県下には、「チュー」文末詞が、そんなにはおこなわれていないのか。

大分県下には、「チュー」文末詞が認められる。

中国地方で、山口県下には、「チュー」文末詞がかなり見られるのか。周防南部での一例は、

○イマニ マダ ウマレン チュー。

いまだにまだうまれないうて。(中男→老女)

である。(神部宏泰氏による。)

島根県出雲奥での、

○イズ[ü]モノ コトバワ ドッコ イキ[kçī] テモ ワカラン チュ[ü]
ー。

出雲のことばは、どこへ行ってもわからないってよ。

も、「チュー」文末詞をとらえしめるものか。

さきに p. 210 では、「チュータラ」をあげた。広島県下にも愛媛県内海島嶼にも、「チュータラ」がある。

四国、愛媛県下での「チュータラ」例は、「スナ チュータラ。」(するなと
いったら。)|「ヤメー チュータラ。」(やめといったら。)などである。——な
お、「スナ チューノニ。」(すなっているのに。)など、「チューノニ」もある。
「チューワ」もおこなわれている。「チュカイ」というものもある。「シル チュカ
イ。」(知るものか!)などと言われている。

○ワシガ シル チュカイ。

は、「わしが知っておるとでも言うのかい。」という気もちのものである。「イ

ラン チュカイ。」(いらぬはずはないよ!) などというのものもある。「チュカイ」<と云うかい>の文末詞化していることが明らかであろう。

徳島県下に、「チューワ」がよくおこなわれている。金沢浩生氏教示の一例は、

○ヘタクソ^ツジャッ チューワ。

下手だつてさ。 (青男間)

である。「チューニ」もある。金沢氏教示例は、

○イク^ツ チューニ。

行くともさ。 (中男間)

である。

近畿地方に、今、言うべきものがなく、中部地方にはいって、まず、福井県下に「チュー」がある。愛宕八郎康隆氏によれば、越前勝山などでは、

○シンナッ チュー。

するなと言つたら。 (中男→青男)

などの言いかたがおこなわれているという。永江秀雄氏は、若狭中部のことばについて、

○するなチュンヤ。

○せなチュノニ。

などの言いかたを教示せられた。

能登半島にも、——愛宕氏の教示によるのに、

○ネト^レン チュアー。

寝ておれないつてよ。

○デツカモ シ^レン チュゲー。

話しの中に方言が出るかもしれないつてよ。

などの言いかたがある。

富山県下にも「チュー」がある。『全国方言資料』第3巻の「富山県氷見市飯

久保」の条には、

*m*ソソナガチュー

そうそう。

というのがあり、また、

*m*ソーシテ ワタサニャー カカラッチャー マタ ウテーガッチュ

そうして 渡さなければ、 女たちは また 織れないというもの

だ。

というのがある。

太平洋がわについては、高瀬徳雄氏の「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」(『方言研究年報』第一巻)に、

○ソソナ モナー ナイ チュヤー。 (中男→同)

そんなものはないったら!

○ダメダ チュッタラ。 (青男→同)

だめだったらだめだ。

などの例を見ることができる。

静岡県下にも、「チューヨ」などがあるらしい。

佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」(『国語研究』第十卷第七号)には、

アッチエ行く $\begin{cases} \text{ツウワ} \\ \text{チュウワ} \end{cases}$

の記述が見える。

関東地方では、一つに、大島一郎氏の「三宅島及び御蔵島方言の語法」(『国学院雑誌』第五十八卷第六号 昭和32年10月)に、

〔ワレゲノ、オトーチヤソワ、ハマエイッタダッチューナ〕(お前の家のお父さんは、浜へ行ったということだよ)

の言いかたを見ることができる。「チューヨ」の言いかたもあるという。

つぎに、埼玉県下や群馬県下に「チュー」が認められるようである。杉山正世氏の『埼玉県川越市近傍言語集稿』には、

かうえーそーに キガフレた ちゅーな。

などの例が見える。群馬県下では、小島英男氏の「^{多野}_{北甘}地方の語法」(『季刊国語』昭和22年冬季号 3)に、

伝聞の意を表わす時に「ちゆん」「ちゆわ」が使われます。これは(チュワローチュワイーチュアイ)と云う音韻変化したものも使われています。日野村の奥奈良山では子供が盛にきれいな「ちゆん」を使つていました。

との記述が見える。「ちゆん」の言いかたはおもしろい。中沢政雄氏の「^{群馬県}_{利根郡}片品村言語調査報告」(『季刊国語』昭和24年度 1)にも、

「○○という」の転訛した「チュー」が盛んに用いられている。「チュワネァ」「ヨッタチックァ(寄つたそうだね)」「イグchetteナー」「ユッタチューー」「ナンチュンダ」「ナンチューワイ」のように、チュワ、チュッ、チューー、チューー、チャーと活用する。

との記述が見える。群馬県下には、「チューワイ」などがさかんなようである。

東北地方にも、若干の「チュ」が見いだされるか。

『山形県方言集』には、

家の人は皆畑にいぎやつたぢゆ。(家の人は皆畑にお出でなつたよ。)置賜などの言いかたが見える。「よ」と言いかえられる「ぢゆ」は何か。

『岩手県南昔話集』(『伝承文芸』第六号)には、

たまげた刃あつたちゆな。

などが見える。

チュー

やはり「と言う」に関するものとされる「チュー」がある。

南島、与論島について見るならば、町博光氏の「与論島朝戸方言の文末詞」(『方言研究年報』統一)に、氏の動詞系転成文末詞とされる「[tʃo:] (「て言う」)」が見える。

○食べた チョー。

食べたってのに。

とある。なお、氏の記述には、「[tjo:] (「て言う」)」というのも見え、

○wai. gantʃa: ?inna tjo:.

<ああ。そうとは 言うな ティョー。>

ああ。そんなこと言うなよ。

などの例があげられている。町氏は、

[tʃo:] は、[tʃi:ba]と同じく、相手がなかなかこちらの言うことを聞き入れてくれない時に、それに反撥したものの言い方をささえる。[tʃi:ba]よりは反撥の度合いが低い。全年齢層に行われ、品位は中以下となる。

との説明もしていられる。

宮良当壮氏の「風雪(5)」(『琉球文学』一の一五 昭和35年5月)にも、

「バキィチリィブン カラショーリッちょー」(協取盆を貸して下さいとき)

との言いかたが見える。

九州では、鹿児島県下に、

○チャッ チョー。

“そうだよ。”

○オモオッ チョ。

“思っているんですよ。”

などの言いかたが見いだされる。県下に、「チョ」の言いかたがよくおこなわれている。「チョ」が「チョ」ともなっているか。ともかく、「チョ」の音が聞かれる。「チョ」が「チョ」になる時は、前に、促音ができていよう。

宮崎県中部に、——橋口巳俊氏によるのに、

○オッダモイテキタッ チョイ。

おれたちはもう行ってきたんだよ。

(やゝ自慢げに話す。同僚以下の人に対して使われる。)

などの言いかたがある。この地方に、「チョ」がやはりさかんであり、それが「チョーイ」ともなっており、かつは、「チョイ」がある。

長崎県五島列島で私が聞き得たものには、

○ナカッ チョ。

ないのですよ。(「プログラムはありませんか。」との問いへの返事)

○コリャ オッガッ チョナー。

これはわたしのですよ。(「オッガッ チョー」は同等への言いかた。)

などがある。

中国地方の隠岐に、ひとり、「チョ」のさかんなものがある。早く、『隠岐島方言の研究』には、「チョはテオ<<てふ=といふ>>の音声的一転であらう。只一音になったために終助詞に近くなってある」との記述が見える。神部宏泰氏は、隠岐島後の西郷ことは、

○ソゲダ チョ。

そうらしい。

などを教示せられた。——“男女一般に「チョ」を言い、「チョ」がさかんである。”という。神部氏の「隠岐島五箇方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一卷)には、

○ゲコナノガ イッショ フミマス チョ。(老女)

下戸のものが、一升のみますそうですよ。

○キョーワ チョーシガ ヨーテ ヤマエ イカシタ チョー。

(老女—老男)

きょうは、天気がいいので、山へ行かれたそうだよ。

などの例が見える。

広戸惇氏の『山陰方言の語法』にも、「チョ」の記述があり、かつ、

島前（知夫里も）ではチューが一般的である。

との記事も見える。

ともあれ、「チョ」（「チュ」も）は、伝聞の意をにおわしつつも、今日、文末詞化している。「チョ」が「チョノ」「チョワ」「チョワナ」などともある。

四国地方には言うべきものがなく、近畿地方の和歌山県下に、「チョ」形が見られる。楠見敏雄氏の「有田郡五西月村方言語彙について」（『和歌山方言』5）に、

○ソージョイ チョ そろですよ、

宮原、湯浅付近では、ソーヤイチョ、というらしいが「チョ」というのも変っています。（中略）この村付近では断定です。こんな「チョ」の用例が県下にはまだ存在するのではないかと思はれます。

とある。どのような成りたちの「チョ」であろうか。

中部地方では、まず、石川県の加賀東南部での言いかた、

○ウラニ トートッ チョ。

わしに問うてるんだよ。

をとりあげることができる。

つぎに、新潟県下に「チョ」が見られ、『佐渡昔話集』には、

きりやうの悪い嫁を貰たちよ。

などがある。越後北部の新発田市の新発田尋常高等小学校の『不正語矯正実施方案』（昭和11年）には、

いごっちよ 行カウ

というのが見える。太平洋がわとなつては、『分類方言辞典』の「小詞」の条に、

チョー …とき。三河北部。

というのが見える。

つぎに、山口幸洋氏の『静岡県本川根方言の文』に、

ナマブケンナルダッチョ(8), トルダッケチョー(562), フタバんだッチョー(636)にみられる, ッチョーは伝聞をあらわすもので, 共通語形「そうだ」に相当するが, 感じとしては「二晩だって」の「って」に近いといえるだろう。必らずダ, 又はダッケのあとにつき, 助動詞というより, 文末助詞的である。

との記述が見える。同書には, 「チョーナ」「チョーゾイ」「チョーゼ」「チョーガナー」「チョーワ」の形も見える。なお, 氏の『井川村方言の語法実際』(近畿方言双書第一冊『東条操先生古稀祝賀論文集』昭和30年4月)にも,

すなわち<雨ダッチョー, 降ルッチョー>の〔チョー〕が「伝聞」をあらわす。多く, <降ルッチョーワ, 降ルッチョーワ, 降ルッチョーワ, 降ルッチョーヨ>などの形で言われる。

の記述が見られる。

土橋里木氏の「昔話に見る 富士北麓の方言」(NHK国語講座『方言の旅』昭和33年2・3月)には,

命令形には「行ッちよ」(行くな)という形があるが, これは多分「な行きそ」の変ったものと思われる。

との記事が見える。山梨県下や静岡県下に見える, この種の言いかたは, 別ものであろうか。

関東地方となって, 大島一郎氏の「三宅島及び御蔵島方言の語法」(『国学院雑誌』)に,

次に, 「〜だそうだ」に対応する言い方を, 坪田方言では〔〜ッチョ〕, 〔〜ッチョナー〕, 〔〜ッチョサー〕のように表現される。

との記事を見ることができる。事例は,

〔アノヒターシンダッチョナー〕(あの人は死んだそうだ)

などがある。——「チョナー」に、文末詞としてののはたらきを見ることができよう。

千葉県に関しては、『千葉方言 山武郡篇』に、「チョー」が見え、「伝聞をアラハス助詞」とあり、

死ンダッチよー。 死んだとき

の例が見られる。

『青森県五戸語彙』には、「チョ」についての、

動詞、形容詞の終止形の下に添える。多く捲音化して発音し、その下につける。強意の助詞「ぞ」に相当する。うまエンチョ（うまいぞ）。行くんチョ（行くぞ）。

との記事が見える。『五戸の方言』には、「そらお前の尻^{けつ}さ、まだ、エツコノ、クザジアついてるちよ」などともある。（「エツコは嬰兒籠。クサジは其籠に入れた薬のこと。ツデルは附いてゐる。青二才共に対してあざ笑つた詞。）」「チョ」は、どういう「チョ」なのか。「と言う」がふくまれているようにも思われる。

六 チ チコ

「と言う」の「チ」がある。

南島地方の与論島には、町博光氏の「与論島朝戸方言の文末詞」によるのに、「チ」の、

○waga fi^han tji. (少男→中男)

<僕が 為らむ チ。>

僕がやるよ。

○nāma bittsup tji (老男→中男)

(訪問先で、あとから来た人に、「さっきからまだ座っているんだ」という、何となく照れくさい気持での弁解である。)

などの言いかたがある。ただし町氏は、この [tʃi] を「て」としていられる。「て」相当のものならば、これは今の問題事項にはならない。ちなみに、町氏は、「[tʃitʃi] (て言っで)」もとりあげていられる。

九州に、「チ」と聞こえる文末詞が、広く見わたされる。分布をたどって、ものの実質を吟味してみたい。

まず、鹿児島県下（本土ならびに島嶼）には、「チ」文末詞がよくおこなわれている。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条には、

mアヤエ ユーチャ ネーチ
 言いようが ないよ。

3) 意味未詳

というのが見える。同第9巻の「鹿児島県薩摩郡鹿島村鹿島」の条には、

m………… コドモガラ ガラレデ (笑) モメオッタドチ
 こどもに しかられて (f) 騒いでいたんだよ。

とある。これらの「チ」は、「て」の「チ」か、「と言う」起源の「チ」か。瀬戸口俊治氏は、薩摩半島東南岸での一例、

○キューワ ニチヨーヂャッ チオー。

を、「今日は日曜だつてよ。」と説明していられる。大隅半島東岸での一例、

○キツネガ デックイ チヨ。

“狐が出てくるそうな。”（“大げさな表現。おもに子ども間で。”）

は、「チヨ」の「チ」が、「と言う」起源のもののようにも思われる。山下光秋氏の、「鹿児島県鹿島郡谷山町方言集 下」（『方言誌』第八輯）には、

ナアッチヨ } 何だつてさ
 ナイヂャツチヨ }

との記述が見え、また、

——チーチ ——と思ふ？（例）イタロチーチ（行つたと思ふ？）

との記述が見える。よくは解しかねる「チ」が多い。

宮崎県地方にも、「チ」がよく見える。『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条に見える、

f₁ヤマワ トーゲッチ

山は 峠と（言っている）。

は、「と言う」の「チ」を見せるものであろうか。国立国語研究所の『宮崎県都城方言録音資料』（1967年）には、

「e¹ sairon cumeta ko¹ta neqci.¹」

サイロに 積めた ことは ないとね

などとある。「ネッチ」が、「ないとね」とされている。ここの「チ」は、どういう「チ」なのであろうか。橋口巳俊氏によれば、県下中央方面には、「チヨ」の言いかたがさかんである。

○ミンナ メシ クタッ チョー。

“みな飯を食ったんだよ。”（“いつまでも寝ている子どもに、早く起きろと促す。”）（中女→小男）

などと言われている。「食ったんだよ」とつよく言い聞かせる「チョー」は「てよ」ではあるまい。ここの「チ」は、「と言う」起源のほうへいくものかと思われる。

熊本県下では、丸山学氏の「天草島民話」（『昔話研究』第十一号）に、

そしたら母が、「売らんばな。」と何遍云うたちあ聞かんとちもん。

との言いかたが見える。「ちもん」の「ち」は、「と言う」にちがいはあるまい。

長崎県下では、品川緑郎氏の「長崎ところどころ」（『言語生活』第六十四号）に、五島のことばの「ハヨ オキレッチ（早く起ろ）」というのが見える。直接に「起きろ」と命令するのに「オキレッチ」と言っているのからすると、「チ」は「と言う」起源のものかと思われる。（共通語の観念からすれば、「チ」に「て」をあててもよからう。）『全国方言資料』第9巻の「長崎県福江市上大津」の条に見える、

fウン オーキナ モンチ

ええ、大きな ものです。

の「チ」は、「と言う」系の「チ」か。おなじく、「福江市上大津」の条に、

f………… バケモンチュ コチャ ワカッタ チゾ

ばけものだということ が わかった そうですよ。

ともある。私が聞いた、五島での「チ」ことばの一つは、

○イチネンノ ガッコー チヨ。

修業一カ年の学校ということよ。

である。「チヨ」の「チ」は、「と言う」系のものではないか。さきの、「福江市上大津」の条に見える、

fウンナー ソーユー モンチャ ナカッチ

いや、そういう ものでは ありません。

では、「ナカッ」の下に「チ」がきているが、これは、「ナカ トチ」であろう。

『長崎大学方言研究会会報』第一号に見える、清水康子氏の「式見へ行って」

には、長崎市式見本村郷についての、

びっこをひいている子がいる。“ホネバ オッチョイチ”骨を折っている
のだという。

との記事が見える。山本俊治氏教示の対馬仁田村での一例は、「タンネニケーチ（尋ねにこい）」である。——「チ」は「と言う」の「チ」か。『全国方言資料』第9巻の「長崎県上県郡上対馬町鰐浦」の条には、

mウン ソーナラン ナンノガ アタリマエジャチ

うん そうだろう、なるのが あたりまえだよ。

とある。「チ」はどのような「チ」なのか。

佐賀県下では、野口隆氏の「佐賀昔話」（『昔話研究』第十九号）に、

善市は山さい仕事に行かしたち。

というのが見える。「と言う」の「ち」か。岡野信子氏教示の、唐津市神集島のことばには、

○シチジュージッサマ ハチジュージッサマ ムカシノ コト イワシタ

テチ。

七十、八十の爺様が昔のことを言われたと言って先生がよそで話されるのよ。(老女→夫)

というのが見える。「テチ」には、「と言う」があろう。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条にも、

fウチニャー ヒャクジョン アヤンカツ トッチャー シゴツノ メテ
うちでは 「百姓が あんなものをつけては 仕事が さし
ナル テチ イワスケナー
つかえる」と 言われますからねえ。

などとあって「テチ」が見える。同有浦村の条に、

m………… オマエンノ ガタエンノ ホーガ チーット ハヤカッタ
おまえの うちのあたりの 方が 少し 早かった

テチヨ

そうだね。

ともある。

福岡県下の豊前にも、「ドコイ イッタ ンチ。」(どこへ行ったっていうの?)などの言いかたがある。

大分県下で言う、

○エキニ イッチ グル チ。

駅に行ってくるということだ(くるんだってさ)。

などは、「チ」が「テ」なのか、「と言う」なのか。

中国地方には言うべきものがない。四国では、土居重俊氏『土佐言葉』に、

アーヤキューミニイキマイタチチ(ああ野球を見に行きましたさ)(女子の老人語)

というのが見える。「チチ」はどういうものなのか。「と言う」が感じられもするが、「てて」(反駁表現のもの)かとも思われる。

近畿地方では、かつて、三重県伊賀で、

○アカン チョー。

あかんちょう。

のような言いかたを聞いたことがある。私はこの時、「チョー」を「てョー」だと思った。近畿に、「チヨ」がどのようにおこなわれているのか。

京都市中川郷で聞いたものには、「チン」がある。

○ココニ オンニ チン。

ここにいるのによお。(“ここにおるじゃないか。なに言うとるんや。”)

○カー クタンヤ チン。

“蚊が食ったのだ!”

○イマ ユータニ チン。

“今、言うたのに! 聞いとらなんだんか。”

などと言われている。ここに「チン」文末詞のおこなわれることはさかんであって、「ナカゴチン」(中川郷の「チン」ことば)などとの言いぐさもできている。人は、この「チン」を“ただのふつうの強意”などと説明してくれたが、起源は、「と言うのに」的なものではなかろうか。土地の識者の説明によるのに、「チン」は、“「チ」となっているむきもあるもよう。”だという。このように中川郷が「チン」を保有するのは、「チ」の「と言う」起源を考えさせる点で、注目にあたいる。

中部地方では、「石川県輪島市名舟町」(『全国方言資料』第3巻)に、

*m*ソリャー オマエサマエ イチブノ ニョーボヤサカエ オータカ

それは あなたは 1人前の 女だから (そういう機会

アワンカ オラー ソレオ シランケドーオ アノ

に)会ったか 会わないか わたしは それを 知らないが、 あの

ジブンナ ヒドカッタワイチ

時分には ひどかったということだ。

というのが見られる。

富山県下では、「チガ」がおこなわれている。『方言の旅』の中の、大田栄太郎氏「富山」の条には、

チガ（あ奴に違イッいない——）、（貴方様アツクハンに上げます——）、（来年東京へ行く——）、（確かそうだ——）、形容詞・動詞・助動詞の終止形につく。共通語のことよに該当する。

との記述が見える。富山市教育委員会の『富山県方言集成稿(一)』にも、

あしたこいちが（句） 明日来い
あしたこばいつけ（句） 明日来い

というのが見える。

つぎに太平洋がわで、寺田泰政氏の記述、「動物の出て来ることは遊び」によるのに、静岡県磐田郡竜洋町掛塚あたりかどこかで、

「フン サッキ アッチー イッタッチー。」（はい、先刻あちらへ行ったっけよ） 人→探しに来た人

との言いかたがなされているという。（柴田武氏編『お国ことばのユーモア』）

『全国方言資料』第2巻の「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」の条には、

fキョーワ ドッチョ イッテ カルドーチテー
きょうは どちらへ 行って 狩るということですか。

とある。「チテー」が、「と言って」ということであろうか。

関東地方では、『分類方言辞典』を見るのに、「小詞」の条に、

チケ 見タチケ、見たそうだった。千葉県。

とある。「チケ」を、文末詞化したものとしてとりあげることができるか。同「小詞」の条に、

チカ ものか。横浜。

ともある。

群馬県下に、「チッ」「チー」のあることは、中沢政雄氏が指摘してられる。

(p. 258)

チョコ

「言う」に関係のあるものかどうか、——たぶん関係があるらしく思われるものに、九州方言内の「チョコ」がある。主として大分県下にこれが見られる。すでに、『大分県方言類集』『大分県方言の研究』その他の文献に「チョコ」の指摘があり、かつ、大分県下の知友たちも、かねがね、県下の「チョコ」を教示してくれている。

「チョコ」は、どういうことばであろうか。まず、用例を見る。豊前中津市での例を見るならば、

○ソ^ー チコ。

“ほんとにそうですね。”

○チ^コチ^コ ユ^ーナ チコ。 (「チ^コチ^コ ユ^ワン チコ。」との言いかたもある。)

チョコチョコって言うなよ。

○ソ^ー チコ^{ナー}。“そうですね。”(「ソ^ー チコ。」も「そうですね。」である。)

などの言いかたがとりあげられる。当地の人は、“「チョコ」は女の方が多くつかう。”と言っている。

私が国東半島内で聞いたものは、

○マ^テ チコ。

まてったら!

○ウ^タチ^ー チコ。

きたないったら!

○オ^ボエ^ン チコ^ー。おぼえていない! (「オ^ボエ^チョ^ラン。」とも言いかえられた。)

○コー チコ。

“もしもし。” “ちょっと！”

(よびかけである。「これと言ったらよ。」「これったら。」というようなものか。“女の人が言う。”よしである。妻くんが夫をよぶ時にも、——ことに“名まえをよぶのがはずかしい時など”に、これを言うのだという。

などである。最初の例については、“「チコ」だけで、相手の肩をおさえたような気がする。”との説明があった。

以上の諸例を見るのに、「チコ」に、「と言うこと」的なものを思いみることができようか。現用では、「……だよ。」「……ですよ。」の意のくまれることも多いのか。(『大分県方言の研究』)「チコ」の語源の、比較的よく生かされている用法もあれば、それからの自由な転意の用法もあるというわけか。

さて、その語源に関して、松田正義氏は、『方言生活の実態』の中で、「チコ」は、「トコソ言へ」の転であるとしていられる。松田氏は、また、『NHK国語講座』のテキスト、昭和30年8・9月の「方言の旅 大分県」で、「知らんチコ」を、「知らないとも・知らないってば」としていられる。

岡野信子氏は、

さてコソがコとなるのなら、大分県の下毛郡・宇佐郡・^{くにさき}国東郡に著しい文末部のチコ・トコもチコソ・トコソではあるまいか。

と述べていられる。(「コソ・コ・チコ・トコ」 『言語生活』第五十号)——他の知友の教示にも「トコ」がある。

「コソ」の言いかたは、「アン クサ。」(あのね。)などと、筑前方面にもおこなわれている。「クサ」は「こそは」であろうか。このように、「こそ」が文末詞にもなっているのからすると、「チコ」の「コ」も、なるほど「こそ」からのものかもしれない。『大分県方言類集』では、「チコ」が「強辞」とされている。

県下で、「チコ」が他の文末詞とむすびあってもいる。豊後日田盆地では、

○ハヨー イコー タナーチコ。

“早く行こうねえと言っているじゃないの。”

などの言いかたが聞かれる。「タナーチコ」は、主として女性語であるという。「タナー」は、「アンタナー」のつづまったものであろう。「タナーチコ」が「タナチコ」とも言われているか。「タナーチコ」が「チコタナー」にもなっている。

○アンタガ ソー ユーチ オクレタ チコタナー。

は、“あんたがそう言ってくださったということですねえ。”である。

これを要するに、大分県下の、主としては北域に、めずらしい「チコ」文末詞（およびその発展形）が見いだされ、強調詞としてのその用法が注目される。「チコ」に、「言う」のにおうことはたしかであろう。

新文末詞形式の自由さは、「チコ」にあっても、その明らかなものが認められる。文末の特定の訴えは、本質的に、文表現の訴えに似たものであろう。（——文末詞は、文表現相当形とも解しうるものである。）そのようであるだけに、文末詞は、いろいろなたちばで、自由に固成されるのだと思う。その形が長形になることも、またしぜんのことと言える。「チコタナー」などは、なかでも奔放な長形と見られよう。

大分県下を出はなれても、「チコ」があるか。

『福岡県内方言集』には、

チコ 然様でありますトイフコト築上郡ニテハそうちトイフ

とある。また、『全国方言資料』第6巻の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」の条にも、

f…………… ホイチェオ ナニゴト シヨッタチコ

そして ⁴⁾何かを やっていたものだよ。

4) 催しごと、不祝儀も含む。ここでは、むこ取りなどのような宴会。

というのが見える。築上郡方面は、方言上、とかく、中津市方面に同じることが多い。「チコ」もしぜんに、両方におこなわれているのであろう。

つぎに、原田芳起氏の『熊本方言の研究』には、

ヌシガナンチコ　　といつたら、「何とというか」「何ちゆうのか」とやはり
喧嘩ことばである。

との記事が見られる。この「チコ」は、どういう「チコ」なのであろうか。い
ずれにしても、大分県下のと同一の外形のものが、このほうにも見られるのが、
注目にあたいする。

七　テ

「と言えば」などの、「言う」動詞をふくむと見られる「テ」がある。「チャ」
や「チュー」ほどには、「言う」をにおわすことがないので、この「テ」は、と
きにほとんど「て」助詞系の文末詞のようにも見える。じっさい、その用法に
は、「と言う」のここちなどからは、ずいぶん遠ざかったものもできている。

それにしても、以下のような「テ」は、けっきょく、「言う」動詞系のものと
することができよう。

九州地方には、諸県下にわたって、動詞系の「テ」文末詞が見られる。日向
中部での一例は、

○ヨーイチクン　　テー。

陽一くんですよ。

である。

天草の一例は、

○バツパ、イコー　　テー。

ばあちゃん、行こうよ。　　（幼男→祖母）

である。私が五島列島で聞いた、

○イテ　クッ　　テー。

行ってくるよ。（出て行く人が言う。）

も、「テ」が、やはり「と言う」をにおわすように思われる。

長崎県北の生月島の、

○マー タノム テー。

まあたのみますよ。(どうぞお願い申します。)

にしても、「テー」が、「と言えば」などを思わせる。

○オチャバ クダサイッ テー。

お茶をくださいってよ。(小男→母中女)

は、佐賀県南の一例である。報告・伝達の「テ」が、「と言う」を思わせることは言うまでもない。筑前の、

○イ^ラン^コト セン^フッテ。

よけいなことしないのったら。

という叱りことばでの「テ」も、「と言えば」を思わせやすい。『全国方言資料』第6巻の「福岡県筑上郡岩屋村鳥井畑」の条には、

fサルガ シュッセー シタノガ カワントノー チューッチェ

猿が 成りあがったのが かっぱ と言うんだって。

とあって、「て」の「チェ」が見える。——「チュー」の下の「チェ」である。

大分県下には、「テ」形文末詞はほとんど見られない。この地方には、「テ」の「チ」がよくおこなわれている。国東半島例は、

○ユ^ラン^{ジャ}ッタ チ。

(どこのものだということを)言わなかったてよ。

などである。県南の一例は、

○モ^ー カイ^タ チ。

“もう帰ったんですって?”

である。土地の人は、「トイウ」→「チュー」→「チ」の変化と説いたりもしているが、「チ」は「て」からのものではないか。その人の例示も、

○ウ^タチン イ^ヨン^ソン カ^ク チ。

“私たちの言っているのを書くってよ。” (小女問)

とある。——「チ」は「テ」に該当している。本県地方では、接続助詞の「テ」

を「チ」と発音することがさかんである。（「読んで」も「読んヂ」と言われている。）

文末詞「テ」相当の「チ」文末詞は、九州のなほほかの地域にも見いだされる。福岡県下にも、「何々だって。」などの言いかたでの、「チ」のむずびが見られる。佐賀県下にも「チ」があるか。

中国地方にも、全県に、「テ」がよくおこなわれている。

○ソー^ージャ テー。

そうだよ。

は、山口県下例である。自己の思いを伝える「テ」、伝達を意味する「テ」がよくおこなわれている。

広島県下でも同様である。山口県下でと同様、「〜ジャロー テ」（だろろうよ）「ヤミョー テー」（やめようと思うよ）などの表現形のとられることが多い。

○タバ^{カー} テマ^ダケー ソン^デス テー。

たばこは手まだから損ですよ。（手まをかけるのには割があわないと“思いを述べることば”）（中男→青男）

とあっても、「デス」の下の「テ」であるから、これの文末詞としてのはたらきが明らかである。

岡山県下にも、上来のとほぼ同様の状況が見られようか。

○コレ^デ エー テー。

“これでいいと言ったか？”

は、県下島嶼での“伝えのことば”の「テー」の例である。

県下に、「トイ」文末詞の「テー」があるのか。

鳥取県下にも、伝言法の「テ」がよくおこなわれている。『鳥取県方言辞典後編』には、

物語又は他の話を他人に語る語遣

あつたつ＝て・て－な・て－や

とある。

島根県下にも、伝言法の「テ」なり、自己の思いを伝える「テ」なりがおこなわれている。

○ガッ[↑]コノ シェン[↑]シェーニ ナラ[↑]ジャンシタ テー。

学校の先生におなりになったんだって。 (中女→老男)

は、神部宏泰氏教示の、隠岐方言での一例である。

四国地方では、まず、九州大分県下に見られた「テ」の「チ」のつづきの分布が注目される。まず、愛媛県南に、

○ゾーヤ[↑]カス ヤツ[↑]ダ チー。

せわをやかすやつだよ。

などの言いかたがおこなわれている。つづいて高知県下に、同種の「チ」文末詞がさかんである。『土佐言葉』には、

チー軽い詠歎をあらわす。〔全県一ただし幡多では清水市で使用する〕

トリャヨータマゴウムチ (雞はよく卵をうむさ)

とある。『土佐の方言』には、

「そーちそーち。」(そーともそーとも)

との言いかたも見える。

四国には、上来の「テ」文末詞のおこなわれることが、ややよわいか。

愛媛県松山市での一例は、

○ヤメトケー テー。

“やめておけというのに。” (青男間)

である。松山市にほど近い北方でのことばに、

○マガッタ テテー。

“さわったというのに。” (小男間)

というもある。

徳島県下では、伝達を意味する「テ」と、自己の思いを伝える「テ」とが、かなりよくおこなわれてもいるのか。

○マジョー カイテ。

“混ぜましょうか。”

(同意の表現に、「マゼヨー カデ。」というのもある。)

は、一つの変った用例であろう。県下に、「テナ」複合形もおこなわれている。

○アツイ テナー。

暑いったらねえ。(中男→中女)

は、その一例である。——やや上品な言いかたであるという。

近畿地方には、「テ」文末詞のおこなわれることがさかんである。やはり、自己の思いを伝える「テ」と伝達を意味する「テ」とが、よくならびおこなわれている。「ない シヤ テ。」(ないんだってよ。)などは、広くおこなわれているものであろう。

兵庫県下に、「アカン テ。」(だめだよ)「ナン テ。」(何だっていうの?)「ドナイ テ。」(どんなだっていうの?)などの言いかたが、よくおこなわれている。

○ナンヤ テ。

何だって?

これは、大阪弁の一例である。

○チン テー。

何だって?

は、和歌山県南での一例である。

三重県志摩半島での一例は、

○アガナ モノワ ドーラクヤ テ。

あんなものは道楽だよ。(老男→中男)

である。佐藤虎男氏は、

○イカヘンター。

の例について、「代弁訴え 行きゃしないって。説得訴え 行きゃしないってば！」との説明を下してられる。

「奈良県吉野郡下北山村上桑原」(『全国方言資料』第8巻)では、

m………… アス クル ツモリジャイテ

明日 (帰って) 来る つもりだから。

の言いかたがおこなわれている。

京都府下・滋賀県下については、「何々ヤテ。」と「何々ヤッテ。」がならびおこなわれていることを指摘しておきたい。

中部地方でもまた、「テ」に関する二つの用法、自己の思いを伝えるものと伝達を意味するものが見られる。

福井県下若狭の、

○ナンジャッター。

何? (問うことば)

は、よく聞かれるものである。越前の、「カーチャンター。」は、「母ちゃんよ。」にあたる。

石川県下では、自己の思いを伝える「テ」がよくおこなわれている。能登半島東北部での、

○シマワシタカテァー。

おしまいになりましたか?

は、晩に知りあいの家を訪ねてのあいさつことばである。——「テ」に訴え用のア音が付生している。自己の思いを述べる「テ」が、問いのことばにもなっている。

○シドーシャカヤッタッテァー。

自動車がひっくりかえったって?

は、その、能登半島西岸での一例である。——「テ」が、問いにもよく用いられているらしい。『能登 木郎方言考』には、

赤い よ=赤い テン

などの「テン」も見える。

富山県下にも、「テ」の二つの用法が見られる。

○ハヨー イヨ テー。

これは、「早く行け。」であるという。「アッ^テチー イヨ テー。」(あっちへ“行け。”)などともある。人は、「「イヨ テー。」は「行け。」で、相手がたに言うことばである。」と言っている。『全国方言資料』第3巻の「富山県下新川郡入善町小摺戸」の条には、

mソリヤー ヒトサンニ イワレン マー アー ココロモチデステ

それは 人さまに 言われたい 気持ちですよ。

とある。以上のような、自己の思いを言う(伝える)「テ」が広くおこなわれていて、他方に、伝達を意味する「テ」がいくらかおこなわれている。

新潟県下の事情も同趣である。

○イラン ^テテー。

は、長岡弁の「いりません!」である。『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡相川町大倉」の条にも、

mクテモキャテモ オランテ

どうにも もどらないよ。

とある。「よ」と言いかえられる「テ」が、よくおこなわれている。念おし気分にもなる「テ」である。越後北部に、「そうだとも。」の意の「ソー テテ。」があるか。越後北部には、「むかしあったでん。」のような言いかたがある。(『岩船地方昔話集』) 県下に、一方では、伝達を意味する「テ」がおこなわれている。

岐阜県下となって、飛騨の高山ことばには、

○ウタター コトヤ イーマス ^テテー。

「ウタテー コトヤ。」と言いますわよ。

などの言いかたがある。『岐阜県方言集成』の中にも、

ええて [句] よろしい。宜。

などが見える。

愛知県下の東西に、また、自己の思いを伝える「テ」が見られる。『名古屋方言の語法』には、

スン 行カナ イカン テ すぐ行かなければいけないつてば

とある。

『静岡県方言辞典』には、

「あーさうだてー」

などとある。——「てー」は、「トモ」にあたるという。伝達を意味する「テ」もよくおこなわれている。

○モッテ キテ クレロ ヲ テ。

持ってきてくれるって？

は、伊豆での一例である。こうなるともう関東での言いかたにそっくりである。

『信州方言読本 語法篇』には、

そーしてけーて (そうしてくれよ)

などとあり、また、

そーだっちー (そうだよ)

ともある。『全国方言資料』第2巻の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条にも、

fソリャ キマッタモンテ シッテルヨー

それは そうですよ、 知っていますよ。

とある。

山梨県西南部で、私の聞き得た一例は、

○イーッ テ。イッテロ バー。

いいから。行ってなさい。

である。

関東地方ともなれば、伝達を意味する「テ」のおこなわれることがさかんである。

神奈川県下北部の、

○ヒロシマカラ コノ センセー コライタッ [↑]テ。

広島からこの先生は来られたって？

は、伝えを聞いての疑問表現である。——問いかえしの「テ」とも言えよう。この種のものは、「……ですって」とともに、すでに共通語化してもいる。

八丈島には、

○マン オキヤクサマガ キトオチャロン [↑]テ。

“もういまお客さまが来ていますから。”

の言いかたがある。「テ」は、「から」と言いかえられている。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町中之郷」の条には、

f…………… ヒャクショ^ーヨビヨ ハデニシテ $\left(\begin{matrix} \text{オー} \\ m \end{matrix} \right)$ ヨブアモンドアンテ
「百姓呼び」を 盛大にして $\left(\begin{matrix} \text{ } \\ m \end{matrix} \right)$ 呼んだものでした。

とある。同第7巻の「東京都三宅村坪田」の条には、

m…………… アブナカネギニ イキッテ

あぶなくないように 行きなさいよ。

というのが見える。

いわゆる東京語に、「～ですッ [↑]テ」の言いかたや「ヤメルッ [↑]テ。」(やめるって?)などの、問いかえしの「テ」のよくおこなわれていることは、多く言うまでもなからう。ところで、『東京方言集』には、

さうだとも、それに違ひはナイッテ。

というのが見える。

千葉県下・埼玉県下・群馬県下・栃木県下・茨城県下には、「何々ですッテ」式の言いかたがよく見られる。(「とさ」とか、「てよ」とか、「～だそう

だ」とかに相当するものである。)

福島県下に、自己の思いを伝える「テ」のおこなわれることがさかんである。県東北での一例には、

○ウチ[ī]ニ オリャース[ü]ベ^ノテ。

家におりましょよ。

がある。「テ」は「デ」にもなっている。『福島県方言辞典』に見えるものには、

インペテ[句]行かうよ ○早くいんべて 中北海南濱

がある。私が県西北辺で聞いたものには、

○オレモ イグ[ü]ベッ チ[i]。

がある。これは、“おれも行くことにきまっているんだ。なに言ってるんだ。”との意のものであるという。(「おまえは行かないだろう?」に対する返事である。——「テ」の「チ」が見える。)ところで、このカードを検閲して下さった識者は、「ベツチでなくベツチエです。」と注意してられる。『全国方言資料』第1巻の「福島県相馬郡石神村」の条には、

mコノアト カーベヤ ショーネー ワシェータモノ ナジョ シヤネ
この次 買おうや 仕方がない、 忘れたものは なんと 仕方が
ーチャー コノアト カーカラ
ないぞ、 この次 買うから。

というのが見える。が、また、『福島県方言辞典』には、

ホダヂャチ[句]さうだといふ事ですぬ 濱

ともある。本県下に、また、伝達を意味する「テ」もおこなわれている。

○ゴハン タペランジョッ テ。

ごはんをおたべなさいって。(小男→藤原)

は、県西部での一例である。

『仙台の方言』には、

「なんだかわさわさつーからまづ、ねいしょ着かえすべて」(何だか虫

が這ふやうだから、ねまきを着かえませうて)
 などの記述が見える。

「山形県東田川郡朝日村大鳥」(『全国方言資料』第7巻)には、

f………… ミンナ ヨグ クラシーシ カフーダテ
 みんな よく 暮らせるし、幸福ですよ。

とある。「テ」が「よ」と言いかえられている。こうした「テ」がよくおこなわれている。『全国方言資料』第1巻の「山形県南置賜郡三沢村」の条には、

mホダンベテ

そうでしょうとも。

とある。「テ」が「とも」と言いかえられている。県西部にも、この種の「テ」が認められる。伝達の「テ」の一例は、

○ $\overline{\text{コ}}\overline{\text{コ}}\overline{\text{エ}}$ $\overline{\text{ゴザラハシ}}[\text{i}]$ タンデス $[\text{ü}]$ テ。

ここへいらしたんですって。

である。

『秋田方言』には、

よーよ(漸く)卒業^{△△}こあでぎだんしてあ。(卒業が出来ましたよ)

とある。私が県東南部で聞いた例は、

○ネル $[\text{ü}]$ ス $[\text{ü}]$ テァー。

寝ますよ。(自分のこと)

などである。(この地では、「テァ」は問いにはつかぬとあった。)私が、男鹿半島で調査し得たものには、

○ $\overline{\text{ンガバラ}}$ ナニ $[\text{i}]$ グ $[\text{ü}]$ ヅ $[\text{ü}]$ グ $[\text{ü}]$ ヅ $[\text{ü}]$ シ $[\text{i}]$ $\overline{\text{テル}}[\text{ü}]$ テ。

おまえたちは何をぐずぐずしているのか。

などがある。——これは相手に言いかけるものである。『全国方言資料』第1巻の「秋田県南秋田郡富津内村」の条には、

fンダ ンメモノ カッテキタカテ

そうだ、うまいものを 買ってきましたか。

とある。男鹿半島で聞いたことばには、

○ソク[ü]タラ コトー ハツヅ[ü]ク[ü]ガナ デー。

“そんなことをするな。”(下品な言いかた)

というのもある。「デー」は、“つけそえことばで、はぶくこともある。”という。『秋田方言』には、

だれあやるだってあ(句)[平] (誰がするもんか。)

というのもある。

「岩手県胆沢郡佐倉河村」(『全国方言資料』第1巻)には、

mンデァ マダ キマッテ

では また 来ますよ。

というのが見える。「テ」が「よ」とされている。おなじく「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条に、

mンデ イッテ クルッチェ

それでは 行って くるぞ。

というのも見える。『方言学講座』第2巻の、小松代融一氏の「岩手」の条には、

「えぐステァ」(行く_ヨ)、やめろステァ(止める_ヨ)

が見える。問いかえしの「テ」もおこなわれている。伝達の「テ」もおこなわれている。

青森県三戸郡には、津嶋金次郎氏の教示によれば、

八戸へ行かなければよいが。→ハヅノヘサエガネェ (なけれ_ナイ) バ
エタテ。

との言いかたがある。『津軽方言絵はがき』(第2輯)には、男子のことば、「ネノ、ドド、カテケネナステ、」というのが見えるが、これは、「君の、お父さん、買つてくれないのかい」であるという。この「テ」は、別のものである。県下に、問いかえしの「テ」、伝達の「テ」もおこなわれている。

東北地方に、「テ」の使用の自由奔放さが見られる。

「北海道松前郡福島町白符」(『全国方言資料』第1巻)には、

f ガンゼ ホレ ツクベサー ソレデモ アノ フケットコダバ マ
 うにを ほら 突くだろう。 それでも あの 深いところだと まあ
 ツケナエッテ
 突けないよ。

などがある。同巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

m………… アノ トスンダテ ヨンカイ アッタテナ アントス
 あの 年だったねえ 4回 あったというのは、 あの年
 デ アッタベナー
 だったろうねえ。

というのが見える。

「テ」文末詞は、現実形としては、助詞系文末詞とも見うるほどにこなれている。しかしながら、内実に即応するかぎりには、「言う」にかかわるところのある転成文末詞と見ることができる。

すでにふれたように、伝達を意味する「テ」や、問いかえしの「テ」は、共通語法上のものともなっている。「テ」文末詞のおこなわれることは、ながく将来にわたろう。

それにしても、方言色のつよい「テ」の用法がおおはばな流れをなしていることも事実である。これらのものは、今後、どのような推移を示すであろうか。変転退化もすくなくないことかと思われる。

八 ツ・ヅ

「と言う」を思わせるものに、「ツ・ヅ」がある。国の南北に、これが分布している。とはいいいながら、南の地域は「ツ」であり、「ヅ」は「北」に見いだされる。

「と言う」は、「チュー」になりやすかろう。「チュー」は「ツー」になりう

る。その「ツー」は、「ツ」とあっても）東北方言では、「ヅー（ヅ）」になりやすい。

九州地方では、鹿児島県下に問題の事象がある。

ヂャツツガ だと云ふ事だよ

などとある。（山下光秋氏「鹿児島県鹿児島郡谷山町方言集 下」 『方言誌』第八輯）私が薩摩半島南岸で聞いた、

○オガ スッ ツカ。

おれがするものか。

は、「ツカ」が、「と言う」の「ツ」をふくむものか。「モー ネツガ デッ ツカー。」は、「もう熱が出るものか。」であるという。だとすれば、「ツカー」は、「トカ」の「ツカ」ではあるまい。『甕島の昔話』に寄せられた、上村孝二氏の「上甕島瀬上方言の研究」には、

ユノ ンマイラ ツーノー。（子が生れたそうだぞ。ノーはドーの訛り）

との文例が見える。「ツー」は「と言う」であろう。大隅半島東岸で聞いたことばには、

○イチヨイガ シンダ ツワイ。

“市義<人名>が死んだそうな。”

というのがある。「と言う」系の「ツ」が見られる。

宮崎県中部での、橋口巳俊氏教示の、

○オマヤ バカジャ ネ ツノ。

“あなたはばかじゃないんですか。”（青男→中女）

に見られる「ツノ」の「ツ」は、「と言う」からのものであるのかどうか。橋口巳俊氏は、上例について、“目上の人を罵倒する。強い語調である。”と言われる。

九州地方では、つぎに、大分県下に問題の「ツ」が見られる。『大分県方言考』には、

つわー と (いふ) わ 台湾は暑いつわー

とある。大畑勲氏の「大分県南部の方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一卷)にも、

○ア^ツチヂェ ^ボンヌ ^スノ ツワ。

あちらでおぼんをむかえるんだって。(老女→中女)

との文例が見える。「ツワ」の品意は中等であるという。

中国地方には、「ツ」の見るべきものが、ほとんどないであろう。ところで、神鳥武彦氏の「文末助詞の生態—瀬戸内海西部島嶼方言について—」(『方言研究年報』第一卷)には、山口県下島嶼(小松・和田)の、

○ガ^ツコ イ^ツ ツー。

(この子は)学校へ行くってよ。(中女→青女)中。(小松)

○ア^ツリョー ス^ツ ツン。

あれをするって?(青女→青男)中。(和田)

が見える。

四国地方には、土佐や阿波に「ツ」の使用がある。

土佐では、「ツワ」「ツカ」「ツカヨ」「ツゾヨ」「ツゼ」などが見られる。土居重俊氏の「土佐方言語法(下)」(『方言』第七卷第八号)には、「ツワ」についての、

「トサ」位に当る。幡多郡奥内村。 イカンツワ

との記事が見える。同氏の『土佐言葉』には、「ツゼ」についての、「ハナガサイタツゼ(花が咲いたそうだ)」との用例が見え、

大豊村ではツーゼ、旧長者村では、チューゼとなる。

ツゼと同じ趣の助詞に、ツゾも使用されるが、ツゾの方が乱暴な言い方である。

との説明が見られる。

阿波に、また、「ツゾ」「ツデ」「ツカ」「ツワ」「ツノー」などが見られる。

○ヤメル ツカ。

“やめるって?”

は、「ツカ」の一例である。「ツテナ」などの言いかたもある。金沢治氏の『阿波言葉の辞典』には、

シランツテナ [知らぬというね] 共感を求める この「ナ」を疑問に用いると [知らぬというかね] 疑問

などとある。

愛媛県下にも、「と言うカイ」からきた「チューカイ」「チュカイ」などの新文末詞があり、「チュカイ」が「ツカイ」になってもいる。

近畿地方については、言うべきものはない。まずは、「ツ」のおこなわれない地域とされよう。

中部地方には、長野県下に、問題の事象が見いだされる。佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」(『国語研究』第十卷第七号)には、

面白イツウワ (面白いといふ事だ)

ソウダツツウワ (さうだといふ事だ)

などの事例が見える。氏は、「アッチエ行クツウワ」の言いかたにならべて「アッチエ行クチュウワ」の言いかたを示してもらわれる。『信州方言読本 語法篇』には、「ツァー」があり、

くったつ^ツつ^ツあー (食ったとき) (佐久・奥信濃)

の記事が見られる。

『土のいろ』第12巻第4号の「挨拶方言」特集に寄せられた、高井松一郎氏の「磐田郡山香村地方」(静岡県)には、

総て北遠地方は一般に語尾に「ツー」を附す。大変な事だ^{トゾコト}ツー。そーだツー。

との説明が見える。

千葉県下では、『千葉方言 山武郡篇』に、「読メッダ つー 読めるさうな」「行ッた つー 行ったとき」の事例が見える。「つー」は「伝聞ヲアラハス助詞」とされている。同書にはまた、「モドった つわ 戻ったとき」「オエた つわ 終わったとき」の事例も見える。同書にまた「つえ」も見え、「来ルダ つえ 来るさうだ」などがある。

東京語の中にも、「〜ツー」が見いだされる。

群馬県での、上野勇氏の『村のことば』には、「というぞ」の「ツウド」がある。「あいつが言いつけたツウド」は、その一文例がある。

東北地方は、「ツ・ヅ」の地域である。——「ヅー(ヅ)」がよくおこなわれている。

福島県下では、飯豊毅一氏の、「福島県における文末助詞—岩瀬郡天栄村を中心として—」(『方言研究年報』第一巻)に、

○ヤンねーッ ツワ。

やらないということだ。やらないそうだ。(壮年女→同輩)

(「ツワ」は、「ツワ」とも言われる。)

などが見られる。氏は、

「ツワ」に類するものには「ツナ」「ツナイ」「ツナン」「ツヅ」などをはじめ、「ツコッタ」「ツコッタナ」「ツケ」などがある。

とも言われる。

宮城県下での、『仙台の方言』に見える、

あんべわるくあらきつけ(加減悪くあられるとか→御病気な由)

「自分でするつけよ」または「自分ですとや(自分でするさうな)

などの「つけ」の「つ」は、「と言う」からのものであるうか。私が聞いた仙台弁には、

○ハヤク シタラ イッ ツァ。

早くしたらいいさ。(“要求的なことば”)

というのがある。これの「ツァ」はどういうものであろうか。『仙台の方言』には、「つお」の言いかたもよく見られる。

おつつくれーにほころび縫って置きしたから、お家さかえらしたら直さして頂きすつお(間に合せにほころびを縫っておきましたから、お家へ帰られたらお直し下さいよ。)

などとする。斎藤義七郎氏の「宮城・山形」(『方言学講座』第2巻)にも、

ここに おきますよ) 山形県置賜のソも同義 (そうだよ)
 コホサ, オギスツオ) (ホダッソ)

などの例が見える。

山形県下にも、「と言う」らしい「ツー(ゾー)」がよくおこなわれている。

上の斎藤氏の記述の中には、

強意のゾー。(オラヤンダ・ゾー・ホンナエ・ゾー) 婦人・少年多く用いる。
 私はいやだわ そうでないよ)

との説明が見える。なお、斎藤氏の中には、

ヂュー。山形県新庄市・最上郡。念を押す意。(そうだよ)
 (ホダ・ヂュー)

というのも見える。『山形県方言集』には、「づだな」が見られる。

づだな dzudana 感動詞……よ村山

知らねづだな。

(知らないよ、知らないや。)

とするされている。「知らないや。」などと言いかえられる「知らねづだな。」は、どういう言いかたになっているのであろう。「づ」は、「と言う」を思わせる。

秋田県下の西南で聞きとめたものには、

○ヤッテ シ[i]マッタ ズエ。

やってしまったよ。

がある。「ズエ」の「ズ」には、「と言う」が見られようか。

岩手県下には、南部域に、「ツォ」がよく見られるらしい。『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条には、

f ハイハイ ワケー アネッコサ ヨッタリナンカ スネデ ハ
 はいはい。 若い 娘のところへ 立ち寄ったりなんか しないで 早
 ヤク クンデツォ
 く 帰ってくるんですよ。

というのが見える。小松代融一氏の、『NHK国語講座 方言の旅』に寄せられた「岩手」の条にも、

セァギ ヨーモバシ ヨーモ ミズノグノヒレァズミサ キテオリアッツ
 西行（法師）も芭蕉（翁）も みちのくの平泉に 来ていられます
 ッォ。
 よ。

というのが見える。『気仙方言誌』には、

医者さ、はやぐかかった方ァよーがんツォ。

というのがある。小松代氏の『平泉方言の研究』には、

動詞・形容詞・助動詞の終止形について、伝聞の「そうだ」の代りに用いる。「そうだ」はあまり用いない。

とうきよさえぐつ（東京に行くそうだ）

こんだすけんにとれだづ（今度は試験にとれ…合格…たそうだ）

との記事が見え、「つ（つー）」もこの地方によくおこなわれているさまが受けとられる。『岩手県南昔話集』（『伝承文芸』第六号）にも、「つう（つう）」の実例が見られる。——「と言う」であろう。当地方の昔話には、「…… つもァ。」の言いかたもおこなわれている。「と言うモノナ」であろう。岩手県北部の軽米弁では、

○イカネァ [↑]ツァー。

“行かないそうだ。”

○イカネァ ツァー。

“行かないそうだから。”（“もう、かまわないで、私たちだけで行き
 ましょう。”）

（“「ヅァー」には、「～だから」の意がふくまれている。”）

○イカネァ ヅィーヨー。

“行かないということだよ。”

などが聞かれる。土地人は、「ヅァー」は、五十歳以上くらいの人が言い、「ヅィーヨー」は、子どもらや若い人が言う、と説明してくれた。

青森県下では、東部の「南部」域に、岩手県北の状況につづくものが見られる。南寄りでの二例は、

○イマモ ヌ[ü]ノ オッテル[ü] ズ(ヅ)ァ。

いまも布を織ってるそうだ。

○アリャンスッ ズ(ヅ)ァエー。

“ありますそうです。”（“最高敬語”）

である。——「ズ(ヅ)ァ」には、「と言う」が認められよう。動詞系文末詞のおもむきが、ここに明らかである。『五戸の方言』には、「ツケァ」が見られる。著者は、

「さうだ」に当る。「と言ったつけ」か。「ツ」は「といふ・てふ・ちふ」などの意であらう。

と説明してられる。例には、「其話聞いたツケァ（其話聞いたさうだ）」などが見られる。同書には、「づィ」もあり、「マンツサエ、彼人ア北支で戦死したづィ。」などの用例が見られる。『野辺地方言集』には、「ヅ」についての、

ト云フの約。「あの人死んだヅ」「当選したヅ。」

との説明が見える。『青森県方言集』にも、「南部」地方の「ヅ」がとりあげられている。

……の由。……なさうです

あの人ば方言の研究家だづ

とある。津軽中部での私の調査では、「ゼー」に近い「ヅェー」が聞かれた。

○ハイ[↑]ッターダ ゼー（「ヅェー」）。

“はいったんだそうだ。”

などとあった。「ゼー」に近い「ズ（ヅ）ァー」も聞かれた。

○マズ[ü]ガイモ オコシ[↑][i]タ ズ（ヅ）ァー。

“まちがいもおこしたんだそうだ。”

などとあった。人々が、「ゼ[e]ー」「ズ（ヅ）ェー」などを「〜そうだ」「とさ」であるとしている。“うわさ話しは「ゼー」だ。”などともあった。

都竹通年雄氏の「方言文法論の方法」（『国語学』第十二輯）には、

北奥羽方言でヅモンナまたはヅモナまたはヅモン、またはジョン、千葉県ではこれの過去をチケないしチケナないしッチケないしッチケナと言う。

以上はすべて感動助詞。

とある。東北地方に、「と言う」の「ツ（ヅ）」動詞系文末詞の特色的な分布が見られ、「ヅ」文末詞はことに、東北色を示している。

「と言う」を「ツァー」となまるのは、諸地方にありがちのことであろう。（東京弁にも、「と言って」の「ツッテ」がある。）

さて、この「と言う」的なものを、一方で、文末詞化していくのも、理の当然かと思われる。人は、なにぶんの言表を、「と言う」でしめくくることができるからである。

中国地方内には、いわゆる「ト」ぬけの現象がいちじるしい。（格助詞「ト」をぬく。「ト」をぬいて「言う」でしめくくろうとすれば、たとえば広島弁だと、

○シチ[↑]サンナ ユーンヨ。

しなさんなってことよ。 （母中女→子幼男）

（はじめて告知するのであるけれども「言うんよ」と言っている。）

のような言いかたになる。これに、「言う」はあらわであるが、こうであっても、ものは早くも、文末詞ふうになっている。この方向の助長されたところに、「ツ（ヅ）」文末詞が成立しているというわけか。「ヅ」が、「モノ」や「ナ」と

つながって、「ヅモンナーヅモナ」などの複合形文末詞となっていくのも、しぜんのいきおいに属することである。

第四節 「申す」に関するもの

「さようなら。」と辞去するのに「サヨナラ モシ(申し)。」と言う習慣があるとすれば、この「モシ」は動詞系文末詞とされる。「ナモシ」や「ノモシ」も、「モシ」本位には動詞系文末詞とされる。

ところで、「申す」起源の「モシ」が、「モシ。」と、よびかけの特殊完結文にされていると思えば、「さよなら モシ。」の「モシ」も、文系の文末詞と見られないことはない。

もっとも、文系と見られる「モシ」は、品詞論的には、感動詞（よびかけの感動詞）と受けとらざるを得ない。

種子島の西之表の、

○コン テガミヲ ヨンデ オクライ モウ。

この手紙を読んでくださいませ。

では、「モウ」文末詞が受けとられるか。上例は上品な表現であるという。「モウ」は、「申す」系の文末詞かと察せられる。

第五節 「思う」に関するもの

「と思え」「と思いなさい」の類のものが、一群の動詞系文末詞をなしている。

「言う」と「思う」とは、私どもの生活にとって、必須の二語であろう。「言う」でしめくくる意図から、「言う」関係の文末詞がうまれたと同様に、「思う」でしめくくる意図からも、「思え」「思いなさい」関係の文末詞がうまれた。

「と思え」「と思いなさい」関係の一群の文末詞は、主として、中国地方内に栄えている。これがこの地方にこうである理由ともなると、——はなはだ興味ぶかいことながら、私には、いまだ、なにほどのことも述べることができな。国の地方地方には、地域性に即した、思考と心情との生活が開けているのであろう。

中国地方を見ると、まず山口県下に、本題の文末詞のおこなわれることがさかんである。長門に、「トモエ（と思え）」「トモイ」「トモインサイ」「トモイサンセ」「トモエサンセ」「トモエサン」などがおこなわれている。県西北部での「トモイ」例は、

○カワシリニャー ジョーニ トリマス トモイ。

川尻にはたくさんとりますよ。

である。萩市での「トモインサイ」の一例は、

○アル トモインサイ。

ありますよ。

である。「トモエサン」は「トモエサンセ」の下略である。

○カラダガ ダルーテ イケン トモエサン。

体がだるくていけませんのですわ。

などと「トモエサン」がつかわれているのを見ると、「と思いなさい」がいかにもよく文末詞化されていることが了解される。長門北岸近くの青海島では、

○キョーワ エラカッタ トモヤー。

きょうはほねがおれたよ。

というのを聞いた。この地で「トモエー」とも言い、「トモヤー」とも言っている。土地の人は、“「エー」は目下に言う。「ヤー」は対等以上に。”と説明してくれた。「トモエー」は「と思え」なのか、「トモイエー」に近いものなのか。「トモヤー」は「トモイヤー」からのものなのか。長門につづいて周防にも、等しく「トモイ」がさかんである。

○エラー トモイ。

しごとがつらいよ。

などと言われている。平郡島には、「スベル トマー。」(すべるよ。)など、「トマー」形が見られ、「トマーサイ」も見られる。周防東部には、「トモイ」とともに「トミ」がおこなわれている。「トミ」は、「と見い」か。ことによっては、「トモイ」の「トマー」が、「トミー」「トミ」になったりもしたかもしれない。——いちおうのうたがいである。私は、周防祝島の調査では、「トモイマセ」「トモヤ」を聞いた。

○アシコガ イェー トモイマセ。

あすこがいいですよ。

○フクダー、ロッケン アル トモヤ。

福田よ(相手へのよびかけ)、(道路のはばは)六間あるよ。

などと言われている。「トモヤ」は同僚に言うものであり、男の人がよくこれを言い、「トモイマセ」は、だいたい女が言って、あらたまった言いかたのものであるという。

「と思え」というけれども、これは、もはや命令意識にひかれているものではない。ここに、「と思え」「と思いなさい」などの言いかたの文末詞化は明らかである。命令表現法が最初に採用されたのは、文表現が相手につよく訴えかけるものだったからであろう。

広島県下の安芸地方には、周防につづいて、「と思え」系の文末詞がよく見られる。もっとも、この地方には、「トモイ」よりも「トモインサイ」のおこなわれることが多い。——ややていねいには、「トモイナサイ」とも言われている。

○ドーモ セグ モンジャケン ショーガナイ トモイナサイ。

どうもいそぐものだから、しょうがないんですよ。

は、広島市北郊での一例である。「トモイナサンセ」もおこなわれている。

○あの家の子は、来月には マメニナルンデスゲナ。ハー フトイ トモイナサンセ。

あの家のヤギは、来月にはお産をするんですって。もう、おなかが大きいんですよ。(老女→中女)

は、広島市西郊での一例である。「トモインサイ」は、備後北部で「トオモイナサレ」などともある。が、備後一般には、「と思え」「と思いなさい」系の文末詞のおこなわれることがすくない。

つづいて岡山県下にも、この類のものが見られない。

ところで、山陰の出雲地方となると、「思う」に関するもののおこなわれることが隆盛である。「トモエ」がよくおこなわれている。

○ア^ート^ー ア^ーガ^ー ナ^ー。ケンク^ワ シ^ッチャ^ッotte ナ^ー。ト^テモ^ー エ^ラカ^ッタ^ー ト^モエ。

あれとあれがなあ。けんかしててなあ。とてもたいへんだったんだよ。などがある。「トモエ」が「トメー」にかなり近くなったりもしている。「トモイ」ともある。ややていねいには、「トモイナサイ」などもある。

○わたしは 明治十八年の ^{ホー}フ^ェイ(エ)ダ^ー トモイナサイ。

私は明治十八年の砲兵ですよ。

は、出雲西岸での一例である。「トオメーナサエー」の言いかたもなされている。

「トモイナハイ」ともある。

○ハ^イッテ イ^ケン トモイナハイ。

はいっていけないんですよ。(老男→藤原)

は、出雲南奥での一例である。ごくていねいな「トモイナサイマシエ」もある。

○ワ^ガママ^デ イ^ケマシ^ェン トモイナサイマシエ。

わがままでいけないのでございますよ。

などと言われている。——「と思いなさいませ」との言いかたが見られるけれども、ことばどおりの意味作用が発揮されているわけではない。「思いなさいませ」と、原義どおりに言いかけているわけではない。「トモイナサイマシエ」とともに、「トモエナハエマへ」などもある。なお、出雲特有のていねい形に、

「トモワッシャイ(エ)」「と思わっシャイ」「トマッシャイ(エ)」「トマッセ」
「トマサイ」「トマハイ」などがある。

○サルガ ナント ジャーニ オッタ トマッシャイ。

猿がなんと、たくさんいたんですよ（いたというわけですよ）。
などと言われている。土地の人は、「トマッシャイ」を“訴えることば”，“同意を求めることば”，“注意をひくことば”，“したしみのことば”としている。さらにていねいな形のものに、「トオモワッシャエマセ」がある。「と思わっシャイマセ」形式のものである。（これが、出雲発音での変相をこうむっている。）

隠岐にも、「トモワッシャイ」「トマッシャイ」などがあるらしい。神部宏泰氏の「隠岐島五箇方言の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）には、

○はたけも、ムツガ オイカケテ テニ アワン トマッシャイ。

はたけの作物もむしがおいかけてしまつがつかないですよ。
などが見える。

『鳥取県方言辞典 後編』には、

とおもえ 〔感〕 よ 「えらいと思え」

との記述が見え、また、

とおもいなさい 〔感〕 よ 「えらいと思いなさい」

との記述が見える。

中国地方を出はなれると、兵庫県下では、『全国方言資料』第4巻の「兵庫県神崎郡神崎町栗賀」の条の、

*m*ソリャー ソヤッタンヤトモナー

それは そうだったともねえ。

などというのが見えるけれども、こういう「トモナー」は、「と思え」に関係するものではない。助詞の「とも」の見られるものであろう。

ところで、能登半島東北部では、かつて、

○「何々ドン」と言うトモイネ。

との言いかたを聞くことができた。この「トモイネ」は、「と思えね」であろうか。というのであれば、これも上来、問題にしてきた「と思え」系のものではない。——それにしても、「トモイネ」の形は、一見、「と思え」系の文末詞を思わせるようでもある。馬場宏氏の「木郎方言考(其の二)」(『国語方言』第四号)に見える、

行かないのだと^ト言っている＝行かんがや^トメー

食べないのだと^ト言っている＝食べんがや^トメー

では、「と^ト言っている」に相当するものらしいのであるが、「^トメー」というのが見える。これも、「と思え」にまぎらわしくはある。

伊豆半島で聞いた一文であるけれども、

○ヒ^トー ミレバ ヌス[^トu]ッ^トダ トモエ。

というのがある。——伊豆にかぎったことではあるまい。世の通用文句でもあろう。これは、明らかに、「と思え」の気もちを利かした言いかたである。むきつけには、文字どおり「と思え」と、人は言う。

このようなものは、「と思え」のまとまりのまま、しぜん、文末での特定の訴え要素に転用されるはずでもあろう。

考えてみると、「と思え」のよびかけは、それが、「と思いなさい」などの敬態のよびかけにされたとしても、「ミヨ」(見なさい)以上に、異様なよびかけであるとも思われる。見るのは、すぐに目の前などに見ることができるしだいであるから、まずは、平易なことであり、したがって、「ミヨ」(見なさい)のよびかけは、比較的単純であるとも考えられる。「トオモエ」(と思いなさい)と、相手に思考をすすめるのは、一種、たち入った、おもしろいよびかけとされるであろう。

英語の会話表現でのよびかけに、「you see」「you know」がある。後者は、まさに日本語での「トオモエ」に近いものと見てよかろうか。人々は、平常の

談話の中で、これらの言いかたを、ほとんど無自覚的におこなってしよう。——人によっては、これらの言いかたが、そのことばぐせになっているふうでもある。その「you know」は、日本語の「トオモエ」に恰当しはしないか。そうではあるが、日本語には、「トシレ」（と知りなさい）というよびかけの文末詞はできていない。

第六節 「見る」に関するもの

これも、第一には、中国地方によく見いだされ、しかも岡山県下に、ぬきん出ていちじるしい通用が見られる。

山陽地方での言いかたに、広島県下の、

○ア—ユ— コト— ショ—ルガ ミー。

あんなことをしてるが、まあ見ろよ。

など、「見よ」と、最後に指示する言いかたがある。（山陽地方にかぎったことではあるまい。）見ることを命じたりすすめたりする「ミー」は、当然のこと、文末に見やすいものである。こういう「ミー」が、かならずしも「見ろ」との意には拘泥しないで、だいたいよびかけ用に用いられた時、「ミー」は文末詞化する。岡山県地方の「トミー」（と見い）は、まずこうしたものである。

○サッパリ オエン トミー。

さっぱりだめだよ（だめですよ）。

○タベン トミー。

たべないんだよ。

は、備中北部の例である。この地出身の一知友は、つぎのように語った。“「オエン チ—。」「オエン ヨ。」などという表現がある。これらと比較すると、「オエン トミー。」は、よりいっそう、自己反省的・相手依存的であるようだ。つまり、「ミー」の命令の対象は、「別の自分」（客観視した自分とひじょうにしたしい他人）である。”岡山県下で、「トミー」は、男ことばになっていよう。

敬態の「トミンサイ」(と見なさい)は、男女に用いられている。しかし、おおかたは、おとなのものであろう。

岡山県下に、「と思え」の「トメー」からきた「トミー」があるのだろうか。

県下に、

○へびを クチナワチューナー、アリヤー、イカサマ アタットル トミー
ナー。

へびをくちなわというのは、あれはいかにもあたってるよねえ。

など、「トミーナー」の言いかたもよくおこなわれている。「トミンサイナー」もよくおこなわれている。

○店をやれば、すわってらくらくと暮らせると思ったが、ドッコイ、チゴタ
トミンサイナー。

……………、どっこい、ちがったというわけですよねえ。

などである。

広島県下には、「と見い」系のものはなくて、山口県下には、これのかなりよくおこなわれているのが見られる。周防東部には、

○ヨー イケル トミ。

よくいけるよ。

との言いかたがある。この「トミ」は、「と見い」か、「と思え」系のものか。(土地人が、この「トミ」を「ともいなさい」と説明したので、うたがっておく。) 国安功氏が、周防平群島のことばとして教示された、

○バカタレ トミンサンセ。

あいつは馬鹿ですよ。ほんとうに。

○シーチャンガ キタラ ナンボカ シカロー ミンサイ。

静ちゃんが来たらひどく叱ろうよ。今に。(老女→孫幼女)

○ゴラクノ ヒョーニ ナル トミナイ。

若者の日々の儲けは娯楽の費用になることよ。(老男)

○サンビョー オウノガ オロー ミヤール。

米を三俵負うのが居ようよ。きっと。 (青男)

では、「見る」に関する文末詞が明らかであろう。私が、長門西北辺で聞きとめた一例は、

○インヤ、ソリヤ ユワン トミヤ。ココノ モナー。

いや、それは言わないね。このものは。

である。山口県下に、「見る」に関する文末詞の諸形態が見いだされ、「トミンサイ」の「ト」のないものも見いだされる。

出雲地方にまた、問題の事象があって、「トミー」の「トミナサイ」(「トミナサエー」)「トミンサイ」「トミナハイ」などが見いだされる。

○ケーガ、コア ババ ツマラン トミナサイ。

これが、このばばは、つまらんですよ。 (老女)

は、神部氏教示の出雲での一例である。私が出雲奥で聞いたものには、

○これは、私らが若いころに聞いた話しとオナジ[i] コトニ[i] ナー
トミ[i]ナハイ。

…………おなじことになるんですよ。

などがある。

『鳥取県方言辞典 後編』には、

とみー [感] 「えらいとみー」

との記述が見え、また、

とみなさい [感] よ 「えらい——」

とみんさい [感] よ 「えらい——」

の記述が見える。(「とみんさい」とともに「とみんしゃー」「とみんせー」がある。)神部宏泰氏によるのに、伯耆には、

○モー ハチジュン ナッタラ アカン トミタガエー。

もう八十になったらあかんトミタガエー。 (老男→中男)

など、「トミタガエー」の言いかたが見いだされる。「トミナサイマセ」の言いかたもあるという。因幡にも、「トミンサイ」などがある。鳥取県下は、「見る」

に関する文末詞を存している点で、岡山県下に、かなりよく通じているのであるうか。

「見よ」発想の動詞系文末詞は、中国地方を出ても、ほかの地方に、だんだんと認められるか。伊予弁の中に、

○ヨン^{バー} ミー。アツ^{カッタ} ネヤ。

ゆうべはよ。暑かったねえ。

などの言いかたがある。「^{バー}ミー」が問題視されよう。

薩摩南部には、瀬戸口俊治氏教示の、

○イヤ^ー、ニク^ワ アイモ^{ハンガ} ミヤイ。

いえ、印肉は持ちあわせておりません。どうも。(中男→老女)

のような言いかたがある。——「見ヤイ」が「どうも」と言いかえられている。

○コン ヨ^ダゴ^ロ ミヨ。

このなまけ者め。(中女→小男)

は、橋口巳俊氏教示の、宮崎県中部での一例である。

西宮一氏氏は、奈良県磯城郡織田村(新 大三輪町)の言いかた、

アノ^{ミー}、アノ^コチュ^{ータラ} ガ^{ッコイ} イ^テ ワ^ルサ^{シト}ッ^{テン}ミー、
ホン^{デン}ミー、ヒ^ドッ^{コー} オ^コラ^レヨ^ッッ^{テン}ター。[あのねえ、あの子
ったら学校へ行って、いたずらしておったのさ、それでねえ、ひどく叱ら
れおったんだとさ。]

というのを指摘してられる。(国立国語研究所『日本方言の記述的研究』)「アノミー」を「あのねえ」と言いかえてられるのなどが注目される。「アノミー」などの「ミー」を、「見る」に関係のあるものと見てよいのではなからうか。

押見虎三二氏は、「佐渡方言の文末助詞について——両津市大字片野尾における——」(『方言研究年報』第一巻)のご手稿で、

○ミ^ジョ^{ゲン}ナ^{ッタ}コ^トミン^シ

可愛らしくなつたことを ごらんなさいとの文例をあげていられる。この「ミンシ」は、特定の訴えかけことばというほどのものにはなっていないのであろう。

以上、問題事象は、だいたい近畿以西に見いだされるようである。

第七節 「ご覧」

「見る」の「見よ」の敬態に「ご覧」がある。したがってと言おうか、この「ご覧」もまた、文末詞になってはたらいてもいる。

考えてみると、“そこの長い竹をとってゴラン。”などと言われている「ゴラン」は、もはや「見る」ことを要求しているものではない。「ゴラン」(ご覧)が、すでに作用の転移を見せている。このような傾向が助長されれば、「ゴラン」は、文表現末尾の特定の訴えことばともなりうるはずであらう。

『静岡県島田方言誌』には、

キテゴー きてみな 来てごらん

ミテゴー みてごらん 見て御覧

などの記述がある。これには、「ゴラン」の「ゴ-」となったものが見える。「ゴラン」は、それが文末にたつたばあい、たとえ「ご覧」の意のものであっても、その形を変転させていくいきおいにあると見られる。——文末にあるものなので、そういうことがしぜんにおこりやすいわけであらう。こういう「ゴ-」は、すでに形態の変化もを見せているので、一方では、他の用法にも転移しやすいはずである。

香川県西部では、

○アノ ゴ-。(あのね。)

などの言いかたがおこなわれている。これでは、「ゴラン」の「ゴ-」が、もはや完全に、文末詞になっているのが見られる。——「アノ」のもとにきている

「ゴー」は、現実の「見なさい」ではない。当地方では、なお、

○アノ ゴーナ。

あのね。

などの言いかたがおこなわれている。「これ、たべられないよね。」が、

○コレ タベラレナイ ゴー。

と言われてもいる。これにあっても、文末詞「ゴー」を見いだすことが容易である。「ご覧」は、ともかく、相手にあつらえる（命令する）ものであるから、これによびかけ性のつよいのは明白である。そのものは、よびかけことば——単純な文末詞——に転化していても当然であろう。

もっとも、「あの ネ。」の「ネ」などにくらべれば、「アノ ゴー。」などの「ゴー」には、意味作用上の、より複雑なものが認められることはあらそわれない。複雑な表現性をそなえた文末詞「ゴー」が、ここにできていよう。私どもの日常の表現生活では、よびかけことばというようなもののばあいにも、これをさまざまに分化し、いろいろに、ちがった表現性のものを創作して、生活百般でのとりどりの表現意欲を表出する必要がある。人は、たじろぐことなく、「ゴラン」からも「ゴー」を創作して、これを文末詞化したしだいであろう。

香川県西部に、「アノ ゴーナ。」とともに、「アノ ゴろーじ。」（あのね。）もある。——老人にまれにおこなわれているという。「ゴろーじ」も、文末詞的なものになっていよう。「アレ ゴろーじ。」と「アノ ゴろーじ。」とは、一步の差を示すにすぎないものであるけれども。

丸亀市域の調査にしたがわれた来田隆氏は、つぎの諸例を教示してくださった。

○アレ ゴンナ。

○アノ トキ ゴンナ。

○アノ ゴンナ。

これには、「ゴーナ」ではない「ゴンナ」が見られる。「ご覧 ナ。」を思わせるものである。第一例「アレ ゴンナ。」は、「あれを見なさい。」の意になる

こともあるというが、また、こう言って、話しのはじめに、人の注意を喚起するものでもあるという。「アノ ゴンナ。」は、「あのね。」というほどのものであろうか。

○アノ トキ ゴンナ。

あの時ゴンナ。(あの時ね。)

のような言いかたもある。“話しを持ちだす時”のことばであるという。

岡野信子氏の教示によるのに、山口県長門西辺では、中年以上の女性が、

○コリョ ゴイナ。イソ イコー ヤー。

ねえちょっと。わかめ刈りに行こうよ。

などと言っているという。「ゴイナ」は「ご覧」関係のものであろう。しかし、それがここでは、文末詞的なものになっている。

「ご覧」に関する文末詞が、讃岐や長門に分布している。長門地方が、中国一般からはなれて、より濃く、四国北がわ方面に通じる言語状況を見せることがあるのを、私は興味ぶかく観察してきている者であるが、ここに「ご覧」に関する文末詞のばあいにも、彼我的底脈一致とも言えるものがとらえられそうである。それにしても、中国・四国の地域にあって、とくにこのように、「ご覧」関係の文末詞が見られるのはなぜであろうか。分布存立の理由は、私には、解明しがたいものである。今はただ、方言の風土性というものを、結果論的に認めておくだけのことにしておこう。

第八節 「ござる」「ございます」の「ゴザ」

丸亀ことばには、

○シヨッタ ゴザ。

“しよりましたですよ。”

○アア シト スカン ゴザ。

“あの人、好かないわ。”(“つっぱねる感じ。”“少女的な潔癖性がふ

くまれていると思う。”)

などの言いかたがある。(堀芳夫氏教示)——“おもに中学校・高等学校の女子学生がつかっている。”という。「ゴザ」文末詞が認められよう。『讃岐方言之研究』には、「ヨゴザンス」に対する「ヨゴザ」の指摘があり、これを「丸亀附近多」としてある。「ゴザ」が文末詞化する過程の一部が、ここに明らかであろう。

私は、別の機会にまた、来田隆氏に、丸亀ことば「ゴザ」の調査を依頼した。氏の教示によるのに、やはりここに、「へー ヨゴザ。」(へえ、ようござんす。)など、「ヨ(ヨー)ゴザ」の言いかたがよくおこなわれている。そうしてまた、

○シットルゴザ。

知ってますよ。

○シランゴザ。

知りませんよ。

などの言いかたがおこなわれている。文末詞化した「ゴザ」のおこなわれていることがたしかであろう。

「ござる」「ござんす」の「ゴザ」とあってみれば、「シランゴザ。」などと言われたばあいにも、「ゴザ」のむすびが、まったく独自のものとなっていよう。「ゴザ」は文末詞として、微妙なニュアンスをそなえているはずである。——なんらかのていねいみを、どれほどかはあらわすものではなからうか。

文末詞「ゴザ」の分布は、はなはだしく限られたものようである。その理由は、また、解くのにかたいものである。「ござる」「ございます」ことばは、国の広くによくおこなわれたはずであるが、文末詞「ゴザ」を生成せしめる機縁は、普遍的でなかったというのだから、ことはおもしろくもあるし、ふしぎとも思われる。

第九節 「来い」に関するもの

「見い」に似たような語形の「来い」が、また文末詞化している。出雲地方に、ぬきん出てこれがいちじるしい。「行こうよ。」というのでも、「エカ^ーコイ(エ)。」と言われている。——「コイ」は、「コエ」と言われることが多い。(いわゆるズーズー弁の出雲地方でのことである。)

「来い」の「コイ」文末詞は、よびかけて、相手にさそいの意を表明するものである。それが、「見い」などとおなじく、命令形のものなので、このよびかけは、しぜん、上品なものにはならない。ぞんざいな言いかたや、うちとけた言いかたになる。

「来い」の「コイ」は、これ単独ではっきりとしたよびかけことばにもなるので、この文末詞化したものは、文系の文末詞とも見ることができる。しかし今は、語に即して動詞系文末詞としておこう。

かつて私は、出雲西岸の一地で、老翁の言、

○ホ、^ーサントコサデ コイ。

というのを聞いた。「ほ、うんとこさで来い。」というのであろうか。じつはこれが、ふるに立つとき、老翁がしぜんに発したことばであった。これの「コイ」は、「来い」のままのものであろう。が、「来い^イ」のこうした用法の中には、「コイ」の文末詞化の契機がよく認められる。

上の老翁の孫、男児・女児のことばに、

○アノ^ーガキ ナグチャロ コイ。

○アノ^ーガキ ナグチャラ ヤー。

あのがきをなぐってやろうよ。(小人間)

というのがあった。男児は「コイ」とむすび、女児は「ヤー」とむすんだ。「コイ」と「ヤー」とを二人がならび答えたので、「コイ」の、文末詞であることがよくわかった。この子たちのことばに、

○タベラ コイ。

たべようよ。

○クラ コイ。

食おうよ。

○アガantai イカ コイ。

あちらのほうへ行こうよ。(友をさそう。)

というのもあった。

島根県下は、出雲に隣る石見東部にも「コイ」文末詞が見いだされる。

○コッチカラ イノー コイ。

“こちらから帰ろうじゃないか。” (小男間)

○オイ, イマカラ エーコー ショー コイ。

“なんと、これからもうすこしよい行儀になろうじゃないか。”

などがある。「コイ」は、“近い同輩もしくは目下のものにしかつかわれない、男のぞんざいなことばである。”という。

出雲南奥では、私も、「コイ(エ)」の頻用されるさまを聞いたことがある。

○メシ[i]ー クラー コイ。

めしを食おうよ。

○ガッコーエ エカー コエ。

学校へ行こうよ。(小男間)

などと言われている。土地の人の書きものにも、「コエは目上には用いない。男子の言葉なり。目下、同僚に用いる。決して上品ではない。」との説明が見える。「コイ(エ)」文末詞は、土地人によっても、「ヤ」文末詞に対比されている。

神部宏泰氏は、出雲の、

○ヤキューステン, サコイ。

野球をするから、さあ来い。

○イシ[i]ナゲ シ[i]テ アソブケン, サコー。

石なげをしてあそぶから、さあ来い。

などの言いかたを教示せられた。「さあ来い」の意の表現であれば、ここには、「コイ」などの文末詞をとることはできない。が、「サコー」などとあるのには、なんらかの文末詞的様相がうかがわれもする。

出雲に、「コイ」に相当する「ゴザイ」文末詞もある。出雲南奥では、「イ(エ)カー コイ。」(“行こうヤ。”)とも、

○イ(エ)カー ゴザイ。

とも言われている。「ゴザイ」とあればいねいで、上のは“行きましょうよ。”にあたる。

○ウチデ ママゴトー ショー ゴザエ。

うちでままごとをしましょうよ(しようよ)。 (小女間)

などともある。小女たちに、「アソバー ゴザエ。」(あそぼうよ。)などというのも聞かれる。「ゴザイ(エ)」文末詞の流通の範囲もせまくはないらしい。

「来い」に関するものが、鳥取県下・岡山県下・広島県下・山口県下にも、なにほどか見られる。鳥取県伯耆西半方面には、出雲東部につづいて、「コイ(エ)」文末詞がよく見られるようである。岡山県下は、北部の美作に、問題の事象が見いだされる。広島県下、安芸北部での一例は、

○ショージュー ショー コイ。

将棋をしようよ。

である。人は説明して、“そこにいるのに「コイ」と言う。「こちらへ来い。」などの「来い」ではない。”と言う。山口県下では、「コイ」文末詞が、長門地方によりよくおこなわれていようか。長門西北での例は、

○イッテ ミョー コイ。

行ってみようよ。

○ハヨー イコー コイ。

早く行こうよ。

などである。「コイ」文末詞は、低品位の表現をかもす。「コイ」は、「ヤー」に近いものようでもある。

四国にあっても、まず愛媛県下に、主としては東予方面に、「コイ」文末詞がよくおこなわれている。

○イノ コイ。

帰ろうよ。 (小男間)

○オミキ アギョー コイ。

おみきを“あげましよう”。

などとある。「イコ コイ。」(行こうよ。)の言いかたは、広い範囲に聞かれる。

徳島県下にも、「コイ」文末詞があるか。阿波踊りの歌の文句にも、「新町橋まで行かんかこい々々」などとある。

以上の地域を出はなれば、もはや、どこにも、私どもは、「コイ」文末詞の通用を認めることができかねる。ところで、八丈島・青ガ島には、一つ、問題の事象が見いだされる。「さあ行こうよ。」ときそうことばが、八丈島では、「イコゴン。」「イコガン。」などとある。「ゴン」や「ガン」が見いだされる。『くろしおの子(青ガ島の生活と記録)』には、

「^(よいから)「^(行こう)天気^(よいから)がよっけて^(行こう)浜にい^(行こう)ご^(行こう)ん」というので、ぼくたちはおこられるかなあと心配だったが、勉強より浜あそびの方がおもしろいので、つい、「行ごん、行ごん」とさんせいしてしまった。

などとある。「ゴン」は何なのだろう。

『尾張乃方言 続篇』の p. 29 に、「知多郡大野地方」の「イカコン(行かないか)」というのが見える。

第十節 「シテ」

「する」という動詞を用いたと見られる「シテ」文末詞がある。——「シタ」はないのであろう。

「シテ」などが文末詞化し、文表現の訴え作用に役だつことは、あつて当然のことかと思われる。「シテ」などと言うことによって、発言者自身の指示の意をあらわすのであろう。(あらわして先方に伝えるのであろう。)

考えてみると、「どうどうして、」などと、私どもは、「して」の言いとめを、表現上、よく利用している。このような言いとめの「シテ」は、他事実でのばあいと同様、訴えかけ用のことばとされてもよいはずである。

また思うのに、「シテ」は、しばしばそえことば的なものともされている。「だからシテ」、「それからシテ」、「みんなシテ」など。(漢文の訓読にも、「以てして」というのがある。)このような、そえことば的な「シテ」は、遊離成分として文末に特立せしめられてもしぜんであろう。こういう点では、「シテ」とあつても、「する」の意がよくなるはなくなつて見られる。もともと指示性のある「シテ」であつたとしても、「シテ」のさまざまな慣用となつては、もはやこれに、慣用に応じた特定の意味作用が発生していることなのであろうか。

「シテ」文末詞の分布で注目されるのは、まず、三重県下である。私自身は、伊賀の調査で、「シテ」文末詞のいちじるしい慣用を見ることができた。

○ソレガ フジナガイチローサンノ ムスメサンデスノヤ シテ。

それが藤永一郎さんの娘さんなんですよ。(中男→藤原)

○ナンニモ ナー。シラ シマヘンノヤ シテ。

なんにもねえ。知りはしませんですよ。(老女→藤原)

○ヤラシテ モローテンノヤ シテ。

やらせてもらってるんですよ。(学校のことを) (中男)

などと言われている。土地の人のことばに、「ツヤ シター。」(そうや。)というの、女の人が知らん人などにちょっと気をはった時に言う。”というのがあった。「ツヤ シター。」というのがあり、男の人たちは多くこれを言い、この言いかたのおよそ上位に「ツヤ シター。」があるという。“もっとていねいになると”，「ソーデンネヤ シター。」(そうなんですよ。)と言われるという。「シテ」文末詞が、「シテナ」の複合形にもなっている。また、「ワシテ」の複合形にもなっている。

○ハイッテ ヘンダラ アカン ワシター。

はいっていなかったらだめだよ。(小学生三男)

は、「ワシテ」の見られるものである。——この小学生三男の発言に、私が、「アカン ワター」と、「シ」をのけて言ってみたら、他の小学生男子が、「シター」をつけて発言をしてみせた。

三重県下では、「シテ」文末詞は、おもに伊賀地方におこなわれているのか。

西の和歌山県下に、おなじく「シテ」文末詞がおこなわれており、紀州北部方面には、これがさかんのようである。『和歌山県方言』には、

アカナシテ 駄目ですよ

アカナヒテ 駄目ではないか

の、和歌山市をはじめとして、県北部におこなわれていることが指摘されている。「シテ」が「ヒテ」ともある。『紀州の方言』には、「シテ」が、「強意の『よ』『ぞ』」とされており、

あらして(あるぞ、あるではないか)

との記述が見える。これによれば、「シテ」文末詞のはたらきが、「～ではないか」の意をあらわすものともされている。他の方言書にも、「アラシテ(ヒテ)」についての「ありますよ、あるではないか」といったような解が見える。「～ではないか」といったような解が成りたつところには、「シテ」の指示の

つよさも認められるわけか。和歌山県下に、「シテヨ（ヒテヨ）」の複合形もできている。「ワシテ」の複合形も見られる。

こつちへクラシテ。 藤原注「クラシテ」は「くる ワシテ」であろう。は、『和歌山県方言』に見られるものであり、(「クラシテ 来つゝある」とあり)、これは、県北部におこなわれるものとされている。

近畿の南寄りに、東・西、相応じて、和歌山県下と三重県下とに、「する」系文末詞の見られるのが注目される。近畿内にこれがあるという点では、「シテ」などは、近畿系の文末詞とされようか。和歌山県下については、奈良県下が問題になる。楳垣実氏の「南伊勢地方のヤンカ」(『三重県方言』第14号 昭和37年5月)には、

和歌山市あたりでは、

ココニ アラヒテ。

ココニ アラシヨ。

と使い、「アラシヨ」はまた、「アライシヨ」ともなつて、男児が使うことが多い。これらの形はすべて、くずれた形で、「ナイ」に続くときには、「ナイワヒテ・ナイワシヨ・ナイワッシヨ」となつて、かくれていた「ワ」が現われるのだ。それが、伊都郡になると、

ココニ アルハテ。

となつて、奈良県へつづくのだ。

とある。上に、「ハテ」とあるのは、「シテ」を考えさせるものなのかどうか。

近畿東北部となつて、『滋賀方言集』に、

ソウヤワシテ さうだよ

というのが見える。

つづいては、東北の『福井県方言集』に、

ソージャロシテ さうでせう

というのが見える。越前西岸では、

○ヨクガ ナイサケー シテ。

欲がないもんだから。

○イマー シテ チット テイネイニ、…………。

今はまあちっといねいに、…………。

などというのも聞かれた。「シテ」が間投詞ふうに使われてもいる。——こ
うも用いられるものであるから、文末詞ともされているのであろう。

石川県下でも「シテ」が見られる。『全国方言資料』第3巻の「石川県石川郡
白峰村白峰」の条には、

fホンノニ ヨワッタモンジャケッドシテ

ほんとうに 困ったものですけれどね。

fイマラワ シャーナモンジャ ナイワシテ

いまなどは そんなものでは ないですよ、

などとある。

北陸路にこのように「シテ」が見られて、近畿東北の滋賀県下の状況につづ
くものがとらえられるのは、興味ぶかいことである。以上をもってすれば、
「する」系の「シテ」などの文末詞は、いよいよもって近畿系の存立を見せてい
るものとされようか。

ところで、遠くはなれて北奥に、「シテ」らしいものが見いだされる。

『五戸の方言』には、「ガシテ」が、

「かしら」「だらうか」に当る。推量を含む疑問。

と説かれてあり、

(一)そだべガシテ？（さうかしら？）

(二)行つたべガシテ？（行つたかしら）

のような例があげられている。

『野辺地方言集』には、「シテ（感）」がとりあげられており、

「そうかしら」の「しら」に当る、「そだべかして」は「そうかしら」とある。

これらの「シテ」は、疑問表現に用いられている。

『全国方言資料』第1巻の「青森県南津軽郡黒石町」の条には、

fアエ ソデスガシテヤー

あれ そうですね。

というのが見える。——疑問用の「カ」の下に「シテヤー」がついているのであろうか。

南奥に下って、山形県下には「シタ」形が見いだされる。横山辰次氏の「山形県置賜方言語法」(『方言』第五卷第十二号)には、「間投助詞」とされている「シタ」が見え、

他人の言ふことを肯く時、又は弱^{うなづ}言ひ切る時に用ゐる。

とある。実例は、

ホカエナゴドヤンダシタ(そんなことは嫌ですよ)

などである。

斎藤義七郎氏も、『方言学講座』第2巻に寄せられた「宮城・山形」の条で、「山形県東根市方言」について、

シタ。(そうかなあ いいだろうに これでよいよ
ホダカ・シタ・エガンベ・シタ・コレデエー・シタ)

仙台でも用いる。

と記述してられる。

「シタ」は福島県下にもよくおこなわれている。(p. 496) (p. 530)

こういう「シタ」については、「する」に関する「シテ」に類するものと考えることができるかどうか。——動詞系の「シタ」があってもと思われる。

が、ものは、「モシ」の「シ」と「あなた」系の「タ」とから成っているか。

「シニー」という問題形がある。三河奥で、かつて私が聞いたものに、

○ナンダー シニー。

(よほどわるいことばのようであった。)

というのがある。「シニー」は「くそ!」といったようなものらしい。

瀬戸内海中部、大三島北部(私の郷里)で、

○ナンジニー。

なんでそんなことがあるものか! (つよく否定)

との言いかたがおこなわれている。この「シニー」も、「する」の「シ」を見せたものであろう。こういうものからも思うのに、三河奥の「シニー」も、動詞系文末詞かと推想される。

岡野信子氏によれば、長門方面には、

「コリ サンセ (ねえあなた)」の優しい呼びかけがあるという。氏はこれを、

「これい、見なさいませ」であろう。

とされている。「サンセ」は、「見サンセ」からのものであろうか。もし、この「サンセ」を、単純に「しなさい」の意の「サンセ」ととることができたら、ここにもまた、動詞系の文末詞があることになる。「コリ サン」の言いかたもあるという。

「する」系のものの存立の全国的様相は、おおよそ以上のとおりでである。存否の必然については、今、なにほどのことも言うことができない。分布とは、まことにふしぎなものである。

第十一節 「ある」に関するもの?

岡田統夫氏の研究によるのに、三原市内に、「アリャン」という、文末詞ふうのものが見られる。

○アノ コナラ モー オーサカエ イッタ アリャン。

“あの子なら、もう大阪へ行ったわ。” (中女間)

○アリャ。アリャー キノー キタ アリャンデ。

“あら。あれはきのう来たよ。” (中女間)

などとある。「アリャン」が、上のことばに熟合して、

○アレナラ マエニ ミタリャン。

あれならまえに見たよ。 (小女間)

のような言いかたができてもいる。

ここに見られる「アリャン」は、「ある」動詞にかかわる「アリャンス」の「アリャン」であろうか。「あれは」の「アリャン」が考えられたりもするが、上の第二例のばあいには、主部が「アリャー」とあるので、「アリャンデ」の「アリャン」については、「アリャンス」が想像されやすくもある。

第十二節 結 語

動詞系文末詞とされるものの生成・活動は、かなり多面的である。個々のものには分布量のすくないものがあるとしても、動詞系文末詞のもの自体は、そうとうに多様に発生しているようである。探索すれば、なお、いくらかのものが見いだされもしようか。

文表現の末尾で、特定の収約作用を発揮する文末詞に、動詞出自のものがとりどりに見られる事実は、何を意味しようか。動詞という作用言をもって、文末特定の訴え分子を形成しようとするところには、文末特定表現法を、より躍動的なもの——訴えの効果の生き生きとしたもの——にしようとする意図が認められもしようか。こういう点では、動詞の文末詞化する、その動詞のしかるべきものの範囲が考えられないではない。

動詞系とはいいいながら、さきの「コイ」(来い)などでも考えたように、——

また、「ご覧」についても考えられるように、ものは、文系の文末詞とも言いうる。(短小ながら、「文表現」相当形でもある。)

第十二章 形容詞系の転成文末詞

形容詞の文末詞に転成せしめられていることは、きわめてまれである。章をたてて本題を論ずるのではあるが、言うところは寥少である。

しかし、ことがらの性質としては、「形容詞系の転成文末詞」とされるものも、また、一個独自の転成文末詞である。それゆえ、記述量の多少は別として、ここに、あえて本章をかかげる。

形容詞の文末詞と化せられることの稀少は、もっとものことではなからうか。形容詞は、いわゆる形容語であって、文表現中、なんらかの部分に密着する。言いかえれば、文表現の大局にかかわることがない。(あるいは、すくない。)このような機能者は、文中遊離性にとほしく、したがって、これは、文末詞化の可能性をにうことがすくない。

今の段階で、私が指摘しうる、形容詞系の転成文末詞は、下記にしるす程度のものである。

『五戸の方言』には、

マデナエ 「……とも」に当り「いいマデナエ」は「宣しいですとも」の意。「云ふ迄もない」か。これから類推されて他の例が生じたのであらうか。

(一)そだマデナエ (さうだとも)、(二)来るマデナエ (来るとも)

との記述が見られる。著者は、「マデナエ」をとりたてていられる。これに、「ない」形容詞がふくまれていようか。「マデナエ」は、文末詞化しているの見てよからう。単純な「ない」(ナエ)の指摘されるものではないけれども、いま、「ナエ」に関する複合形として「マデナエ」をとりたてることができる。それにしても、変わった言いかたができたものではある。

広島弁では、

○イマ ユータジャ ナイ。

今、言ったじゃないの。(中女→小女)

など「……………～じゃないノ。」の言いかたがよくおこなわれている。島嶼部でなど、上の「ナイ」が「ナー」ともなっている。

○ハー ヤメニショージャ ナー。

もうやめにしようじゃないか。(青男間)

などとある。こうなると最後の「ナー」の聞こえが、文末特定の訴えことばらしくもなってくる。つまりここに、「ない」形容詞の文末詞化が見られるというわけでもある。

愛媛県下の『伯方島誌』には、

きしゃん……………「きしゃない」(汚ない)「好かん」の意。(北浦)。

女性特に年配の女性の専用語で、何かというとすぐ文末にこれをつける。眉をひそめる時、陰口をたたく時に多く使われるが、親しみをもっていう場合にも使われる。ex「こがな スシ誰が作ったん、キシャン。」「どした面白い、キシャン」等。

との記事が見いだされる。この「きしゃん」は、「汚ない」からのものであろう。であれば、上の例文のようだと、「きしゃん」が文末詞化しつつあるとも見ることができようか。——「どした面白い」につづけられている「キシャン」は、もはや、単純に「汚ない」を意味するものではなく、ただの習慣のことばになっている。

形容詞の「ない」が登場しているのはおもしろい。これは、特定の形容詞である。

形容詞が文末詞化しても、形容詞のままの形では、訴えかける力ないしは指示力がよわかろう。「汚ない」の「キシャンイ」が、あるいは「好かん」との混交でか、「キシャン」になっているのは、訴え効果の強化結果とも見られる。

第十三章 形容動詞系の転成文末詞

民間にあっては、形容動詞も、まずは形容語として利用されがちである。

じっさい、形容詞の語彙を豊富にするために、と言ってもよいように、「～ナ」形容動詞連体形が、民間生活の中で、即座に創作されているのでもある。

このような形容動詞もまた、文末詞化の機縁のうすいものである。

今は、ただ一事例を指摘することができるばかりである。「イカナ」という、形容動詞系文末詞がある。「イカナ」は、「イカニ」と「イカナ」との二活用形を持った形容動詞と考えることができよう。瀬戸内海島嶼の大三島などでも、「イカナ のんき者でも」などの言いかたがなされている。『江田島町史』に、

しらぬイカナ（秋月） 知らない、の意。

語尾にほとんどイカナを付ける。（能美島にもある）

の記事が見える。「語尾にほとんど」つけられる「イカナ」は、文末詞化しているものと見てよからうか。

愛媛県下の南予の北域で聞いたものには、

○下ーツテ オアガリン ノ^アイカナ。

どうしてお上がりにならないんですかまあ。

○アガッタラ ヨサソーナ モノジャノニ イカナ。

上がればいいのにまあ。

などの言いかたがある。第二例の「イカナ」には、これの文末での特定遊離性が認められやすからう。「イカナ」は、もはや文末詞化しているとも見られる。第一例のばあいは、「イカナ」の前に「ノ^ア」があるので、「イカナ」は第二の文表現かのものであるけれども、事實は、「イカナ」が「ノ^ア」にすぐつづけて発言されるので、「イカナ」の文末詞的地位が明らかである。当地域では、「イカナ、オアガリ ヤー。」（まあ、お上がりなさいよ。——どうして上から

ないの?)などの言いかたもなされている。いわゆる発語としても、「イカナ」が用いられている。こういう「イカナ」は、文末用としても、自由に用いられているであろう。

第十四章 名詞系の転成文末詞

第一節 総説

名詞が転化して文末詞になるのは、むりからぬことと考えられる。名詞は、たとえば「はじめ!」「うそ!」など、単独で文表現たりうる。人は、単独の名詞を用いて、相手によびかけている。(——固有名詞の人名では、それがことに明らかである。)このような名詞は、文末におかれて、特定の訴えことばとされてもよいはずであろう。

ところで、じっさいには、多くの名詞が文末詞化されてはいない。「モノ」と「コト」との二語の文末詞化がひとり顕著である。このような事実は、何を意味するのであろうか。私には、その的確な説明がまだできない。

結果論的に言うならば、ほかならぬ「モノ」と「コト」とが、名詞系文末詞の二大王者になっているのは、いかにも首肯しうることである。抽象度の大である名詞でなくては、文末詞として用いることができないのではなからうか。「ワケ」「クライ」などの名詞系文末詞もできている。

第二節 「モノ」の属

一 はじめに

東京語では、

○だって、燃えないんです モノ。

○いくらよんでも、来ないんです モノ。

などの言いかたが、ふつうにおこなわれている。こういう「モノ」は、明白に

特定文末部であり、品詞としては文末詞である。

こういう「モノ」が、今日、すでに共通語分子にもなっている。男女にわたって、「モノ」文末詞がおこなわれていようか。子どもたちも、

○こりゃ、ぼくんだ モノ。

などと言っている。「です」や「だ」のしめくくりのもとに付加された「モノ」には、文末特定分子のさまが明瞭であろう。

じつは、共通語界以前の諸方言界に、ほぼ全般に、「モノ」文末詞の運用が見わたされる。(このため、共通語習慣の「モノ」、東京語流のことばづかいの「モノ」も、またひろがりやすかったろう。) 単独に「モノ」が用いられるとともに、「モンナ」「モンネ」などの複合形としても、「モノ」がよく用いられている。

「モノ」は「ムヌ」ともあり、「モン」「ムン」などもある。

さらには、「モン」が「オン」ともなっており、それが「オ」にもなっている。

「モノ」「モン」の「モ」もある。

変相の多いことは、すなわち「モノ」文末詞の通用のいちじるしさと広さとをよく示すものでもある。

方言上、「コト」の存立に比べれば、「モノ」の存立は、いちだんと強大である。これはどういう理由によるものであろうか。やはり結果論的な考えかたであるけれども、「モノ」のほうが、自己の心情を表現するのにより適当なものであったかと察せられる。

二 「モノ」文末詞の存立と活動

「モノ」文末詞は、全国にわたって、かなり活発な活動を見せている。九州地方には、なかんずく、「モノ」文末詞がよくおこなわれていようか。

九州を見る前に、南島方面を見る。

高橋俊三氏の教示によれば、与那国島比川方言では、

○ヒャクドルタバ ギンクガラ ムティ シティ インティティ ムティ
クバ ンサル モヌ。

百ドル束を銀行から持って来て、印を押して持ってくればよかったものを。

などの言いかたがされているという。

町博光氏の「与論島朝戸方言の文末詞」には、「名詞系転成文末詞」の「[munu] (「もの」)」が見え、

○mittan̄ tuimut̄jī ſiſant̄jī mututafū munu. (老男→筆者)

<とても 取り持ち 為らむと 思っていたる ムヌ。>

とても歓待しようと思っていたのに。

の実例があげられている。南島域に、[munu] の形で、「モノ」文末詞のおこなわれているのが注目される。私の聞きとめた与論島ことばに、

○ヤーカティ̄ キチ̄ クリユン̄ ムイ̄。

“うちへ来てくれますか。”

というのがある。こういう「ムイ」は、何であろうか。

奄美大島の古仁屋のことばには、

○ドーカ̄ タンミュン̄ ムン̄。

どうかたのみます。

というのがある。この「ムン」は、「モン」に相当するものであろう。

九州地方

九州地方には、「モン」がよくおこなわれている。大分県下でその勢力の弱小なのを除けば、他地域には、「モノ」文末詞がさかんであるとすることができる。——おそらく、全国でも、九州地方に、「モノ」文末詞の活動が、もっともさかんであろう。九州本土では、西がわに、よりさかんなものがある。

「モンナ」の複合形は、九州弁に接する人々の耳を、早くも打っているであろう。それほどに、これは、九州方言的なものである。（「何々です モンナ。」など、「モンナ」ことばは、よいことばとして、よくおこなわれていよう。）「モンネ」も、かなりよく聞かれる。

以下、県別に、状況をたずねて見る。

鹿児島県下では、「モン」「モンナ」「モンネ」などのおこなわれることのほかに、「モンニュ」というのが見いだされる。——他県下にはなさそうである。瀬戸口俊治氏によれば、薩摩半島東南部では、

○アホド^ン タノシ^ミ セーヂョ^{ッタ} モンニュ。

あれほどにたのしみにしていたのに。 (中女間)

などの言いかたがおこなわれているという。東正昭氏も、薩摩半島南辺の例、

○デズ コケ ノスツ イカン モンニュ。

大豆を、ここに載せちゃいけないのに。

などを教示せられた。県下に、「モン」の「ムン」もある。略形「モ」もある。「モネ」というのもある。

熊本県下は、「モノ」文末詞のおこなわれることが顕著である。

○ゴク ムカシントデス モン。

ごくむかしのですもの。

は、五家の荘での一例である。

○ソーユー イミデショー モン。

そういう意味でしょうよ。 (初老女→藤原)

は、天草での一例である。「モン」は、よいことばづかいかにもよくないことばづかいかにも出る。女性に比較的よく用いられるということがあろうか。(ただし、そのばあいは、どちらかといえば、品位のわるくはない言いかたになりがちか。)「モン」以前の「モノ」も、天草などで聞かれる。天草下島の牛深で、

○コガンジャンノ モノ。

“こうだもの。” (“こうであるはずじゃないか。”)

などとある。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には、

f………… キタ コタ ナカッチャモヌ

着た ことは ありませんでしたよ。

というのが見える。——「モヌ」とある。（「モヌ」は、「モノ」に等しいものか。あるいは、「モンネ」の「モネ」の、転じてこうなったりすることがあったか。）複合形文末詞では、「モンナ」のおこなわれることがはなはださかんである。県南の一例は、

○イーニッカデス モンナー。

言いにくいですものね。

である。県南には、「モンナイ」もある。県下の複合形に「モンノ」もあり、「モンネ」もある。別に、「モネ」というのも注意される。県南例では、

○アッテー ナカ モネ。

“だってないからね。”

などとある。渋谷多文氏は、熊本市域を南に出はなれた所のことは、

○ヌシャー ピアノ ヒッキッド モネ。

おまえはピアノをひけるだろうに。

などを教示され、「モネ」が、「のに」に相当することを強調された。なお、渋谷氏は、私との対談で、以下のように述べられた。

「「モネー」は、「ものに」だ。「モネー」と言ったばあい、「ネ」文末詞のように、相手にのしかかっていく気もちはない。ひとりごとの時にも「モネ」は出る。「モネ ナラン。」（ものにならん。）との言いかたもある。

「モネー」の「ネ」は、相手に訴えかけたり同意を求めたりする「ネ」とは全然ちがう。「モンネー」では、「ネ」をとりだすことができるが、「モネー」では、「ネ」をとりだすことができぬ。

「モネー」は「もの[↑]に」で、「いくらあんたがそう言ったって」との気もちのものである。

「モー ナカ モネ。」は、「もうないもの[↑]に（ものを）」であって、「い

くら言ってもしょうがないじゃないか。」との気もちのものである。’

『熊本方言の研究』には、

^{イマドキ}
今時、何ドントラスモネロ（文末、ものやら）

の文例が見られ、「ものやら」との説明が見られる。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には、

fイーエ　ホリャ　マタ　アルモニ

ははあ、　それは　また　あるんですもの、

とあって、「モニ」が見られる。これは、渋谷氏の言う「ものに」を思わせやすいものではないか。ともあれ、「モネ」形の文末詞は、県下にかなりよくおこなわれているかと思われる。私は、天草西岸で、「モネ」が男女によくおこなわれているのを聞いたことがある。

長崎県下もまた、「モノ」文末詞のさかんな所である。『肥前千々石町方言誌』の、

アロウモン　ありませうに、

など、「モン」が「あろう」につづくありさまであるから、「モン」の文末詞性は明らかであろう。こういう用法の慣熟も見られるほどに、「モノ」文末詞はよくおこなわれているというわけである。「モン」は「モーン」ともあり、西彼杵半島の、

○ヤート　ヒトカカエデス　モーン。

やっどひとかかえですもの。

など、その表現に、独特の訴え気分が見られる。——おさえつけるような気味はすくなかろう。肥前では、こうした長音化の音調が、一特色となつてはいまいか。県下に「ムン」もある。『全国方言資料』第9巻の「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」の条には、

fコエカ　ナカジャモヌ

親しい　間柄ですもの。

というのが見える。複合形では、「モンナ」がよくおこなわれている。

○フ^フジュ^ーーカッタ モン^ナナー。

不自由だったもんね。

は、五島での一例である。『嶋原半嶋方言の研究』には、「ムンナ」が見える。他の複合形には、「モンネ」「モンノ」「モンノマイ」がある。最後に、本県下でもまた、略形「モ」を指摘することができる。長崎地方の一例は、

○ワ^ワタ^タシー ソトカラ ミ^ミタ モー。

“わたし外から見たもの。” (青女→中女)

である。『全国方言資料』第9巻の「長崎県下県郡厳原町豆敷」の条には、「モ」相当の「ム」が見える。

fソ^ソン イチ²⁾ゴ^ゴー トルドコ^コジャ ネット^ネジャム

その いちごを 取る²⁾どころでは ない²⁾んですよ。 2) {toe}

などとある。

佐賀県下でも、「モン」がさかんであり、「モンナ」「モンネ」もよくおこなわれている。「モンノ」「モンノモ」もある。

○役^役場^場へも××へも イ^イタ^タテ キ^キタ モ^モーン。

役場へも××へも行ってきたもの。(自分のたちばを告げる。)

(中女 電話)

は、県南での「モーン」例である。本県下での略形「モ」は、どの程度におこなわれているのであろう。

福岡県下に、また、「モン」がさかんであり、「モンナ」「モンネ」もよくおこなわれている。「モンノ」もあり、筑後内には、「モンノモ」もある。略形「モ」もまた、県の東西に見いだされる。

○ジュ^{ジュ}ー^ーネン^ナ イ^イキ^キナ^ナス^スド^ドコ^コヤ ナ^ナカ^カロ モ。

“十年は行かれるところではないでしょうもの。” (“十年どころではない、もっとそれ以上でしょう、と反駁している。”) ”

(老女→老男)

は、県東部内での一例である。

大分県下では、「モン」がよわい。それだけ、当地域は、いわば非九州的にもなっているということなのか。この状態が、中国四国地方につづく。とはいうものの、本県下に、「モンナ」なども見いだされる。『全国方言資料』第6巻の「大分県大分郡西庄内村」の条には、

f コーユー コター アリマシ ユムモ マー

こういうことは ありませんよ まあ。

というものもある。

宮崎県下となると、こちらは、大分県下とはことかわって、「モノ」文末詞のさかんな所である。「モン」がよくおこなわれており、中部西奥では、

○シヨクリンナ センカッタデス モン。

植林はしなかったですもの。 (中女→藤原)

などがある。この地域で私は、

○キレトッ チューモノ。

“ごはんがちょうどなくなっているというもの。”(食堂でのこと ことわることば) (老女→藤原)

などというのも聞いている。識者は、この文例のカードに、注して、“キレトッチューモノ→これは老女でよく聞かれる。若い者はキレトッチューモンとンを使う。”と教示せられた。県下に、「モン」の「ムン」もよくおこなわれているようである。複合形では、「モンナ」「モンノ」があり、「ムンナ」「ムンヨ」「ムンカイ」などもある。

○オリャ シエン モンノー。

わしはしないものね。(弁明)

は、県中部の「モンノ」の一例である。

中国地方

中国地方には、「モノ」文末詞に関して言うべきことが、さして多くない。

一帯には、「モン」がよくおこなわれている。

山陽地方一般でおこなわれている「モン」文末詞の一例は、

○キョーンジャ モン。

来てるんだもの。(説明)

である。山陽地方では、「モノ」のおこなわれることが比較的すくない。

山陰出雲地方には、「モン」「モノ」がおこなわれるとともに、「モ」もおこなわれている。出雲奥での「モ」の一例は、

○おまえが 早う イカ^ンダ モー。

おまえが早く行かないからよ。

である。隠岐には、「モン」「モノ」はあって、「モ」はなきさうである。

鳥取県下には、「モン」がよくおこなわれているか。『鳥取県方言辞典 後編』には、「ものお」「もんお」も見える。

四国地方

四国地方の状況は、大約、中国地方のに近からう。

愛媛県下に、「モン」がよくおこなわれている。

○イン^ゲー。ワ^{シャ}ー ス^リャー セン モン。

いいえ。わたしはしやしないもの。

は、県南辺での一例である。「モンナー」の複合形もある。

高知県下には、「モン」「モノ」のおこなわれる 中 に あ っ て、「モ」も見られる。これは、四国での一特色になっている。土居重俊氏は『土佐言葉』で、

モ——軽い詠歎をあらわすが、軽く言い放ったり、窮状をうったえたりもする。土佐で広く使用されるが、幡多郡ではモンを専ら使用する。

アタ^{シャ}ー ヒトリ^デ イクモ (わたくしはひとりで行くさ) (以

下例略)

としるしてられる。『土佐方言集』には、「そ^〇と^〇知^〇ったら心配せんものを」

というも見える。

徳島県下には、「モン」がよくおこなわれている。

○ナンジャ セー ヘン モン。

なんにもしやしないもの。(抗弁)

などとある。複合形の「モンナ」も見られる。

香川県下にも「モン」がおこなわれており、「モノ」もある。

近畿地方

近畿地方にも、「モノ」に関して言うべきことが、さして多くない。

兵庫県下では、「モノ」よりも「モン」がおこなわれており、淡路例だと、

○ユーベワ オーゼ キマシタ モン。

ゆうべはおおぜい来ましたものね。 (老女→藤原)

などがある。県下に「モンナ」もある。淡路の東南部では、

○カネモッチャ モナー。

金持ちだものねえ。

などの「モナ」を聞いたことがある。

大阪府下にも「モン」がある。

和歌山県下にも「モン」がよくおこなわれており、「モノ」もある。県南部寄りでの「モン」の一例は、

○オマイ コナンダ モン。

あんたが来なかったからよ。

である。『和歌山県方言』に、「ナイモテ ……ですもの」とあるのは、どういふものなのであろうか。

三重県下にやはり、「モン」がよくおこなわれている。「モンナ」もある。

○イテ クルヨッテ、タノ モンナー。

行ってくるから、たのむね。

は、志摩半島東岸での「モンナ」の一例である。志摩半島の北岸で聞いたものには、

○マッタ クルヨツテ、タノッ モンデ。

また来るから、たのむよ。

との言いかたがある。どういう「モンデ」であろうか。

奈良県下では、南部の吉野郡下に、「モン」「モノ」が見られる。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条には、

*m*マー エラカッタモン マ

たいへんだった。

とある。「モンマ」が目される。

京都府下にも「モン」があり、「モンナ」もある。

○ハナレテル モンナー。

はなれてるものねえ。 (青女→若母)

は、京都弁での一例である。

滋賀県下にも「モン」がある。

中部地方

福井県下には「モン」がよく見られ、かつ「モ」も見られる。愛宕八郎康隆氏調査の敦賀市域例は、

○イツモ カーモヤ モー。

(主人がグズグズ言うのは) 何時もかもですもの。

である。早く、『大野郡口語法並音韻調査』の中にも、

ワルカラズモ 悪いだろう

などの例が見えている。同書には、「私ワ少シモ知ランモノヲ (私わ少しも知らないだものを)」との言いかたも見える。

石川県下にも、「モン」「モノ」がある。「モ」は見がたいようである。

富山県下にも、主として「モン」がおこなわれている。

新潟県下には、「モン」「モノ」があって、かつ、「ムン」も見える。『全国方言資料』第2巻の「新潟県糸魚川市砂場」の条には、

m………… チッター ヨナベモ センナム …………… ムンダムン¹⁾
 少しは よなべも しなければならない ものだもの。

1) はっきりとは聞き取れない。[sen:am:dam]と聞こえる。

とある。県下に、「モネー」も聞かれる。私が県南で得た例は、

○雪が オーイ モネー。

雪が多いものね。(このへんは) (中女→藤原)

などである。県下に、「モンガ」複合形もあるか。佐渡弁には、「モンシ」もあるのか。

○セカセル モン オラン モンシ。

“せいをつけるものがいないものだから。”

などと言われる「モンシ」は、文末詞と見てよいのであろう。「シ」は、「モシ」の「シ」か。

岐阜県下では、「モン」のよくおこなわれる中に、「モ」もまたよくおこなわれている。『北飛驒の方言』には、「コワイモ コワイんだもの。」などとあり、『飛驒のことば』には、

—あらずも (句) ①未来において「何々であろうか」と推量することば。—あろうよ。—あるだろう。(どうせそんな事で—。) ②「何々であるに違いない」と推量しつつ断定することば。(以下略)

とある。私が、高山で聞いた一例は、「ミンナ ユー モ。」(みんな言うよ。)である。美濃にも「モ」がよくおこなわれており、

○イヤヤ モー。

“いやだ。”

○イマ イッタヤロ モ。

“今、言ったでしょう!”

などである。じれったそうに言う「モ」が多い。それにしても、「言ッタヤロ」を受けての「モ」は、「モノ」文末詞の用法自在を思わせる。本県下に、「モナ」もあり、「モヤ」もある。

○シンバイシタケド、コレデ モー デマイ モナー。

心配したけど、これでもう出ないだろうね？（熱は）

○ソージャ モヤ。

そうだもんね。

は、飛驒のものである。

愛知県下では、「モン」「モノ」が見られて、「モ」は、さほど見られないようである。（「モン」の「モ」は別である。）知多半島で私が聞いた「モノ」例は、

○フルヅラ モナー。

“降るだろう。”

などである。——“あまりよいことばではない。”とのことであつた。渥美半島で聞いたものには、

○キノー スンジャッタ モンノ。

きのうすんでしまったものね。（中女→中男）

などの「モンノ」複合形がある。

静岡県下では、「モン」が一般的のようである。

長野県下の実情はどうか。『全国方言資料』第2巻の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条や、同巻「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条には、「モノ」が見える。

山梨県下にも「モノ」があり、かつ「モン」もある。

関東地方

関東地方は、「モノ」形の文末詞のよくおこなわれる所である。東京語本位の共通語には、「モノ」文末詞ができていゝ。——主としては女性語になって

いよう。

関東地方にも「モノ カ」「モン カ」がある。このさい、「おまえにできるものか。」などでは、一挙に「モノカ」を（したがって「モンカ」も）文末詞ととってよいかとも思われる。

神奈川県・東京都・埼玉県には、「モノ」がよくおこなわれている。ところで、『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村神着」の条には、

f………… アー ウシガ シーノキオ クーモンデカト オモッ
「ああ 牛が 椎の木を 食べるものだろうか」と 思った
タムン

ものですよ。

とあって、「ムン」が見られる。『くろしおの子（青ガ島の生活と記録）』には、
あが汗ながしてかせ（つくったものだもの）ごうもんどうも。

との言いかたが見え、これには「モ」文末詞が認められそうである。

千葉県下には、「モノ」「モン」がある。「モンネ」も聞かれる。

群馬県下では、むしろ「モン」がさかんか。「モノ」もある。

○マンナカガ ババーダ モン。

まん中がばばあだもの。 （小男間）

○ワリー コトバツカリ シルンダ モノ。

わるいことばかりするんだもの。 （中学生女→弟幼男）

などとある。

栃木県下・茨城県下には、「モノ」がよくおこなわれていて、かつ「モン」もおこなわれている。「モノネ」「モンネ」もある。

東北地方

東北地方には、「モノ」の「オン」のおこなわれることがいちじるしい。なぜに東北地方では、「モノ」から、とくに「オン」形（「オ」も）ができたのであ

ろうか。[m]子音を脱落させる発音傾向が東北地方につよかったのだとしたら、これは、東北地方が、そうした発音基底を持っているのだとされよう。風土と発音傾向とのつながりが想定される。

福島県下に、「モノ」「モン」があって、かつ、「オン」がおこなわれている。「モノ」の例は、「マンダマンダ サカリ[i]サ ハイッタバッカリ[i]デスモノ。」(まだまだ人生のさかりにはいったばかりですもの。)などであり、「モン」の例は、「トーチャン アッマ ヤンナ モン。」(父ちゃんはあるやりやらないもの。)などである。「オン」は、会津によくおこなわれているのか。

○ケンケンチ[i]ガイダッタベ オン。

県々ちがいだっだろうよ。

などとある。——「〜ベ」の推量表現を受けて「オン」のはたらくばあいが見目される。

「オン」の形になってからの、文末詞としての安定度は、言うまでもなく、大きい。人は、「オン」にすがって、きわめて自由に、心懐の表現にしたがってしよう。

宮城県下では、「モノ」「モン」もおこなわれているけれども、「オン」のおこなわれることがことにさかんである。したがってまた、とも言おうか、「オン」からの略形「オ」もまた、ここによくおこなわれている。

○ニ[i]ワ エ[e]ー トロ アッタ オン。

庭のいい所があったんだがなあ！(惜しいことをしたな。)

(老男→藤原)

は、松島湾岸での「オン」例である。(この発言は、まさに感嘆的であった。)仙台弁などの「ンダ オン。」は、人に、「そうだよ。」と言いかえられている。「オン」は「よ」なみである。慣熟した「オン」文末詞が見られる。県北での「ホンデ ナエンデス オン。」(そうではないんです。)など、「〜デス オン」は、「〜ですもの」とは言いかえかねるものになっている。それほどに、「オン」は、「モノ」からははなれて、一個新生の文末詞になっている。県南で

の「オン」の一例は、

○オラ イガンニャ オーン。

私は行けないわ。

である。「オーン」などと発音されていて、「オン」の使用のいかにも自由なさまが見られ、かつ、「わ」と言いかえられてよいありさまが注目される。「オ」の使用のさかんなさまは、『仙台の方言』の中でも、それをよく見ることができる。

「あのうち、おやぢもががもかばねやみだお。びんぼすんのあたりまいっ
しゃ」(あの家は夫婦ともなまけ者だもの。貧乏するのは当然さ)

などの記事が見られる。「お」が「もの」と言いかえられている。同書では、「お」が「よ」「わ」とも言いかえられている。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、

*m*ヤァ トマツテワカンネオン ホダコト ステランネォ

やあ 泊ってはいられないよ。 そんなこと してはいられないよ。

というのが見える。「オ」は、よわめにも発音される。宮城県下の複合形の文末詞には、まず「モンナ」「モンネ」などがある。(福島県下にも「モンナ」などが見られる。) つぎに、「オンナ」「オンネ」がある。

○キョーワ サンメー オンネー。

きょうはさむいことね。

は、石巻弁での「オンネ」の一例である。「オネ」もあり、「オネス」もある。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、「オナー」(ものねえ)も見える。「オンヤ」「オヤ」複合形もある。

山形県下にも、「モノ」「モン」のほか、「オン」もある。「オ」もある。「オン」「オ」のおこなわれかたは、宮城県下のおよぶものではあるまい。ところで、『全国方言資料』第7巻の「山形県東田川郡朝日村大鳥」の条には、

m………… フダリ ペロット イネェモンダム

2人 きれいさっぱり いなかつたもの。

というのもあって、「ム」が見える。本県下の複合形には、「モンナ」「モナ」「オンナ」などがある。

つぎに秋田県下では、「モノ」「オノ」「モン」「オン」「オ」が見られる。「オノ」に関しては、『秋田方言』に、

べおの だらうさ。だらうもの。

との記事を見ることができる。「べおの」の言いかたは、一つの熟したもののようである。さて、この「おの」は、「もの」から単純にできた形なのかどうか。[mo]の[m]は落として[no]の[n]は落としていないありさまである。本県下に「オン」はよくおこなわれている。「オ」もまたそうとうおこなわれているようである。本県下の複合形には、「モノナ」「モナ」「オンナ」「オナ」「オナッス」などがある。渡辺喜恵子氏の「馬瀬川」<秋田県能代北>（『文芸春秋』昭和34年9月）には、「母のいうことに間違いはながんすだォなっし。」との言いかたが見える。『秋田むがしこ』には、

そえて、家^(に)さ^{なんどと}行^なて何事も無くて来た。て云^(云つたとき)た^なでも^の。

など、「でもの」の言いかたが見える。

岩手県下には、「モノ」のほかに、「モン」「オン」「オ」がおこなわれている。地域によっての変差は、もとよりのことであろう。いずれにしても、「オ」などは、「よ」などと言いかえられるものになっている。県下に「モ」もあるのか。『岩手方言の語彙（旧伊達領）』には、

おらやんだモ（私はいやだよ、もの）

などの記事が見える。本県下の複合形は、「モンナ」「モナ」「モナッス」「モネ」「オナ」「オンヤ」などである。

○アノ ヒ[i]トア ホニ[i] シ[i]ンセツ[ü]ナ ヒ[i]トデ コザリ[i]マス[ü] モナッス[ü]。

あの人はほんとに親切な人でございますものね。

は、県北での「モナッス」例である。私はなお、県北の北寄りの地で、

○アソ^コサ イッテモ ダレモ イナガ^ンス[ü] オンヤ^ー。

あそこに行っても、だれも“いなかったわ”。

との言いかたを聞いた。

青森県下にも、「オン」がさかんである。私が県東部の「南部」域の南辺を調査した時は、「オン」の聞かれにくいことが注意されたが、『五戸の方言』には、「オン」に関する、

「…ものを」「…よ」に当る。後に文章を接続する場合ではない。

との記事が見える。「南部」地方にも、やはり「オン」も広く見られるのであろうか。南辺で私も、

○ツ[ü]カワナイン^ダ オン。

(あの人はこのことばを)つかわないんだもの。(中女)

などの例は聞いている。津軽弁にさかんな「オン」は、

○タブ[ü]ン ソン^ダ オン。

“多分そうであろう。”“多分そうだよ。”

○タブ[ü]ン サンジュ[ü]ーハチ[i]^ダ オン。

たぶん三十八歳“だろよう”。

などのように用いられている。「オン」が「オーン」と発音されたりもしている。一津軽人は、私に教示して、「ソシタ ドコサダバ イガネ オン。(そういう所へなら行かないよ。)」などの「オン」を、やさしさをそえるものとした。本県下の東西に、「モノ」「モン」もおこなわれている。本県下の複合形には、「モナ」「オンノ」「オンネシ[i]」「オンセ」「ツ[ü] オン」(とさ)「ツ[ü] オンネシ[i]」などがある。

○ソン^ダ オンネシ[↑][i]。

“そうですね。”

は、「オンネシ」の一例である。

奥羽での「オ」「オン」は、ときに、人が、「ヲ」「ヲン」とも聞いているようである。「オ」「オン」は、よわめに発言されがちでもあるので、そのような聞こえもおこってくるのであろうか。

北海道地方

この地方にも「モノ」「モン」がある。「ヒトリッコダ モン。」(ひとりっ子だもの。)など、老若の人が「モン」をつかってもいる。小野米一氏ほかの、北海道西辺・西北辺、その他の地域についての調査報告には、「モノ」の「モ」も見られる。小野氏編『北海道漁村方言の研究』(渡島半島南茅部)には、

○ンヂガツノ ハツィカカラダ モ。

昆布をとる時期は、7月20日からだもの。

などとある。なお、小野氏ほかの諸報告には、「モノネ」「モンネ」「モナ」「モネ」などの複合形も見られる。

三 おわりに

全国諸地域に、「モノ」系の文末詞のおこなわれることは、以上のとおりである。変化形は、ほとんど、ありうるかぎりのものができているとも概括することができよう。

用法上では、「何々だもの。」との意を示すととってよいものが多からう。そのさいに、単純な説明表白のこともあるが、ややつよい心理表現のこともあり、また、抗弁表現のこともある。「モノ」形が「オン」や「オ」にもなってきた、しかもその発言がよわめのもの、小さめのものにもなってくると、そのぼあいの表現効果は、また別趣である。

「モノ」は、方言界で、諸変相を示し、そのおのおのには、勢力の大小が認められる。これらには、今後の変転もさまざまであろう。そうではあるが、一方では、共通語に、「モノ」文末詞の通用がいちじるしい。これは、にわかにはおとろえることのないものであろう。考えてみれば、「何々ですもの。」といったような表現法は、特性の明らかな、独自のものである。人々は、表現法の利用と開拓とに、かならず敏であろう。

第三節 「コト」の属

一 はじめに

「モノ」とともに「コト」が問題になることは、すでに総説で述べた。両者は、対応して、しかも対立する、関係の深い二語である。

「モノ」文末詞の通用にくらべると、「コト」文末詞の通用は、比較的よい。東京語本位の共通語では、「マー キレイデス コト。」(まあ、きれいですこと!)などと、女性に「コト」の用いられることは、「モノ」の用いられるのにおとらず、さかんでもあろうか。もっとも、今日は、女性の若年層には、「コト」文末詞の使用がいちじるしくはないようである。「コト」とむすぶ表現は、やや、仰々しいものにもなっているのか。

方言上での「コト」文末詞の通行としたら、全国中、九州地方と中部地方とが、わけても問題の地域と見られるようである。

二 「コト」文末詞の存立と活動

九州地方では、各県下に、問題の事例が見られる。

鹿児島県下には、「コト」の「コッ」「コー」「コ」がおこなわれている。薩摩半島東南部例は、「ヨガ コッ。」「ヨガ コー。」「ヨガ コ。」(よいこと!)などである。「コト」文末詞が「コッ」となるのは、九州南部においてしぜんであり、「コー」のおこるのもしぜんである。瀬戸口俊治氏は、

○ガツツイ ヒヤガ コー。

ほんとうにさむいわねえ。(中女間)

などについて、女性だけにおこなわれ、かなり上品なものであると言われる。大隅半島東岸の「コッ」例は、「コイドンガ ペンキョオ スイ コッ。」(“この人がまた勉強をすること。”)などである。「コッ」表現の文の品位は、やや

低いものにもなるらしい。九州南部に、あいづちことばの「ホンナコテ。」「ホンナコテ。」（ほんとにねえ。）のおこなわれることがいちじるしい。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条には、

*m*ホンノゴテ

ほんとにね。

が見える。「コテ」が「ゴテ」とある。「コテ」は「ことに」であろうか。（「ことよ」も考えられなくはないのか。）「コテ」が文末詞ともなっている。上の「宮之浦」の条にも、

f………… ソエデモ モッテ イカンコテ

それでも 持って 行きませんかい。

というのが見え、『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条にも、

*f*オイ ジャッタコテ

ああ そうだったでしょう。

というのが見える。「コテ」が「コデー」ともある。薩摩半島東南部例は、

○カマワ ソゲ アイ コデー。

鎌はそこにあるじゃないの。 （老女→中女）

である。（瀬戸口俊治氏教示）「コテ」のむすびは全表現を名詞構文にする、とも言えなくはない。そのようなむすびの「コテ」が、あるいは「コト」などが、当の文表現を、独特の、つよい訴えのものにしている。

熊本県下には、「コテ」文末詞が見いだされる。県南八代市域での一例は、「イカジャ コテ。」（行かなくちゃ。）である。瀬戸口俊治氏教示の、人吉市方面のことばには、

○ヤメトッモスモンツテ ヌワンコテ。ワー。

「止めてます」と言えよ、おまえも。 （老男→妻）

というのがある。「ホンナコテ。」との言いかたも県下にあり、「ホンナコツ。」もある。「コテ」と「コツ」とは、むろんちがう。「コツ」は「こと」のまままで

あろう。

長崎県下にも「コツ」があり、「コテ」その他がある。特定の「ホンナコツ。」もおこなわれている。五島列島で聞いた「ほんとに！」は、「ホンナコツ。」である。五島で、「オトロヒカッタ ヨー。ホンナコチー。」(恐ろしかったよ。ほんとに。),「ホンナコティ。」(ほんとねえ!)も聞いている。「コチー」は「とに」であろうか。「コティ」も「コチー」におなじものでであろうか。林田明氏の「長崎市方言の文末助詞」〈ご手稿〉には、「フットカバーイ。フンナコチー。(大きいね、ほんとに)」というのが見える。『全国方言資料』第9巻の「長崎県上県郡上対島町鰐浦」の条には、

*m*ウン ソラ ソルジャコト
うん、それは そうだった。

とあり、明らかな「コト」文末詞が見える。壱岐島には、「コテ」があり、なお、『続壱岐島方言集』には、「ソーコタ、ソリャ[○]鯛コタ。」などの実例が見える。本書の著者は、「コタ」について「言ふまでもないの意。『とも』に当る。」と述べていられる。

佐賀県下では、「ホンナコト。」(そうだ! 応答)などあり、岡野氏教示の、唐津市神集島のものには、「フンナ コーツ。」「ホンナ ゴツ。」がある。「ゴツ」はどういうものなのか。——「コ」の「ゴ」なのかどうか。県中部の言いかたにも、

○ハヨー セジャー ゴター。
“早くしないとなあ。”

というのがあって、これには、「コテ」に近いらしい「ゴター」文末詞が見られる。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県東松浦郡有浦村」の条には、

*f*アリガー アッタコター
あれが ありましたよ。

とあって、これには、「コター」文末詞が明らかなようである。私が唐津市の城外弁として聞き得た、

○キョーワ イマカル, イッチョー フレー イタチ キテ ネン コテ。

きょうは今から, ひとつ, ふろに行ってきた寝ん コテ。

の「コテ」は, 文末詞的用法のものなのかどうか。

福岡県筑後の『浮羽方言集』(『字枳波』第三号)には,

こて ねばならぬの意(行かぢやこて一行きなさいとそれなら一つ行かう
かとの二意ある)

とある。『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡善導寺町」の条にも,

m………… モー カエラジャコテ

もう 帰らなければなりません,

などとある。筑前にも「コテ」文末詞があって, その東部には,

○ハーヨー ダサザ コッテ。

“早く(手紙を)出さなくちゃ。”

(「コテ」もおこなわれている。)

などの例が見られる。『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条には,

fエー ヨゴザッシェナゴテ

ええ よろしゅうございますとも。

などが見え, 「ゴテ」が注目される。

九州東域の宮崎県下には, 「コツ」「コーツ」文末詞がおこなわれており, 「コチ」もある。県中部の「ハヨ イカン コチ。」は, 「早く行かなくちゃ。」である。県下に「コタ」もおこなわれている。県中部の「イー コタ。」は, 「いいですとも。〈快い承知の弁〉」である。(橋口巳俊氏教示)

大分県下にも「コーツ」形があるが, 文末詞になった「コーツ」は, 見いだしがたいのではないか。池田勘氏によるのに, 県下に,

○スンヂ シマウ コト。(あがり調子)

すんでしまうじゃないの。(小女間)

などの言いかたが見いだされるようである。反駁法であるという。県北, 宇佐

郡のことばには、

○クルラ イー コト。

“(私に) くれればいいじゃないの?”

との言いかたがあるよしである。

中国地方一般には、「コト」文末詞の慣用がない。いくらかの注意すべきものをかかってみよう。長門西北岸のことばづかいには、

○ハー エー コト。

ええ、よろしいよ。(確信を持った受けあい) (中女間)

などがあるという。(神部宏泰氏教示)

周防東部のことばには、「イカン コト。」(“行くな。”“<すこし敬意>”)などがある。「コトイネー」の複合形もある。

つぎに、鳥根県下に注目すべきものがある。西谷登七郎氏の「郷土方言小識(鳥根県那賀郡下府村)」(『方言』第二卷第八号)には、

自己の見聞を他人に伝へるに多くデ、コトイ(ノウ)を文末に附ける。――

但しコトイ(ノウ)は同輩に限る。

△降[△]ツテ来[△]タ[△]コトイ[△]([△]ノウ)。

との記事が見える。私が出雲で聞いたことばづかいには、

○チント コゲナ コトガ アッタ コトヨ。

なんとこんなことがあったよ。

がある。これに対する返事は、「ふうん、ソゲ カー。」(ふうん、そうか。)であった。『全国方言資料』第8巻の「鳥根県周吉郡中村伊後」の条には、

m アー クワー コター (トテモ)

ああ 食べるものか とても(そんなには)。

というのが見える。――隠岐島後のことである。神部宏泰氏も、島後の、

○ムカジワ ゴザン ジョー コター。

昔はありましようことか。(ありません) (老女)

を教示せられた。「コター」は反語法をささえるものになっている。島後に、「コト」文末詞もある。神部氏教示例は、

○デントーダエ ナンダエ ゴザンショー コト。

電燈とかなんとかありましようことか。(ありません) (老女)

である。「コター」は「ことは」であろうか。

四国にも、一般には、「コト」文末詞の慣用が、ないありさまである。

ところで、『土佐方言集』には、「おーの 美しいこと」「まー、このおすしのえゝこと」などの文例が見える。こうした「コト」の用法は、方言の地盤にも、しぜんにおこっているのか。

『讃岐方言之研究』にも、香川県東部の「ホンマニ寒イコト」が見える。

感嘆の意で「コト」又「コツ」ともなる。女子。

とある。

近畿地方一般にも、「コト」文末詞は、さほどおこなわれていないであろう。ところで、但馬南部では、私は、

○ホン キライジャ コトイ。

ほんとにきらいだよ。

などを聞きとめている。——「コトイナ」「コトイネ」「コトイヤ」などとも言われている。

「スマン コト。」(すみませんね。)などの言いかたは、近畿的なものであろうか。(女性に見られがちなものであるか。)

近畿に、「トコト」があつて注目される。(——これは、北陸道によく見られるものである。)山本俊治氏の「大阪方言における文末助詞(池田市のことばを中心として)」(『方言研究年報』第一巻)には、

○コッチャ トコト。

こっちだってば。(老・女→猫・餌をあたえる。)

との言いかたが見える。“主として五十代以上のひとたちによってつかわれる。”という。

ついで、兵庫県下の播磨にも、「トコト」が見える。和田実氏の「兵庫県高砂市伊保町」（『日本方言の記述的研究』）には、

トコ・トコトイ 　　ってば、　男：チャッチャト歩ケトコ；　分ットル
トコトイ。

との記述が見える。——「トコトイ」があり、略形「トコ」がある。原朗氏の「播州方言の助詞」（『国文論叢』第四号）にも、「ワシガチャントシタルトコトイ。」「チャッチャト歩ケトコ（て言えばさ）」が見える。

一方、滋賀県下にも、「トコト」があり、これはもはや、北陸のものとのつづきがらのよさを見せている。湖西の例は、「ツヤ トコト。」（そうなの。）などである。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県犬上郡多賀町萱原」の条には、

f コーテ　キテ　アゲトクレタ　　ア　ホラ　ウレシーコト
　　買って　きて　やってくださった。　ああ　それは　うれしいこと。

というのが見える。

近畿の、滋賀県下からはかけはなれた大阪府・兵庫県の「トコト」分布を見るのに、この種のもは、もと、近畿地方に、より広く分布してもいたろうかと察せられる。

中部地方は、北陸が問題の地域とされる。滋賀県北につづいて、若狭から越中にかけてが、「トコト」系の文末詞をよく示すからである。

「トコ」が「とこそ」でもあったら、これは、「コト」文末詞の論題ではなくなる。が、「トコ」はおそらく「トコト」からのものであろう。

「トコト」は、どういふできのものであろうか。「ということ」がもとなのではないか。さきの原氏の解説に見られる「て言えばさ」が注目される。馬場宏氏の「木郎方言考（其の二）」（『国語方言』第四号）には、

テコト　　行った　テコト

トコト 行った トコト

が見られる。「テコト」にならべられる「トコト」は、やはり「ということ」からのものである。『普通語対照金沢方言集』には、

●●●とこと (といふことだ) ●●●ですよ
ノ略転ナラン

との記述が見える。愛宕八郎康隆氏教示の能登半島東北端部での事例には、

○ホンナガヤ ティコト。

そうなんですよ。

というのがある。「ティ」にも、「と言う」が感得されやすからう。

さて、「トコト」の意味機能は、どのように整理して受けとることができようか。近畿地方のと北陸地方のとを通観するのに、「トコト」は、まず、つよい肯定を意味するものとされる。(かるい応諾に用いられるばあいもある。)自己の意をつよく表明するのに、「トコト」が用いられる。そのいきおいのつよいばあい、東京弁の「テバ」(「と言えば」)に等しいものにもなる。命令・勸奨の表現にも、「トコト」が用いられる。さては否定表現にも用いられる。問いの表現に用いられることはすくないのか。

以下に、「トコト」系のものの分布を見る。福井県若狭では、「イーイェー、ナツタ コト。」(いいえ、どういたしまして。)などの「コト」も見られ、かつ、「トコト」が見られる。永江秀雄氏は、若狭中部の「トコト」に関して、

「そりやトコト」は「そうであるとも!」、又は、「そうだとしたら(そうなんだ)!」「早う寝えトコト」は「早く寝よと言ったら!」の意味に用いています。トコトイナ!トコトイヤーはいずれも念を入れた言い方ですが、前者は自分以上の相手に後者は同等以下に対して用いるのが普通です。

と教示せられた。氏はまた、「こんなことしょうトコタ(こんなことをしようとは!)」などの「トコタ」も教示せられた。“トコタは全く心外であるとの気持ちを表わす時に用い更に余情を添えてトコターナー(トコトはナー……?)とも言われますが、いずれも好ましくない事実について申します。”という。

——「トコタ」は「トコトは」であろう。

福井ことばでの「トコト」例は、「ハヨ ゴザイ トコト。」（早く来なさいってば。）などである。「ハヨ ネヨ トコト。」は「早く寝るのだよ。」である。

石川県下は、福井県下とならんで、「トコト」のさかんな所である。加賀の一例は、

○シャンジャ トコト。

そうだよそうだよ。 （中女→中男）

であり、能登の一例は、

○タベマッシュェー トコト。

おたべなさいなねえ。（西瓜をしきりにすすめてくださる。）

（老女→藤原ら）

である。「トコトイネ」と言われることも多い。「ワタ シャ いま エキマエ ニ オル トコトイネ。」（私は今駅前におるのよ。 中女 電話）は、大聖寺駅前の旅館で聞きとめたものである。「トコトニャー」もある。県下に、「トコト」とならんで「トコ」もよくおこなわれている。「トコ」は「トコト」の略形であろう。能登半島西岸で聞いた、「ソーヤ トコ。」「ソーヤ トコト。」については、人々が、“品の上では区別できぬ。”と言っていた。“「トコト」は肯定をよくあらわす。”とも言っていた。「トコ」「トコト」は、中年以上の男女にかわれるという。（若い人は、「ソーヤ ソヤ。（そうだそうだ。そうよそうよ。）」のように言いがちか。）「トコ」は「トコト」よりも、いくらかはかるいものかもしれない。「ナカッタ トコ。」は、単純に「なかつたよ。」のようである。「トコゾ」などもある。能登で聞いた「オマイ イカン トコゾ。」は、「おまえは行ってはならんぞ。」である。（あるいは、これは、「……とおこうゾ。」というものか。）石川県下に「コト」文末詞も見えなくはない。

富山県下にも、石川県下でのほどではないけれども、「トコト」がおこなわれている。『富山県方言』にも、「来るとこと（今往きますよ）」とある。伏木港

で聞いた一例は、「オモイデシ トコト。」(思いださないよ。)である。——(「トコト」は、若い衆になると、あんまりつかわぬような気がする。”とのことである。)富山市近郷での一例は、

○カラダ ツヅイテ エー トコト。

よくまあ、からだがつづいていいこと!

である。富山県下では、主として西部寄りに「トコト」がおこなわれているか。——いくらかの「トコ」のおこなわれるのも、また、同様のようである。富山県下では、別に、「コトイ」が注目される。県南で聞いたものには、

○ソソナ コトー ナニ シタラッ コトイ。

そんなことを、わしが、なんでするものかね。

がある。「コトイ」は方々に、かなりよくおこなわれているか。「コト」もあるらしい。

新潟県下ともなると、もはや「トコト」は見いだされない。ひきかわって、「コテ」が県下に広く見られるようである。「あすは 休みだ コテ。」「そうです コテ。」などの言いかたがなされている。新潟ことばでの一例は、「ヤッタ コテ。」(“やりました。”)である。女性も「そうですわ。」の意で、「ソダ コテ。」[↑]と言っている。——したい人どうしでのことらしい。県南での一例をあげるなら、

○イロイロダ コテ。

“いろいろだわね。”

がある。(上例は、老男の発言を中女が解説してくれたものである。)県北ともなれば、「コテ」が「ゴデ」とある。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

fウーン シテ ウンダ ブラサガッタゴデ

ええ、そして ぶらさがったんでしょう。

とある。「コテ」「ゴデ」は「ことよ」的なものであろうか。

つぎは岐阜県下である。ここは、北陸との関連よろしく、「トコト」が飛驒

にも美濃にも見いだされる。(ただし、そのいきおいはよわいか。)『飛驒のことば』には、

—とこと (い) よ (句) —だと言うのに。(そんな事したつてだちか
ん—。)

とあり、『岐阜県方言集成』には、

ええとことよ [句] よいといふのに。 郡上郡

とある。県下には、「コトイ」が、あるいは、よりよくおこなわれているか。『北飛驒の方言』には、「コトイ(ナ又ノ)」が見える。——『全国方言資料』第3巻の「岐阜県吉城郡古川町黒内」の条にも、

fオランドコノ カカマモ ソヤッタコトイナー

わたしのところの ¹¹⁾おかあさんも そうでしたよ。 11) fにとって「しゅ
うとめ」のこと。

とある。私が美濃北部で聞いたものは、

○オリャー ハヤ ナンニモ ナラン コトイ。

わしはもうなんにもならないよ。(老年になって何もできないとの謙
遜) (老男→藤原)

である。——「コトイナー」などもおこなわれている。

愛知県下ともなると、「コト」系の文末詞の言うべきものがない。北陸がわと太平洋がわの対立状況が明らかである。

ところで、静岡県下となると、ここにはもはや、関東系の「コト」文末詞が見られる。

○コリャ ケッコイ ハナダ コト。

まあ、これはきれいな花だこと!

などとある。主として女性のことばであろう。

長野県下には、「コト」があって、「コテ」がある。『信州方言読本 語法篇』には、「そんなこたいいってこと」「やるなってこと」が見え、「これは相手の気持をそのまま軽くおさえて言い放つような言い方であります。」とある。『信州北部方言語法(下)』には、

下手な歌ナナヨンド（よむな）あとの笑の種となるコテ（ことよ）との記事が見える。感嘆の意の「コテ」文末詞は、長野市付近でもよく聞かれる。「コテサー」ともある。「コテ」は、県南にもあるのか。『信州方言読本語法篇』には、「やーだこて（ことえ）」が見える。長野県下に「コテ」があるのは、新潟県下での「コテ」との関連を思わせる。信州はそのように連北陸的でもあるのだろう。（中部地方での岐阜県下・長野県下は、やはり一種の特別地域である。）

さて、山梨県下は、静岡県下とはちがって、いくらか通信州的な性質を有するか。それにしても、本県下に、——たとえば、県西南部にも、「コト」文末詞がある。『全国方言資料』第2巻の「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」の条には、

m コマルコト ナンチトーッテ

困ること などと言って……。

などである。

関東地方となって、いよいよ、「コト」文末詞の本場が見られる。旧来の東京弁に「まあ綺麗ですコト。」「それはいけませんコト。」などの言いかたがあることは周知であろう。（『東京方言集』）この書には、

このコトは教養のある婦人に用ゐられる上品なことばであるが、今日ではよそいきの、或はやゝ古い気分が感じられはしないか。

とある。すでに、昭和10年1月発行の本書に、この記述がある。今日は、「コト」表現法が、比較的聞かれにくくなってきているか。若年層の婦人に、「コト」や「コトヨ」の聞かれることはすくない。以前は、問いの表現にも「いいコト。」などの言いかたがなされていた。女性[↑]のかなりつつしみぶかい、おだやかな表現であったかと思う。おそらく「コト」文末詞は上品語であったろう。円地文子氏の記述を引用する。

私の年代の東京育ちの女は、言葉尻に、「なに〜したことよ」といふ

癖がある。それが小説の中にもよく出るので、うちの娘が「ことよ」「ことよ」ってをかしいと笑ふのである。さう言はれてみればこのごろの若い人は「ことよ」という語尾は余り使はないやうである。でも私にはこの「ことよ」言葉にわが青春への郷愁が籠ってゐて、日常会話にも意識して使つてゐる時がある。

「さうしたことよ」「あゝしたことよ」「いいことよ」などといふ言廻しには、それ自身現代の東京と違ふ——^{ひとけ}人気も車の往来もずっと少いころの東京の一種鷹揚な雰囲気^{ひとけ}が背景にあつて「蚤び茶袴」だの「お下げ」だの「桃割れ」だのに彩られた若い女の風俗がはなばなと浮び上つて来るのである。

(『「ことよ」と『だわ』 『言語生活』第六十号)

関東地方の諸県下に、「コト」文末詞がよくおこなわれている。

m………… キモジノ ワルイコト

気持ちの 悪いこと。

は、「千葉県香取郡小見川町神里」(『全国方言資料』第2巻)の一例である。

○マーズ イロドリノ イー コト。

まあ“ほんとうに”色どりのいいこと！(咲いているつつじの花を見て言ったもの) (老女)

は、群馬県下での一例である。

○マーズマズ キレーダ ゴド。

まあまあきれいだこと！

は、茨城県下での一例である。関東東北部ともなれば「コト」も濁音に発音される。

つづいて東北地方が、また「コト」文末詞の地域である。

福島県下に、「コト」がよくおこなわれており、「ゴト」ともあり「ゴド」ともある。

○オアツ[ü]ー ゴザリャース コト。

お暑うございますわね。

は、県東北部での一例である。『会津方言集（増訂版）』には、「ヨグ キタ
ゴド（句）（よく来たね。）」などとある。

○オタケサー エー オハカ ツグ[ü]ッタ ゴト。

おたけさんはいいお墓を作ったこと！（老女 感嘆）

は、会津西北部での一例である。

宮城県下にも「コト」がよくおこなわれており、「ゴド」などともある。『仙台の方言』に見える例の一つは、

「あんだの顔あかいこと。しもってんでがすべ」（あなたの顔の赤いこと。

酔ってゐるのでせう）

である。同書には、「こた」も見える。

「なんついー指輪かけてござこた」（まことによい指輪をはめてゐられるのね）

などとある。「こた」は「ことだ」であろうか。それにしても、これが文末詞化していることは、「のね」とあるのによっても知られよう。「こた」は「ごた」ともある。石巻弁の「ゴダ」例は、

○ヨク[ü] キ[kçī]タ ゴダー。

「よく来たことだ。（よく来たのね。）」

である。

山形県下にも全般に「コト」がよくおこなわれている。

○アラー モッケデシ[i]タ コト。

あらまあ、おきのどくですこと！（老女→藤原）

は、庄内での「コト」例である。「コト」が「ゴト」とも「ゴド」ともなっている。県下にまた、「コテ」「コデ」「ゴデ」も見える。

秋田県下にもまた、「コト」（「ゴド」も）、「コテ」（「ゴデ」も）がおこなわれている。

○ミ〔i〕シナ マタ モトニ〔i〕 ナル〔ü〕 コテァー。

みんなまた元になるだろうよ。 (老男→中男)

は、県東南部での「コテ」例である。

岩手県にも、南北に「ゴト」「ゴド」などが見える。

○ヨグ〔ü〕 ハ下ガ カナガッタ ゴド。

(豆をまいたのを) よく鳩が「たべませんでしたね」。

は、中部東寄りでの一例である。「コテ」などは、あまりおこなわれていないのか。

青森県下にも、東西に「コト」(「コド」「ゴド」も) 文末詞がおこなわれている。

f ホントネ イダワシコト シタッコド

ほんとに 惜しいことを しましたよ。

は、『全国方言資料』第1巻の「青森県南津軽郡黒石町」の条に見えるものである。『野辺地方言集』には、「ゴタ」が見える。

「ソダゴタ」は「そうだらう」である。「ことだ」が語源か。

とある。——岩手県下にも、「ことだ」的なものがあるのだろうか。(宮城県下にはある。)

北海道地方に渡っても、

○ハヤエイ コト。

まあお早いこと。(朝のあいさつ) (老女→老男)

などを聞くことができる。

三 おわりに

文末詞としての「コト」は、以上のように、ほぼ全国の諸地方に見いだすことができる。(ただし、中国と四国とは、わけてもこれのよわい所か。——「コト」分布に、現実の風土差が認められる。)[「コト」と表現する発想は、おおよ

そ全国的なものであったろう。

それにしても、今日の分布が、西の九州地方と東の関東・奥羽の地方とにさかんであり、かつ、北陸道も注目せられるのは、総観して、興味ぶかいことである。東西両傍の分布は、ものの形に相違もあるとしても、かつて全国的にさかんであった「コト」分布の退存をよく思わせるものではないか。加えて、中部も北陸道に問題事象のいちじるしいものが見わたされるのが、やはり、なんらかの退存事態を思わせやすい。

東京語本位の「コト」文末詞は、近代の共通語的なものになりつつあったか。それが、いまやしだいに勢力を失ってきているらしいのは、また注視すべきことである。個々のことばの存立・活動には、私どもの予測予断を越えたものがある。——語の存立は、みな、運命的なものでもあるか。

第四節 「ワケ」「クライ」「トコロ」

ワケ

小野米一氏編の『北海道漁村方言の研究』（渡島半島南茅部）には、

○ワシ マイ^ニチ ジブンノ キモチ^デ ヤッテル ワケー。

私は 毎日 自分の 気もちで やっているわけさ。

○コレネェ ナカシガ ナイ ワケサ。

<シオコシ昆布を指して>これはね、中芯がないのさ。

などの事例が見える。上の第一文には「ワケ」のむすびがあり、言いかえは「わけさ」となっている。第二文の「ナイ ワケサ」は、「ないのさ」とされている。上の両文の末尾を比較するのには、第二文では、「ワケ」の文末詞化しつつあるさまが見られなくはない。小野米一氏編の『北海道奥尻島方言の研究』には、

○ヨル ミテルワケ。

夜に見ているのよ。

というのが見られる。——「ワケ」が「のよ」とされている。

「ワケ」の文末詞化は、一般に、ありうることであろう。ただその実用・慣用は、全国的には、さほど多くは見られないらしい。

今東光氏の作品『闘鶏』には、

「なあ。あんた。もうお金無いで。少しやつてんか。晩のお菜買う錢もないわけ」

「もう無いのんか。」

などの表現が見られる。

能登に、「ワケー」「ワケ」の言いかたがよくおこなわれているが、これは、「ワ」と、「これ」の「ケー」とがむすびあったものかと思われる。

クライ

『全国方言資料』第5巻の「香川県三豊郡詫間町大浜肥地木」の条には、

f オーイ ヤルクライ

はい、行かせますよ。

というのが見える。「クライ」の文末詞が認められようか。

『全国方言資料』第4巻の「滋賀県犬上郡多賀町萱原」の条にも、

f ホリヤー ホーヤッタクライ⁷⁾

それは そうですねとも。

7) 「クライ」は「とも」の終助詞。滋賀県から福井県にかけて分布する。

というのが見える。「クライ」が、「とも」とも言いかえられている。「クライ」は、文末詞化しているものであろう。『全国方言資料』第3巻の「福井県丹生郡織田町笈松」の条にも、

f ホエクレー¹⁰⁾

そうですねとも。 10) 「そのくらい」の意。

とあり、また、

f ホヤグレー

そのくらい(なんでもありません)。

とある。福井市で私の聞いた例をあげるなら、「ホーヤ クライ。」(そうだと
も。)[クライ クライ。](暗いとも。)などがある。

『全国方言資料』第2巻の「新潟県中魚沼郡津南町結束」に見える、

*m*アー ソー ユー コト アッタグレン

ああ、 そう いう ことが あったよ、 もちろん。

での「グレン」は、「クライ」の「クレー」に関係のあるものだろうかどうだろ
うか。

『全国方言資料』第2巻の「千葉県安房郡富崎村布良」の条には、

*m*イワウダグレー

祝うとも。

とある。この「グレー」は、「クライ」からのものであろう。——「グレー」は、
まったく孤立的なものになっている。

「クライ」文末詞が、以上のように見わたされる。なお、他の地域にもある
か。「クライ」が、文末詞化している事実も、おおいに首肯しうるものである。

トコロ

「トコロ」関係のものがあるか。

佐賀県下のことばづかいには、

○オイガ ワッカ トキドマー キモンノ スソバカイ キニシテ イキヨ
俺が わかい 時なんか 着物の 裾ばかり 気にして 行って
ッタ トコレー。

た のに。 (老女→孫男)

のようなものがある。(米倉利昭氏教示)「のに」とされている「トコレー」は、
「所へ」を思わせるものではないか。——それが、この文では、文末詞を思わ
せるものになっている。「トコレー」に、「トこれ」が思いよそえられないでも
ない。が、米倉氏は、「トコレー」には、「ところに」を考えやすい。」と述べ
られた。私が佐賀県南部で聞いた「トコレー」の一つは、

○オト^ンサギー ヨカ トコレー。

“お取りんなったらいいでしょうのに。”

である。「トコレー」が「ところに」だとしたら、「ろに」が「レー」になったということなのか。

薩摩半島東南部の事例には、

○キユド^マ オケモンドンニ メロガトモッ イゴッ トコイ。

きょうぐらい 枚聞神社に 参拝しようと思って 行ってる ところよ。

(老女→中女)

○ドゲ イッ トゴイ。

どこへ 行く の(とこ)？

などがある。(瀬戸口俊治氏教示) 第二例の「トゴイ」には、「の(とこ)」の言いかえがなされているので、「トゴ」(トコ)の文末詞化が、よく察知される。「トコ」は「トコロ」からのものか。

「トコロ」の文末詞化も、いかにもと思われることである。文末詞化のしぜensaを証明するがごとくに、「トコロ」から「トコ」ができています。

さて、薩摩北部には、

○ヤスンミャレバ ヨカ トコリ。

“休まれたらよいのに。”

などの言いかたがある。(井上親雄氏教示) 氏は、「トコリ」を「ところに」だとされた。佐賀県下でのばあいが思いあわされる。

長崎県五島列島で私が聞きとめたことばづかいには、

○チャッチャ ハシレバ マニアッ トコレ。

“いそいで走ればまにあいますよ。”(バスに乗ること)

(老女→藤原)

などがある。「トコレ」がよくおこなわれており、「ボーイサンジャッ トコレ。」(“夜の芝居を見せてくれたのは、ボーイさんじゃった。”)などとも言われている。「マニアッ トコレ」については、“「マニアッ トコレ」と「マニ

アッ ト」とはおなじだ。”との説明もあった。

豊後地方に聞かれる「モー イー トコ。」(もういいそうだよ。)などの「トコ」は、「とこそ」的なものであるのか。

「トコロ」の「トコ」が、「ダ」や「ジャ」にむすばれる文表現は、世上に一般的である。が、もちろん、「トコダ」などは、文末詞の問題の外のものである。

※ ※ ※

名詞系の転成文末詞が見られる文表現は、起源的に言えば、体言どめセンテンスとも言えないこともない。こういうものは、いわゆる体言文や名詞構文と、類縁の関係にあると見られる。

名詞系の転成文末詞に関しては、他要素との複合の、一般には、比較的かんたんであるのが注意される。——名詞系文末詞というものの本性によることであろうか。

第十五章 代名詞系の転成文末詞

第一節 総説

代名詞が文末詞化するのには、理の当然のこのように思われる。名詞に代用される代名詞は、本来、指示性をもって立つものである。(じじつ、代名詞には指示機能がつよい。)このようなものは、相手に対する訴えの役わりをになわしめるのに適切なものではないか。たとえば「ソレ」「アナタ」などというものは、相手に対してただちに指示の機能を発揮するから、人の注意を、その指示するところにまねきやすい。すなわち、「ソレ」や「アナタ」などが、よく、訴えの効果を発揮することになる。こうしたものが、当然のように、文表現の末尾に立って、文末詞の役わりを演じるわけである。

指示の代名詞には、事物代名詞と人称代名詞とがある。おのおの、文末詞化している。

「ナ」「ノ」「ヤ」「ヨ」など、あるいは「モン」などにしても、これらによる、文表現末でのよびかけは、いわば、総体的なものである。——言いかえれば、どことなく漠然とした、大づかみのものでもある。これらに対して、「コレ」「ソレ」とか、「アナタ」などというものは、よびかけことばとしては、よびかけがはなはだ具体的である。——漠然とはしていない。「アナタ」とよびかけられれば、聞き手はぎょっとしたりして、たしかに、その訴えの特定のものを感得する。「ナー」などと言いかけられたばあいの比ではない。こういう点で、代名詞系文末詞は、よびかけ作用に、はなはだしく内部化を見せたものということができよう。文末詞での内部分化ということが言える。内部分化にしたがって、対象把握が異なってくる。

代名詞系文末詞の使用には、話者の特定の文末心情がこめられるともされる。まことに、代名詞系文末詞は、独自の文末詞である。

これと名詞系文末詞とをくらべてみる。名詞系のもので文末でのよびかけは、たとえば「太郎!」と、人名をもって相手によびかけることにも明らかなおりとおり、よびかけが、まったく、具象度の高い直接的なものである。それにくらべれば、「コレ」をもって文末の訴えことばとする表現などとなると、その訴えが、具象度を異にした直接的なものである。そこに、代名詞系文末詞に特有の文末心情がはたらく。

第二節 事物代名詞系の文末詞

一 はじめに

事物代名詞の文末詞化したものに、「コレ」があり「ソレ」がある。「アレ」は見いだされない。一つ、特異なものに「何モ」がある。(ただし、これは、北陸ほかにいくらか見いだされる程度のものである。)

通常、事物代名詞の文末詞化には、明らかな限度が認められる。一般に、遠称は、文末詞としておこなわれていない。不定称もおこなわれていない。そのはずではなからうか。対話の現場で相手に訴えかけるものとしては、遠称や不定称は有効でなからう。指すことの明確と緊迫とが、まず必要である。

二 「コレ」の属

北陸地方に、これのおもしろいものがある。それを見る前に、西方から、私のとらえ得ている「コレ」の属をたどってみよう。

九州の国東半島で聞いたことばに、「ヨー コレ。」(“ほんとなあ。” あいづちことば)というのがある。「ヨー コレ。」などとも言われている。この「コ

レ」は、事物代名詞の「これ」からのものではないか。

福岡県の筑前東部から得た事例には、

○ツミ^ミコミヤラ ナンヤラ シツ^ツチョンナサル モンナケ。

“(植木の) つみこみやら何やら (よく) 知っておられるもの。

(老女→老男)”

というのがある。これの「モンナケ」の「ケ」も、「これ」を思わせるものではなからうか。この地には、「モンナケ」とともに「モンナキ」もある。「ショ^ニンキューガ マタ チガウ^ウ モンナキ。」(“初任給がまたちがうもの。 中女→老女”) などと言われている。

中国地方にきて、広島県下では、「ドーニモ ヤレン^ン フーカー。」(どうにもしかたがないなあ。)などの言いかたが、男性の気らかな発言の中によくあらわれる。この文末の「カー」は、「これ」からのものらしい。岡山県下では「ケー」になっている。「オエン^ン フーカー。」(これはこまったなあ。)などがある。山陰の石見にも、安芸地方なみの「カー」がおこなわれている。

さて、出雲地方には、

○アギヤニ キャーキャー ユーダ^ダ ニャー ワキャー。

そんなに「キャーキャー」言うんじゃないよ。

との言いかたがある。人が「キャー」をよく言うのが、おもしろくとらえられている。私が島根半島で聞いた一实例は、「ホラ キャー。ダ^ダ ガナキャー。」(ほらね。あれだよね。)などである。「キャー」は、やはり「これ」的なものではないか。隠岐には、「コレ」の「コー」「ケー」がある。「アマアテ^テ タワレヌ ケー。(あまくて食べられぬよ。)」などとある。(神部宏泰氏教示)

鳥取県下にも、「ケー」文末詞がおこなわれている。『鳥取県方言辞典 後編』には、

すかんけ〔感〕 いやよ

とある。伯耆東部での言いかたには、

○チュットモ オーキン ナラン ケー。

(この子は) 少しも大きくならないよ。

などがある。(室山敏昭氏教示)「これ」が「ケー」になっているのではなからうか。

四国地方には、「コレ」文末詞と認められるものが、さほどには見いだされない。

徳島県下では、「ハヨー カキ コレ。」(早くお書きなさいよ。)などの言いかたが聞かれる。たしかに、「コレ」とよびかけているのであろう。ものは事物代名詞の「これ」からのものに相違あるまい。

近畿地方にもまた、文末詞「コレ」の属があまり見いだされないようである。三重県西南端とも言うべき地域での、

○コンバン ドッコモ イキャ セン ヨカイ。

今晚はどこへも行きはしないよ。

の言いかたなどでは、「これ」系の「カイ」文末詞が認められるのではなからうか。「セン ヨカイ」が、「セン ヨー」にほぼ似たものようである。「これ」が「カー」にとどまらないうで「カイ」になっているのは、近畿の発音風土での、しかるべきことのように思われる。佐藤虎男氏は、おなじく三重県西南部域の中で、「ホントヤ ワカイ。(ほんとうですわ。 初老女→青女)」などの言いかたを聞きとめていられる。

おなじく佐藤氏の「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)には、紀伊の長島の、

○ソヤデ コリ。コノ マエ チー。

だからさ。このまえねえ。云々 (青男→同)

との事例が見える。これの「コリ」は、やはり、「コレ」に近いものではなからうか。

中部地方では、まず東海도가わを見る。山口幸洋氏は、“浜名湖西の入出というところではよびかけ及び間投助詞としてコンを使うのが特異でした。ネーコン（ねえおい）とかコンコンとよくいいました。今泉忠義博士の母堂が出入出身で、言語生活にそんな記事をおのせになったことがありました。「これ」ということだろうと、ぼくも考えていました。”と、書信を寄せられた。（私の書きものに対してのご返事の一部である。）

土田吉左衛門氏の「飛騨白川の方言」（『方言と文化』）には、「男」の、
いんにやはやだいざだちかんねかー。
（すっかりだめですよ）

ということばづかいが見える。この「カー」は「これ」系のものではないか。

北陸、石川県下に、問題の「これ」がよくおこなわれている。——とはいいいながら、「コレ」の外形が見えるものではない。「ケー」などが見られるのである。（私は、これを、「これ」系のものと解している。）

能登半島東北域では、「ケー」がよくおこなわれており、東北端部では、“ケーケーことば”との言いぐさも、土地人の間にある。（愛宕八郎康隆氏による。東北端部の「ケー」その他の生活については、愛宕氏の教示をこうむることが大である。）

○ハヨ イラッシ ケー。

早くいらっしゃいよ。

○ナンヤ ケー。

何ですか？

などの言いかたがしきりにおこなわれている。『石川県方言彙集』にもすでに、

おーけ 然リノ意ナリ 珠

の記述が見られる。私が能登半島宇出津で聞いた珠洲市域のことばというものにも、「オー ケー。」（そうですとも。）、「オー ケーケー。」（“肯定の「そうですね。」”）があった。「ケ」は、能登半島西岸のいくらかの地域を除いて、能登に広く見いだされるものか。『全国方言資料』第3巻の「石川県輪島市名

舟町」の条にも、

*m*ソーナラ イッチョー ドーカ オネガエモースワケー

それでは 一丁 どうか お願い申します。

などである。(岩井隆盛氏が「石川」<『方言の旅』>の中で、加賀の小松のことばとして記述してられる、「シェンシェ コトシノ ナーツ ハクサンイイクマッシンガケ(先生 今年の 夏 白山へ お出でにならないのですか)」は、どういう「ケ」なのであろうか。)「ケ」は、「ケーノー」「ケヤ」「ケヨ」「ケカ」などの複合形にもなっており、また、「ノケ」(「ノッケ」も)「ノケヤ」「ヨケ」「ゾケ」「カケ」などの複合形にもなっている。

「ケー」「ケ」は、「カイ」文末詞から生じたものというよりも、「これ」から生じたものと見てよいのであろう。『能登国鹿島郡方言』には、「ナイカイケ(無イカチ)」との言いかたが見えている。これでの「カイ」は、問いの表現にあずかる文末詞であろう。「ね」とされている「ケ」は、「カイ」文末詞とは別のもと思われる。——すなわち、指示性をもってたつ「これ」からのものであろう。「コレ」が「ケー」にもなりうることは、中国地方、ことに岡山県下の事例に明らかである。

「ケ」文末詞のおこなわれるところに、また「カ」文末詞もおこなわれている。「ココエ イラッシ ケー。」(ここへいらっしゃいませよ。)とともに、「ココエ イラッシ カ。」(ここへいらっしゃいよ。)がおこなわれている。土地の人に、「ケ」と「カ」とを対比する意識があり、「ケ」が敬いことばとされている。用法上の差異はあるものの、「アオッテ イカイセ カー。」(いそいで行きなさいよ。)などと言われている「カー」も、じつに「ケー」に近いものではないか。私は、「カ」を「ケ」からの転訛形であろうと見ている。——転訛形であれば、「カ」のほうが、用法品位のいくらか低いものであっても、当然とされよう。「カ」もよくおこなわれていて、「ノカ」「エカ」「ワカ」などの複合形も見られる。岩井隆盛氏は、「能登の『応答』」(『言語生活』第四十八号)で、

なお、この「カ」は北加賀のシランワネカ（知らないわよ）南加賀のソヤケンドカ（そうだけどね）の「カ」に通ずるものがあるろう。

と記述してられる。「カ」の分布は広いのか。能登半島西岸の、「ケー」の見られない地域にも、「カー」は見られるようである。「ナンチュー エー ボー シヤ フーカー。」（ほんとにいい帽子だねえ。）などとある。

以上の「カ」文末詞とともに、類似の「カイ」文末詞もおこなわれている。野田浩氏の「能登島（中乃島）向田・曲りの言語」（『石川 国語方言学会 十月会報』）には、曲り地区の「あのね。＝あのな。」というのが見え、また向田地区の「あのね。＝あのかい。」というのが見える。「ね」に相当する「カイ」は、上来の「ケ」や「カ」に近いものであろう。私は、「ケー」が「カー」と発音されるうちに、「カー」が「カイ」にもなったのではないかと考えている。この「カイ」は、「キヤー」にもなったか。

「カイ」からの「キヤー」も考えられるけれども、「ケー」からの「キヤー」も考えられる。「ケー」が、文末訴え音をともなって「ケァー」ともなったであろう。「ケァー」は、現によく聞かれるものようである。——これがまた、「キヤー」にもなり得たであろう。ともあれ、能登の「キヤー」には、発生経路について考えさせられるものがある。

能登半島東北部には、「ノケァー」の複合形のおこなわれることがさかんである。宇出津で私が聞いたことであるけれども、人は“「ツヤ フケァー。」（そうですね。）”というのを聞くと、珠洲の人だということがすぐにわかる。”などと言っていた。愛宕氏教示の奥能登外浦での一例は、

○ニンゲンナ アッサリ シトッサカ フキヤー。

人間があっさりしてるからね。

である。輪島市方面にも「ノケァー」が聞かれる。

愛宕八郎康隆氏によれば、「フケァー」「フケァー（キヤー）」「フーカー」の三者では、この順序に品位差が認められるという。「ケーことば」は上位のもので、「ケァー」は次位のもの、「フーカー」は“対等者間にしたしく”用い

るものであるという。「ケ」がいわゆる敬語とも土地人に考えられているところには、「ケ」の起源の、単純な「カイ」ではないことを考えしめるものがありはしないか。——「これ」系のものであることが思われる。

それにしても、愛宕氏によれば、珠洲市では、「ノケ」の言いかたが「ネヤ」の言いかたにかえられつつもあるという。

富山県下にまた、石川県下につづいての「ケ」「カ」などが見られる。福井県地方には、「ケ」「カ」などが絶えて見られなくて、富山県地方にはこれらが見られるのは、石川県下・富山県下の、北陸での共通的な地域性をよく示すものであろう。

「富山県氷見市飯久保」(『全国方言資料』第3巻)には、

mヤーヤー　　マタ　クラケー

はいはい、　また　来ますよ。

などとある。富山市西北郊外での私の調査例は、

○ジョームガ　オンニ　ケー。

“常務がいますから。”

などである。この地で教示された県南のことばには、「ツラカッタ　ジェ　キー。」(“「つらかったゾー。」の意味をつよくする。”)というのがある。「ジェ　キー」は“やさしきを持つことば”だという。この「キー」は「ケー」に等しいものではないか。『富山県方言』にも、「そーえったか[。]つて[。]おら知[。]ったかいき(其様云つたつて私は知らん)」などというのが見える。愛宕八郎康隆氏は、本県西北岸の氷見市のことば「オイデ　カー。(“来なさいよ。”)」を教示された。——やさしいことばであるという。氏はまた、県西南奥のことば、「ハヨ　キャリ　カー。(“早くおいでなさいよ。　中女→青女”)」を教示せられた。「ケー」に相当する「カー」であろう。『全国方言資料』第8巻の「富山県東砺波郡平村上梨」の条には、

f…………　ナーモ　ナイグライジャワカン

だれも　ないくらいでしたよ。

とある。「カン」は「カ」からのものであろうか。

富山県から新潟県下にはいつてのあたりには、なお、「ケ」文末詞が見いだされるようである。新潟県北、「新潟県岩船郡朝日村高根」(『全国方言資料』第2巻)には、

*m*ナンシロ コトシノ ¹⁾テンキニワ ヨワルワイ コレ

なにしろ ことしの 天気には 弱るよ。 1) [tenk⁶i]

というのが見える。この「コレ」は、文末詞相当のものであろうか。県北粟島には、

○コーシタ コロー。

こうしたとき。

との言いかたがある。

関東地方には、問題とすべきものが見られなくて、東北地方にいくらかのものがある。

福島県下には、「コレ」文末詞が見られるか。飯豊毅一氏の「福島県における文末助詞——岩瀬郡天栄村を中心として——」(『方言研究年報』第一巻)のご手稿には、

○ソダコト シンナ コレ。

そんなことをするなよ。 (中年女→幼児)

などが見える。氏は、『コレ』の代りに『コラ』が用いられる時は相手をたしなめる趣が強くなる。いずれも 対等以下に用いられる。」と言われる。野元菊雄氏の「福島市・会津若松市」(『方言の旅』みちのくの巻(2))にも、

男「ウンゼリ直スト思イノホカヨクナッタナコレ。」

とある。県東北部の『福島県中村町方言集』には、「何だこの、」などの言いかたが見られる。

宮城県下の『仙台の方言』には、

「餅かぶれしたこら。こいなかぶれもちになんね中、水さ漬ければいかっ

たやー」(餅がかびましたよ。こんなかび餅にならない中に水に漬ければよかったねえ)

というのが見える。「よ」と言いなおされている「こら」は、文末詞相当のものとしてよかるうか。もっとも、「こら」は、「コレ」のままではない。

「コレ」の属の文末詞の見いだされることは、おおよそ上来のようである。「コレ！」(これ！これこれ！)とよびかけたりすることは、ほとんど共通語法的なものにもなっていようが、「コレ」の属の文末詞の存立することには、地域的な片よりがある。——方言風土での、土地ふうの好みのしからしめるところであろうか。

「コレ！」とよびかけるばあいなどを考えると、文末詞「コレ」は、文系のもの、感動詞系のものとも言うことができる。「コラ」ともなれば、いちじるしく文系(感動詞系)でもあろう。しかしながら、もとはと言えば、「コレ」は事物代名詞である。

「コラ」については、ときに、特定慣用文の「こら！」も、すぐに考えられなくはない。別に、一般論であるが、つぎのことも考えられるかと思う。事物代名詞系文末詞「コレ」がおこなわれるうちに、その訴えの効果を増大しようとして、人がしぜんに、「コレ」の[e]母音を[a]母音化したというようなこともあったか。

三 「ソレ」の属

文末詞化する指示代名詞としたら、「これ」があってもよければ、「それ」があってもよかるう。

南島方言下に、「ソレ」文末詞とされるものがあるらしい。町博光氏は、「与論島朝戸方言の文末詞」(『方言研究年報』統一)で、「代名詞系転成文末詞」をとりあげていられ、

○du:fidu futa sa:.

<自分でぞ 為た サー。>自分でやったんじゃないね。

(少男→筆者)

などの例を示していただける。—[sa:]は「それ」としていただける。「それは」相当の方言形も指摘していただける。

九州地方内に、「ソレ」の属としうる「ソ」が見られる。

熊本県南部には、「ミロ ソ。」(見なさいほら。)などの言いかたがおこなわれている。「ソ」が「ホ」になってもいる。「ソ」はおそらく、「ソレ」に関連のあるものだろう。

大分県下に、比較的よく「ソ」(「ソレ」系?)が見いだされる。国東半島, そのさきの姫島, 国東半島の頸部につらなる宇佐郡などに、「アッチー イケソー。」(“あっちへ行けたら。”)「キテ モライナハイ ソー。」(来てもらいなさいよ。)などの言いかたがおこなわれているようである。

北九州市その他の九州東北端域に、「ソ」文末詞がよくおこなわれている。これは、つぎに述べる、山口県下での状況によく連続するものである。

中国, 山口県下の長門地方には、「ソレ」系の「ソ」文末詞のおこなわれることがさかんである。おそらく、全国でも、この地域が、「ソ」文末詞をもっともよく見せる所ではなからうか。「イラン ソ。」(いらないよ。)[↑]「イラン ソ。」(いらないの?)などがある。『全国方言資料』第5巻の「山口県美禰郡秋芳町別府江原」の条などにも、

f………… ワタジャー センニャ ナランソ

わたしは (当番を)しなけりゃ なりませんの。

などとある。「ソ」は、「の」に該当している。

この「ソ」文末詞に関しては、さきに、助詞系の「ノ」文末詞のところでも、いくらか述べた。

山口県下で、「ソ」は「ホ」にもなっている。「ソ」「ホ」のおこなわれること

は、老若男女にわたる。が、中年以上の女性に、「ソ」「ホ」は比較的よく聞かれるか。長門西岸では、「ス」の形も見られるという。「十九歳の時から
ガッ^コニ デ^タ ス。」（十九歳の時から学校に“つとめたよ。”）などと言われているらしい。（神部宏泰氏教示）県下での「ソ」「ホ」の自由な使用から、幾多の複合形もおこっている。「ソカ」「ホカ」「ソカン」「ソケー」「ソカナ」「ソデ」などがあり、「ソイナ」「ソイノ」「ホイノ」「ソエノ」「ソイネ」「ソイヤ」などがある。

中国地方では、山陰に、山口県下のにつながるものが見られる。神部宏泰氏は、「隠岐島五箇方言の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）のご手稿で、

○フ^下ガ ゴザ^ル モンダケ ソレ。

人がいらっしゃるものだからね。（老女）

などの事例をあげていられる。氏はまた別に、

○ジッ^{セン} モッチョリヤ ソー。 チンデモ カワレマシタケー フー。

十銭持ってればねえ。何でも買われましたからなあ。

などを教示せられた。——“「ノ」も「ソ」も、あがめたことば。”とあったよしである。中国地方に、「ソ」という抽象名詞もある。「ソレガ ソ ヨー。」（それが、いま言うそのものだよ。）などとある。名詞「ソ」は「ソレ」からのものであろう。そういう「ソ」が、文末詞化していると思われる。——「ソレ」が「ソ」ともなれば、形態上、ものは、文末詞化しやすかつたはずである。

四国地方では、私は、「ソ」などの文末詞を見だし得ていない。

ただ一つ、愛媛県南隅域で聞いたものに、

○コノ テガミ ヨンジャンナレ ソレー。

この手紙を読んでちょうだいなあ。

との言いかたがある。したしい中で、「ソレー」の付加されることがあるという。「ソレ」は、どの程度に文末詞化されてもいるのか。

近畿地方では、まず、山本俊治氏の「大阪方言『ネン』」（『国文学攷』第二十七号）に、

○ヤー、コンナ ワルサ シテン ネン ソー。

（五十女 幼児のいたずらを見て やあこんないたずらをしているんだよソレ。）

などの事例を見ることができる。（氏には、他の発表にも、「ソ」のご指摘がある。）

『和歌山県方言』には、

イケソ 行きなさいよ
ホレソ それごらん

などが見える。『和歌山方言集』にも、

ホレソ 句 さうれ御覧なさい。

とある。中野朝生氏の「北牟婁地方の助詞について」（『三重県方言』第8号）には、「早く行こうったら」のばあいの「ハヨイコヤソリ」が見える。近畿地方に、なお、「ソ」文末詞を見せる所があるか。

中部地方では、愛知県下の『南知多方言集』に、「それが不思議さ」とされる「ソレが不思議ソ」などが見える。ここの「ソ」は、「ソレ」系とはしがたいものなのかどうか。三河にも、問題の「ソ」があるらしい。

北陸の新潟県下には、「ソレ」文末詞らしいものが見いだされる。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

m………… ソレ キモン イチマイデモ アグレネアンダガノー
ほら 着物（などは） 1枚も 上げられないからねえ、

ソレ

ほら。

とある。また、県下に、問題の「ソ」がある。県南で私が聞いた一例は、

○ワラ ウッテ ソェ。

“わら売ってね。”

である。——これを聞いた時、私は、「ソエ」について、「それ」を考えたりした。県下では、方々に、「ソー」「ソ」がおこなわれているらしい。「ハヤク
ソエー ソ。」は、「早くおしよ。」である。したい間がらで「ソ」がつかわれているという。「ソイ」もあって、和田初栄氏の、「新潟県北魚沼郡小出方言の
文末詞」（『方言の研究』創刊号）には、

○ダッテ アノ ヒトワ ハー ハチジューイクツダ セ ソイ。

（だってあの人はもう80いくつなんですよ。あなた。）

<中女→老女>

というのが見える。

長野県下にも「ソ」がある。『信州方言読本 語法篇』には、

そーそーそれそーそーしてそー（そうそう、それさ、そうしてさ）

（奥信濃）

などとある。

「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」（『全国方言資料』第2巻）には、

f………… マー シャーセーソ²⁾

まあ しあわせですよ。 2) [fa:se:θo]。「ソ」の語源は「候」の略か。

などとある。どういう「ソ」であろうか。『甲州方言』には、「いそ」についての「奈良田語の終助詞で意味を強めて断定する場合に使う。」との説明が見え、「そーいそ（そうです）」などの例が見える。

関東地方では、千葉県下と栃木県下とに、私は、問題事例を見いだしている。

千葉県南では、「ソーダ ナセー。」（そうだね。）との言いかたが聞かれた。

「ナセ」は、相手に強調することばのようである。（“目上には言わぬ。”などとも言われている。）『千葉県郡別方言集 上篇』には、

念を押して言ふ意味に「ナセ」を用ふ

などとある。「ナセ」は、「ナーソレ」的なものであろうか。

栃木県北では、人が、“このへんでは、「セー」ということばが、おわりにつく。”と言っている。“「セー」というのは、ほかの人にたのむようなばあいに。”などとも言われている。

東北地方では、まず、大田栄太郎氏の『福島県方言』に、「せと云ふ語を語尾に附することがある。」との記事を見ることができる。

出来るか＝出来つかせ。

来たか＝来たかせ。

などの例が出ている。県下の西部地方でのことのようにである。

つぎに、山形県下に「ソ」があり、『全国方言資料』第1巻の「山形県南置賜郡三沢村」の条には、

f エヤーヤ ハエデキタコト マンズ タイヘン ハゲタゼソ
 いやいや (皮を)はいできたこと、 まあ たくさん はげたこと。

などに見える。

東国地方には、「ソレ」の属の文末詞が、あまりふるわないようである。中部地方以西でも、四国には見るべきものがなく、地域差が大である。

四 何モ

富山県下のことばづかい、たとえば県東部での、

○「フー」モ ユイマス モナモ。

「フー」も“言うどころじゃない言いますとも”。

では、「ナモ」文末詞がとらえられようか。(「もナモ」とあるけれども。)「ナモ」は「何モ」からきたものであろうか。

同様の「モナモ」が、青森県下の東西にも見いだされる。『野辺方言集』には、「ナモ」をとりたてての、

ともに当る。「ソダモナモ」は「そうだとも」「イモナモ」は「良いとも」

にあたる。

との記事がある。「モノモ」の、一体的なものが認められようか。しかしながら、『青森県五戸語彙』には、「ナモ」をとりたてての、

強意の終助詞。そだもナモ（そうですとも）。行くもナモ（行きますとも）。との記述が見られる。「ナモ」の文末詞性は明らかであろう。

五 おわりに

事物代名詞系の文末詞に、「コレ」の属、「ソレ」の属はあっても、「アレ」の属はない。対話の文末詞としては、指示の近接的なものが要求されているのであろうか。「ドレ」の属などもない。しかし、「何モ」に属するものはある。つよく否定するのに、「何も」の言いかたがなされるのは、一種、直接的な、言いかたになるのであろう。

「ソレ」に対する「ソ」はできているが、「コレ」に対する「コ」はできていない。これもおもしろい事実である。

事物代名詞の文末詞に、分布地域差の注目されることは、上来のとおりである。どこにでもできてよさそうなものが、こうして、分布に地域差を見せているのは、なぜであろうか。この理由は、にわかには解明することができない。結果論的には、こういうことが言えようか。方言風土としては、各地方が、おのずからその地域性を持って張りあっており、その根底的な差異の上に、たまたま、あの事象この事象での、顕著な地域差があらわれる。

事物代名詞系の文末詞は、利用に便利なものである。しかし、全国の現況は、この種のものの、将来の発展性を思わせることが、ほとんどないようである。

ただ、山口県下や北陸地方などの状況は、ものの、にわかには衰退しないらしいことを思わせる。

第三節 人称代名詞〈自称〉系の文末詞

一 はじめに

人称代名詞が、よびかけのための特別なことばになるのは当然であろう。その文末詞化は、容易に首肯しうところである。

人称代名詞の対称のものが文末詞化するのは、よびかけのことばという点から、もっともしぜんのことと解されよう。自称のものが文末詞化するのは、どういうわけか。これも、考えてみれば、しぜんのことである。話し手は、自己をひっさげて訴えようとする。自己のたちばを出して、相手に訴えようとする。

対称のばあいにしても、けっきょくは、「アナタ」などとよびかけて、よびかける自分のたちば（話し手のたちば）を表明しているのではないか。——自己を出すものである。

人称代名詞の文末詞も、それが現場に用いられたばあい、「文」的なよびかけになる。ものは、何にしても、それがよびかけに用いられれば、いずれも、「文」的なものになるのもあろう。

二 「ワタシ」など

かつて私は、越前の福井駅で、土地の初老女が、「ア、ゴメン。ワタシ。」（あ、ごめん。わたし。）と言って通るのを聞いた。この人のかついでいる大きいかごが、通りがかりの人に当たったのをわびたのである。この「ワタシ。」は、「ア、ゴメン。」に対しては、まさに文末詞的役わりのものであった。「ワタシ」は、こうして、文末詞化しようとしている。「ドー シマショー ワタシ。」などというのは、すでに「ワタシ」が文末詞化していることを示すものではないか。（——すでに、「ワタシ」が、文末詞の地位にあることを示すものではないか。）

「ワタシ」は、文末詞化しようとしている。「ワタシ」に類する「ワシ」も同様である。『全国方言資料』第8巻の「高知県幡多郡大月町竜ヶ迫」の条には、

m………… ワシャ　カエルゼ　ワシャー
わたしは　帰るよ、　わたしは。

とある。

「ワシ」に相当する近畿弁の「ウチ」もまた、文末詞の地位に立ちうるものである。京都府丹波で私が聞きとった一例、

○サー， シラソ　ワ　ウチー。

さあ，知らないわわたし。　（中学生女→藤原）

は、「ウチ」の、文末詞的なはたらきを思わせるものであろう。

このようではあるが、「ワタシ」「ワシ」や「ウチ」など、人称代名詞形の明白なものは、さほどには、文末詞的なものになっていない。次下にとりあげるような形のものとなると、よくその、文末詞としての通用が見られるしだいである。

三 「ワイ」の属

「ワイ」文末詞のおこなわれることは、およそ全国にさかんである。

「わたくし」系の「ワイ」が、たしかに存立している。「わたくし」に隣っては「わたし」があり、「わたし」に隣っては「わし」がある。「わし」とともに「ワイ」がおこなわれている。「ワシが」とならんで「ワイが」が存立していよう。「ワイ」は「ワシ」に相当している。「わたくし」系の「ワイ」を、文末詞として使用する心理は、一の項で述べたとおり、容易に理解しうるものである。よびかけのことば「アナタ」と「ワタシ・ワイ」とは、相対的なものようであって、しかも、よくつれあったものである。両者の方向は、自己のたちばを表明するための、有力な二方向とされる。

「ワイ」に「ワヨ」起源が考えられるか。「ゾイ」に「ゾヨ」起源が考えら

れたりするようにである。私は、今日、全国によくおこなわれている「ワイ」は、「ワヨ」起源を考えなくてもよいものだろうと見ている。

ときに、「ワ」が「ワー」と言われるうちに「ワイ」ともなった、というようなことがなくはないかもしれない。が、それは、かくべつのことであろう。

文末詞「ワイ」は、土地によっては、音訛をおこして、「ウェー」などともなっている。また、「ワイ」が上接の語に融合して、さまざまな変化形が示されることにもなっている。たとえば、「～です ワイ。」の「～でサー。」など。変化形の種別は比較的多い。その点で、できたもの、たとえば「でサー」の「サー」など、この新しいものについては、人が、もはやそれに「ワイ」を感じなくもなっている。「あります ワイ。」からの「ありますラー。」のばあいも、人々は「ラー」をとりたてがちであり、これには、多くの人が、「ワイ」を意識しなくなっている。そうではあるが、今、私は、客観的処理として、この種のものについても、「ワイ」の内在・伏在を考える。内在・伏在の「ワイ」も、まったく、顕在の「ワイ」にもなって、全国的に存立するものである。

文末詞「ワイ」に関しても、複合形が認められる。「ワイナ」「ワイノ」「ワイネ」などがあり、「ワイサ」「ワイツ」などともある。「ワイ」の自己主張の榮えるところに、こうして、複合系の諸態もかもされているわけである。ところで、「ナーワイ・ナワイ」「ノーワイ・ノワイ」などというのはできていない。これは、人称代名詞<対称>系の文末詞のばあいに、「アンタ」に対して「ナント」、 「オマイ」に対して「ノマイ」などができているのと、好対照をなす。

以下に、全国諸方言上の「ワイ」文末詞（顕在・陰在）を見よう。

南島地方に関しては言うべきものがないように思われる。

九州地方では、全般にわたって「ワイ」（顕在・陰在）が認められる。対称の「ワイ」もあるようだけれども、「わたし」系の「ワイ」とされるものが広く

見わたされるようである。——他方に、「ワイ」に隣る「バイ」のさかんなことも、ここに思いあわされる。

九州南部にも、「ワイ」がある。薩摩半島の、

○ドーラ ヒガ ヘラン ウチ モドイモソ ワイ。

“どうれ、日が入らぬうちにもどりましょうか。” (老女)

などは、「わたし」系の「ワイ」を示すものではなかるうか。大隅半島での言いかたにも、「キューワ ガツツイ サミー ワイ。」(きょうはひどくさむいことねえ。) などがある。上村孝二氏も、「鹿児島県下の表現語法覚書」で、

北九州北部の感動を表す「ばい」に対してはこちらはワイである。

と述べていられる。宮崎県中部での一例は、「マタ クー ワイ。」(また来るわね。)である。県下で、「ワイ」が「ワーイ」などとも発音されている。熊本県下にも「ワイ」がさかんにおこなわれていて、しかも、南部の薩摩近くの地域で聞いたものには、

○センセイア キナイタ ワイ。

先生がいらっしゃったよ。

○センセイア キナイタ バイ。

先生がいらっしゃったぞ。

などがある。「ワイ」と「バイ」とがならびおこなわれている。「ワイ」の表現が上品のもので、「バイ」の表現が中品のものであるという。(「キナハイタ バイ」と言えば、これは上品なものになるという。)熊本県下の中部東奥でも、私は、かつて、「ワイ」と「バイ」とのつれあうのを見ることができた。そこでの「ワイ」には、「アカイシノ アタリワ ズブズブ ワイ。」(アカイシのあたりはずぶずぶだよ。)のようなものもあった。神部宏泰氏は、八代市の人の、“子どものころは「ワイ」のみを使用したが、成長して目上の人に「バイ」を。”と言うのを聞かれたという。「バイ」が、あらたまりの意識で用いられているとは、注意すべきことである。「バイ」が地方共通語になっているというわけか。——それほどに、「バイ」は肥筑地方にさかんなのであろう。これに

ともなっても言えようか。「ワイ」は肥筑地方に、第二の地位をしめるものになっている。といっても、天草などでは、「ワイ」と「バイ」とがともにそうとうにおこなわれている。天草の、

○オ^ラ ソガ^ン ヨタ セ^ン ワイ。

わしはそんなことはしないよ。

など、「ワイ」はたしかに「わたし」系のものであろう。阿蘇山南麓地方では、「ワイ」よりも「バイ」のほうがやさしみがあるという。島原半島には、「ワイ」もそうとうによくおこなわれているようである。『全国方言資料』第9巻の「長崎県上県郡上対馬町鰐浦」の条には、

*m*パーサン カエッタワイ

ばあさん、 帰ったよ。

などであるが、「ワイ」は「バイ」にくらべてすくないようである。佐賀県下・福岡県下の「ワイ」については、「ワーイ」などもおこなわれることを言うのにとどめる。大分県下の状況は、「ワイ」のいちだんとさかんなものを示す。——これが中国地方の「ワイ」の盛行につながっている。

○ホ^シー ワイ。

ほしいわ。(願望を言う。) (中女→中男)

は、国東半島での一例である。

一般に、「ワイ」表現の品位は、さほどよいものでもないであろう。ざりとて、下卑のものなどではない。親愛感は、「ワイ」によっても、うち出すことができるのであろう。

「ワイ」に関連する形かと見うるものに、「ワン」がある。九州東がわにこれが見られる。宮崎県北域に「ワン」があり、高千穂のことばにも、「オ^ラル^ワン。」(いますよ。——「だれそれさんはおられるかね?」との問いに対する返事である。)などの言いかたがある。延岡ことばにも「ワン」があるという。一知友は、「ワン」を「ワイ」「ワエ」に等しいものとした。「ワン」は特殊なばあいにはしつかかわないものだという。「ワン」をつかえば、ことさらぶった

ような感じになるそうである。大分県臼杵市から西南方にはいつての山地域でも、私はかつて、「ワン」を聞きとめた。

○ソージャー ワン。

そうだわ。

などとあり、「ワン」は女子（老若）用語とのことであった。「ワン」は、目上の人などにつかわれており、人は、“上品なことばに思うチョル。”という。本県下の他地にも「ワン」があるらしい。さて「ワン」は、「ワイ」からよりも、「ワ」の「ワー」からおこったものかもしれない。が、結果の「ワン」形は「ワイ」形につりあうものとなっている。

以上のように、九州地方に「ワイ」が顕在し、また「ワイ」が、次下のように陰在している。（それほどに、「ワイ」は自在に利用されているということであろう。）薩摩弁の、

○ヨラ アダイガ ゴアンサー。

これはわたしのでござんすわ。

での「ゴアンサー」は、「ゴアンス ワイ」的なものではなからうか。「ワイ」が、「ゴアンス」の中に引きこまれている。薩摩で、「ヨカ ワイ。」は「ヨカアイ」ともある。「ヨラ ヤッセン ナイ。」（これは“役しない”。“役にたたない”ワイ。）（これはだめだワイ。）のばあい、「ワイ」は「ナイ」になっている。同地で、「あそこへ行きおるワイ。」は「アッケ イゴライ。」と言われている。薩隅地方に、「ワイ」を陰在させての「ワイ」使用はさかんである。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条にも、

mヨー オラ アンネー イタックライ

ええ、わたしは 阿久根に 行って来るよ。

などとある。文末が、このように「ライ」であろうとも、また「ラー」であろうとも、いま、私どもは、それらをひきはなして表記することはできない。顕在の文末詞のはたらいているばあいとは、事情・事態がちがう。宮崎県・熊本県から北の諸県にも陰在の「ワイ」がよくおこなわれており、長崎県下では、

○ワタシガ オメテ キマッサー。

わたしがよんできますわ。(中女問)

などとある。「ライ」「ラー」や「〜マッサー」その他が、諸方に見られる。

○コキ オッチョラー。

“ここにいるわ。”

は、大分県下での「ラー」の一例である。

「ワイ」に関して、複合形の文末詞もおこなわれている。九州南部に「ワイナ」「ワイネ」「ワイヨ」などがある。肥筑地方に、「トワイ」もある。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条での一例は、

f………… ナンカ キモンナ イッチョモ モタジャッタトワイ
長い 着物は 1枚も 持っていませんでしたよ。

である。「ワイナ」は、大分県などにも認められる。

中国地方も、「ワイ」文末詞のよくおこなわれる所である。日常生活の中で、「ワイ」が、老若男女に用いられている。その用語品位は、しばしばそうとうによいものでさえある。伯耆のことばでは、「キンネンニ テイ フリデス ワイ。」(近年にはない降りですよ。老女→藤原)などと言われている。これには、かなりていねいな「ワイ」が見られる。老年層の「ワイ」が、ことに、しばしばていねいさを示しがちであろうか。とはいいながら、日常、「ワイ」がしたいものどうしの間で用いられるばあいは、その用語気分がはなはだしくくつろいだものになる。「コノ コワ イゲズ[ü]デ、アバカン ワイ。」(この子は意地わるで、しまつにおえないよ。)は、出雲地方での、気らかな言いかたのものである。

○カンシンシマシタ ワイ。

感心しましたわ。(小学校一年生の教室で、参観の感想を言う。)

(中女→藤原)

○アサッテカラ イソガシー ワイ。

あさってからいそがしいよ。 (初老男)

は、岡山県下での、「ワイ」二態の例である。広島県下の、あらたまった言いかたでの「ワイ」の例は、

○ナカナカ コノ ナー モナー サビジ^ー モンデス ワイ。 ソリヤ^ー
ノ^ー。

なかなか、子のないものは、さびしいものですわ。それはね。

(初老女→藤原)

である。広島県下での言いかたに、「センセ^ーガ オコッテ ワイ。」(先生が、おこられる<敬語法>わよ。 小女→小男)というような「ワイ」用法がある。「オコッテジャ ワイ」との言いかたもあるけれども、「オコッテ ワイ」との、省略法の言いかたもある。これのばあい、「ワイ」の、訴え効果が、かくべつ明確なようである。

中国地方に、「ワイ」の変形が、なにほどか認められる。鳥取県下や山口県下でなど、「ワイ」にほぼ等しい「ワー」が聞かれる。(「ワー」の気もちと「ワイ」の気もちとがほとんど同様である。)岡山県下の備前備中では、「ウェー」という訛形が聞かれる。「ソネーナ コトモ シタ ウェー。」(そんなこともしたよ。)など。岡山県下で、「ワー」などの形も聞かれる。つづいて、広島県備後南部中部にも「ウェー」が聞かれる。隠岐のことばには、「ワエ」が認められる。——神部宏泰氏によれば、“「ワイ」よりも「ワエ」のほうが品位がわるい。”という。「クル ワエ。」(“こっちへ来るわい。”)などと男の子が言い、これはわるいことばのよしである。鳥取県下にも「ワエ」があり「ウェー」がある。(「ワイ」に近い「ワエ」と、「ワ+エ」の「ワエ」とは、容易には区別しかねるものである。)

中国地方で注目されるのは、「ワイ」陰在の現象のはなはだしいことである。各県下で、「来る ワイ」の「クラー」「たのむ ワイ」の「タマー」のような言いかたが、よくおこなわれている。山口県長門の、北海中の一小島、見島

での、

○カズワ イーキラレナイ。

かずはとても 言いきれませんよ。(子どもさんは何人ですかと問うた
のに対する返事) (老女→中女)

との言いかた(岡野信子氏教示)は、一見、打消助動詞「ナイ」を示すかのよう
で、誤解を招きやすい。が、「イーキラレナイ」は、「イーキラレぬ ワイ」か
らのものである。——この種の「ワイ」の陰在は、むしろ四国がわによく見ら
れるものである。(長門地方は、連四国という点で注視される。)広島県地方に
は、「言います ワイ」の「イーマサー」,「～です ワイ」の「～デサー」
がいちじるしい。「ございます」の略形「ガンス」のばあいにも、「ガンス ワ
イ」の「ガンサー」がよく聞かれる。広島県下島嶼部には、「ガンサー」ならぬ
「ガンサイ」もあり、「デサー」ならぬ「デサイ」もある。広島弁と岡山弁とに
は、「アリマサー(アリマス ワイ)」と「アリマスラー(アリます ワイ)」
との分布差があると言えようか。——いちじるしい点をとらえてみてのことで
ある。広島県下での「～デサー」に対して、岡山県下では「～デスラー」
(「～です ワイ」)の言いかたが特徴的である。鳥取県下にも「～デス
ラ」がある。「～ぬ<打消助動詞> ワイ」からの「～ナイ」はさきにふれた
が、山陽地方では、「～ナー」がふつうによくおこなわれている。安芸北部
での一例は、

○ハー オキニャ イケナー ヤー。

もう起きなきゃいけないよ。(老女)

である。出雲地方には、比較的、「ワイ」陰在の現象がよわいのか。

文末詞陰在のばあいは、たとえば「～デス ワイ」の「～デサー」のば
あいなど、文末詞形を分別して表記することができない。ところで、鳥取弁で
の「ワシヤ チョー^レドデス ラ。」(わたしはちょうど四十歳ですわ。中女→
藤原)など、「～デス ラ」のばあいは、このように、「ラ」をはなして表記
することができる。——人々が、「デス」を、うちきりことばと考えているの

による。しかし、これは、たまたまのことにすぎない。

中国地方の、「ワイ」に関する複合形の文末詞としては、まず「ワイヤ」がとりたてられる。これのおこなわれることは、諸県下にはなほださかんである。ところで、「ワイヤ」表現の品位は、さほどよいものではない。ときには、これに卑俗感もともなう。しかし、「ワイヤ」と言って、素朴な親愛感を流露させることもすくなくない。いずれにしても「ワイヤ」では、下接者「ヤ」の効果が大きいようである。ただし、広島弁での、

○オト^コモ オナ^ゴモ ミナ^{デル}デンス ワイヤ。

男も女もみな出るんですよ。 (老男→藤原)

など、老年層には、「ワイヤ」をつかつての、さまでわるくはない言いかたも見られるか。「ワイヤ」のほかでは、「ワイナ」「ワイノ」「ワイネ」がとりたてられる。「トニカク ナンジャロ ワイノー。」(とにかくあれだろうよ。老男間)は、岡山弁での「ワイノ」例である。

「ナワイ」「ヨワイ」その他、「ワイ」が下接者となる複合形は、見いだすことができない。「ワイ」文末詞の使用特性がここにかがわれよう。

「ワイ」類に関する四国の全体状況は、中国地方のそれにあい近い。すなわち、自己本位の言いかたになる「ワイ」類の表現が、四国地方にもさかんである。

まず、「ワイ」形そのものが、四国四県下によくおこなわれている。高松市内で聞いたことばには、「〜でしょう ワイ。」(初老女)というようなものがある。伊予弁では、「インデ コー ワイ。」(帰ってくるわね。)の慣用文が特徴的である。——男女にこれが言われている。伊予東隅での一事例は、

○ドー スル アイモ コー スル アイモ ナイ ワイ。

どうするまあいもこうするまあいもないわよ。 (老女→中女)

である。この例では、「まあい」の「アイ」と「ない」の「ナイ」と、文末詞の「ワイ」とが連出していて、「イ」のリズミカルな聞こえがいちじむしく、これ

また、いかにも伊予弁的である。高知県下での一例は、「ドッコモ、シラソクワ ナイ ワイ。」(どっこも、知らない所はないよ。老男→老女)である。愛媛県下にくらべれば、高知県下では、「ワイ」のおこなわれかたが、いくらかよいか。徳島県下では「ワイ」と「ワ」とのよく連立するさまが見られる、と言えようか。「ホンナン ナイ ワイ。」(そんなのないわよ。老女)は、鳴門方面での一「ワイ」例である。

徳島県下では、「ナイ ワイ」の言いかたにならんで、「ナイ ワー」の言いかたもおこなわれており、「ワー」が「ワイ」に平行的である。また本県下では、「ワイ」の「ウエ」形などが、県南方面に見いだされる。四国の他地方には、これとって、「ワイ」の変形が見いだされないようである。

ところで、高知県西南部(幡多郡内)の言いかたに、

○コリャー ワシソガ ゼアイ。

これはわたしのよ。(女性)

というようなものがある。「ゼアイ」の「アイ」は何だろうか。「ワイ」に関係のあるものなのかどうなのか。『土佐方言集』にも、幡多郡のことば、

「今日ハオ休ミデスカ」トノ問ニ答ヘテ「いんね、これからかまえていく(行クソヨ)ぜあい」ト云フ風ニ用ケル。

というのが見えている。なお同書には「わい」の指摘があり、

読ンダカ、見タカ、問ウタカ等ノ如ク、問ヒ掛ケル言葉ノ下ニ付ケル疑問詞。(幡多郡)

「お前、昨日町え行ったか^{わい}」(オ前ハ昨日町ヘ行ツタカ)

「本を読んだか^{わい}」(本ヲ読ンダカ)

との記述がなされている。「か」のもとに見える「わい」は、どういうものなのだろうか。上来、問題にしてきた「ワイ」とは、用法がちがう。(自分のことを言うための「ワイ」が、そうでない用法に転用されたものなのかどうなのか。)

四国四県下で、「ワイ」は、かなりよいことばとしても用いられている。——今日では、それが、年輩者に見られがちのことばであろうか。ともあれ、「ワイ」

の盛用とともに、四国の全県下で、「ワイ」を陰在させた言いかたがよくおこなわれている。どちらかといえば、顕在の「ワイ」よりも、「ワイ」を陰在させた言いかたのほうが、より生活になじんでいるかもしれない。四国での「ワイ」陰在の特色形は、「ワカラナイ。」(わからないよ。)である。この「ナイ」は、けっして、東京語流の打消助動詞の「ナイ」ではない。「わからぬ ワイ。」の言いかたが、「ワカラナイ。」になった。まだ会わないことを言う「マダアイマセナイ。」(まだ会ませぬ ワイ。)の「ナイ」とおなじものが、「ワカラナイ。」の「ナイ」である。愛媛県下には、「～ぬ ワイ」の「～ナイ」の聞こえもさることながら、「～まする ワイ」の「～マスライ」の聞こえが、中部以南にいちじるしい。「上げる」の下に「ワイ」がくれば「アゲライ」ができる。「～でする ワイ」は「～デスライ」になる。「～なさる ワイ」は「ナサライ」になる。これらがやはり「ライ」の聞こえも示すので、愛媛県中部以南では、「ライ」がひじょうによく聞かれる結果になっている。そのうち「デスライ」などのばあいは、今日の語感からして「デス」と「ライ」とを切りはなすことができるので、人は「ライ」を文末の特別のことばと思いがちである。じっさい、私どもも、「ソーデスライ。」などについては、単純な共時論的処理として、「ソーデス ライ。」と表記してみたくなる。高知県下でもまた、「ワイ」陰在の形が種々に見られ、「～マスラー」「～マスラ」「～デスラー」「～デスラ」もよく聞かれる。「デスライ」「マスライ」は、比較的すくないのか。

○ゴネソニモ ナルノニ、イマニ テガミ クレマスライ。

五年にもなるのに、今になっても手紙をくれますわ。

(老女→藤原)

は、県中部奥での「～マスライ」例である。こうしたばあいにも、「ライ」がとりわけられないではない。徳島県下でも、「ライ」と「ラー」とが聞かれる。香川県下もほぼ同様である。『讃岐方言之研究』には、「ワタシモカイマッサア二」などというのも見える。

四国での、「ワイ」に関する複合形の文末詞としては、中国地方でと同様、やはり「ワイヤ」がよくおこなわれている。「ワイナ」「ワイノ」もよくおこなわれている。高知県下の言いかたには、「イーマスラ[↑]ネー。」（言いますわよね。）「イワー[↑]ヨ。」（言うわよ。）などの言いかたもある。徳島県下にも、「ウエヨー」などというのも見られる。『愛媛の方言』には、主として中予におこなわれるらしい「張っても破ってやる ワイシ」「張っても破ってやる ワイシャ」が見える。

近畿地方もまた、「ワイ」類のよくおこなわれている所である。全府県下に「ワイ」形そのもののおこなわれることが見られ、また、その内在の形が種々に見わたされる。諸県下に、事例を見ていこう。

兵庫県下での「ワイ」形の表現は、通常、中等度以下の品位のものになっていよう。——他府県下にあっても、品位は、一般にこのようなものであると思われる。「ワイ」形と「ワ」との、ともにおこなわれる中で、「ワイ」のほうがよりよいことばづかいになるばあいもあるか。

○ユーテヤス ワイ。カセグニ オイツク ビンボー ナント。

言うてますよ。かせぐに追いつく貧乏なしと。 （老男→藤原）

は、大阪府下の南部で私が聞いた、「ワイ」の例である。「ワイ」は、このように、はじめてのよそびとにもつかわれているが、なにぶんにも、「私」と言っ出て出る「ワイ」である。すぐれて上品な表現には、なり得ないのが道理なのではないか。

○モンモン オジーチャン カイ。アン ニー。ゲンチャン キテ アル
ワイ。

もしもし、おじいちゃん？あのねえ。げんちゃんが来てるのよ。

は、和歌山県南岸での「ワイ」例である。この「ワイ」には、ごく気がるな調子が出ている。志摩半島東岸での「ワイ」例をあげよう。

○アスワ コドモノ ナーヅケヤッテン、ヨバレテ[↑]キテ タモレテ[↑] ワイ。

あすは子どもの名づけ祝いなので、よばれてきてくださいということですよ。

などがある。奈良県下・京都府下・滋賀県下のおのおのでも、年輩の人に、「ワイ」がより出がちであろうか。「イトーテ カナイマシエン ワイ。」（痛くてかいませんよ。）は、滋賀県湖西での一例である。

近畿地方にも、「ワイ」の、多少の異形が見られる。但馬地方には、「ワイ」の「ウェー」などがある。（「ウェー」なども聞かれる。）大阪府下の南部にも「ウェー」がある。「イテ クル ウェー。」（行ってくるわね。）などと言われている。「奈良県山辺郡都祁村」（『全国方言資料』第4巻）にも、

mイーヤ アカン アカン ハ モー ロクジュカラン ナッタラ アカン
 いや、 だめ だめ。 もう 60歳にも なったら だめだ
 ウェー
 ねえ。

などが見える。かつて私が、旧京都市域を出はなれての北郊山地で聞いた「シヨ ナイ ウォ。」（しょうがないよ。）の「ウォ」は、何であろうか。紀州串本で聞いたものには、

○エイイエ, コリャ アジャ シヤ セン ヤイ。

いいえ、これはわたしはしやしないよ。（多少、反抗的な気もちがある。）

がある。この「ヤイ」は、「ワイ」に相当するものかどうか。村内英一氏の「熊野方言の問題点一和歌山県がわの一」（『三重県方言』第8号）には、

「私はあの人は大嫌いよ。」（女の人）なら「ワシ ヨー アンナン キライキツテイク ワン。」である。これは新宮市を中心として使われているもので熊野全体に及ぶものではない。

との記述が見える。「ワイ」に相当する「ワン」もできているのか。志摩半島などにも、「ワン」があるらしい。「ワー」は、諸県下に見られる。これには、「ワイ」からのものも「ワ」からのものもあろう。いずれにもせよ、「ワー」形から

は、「ワン」も生じうる道理なのではないか。それにしては、「ワン」の分布はまれである。

近畿諸府県下に、「ワイ」内在の種々相の認められることは、つぎのとおりである。「ある ワイ」の「アラー」がある。——「おこる」など、ラ行五段動詞のばあいには、「～ラー」の形になる。ところで、「ある サ。」と言うばあいなど、「アライ ヤ。」とも言われている。「～ます ワイ」の「～マサー」があり「～マサイ」がある。（「～マッサイ」もある。）「せぬ ワイ」の「～セナー」（「～ヘナ」）もよくおこなわれている。「オマス」は、近畿弁での一特色語である。「オマス ワイ」は「オマッサ」になっている。「シマス ワイ」は「シマッサ」になる。「マッサ」が「マッサイ」ともある。「どうどうしているよ。」の「どうどうシヨラー。」は、「～マストラ」などともに、近畿におこなわれているが、「どうどうシテラー」は、関東によくおこなわれるものである。「ウソバーイ イヨラー。」（うそばかり言ってらあ。）、これは淡路島でのものである。

$$m\text{ア} \quad \text{マタノ} \quad \left(f \quad \text{ア} \right) \quad \text{アノ} \quad \text{アソバシテモライニ} \quad \text{クッライ}$$
 ああ、 またね 遊ばせてもらいに 来るよ。

は、『全国方言資料』第4巻の「三重県北牟婁郡海山町河内」の条に見えるものである。三重県西南部の長島で聞いたものには、「マー イッカイー。」（“もう行くわい。” “家から帰る時でも、道で別れる時でも言うことば。”）というのがある。志摩半島では、かつて、「どうどうしてくる ワイ。」の「くる ワイ」が、「クライ」ではなくて「クヤイ」と発言されていたのを聞いたことがある。『全国方言資料』第4巻の「京都府京都市」の条に見えるものは、

$$m\text{チ} \quad \text{ョト} \quad \text{コレカラ} \quad \text{ソレデワー} \quad \text{デテキマッサー}$$
 ちょっと これから それでは 出て来ますよ。

などである。

「ワイ」に関する、近畿地方での複合形の文末詞としては、やはり、「ワイナ」「ワイノ」「ワイネ」や「ワイヤ」のおこなわれることがさかんである。「ワ

イナ」は、第一にとりたてられるものではなかろうか。「シンバイセーデモ
エー ワイナ。」(心配しなくてもいいさ。)は、大阪弁に定着している「ワイ
ナ」ことばである。——女も男も、ふつうに「ワイナ」をつかっている。(男性
の「ワイナ」に、かえてよく、大阪弁の情調が認められるのでもあるか。)

○エー ワイノ。

(まあ、きょうのような話しの席も) いいですよ。 (中男間)
は、丹後での男性の「ワイノ」ことばである。「ワイヤ」のよくおこなわれるこ
とには、理があるのだろう。「ヤ」は、さほど上品の表現には用いられないも
のである。「ワイ」は、己を言いたてて相手によびかけるものである。こうい
う両者は、むすびあわされてしぜんのはずであり、したがって、この複合形が
安定形としてどこにもよくおこなわれてきたのであろう。複合形に、なお、和
歌山県下の「ワイシ」があり、「ワイシヨ」がある。和歌山県下では、なお、
「ありますラ ヨ。」などの言いかたもよくおこなわれている。

中部地方にもまた、「ワイ」類のよくおこなわれる さまが見られる。どちら
かといえば、北陸方面に「ワイ」類が、よりよくおこなわれているか。

北陸道一帯には、「ワイ」がさかんである。福井県若狭での例は、「ミタ コ
タ ナイ ワイ。」(見たことはないよ。)などである。石川県下は、なかんず
く、「ワイ」のよくおこなわれているところであろうか。男女の日常のことば
に、これがよく聞かれる。金沢市近郊での男性の言の一例は、「イレンデス
ワイ。」(いれませんよ。)である。加賀東南隅の白峰村の調査にしたがった時
は、つぎのような「ワイ」用法も聞かれた。

○ウラー、ヨー ナカッタ ワイ。

わしは、よくなかったよ。(婦人の用便中の戸をあけた時の話してあ
る。)

○アリガト ゴザリマシテ ワイ。

ありがとうございますね。 (老女→青男)

○コナイダ ワイ。

こないだだよ。(答えのことば) (中男→中女)

富山県下にも、注意すべき「ワイ」用法が見られる。「ソージャ ナカロ ワイ。」(そうではないでしょうよ。中女→藤原)、「オラレッデジョー ワイ。」(おられるでしょうよ。), 「カンベン センマイ ワイ。」(かんべんしないでらうよ。)などの用法がある。『富山県方言集成稿(二)』には、「いやわい(嫌だ。)」などが見られる。新潟県下は、北陸道中、比較的、「ワイ」がよわかるうか。岐阜県下となつてまた、飛騨美濃に「ワイ」がさかんである。

○オラー コンヤ ドッコイモ イカン ワイ。

わしは今夜どこへも行かないよ。

は、飛騨高山市での一例である。美濃での一例は、

○ヨー ボンニ オドッテ、ウタワッセル ワイ。

よく盆に踊って、歌いなさるよ。(老女→藤原)

である。愛知県下となつて、「ワイ」のおこなわれることは、ややすくなめであろうか。——三河奥などには、かなりよくおこなわれているのか。(「スンデノコトデ、シニヨッタ ワイ。“もうちょっとのことで”死ぬところだったよ。」などとある。)長野県下には、「ワイ」がよくおこなわれているか。南信飯田市での一夜、土地の有識者からものの説明を聞いた時、その人は、「“ミチガ アリマス ワイ。 ココニ ドテガ アリマス ワイ。”」(道がありますわね。ここに土手がありますわね。)との語りかたをした。北信でもよく「ワイ」が聞かれる。「オレヨリヤ デカイ ワイ。」(おれよりは大きいよ。高校生のむすこのことを六十六歳男が語った。)など。静岡県下ともなると、「ワイ」のおこなわれることが比較的(あるいは、いくらか)よわいのではなからうか。山口幸洋氏の『静岡旧市域方言』には、「オ「ドリン ナ」ケリャ サ「ムシ」ー ワイ(踊りがなければ 淋しいよ)」などが見られる。山梨県下となると、今の私には、「ワイ」について記述すべきものがない。静岡・山梨の二県は、関東地方での、「ワイ」のよわい状況につづくありさまを見せているのである

うか。

中部地方での「ワイ」に、転訛形もいくらか見られる。福井県下に「ウェー」があり、石川県下に「ウェイ」「ウェー」がある。

○キーテ ミランノヤケド。キーテ ミル ウェー。

(さあねえ。) 聞いてみないのだけど。聞いてみるよ。

(中男→老女)

は、加賀、大聖寺駅前での一例である。富山県下にも「ウェー」がある。(「ウェイ」もあるか。) 新潟市内などにも同傾向のものがあるか。岐阜県下には、「ワエ」なども聞かれるようであるが、「ワン」もある。私が美濃北部で聞いた一例は、

○イッケン タットリマス ワンナー。

一軒建ってますよねえ。(昔の武家屋敷が一軒あることを言う。)

(初老男→藤原)

である。愛知県下には「ワイ」の「ウェアー」などが聞かれる。ところで、愛知県下には、「ワン」がかなりよく見いだされるのか。『南知多方言集』には、「ワン」についての「親しみを含めてゐる。」との説明があり、「私モ欲シーワン(私も欲しいよ)」などの例が見える。江端義夫氏は、知多半島の、氏の郷里方言の例、「ハン。イッテ キタダ ワン。(ええ。行ってきたんですよ。)」などを教示せられた。三河西部にも「ナイ ワン。(ないわ。)」などの言いかたが見られ、豊橋方言にも「ワン」「ワーン」の言いかたが聞かれる。高瀬徳雄氏教示の「ワッシャー シラン ワン。(わしは知らんよ。)」などを見るのに、「ワン」はまさに「ワイ」相当のものだろうと考えられる。長野県下にも「ワイ」の「ウェー」などがある。『信州上田附近方言集』には、

ソーダッパイ (句) 左様である。サウダワイの語の転。

との説明が見える。静岡県遠江地方にも「ワイ」の「ウェー」などがあるのか。

「ワイ」の陰在形式は、中部地方一般としては、さほどに優勢ではなさそうである。福井県若狭の「シンデカラノ ミヤゲニ シマッサイ。」(死んでから

のみやげにしますわ。)では、「します ワイ」の「シマッサイ」が見られる。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

m………… フデシマサントケー イコ (トモトライ)

筆島さんのところへ 行こうと思っているよ。

などとある。石川県下では、「ワイ」顕在のいちじるしいのに比して、「ワイ」内在形はよわいおもむきである。富山県下も、ほぼ同様か。「ワッ^シ ワカ^イテ^クラー。」(わたしが沸かしてくるわ。)は、富山市近郊での一例である。新潟県佐渡には、「来^クラー」などの言いかたがよくおこなわれているか。越後にも「来^クラー」などが見られる。岐阜県下では、飛騨で「ド^ーゾ タノミマ^ッサ。」(どうかおたのみしますわ。), 美濃で「タ^ノンドキマ^ッサイ ナー。」(話してくれるように、たのんでおきますワイナ。 老男→藤原)などが聞かれる。愛知県下の『南知多方言集』には、

「ナイ」 (ぬ・わい)

との説明が見える。私が知多半島で聞いたものには、「マ^タ ク^ラー。」(また来るよ。)がある。東海地方となって、「ク^ラー」など、関東での言いかたに通じるものが、こうして見られるというわけか。もっとも、『南知多方言集』には、「シ^ヌ シ^ト モ ア^ル シ^ンマ^レル モ^ン モ ア^ライ。(男) (死ぬ人もあるし生れる者もあるのだ。)」の形も見られる。長野県下には、「ワイ」陰在形式がよわいのか。静岡県下には、山口幸洋氏『静岡県小笠郡大東町大坂方言(上)』の「ア^ー ア^ーラ^ユル^コト^ト オ^ー シャ^ベッ^テラ^イ (あらゆることを シャベってるよ)」などもある。「ク^ラー」式の言いかたもかなりよくおこなわれているのか。山梨県下にも、「思^ウ ワ^イ」の「思^ウー」, 「できるワイ」の「でき^ラー」などがおこなわれており、『奈良田の方言』にも、

オ^レガ オソ^イテ^クレ^ラー。(おれが教えてやる。)

などの例が見られる。

中部地方での、「ワイ」に関する複合形の文末詞としては、やはり、「ワイナ」「ワイノ」「ワイネ」「ワイヤ」などがとりたてられる。

○ド^ノコ^ノ ヲド^モシ^ユモ^イ ヲ^ショ^デス[↑] ワイ^ネ。

どこの子どもさんもおんなじですわ。

は、越前海岸での「ワイネ」例である。能登では、「ワイネ」が、「ウエイネー」「ウェーネ」「ウェネー」などともなっている。『全国方言資料』第3巻の「石川県輪島市名舟町」の条には、

mア (*f* ソーナン) ダ^エタ^エワ サケノ キゲンノガジャワイシ
 そうです。 だいたい酒の 勢いでなのだよ。

など、「ワイシ」の形も見られる。私が輪島で聞いたものには、「ワイエー」もある。石川県下・富山県下には、「ワイニャ」「ワニャー」などもある。富山県下にも、やはり、「ワイネ」がよくおこなわれているが、中に「ワイカ」などもあるらしい。越後北部にも「ワイシ」がある。新発田市での一例は、「オラ^ソンナ トケ^イガネ ワイシ。」(わしはそんなところへ行かないよ。)である。——人は、「ワイシ」を同等間でつかうと言い、年寄りがよく言うと言っている。岐阜県下には、「ワイナ」の隆盛の中に「ワイサ」もある。「ワイナ」は女性につかわれがちのものか。愛知県下では、とくに「ワイモ」「ウェーモ」が注目される。静岡県下では、山口幸洋氏の『静岡県本川根方言の文』に、

ユーワイレー (78), ナイワイレ (44, 319), ミエノーワイレ (576), ヨ
 イワイレ (661) に認められるワイレがある。強調形というべきである。

などの記事が見える。私はかつて、浜松市を西にはずれての一集落で、「ホイ^ホイ^フー^ウェー。」(もしもし、ねえあなた。?)との言いかたを聞いた。これはどういうものなのか。静岡県下も東部に寄ると、また、山梨県下ともなると、「ワイ」に関する複合形の文末詞は、さほど見られないのではないか。

関東地方には、「ワイ」に関する複合形の文末詞はあまりおこなわれていず、おもには、「ワイ」陰在の形がおこなわれている。全般状況は、神奈川県での「ス^スム^ガ ヲ^ク シ^ッテ^ラー。」(進がよく知ってるよ。), 東京都下での「オ^コッ^テラ^ー。」(怒ってるよ。), 千葉県下での「ミ^ヤゲ^ー カ^ッテ^クラ^ー (み

やげを 買って来るよ。)(『全国方言資料』第2巻 「千葉県安房郡富崎村布良」), 埼玉県下での「イッテ クラ (行って 来ますよ。)」(『全国方言資料』第2巻 「埼玉県秩父郡両神村」), 群馬県下での「オツカイ イッテ クラ。」(おつかいに行ってくるよ。)(「ヨンデ クライ」などの言いかたもある。), 栃木県下での「アーアーナンチュテ イラー。」(アーアーなんて言っている。——乳児のことを言う。), 茨城県下での「ヤマ ボッコシテガ (山を 越えて行きますよ。)(『全国方言資料』第2巻 「栃木県那須郡黒羽町」) といったありさまである。

八丈島や千葉県下・群馬県下・栃木県下では、「ワイ」の形が比較的よく見られもするのか。千葉県東北部での一例は、

○ヤワコクテ イケマセン ワイ。

(銚子石は) やわらかくていけませんよ。 (中男→藤原)

である。群馬県下での一例は、

○トショリガ ソレ ヨク ユー ワイ。

年寄りがそれをよく言いますよ。 (老男→藤原)

である。栃木県下での一例は、

○カレッチマツタカラ, サクモツワ トレマセン ワイ。

枯れてしまったから、(今年) 作物はとれませんよ。

(老男→藤原)

である。このように、男性たちも「ワイ」をつかっており、しかも、その言いかたを、かなりていねいなものにもしている。「ワイ」は、本来、このようにもつかわれてよいものだったのであろうか。

総じては、関東地方に、「ワイ」文末詞の活動は単純であると言うことができようか。

それにしても、「アーラー」(ある ワイ)「イカー」(行く ワイ)などの、「ワイ」を陰在せしめた形のものが、関西系の地域とともに、当地方にも、よくおこなわれているのは、注視すべきことである。

「アラー」式の言いかたと、「ワイ」ならぬ「ワ」の流行とには、なにほどかの関連があろうか。

東北地方の状況は、だいたい関東地方の状況によく連続するものようである。

一つに、やはり、「ワイ」の陰在が広く見わたされる。秋田県下での一例は、
○イネコギ[gc̣i] ヤッテラー。〈アクセント失〉

稲こぎをやってるよ。 (中男)

である。

ところで、福島県下や青森県「南部」地方には、「ワイ」もかなりよくおこなわれているようである。——山形・秋田などの諸県にも「ワイ」が見いだされるけれども。福島県下、会津北部での「ワイ」例は、

○マンダー シャンシャンダ ワーイ。

まだしゃんしゃんだ(元気がよい)よ。(ある人のことを話す。)

などである。『福島県方言辞典』には、

ソーダワイ さうですよ 中会南浜北

などとある。県下で、「ワイ」は「ウェー」ともあり、「ワン」ともある。『福島県方言辞典』には、

ソーダワン さうですよ 中会南

などが見える。青森県「南部」地方には、「ム[ü]カシ[i]カラ ココデ ゴザイマサイ。」(むかしからここでございますよ。)などの言いかたもなされていて、また、「ワイ」がよくおこなわれている。「ワイナ」もある。

○イマノ コトダ ワイナ。

現在のことですよ。 (中男→藤原)

などとある。「ワイ」の「ヤイ」もあるのか。私が野辺地町で聞いたものには、

○オラ コシニャ ドゴサモ イガネ ヤイ。

わしは今夜どこへも行かないよ。

などがある。『野辺地方言集』には、「ヤエ」の指摘があって、

「暗いヤエ」「甘いヤエ」は「暗いですよ」「甘いよ」といふ位の優し味
みのある女小供の多く使ふ語。

などの説明が見える。私も「南部」地方の南辺で「ク[ü]ヤシ[i]ク[ü]テダベ
ヤエー。」(くやしくてだろよ。)などの言いかたを聞いたことがある。『五戸
の方言』には、「アエの形をあげたが、これは『ワエ』又は『エ』ではないか？」
との記事が見える。なお、「南部」地方には、「ワイ」に相当する「アイ」も
あるのか。下北半島で聞いたものには、

○ム[ü]ッターリ[i] セワニ[i] ナル[ü] アイニ[i]シ[i]。

いつもお世話になるわねえ。

などがある。

北海道地方にも、「～てラー」式の言いかたがおこなわれているのか。柴
田武氏編の『お国ことばのニューモア』に寄せられた、佐藤誠氏の「大鱈、大鱈
いらぬか」(北海道江差)には、

「…………。ちゃっこい鱈だしけ、大きくなるよう、オガレ！ オガレ！
って売って歩いてらべせ。」

というのが見える。この「てらべせ」は、どういうものなのであろう。

「ワイ」は、北海道にどれほど見いだされるのであろうか。

「ワイ」文末詞のおこなわれることは、広く全国的である。近畿を中心に、
東は中部地方、西は中国・四国・九州に、「ワイ」が今日もそうとうにさかん
である。老若男女に「ワイ」のおこなわれていることが多い。

しかしながら、女性のことばの「ワ」が共通語化しているのに対しては、「ワ
イ」は、共通語化していない。こういう点からでもあろうか。「ワイ」はしだ
いに、品位の低いものとも見られたりするようになっている。農山村の年輩者
たちには、「ワイ」がかなりよいことばとして生かされてもいるけれども、「ワ
イ」が、今後あらたに発展していくような趨勢は、見こまれないであろう。

四 「バイ」の属

「ワイ」に対応する「バイ」がある。柳田国男先生は、「鴨と哉」(『言語研究』第一号)で、『行くバイ』『よかバイ』のバイなども、浄瑠璃でよく使ふ『あるワイヤイ』のワイ、又東京の娘たちの『行くワ』・『あるワ』のワと同じ語で、共にもう起原を意識しない『我は』であつたかも知れぬ。」と述べていられる。私も、自己の生活語の「ワイ」から出発して、つとに、九州の「バイ」に「ワイ」を感得してきた。九州肥筑地方に、「ワイ」と「バイ」との連存が見られ、また、その地方の人々に、両者を対応させた見解・感想が聞かれる。ドイツ語の、zwei などの発音には、[w]と[b]との微妙なわたりあいが見られるが、あれのように、「ワイ」は「バイ」とわたりあっているのであろう。天草で聞いたことばには、「シュー（しょう） バイ。」「シュー ワイ。」の対応するものがあり、私はこれに、「ワイ」形式と「バイ」形式との深い関係を見た。『富山県方言』には、「東京近傍の『べい』『びゃあ』等の語を用ふる事無し。いこーわい(ばい)いこーげいこーがい、と未来に言ひて『わい』『ばい』『げ』『がい』等の感動詞を添へて用ふる事普通なり」との記事が見える。愛宕八郎康隆氏は、富山県下で、「早稲」についての「ワセ」「バセ」を聞いていられる。岩井隆盛氏の「対人関係の辞的形式——石川方言を例として——」(『石川国語方言学会 二月会報』)には、「ミンバイ ミンバイヤ」「ミンワイ ミンワイヤ」というのが見える。

「バイ」文末詞は、全国的に見て、主としては九州肥筑地方に認められる。(『九州方言の基礎的研究』には、「文末詞『タイ』『バイ』」の図が載せられており、熊本県下・長崎県下・佐賀県下・福岡県下を主地域とする「バイ」の分布が見える。＜目的格を示す「バ」助詞の分布も、大略、この地方に重なっている。＞——それは「タイ」の分布と重なりあっている。宮崎県北部内・大分県西北部内にも、「バイ」が存在している。)しかし、「バイ」形式存立の可能性は、九州域内にとどまるものではないことが、上引の記事によってもすでに明

らかである。それにしても、九州方言内に、とくに、「バイ」が隆盛なのは、現に、九州方言域の方言地質の特異性を思わせるものであろう。

「バイ」の機能は、「タイ」の機能と見あわせて検討されるべきものである。——九州方言内では、「バイ」表現の生活と「タイ」表現の生活とが、いかにもよくつながりあっているからである。（もとより、言主たちの言語意識内に、両者の存立が緊密である。）今は、地方人士の、感想ふうの説明を引用してみよう。大分県の一知友は、“目上に対してうかがう時などに「バイ」をつかう。「タイ」と「バイ」とでは待遇用法がきっぱりとわかれている。”と言う。熊本県下の一知友は、“「バイ」は自分の内部で思う言いかたである。”と言う。長崎県下の一識者は、“「バイ」は自分に言い聞かせるので、詠嘆の意味がある。人に聞かせるのでも、なかば自分に言っている気もちが多い。人に言って、やはり自分にかえってくる。”と言う。神部宏泰氏は、さらに、「方言基質論序説——九州方言の基質について——」（『佐賀大学教育学部研究論文集』第27集）で、

こうして、「バイ」は、判断・分別表出の機能をにない、「ワイ」にみられない指定性を帯びるようになってきたかと考えられる。

と述べていられる。

神部氏の上記論文には、「以上は、『バイ』の分布する周辺地域での状況であるが、いずれも『バイ』を、『ワイ』に比して、改まった、品位のまざったことばとしている点に注意される。」との記述も見える。辰野隆氏は、かつて私に、“「わたしゃ あんたに ほれとる バイ。」の「バイ」は、ちょっと敬語だ。”と語られた。

「バイ」に、変形と複合形とが認められる。（「バイ」と同質の「バ」は、別類として後述する。——「ワ」に対応するものと見る。）「バイ」に近い「バエ」がある。「バイ」からの「ビャー」「ベー」などもある。「バン」「バウ」「バオ」「ボー」などは、なんらかの複合形からの転形かもしれないけれども、現在形は、いかにも、「バイ」相当の単純形ふうである。（「ボー」は「バイ＋ヨ」

からきたものとする考えかたがあるか。) 複合形は、「バイナ」「バイネ」, 「バ
イアート」「バイアタ」「バイタ」「ベータ」などである。

九州方言にあって、「ワイ」文末詞には複合形がすくなく、「バイ」文末詞
にはそれがやや多いのは、一つの注目すべきことである。

以下に九州方言の「バイ」を見るまえに、南島の一事実にふれておきたい。
生塩陸子氏の「沖繩伊江島方言の文末表現」(『方言研究叢書』第5巻)には、
つぎのような、文末特定成分の「バイ」が見える。

○イチム^ツン ッウヤ^ビラン ナタル^ル バイ。

<動物 も いなかった のか。>

「のか」と言いかえられている「バイ」は、どういうものなのか。

九州方言の「バイ」は、全国的見地からして、まことに特筆すべきものであ
る。そのさかんな現行状況は、以下に述べるとおりである。

鹿児島県

本県下には、「バイ」の分布が見られない。九州方言にいちじるしい「バイ」
文末詞とはいいながら、九州南部域は特別の地域になる。「ワイ」があつて「バ
イ」がないのはどうしてなのか。[w]>[b]の子音転訛が、とくにこの地域で
きらわれたのは、なぜなのだろう。他種のものとの存立と変化とに関係すること
かもしれない。

鹿児島県下に「バイ」の分布が見られなくて、ただ、鹿児島県薩摩北部の島
嶼には、「バイ」がおこなわれているらしい。上村孝二氏の「長島・獅子島の
方言」(『九大国文学会誌』復刊号 昭和23年)には、

九州北部の詠嘆助詞バイも獅子島へ侵入して来てをる。東長島村の鷹巢
辺では若い者がこれを用ひるといふ(児玉市郎氏報告)が単なる模倣らし
い。

とある。

宮崎県

本県下では、北部の東西臼杵郡下に「バイ」のおこなわれていることが、すでに明らかにされている。岩本実氏の『日向の高千穂方言』には、「肥筑系のタイ・バイ・バが用いられる。」との記述が見える。『全国方言資料』第6巻の「宮崎県東臼杵郡南方村」の条には、

*m*ウナラ マー ヨコワッシャイ オレヤ モー イヌルバイ

それでは まあ 休みなさい、 おれは もう 帰るよ。

などとあり、同第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条には、

*f*チカゴンノ ナエワ ヤッパ フトカッタバイ

この間の 地震は やはり 大きかったですよ。

などとある。なお、「桑野内」の条には、「バェ」「バン」の形も見える。県北に、「トバイ」複合形も見られる。

ところで、私は、県中部の児湯部の西奥で、一週間調査のさい、

○モー ヤマイキジャロ パーイ。

もう山行きだろうよ。(早く出かけているのを見て言う。)

(老女)

などを聞くことができた。上の例について、私が、「パーイ」を中年女性にただしたところ、その人は、「モー ヤマイキジャロ パーイ。」と言うのだと教えてくれた。土地の識者は、私のこのカードを検閲して『『パーイ』よりも『ワイ』の方が米良的である。』<米良的とある米良は、当所、西米良村のことである。>との注記をほどこされた。当地の人で、「知ラン バイ。」などの「バイ」を“湯の前<熊本県>のことばじゃないかしらん?”と言う人もあった。ほかにも「バイ」を球磨弁と見る人があった。ところが、一方では、“「バイ」を古い人はよく言っていた。とくに村所<集落名>が「バイ」をよくついていた。”というような談話も聞かれたのである。“「ドージャ パーイ。 コージャ パーイ。」と「バイ」をよく言った。”との教示もあった。「ワイ」にまぎれやすい「バイ」の、しぜんここにもあり得たこと(あるいは発生し得たこと)が考

えられる。

ちなみに、この地で見た『椎葉村 大河内方言』という稿本の中の「バイ」文末詞例は、「ソウバイ（そうです）」「ヒッチートルバイ（ひつついているよ）」「ユウバイ（いいつける）」などである。

県北の東西白杵郡のほかにも「バイ」が聞かれる可能性は、なお他地にもあるのだろうか。児湯郡東南岸にも「バイ」があるよし、私は、橋口巳俊氏の教示を得ている。

○オッダ メシ ク バーイ。

私達は御飯たべるよ。 (小男→中女)

○インニエ。 ソンゲナ コタ ネ バイ。

いいえ。そんなことはないわ。 (中女→老女)

などの言いかたがなされているという。ここには、なお、「トバイ」「ツバイ」の複合形もあるという。橋口氏は、

「バイ」は目上の人に対する時や、ていねいな言葉づかいをしようとする時に使われる。目下の人に使われる「ド」に対応する。強調的に訴えるものであるが、語勢はおだやかである。上品な田舎ことばという意識をもっているようである。

と言われる。

熊本県

本県下となって、県下の全般に「バイ」のおこなわれることがはなはださかんである。(これが、「タイ」の盛行とつれあっている。)

県中央部での一例は、「コリャ イカン バーイ。」(これはいかんわい。)である。——“自分でうなずく時、「バーイ」とのびることがある。”という。その他のばあいもあろうか。しばしば、「バーイ」の長呼が聞かれる。「子どもをひとり寝かせておくと、タイセツ バーイ。」(……、「おおごとだ」！若い母→中女)は、阿蘇山南麓で聞かれたものである。

「バイ」の用いられることは、きわめて自在である。「だれそれが 来タ

「パイ。」とも言われれば「だれそれさんが コラシタ パイ。」とも言われる。また、「だれそれさんが キナハッタ パイ。」とも言われる。「～デス パイ」「～マス パイ」「～モス パイ」の言いかたも、自由になされる。さらにはまた、「エート、キノー パイ。」(ええと、きのうだよ。)などとも、自由に言われている。「パイ」が、「タイ」のばあいに等しく、ただちに体言を受けもする。

「知ラン パイ。」「知ラン ワイ。」など、「ワイ」と「パイ」とのつれあうさまもよく見られる。人は、「パイのほうが古い。ワイと言うと無邪気。」などとも言っている。

県下で、「パイ」に変化形ができており、県南などには、「ビャー」や「ペー」がある。「カッキル ペー。」は、「ペーペーことば」などではなくて、「パイ」の「ペー」を見せたものである。(だから意味は「書けますよ。」である。) 県南の天草島のうちには、「バエ」形がある。「イク 下バエー。」(“行くんだよ。いいかい?”)などの言いかたがなされている。「バエ」は「パイ」からのものか。「バエ」なのか。私が天草下島の東北部で聞いたものには、「パイ」の「ッパイ」もある。

県下には、なお、南北に、「バン」の形が見られる。

○となりのへやには、ジーサンガ ネットラス トバーン。

となりのへやには、じいさんが寝ていられるんですよ。

は、天草での一例である。「バン」は、「パイ」からのものか。「バナ」からのものか。「バンタ」からのものか。単純に、「パイ」が「バン」になることも、あり得たのではないか。

秋山正次氏は、昭和32年9月のNHK放送で、五家の荘の「タマラン バオ。」を紹介された。「バオ」について、氏は、「パイ」と「オー」との結合を認められたように思う。「バオ」に隣る形「バウ」もある。能田太郎氏の「肥後南ノ関方言類集 用言篇」には、「バウ」についての「パイと同義で目下に用ひ、卑語に近い。」との説明が見え、「行くバウ(行くよ。)」などの例が見える。「ボ

一」の形もあり、天草・県北地方などに見られる。熊本市内で聞き得たものは、
○ソギャーン グッサリ キタラ アツーシテ モテン ポ (バイ)。

そんなにたくさん着たら暑くってもてないよ。

などである。阿蘇山南麓で聞いたものには、「ナンデ ポー。」(“何ですか?”
何しているのですか?)がある。県下で、「ポー」「ポ」の形が見られる。

本県下での、「バイ」に関する複合形には、「トバイ」「ツバイ」「ツバエ」が
あり、「トバン」もある。天草下島北端での一例は、

○ジーサンガ ネットラス トバーン。

(となりのへやには) じいさんが寝てられるんですよ。

である。天草には「トバイエ」も認められるか。「モンバイ」も所々におこなわ
れている。「バイ」の上接する複合形は、「バイナ」「バイネ」である。

f………… モンツキャ テシー オッタトバイエ

紋付きは 自分で 織ったものですよ、

は、『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条に見えるものであ
る。

長崎県

本県下にも「バイ」がよくおこなわれている。「〜デス バイ」との言いか
たも多くなされている。「バイ」の自由な使用ぶりを佐世保市のことばで見
るならば、「イカンバ バイ。」(行かなくちゃね。)などが見られるありさまであ
る。体言の言いかたを受けて「バイ」のはたらくこともつねのことである。

「ソイバッテン モー シガツカラ ガッコー バイ。(そうだけどもう4月か
ら学校だよ。) 少男→老女(愛宕八郎康隆氏教示)のような言いかたがなさ
れる。「バイ」は「バーイ」とも言われることがある。西彼杵半島で聞いたこ
とばには、こういうのがある。「カーチャン ハヨ コー。」(母ちゃん早くおい
で。 夫→妻 幼児が目ざめて泣くので妻をよぶ。), これに対する老母の答え
が、「オラン バーイ。」(いないわよ。)であった。五島などでも聞かれる「バ
ーイ」、こういうあざやかな長呼形は、九州方言下に特有のものであろう。県

下に「バイ」のおこなわれることは、巻岐にも対馬にもさかんである。

本県下には、「ポー」「ポ」は見られないけれども、「バン」がある。県下に広くこれが見られるようである。『島原半島方言集』には、「センバン（しませんよ）」などが見られる。「バン」は、「バイ」からのものか。それとも、「バナ」からのものか。ときには、「バンタ」の「タ」略のこともあるのか。（「バイ」が「バン」になることは音韻論上可能ではある。）ともあれじっさいにおこなわれている「バン」文末詞は、そのはたらきが、「バイ」文末詞のはたらきによく似ている。

本県下の、「バイ」に関する複合形の文末詞では、「トバイ」がよくおこなわれている。「コリャ オリガ トバイ。」（これはおれのだよ。）は、平戸での一例である。「ツバイ」もある。『続巻岐島方言集』には、「トデバイ」「トエバイ」なども見える。「バイ」の上接する複合形では、「バイナ」が目だたしい。

○ゲンバクデ ノコッタ バイナ。

原爆で生き残ったんですね。（中男→藤原）

は、五島での一例である。「何々だね？」と問うのに「バイナ」の用いられているのが注目される。『長崎方言集覧』には「バイナン」が見え「バイノ」も見える。県下の東西に、「バイネ」も見える。

佐賀県

本県下にも、「バイ」文末詞のおこなわれることがさかんである。ところで県下には、「バイ」とともに「バン」も見られる。——「バン」のおこなわれることは、長崎県下同様である。「バイ」文末詞での佐賀県地方の地位が、ここに、いかにもと、よく了解されよう。ちなみに、佐賀県下と熊本県下とをつなぐ福岡県筑後には、後述のように、やはり「バイ」「バン」が見られる。

本県下での「バイ」は「バーイ」と発言されることも多く、音訛形の「ビャー」も見られる。小野志真男氏は「佐賀県方言区画概観」で、「ビャー」につき、

有田地方特有。杵島郡住吉・中通・武内村などにも及ぶ。

と述べていられる。私が、県南の旧須古村の調査にしたがった時には、老人から、「ムカーシャ [↑]ナタ。(むかしはね。) ビャービャー言っていました。」との説明が聞かれた。「須古ビャー」などとも言われていたよしである。

「バイ」単純形の例を、唐津城外ことばに見るならば、「コリヤー ワタシン トデス バイ。」(これはわたしのですよ。)がある。県下に「バイ」のさかんにおこなわれる中であって、ほぼ劣らずとも言えるほどに、「バン」もさかんにおこなわれている。佐賀県下では、熊本県下の「カイタ」「パイタ」「タイタ」に対する「カンタ」「バンタ」「タンタ」がよくおこなわれている。「ナンタ」文末詞も、県下によく見られるものである。このように「～形」のよくおこなわれているのからすれば、「バイ」に対する「バン」のよくおこなわれているのも、なるほどと理解される。「バン」は「バナ」からのものであるのか、というようなことは、やはり保留しておく。現実の「バン」が、はたらきのうえで「バイ」に恰当していることは、重ねて言うまでもない。「バン」の用例は、「チャーント シットー バン。」(“ちゃんと自分はわかるよ。”)などである。

県下の「ポー」は、県東部域内によく見られるのか。一知友は、佐賀市のことばとして、「イク [↑]ポー。」(“行くぞ。”十五歳くらいの少年が友人に。)というのを教示してくれた。小城町にも、「コイバ センバ イカン ポー。」(“これをしないといけないんだよ。”)などと、「ポー」がおこなわれている。『佐賀県方言語典一斑』には、「パーウ (bō)」の指摘があり、

「パーウ」は「バン」の訛であらうが、^{<註「う」か>}「バン」同意にて卑しい語である。との説明が見える。

本県下の、「バイ」に関する複合形の文末詞には、「トバイ」「ツバイ」があり、「バイナ」「バイノ」もある。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」の条には、

mウン カライモナラ イッチョー モローテ イコカノバイ

はい、 さつまいもなら ひとつ もらって 行こうかね、

というのがあり、「カノバイ」というのが見える。県下に「バンタ」のあること

は、さきにもふれた。ところで、「唐津にはこれがなく、バイ、タイ、クサイがすでにいくらかの敬意を含み、」（小野志真男氏「佐賀」〈ことば風土記〉『言語生活』第十五号）とのことである。

福岡県

本県下となって、「バイ」のおこなわれることは、上記諸県でよりも、いくらかよいか。それにしても、筑後・筑前西部などには、これのおこなわれることの、そうとうにさかんなものがある。県東部の豊前には、概して、これが見られない。加来敬一氏は、「福岡県方言の語法」（『北九州国文』第五号）で、「バイ」の分布につき、

豊前区の小倉、京都、筑上、筑前区の戸畑を除く県下全域に亘り使用されている。

と言われる。

筑後・筑前にわたる「バイ」分布の中にあって、「バーイ」も聞かれ、また、「ベー」音訛形も聞かれる。『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条には、

mチョット アー イッテクルベ¹⁾

ちょっと でかけてくるよ。 1) おそらく、「バイ」の転。

などというのが見られる。筑前で「バイ」の例を出すならば、博多西北の糸島半島で聞いたものには、「モー ミコミ ナイ バイ。」（もう見こみはないよ。）などというのがある。同地で、

○ユリコ バイ。ジュンコチャン タイ。

（わたしは）ユリコですよ！（これは）順子ちゃんですよ。

（小女→藤原）

などというのも聞かれた。なお、車中、久留米に帰る人、老男の、幼女に語ったことばには、「ウミ バイ。コノ ウエワ ウミ タイ。」（海よ。このトンネルの上は海だよ。）というのがあった。

筑後内では、すでに述べたように、「バイ」と「パン」とがならびおこなわれ

ている。「タイ」と「タン」ともならびおこなわれている。「いやですよ。」は、「イヤ バイ。」とも「イヤ バン。」とも言われている。かつて柳川では、城内弁の人から、「バイ」についての、“「バイ」を目下に言う。目下にしかつかわぬ。”との説明を聞いたことがある。

「バン」は「バナ」からのものと見る考えかたが、肥筑の人には、とられがちであろうか。

本県下での、「バイ」に関する複合形の文末詞には、「トバイ」があり、それに類する「ソバイ」（東部内のもの）がある。「バイナ」がよくおこなわれている。筑後内に「バイナイ」もある。県下に「バイネ」もある。「バエ」もある。筑後内には、「バンモ」もおこなわれている。

○ナ^ンジャ アエ^タ バ^ンモ^ー。

“見知らぬ人が何かを落として知らずに行きすぎるのを注意する。”

（六十歳女性）

は、柳川での「バンモ」の一例である。

「ナバイ」もあるのか。『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条には、

*m*バ^ッテン ミア^イダ^ケ ヲ サケ ダシマ^ッシ^ェン^ナバイ
しかし 見^合いに^だけは 酒を 出^しませ^んよ^ね。

というのが見える。筑前東部には「バイノーマイ」も見られる。

大分県

本県下には、例の豊後西北部の、「タイ」も見られる地域に、——じつはそれよりも広く、日田郡下・玖珠郡下にわたって、「バイ」が見られる。日田郡下の一例は、

○ヨ^ー ヨ^ビ ヲ^ー ヲ^ッタ^デス バイ。

よくよんでたですよ。 （青男→藤原）

である。玖珠郡下での例は、「ソ^ー バイ。」（そうですよ。そうよ。）などである。

玖珠郡下の一知友は、「バイ」について、「同輩以上に対する敬意がある。“イマ カエッタ バイ。”は、語意としては、“今帰りましたよ。”と、念を押し納得せしめるのであり、(中略)訴える気持あるいは忠告的に相手に反省を求めたり、軽く脅してたしなめたりする気持がある。」と報ぜられた。

はっきりとした、「ワイ」系文末詞の「バイ」は、まず、九州、肥筑地方本位のものである。しかし、「バイ」の音形をとった文末詞は、なお、すこしく他地にも認められる。つぎには、それを追跡してみよう。

近畿の「三重県北牟婁郡海山町河内」(『全国方言資料』第4巻)には、

*m*アー ソエジャ マー ツツン³⁾バイ

ああ。 それでは まあ 包みますよ。

3) 6行目の「ワエ」と同じ語源の語か。

というのが見える。この「バイ」は何だろうか。「ワイ」系のものとれなくはなかるう。

都竹通年雄氏の『奈良県北部方言覚書』には、

サイヤベ^oー (然り) (山辺郡福住村)

セヤベ^oー (//) (添上郡東山村)

との記事が見える。この「ベ^oー」は何なのか。

つぎに、石川県下に「バイ」形があるらしい。『全国方言集』には、

アリマスバイ 有りますか 金沢市

との記事が見える。問いの「か」に相当する「バイ」は何だろうか。

「富山県氷見市飯久保」(『全国方言資料』第3巻)には、

m………… ワッチャ ワカイ ジブンネ ヤッパ⁶⁾ル ソノ モスロー

われわれの 若い 時分には、 やはり、 むしろを

オッチャー ゴソク ナッタカッチャ マ カジーテ タカオカエ モ

織⁷⁾っては、 五束に なったといつては かついで 高岡へ 持

テタ⁸⁾ヴェ

って行ったものだ。

6) [ε] 7) むしろ10枚で1束。

8) [ve]。「わい」の意。

というのが見える。これの「ヴェ」は「ワイ」相当のものではなからうか。（「ワイ」の「ウエ」が「ヴェ」になったものか。）

北陸は新潟県下にも問題事例がある。小林存氏の「越後方言の結語法概観」（『国語研究』第十卷第七号）には、

このバを他に向つて多少婉曲に物いふ場合にはバイシといふ。

だ（誰）がエゴバイシ

との記事が見える。「シ」を、「もし」の「シ」としてとりわけて見れば、残る「バイ」は、「ワイ」相当のものかと解される。越後にあつて、「バ」も「ワ」相当のものであるらしい。

福島県下に、「ソーダバイ。」などの言いかたがある。私は、土地の人に“九州のおなじだ。”などと言われて迷った。「ソーダバイ。」に類するものに、じつは、「ソーダッバイ。」というもある。「バイ」から察せられるとおりに、「バイ」は「ベー」に等しいものであろう。遠藤豊吉氏の「子供の詩に見る『母』（『中国新聞』昭和43年5月12日）には、「おかあちゃんだって 毛ぐれ（くらい）とかすばい（だろう）」というのが見える。

「山形県東田川郡朝日村大鳥」（『全国方言資料』第7巻）には、

*m*ソナダモンデ $\left(\begin{array}{c} \text{ウン} \\ f \end{array} \right)$ シナリェンバイト
「そんなもので 死なれるものかい」と

というのが見える。この「バイ」はどういうものなのか。『山形県方言集』には、「鍵なら引出の中にあんのば。（鍵なら引出の中にあるのに。）」などの事例が見える。

青森県下に問題事例がある。津軽半島で私が聞いた、

○オメ^ー 下^ーサイ イグ[ü]ンダ^ー ベェ^ー。

おまえどこへ行くんだよ。（問い）

というのがある。「南部」の野辺地で聞いた、

○オラダ^ーッキヤ^ー ソッタラ^ー ゴト^ー シネ^ー デベェ^ー。

わしだけはそんなことをしないよ。（子どもの弁明）

は、「バェー」よりも「てば」をとらえしめるものではないか。問いの「バェー」は、どういうものであろう。野辺地町では「バイ」の音形を聞いたこともある。『野辺地方言集』には、「ビャ」の指摘があり、

願望語バヤに当る。「行くビャ」は「行かうよ」にあたる、文語のバヤに出でたか。

との説明が見えている。宮良当壮氏の「東北方言と南島方言との比較研究」(『帝国学士院紀事』第三卷第二号)には、

tera-me:re sa: igu bæ: (お寺詣りに行かう) [青森大利]

というのが見える。これは「行くペー」を見せたものか。

北海道の『礼文島言語調査報告』に見える、

○アガミノ ウチデ ヤルバイ。

野上の家でやろうよ。(五十五男→五十男)

の「バイ」も、やはり「ペー」助動詞なのであろうか。

五 「ワ」の属

文末詞「ワ」に関しては、かねて、「は」起源の考えがある。近古の文に、「は」終止の感嘆文ないし感嘆文的なものが見られ、そこに出ている「は」が、終助詞と受けとられがちである。

私は、現今の諸方言上の「ワ」は、おなじく現今の諸方言上にさかんな「ワイ」と同種のものであろうと考えている。現代方言上での「ワ」文末詞は、関東地方の女性発言のばあいなど、総じて上がり調子に発言されるものである。古文獻上の「は」終助詞は、むしろ下がり調子に発言されがちなものであったのではなからうか。

今日の方言上の「ワ」は、「ワイ」・「バイ」とよくつながりあっている。その全体が、「あなた」系の文末詞とよく対応している。人代名詞を用いる、よびかけの体系が、ここに明らかなように思われる。

「ワ」の使用は、全国的に見て、「ワイ」の使用にいちばん近いのではない

か。

「ワイ」は「ワー」にもなりうる。「ワー」からはすぐの所に「ワ」がある。（「ワー」には、「ワイ」からのものか「ワ」からのものか、判然としないものがある。）

現代諸方言上での、「ワイ」と「ワ」との密接な関連を、実地に見てみよう。大和十津川のことばに、「クセガ ダイブ アリマス ワイ。」（癖がだいぶんありますよ。男）というのがあり、また、「アカン ツイテ ラッシャ アリヤセン ワ。」（枕かけにあかがついてさっぱりだめだわ。女）というのがある。岩井隆盛氏の「対人関係の辞的形式——石川方言を例として——」（『石川 国語方言学会 二月会報』）には、

「行く」「行きます」「行くとも」

イクワカ イクワケ イクワノ

イクワイカ イクワイケ イクワイノ

イクワイヤ イクワイネ イクワイシ

との記述が見える。飛驒の高山市では、私はかつて一老女から、「オラー コンヤ ドッコイモ イカン ワイ。」（わしは今夜どこへも行かないよ。）「ヒダ デス ワ。」（飛驒ですわ。）というのを聞いた。八丈島出身の中年女性からも、「ソリヤ ホント ドージャロ ワイ。」（それはほんとうでございますわ。）、ソリヤ ホント デ オチャリ イタソ ワ。」（それはほんとうでございますわ。）というのを聞いたことがある。津軽で私が聞いたことばには、同一人の「ワ フ[ü]ク[ü] ワ。」（“私が拭きましょう。”）、ワ イ[i]グ[ü] ワ。」（私は帰るよ。）がある。私自身の郷里（瀬戸内海大三島北端）でのことばづかいでは、「ワイ」のおこなわれることがさかんであって、まま、老人たちに、「イ コー ワー。」（行くとしょうか。）など、「ワー」がおこなわれている。——「ワー」は「ワイ」に属するものと考えられる。一般に、「ワイ」のおこなわれるところに、「ある ワイ」の「アラー」などもおこなわれがちである。伊予南部などでは、「アラー」形式ではなくて「アライ」形式がおこなわれている。（「すラ

一」も「スライ」である。)「アライ」と「アラー」とを合わせ見た時は、「ワイ」と「ワ」との同一性が察せられよう。

「ワイ」と「ワ」とは、本質的に同種のものと思われるけれども、記述にあたっては、両者を別あつかいにするのが穏当かと考えられる。なんとなれば、東京語中心の女性発言では、「ソ^ナノ イヤダ^ワ。」などと「ワ」の上昇調の習慣が見られて、この種のことは、およそ独自のものである。近畿弁では、「ワ」の下降調が男女に一般的であり、これはまた独自のものである。これらの事実によりつつ、「ワ」の独自性を認めるとすれば、記述は、ひとまず「ワイ」からわけてのものとするのが、適切であろうと考えられる。用語感情からしても、「ワ」には、「ワイ」のとは区別すべきものが認められる。——(このようではあるけれども、「ワイ」の記述と「ワ」の記述とをしかるべく対応せしめるべきことは言うまでもない。)

「ワ」に関する複合形の文末詞には、「ワナ」「ワノ」「ワネ」などがあり、「ワヤ」「ワヨ」「ワエ」などもある。変わったものでは、「ワサ」というものもある。「ワシ」もある。複合形に、「ネワ」「ヨワ」などは、ほとんどおこなわれていない。

「ワ」文末詞の分布は、広域にわたる。おおよそは全国的存在とも見られる「ワ」を、以下、地域別に見ていこう。

南島地方には、本題の「ワ」があるのかどうか。宮良当壮氏の「琉球民族とその言語」(『日本の言葉』通巻第四号)には、那覇の「フェーク クーワ。(早く来よ。)」などが見える。私が、沖縄本島国頭の人から聞いた事例は、「クマカイ クーワ(クワー)。(こちらへ来い。)」などである。こうした「ワ」はどういうものなのであろうか。国頭の辞去のあいさつには、「マタ クーワ。(また来るよ。)」があるという。これなどを見ていると、「クーワ」の「ワ」は、とりはなして「ワ」文末詞と見てもよいものかと思われる。徳之島のことばに

は、

○アマ イダ ウバン コーワ。

母さん早くごはんをたべようよ。

というのがある。「ワ」をとりはなしてよいものか。

金城朝永氏の『那覇方言概説』には、

那覇方言の[mise:n]の命令形[miso:ri]が、助詞[wa]と融合して[miso:re:]

となったやうに

との記述が見える。これはどういう助詞なのであろうか。

九州地方全般の状況としては、本題の「ワ」が、ふるわないありさまである。東二県は異なる。

鹿児島県下。薩摩で、「ヂワ タカカッチェン、シヨ ナ ワ。」(“利息は高かっても、しょうないわ。”)のような言いかたが聞かれる。本題の「ワ」文末詞が認められようか。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条には、

f…………, モロワニャ スマンガーワ
帰らなければ すみません。

というのが見える。これの「ワ」文末詞も、自称系のものではなかろうか。ところで、同「上屋久町宮之浦」の条に、

*f*ホーデ ワー
そしてね あなた、

というのも見える。ところでまた、同第9巻の「鹿児島県阿久根市大川尻無小麦」の条には、

m…………, クサン コシ カガロ ゴッ シトッタッドワ
草が 腰に さわる ぐらいいに なっていたよね、

というのがある。「ワ」に関して、自称系・対称系が、どのように解されるのであろうか。ともあれ、「ワ」文末詞の見られることは、鹿児島県下に一般的

のようである。(島嶼部をもふくめて)「ございます」に相当する「ゴアンサ」の「サ」は、「ス ワ」からのものであろう。薩摩半島には、「ヨカタイバツ、タケ ワニー。」(“よい品だが、(なにぶん)高いからねえ。”)など、「ワニ」複合形も認められる。

熊本県下には、本題の「ワ」のおこなわれることが、ごくよわいか。天草に「ワ」がある。

○モー ネーツァー デンド ワー。

もう熱は出ないだろう。

などの言いかたがなされている。土地の人は「ワー」についての私の質問に答えて、“推量につける強勢”と言ってくれた。一方、秋山正次氏の「五家荘のことば(熊本)」(『NHK国語講座』昭和32年8・9月)には、

騒イデバカリ居ットゾ、ソソ外道ドマー。ツラサシクデーヤッタワ(顔を押し込んでやったよ)

というのが見える。

長崎県下にも、「ワ」のおこなわれることがごくよわかる。『全国方言資料』第9巻の「長崎県福江市上大津」の条には、

f…………, タカマサン カンサマ チューワー⁴⁾

「たかま」さまの 神さま というんですよ。

4) 以上はそう入句。たかまの神様がともした火がオンメンヒであるという説がある。

などというのが見える。私は五島で、「チョット アスンデ クル ワヨ。」(ちょっとあそんでくるわよ。)などというのを聞いている。県下での「どうどうしマッサ」などの言いかたには、「マス ワ」がくまれるのか。『嶋原半嶋方言の研究』には、

おつだー が とこん やつどま、ひとつでん まんだ やくい たつやつが おらん わーさ。(俺れの家をやつどもは一人でも、まだ、役にたつ者が、ゐないのだよ。)

などというのが見える。——九州での「ワサ」複合形はめずらしい。なお同書

には、「それが面白いのです。」にあたる「そり が おもしろいのわ、」というの見える。

「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」(『全国方言資料』第6巻)にも、
*m*モー ソイデモ マー イマジブンノ ムンナー ヒャクショーワ キツ
 もう それでも まあ このごろの 者は 「百姓は 苦し
 カ キツカ テューノワ
 い 苦しい」 というねえ。

とあり、「ノワ」が見える。佐賀県下に「ワ」のおこなわれることはよわいらしい。

福岡県下にも「ワ」がよわい。『全国方言資料』第6巻の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」の条には、

f…………, ヨーキニ イミールチュタワー
 たくさんに ふえると言いますね。

などというのが見える。築上郡は、県東部の豊前域内にある。豊前北部にも「ワ」が見られ、「ワナ」や「ワネ」の複合形も見られる。

さて、豊前域は、大分県下にあっても「ワ」をよく見せ、かつ、大分県豊後にも「ワ」がよく見られる。

○グル ヒトガ オー ナル ワ。

“来る人が多くなるわ。” (老男→青女)

は、豊前域内での一例である。私が、国東半島の一地で経験したことであるが、たとえば「何々が アル ワ。」などと、中学生男子も言っているのに加えて、たとえば青女の、

○「クダッテ コー カ。」 ヨー ッタ ワー。

「下ってこようか。」(下の部落へ) って言ってたわ。

のような発言もある。これに「ワー」と、長呼形が見られるけれども、ものは「ワ」であろう。県南部での例は、

○オモシロイ コター シラン ワー。

おもしろいことは知らないよ。

などである。本県下での複合形では、「ワナ」のおこなわれることがいちじるしい。「いろいろお話しして クレ^ル ワ^{ナー}。」などとある。

宮崎県下にまた、本題の「ワ」がよくおこなわれている。鹿児島県下の方言状態に直接する、県下西南部域の「ワ」のことはおくとしても、県南の「宮崎県日南市飢肥町」（『全国方言資料』第6巻）にも、

*m*イテ クルワ
行って くるよ。

などの言いかたがおこなわれている。県中部西奥での私の調査例は、

○コンドワ トーキョーニ イテ クル ワ。

こんどは東京に行ってくるよ。 （中男間）

などである。老若（幼も）ともに「ワ」をよくつかっている。人は、「ワ」を、“女性の用いる感嘆詞”とも言っている。ところで女性は、「アタラシー^ワ^ー。」（新しいわ。）などと言っており、「ワ^ー」と言うことはない。県中部一般に「ワ」「ワ^ー」が聞かれ、北部にも「ワ」が聞かれる。『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条には、

*m*ハー イクワ ソリャ
ああ 行くよ、 そりゃ。

などというのが見える。本県下での「ワ」に関する複合形では、やはり「ワナ」のおこなわれることがいちじるしい。「ワノ」もある。「ワヨ」もある。県中部での「ワヨ」例は、「モ イラン ワヨ。」（“もういりませんよ。”）などである。

九州東がわの「ワ」分布に呼応するがごとくに、中国地方も、その山陰がわが、「ワ」文末詞をよく見せている。

はじめに、山陽がわを見よう。こちらがわには、自称系の「ワ」を用いる言いきりの表現が、さまでおこなわれていない。山口県下には、やや多く、事例が認められるか。『全国方言資料』第5巻「山口県美禰郡秋芳町別府江原」には、

m…………, コンニャ ショーガ ナエーワ
来なくては しょうが ないよ。

というのがある。長門北辺で私も、「ワ」と「ワイ」とのならびおこなわれるさまを聴取している。周防島嶼部には、また、いくらか「ワ」がおこなわれているか。それが「ワー」とあっても、ものは、「ワイ」ではなくて「ワ」である。本県下に「ワネ」などの複合形も認められる。

広島県下は、「ワ」文末詞のよわい所である。内海島嶼部には、「ワ」がより認められやすくもあろうか。県下に点々「ワノー」「ワナー」などが聞かれなくもない。

岡山県下には、比較的良好「ワ」がおこなわれているか。備中島嶼部など、男女が「ワ」を言っている。「(ここは) オモシロイ トコデス ワ。」(ここはおもしろい所ですよ。)は、その男子発言例である。「何々に ヨロシーワ。」(何々にいいですわ。)などの言いかたが、県下の女性・男性に聞かれがちか。私が県北で聞いたものには、小学生五男の「ムズカシー ワ。」(むずかしいな。独話)というのがある。複合形には、「ワナ」などがある。備中島嶼での「ウレシモ ナイ ワナ。」(うれしくもないですよ。老男→藤原)というのでは、「ワナ」のアクセントが注目される。

山陰、出雲・隠岐に、本題の「ワ」文末詞のおこなわれることが、はなはださかんである。出雲西部での例、「ワカーマシエン ワ。」(わかりませんよ。), 「シチョー ワ。」(知ってるよ。), 「ヤッチョー ワ。」(やってるよ。)などは、さっそくに「ワ」文末詞をとらえしめるものである。大人・小人, 男子・女子, みなよく「ワ」をつかっている。私は, “「ワ」をつけてやわらげる。” という説明を聞いた。出雲東南部で, 「アメガ ファー ワー。」(“雨が降るなあ。”) などと言われているのも, 「ワ」文末詞をとらえしめるものである。「何々ダワ。」との聞こえもいちじるしい。「ワ」の発言に,

○イヤー, カワリマシタ ワー。

いや, 変わりましたなあ! (私が「もう, ことばはむかしとはだいぶ

ん変わったでしょう？」とたずねたのに対する返事)

(老男→藤原)

というようなものもある。——老男発言の「ワー」の音調が注目される。(これは特別のばあいであろう。通常は、中国地方ないし関西地方にあって、「ワ」[↑]「ワー」と発言されることはない。)

出雲に隣る石見ともなると、「ワ」のおこなわれかたが比較的よわいではなからうか。それにしても、「ウチニャー[↑]ナー[↑]ワ。」(うちにはないよ。)など、ほどほどに「ワ」がおこなわれているようである。

隠岐にさかんな「ワ」については、かねて、神部宏泰氏のご発表がある。その「隠岐方言の文表現上の『ワ』類文末詞」(『国文学攷』第六十六号)によるのに、隠岐に「ワ」(長呼の「ワー」も)がよくおこなわれており、

「ワ」の立つ表現は、「ワイ」の立つ表現に比して、陽性であり、外向的である。「ワイ」の立つ表現を、陰性で、内向的と見たのと対照的である。品位も、「ワ」は、「ワイ」より、いくらか上位にあるとみられる。……、「ワ」は、敬体の叙述を統轄しておこなわれることも少なくない。という。隠岐島方言に関する諸文献にも、ここでの「ワ」の盛行のさまがうかがわれる。

出雲・隠岐で、「ワ・ワー」は、たしかに、「ワイ」とはちがったものである。当地方での「ワ」に関する複合形としては、「ワナ」のおこなわれることがじつにさかんである。出雲例は、「家によっては[↑]センナンボダ[↑]ワナ。」(家によっては千いく円ですよ。＜配給ものの代金のこと＞)などである。男性たちも、「エー[↑]ワナ。」(いいよ。)などとよく言っている。ほかの複合形には、「ワノ」[↑]「ワネ」があり、「ワエ」もある。「ダワ」もある。

鳥取県下の「ワ」の状況も、鳥根県下によく接続するものである。「〜だワ」などの言いかたもあり、しかも、これがまた下降調である。短呼下降の「ワ」が、男女老若におこなわれる。「ワ」がしぜんに「ワー」ともなっている。

○アー、スズシーテ[↑] ウンミャー[↑] ワー。

ああすずしくてうまい(いい)よ。(川の中を歩くこちを言う。)は、小男の発言例である。老人層のばあいなどで、まれに、上昇調の「ワ」も聞かれる。

○マンダ マエデ ゴサンス ワ。

まだ前でござんすわ。(老女→藤原)

は、因幡中部での一例である。本県下での複合形には、「ワネ」がよくおこなわれており、「ワノ」もあり、「ワヤ」もある。

四国地方にまた、中国でと同程度に、「ワ」が一般的であろうか。男女に短呼の「ワ」が見られる。ぞんがいにつよい存立を見せてもいる。「ワ」が、まずは中等品位程度のものであろうか。

愛媛県下に、明らかに、「ワ」と「ワイ」とが両存している。「ナイ ワ。」(ないよ。)などとあり、「ワ」がときに「ワー」ともなる。『全国方言資料』第5巻の「愛媛県温泉郡川内村井内」の条には、

f…………… コドモラガ ヨロコブワ

こどもたちが 喜ぶでしょう。

というのなどが見える。内海島嶼部の中の大三島北部の私の郷里弁には、

○ドガナケリャ イエー ワ。

どんなだっっていいさ(よ)。

など、「イエー ワ」との言いかたがあり、この表現法に限って「ワ」が用いられている。——これは老人語である。本県下の複合形には、「ワナ」「ワノ」「ワヤ」などがあるが、これらは有力でない。内海島嶼部に「ノワ」というのが見いだされる。県南に「ワデ」というのがあるか。

高知県下で、全般に「ワ」が見られる。下降調本位のものであるが、女性に、例えば、「オクノ ホーワ ツム ワ。」(奥のほうは、きょうは雪が積むわ。)など、高調のものも聞かれる。本県下での複合形には、「ワネ」「ワネヤ」「ワヨ」などがある。「ワヨ」とあるばあいにも、これは、東京弁での「ワヨ」の

語感のようなものではない。「ワ」と「ヨ」とのそれぞれの指示力のつよさが認められようか。

徳島県下にも「ワ」と「ワイ」との対立が明らかである。「ワ」の下降調がいちじるしく、このさい、“話者にていねい意識はない”。“したい間がらで、あるいは目下ことばとして、全層に用いられる。”という。東京弁での「ワ」にくらべれば、短呼下降の「ワ」は、おしつけるような感じもともなう、つよい「ワ」である。祖谷弁での一例は「アリマセン ワ。」である。(初老男発言)むろん、「〜デス ワ」などとあれば、これはていねいな表現である。「ワー」に高調も聞かれる。本県下の複合形では、「ワナ」(「ワナー」も)がよくおこなわれており、「ワノ」もある。「ワヨ」もある。特異な「ワダ」がある。(「ワダー」ともなる。)

○ソレワ マコトニ、ヨワツトル ワダ。

それはほんとに、よわってるわよ。

は、県南奥地での「ワダ」の一例である。

香川県下でも、「ワ」と「ワイ」とが明らかに両立している。

○コマガ ダイジジャ ワ。

へいそがだいじだよ。(“コマに儉約しておかないからいけない。”)

は、県下中部での一例である。

○モー ドー シタッテ カテン ワ。

“もうどうしても勝てないよ。”

は、県西部での青男発言例である。「ワー」と長呼になることもある。「ホンナ モー イェー ワー。」(それならもういいわ。青男→中男 電話)は、私が小豆島で聞いたものであり、これには上昇調が見られる。(電話での、やや別趣の発言であったかもしれない。)『全国方言資料』第5巻の「香川県三豊郡詫間町大浜肥地木」の条には、

m………… ワセンノ ホーガ エーワ

和船の ほうが いいよ。

というのが見える。本県下の複合形には、「ワナ」があり、「ワデ」がある。県中部での「ワデ」例は、

○サケガ ンマケリャ エー ワデー。

酒がおいしければいいわね。 (中男→老男)

などである。——若い女性も気がるく「ワデ」を言う。「それで なぞが とけた ワデ。」など。

近畿地方には、「ワ」のおこなわれることがさかんである。——「ワイ」類のよくおこなわれるのにあい応じているか。

ところで、「ワ」の関東弁に対して、近畿地方には、まったく対立的な「ワ」の下降調が見られる。近畿弁でのこれは、男女に等しくおこなわれるものである。関東地方内で、「ワ」が女性に用いられるものであるとは異なる。品位の点でも、関東がわのは、「ワ」がしばしばわきまえられた表現に用いられており、近畿では、「ワ」がいわば俗な言いかたにもよく用いられている。

近畿のこうした「ワ」が、当方にうまれつきの「ワ」であることはたしかであろう。

近畿に、「ワ」「ワー」の発言も聞かれなくはない。これだけをとってみれば、ものは、関東地方などと同形式であるけれども、近畿弁の中の上昇調は、やはり近畿方言風土のものである。双方を聞きくらべて、感じの相違をおぼえる人はすくなくなろう。やはり、方言環境がちがえば、その環境でなりに、ものが特質づけられるのであろう。

以下に、諸府県下のものを見る。

兵庫県下では、「ワ」「ワー」が見られて、「(〜)ヤ<指定断定助動詞> ワ」なども習慣的である。「アレ ヘナンダ ワ。」(ありはしなかったわ。老男→藤原)などの言いかたも、よく熟したものである。

○マンダ アリマス ワ。

まだありますわ。

などと言われると、これはていねいな言いかたになる。「イテ[↑]クル[↑]ワー。」(行ってくるわ。)は、但馬南部での女性発言例である。「ワー」が高平調に発言されることもある。神戸方面での女性発言、「ソーユー[↑]コトヤ[↑]ワー。」(そういうことだわ。)などは、若い女性たちが、共通語意識のもとで「ワー」を言おうとしていることを示すものでもあろうか。

○ソヤケド、ヨ[↑]カッタ[↑]ワ。

そうだけど、よかったわ。

は、播磨北部の一地での老女発言である。本県下での「ワ」に関する複合形としては、「ワナ」のおこなわれることがいちじるしく、それは、「ワナー」とも発言されている。「ワネ」もときに聞かれる。但馬でなど「ワヤ」も聞かれる。

大阪方面では、男性の「ワ」は、「太く重い」とも言える感じのものであるか。男性に上昇調はないのがふつうであろう。男女にかかわらず、「ヨ[↑]ーイワン[↑]ワ。」などの言いかたがよくおこなわれている。

○ア[↑]シイトテ[↑]ジャナイ[↑]ワ。

足が痛くてしかたがないよ。(老男→藤原)

は、府南で聞いたものである。「～のや[↑]ワ」が「ネヤ[↑]ワ」とも聞こえていようか。「アイツモ[↑]ケー[↑]ヘン[↑]ニヤ[↑]ワ。」(あいつも来ないんだよ。)などの「～ニヤ[↑]ワ」も、熟した言いかたである。「～デス[↑]ワ」「オマス[↑]ワ」などもよくおこなわれている。私は、府南の一地で、

○ワ[↑]カッタ[↑]ル[↑]ワ。

わかってるよ。(わかってますよ。)(小学生男たち→先生)

というのを聞いた。彼らが先生に向かって異口同音にものごとを強調する時、教室で、こういう「ワ」が発言されたか。府下での複合形には、「ワヨ」などがある。府南で私が聞いた「行テ[↑]クル[↑]ワヨ。」は、“目下に言う。”ものであるという。

和歌山県下の状況も、大阪府南のそれによくつづくものである。

○コ[↑]フ[↑]ゴエン[↑]ワ[↑]タス[↑]ワ。

この五円を渡すわ。

は、県下南部内での短呼下降の「ワ」の例である。新宮市で私が聞いた「アメフツテ キタ ワー。」(雨が降ってきたわ。)は、「ワー」を見せている。『和歌山県方言』に、

イラマエワ 要りますまいよ

というのが見える。(県北的那賀郡のもの) この「ワ」はどういうものなのか。本県下の、「ワ」に関する複合形には、県南の「ワニー」がある。「このおさかなは、オイシー ワニー。」など。「ワヨ」もあり、「ワダ」もある。「ワシ」「ワシヨ」もある。「シ」は「もし」の「シ」であろう。

三重県下でも、男女に「ワ」がよくおこなわれている。伊賀弁で、「居るのヤワ。」は「インニャ。」である。(伊賀での私の調査経験では、「ワ」があって「ワイ」はないらしかった。) 志摩には、「ワ」と「ワイ」と「ワレ」との対立がある。「ワ」が長呼されることもあり、「ワー」の高調の見えることもある。「タノミマス ワー。」(たのみますわ。)は、紀州分の本の本で聞かれたものである。伊勢北部での、

○ホニ ヒトツダケ オスソワケデスノヤ[↑]ワ。

ほんに一つだけおすそわけですノヤわ。

には、上昇調の「ワ」が見られる。『桑名町中心ノ方言訛語』とある書きものには、「ねるわや。」というのがあって、これが、「ねなさい。」と説明されている。「わ」の変った用法であろうか。本県下の、「ワ」に関する複合形では、「ワナ」がよくおこなわれている。「ワチー」がよく聞かれる。「ワネ」もある。「ワヤ」も「ワヨ」もある。

○ダイブンニ オジーノ ハナシ キーテ モロテンニャ ワヨー。

たくさん、じいさんの話しを聞いてもらってるのよ。(私がそのじいさんにものを聞いていることを、妻女たる人が他に説明する。)

(老女→中女)

は、紀州分西辺での「ワヨ」の一例である。「ワサ」もかなりよくおこなわれて

いて、「ワサナー」というものもある。紀州西辺に行けば「ワダ」も聞かれる。「ワテ」は、伊賀地方によく聞かれるものであろうか。「ソー ユー ワテナー。」(そのように言いますねえ。)などともある。

奈良県下も、ふつうに、短呼下降の「ワ」を見せている。「ハヨ オイデ。オータル ワ。」は、「早くおいで。おんぶしてあげるわ。」である。県南の十津川にも、

○アカン ツイテ ラッシャ アリャ セン ワ。

(枕かけに) 垢がついてさっぱりだめだわ。(中女→藤原 独話的)

などの言いかたがおこなわれている。複合形には、「ワナ」「ワネ」「ワノ」「ワヨ」などがあり、「ワテ」もある。

京都府下の「ワ」もさかんなものである。「〜ドス ワ」(〜ですわ)はこちらのものである。『全国方言資料』第4巻の「京都府京都市」の条には、

f………… モー ソレモ ムスメジダイノ モー ホンモノ ナゴリドスワ
もう それも 娘時代の もう ほんとの なごりですよ。

などとある。京都市内で聞かれる青女たちの会話に出てくるものは、「ソレチャウ ワ。」(それちがうわ。)などである。「〜のや ワ」の「〜ネンワ」もある。京都市での男性発言例には、

○チョット マッテテ。コレ シタラ モライニ イキマス ワ。

ちょっとまっててね。これをしたらもらいにいきます!

などがある。市内老女の発言、「オコッテハル ワ。」(おこってなざるわ。)というのを聞いたことがある。この人の娘さんは、「オイシカッタ ワー。」(おいしかったわ。)と発言した。丹後弁でも、「ワジモ イク ワー。」(わたしも行くわ。)などが聞かれる。

○ドコイ ヤッタンド。アラ ヘン ワ。

どこへやったんだ? ありゃしないよ。(小学生四男問)

は、丹後半島内部で私が聞いたものである。府下での複合形では、「ワナ」の

よくおこなわれるのが認められる。丹後では、「トシガ ヨリスギチャ アカン
ワナー。」(年が寄りすぎてはだめですわ。 老女)などの言いかたが聞かれる。
「ワヤ」もある。

滋賀県下にも「ワ」がよくおこなわれていて、人は、“尻さがりのアクセント
で、標準語の「ワ」のように上品でなく、下品につかわれる。”とも言う。男性も
「タノンマス ワ。」(たのみますよ。)などと言っている。複合形には、やはり
「ワナ」がよくおこなわれており、湖東に「ワサ」もある。

中部地方にも「ワ」がよくおこなわれている。北陸道には、特異の事象も認
められる。

福井県下の全般に、短呼下降の「ワ」がさかんのようである。——それがし
ぜんに長呼にもなっている。

○アツイサカエ イカン ワー。

暑いからいけないわ。

は、若狭中部での一例である。

○コフ コワ ヒトソバイスルンデ コマル ワ。

“この子は人がいるとよけいにふざけるんでこまるよ。”

は、越前武生市での一例である。愛宕八郎康隆氏の教示によるのに、越前東部
の勝山のことばには、

○アタラシーノ カオ ワー。

新しいのを買いなさいよ。 (青男→男)

などの言いかたがあるという。命令表現になる「カオ ワー」は、どういう
「ワ」を見せたものであろうか。本県下の複合形には「ワナ」のおこなわれるこ
とがいちじるしく、「ワノ」も広くおこなわれているようである。「ワネ」もあ
る。若狭には「ワヤ」もある。

石川県下にも、特異の「ワ」がある。加賀東南部で私が得た事例には、

○やっぱり ゴーヨーガ イルサカイ ワ。

やっぱり雑用がいるからね。 (中男→男)

○ゴードーエ シナモノ モッテ キチョキヤ [↑]ワー。

合同運送へ品物を持ってきておけばワー。(持ってきておけばよいと、自分の意見を言う。) (中女→中男)

などがある。愛宕八郎康隆氏の教示によれば、能登半島西北端の皆月でも、

○ソ^ナナ モン キセサ^ナッシャ^ナ ワー。

そんなものを着せなさんなよ。

などの言いかたがおこなわれているという。自分の意見を言う「ワー」は、やはり、自称系の「ワ」文末詞であろうか。(「ワ」が命令表現に役だてられているのなども、「ワ」使用のしぜんの展開なのであろうか。)『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条にも、

mイヤー ナガイ アイダ カカッテワ²⁾

ああ 長い 間 かかって 2)「ワ」は間投助詞。

というのが見える。「ワ」にさまざまな用法がひきおこされてもよいことであろう。もとより本県下に、いわばふつうの「ワ」もさかんである。「ワー」ともある。(能登で、「リ^{利ロ}コナ モンジャ ワー。」など、「ワー」も聞かれる。)[ワカラ^ン ワ。](わからないよ。)は、金沢市での高校生男子発言例である。「ザイゴワ ヤッパ スズシー ワ。」(いなかはやっぱりすずしいわ。)は、私が能登半島東北端部の内がわで聞いたものである。愛宕八郎康隆氏によるのに、能登半島東北端部には、

○ソ^ワー セニヤ シマイツカ^ン ナ。

そうしなくては“しまつがつかないよ”。

など、「ワ」の「ナ」があるという。本県下での、「ワ」に関する複合形では、「ワネ」がよくおこなわれており、「ワネー」「ワネー」ともある。なお、能登半島東北端部には、「ワネ」相当の「ナネ」があるという。「ワノ」「ワナ」もあり、「ワヨ」もある。加賀東南部で聞いたものには、「見テ^テ クル ワヨ^ー。」がある。変わったものに、「ワケ」がある。(「ワケー」とも言われている「ケ」

は、「これ」からのものであろうか。)「ワケノ」「ナケノ」もある。「ワケヤ」「ワケヨ」もある。この種のものは、能登に特異のものであろう。

富山県下にも、下降調の「ワ」「ワー」がふつうにおこなわれている。女児の「いや。」は「イヤ　ワー。」である。県東部で聞いたあいさつことばには、「ハー　モー　イク　ワー。」(じゃあもう帰るわ。)がある。高調も、こうして聞かれはする。やや特異とされるものに、富山市近くで聞いた、老女の、

○コッチー　ヨッチェ　クダサイマセ　ワ。

こっちへ寄ってくださいませな。　(老女→中女)

などがある。中年の女性が私どもに、

○アラ。ギューニュー　アガルデス　カワー。

あら。牛乳をおあがりになりますか？

とも言ってくれた。県下の複合形では、「ワネ」がよくおこなわれているか。

新潟県下でも、下降調の「ワ」がふつうにおこなわれている。「オラ　ファー　コマッタ　ワ。」(おれはもうこまったよ。)は、越後北部での一例である。こうした「ワ」は、男女におこなわれるものである。「麦が無うなつたさけ麦を搗くわ」は『佐渡昔話集』に見えるものである。県下の複合形には「ワネ」があり、「ワヤ」があり、「ワエ」がある。「イガネ　ワヤ。」(行かないよ。)は、子どもどうしもつかうものである。「タノム　ワエー。」(たのむよ。)、これは男の子も言う。(—佐渡西北部での例である。)『佐渡昔話集』には、「それを見たいと思って来たわさ。」というもある。『越佐方言集』には、

○語尾ニわ又ハわんしヲ添フルコトアリ。例ヘバ、知らないわ、知らないわんしノ如シ。

との記事が見える。

岐阜県下にも、「ワ」「ワー」が下降調でよくおこなわれている。「ヒダデス　ワ。」(飛驒ですわ。)は、高山市で聞かれたものである。「ハッピークエン　アル　ワー。」(八百円あるわ。)は、美濃北部で聞かれたものである。「ワー」のこともある。それにしても、『北飛驒の方言』には、「ワ」についての、

よ。ぞ。東京の女性のワと異り横着な卑語。

との説明が見える。ところで、『岐阜県方言集成』に見える羽島郡の「いくじゃわ〔句〕行きなさい。」は、いささか変わったものであろう。本県下の複合形としては、「ワナ」がよくおこなわれている。「ワナ」「ワナー」などとある。「ワノ」複合形も見られ、「ワヨ」もある。

愛知県下にも、「ワ」の下降調のものがさかんである。「ワルカッタ ワー。」(わなかったわ。ごめんね。)は、名古屋市北郊での一例である。「チョード エー ワ。」(ちょうどいいわ。)といったような下降調もふつうに聞かれる。関山和夫氏の「芸どころに脈うつ“おきゃあせことば”名古屋弁の命脈」(『放送文化』第22巻第1号)には、「死にたかったら死ぬじゃわ」との言いかたが見える。本県下の複合形では、やはり「ワナ」がよくおこなわれている。

○オチツィーテ ヤッタデ エー ワナ。

おちついてやったからいいさ。(素人芝居に対する批評) (老男)
は、尾張西部での一「ワナ」例である。「ワノ」もある。「ワネ」もある。「ワヨ」「ワエ」もある。「ダワ」もある。

○オナゴノ ツレガ トナリニ ナイ ダワ。

同年輩の女の友達が近所にいないのだわきっと。(初老女間)
は、江端義夫氏教示の「ダワ」例である。

静岡県下・長野県下・山梨県下にまた、「ワ」「ワー」の下降調の言いかたがふつうにおこなわれている。「ハジメテ ミタ ワ。」(はじめて見たわ。)は、静岡県御前崎での一例である。

○サー 先生。オラー ゴカンベン シテ モラッテ、イク ワ。

さあ、先生。わしはご勘弁してもらって、もう帰るわ。(と、座を立つ。)(初老男→藤原)

は、長野県西北部での一例である。「カンゲータ ワ。」(考えたよ。)は、甲府市での一例である。山梨県西南部で聞いたものには、「アンナ モナー、ワキヤー ネー ワ。」(あんなものは、わけはないよ。老男→中女)がある。

「ウラー シワ シネー ワ。」(おれはしはしないよ。)は、伊豆半島内でのものである。諸地方に、「ワ」などの発音もあるか。山梨県下には、「ワー」も聞かれる。三県下の情勢は、しぜんに関東地方のそれにつづいていよう。「何々だ ワ。」も聞かれることか。三県下での複合形では、やはり「ワナ」のおこなわれることがいちじるしいようである。「ワネ」もある。これのばあい、長野県下でなど、「あそこに道を コシラッテル ワネー。」(あそこに道をこしらえてるわね。)というようなアクセントにもなっている。「ワネー」などは女性に聞かれがちのものなのか。静岡県下に「ワエ」などがあり、長野県下に「ワヤ」がある。「十五分しか ねー ワヤー。」(十五分しかないなあ。よわったな。)は、女性が語ったものである。長野県北部に「ワサ」もある。長野県下や山梨県下では、「ダワ」も聞かれる。「オユハンドキダデ、イク ダワ。」(お夕飯どきだから、“わしはもう帰るよ”。)は、長野県北部での一例であり、「オバヤン コン ダワ。クルマデ マッテ クレ。」(おばさんは来ないよ。来るまでまってくれ。)は、山梨県西南部での一例である。ともに男性発言例である。

東京語の「ワ」に関しては、まず、円地文子氏のつぎの文章をかかげたい。

「だわよ」「だわ」はこの時代の女学生の間で、叮嚀すぎても親しみがなくなり、ぞんざい過ぎれば下町のミーちゃんハーちゃんになってしまうその間をとって生れた新語ではなかったかと思ふ。

音感からいふと「だわ」「だわよ」といふ語尾は美しくない。私はこの言葉を好かないのだが、明治、大正、昭和を通して「だわ」「だわよ」は女言葉の語尾として圧倒的に使はれてすたれないところを見ると、矢張男性にも女性にも魅力のある言葉なのだらうか。

これは、『言語生活』第六十号の『『ことよ』と『だわ』』の中に見られるものである。つぎに、巖谷大四氏の「敬語雑感」(『放送文化』第19巻第8号)に見られるものがある。

私には三人の姉がいたが、その姉たちが話合っている時に、「……だわよ」とか「いいわよ」とか、いわゆる「わよ言葉」をつかうと母が、『わよ』なんて言葉は下品ですよ、『ことよ』とおっしゃい」と言った。

「ワ」や「ワヨ」が、女性に定着したありさまがよくうかがわれる。その音調が上昇調であるのが特色である。東京語中心の言語界では、こうして文末詞「ワ」の発展が見られることになった。この「ワ」は、いまや、共通語上に勢力を持ってきてもいようか。東京語中心の言語界の外、ことに関西地方などから、東京語本位の「ワ」を見ると、その「ワ」が、一種の上品語のようにも見とられる。さて、東京語内で、「イッテラー。」(いってるじゃないか。)などの、「ワイ」内在の言いかたがかなりさかんであるとともに、他方、女性語に「ワ」がさかんなのは、おもしろい対立と見られる。

伊豆諸島には、短呼の「ワ」がさかんである。八丈島では、

○ホントデ オチャリイタソー ワ。

“ほんとうでござります。”

などの言いかたが聞かれる。「勉強中で オチャロ ワ。」は、“勉強中です。”であるという。『全国方言資料』第7巻の「東京都八丈町宇津木」の条には、

m………… ハヤ モドリータソワ

もう 帰りますよ。

というのなどがある。下降調の「ワ」もおこなわれている。青ガ島にも、同様に「ワ」がさかんであり、『くろしおの子(青ガ島の生活と記録)』には、

わが家では、冬(なると)になろ(夕飯)だ(ぞうすい)いば、ようけ(たべる)に麦(たべる)ぞうせい(たべる)を(たべる)にてか(たべる)むわ。

などとある。これらの島に、長呼の「ワー」もおこなわれている。『全国方言資料』第7巻の「東京都利島村」の条には、つぎのがある。

m………… アイヨ ニジューゴネングライン ナロワ

そうだ 25年ぐらいに なりますよ。

関東地方を概観するのに、東京語の「ワ」にはかかわりなく、一般に、下降調での「ワ」が見られる。「ワ」は、本来、こうしたものなのではなからうか。

神奈川県下に、「オトナシ^ー ワ。」(おとなしいな。[ほめる])のような言いかたがある。男子も「ワ」を言っている。千葉県房総半島東南岸での一例には、

○コノ^ー ヘンワ^ー コトバガ^ー アライ^ー ワ。

このへんはことばが荒いよ。(男性間)

がある。千葉の佐原で聞いたことばには、

○モシ^ー ネー。アッタラ^ー ヨー。ソー^ー イットク^ー ワー。

もしねえ。会ったらねえ。そう言っとくわ。(中女→初老女)

というのがある。埼玉県東部では、かつての私の滞在調査のさい、人々が、「「ワ」「ワヨ」は東京ほどはつかわない。」と言っていた。群馬県下の一例は、

○ウン、コリヤ^ー カタイ^ー ワ。

うん、これは固いわ。(老女 独話)

である。本県下での男性発言例には、「マタ^ー ワカンナク^ー ナッチャウ^ー ワ。」(年がたつと、またわからなくなってしまふよ。)などがある。群馬県の西南部の富岡市一带では、“自分のほうから人をさそったりかけ声をかけるような時に、「〜へ行こうわ。」「早くしようわあ。」”のような言いかたがされているという。栃木県下での一例は、「ヒエタ^ー ワ。」(冷えたよ。——「ゆうべはさむかったですね。」と私が言ったのに対する返事)である。本県下で、男児が私に、「ヨンデル^ー ワ。」(よんでるよ。)と言った。こととしいによつては、しぜんに「ワ」も言うのか。「アスヨニ^ー イル^ー ワー。」(あそこにいるわ。)は、老女の発言例である。茨城県下での一例は、男性の、「オレモ^ー イダ^ー ワ。」(おれも行くよ。)である。なお、県北での老男発言例、

○コレト^ー オンナジ^ー ナガサダ^ー ワー。

これとおなじ長さだよ。(自分の思いを言う。)

をあげることもできる。

一方で、今日は、「ダワ」もしぜんにおこなわれていることであろう。関東地方一般での、「ワ」に関する複合形には、「ワナ」「ワネ」があり「ワヨ」がある。神奈川県下・茨城県下などには「ワヤ」も見られる。

○ナカナカ キキトリニクイ コトガ アッタ ワネー。

(このあいだ勿来の人のことばは) なかなか聞きとりにくいことがあ
りましたよ。 (初老男→藤原)

は、栃木県下で聞いた一つの「ワネ」例である。『日本方言の記述的研究』に寄
せられた日野資純氏の「神奈川県愛甲郡煤ヶ谷村」には、

「ワ」を男が詠嘆の意に使う。「ユーコトキカネーダワ」
というのも見られる。「ダワ」文末詞が認められよう。

東北地方内には、「ワ」の注目すべき用法がある。(その「ワ」は何と解した
らよいものであろうか。)

はじめに福島県下を見る。ここでは、まず、関東地方でのとおなじような、
下降調の「ワ」「ワー」が見られる。「ナレテッカラ エー ワー。」(なれてる
からいいよ。)は、会津での一男性発言例である。「ワ」ともある。ところで、
会津弁の、「イダッタバー ワー。」は、“居ただらうきっと。”であるという。
「アンタ イガンダバー ワー。」は、“あんたきょういらっしゃるんでしょ
う?”であるという。変わった「ワ」である。本県下の複合形には、「ワナ」「ワ
ネ」があり、「ワシ」もある。『全国方言資料』第1巻の「福島県河沼郡勝常村」
の条には、

mアー ソーガモ ポンヨイニ イロイロ ケーモノ アッタダワシ
ああ そうですか、 お盆の用意に いろいろ 買物が あったでしょ

うね。

などとある。

宮城県下にも、まず、上来、見てきた、いわばふつうの「ワ」がおこなわれ
ている。「ネーワ。モー ウリギレダ ワ。」(ないわ。もう売りぎれだわ。)な
どとある。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、

fウ ミンナステ ガッカリ シッタデガスワ

うん、みんなで がっかり していたんですよ。
 などとある。ところで、『仙台の方言』の、

「きこえたらわ」（きこえてゐたらどうだらう。どうしよう）
 となると、これはどういう「ワ」であろうか。人に語りかける「ワ」で、種々
 変わった用法のものが見られる。私が県南部で聞いたものには、

○ナゲテ ク[ü]ナイ ワ。

“投げてください。”

などというのがある。この言いかたは、女性の子どももおとなもするというこ
 とであった。「コッチャ コライ ワ。ハヤクー。」（こちらへ来なさいね。早く。）
 などとも言われている。「アゲッカラ ワ。」（“あげますからね。”）など
 ともある。私が松島湾岸で聞いた「ワ」には、つぎのようなものがある。（上例
 とおなじようなものははぶく。）

○ハンタイニ ナッテ ワ。

反対になってよ。（今は孫に教育されるというところである。）

（老男）

これは、中止的表現でのよびかけの「ワ」である。

○キ [kçi] ミ[i]コサーン。イッタ ノワー。

君子さん。行ったの？ （中女→裏の家の中女）

これは、「ノワ」との、問いかけの言いかたをしたものである。「ノワ」がよく
 問いに用いられている。

○オシン[i]ンコ ネ[e]ースカ[ü] ワ。

おしんこはありませんか？

これは、問いの「カワ」を見せたものである。問いの「ノワ」「カワ」をよく
 見せている。

○チンジン[i]ン ナッタ ワ。

何時になった？

これは、単純形の「ワ」だけが問いに用いられている。

○ム[ü]イテ タベロ ワー。

むいてたべろ。

これは、露骨な命令表現の「ワ」である。県下に広く、こうした、諸用法の「ワ」が見られよう。さて、この種の「ワ」は、どういうものなのであろうか。いわゆるふつうの「ワ」のはなはだしい転用と見て見られないことはないのではないか。「てにをは」の「は」を考えることはどうであらう。——「ワ」の上部へのつづきがらを見るのに、「カ」とたずねてさらに「ワ」と言うのなど、「ワ」には「は」が考えにくいのではないか。命令表現のばあいにも、そのように考えられる。「たべろ」と言ったあとに、「は」がきたのではおかしいのではないか。本県下の複合形には、「ワナ」「ワネ」などがある。ところで、「ワネ」には、

○ム[ü]カシ[ī]カラノ ヒトワ ヨケ ナインダカラ ワネー。

むかしからの人はたくさんいんだからねえ。 (老女→中男)

のような用法が見られて注目される。私が仙台市内の宿で、共通語ふうのものを言いをする若い女性から言われた「ワネ」は、

○ソーシ シマセンカラ ワネ。

である。別にめずらしい「ヨワ」の言いかたもある。「ヤダ ヨワ。」(いやだよ。)は、仙台弁での一例である。『細倉の言葉』には、

「行つたよわ」は 行キマシタヨ と 行ツタヨ との中間位。

比較的女子が多く用いるのは女子の接尾語 ワ との連想意識があるからだろうか。

との記事が見られる。芳賀綏氏の「東北・北海道」〈方言の実態〉(『国文学 解釈と鑑賞』第十九卷第六号)には、

オラ、 ッシャネヨワ (知らないよ) 仙台、米沢地方

との記事が見られる。『仙台の方言』には、「ゾワ」の複合形も見える。純粹の問いではないばあいの「カワ」があって、

○三十五日ニ ナル[ü] カワー。

三十五日になるかなあ。(ああ早いなあ。ずいぶん早いものだなあ。)

(老男)

とある。「オッワ」もある。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、

f………… ツェツェツェツェツェ⁴⁾ タカヤブ オステキタオッワ
 竹やぶのほうに 押し寄せて来たんだよ
 ホレー⁴⁾ 流れるさまを形容することば。
 ほら。

などとある。

山形県下にも、いわゆるふつうの「ワ」が男女におこなわれている。『荘内語及語釈』には、

は ワと転呼する。ワイとは言はない。感嘆
 まづえいわ〜 (マア好イワイ〜)

などの記事が見える。佐藤義則氏の『羽前最上小国郷のトント昔コ』には、

憎い狸畜生がらだまさせて、婆様汁食^かへらってすまたずわ。

というのが見える。『全国方言資料』第1巻の「山形県南置賜郡三沢村」には、

fオッシュ⁴⁾ースナ マンジワ エソガシートコ スケテモラッテ トンナ
 ありがとう どうも 忙しいところを 手つだってもらって たいそ
 シャワセデ アッタゼシワ⁴⁾ 「お奨止な」の転。

う 好都合で ございました。

などとある。同7巻の「山形県東田川郡朝日村大鳥」の条には、

fオレモ ソーダケワ
 わたしも そうでしたよ。

などとある。さらに特異な用法のものとしては、上の佐藤義則氏の本の「山さどがすか^お逃げでったけどワ。」などが指摘される。斎藤義七郎氏の「宮城・山形」(『方言学講座』第2巻)にも、「行かないかね」の「エガネガ・ワ」が見られる。(〈山形県新庄市・最上郡。老幼男女共用〉)「東京女性の〇〇だわとは

ちがう。」としてられる。「〜けど ワ。」などとも言われる「ワ」は、どういふものなのであろうか。特異的である諸「ワ」例も、おそらくは、いわゆるふつうの「ワ」の自由な転用結果ではないだろうか。本県下の複合形としては、「ワヤ」などがある。「メンドー ミシエル ワヤ。」(面倒を見てやるよ。)は、庄内弁での一例である。柳田国男先生の『毎日の言葉』には、

最上郡の方では

この人だこんだらきしエだワード

といふのが、「此人ならいやだ」といふ意味だと申します。ダコンダラは「だといふならば」、キシエダは此地方でのキラヒダの発音差、ワードは即ち我等の意であります。

とあり、「ワ」に関する「ワード」が見られる。私が県内で聞いたものには、「ワナン」がある。

○チャット カドグ[ü]チ[i] タッテノ ハナン[i]ジャ ワカンネー
ワナン。

ちょっと門ぐちに立っての話してはいけないわねえ。(おばあさんは、私を家にひき入れてくれた。) (老女→藤原)

などの言いかたがなされている。

秋田県下には、「ワ」のおこなわれることがよわいらしい。『秋田方言』には、県東南、平鹿郡の、

やしめわなあ おやすみなさい(お休みなさい)。

の言いかたが見える。

岩手県下も、「ワ」の不毛の地域ではないか。

青森県下には、東西に、いわゆるふつうの「ワ」が認められる。東の「青森県三戸郡五戸町」(『全国方言資料』第1巻)には、

mアー ガッコァ サガッタラ ホニ ムカエニ ヨコヘバ エーワ

ああ 学校のが 帰ってきたら、そうだな 迎えに よこせば いいよ。
などとある。西の津軽では、私も、男女老若の「ワ」を聴取している。『津軽方

言絵ハガキ』第一輯にも、女学生のことば、「スタハンデスー、エネヅキ、エグワ。(ですからあんなにしゃらない時に行くわ。)」というのが見える。『全国方言資料』第1巻の「青森県南津軽郡黒石町」の条には、

*m*アー アッコア ホントネ メーシヨネ ナンネー エゴサネ⁴⁾
ええ あそこは ほんとうに 名所に なることが できますよね。

4) 「なるにいいね」の意。「ゴス」は「ごさいます」の転。

というのがある。これの「ゴサ」は「ゴス ワ」をくみとらせるものであろうか。私も弘前市内で、「エ[e] ゴサネァ。ソナ モノ。」(いいですよ。そんなもの。——辞退のことば)などを聞いたことがある。本県下には、「ワ」に関する複合形の見べきものが、あまりなさそうである。

北海道地方にも、男女に「ワ」がおこなわれているか。

○アッチ イクンダラ チガウ ワ。

あっちへ行くんならちがうよ。(私がバスのことを聞いたのに対して、中学生どうしが話しあう。)

は、私が網走で聞いた、中学生男子のことばである。

○ワカラ[↑]ン チ。ワカラナイ ワ。 わからないなあ。わからないよ。

は、『礼文島言語調査報告』に見える、「五十七歳男」のことばである。「〜ダワ」も、道内に熟したものであろう。『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

*f*ハー ソーガー ンダケド トーサン エネーガラ アー チョット
はあ そうかい。 だけど とうさんが¹⁾ いないから ああ ちょっと²⁾
カエッテキテガラ ソーダンシター ソシテ アゲマスワー
帰ってきてから 相談して、 そして (返事)を)しますよ。

1) 女性出頭者(*f*)の実父をさす。 2) 「わからないが」の意を含む。

などというのが見られる。複合形には、「ワナ」「ワネ」などがある。

六 「バ」の属

「バイ」に該当する「バ」がある。——「バイ」が「ワイ」に相当するのにくらべれば、「バ」は「ワ」に相当するとも考えられる。

九州の、主として肥筑地方に——「バイ」文末詞の分布地域に——、「バ」文末詞が存立している。とはいいいながら、「バナ」の複合形の 見られることが多い。

「バナ」は「バイナ」に相当するものらしい。筑前東部の一知友は、つぎのように教示してくれた。

「オワカレ バナ。(お別れだね。 老男→少男) 「バイ」と「ナ」が熟合したものである。「バイナ」「バナ」ともに老年層に多くつかわれる。

私が、長崎県西彼杵半島で聞いたものには、「コフ コンバ ツマラン バ。」(この独楽はつまらんわい。——調子のわるくなったのについて言う。)があり、これの「バ」は、「バイ」とおなじとされた。(あるいは、「ワ」が、単独に「バ」となることもあり得たのか。それは定かではない。)ともあれ、ここに共時論的には、「バイ」に該当する「バ」を受けとることができる。また、この「バ」と、「ワイ」に近い「ワ」との、意味上の連関は、否定すべくもない。

「バナ」は「バイナ」の縮約されたものと見られるほかに、「バ」に新しく「ナ」のそえられたものとも見られなくはない。——その時の「バ」は、「ワ」からの「バ」である。

「バイ」文末詞の分布地域では、熊本県下・長崎県下に、なかんずく、「バ」の属の文末詞がよくおこなわれているか。佐賀・福岡の二県下がこれにつぐ。

熊本県下では、まず、天草で、

○コガン シタッチャン バー。

“こんなにしたのですよ。”

のような言いかたが聞かれる。「キタッタン バー。」(“来たんだもの。”)のよ

うな言いかたもある。この「バー」は「バイ」に近いものか。それはおき、県下に「バナ」のおこなわれることがさかんである。いくらかの、ていねいな言いかたになるものらしい。「 $\overline{\text{ア}} \text{ー} \overline{\text{モ}} \text{ー} \overline{\text{ヨカ}} \text{バナ。}$ 」(ああもう焚かなくていいわね。＜ふるのこと＞)は、私が天草で聞いた一例である。当地では、「バナ」は、目上の人への敬意の言いかたになる。”と教示してくれた人がある。県北での「バナ」例は、「 $\overline{\text{トント}} \text{イカシ}$ $\overline{\text{バナ。}}$ 」(“とんとよくないね。”)などである。

天草に「バナシ」がある。これは、「バナシタ」の「タ」が略されたものかどうか。県下に、「バナ」と「バン」とのつれあうさまも見られる。阿蘇山南麓での例は、「 $\overline{\text{イヤ}} \text{バナ。}$ 」(いやです。女性 男性もしたしいものに)「 $\overline{\text{イヤ}} \text{バン。}$ 」(いやです。男性)などである。「バン」は「バナ」からのものか。あるいは「バンタ」からのものか。(「バイ」からということも、考えておくべきなのか。) (p. 407)『熊本県音韻語法』には、「『バン』は、時に驚異の情を表はす。」との記事が見える。

県南部には「バヤ」もある。

「バ」形のおこなわれることはよわくて、「バナ」複合形のおこなわれることがつよいのからすれば、「バイ」は、複合形形成の要望のもとに、「バ」になりやすかったのか、とも考えられる。さかんにおこなわれる「バナ」は、名詞どめの表現の下にもとり用いられている。

長崎県下にもまた、「バナ」のおこなわれることがさかんである。沓岐・対馬にも「バナ」が見られる。五島での「 $\overline{\text{コンヤ}} \text{ー} \overline{\text{ユキノ}} \text{フロソニ}$ $\overline{\text{アッ}} \text{バナ。}$ 」は、「今夜は雪が降りそうにありますねえ。」(目上への言いかた)である。島原半島には「バナイ」もある。長崎市域などでも「バナイ」が聞かれるらしい。『島原半島方言集』には「バナーン」も見られる。県下に「バノ」もかなりおこなわれているのか。『長崎方言集覧』には、「バノ」についての、

往時江戸にて用いられたワイナ(ハイナ)に該当す。

との説明が見られる。県下に「バヨ」もかなりおこなわれているのか。「 $\overline{\text{タマ}} \overline{\text{ガ}}$

ッタ 下バヨー。)(“たまげたよ。”)などとする。『続巻岐島方言集』には「バヤ」も見え、対馬にも、「カレー バヤ。)(“辛い。”)「イテ コー バヤ。)(“行ってこよう。”)など、「バヤ」がおこなわれている。「バヤ」は目下へのものであるという。

長崎県下に、「バ」の単独におこなわれることもかなりあるのか。『島原半島方言集』には、「センバ (しませんよ)」が見られる。長崎市方面の例は、

○アラー コッチカー デタ ハンデ ゴザンスル バー。

あれはこっち(戸石)から出荷した箸でございますよ。(老女)などである。(愛宕八郎康隆氏教示)『全国方言資料』第9巻の「長崎県上県郡上対馬町鱒浦」の条には、

mオウ⁴⁾ォエバッカリヤ ネットバ

あなたばかりでは ないよ。 4) [owpe]。オマエというところ鼻音が弱いのであろう。というのが見える。これには「トバ」複合形がある。「モンバ」複合形も、県下にある。

佐賀県下では、小田寛次郎氏の「佐賀県藤津郡久間村地方方言」(『方言誌』第十四輯)には、

善うございます ヨカバナタ (上)

ヨカバオマイ, ヨカバイ (下)

との記述が見える。「バナタ」「バオマイ」がとりあげられる。県東部などには、「バナ」がかなりおこなわれているのか。——よいことばとされているようである。

福岡県下でも、「バナ」は「バイ」よりもていねいな感じのものと、人に心得られているようである。

○イチネンハンドモホキヤ イトラン バナ。

(私は学校に)一年半ほどしか行ってないんですよ。

は、一老女が私に語ってくれたことばである。人は、“「バナ」はていねいで「バイ」はふつう。”と言っている。(“「バナ」は「バイ」ののちにはやってき

た。”という人もある。)「トバナ」複合形もよくおこなわれている。

筑後内には、「バノ」がよくおこなわれているのか。(「バナ」もあるけれども。)

筑後に「バン」もある。(p. 411)

筑前に、「バネ」「バイネ」も見られる。

大分県下となると、「バナ」が、例の「バイ」地域にある。

ところで、豊前の中津市で聞いたことばに、市域内の漁業集落の、「イカンバヤー。」(“行かぬ。”)などというのがある。“今の若いものも言う。”とのことであった。

宮崎県下にも、やはり、「バイ」文末詞分布域の中に「バ」が認められる。『全国方言資料』第9巻の「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」の条には、

m………… ハヨー イテ モドッタガ エバ ソリヤ

早く 行って 帰ったほうが いいよ、そりゃ。

というのなどが見える。

以下には、九州外の地方の中に、「バ」形文末詞の、どのようにか認められるのを、とりあげてみよう。

まず、山口県西辺のいくらかの地に「バヤ」がある。(岡野信子氏教示 なお、p. 163 参照。)氏によれば、西辺、海岸の一集落では、漁夫たちに、

○カゼガー ハエニ マワッチョル バヤ。

風が南風が変わっているよ。

のような言いかたが聞かれるという。(アクセントは氏が直接に口授されたものである。)この「バヤ」は、九州でのとおなじものではないか。

つぎに、「バ」形文末詞の注目されるのが、とんでの越後である。ここにたしかに、「ワ」相当の「バ」がおこなわれている。新潟方面や長岡市方面で、「ドー ショー パ。」(“どうしようかな。”)「オラ ドー ショー パ。」(“当惑

した時に発することば。”)の言いかたが有名である。自分のことを言う、こうした表現の「バ」は、「ワ」相当のものであろう。(「ワ」の分布に関しては、すでに、前項の五で、述べるところがあった。)柳田国男先生は、『毎日の言葉』で、「おや〜、どうしよーば」などの言いかたを示していられ、「ワがバに変わって居て」と言われる。越後では、反語の表現も「バ」でむすばれている。越後北部の粟島での「アヤ ドコエ イッタ バ。」(お父さんどこへ行ったか。)は、問いの表現のばあいである。剣持隼一郎氏は、「粟島浦村の言語(一)」(『高志路』201号)で「バ」について、「疑問の終助詞と思われる。」と言われ、「ナンダゲバ(なんだつただろう)」などの例をあげていられる。——「ドーへーバ(どうしよう)」というのも見える。越後で、「バ」は、自分の思いを言うのに用いられるとともに、問いにも用いられるようになっている。

私はかつて、山梨県西南部内で、「ハヤク シロバー。」(“早くしろ!”)との言いかたを聞いた。「バー」は“つけそえことばだ。”との説明もあったが、一方、「ハヤク シロバ イーチャン カ。」(早くすればいいじゃないか。)というのも聞かれた。「バー」の言いきりになっているのも、「〜ば」相当のものなのであろうか。

東北地方内に、また、問題の「バ」事象が見いだされる。

山形県下に関して(p. 414)、斎藤義七郎氏は「山形県北村山郡東根町」(『日本方言の記述的研究』)で、

ba, baja 山形の若い女性のみ使う。[honnae baja] (そうでないわよ)

とされ、また、

baja 庄内特有。反語。「そんなもの要ろバヤ」(いらぬ)

とされている。『全国方言資料』第1巻の「山形県東田川郡黒川村」の条に見える、

f………… シテ ウダ ウダッテ ソシテ シチーデンバ³⁾

そして 歌を 歌って そして すっているもの。 3) [ʃitsi:]
 は、問題の「バ」を示すものなのかどうか。『荘内語及語釈』には、「誰かも^{だれ}を^{ハウ}
 ばや（誰構フモノカ）」などの「バヤ」が見える。(p. 163)

つぎに、青森県下に「バ」がある。ことに津軽に「バ」がさかんであろう。
 一知友は、「津軽弁の「バー」」について、つぎのように解説してくれた。

“疑問詞のある疑問文に、意味をつよめる「バ」がつく。「ドゴサ イグ
 [ü]ンダ バー。」(どこへ行くんだい?) など、どこへ行くのかに興味がある
 時に「バー」と言う。相手に聞く時、問う時に「バー」を言う。相談
 する時にも「バー」を言う。「ナンボ オカシ[i]ーガダ バー。」(なんと
 おかしい映画だろう。), こんなばあいにも「バー」が出る。「ナンボ キ[kçi]
 レイ[i]ダ バー。」(なんときれいなことよ。) などとも言う。”

「ワ」相当の「バ」が、多様につかわれているようである。問いの「バ」は、
 ことによくおこなわれているのか。私が弘前市で聞きとめた例は、

○オメ^ナダヂ[i]ノ トッチャ^ナ ドゴサ イゲシ[i]タ^ナ バ。

あんたたちの父ちゃんはどこへ行きましたかね?

などである。津軽半島で聞いたものには、

○ナンボ^ナ アヂ[i]マシ[i] バ。

“気もちのとてよい時のことば。うんとつかれて、一本やって、湯
 サはいった時。”

○オメ^ナ 下サイ イグ[ü]ンダ^ナ バエー。

あんたはどこへ行くんだよ?

などがある。第二の問いの例のほうでは、「バエー」が見られる。(「バイ」に
 かなり近いものとも受けとられようか。) 青森県下の「南部」地方で私が得た例
 には、下北半島田名部の「ドゴサ イグ[ü] バー。」(おまえはどこへ行くの
 だ?), 十和田湖畔の「七・八年まえダ バ。」などがある。津軽平野の中部で
 聞かれた説明には、“ひとりごとの時(自分の気もちに関連した時に), 「バー」
 を言う。”というのがある。——“老若男女が同等以下に言う。”ともあった。

「ナニ〔i〕 ス〔ü〕ンダ バー。」(何するの?)は、「いいほうのことばではない。」という。津軽では、「バナ」の複合形のおこなわれることもいちじるしいようである。「アノ ワラス ナッポ ミタグ ネ バナ。」は、「あの子どもは、とてもかわいくない。」であるという。

北海道内にも、青森県下と同様の「バ」があるか。土居重俊氏の「北海道方言素描」(『方言研究』第五輯)には、「ナンダバ(何か)」、「イヤダバ(いやだよ)」などの事例が見える。やはり、用法が多様である。柴田武氏編の『お国ことばのユーモア』にも、佐藤誠氏の「お前のうちにカラス住んでるか?」(函館市の山背泊、^{ヤマセドマリ} 穴潤方面)の中の、

「オラヤノ(ぼくのうちの)カチャバ(おかあさん)をカラストワ何ダバ!」

が見える。

東北地方のばあいにも北海道地方のばあいにも、問いの「バ」を、問わない表現のばあいの「バ」と合わせ見ることが、ゆるされるのではなからうか。

七 「オレ」の属

「私」属の文末詞がおこなわれるならば、「オレ」などという文末詞もおこなわれてよいはずである。私が、山形県庄内の酒田市で聞いた「ヤダ オレ。」(いやだ。)は、「オレ」がまさに文末詞的なはたらきのものであった。横山辰次氏は、「山形県置賜方言語法」(『方言』第五卷第十二号)で、「エガネシタ オラ(私は行きませんよ)」などの事象を示していられる。「オラ」は「オレは」であろう。しかし、「オラ」が文末詞ふうのものになっている。斎藤義七郎氏は、『方言学講座』第二巻の「宮城・山形」で、

オラ。本来第一人称代名詞が終助詞化したものと述べていられる。

『全国方言資料』第2巻の「栃木県那須郡黒羽町」の条には、

m………… キョー キテ キョーチテモー ムリダンベ オレ
 きょう 来て きょうといっても 無理だろう。

というのが見える。

『仙台の方言』にも、

「書生さんのよっきりみと情なくなりす、おら」（書生さんの酔ひどれ
 を見ると情なくなりますよ）

などが見える。

東北地方には、「オラ」がかなりおこなわれているらしく、柳田国男先生の『毎日の言葉』にも、

東北では岩手県の北部などに、「さうでせう」をソウダベドラ、文章語にして見れば「さうであるべいぞ我は」となると思ひます。外南部で私の荷物を背負つてくれた娘などは、人が物を言ふ毎に一つ〜、ソウカエオラとオラの語を添へた受返事をしました。

との記事が見える。

中部地方の「新潟県岩船郡朝日村高根」（『全国方言資料』第2巻）にも、

fゴジョガリデ コンギリコンギリシタ オラー

50刈りといって 小切ったものです、 わたしたちは。

などの言いかたがおこなわれている。

近畿以西の地域には、「オレ」の属の文末詞ないし文末詞ふうのものが、一般には、見いだされないのではないか。

八 「ワレ」の属

たとえば近畿南部に、「レ」や「ラ」の文末詞がおこなわれている。これらは、「ワレ」に淵源するものではないか。こう見たばあい、「ワレ」の属の文末詞がたてられる。現に、「ワレ」形そのものの文末詞も認められる。

「ワレ」には、人称代名詞対称系の文末詞と見られるものもある。それは、第四節の三でとりあげる。今ここには自称系のものがとりあげられるが、これと対称系のものとの分別は、つねにはかならずしも容易でない。柳田国男先生は、『毎日の言葉』で、「口語では文句の終りに『我は』を付けるのが、寧ろ全国を通じた法則だつたかと思はれます。」と説かれ、自称系のものの弘布を認められるようである。

以下に、自称系と考えられる、「ワレ」の属を見ていこう。九州地方以西については、言うべきものがなさそうである。(大分県下の昔話のことばづかいに、問題事例があるかにも見えるが、たしかなことは言えない。)

中国地方では、隠岐島後北部地域に、神部宏泰氏教示の、

○アッチー エキヤータレ。

「あちらへ行け。」

などの言いかたがある。ここでの「レ」は、どういうものなのであろうか。

四国地方では、まず、愛媛県に属する瀬戸内海魚島に、「レ」文末詞の用法が見られる。「おまえはどこへ行くのか。」は、「ワラ ドコ イタ ンドレ。」と言われている。代名詞系の「レ」文末詞が認められよう。ただし、これが自称系のものであるかどうかは判然としない。「ハヨ メジニ セン カレ。」(早くめにしようよ。)というのにしても、「カレ」の「レ」が、かんたんには自称系のものとしがたいようである。もっとも、用法の拡張によって、自称系のものも自称色のうすれたものともされることがあろう。

高知県下では、県西南部内の“大方町湊川では二十才台が、カイを、中年がカエを、老人がカレを使用する傾向がある。”という。(土居重俊氏『土佐言葉』)いわゆる幡多地方内には、老人以外にも、だんだん、「カレ」が見いだされるようである。『土佐言葉』には、

高知市近辺では、口はつかぬ。ただし物部村旧上葎生村や大豊村旧豊永村

では、七十才以上の老人が

モー オソイケン ヤスメロ（もうおせいから休みなさい）

マー チャー ノメロ（まあ茶を飲みなさい。）

ネーヨ マー クエロ（ねえさんまあ食べなさい）

ソレホド イニタケリヤ カッテニ イネロネ（それほど帰りたければ勝手に帰れ）

のような言いかたをする。主として目下に対して言う場合である。また中村市や大方町の三、四十才台の男子で受ケロ・下ゲロ・交ゼロ…の言い方をする者が若干ある。

との記述もある。幡多郡の中村市などで「受ケロ」などの言いかたがなされるとすれば、この「ロ」は、上述の「カレ」の「レ」に等しいものではないかと思われる。

四国では徳島県下が、自称系の「ワレ」をよく示す所として注目される。「シラン ワレー。」（知らんよ。）などが、その一般的な言いかたである。県南の一知友は、

○ホナイ イーマワライデモ イク ワレ。

そんなに言われなくても行くよ。（十六歳男→二十三歳姉）

○冷たい ワレ。 ハリマッソー ワリャー。

冷たいぞこら。なぐるぞこら。

などの例を教示せられた。県下に、「カレ」もまた、かなりおこなわれているらしい。「ハヨー セン カラー。」（早くしないか。）など、「カラ」の形も見える。さて、「カレ」や「カラ」の言いかたになると、「知る カラー。」（知るもんか。）や「イカン カラー。」（行かないか。）など、用法のさまざまなものが見られる。祖谷には、

○イトコ ヨー キタ アーロ。

“おまえよく来たねえ。”

など、「ノーロ」の言いかたがあるという。「ロ」は「レ」に類するものか。（上

巻 p. 275 参照)『阿波言葉の辞典』には、

ロ [文末助詞] 感動をつよめる「よ」に当る(祖谷)

との記事が見える。谷藤匡夫氏は、祖谷地方の「ノーロ」について、

然し現在では殆ど「のうろ」は聞かれなくなり、時に老人などで、ていねいな人がつかっているのを聞く程度です。

と教示せられた。

香川県下にも、「レ」文末詞がかなりよくおこなわれているのか。草薙金四郎氏の『讃岐の方言』には、「あらーれ (句) 有るよ。」「なんどれ (副) 何か。」「こんかれ (句) 来ないか。」などが見える。本県下の島嶼部にも問題の事象が見られ、第一に小豆島では、「シラ^ン ワレ。」「知らないよ。」などの言いかたがおこなわれている。明らかに自称系と見られる「ワレ」がここにある。小豆島に、「ナレ」「ド(ぞ)レ」「カレ」などの複合形もおこなわれている。小豆島の近くの沖ノ島では、「もう行ったろう。」を、おとなの男子はときどき、子どもはよく、「モー イツラ レー。」と言っている。他の、西方の島嶼内にも、「カレ」や「ガレ」が認められるらしい。

愛媛県本土部に「レ」文末詞の見られない状況からしても、以上の四国状況は特異なものとされる。人代名詞系文末詞の使用と伝播・伝流とは、特別の事情もあったのか。

近畿地方での、問題事象の分布がまた、かなり特異である。兵庫県下は淡路に、そのいちじるしいものがあり(このさまは、四国東半状況によくつながっている。)、兵庫県下山陽がわに問題事象があって、やがて和歌山県下に、とくにそのいちじるしいものがある。(このさまはまたよく、四国東部状況に対応するものである。)

淡路での、自称系の「ワレ」文末詞に関しては、のちの p. 472 でも述べている。この島のうちでは、「レ」形のおこなわれることがさかんである。“できますよ。”は「デキラ レー。」と言われている。“行きますよ。”は「イカ^レレー。」

とされている。

○ソナ モナ ヨー カワナンダ レ。

そんなものはよう買わなかったよ。(田の肥料の話し) (老男間) は、北端での「レ」例である。「レ」は小学生などにもおこなわれており、「ミラーレ。」(見るよ。)などの言いかたがなされてもいる。複合形では「ノーレ」がよくおこなわれており、「ナーレ」もかなりよく聞かれる。さて、「ワッラー ワカイ トキ ナーレ。」(わしらは若い時にねえ。)などともあれば、「ヨー ケンカスル ナーレ。」(よくけんかするねえ。)などともある。「ナレ」の短呼形も聞かれる。「カレ」複合形も、淡路に広くおこなわれている。これも、「モー アメ ヤッ カレー。」(“もう、飴をやるものか。”)などともあれば、「コン カレー。」(来ないか。)などともある。淡路は、四国東部と近畿西南部との間にあって、自称系の文末詞に関しても、いかにもと首肯される状況を呈している。

播磨地方には、同系の文末詞の、さほどいちじるしいものはない。ところで、『播州赤穂方言集』には、「新中生・高校生」の「スミデカカンカーレ(墨でお書きなさい)」などが見える。和田実氏の「兵庫県高砂市伊保町」(『日本方言の記述的研究』)には、

レ 男、カ・コ・ガ・ワに荒さを添える：誰ガ貸シタルカレ；知ランガレ；有ルワレ～有ラレ。

との記述が見られる。

清瀬良一氏はかつて、神戸のぞんざいなことばの一つとして、「知らんワレ。」というのを教示せられた。——「ワイ」もあって「ワレ」がある。

今石元久氏は、宝塚市域でのことば、「モー カク カレー。(もう決して書くものか。)」を教示せられた。

大阪府下では、南部に「レ」文末詞がおこなわれており、南部の河内のことばをとりあげられた今東光氏の『闘鶏』には、「そんなこと判るかれ。」などの言いかたが見える。佐藤虎男氏は、泉南郡岬町のことば、

○マージンオバ サソオ ラ。

マージン（学友のあだ名）を誘おうよ。（中学生間）

というのを教示せられた。このほうともなれば、和歌山県下に類して、「レ」に近い「ラ」の文末詞を見せるのか。

和歌山県下

本県下は、わけても、問題事象の複雑な所である。「ワレ」「レ」「ラ」の類のものがよく認められる。

楠本実二氏の「奥熊野地方の言語」（『熊野』）には、

上野地^{うえのち}、高津^{たかつ}あたりになると、「のーら」の代りに「われ」を語尾につけるのはどうしたことか。

との記事が見える。『南紀土俗資料』には「わり」の指摘があり、

（わい）〔清川〕 例「話をしたいわり。」

とある。「わり」は「ワレ」であろう。——自称系のものであろう。

「レ」は「ワレ」に近い形ではあるが、本県下に「レ」のおこなわれることは、「ラ」「ライ」のおこなわれることのさかんなには劣る。それにしても、「レ」もそうとうおこなわれている。『和歌山県方言』には、「シラナレ 知るかい（怒を含んでいふ時）」「チガワレ（違ひますよ）」「シルカレ（知るものか）」などが見え、県下の南北にわたってこの種の言いかたのおこなわれるさまがうかがわれる。同書に、「あらまあ」の「マアレエ」も見える。（「マアレエ、あんな事をして。」）以上の「レ」には自称系の味わいがくまれよう。ところで、「レ」の用法には、むしろさそいや命令その他の言いかけになるものが多い。『和歌山県方言』の例は、

マイシヨウレ 止めようよ

などである。新宮市で私が聞きとめた一例は、「コヨイ オイデー。アソボレー。」（ここへおいで。あそぼうよ。）である。「イヨ レー。」（行こうよ。）などはよく聞かれるものである。

本県下に、「レ」相当の「ラ」のおこなわれることがさかんである。『全国方

『言資料』第4巻の「和歌山県東牟婁郡古座町」の条には、

f ハイ ワテララ コドモノ トキラデモラ

はい。わたしたちも 子どもの ころにはね、

というのが見える。『和歌山県方言』には、「ありますわ」の「アララ」, 「ありますよ」の「アライラ」, 「上げませう」の「アグラ」などが見える。県下に広く、この種の言いかたがおこなわれている。串本のことばには、「アリマッテンスラ。」(ありますよ。)などの言いかたがある。

『和歌山県方言』には、「行きませんか」の「イクラ」, 「帰りませう」の「イナンショラ」なども見える。これらの「ラ」は、はっきりと相手にはたらきかける表現でのものである。私が串本で聞いた「モー ヤメヨ ラ。」(もう止めようよ。)なども同例である。こうなると、——「ラ」がもし自称系のものであるならば、用法の拡張が明らかである。県下に、さそいかけ、よびかけ、はたらきかけ、あるいは命令の「ラ」の用法がさかんである。

○ハヨー ワカヤマノ シズカナ トコイ カイロ ラー。

早く和歌山の静かな所へ帰ろうよ。(大阪での老人のことば)

は、県下中部での、明らかなさそいかけの「ラ」の一例である。

「ラ」の頻用の中でであろうか、「ロ」形も生じているらしい。串本町などには、「する」ことを命じる「セーラ。」「セーロ。」の言いかたがある。

「ラ」の盛行につれて、その複合形もできている。『和歌山県方言』には「ワラ」というのがある。「ありませんわ」が「ナイワラ」とある。——これなどは、明らかに自称代名詞系のものであろう。『南紀土俗資料』には「無いわいら。」というのが見える。「ラヨ」複合形もある。さきの『和歌山県方言』には、日高郡の、「違ひます」の「チガワラヨ」が見える。『和歌山県方言(其二)』にも、

アララヨ ありますよ、ございますね 「日高郡」

とある。日高郡下で私が聞いた「ラヨ」例は、「ハヨー タベヨ ラヨー。」などである。串本ことばの一例は、「メシ クラ ラヨー。」である。『和歌山県

方言』には、「もう一度来て下さい」の「マタキテラヨ」というのもある。同書に「ラエ」も見える。県下の南北に「ラエ」があり、串本方面では、

○オカサン ハヨ ゴハン タベヨ ラエ。

お母さん早くごはんをたべようよね。

などの言いかたがなされている。「ラエ」も、和歌山県下の「ラ」ことばをよく生かした、土地情調の濃いものらしい。「ヨラ」複合形もある。『和歌山県方言』には、東牟婁郡の、「止めませう」の「マイシヨラレ」というのが見える。（「レ」の付着が目される。）「ヨラヨ」との言いかたもある。命令表現のばあいには、「早う行かんから」などとなる。（『和歌山県方言（其二）』）命令表現のばあい、ことに単純な「アレ 見ーラ。」などの言いかたになると、「ラ」に対称代名詞系を考えてみることもできる。

「ノラ」複合形も、県下によくおこなわれるものである。——県中部以南にさかんであろうか。「ノーラ」と発言されることも多い。『全国方言資料』第4巻の「和歌山県日高郡竜神村大熊」の条には、

f………… コシニ エライ ツッテノーラ
腰に たくさん つってねえ。

などとある。

○ユキノ ナイ オリヤッタイ エエケンド ノーラ。

“雪のない時だったらよいがのう。”

は、県南での一例である。県南の一土地人は、私に、“旅さきで ヂキニ ワラワルルノワ、「行ヨラ」と「アラ」とです。”と語ってくれた。「ノラ」「ノーラ」は、相手によびかける調子の発言になることが多い。『和歌山県方言』には、「あのね」の「あのノツラ」がある。（「ノシ」に「ラ」がついている。）

「ラ」の発展形「ライ」がある。これも、県下の南北に広く見られる。「ライ」形文末詞は、もっぱらと言ってもよいほどに、勧誘の表現に用いられている。——勧誘の気分のもとに「ラ」がつかわれるにあたって、「ラ」は、しぜん「ライ」とされたのもあろうか。南部での一用例は、

○オマイラー ドイロー ファイキ ハエトルチューサカ イコ ライ。

“おまえらたいそう落が生えているというから行こう。”

である。（“相手をうながしている気もちが「イコ ライ」にあらわれている。”）
新宮市で聞いたことばには、「イコ ラーイ。」（行きましょうか。）がある。
「ライ」の勧誘には、多少とも、さそい気分の軽快めいたものがにじむか。県下
北寄りでの一例は、「オカサン ハヨー タビョー ライ。」（お母さん早くた
べようよ。）である。「ライラ」との言いかたもある。

「ラン」の形もあり、『和歌山県方言』には、

イコラン 行きませう

などとある。

三重県下

本県下も、和歌山県下についての、問題の地域である。佐藤虎男氏は「愛知
県・三重県海岸線の文末助詞」（『方言研究年報』第一巻）で、

「ワレ」は三重県下全般におこなわれるが、頻度はひくい。一般に下品
なことばである。

○イキガイガ アル ワレー。

生きがいがあるよ。（そうすりゃ） （中男→老女）〔古江〕

との記述を示してられる。その「ワレ」が、三重県紀州ならびに志摩に、と
りわけ見いだされがちである。紀州分のうちで私が聞いた例には「イヤ ワレ。」
（いやだ。）などがある。『三重県方言資料集 志摩篇』には、

おれにも読める オレデモヨメルワレ（志）

オラモヨメルワ （明）

というのがあって、「ワレ」と「ワ」との関係がよくうかがわれる。なお同書に
は、

いらんわい 要らぬよ（和）

いらんわれ 要らぬよ（和）

ともある。志摩について「ワレ」文末詞を指摘する方言文献が、いくらかある。

県下紀州分から志摩にかけてに、「レ」形文末詞がよく認められる。

上の「ワレ」といい、この「レ」といい、伊勢南辺にはものがほとんど見られないらしいのは、分布上、注目すべきことである。言ってみれば、この地域は、もはやそういうものの消失地帯になっているのか。

叙上の地域に「レ」文末詞のおこなわれるさまは、和歌山県下での「レ」のおこなわれかたにまさるものがあるろう。志摩地方に関しては、諸方言文献に「レ」文末詞の指摘を見ることができる。『三重県方言資料集 志摩篇』には、

「アルワレ」(有るわれ)は「アラレ」(和)となる。即ち、aruware> arare である。

という記述がある。紀州尾鷲には、

オトロツシヨウレ おゝ恐い

などの言いかたがある。(『をわせことば』という土地の案内書による。)紀州の長島では、「レ」が「リ」ともなっているか。

○コレ ムケテ マタ タスジャ リ。

<これへむけて> “これへまた、もう一本、つぎ足すんです。”

(老女→藤原)

などの言いかたがなされている。「リ」形は目上へのものであるという。「〜でしよう」の「〜ヤロ」に対しても、「〜ヤレ」「〜ヤリ」の言いかたもなされているのからすると、上の「リ」も、「レ」相当のものと見てよいかと解される。上の老女は、「ソレカラ マー ソリ、……………」(それからまあ、それ、……………)などの言いかたもした。

「レ」文末詞が、勧誘その他、相手への明らかなはたらきかけに用いられることもいちじるしい。紀州分で、「イコ レー。」(行こうよ。)などの言いかたが熟している。「イコ ラー。」とも言われるが、「イコ レー。」のいぎないのほうはやさしいと言う人もある。紀州分の西部では、私は、

○サッキノ トーリ ショー レイネー。

さっきのとおりにしようね。(小女間)

など、「レイ」の言いかたも聞いている。紀州路に問いの「レー」も聞かれる。「ホントニ レー。」(ほんとにかい?) などとある。

「レ」にはいろいろの複合形も見られ、それらがよくおこなわれている。まず「ナレ」がある。——「ナーレ」とも言われている。志摩に、「ナレ」「ナーレ」がよく聞かれる。複合形、「ゾレ」相当の「ドレ」もある。これは紀州分によく聞かれ、尾鷲でも、

○ドヨイ イク ソドレー。

どこへ行くのかい?

などとある。尾鷲の人は、「ガイ」文末詞の「ゲ」形や「レ」文末詞を下品としてもいる。複合形「カレ」がよくおこなわれている。これは、志摩にもよくおこなわれており、かつ紀州分にもよくおこなわれている。佐藤虎男氏は、「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

「カレ」は、三重県下全般に男ことばとしておこなわれ、これも品位はひくい。

と言われる。複合形に「ガレ」もあるか。

つぎに、「ラ」形が指摘される。おもにさそいの表現に用いられているのが見られ、ときに命令のばあいもある。紀州分での一例は、「マイショ ラー。」(止めようよ。)である。「ラ」文末詞は紀州分によく見られるか。ところで、北浦讓氏の「伊賀地域に於ける 児語の研究(1)」(『三重県方言』第1号)には、

いこら 行きましょう。

の記事が見える。『松阪の方言』には、

遊ぼラ 遊ぼうよ

というのが見える。『三重県方言資料 志摩篇』には、「早よ休めラ」との、命令表現のばあいのものが見える。福田学氏の「熊野方言における文末辞について」(『三重県方言』第8号)には、「イコラレ」との、特異な複合形が見える。

「ライ」形が、また見られる。さそいの表現に用いられるものである。紀州

分に、これがよく見られる。尾鷲ことばでは、「たべようよ。」にあたるものが「タビョー ライ。」と言われており、そのいちだんと低いものには、「クラーライ。」がある。もともと、「行コ ライ。」などの言いかたは、県下にやや広くおこなわれもしたものであろうか。紀州、木ノ本のことばには、若い人の「イコ ライ。」とともに、老年層の「イコ ラエ。」がある。「ラエ」はていねいな言いかたであるという。「ライ」に近い「ラエ」形は、「ライ」相当のものとしても、あるいは「ライ」の訛形としても、紀州分の西半におこなわれているか。「ラン」というのも、紀州分内にあるらしい。

奈良県下

いわゆる熊野路に関連して、本県南部にも問題事象がある。主としては、「ラ」形文末詞がおこなわれている。南部、吉野郡の東部で私が聞いたものには、「ソーヤ ラー。」というのがある。「そうヤ ナ。」におなじものだという。東部と西部とに「ラ」がよく認められるようである。西部の十津川村の「ラ」例は、

○コノ テガミ ヨーデ クレー ラ。

この手紙を読んでおくれよ。

などである。「ラ」が「ラヨ

m………… ヤセーナ ムンジャッタラ コンダケジャノーラ

野生の ものだったら これだけだね。

というのがあり、「ノーラ」に関して、「目上に対して使う終助詞」との注が見

える。

十津川には「ライ」形も見える。

○ハイ サイナラ。マタ コー ライ。

はい、さようなら。また来なさいね。(帰る人を送ることば)

は、その一例である。

本県下には、「レ」形のおこなわれることはなさそうである。ところで、『方言資料抄 助詞篇』には、

奈良市 ○考へたらほんまに阿呆らしいわれ。(「地方語読本」)

奈良県中和地方 ○オトオトワマリオケツトルワレ。(小滝久夫氏)

との記事が見える。県南ならざる地域に「ワレ」があるのか。

滋賀県下

京都府下には、問題事象が見いだされなくて、滋賀県下の北域に、「ナレ」が見いだされるようである。『毎日の言葉』には、

滋賀県の北部には、「さうだ」をソウヤナレ、「私のだ」をワシノヤナレなどいふ語があります。

とある。佐藤虎男氏も、県東北部の東浅井郡下で「ナレ」を聴取してられる。

湖西の高島郡下で、「ソソ[↑]ラー。」と言っているのは、「ソーヤ。」(そうだ。)の意であるという。どういう「ラ」なのであろうか。

つぎは中部地方である。

北陸道に、問題事象がある。まず、福井県越前東部に注目すべきものがある。(とすると、近畿も、東北隅の滋賀県北域に問題事象があるのは、まさに、北陸の事象に連続するものと見られるべきなのか。滋賀県下は、いろいろな事象によって、——近畿の中にありつつも、とくに、北陸との関連を示す。)

『福井県方言集』には、大野郡下のことば、「ソージャンレ さうです」の指摘がある。大野郡の天野俊也氏は、郡下の北谷村のことば、「ソヤアロ。(そうやのー)」を教示せられた。さて、愛宕八郎康隆氏は、大野郡下の勝山方

言の事象、「ワレ、ワイ」「ウェレー」「レー」という三者を教示せられた。「ナ
イ ワレ。」は「ないのよ。(少女間)」であるという。「アカン ウェレ
ー。」は「だめですよ。(三十歳代女間)」。「レー」の一例は、「ポンプ
カー。ポンプ アカンノヤ レー。(ポンプ。ポンプはだめなんだよ。青
男間)」である。さきの天野氏は、やはり北谷村のことば、「エーザレ。」(“そん
なことをしなくてもいい。”)というのを教示せられた。

加賀に、「ニジュースヤ ワレ。(二十四歳だよ。)」などの「ワレ」文末詞が
あるという。(愛宕八郎康隆氏教示)『白峰村史 下巻』の中の、小倉学氏・山
下鉦次郎氏「伝説と昔話」には、

「そりや、あんたらもやつぱり、ぶね(舟)やざれ。」

というような「ザレ」が見える。『全国方言資料』第8巻の「石川県輪島市海士
町」の条に見える、

m………… ココナヘロモ $\left(\begin{array}{l} f \\ f \end{array} \right)$ イヤー タツトカ アルエラン
9ひろ[尋]も $\left(\begin{array}{l} f \\ f \end{array} \right)$ いや。 深いところが あるのだよ。

は、どういう「ラン」を示しているのであろうか。

富山県下に「ナレ」がかなり聞かれるのか。富山市近くでの一例は、

○アメガ ヨー ナカッタヤラ ナレ。

雨がよくなかったやらねえ。(ことしは柿がばたばた落ちた。)

である。老年層に、「ナレ」がより聞かれるのか。愛宕八郎康隆氏の教示によ
るのに、氷見ことばには、「コレ ダケヤ レ。(これだけですよ。)」との言い
かたがあるという。いま一つ、氏の教示せられた越中ことばに、「ヨワッタ
ワレー。(こまったわよお。)」というのがある。——これは、少女から青男へ
のことばとのよしである。

新潟県下の昔話には、本題の「レ」文末詞が出てくる。北条忠雄氏の「方言
語法に関する管見及び考察(三)」(『方言』第七卷第八号)には、

エゴレ、エゴレ、(中蒲原郡・「行カウヨ行カウヨ」)

の記述がある。中蒲原郡方面は、「レ」のよくおこなわれる所らしい。複合形

も見える。『越後方言考』には「レヤ」が見え、

お前ばかり喰はねて子供にも喰はせるがらレヤ（のだよ、長岡地方）とある。押見虎三二氏の『秋山郷方言の語法資料』には、「ソーダレ〔老・女→調〕（“そうでございますよ。”）」などというのが見える。

岐阜県下では、私は、いまだ問題の事象を見いだし得ていない。

愛知県知多半島には、「レ」「ラ」があるのか。『南知多方言集』には、

「ワレ」 融合して「知ラナレ」「ダーレ」「スカレ」のやうな形でも用られる。

とあり、「そんな事は知らないぜ ソンナ事ヲ知ラナレ」などの「レ」例が見える。同方言集にはまた、

そこを退け ソコドケラ

などというのも見える。江端義夫氏にも、知多町のことば、「ラ」文末詞の指摘がある。高瀬徳雄氏が「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」（『方言研究年報』第一巻）のご手稿で、

○キタナイデアイデモイーラ。

汚いで脱いでもいゝでしょう。 （少女→大）

（「ラ」は体言にはつどかない。）

としていられる「ラ」は、どういふものなのであろう。助動詞か。

静岡県下には「エレ」がある。『全国方言資料』第3巻の「静岡県掛川市上西之谷」の条には、

f ホン ソリャー タイヘンダエレ

それは たいへんですね。

などとある。諸家に「エレ」の指摘がある。これに、本題の「レ」文末詞を認めることができるのか。山口幸洋氏の「井川村方言の語法実際」（『近畿方言双書』）には、

ヨエーダーイエレ 良いんだよ！

ソーユードイラ そういふんだよ！

などの事例が見える。

長野県下では、『信州方言読本 発音篇』に、「木曾一帯および下伊那南部にかけて」の「いやーれ（嫌^レ=嫌だよ）」が見える。『全国方言資料』第2巻の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条には、

*m*ナニガ アラズレ

なにも なくて。

などというのが見える。

山梨県下については、言うべきものがない。

山梨県下の状態につづいて、関東地方の状態が、また、本題の「レ」「ラ」などを見せないありさまである。

東北地方となって、いくらか、問題事象が見わたされる。

福島県下の『会津方言集（増訂版）』には「ベラ」がとりあげられており、

「ソーダベラ」（ソーダベ^レェーオラ）の約。

との解説が見える。『福島県中村町方言集』には、「これなあれ、これネのネに当る強辞。」など、「ナーレ」が見える。『会津方言集（増訂版）』には、「カレ」相当の「ガレ」「ガーレ」が見える。（「ソーガレ」については、「さうですか。『さうかあれは』の約。」との説明が見える。）私が会津北部で聞いた「カレ」例は、

○ソー カレー。フーン。ソー カレー。

そうかねえ。ふうん。そうかねえ。 （老女→老男）

などである。土地の人は、「「レー」はつけそえ。」と言う。

会津の状況を受けて山形県下に、「レ」文末詞のおこなわれることがいちじるしい。庄内地方を除く広い地域に「レ」があろうか。『山形県方言集』には、「本をまようがら、なれ。（本を弁償するからね。）」というのがあり、これは、最上・村山・置賜地方に見られるものとされている。県下に、「ナレ」複合形

がさかんにおこなわれている。「ナーレ」ともある。)方言絵はがきにもこれがとりたてられている。斎藤義七郎氏は、「マレ」について、「まあホレ」との解を示された。さすれば「ナレ」についても、「なあ、ホレ」の解が成りたつのか。私は、今しばらく、「ナレ」を本題の「レ」文末詞にかかわる複合形と見ておきたい。蔵王山麓のことばには、「ナレ ナレ。」(ねえねえ。)とか、「カーチャン、ナレ。」(母ちゃん、ねえ。)とかの言いかたがある。娘さんがはずかしく「ナレ。」(ねえ。)と言ったりもしているという。ここに、老若男女によくおこなわれる「ナレ」を、私は、熟した「レ」系文末詞と見たい。「ヨレ」(「ヨール」も)の複合形もあるのか。『毎日の言葉』には、

山形方言集を見ますと、村山三郡には又フダドレといふ語があります。

石を打つたのは君か?—フダドレ

フダは他の地方でホンダ・ホダなどいふのも同じく、「さうだ」の音の訛り、ドレのドはづかと思はれますから、やはり終りにオレが附いて居るのであります。最上郡の方では

この人だこんだらきしエだワード

といふのが、「此人ならいやだ」といふ意味だと申します。ダコンダラは「だといふならば」、キシエダは此地方でのキラヒダの発音差、ワードは即ち我等の意であります。人は「誰でもさうだらう」といふ気持のあるときには、自分一人の場合にも複数の我等を使ふことがあるのです。

とある。(一部は p.441 でも引用)

宮城県下にも、「ナレ」があり「ネレ」がある。菊沢季生氏の「宮城県方言文法の一斑」には、

アンナレ あのネ
ソシタラバネレ さうしたらネ

とある。松島湾岸の一地では、私も「ナレ」(「ナーレ」も)「ネレ」「カレ」を聞くことができた。「上のやつら ナレ。」とか、

○ナンボデモ イーッテ ネレ。

いくらでもいいたってねえ。 (中女間)

とかの例がある。「ナレ」「ネレ」が、広い層の男女に聞かれた。(私が、「ネワレ」についてたしかめたところ、その言いかたはほしないとの返事があった。)

岩手県下に、問題の「レ」がある。小松代融一氏の、『方言の旅』に寄せられた「岩手」には、

アンダガダァ ハルリョコーァ ドッツニスベド モッテァスタレァ。
貴方がたは 春の旅行は どちらにしようと 思っていました

か。

との記事が見える。同氏の『平泉方言の研究』にも、

どこさえぎあすたれあ (どこへ行きましたか)

などの例が見える。こうした問いの「レァ」(「ァ」はつけそえ音)は、どういう「レ」なのであろうか。県下の昔話にも問いの「レ」が見える。さて、『毎日の言葉』には、

東北では岩手県の北部などに、「さうでせう」をソウダベドラ、文章語にして見れば「さうであるべいぞ我は」となると思ひます。外南部で私の荷物を背負つてくれた娘などは、人が物を言ふ毎に一つ〜、ソウカエオラとオラの語を添へた受返事をしました。

との記事が見える。(p.450 でも引用)

秋田県については、言うべきものがない。青森県下についても、ほぼ同様である。一つ、津軽で教示されたものに、

オメダヂ ハヤグ イガネバ ガコサ オグエルレ (あなたたち 早く行かなければ学校に遅れますよ)

というのがある。

北海道に関しても、今、私は、言うべきものを持たない。ただ、おもしろいことに、『北海道方言集』には、

のーらは北海道でも新十津川方面の方言である。由来新十津川村は、奈良県十津川郷からの全村移住を以て開拓された村での記事が見える。

「レ」「ラ」「ライ」およびそれらの複合形の存立する所は、今日も、国内にそうとう多い。しかしながら、その分布のさまは、かなり片よったものである。「ワレ」的な「レ」「ラ」などが、いわば特異なものであったため、その成立と残存とも、やや偏したものになりがちだったのか。近畿南部は、とくにそれらのさかんな所である。

偏頗な分布とはいっても、近畿の、南部と東北部とに存在するものに、北陸分布を見あわせると、これは、じつに合理的な残存状況とも見られる。分布に、単純な偶然はあり得ないことなのだろう。

「レ」が「ラ」になったことは、文末詞の聞こえの増大が、しぜんにはかられたものと解することができようか。

「レ」「ラ」「ライ」などでの勧誘の言いかたがよく見られるのは、英語でのLet's に相当する簡便形の流行と見たら、おもしろいのではなかるうか。人は、日本語の文法構造のもとで、しぜんに、巧妙な表現形式を創作している。

第四節 人称代名詞<対称>系の文末詞

一 はじめに

対称代名詞を用いて相手に訴えかけようとするのは、訴え心理の、もっともしぜんなものであろう。

「モン」や「オイ」などとよびかけるのも、つよく相手を求めているものである。訴えかけのことばにこれらを利用するのは、まことに当然のことである。これらに対して、「アナタ」「オマイ」などと、人代名詞を利用して相手によび

かけ、訴えかけるのは、よびかけかたがいったら具体的である。——よびかけの内実が豊富であるとも言える。このところに、人称代名詞〈対称〉のいろいろなもの文末詞化が、おおいに起こっている。

以下に、その世界を見ていこう。

二 コンタ コナ オンシ キサマ

九州の長崎県西彼杵半島で聞いたことばには、「ソージャロン ガノールコンター。」（そうだろうねえきみ。）というのがある。『全国方言資料』第9巻の「大分県臼杵市諏訪津留」の条には、

fアリョ ノーデ ヒッカブツテ ネレ コンター
あれを 飲んで （ふとんを）引っかけって 寝なさい、あなた。

とある。これらを見るにつけても、対称代名詞の「コンタ」の、文末詞化の傾向にあるのを知ることができよう。

四国、愛媛県下に、「ドケー コナ。」（そこをのけよ。）などの言いかたがおこなわれている。——「コナイツ」の「コナ」が用いられていよう。この「コナ」は、対称代名詞的なものになっている。愛媛県下に、広く、文末詞化した「コナ」が見いだされるようである。徳島県下にも、「ハヨ イケ コナ。」（早く行けよ。）のような言いかたがある。中国地方のうちにも同種の「コナ」があるらしく、長門西北部では「ハヨ イケ コナ。」（早く行けよ。）などと言われているのを、私は聞いている。総じて「コナ」は、男性の、しかも年わかいものたちの間におこなわれてはいないか。

「オンシ」もまた、「コナ」とおなじように、男性の年わかいものにおこなわれがちのものであるか。その文末詞化しているさまが、つぎのように、徳島県下に見られる。（金沢浩生氏の教示による。）

○イッ カンジー。

だめじゃないか。 （小男間）

「いくカ」というのへ「オンシ」がつづいて「カンシ」というのができたらしい。「アンシ」というのが見える例文は、「ワカノハナガ ツヨイ アンジャー。」(若の花がつよいさ。)などである。(——「アンジャー」は、「アンシは」であろう。)金沢氏は、「「アンジャー」の品位はきわめて粗い。同輩または目下のしたしいものにだけ言う。」と言われる。ともあれ、上の「アンジャー」も、「さ」と言いかえられているのからすれば、もはや文末詞ふうのはたらきをしているものと見られようか。

柳田国男先生の『国語の将来』には、

東北でも陸前石巻などには、

さうなんやキサー

といふ物言ひのあることが石巻弁にも見えて居る。即ち平素はあまり用ひぬ貴様といふ語をやや粗末に発音して、相手にうつかりと聴き流させまいとする用意かと思はれる。

との記述が見える。「キサマ」が、文末詞にふさわしく、「キサー」と、ものやわらかにされたのであろうか。それにしても、存在のまれな文末詞である。岡野信子氏の「北九州生活語の文末助詞」(『研究紀要』第六集)には、「ナゲエノ ナゲンカキサン(早く投げろ、どうして投げないんだ)」というのが見える。「キサマ」の「キサン」がここにあるのか。いずれにしても、「キサマ」との、今日の感覚から言えばひどい言いかたは、変形されないではすまされなかったようである。

三 「ワレ」の属

方言の世界には、対称代名詞「ワレ」の単称の聞かれることが、かならずしもすくなくはない。(私なども、年少時、郷里方言の中で「ワレ」をつかった。——相手を見さげることばであった。)[「アナタ」や「オマイ」が文末詞化せしめられているのならば、この対称の「ワレ」も、文末詞化せしめられていてよいわけである。

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条には、

f ホンノコト アンナ コッチャ モー ナカ モンジャ ワレ

ほんとに あんな ことは もう ない でしょうよ、あなた。

とある。「ワレ」文末詞が認められようか。鹿児島県下には、「ワレ」「ワリ」「ワイ」の、対称代名詞系文末詞が見いだされるらしい。上村孝二氏の「鹿児島県下の表現語法覚書」には、つぎの記事がある。

第二人称代名詞を終助詞に用いる例を考えてみよう。アヤ 英語ワ ^{アゲ}出
来ソドワヤ (あいつは…)
来ソドワヤ (出来ないぞ)。

斎藤俊三氏の『熊本県南部方言考』には、「アラヤ (決意を指示する)」の指摘があって、「スグクッヂアラヤ (すぐ来るからね君)」の文例についての、「右は人代名詞対称『ワリハ』の転である。」との説明が見える。

『嶋原半嶋方言の研究』には、「こどむぢや あるめし そんくれんこた だけじやわら」などと、「わら」の文末詞的なものが見え、「わりや」も見える。

『大分県方言の旅』第3巻には、「宇佐郡院内村東院内(1)」の、

アンタナー、タナーと並んで [ドゲーチ オモンリー ワガ, [オリモ
行コー ワガ] という調子で [ワガ] ということばが使われています。

というのが見える。「ワガ」が注目される。豊後西北域内にも「ワガ」があるらしい。

長崎市域にも、「エー イコー レー。トーチー。(早く行こうよ。いっしょに。)」などの言いかたがあるらしい。これの「レー」は、対称の「ワレ」の「レー」なのかどうか。

中国地方には、対称代名詞「ワレ」の文末詞化がほとんど認められないようである。ただ、隠岐のうちには、問題としうる「ワレ」「ワリ」があるのか。

四国地方には、対称代名詞系の「ワレ」文末詞がある。『阿波言葉の辞典』に

は、「クラスヅ ワレ。[なぐりとばすぞ君]」などの事例が見える。

金沢浩生氏の教示によれば、県南岸の一部には「トル ワレー。」(そんならいさ。わしがとるよ。)],「イク アレー。(それでもぼくは行ってやるという言いかた。)],「ソナ コト シテ, イッ カレー。(そういうことをしてはいけないじゃないか。)」などの言いかたがおこなわれているという。——青年以下の男子のことばであるという。これらの、「ワレ」以下のものは、自称系のものであるうか。(「ワレ」>「アレ」>「レ」のうつりゆきはよくわかる。)さて、最後の「レー」は、意味上では、対称系のものともとれるのではないか。(さきの「イッ カンジー。」参照。)「行く カレー。」(行くかね。)などの言いかたもあるという。

愛媛県南部の言いかたには、「コゴト ヌカスナ ワレ。」(こごとを言うなよ。)などというのがある。人は、「「ワレ」がつくとよく感じが出る。”と言っている。愛媛県北の内海島嶼には、「ド シタ ンドレ。」(どうしたんだ?)などというのが見いだされる。この地域での、私の郷里方言には、「ねえ。」に相当する「アワレ。」がある。——老女などがまれに言っている。(「ワレ」は明らかに対称系のものである。)「ホンジャッテ ワレ。」(だっておまえ。だつてねえ。)などの言いかたもある。

近畿の淡路島南部では、「ハヨ イカン カレ。」(「どうして早く行かないのか。」と、相手の動作をうながすような時につかわれる。”)などが聞かれ、淡路北部では、「ンモ イノ カレ。」(“もう帰りましょうか。”)などが聞かれる。同時に、淡路内では、「モー ヨータ ワレ。」(もう酔ったよ。)(ヨーカワナンダ ワレー。」(よう買わなかったよ。)などが、老年層によく聞かれる。自称「ワレ」系の文末詞が、淡路には、用法広くおこなわれているのであろうか。

壁谷真蔭氏の「兵庫神戸の方言小纏」(『方言』第五卷第十一号)には、「レー(接尾) 強めの接尾語。反抗的言辞。」との指摘があり、つぎに、「ユーカ

レー 言ふものか。」「シタルカレー してやるものか。」「メールワレー 見えるわい。」の三例が見える。自称系のものか。

大阪府下では、河内弁の「オー、よう来たのワレ。まあ上がって話し合って行かんかいワレ。もっと失業者へらさなあかんど。オンドレ何さらしとんど!!」などをあげてよいのだろうか。——自称と対称との別が、どうも判然としない。(天野祐吉氏「野次男最前線」 『放送文化』第35巻第3号)

近畿南部地帯には、「ワレ」「レ」「ラ」などがよく認められるが、これらはおおかた、自称系のもものとされるのであろうか。「いっしょに 行^レコ ラ。」といったようなさそいの言いかたでは、「レ」に近い「ラ」が、対称「ワレ」の系統のものかと思われもするけれども、これもやはり、意味上、このような用法を示すことにもなっている、自称系のものなのか。対称系の「ワレ」を認定することは、容易でない。

ところで、石川県加賀東南部のことばづかいには、

○^レチャーナ コト コチベリ サラスナ ^レワレ。

小憎らしいことをべちゃくちゃしゃべるな、おまえ。

(中年以上の男性)

などがある。(愛宕八郎康隆氏教示) 明らかに、対称系の「ワレ」文末詞が認められよう。

『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条にも、

m………… コチロー パーサラチャーワリャー

小七郎の ばあさんたちはねえ。

というのが見える。

「長野県更級郡大岡村芦の尻」(『全国方言資料』第2巻)にも、

m………… ヨクテ アレダワリャ

よくても あれだねえ、

というのが出ている。「ワリャ」は、対称系のものなのかどうか。『信州方言読

本『語法篇』にも、

かーちゃんわれー (かあちゃん、なあ) (木曾、黒川)

というのが見える。

※ ※ ※ ※ ※

「ワレ」ではないけれども、明らかに対称代名詞系のものとされる文末詞がある。九州でのことである。

上村孝二氏の「鹿児島県下の表現語法覚書」には、

大隅半島で、ソゲン ジャッチアガ (そうなん
だからね)。アガは第二人称。

とある。

大分県宇佐郡の知友によれば、郡下に、「当地では、対称の代名詞に『アガ』があり、品位は下、したしい間がらでつかう。それが転成して文末助詞になったものと思われる。」というのがある、

○シャッチ イット クルルチ アガ。

どうしても、米を一斗くれるってさ。 (老女→孫青女)

などの例が聞かれるという。

岡野信子氏の『『アガ』と『マイ』』(広島大学方言研究会『方言研究会報』第七号 昭和40年)にも、福岡県筑上郡(さきの宇佐郡につづく。)のうちの、「ベンキュー シュー アガ。(勉強しよう。)」との言いかたが見える。「勿論、二人称代名詞としても『あが』『お前』が頻用されており、『お前』の方がやや上である。」という。

四 「オマイ」の属

「おまえ」といえば、わかりやすいよびかけことばである。これが文末詞に適用されたのは、もっともなことである。

与論島には、

Ōhɑ̃ʃʃufu munu ʔuʃa. ʔittʃa:ga ʃitʃi kuʃju:ʃa ʔuʃa.

(初老男→少男)

＜こうする 者 ウラ。如何が 為て くれよら ウラ。＞

この馬鹿たれは！どうしてくれよう、この！

との言いかたがあるという。(町博光氏「与論島朝戸方言の文末詞」『方言研究年報』第一卷) [ʔuʃa] は「おまえ」とのことである。——「[ʔuʃa] は、怒罵の表現をささえる固定的な用法となっている。」という。

九州、長崎県下・佐賀県下・福岡県下・大分県下に、「オマイ (オマエ)」文末詞の、よく熟したものが認められる。「長崎県下県郡厳原町豆酸」(『全国方言資料』第9巻)の例は、

mハー ヤッパ ソーシテ ミレバ オマエ

ああ、やはり そうして みれば、あなた。

などである。佐賀県下に「オマヤ」形のものもある。福岡県下には「マイ」の形のものもある。大分県下には、「オマイ」「オマエ」がよくおこなわれているらしい。略形「マイ」も、かなりよく見られる。中津市で聞いたことばには、「ナデー ショーグワツジャラー マイ。」(長い正月だろうね。)などというのがある。

中国地方にも、島根県その他に、熟した「オマイ」文末詞が見いだされる。

四国の「高知県幡多郡大月町竜ヶ迫」(『全国方言資料』第8巻)には、

mワシモー オナジジャッタノヨ (f ハー) オマ ウチ ……
わたしも 同じだったんだよ。 (f はあ。) おまえ、わたしが

との言いかたが見られる。

近畿内にも「オマイ」文末詞があり、『全国方言資料』第4巻の「三重県北牟婁郡海山町河内」の条には、

mアー マー マイ オマエモ マイ ラクナ ミジャシ マイ (f (笑))
ああ、まあ ねえ、おまえも ねえ、楽な 身だし ねえ。
ブラブラシトリャ エーンジャシノー

ぶらぶらしていれば いいのだからねえ。

というの見える。この「マイ」は、「オマイ」からのものと見られるのかどうか。

中部地方・関東地方には、文末詞「オマー」などが見られるか。『全国方言資料』第2巻の「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条には、

f エツダカ へー オマー

いつですか、 あなた。

とある。——「オマー」が文末詞ふうのものと見られようか。上野勇氏の「群馬・埼玉」(『方言学講座』第2巻)には、「メ」についての、

群馬の利根では、ソーダメ・ソーダイメというように、共通語の「ね」と同じに使っている。

との記述が見える。「メ」は、「オマー」に関係のあるものなのかどうか。

「オマイ」の属とするのには、用語品位の点で問題があるが、まずは同類の語とされるものに、「オハンナ」の「ハンナ」がある。井上親雄氏によれば、薩摩北部に、

○アタイナッダ ミイモ センタッデ ハンナ。

私などは、(西瓜の苗を) 見ることも (=手入れも) しないんだから、
あなた。 (壮男→壮男)

などの言いかたがおこなわれているという。氏は、「ハンナ」につき、“既に文末助詞化している。老幼男女が、同輩以下の親しい者に対して言うのに用いる。人によっては口ぐせになっていて、特別の意味はない。強いて言えば、念を押していると言えようか。”と言われる。「ハンナ」は、氏が「あなた」としているように、よいことばであろう。「オマエ」の、本源の言いかた、「御前」と同趣のものであろう。その意味で、今、「ハンナ」をこの位置においてみる。

「オマイ」に「ナ」「ノ」などの冠せられた複合形文末詞がある。九州に、

これらがいちじるしい。

「ナマイ」は、さほどには見いだされないのか。私の手もとには、長崎県西彼杵郡下の一例がある。「ゴーギ ホメキマス ナマイ。(たいへん暑いですね。老女→中女)」などの言いかたがなされているという。(緒方真美氏教示)「ナマイ」はどうして、広くおこなわれなかったのか。「ノマイ」の弘通事態からかえりみるのに、「ナマ」の〔a〕母音連続がさわりになったのかとも思われる。——「ナ」がつよくひびけば、「オマイ」の略の「マイ」は弱勢の地位にたつか。

「ノマイ」を見る。「ノー オマエ (オマイ)。」の言いかたが、しぜんに、「ノマイ」の言いかたをみちびいたであろう。長崎県下・佐賀県下に、「ノマイ」がよくおこなわれている。関連して、福岡県筑後などにも「ノマイ」が見られる。(肥筑とはいえ、肥後には、「ノマイ」がない。「ノモイ」はある。)

長崎県下にさかんな「ノマイ」の一例は、「ドケー イク トノマイ。」(どこへ行くのですか?)である。西彼杵半島の人には、これを、よいことばだと言ひ、「方言では最上級」だと言った。「ノマイ」はわるいことばではないと言う人は多い。「ノマイ」が「ソー ノマーイ。」(そうですね。)のようにも言われている。“目上の人には「ノマイ」と言う。”と説明する人もある。県下での、ことに島原半島方面での「ノマイ」頻用のうちには、「モンノマイ」という複合形の頻用もある。

佐賀県下では、「オマイ」文末詞よりも「ノマイ」文末詞のおこなわれるのがきわだっている。心やすい会話に、「ノマイ」がよく出る。「チーノンエンジャッタ ノマイ。」は、「“久しく”見えなかったねえ。」である。男児たちも、「オンチャン、ナン ショー ノマイ。」などと言っている。男性間に「ノマイ」がよくおこなわれているようか。「ノマーイ」などとも言われている。県下で、“「ナター」と「ノマイ」とでは、「ナター」のほうがよいことば。”などとの説明が聞かれる。『佐賀県方言辞典』などには、「ノーマイ」の形が見られる。

福岡県筑後での「ノマイ」例は、「バス ノマイ。」(“人にバスの停留所をた

ずねられて、「バスですか。」といちおう念をおす。”)などである。筑後に「ノマイ」もある。『全国方言資料』第6巻の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」の条には、

mアー ソゲー ユーチ マイ
ああ、そう 言って ねえ

などが見える。この「マイ」は、「オマイ」的なものか。(p. 475)

九州地方を出はなれても、九州に関連の深い山口県下には、「ノマイ」が認められるか。周防大島などに、「アノ ノーマイ。」(あのねえ。)などの言いかたがあるという。中川健次郎氏の『小串町覚え書』<藤原注 小串町は長門西岸にある。>には、「ぞまい」の指摘があり、「行くぞまい。(行くぞよ。)」との言いかたが見える。——「ぞまい」は「ゾ オマイ」からのものか。

九州、佐賀県下には、「バマイ」(「バイ」+「オマイ」)があり「ボマイ」がある。「バイ」は「わたし」系のものであろう。それに、対称の「オマイ」が熟合するとは、人のことばづかいの、なんと自在であることか。ただし、「バマイ」となって、ものは「オマイ」本位になっていよう。「ボマイ」は「バマイ」の一変形か。

佐賀県下になお、「カマイ」があり「タマイ」がある。「カマイ」は「カ+オマイ」のものか。「タマイ」は、現在ではごくまれなものになっているらしい。——ものは、「アナタ」の「タ」と「オマイ」の「マイ」とに見わけることのできるものであろうか。

九州肥筑内に、「ノマイ」からの「ノモイ」もある。『熊本方言の研究』に「ノモイ」が見え、私は天草本渡で多く「ノモイ」を聞いている。——「コッチャン ケー ノモイ。」(こっちへ来いよ。)などと言われている。「オラス カンモイ。」(いらっしゃいますか。)などと言われている「ンモイ」も、「ノモイ」を考えさせるものか。佐賀県にも「ノモイ」がある。筑後内にもあるのか。

変形「ヌマイ」が、長崎県下などにはあるのか。

「ノマイ」の慣用は、しぜんに 諸変形をひきおこし、そこに、「おまえ」系

文末詞の、別の安定が見られることになっている。

五 「アナタ」の属

対称系に、「オマイ」の属があれば、「アナタ」の属もあってよいわけである。もとよりのこと、「アナタ」とよびかけるのも、発言者からいえば、一種の自己主張である。

与論島には、

○muttjɨn mangane:ʃi hatamike:ʃaʃui ?uʃe:. (中男→複)

<何とも 思わないで 担ぎ返らしてしまう ウレー。>

平気で担ぎ上げてしまうよ。

との言いかたがある。(町博光氏「与論島朝戸方言の文末詞」)町氏によれば、[[?]uʃe:] (「あなた」)は[[?]uʃa] (「おまえ」)に対立するものであるという。

九州方言下には、「アナタ」類のおこなわれることがいちじるしい。熊本・長崎・福岡・大分の諸県が注目される。——佐賀県下では、「アナタ」類のおこなわれることが劣っているか。

熊本県下には、まず、「アータ」のおこなわれることが顕著である。夜の訪問辞に、「コンヤワ アータ。」(今夜はあなた!)などがある。「ありがとうね。」は「チョージョ アーター。」である。「アータ」は「アンタ」と識別される。「アータ」の言いかたのほうがよい。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条には、

f ンー ヨンニュ トッテコンバ アンター ン

たくさん 取って来なくちゃ なりますまいよ。

が見える。「アータ」の縮約形か、「アタ」というのも、県下によくおこなわれている。「お早うございます。」は「オハヨ アタ。」である。「アタ」は「アター」とも言われがちであり、また、「アタッ」と発言されるもする。「オハヨー

「アタッ。」などとなる。さてまた、「アナタ」の略形「タ」も、いくらかおこなわれている。かつて、五家の荘に案内してくれた、その入り口ちかくの村の老男は、「八時ごろから イカネバ イクマイ タ。」（八時ごろから行かなきゃいくまいね。）との言いかたをした。

熊本県下での、「アナタ」類が下接要素をとった複合形に、「タナ」がある。主として天草方面におこなわれるものか。そこでは、「ユキン フッダー タナー。」（雪が“降るでしょうねえ”。）などがある。以下、他の県にも、「アナタ+ナ」形式は見いだされるけれども、「オマイ」に「ナ」や「ノ」のついた形式は見いだされない。（「ノ+オマイ」はあって、「ノマイ」などはいちじるしい存立を見せるものであるけれども。）「オマイナ」などでは、「オマイ」形の省略も不可能なので、しかるべき融合形も生じないことなのか。

長崎県下には、文末詞としての「アナタ」があり、かつ、「アータ」がかなり見られる。そうして、「アタ」がよくおこなわれている。島原方面にも、「アタ」がいちじるしい。『嶋原半嶋方言の研究』には、「お早う アタ。」の「おはやーた（おはよう）」などが見られる。五島列島で聞いた、私への「いえいえ、どういたしまして。」の意のあいさつことばは、「ナーンノ アター。」であった。

本県下の、「タ」を上接部分とする複合形文末詞には、やはり「タナ」があって、これのおこなわれることがいちじるしい。沓岐島には「ターナ」も見られる。島原をはじめ、県下に、「タナイ」も見られる。県下に「タナン」もあるのか。

佐賀県下には、「アンタ」などが、いくらかおこなわれているのか。『全国方言資料』第6巻の「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」の条には、

mテアシ	ソローテ	マー	（ <i>f</i> フン）	チョット	ムスメノコデモ	アッ
手足が	そろって	まあ		ちょっと、女の子でも	あつ	
タケンガ	ヨロコビ	ヨラス	アンター			
たけれども	喜んで	いますよ	あなた。			

などとある。

福岡県下には、「アナタ」文末詞があり、「アンタ」形がある。これは、熊本県下状況によくつながらるものであろう。筑後南部には、「お早うござんす。」の意の「オハヤ ンター。」などが聞かれる。「ありがとうね。」にあたるものには、「コレワ ンター。」がある。（「アンタ」の「ア」が消えている。）「アンタ」文末詞は筑後によくおこなわれており、かつ、県下の他地方にも見られる。県東部の「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」（『全国方言資料』第6巻）での一例は、

フハー ネーズメー チューチ アンター

ああ、「ないはじめ」といって あなた。

である。筑後をはじめとする県下に、「アータ」もおこなわれている。「アタ」はないのが、本県下の一特色である。

複合形の「タナ」はかなりおこなわれているようである。ていねいな「アナタヨー」もあり、また、「アンタナ」もある。「暑いアンタナー。」（豊前例）などとも言われている。筑後の柳川で聞いたことばには、「エー、ツー タンモ。」（ええ、そうですよ。）などというのがあり、筑後南部の八女郡下で聞いたものには、「ウレシカバカッ タンモ。」（うれしいばかりですよ。）などというのがある。「タンモ」の「モ」は、「モン」の「モ」であろう。「タン」が「タナ」からのものであるのだったら、「タンモ」はここにとりたてるべき複合形とされる。県東部には、「タネ」複合形もある。

大分県下には、まず、「アンタ」文末詞のおこなわれることがいちじるしいようである。豊後西北の事例には、

○モー スンデ シモータ コツジャラ ンタ。

“もうすんでしまったことですよ、あなた。”

などというのもある。県下に「アタ」もよくおこなわれている。「アタ」は、「アンタ」に近いものであろうか。（——それとも「アナタ」に近いものなのか。）豊後日田郡下での「アタ」例は、

○キツネイシ キツネイシテ イーマスガ アタ。

狐石狐石って言いますがね。

などである。日田市域で聞いた、ていねいな「いいえ、どういたしまして。」は、「イーエ アター。」である。

本県下には「タナ」複合形のおこなわれることがじつにさかんであり、「アンタナ」もまた、よくおこなわれている。中津ことばには「アタナ」もある。「ソリャ ご不自由でしょう アタナー。」などと言われている。日田郡下で聞いたものには、

○ヌキー トキナラ アターネー。

ぬくい時ならねえ。

というのものもある。豊前で「タナ」の例は、「ツキアタリガ タナー。」(つきあたりがねえ。)などである。こういう例では、「タナ」のよく熟したものであることがうかがわれよう。『大分県方言の旅』の第3巻には、

さてこの三つを比べてみますと、アンタナーは尊敬の意味が一番強く、

タナーはそれに次ぎ、ワガはわずかに親しみを現わす程度です。

との説明が見える。豊後内の複合形には「タナーヨ」もある。また、「タナチコ」などというのものもある。「タナーチコ」とも言われている。(「チコタナ」との言いかたもある。)

九州域を出はなれると、「アナタ」類のおこなわれることは散発的である。が、山口県下をはじめとする中国地方には、「アナタ」「アンタ」の文末詞が、比較的によく認められるとしうるか。岡山県奥での一例は、つぎのものである。

○ラッシモナイ コトー ヒトリマス アンタ。

ラッシモナイ (とりちらしていること) ことをしていますよ。(老男)

(私どもを迎えての謙遜のことばであった。)

岡山県備中の島嶼で聞いた「ナンボデモ シツトンノニ、デン ガイヤター。」(＜白ひき歌を＞いくらでも知っているのに、出ないなあ、どうも。＜自分をもどかしがる。＞) は、「アタ」の「タ」を受けとらしめるものか。

近畿地方にも、日本海がわには「アンタ」文末詞がかなり見られる。「ハー、サイナラ アンタ。」(では、ごめんなさいね。——玄関を出る時のあいさつ)は、丹後半島での一例である。舞鶴市域では、「サイナラ アンタ。」(さよならね。)を聞いたことがある。

『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡下北山村上桑原」の条には、

*m*ハー タベル モンデモ アンタ

食べる 物でも、 あなた。

などが見える。私が大阪府下の南河内郡で聞いたものには、

○むかしは 田の草を シヘン トリマシタガ アンタナー。

むかしは田の草を四度とりましたがねえ。

がある。

「アンタ」の文末詞的用法は、関西系の地域には、かなりしぜんにもおこりうるのではないか。ところで「アータ」形は、関西系の地域には見られないのである。

関西系の地域とも言える北陸路に、やはり、「アンタ」がある。「ナニガ ワルケリャ アンタ。」(“どこもわるいところはない!”)は、能登半島での一例である。

尾張西部で聞いた「アンタ」例には、

○イーエノ アスンドリマスデ アンタ。

いいえ、あそんでますからね。(と言って、荷物を持って送ってくれる。)

がある。

静岡県井川村方言の、“女だけの用ゐる言葉、接尾代名詞「アンター」”と言われる、「行カズヨアンター。(行かうよ)」などの「アンター」も、文末詞化した「アンタ」と受けとられよう。(岩井三郎氏「静岡県井川村方言の考察」『方言研究』第四輯)

関東地方内にも、「アンタ」の文末詞的用法が見いだされる。またときに、

「アナタ」の文末詞的用法が認められる。

東北地方には、「アナタ」類に関するものが、あまりおこなわれていないのではなからうか。

※ ※ ※ ※ ※

「アンタナ」「タナ」など、「アナタ」類を前部要素とした語形があり、これは、上来、とりあつかった。つぎにとりたてられるのが、「アナタ」類を後部要素とした複合形である。「アンタナ」に対する「ナーアンタ」といったようなものが、ここにとりあつかわれる。

ナ行音文末詞の「ナ」や「ノ」などは、一般性のつよい単純形の文末詞であって、本質上、その後部に、他の要素を率いやすい。つまり、「ナ〜」複合形文末詞はできやすいものようである。この種のものが、複合形文末詞の安定形式として、とりわけ早く認めうるものであることは、多言を要しないであろう。「ナーアンタ」「ナンタ」「ナタ」などが、もっともしぜんにできている。(安定度の高い複合形文末詞からは、しぜんにその省略形がひきおこされてもいる。)

今、「ナーアンタ」類を「ナーモシ」類とくらべてみる。「ナーモシ」などに対して、「ナンタ」(あるいは「^レマイ」)などは、対称代名詞を後部要素とするものゆえ、聞き手に対する指示機能が、いちだんと明確である。——訴えかたが克明になっている。待遇表現上の効果にも、いちだんと直接的なものが、これらにある。

「ナーアンタ」「ナンタ」ほかの、いわば「ナーアンタ」系の諸文末詞は、やはり、第一には九州地方に、その盛行が認められる。

九州とはいいいながら、中でもこれのさかんにおこなわれているのは、佐賀県下である。(さきに、佐賀県下では、「アナタ」類のさほどおこなわれていないことが見られた。本県下では、「ナーアンタ」方式の複合形がよく生かされて

いる。) 佐賀県下では、中でも、「ナンタ」「ナタ」形の文末詞がよくおこなわれている。

それにしても、佐賀県下にも、「ナーアタ」のていねいな形式もあり、これについて「ナータ」もおこなわれている。「ナータ」からの「ナタ」が、かくべつよくおこなわれているしだいである。(「ナタ」に関して、「アナタ」>「ナタ」も考えられるけれども、今は、この考えも不要なのではなからうか。)「ナタ」は「ナター」とも表現されており、「ウツクシカ ナター。」(美しいねえ。)
「ソガン タイナター。」(“そうですよ。”) などがある。「カナタ」「ガナタ」「モンナタ」「モナタ」「バナタ」などの複合形もおこなわれている。ことば調子としては、「ナタ」の「タ」が、上がり調子に発音されることが多い。「ナ」の低い調子から、急に、「タ」の高い音調になっていくのが、佐賀弁の一特色であろうか。

「ナンタ」のおこなわれることは、「ナタ」のおこなわれることの次位にある。 「ナンタ」例を、『全国方言資料』第6巻の「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」に求めるならば、

fイッシューケンメ カシェーデ オソー ヨナベシテ コトンメニャ¹⁾
いっしょうけんめい 働いて、 遅くまで 夜業して、 こどもらには
キモン ツクッテ キセテ ナンター 1)「ゴドンメ」ではない。

着物を 作って 着せて あなた、

などがある。「ハヤカ ナンター。」<朝のあいさつ>は、小城ことばの一例である。「ナンタ」と「ナタ」との、表現品位の差は、どんなものなのであろうか。

武雄市では、「ナッタ」を聞いたことがある。「何々は イラン ナッタ一。」は、もの売り屋の声であった。「ソガン ターイナター。」(“ほんとうにそうだということ。”) などともある。

「ナンタ」や「ナタ」と「ノマイ」との、表現品位上の差異、待遇表現法上の分業は明らかである。“「ノマイ」は、ひとつ、わるい。”とされている。ここにはすでに、品位の下落した対称代名詞「オマイ」があろう。人は、“「カ

ンタ」「タンタ」「バンタ」「バナタ」など、「タ」のつく語は敬意の度がつよい。”と言ってもいる。等しく「アナタ」系の「ナンタ」「ナタ」がよいことばであるのは、当然であろう。のちにあげる「バイタ」なども、やはり「タ」ゆえに、かなり品位のあることばになっている。

佐賀県下のほかでは、西の長崎県下に、「ナーアータ」「ナータ」「ナタ」が見られる。わけても「ナタ」は、島原半島方面その他にかなりおこなわれているようである。諫早ことばでも、「ナタ」が目上へのことばになっているという。五島列島では、私は「ナンタ」を聞いた。「チョット ムカシワ ナンタ。」（ちょっとむかしはねえ。老女→藤原）などとの言いかたが聞かれた。

熊本県下にも、「ナーアタモン」などというのがあり、「ナーアタ」「ナータ」が見られる。

○オシャベリバカリ シマシテ ナータ。

おしゃべりばかりしましてねえ。 (老女→藤原)

は、阿蘇山南麓での一例である。

○ソギヤンデ ゴザイマス ナータ。

そうでございますねえ。

は、天草下島東部での一例である。

福岡県下の筑後には、「ナンタ」や「ナータ」「ナタ」が、あまりおこなわれていないのか。

大分県下の豊前地方では、「ナンタ」を聞いたことがある。

「ナンタ」や「ナータ」「ナタ」、これに対する「ノマイ」が、——彼我あい対しておこなわれて、今日、とくに九州地方にいちじるしいのは、なぜであろうか。ともかくも、こういうものを見せるところに、九州方言の風土性があるとしなくてはなるまい。

九州に関連しては山口県下に、「ナーアータ」以下のものが、比較的よく見られる。——これは、山口県下の連九州性を思わせる。本県下の「ナーアータ」形文末詞は、おもに西部内に見られる。ついでは「ナンタ」形も、やはり西部

内に見られがちである。「ソ^ーデ ア^リマ^ショー ナ^ンタ。」(そうでありましようねえ。)は、県西北岸での一例である。「ナンタ」は、女性に多くつかわれているか。「ナンタ」とともに、「ナ^エタ」の聞かれることもある。本県下に「ナ^タ」形も見られるが、これは、「ノ^ーナ^タ」「ノ^ナタ」といったようなものであって、独立の「ナ^タ」ではない。「ノ^ーナ^タ」は、「ノ^ーア^ナタ」からのものと考えられる。(長門北部の内には「ノ^ーナ^ンタ」も見いだされるので、「ノ^ーナ^タ」には、「ノ^ーナ^ンタ」からのものもあるかもしれないけれども、通常は、「ノ^ーア^ナタ」からのものが主になっていよう。)

山口県を出はなれて、「ノ^ーア^ナタ」系のものをたずねてみる。

私はかつて、出雲東部内で、偶然、「ダ^レハ^テタ コ^トデ ゴ^ジャ^ンスガ ナ^ンタ。」(だれてしまったことをござんすがねえ。)を聞いたことがある。一老女のしぜんの発言であった。ところで、本人も周囲の人も、「ナンタ」を言わないとのことであった。(こうした発言が、人にしぜんにおこりうるものなのか。)

兵庫県下の但馬北部には、「ナンタ」文末詞がおこなわれている。岡田荘之輔氏の『但馬国温泉町方言記』には、「ナンタはねえあなたの約、ナアより鄭重」とあり、「ホントニ、マア困^ッタ事^デスナ^ンタ」などの例が見える。但馬南部内にも、「ナ^ンタ」などが、なくはないらしい。「ナ^ンタ」が、播磨内部にも見いだされるのか。

但馬北部につづいて丹後北部に、「ノ^ーア^ナタ」が見られ、宮津方面にも、「ノ^ーア^ナタ」がよくおこなわれている。「ナ^ンタ」となった形も、丹後北部に見いだされ、かつ、丹後半島には「ナンタ」も見いだされる。

○ワガ ミニ ムチウ^ッテ ナ^ンタ。

わが身にむちをうってねえ。(老女→藤原)

のように、「ナンタ」がおこなわれている。「ナンタ」も、ていねいな言いかたとしておこなわれている。「ナンタ」の地域で、私は、一例「ナ^タ」も聞いた。「セ^キ キ^ッテ ナ^タ。」(籍を切^ッてね。老女→藤原)とあった。

とんで、『滋賀県言語の調査と対策』にも、「よいお天気になりましたナンタ」というのが見える。

「ナーアナタ」といったぐあいには、相手によびかけることは、どこでもなされてよいことであろう。大阪府下でも、私は、

○ヌルヌルシテ コケロシ コケマス ガナアンタ。

(水のために道が)ぬるぬるして、倒れどおしに倒れますんですよ。などというのを聞いている。——「アンタ」が「ナ」と一体化しきったもののようにであった。

愛知県尾張西部で聞いた一「アンタ」例 (p. 483),

○イーエノ アスンドリマスデ アンタ。

いいえ、あそんでますからね。(と言って、荷物を持って送ってくれる。) (中女→藤原)

の話し手からは、ついに、「ナーアナタ」などは聞くことができなかった。

中部地方以東での事例をあげることが、今、私にはできない。「ねえあなた」「ナーアナタ」などの発想そのものは、全国一般にあり得てふしぎではないものであっても、方言現実での「ナーアナタ」系の文末詞は、どちらかというところ、関西以西のものになっているようである。

山口県地方に、「ノーアナタ」系のものがよくおこなわれている。九州は「ナ〜」系のもののおこなわれる地であり、中国、山口県下が、「ノ〜」できわだっている。

山口県下に、とくべつあらたまった「ノーアナタ」文末詞があり(おもに西部内に)、ついで「ノーアンタ」も見られる。(これはむしろ東部に見られる。)
「ノーアタ」というのも、周防東部などに見いだされる。

注目されるのが、「ノーナタ」「ノナタ」の形である。これは、県下の東西に見られる。萩では、「ノナタ」が“最上のことば”とされている。

○ツツシューワ ノーナタ。

信州はねえ。 (老女→藤原)

は、長門北部での「ノーナタ」例である。もちろん、「ノーナタ」「ノナタ」は、敬意度の高いことばである。

本県下に、なかんずくいちじるしいものは、「ノンタ」である。山口県下は「ノンタ」文末詞のくにであるとも言える。東部島嶼例は、

○オー、マコト ンタ。

おお、ほんとにねえ。 (老女間)

である。県西部での一例は、

○サンジューグライニ ナリマスガ ンタ。

(うちの主人は) 三十歳ぐらいになりますかねえ。

(中女→藤原)

である。「ノーナタ」というのも聞かれる。防府市の一知友は、「タイテイ ンタ。」(たいていねえ。 青男間)というのを教示せられた。つぎに、「ノンタ」からの「ンタ」も、周防大島などで聞かれる。「アンター エー コジャ ンタ。」(あんたはいい子だねえ。)などとある。ただし、「ンタ」の聞かれることは、比較的まれなようである。

つぎに、本県下に「ノータ」も広くおこなわれている。手がるく、「アリー ノータ。」(あれはね。)などと言われている。「ノイタ」「ノエタ」の変化形もある。

○コノゴラ アメガ オユーテ イゲマセン ノエタ。

このごろは雨が多くていけませんねえ。

というのも、よいことばである。

「ノンタ」や「ノータ」が、山口県下を出はずれて、東に、いくらか見いだされないことはない。島根県石見西南部に「ノータ」があり、広島県西部内に「ノンタ」がある。

「ナ〜」「ノ〜」に対しては、「ネ〜」のものがあってもよからう。「ネータ」が山口県下に見られる。「ノータ」などのよくおこなわれる所に、共

通語の「ネ」文末詞がはいってくれば、そこに「ネータ」がつくり出されてし
 げんであろう。(九州には「ネータ」が見られない。) 山口市中心の地域に、比
 較的よく、「ネータ」がおこなわれているのか。女性に多いものらしい。今日
 のことである。「ネ」文末詞の隆盛とともに、「ネータ」も広く見いだされるよ
 うになっているかもしれない。——周防大島にも、「ネータ」が見いだされる
 らしい。(「ネタ」もあるか。)

※ ※ ※ ※ ※

最後に、「カイタ」以下のものを、「諸他の複合形」としてとりあげる。

「アナタ」そのものが文末詞とされ、これの略形「タ」も文末詞とされてい
 るありさまであるから、「カイ+タ」などの諸複合形が、自由につくり出され
 ているのも、もっともなこととして理解される。いずれのぼあいにも、「アナ
 タ」の「タ」が認められるかぎりには、その複合形文末詞はよいことばに相違な
 い。

「カイタ」「カンタ」など

熊本県下には、「カイタ」がじつによくおこなわれている。「カイアータ」と
 いうのもあるらしい。熊本市での「カイタ」例は、「ソギヤ[↑]ン カイタ。」(そう
 かね。)である。阿蘇山南麓での一例は、「ノカン[↑] カイタ。」(そこをおのき
 よ。 幼男間)である。この地で、「アー[↑]タ ドケー イタ カイタ。」(あな
 たはどこへいらしたの?)との言いかたも聞かれた。県下で、「カイタ」と「バ
 イタ」(後述)がよくつれあっている。——これらが、独自の、品のわるくない
 表現世界をかもしている。

佐賀県下となると、もっぱら「カンタ」がおこなわれている。ここではまた、
 「カンタ」と「パンタ」とがよくつれあっている。熊本県下と佐賀県下とでの

「～イ～」と「～ン～」との対応は、見るからに興味ぶかい事態である。佐賀県下の「カンタ」例は、

○オカーサン、ナン シラッ カンタ。

“お母さん、何してますか？”

などである。「ショーガワ イラン カンター。」(しょうがはいりませんかあ。)などとのもの売り声も聞かれる。

「佐賀県佐賀郡久保泉村川久保」(『全国方言資料』第6巻)には、

fドコサン イキヨッカンタン オンチサン

どこへ 行くところですか、あなた、おじさん。

など、「カンタン」が見える。同「久保泉村川久保」の条に、「カナンタ」というのも見える。

筑後ともなると、「カイタ」は聞かれないで、「カンタ」が、いくらか聞かれるようである。

長崎県下には、「カイタ」も「カンタ」もないのか。

大分県下の中津市では、「ソー カンタナ。」(そうですか。)というのを聞いたことがある。

「ガイタ」

熊本県下では、

○ダレモ オンチハランダッタロ ガイ[↑]タ。

だれもいらっしゃらなかったでしょうね？

など、「ガイタ」が聞かれる。

「タイタ」「タンタ」など

文末詞「タイ」と「アナタ」系の「タ」との複合「タイタ」が、熊本県下に見られ、これの変形「タンタ」が、佐賀県下に見られる。熊本県下と佐賀県下との、またおもしろい対立である。

「熊本県上益城郡浜町」(『全国方言資料』第6巻)には、

fワタシャ ミナミダマデ イキヨッタイタ

わたしは 南田まで 行くところですよ、あなた。

などとある。

佐賀県下では、

○イ^ーラッタ ワケ タンタ。

言ってたわけですよ。

など、広く、「タンタ」がおこなわれている。「ソギャン タンタ。」は、「そう
でございます。」である。

佐賀県下に、「ダンタ」がある。

○モ^ー ヨカ^ロ ダンタ。

もういいでしょう。(「もう、おなかもすいたでしょう。」と、西瓜を
すすめる。) (老人間)

のような言いかたがなされている。「ダンタ」は、「ダイタ」からのものではないか。

「クサンタ」

「こ^ソア^ンタ」が「クサンタ」になったか。佐賀県下に、「クサンタ」文末詞
が見られる。「ヨイ クサンター。」(これですよ。)などがある。「こそ」のは
いったものではあるが、「クサンタ」は、相手にかかるくよびかけるものよう
である。「ナイ クサンタ。」も、「はい、そうですよ。」である。女性が「クサ
ンタ」をよく言う、とも言われている。

私が阿蘇山南麓に行った時は、“博多の「そう クサ。」のような「クサ」は、
ここでは言わぬ。”との説明が聞かれ、のちに、「ソレガ クサタナ。」などの
言いかたが聞かれた。人は、この「クサタナ」について、“話しの受けつぎに
これを言う。”と説明してくれた。熊本県下一般としては、「クサンタ」を、ほ
とんど言わないのか。——「クサ」はあって、それは「タナ」にむすびつけら

れたりしているのか。

「ワイタ」

山口県下に「ワイタ」がある。

○コトシャー エラエー オソエー ワエータ。

ことしはひどくおそいわね。

などの言いかたがなされている。

『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条にも、

fソレオ ヌイ ヤマモンニ ムリャガッテル イネオ コイタ

それを ねえ、山のように 盛り上がっている 稲を こきましたよ、
ワイタ

あなた、

の「ワイタ」が見られる。

「バイタ」「パンタ」など

「あなた」系の「タ」が、一方で「バイ」にも結合している。九州、肥筑地方に、方言色ゆたかな文末詞「バイタ」がある。（「バナタ」もあるらしい。）

考えてみるのに、自称系の「バイ」と対称系の「タ」とがむすび合わされたりしているのは、一種、ふかしぎなことでもある。いかに相手に訴えるためとはいえ、「わたし・あなた」との言いかたをするからである。しかし、ここで、複合形文末詞での重点を、その後接要素に見るという見地にたてば、「わたしあなた」の「バイタ」も、「あなた」系の文末詞とされることになる。

かえりみれば、さきに佐賀県下に見られた「バマイ」なども、自称系の「バ」と対称系の「オマイ」との複合形である。——これも、「マイ」重点のものとしてよさそうである。それにしても、人の、ことばづくりの自在さというものが、こういうばあいにも、痛感される。佐賀県下には、「タマイ」というのも見られた。「あなたおまい」である。

バイタ

これのしきりにおこなわれているのが、熊本県下である。本県下に、「パイアート」「パイアンタ」もあるらしいが、一定的によくおこなわれているのは「バイタ」である。県下で、「バイタ」が、「カイト」や「タイタ」とあいともによくおこなわれており、「～イ～」の特色が顕著である。熊本市域での「バイタ」例は、

○ソギャン グッサリ キタラ アツカデス バイタ。

そんなにたくさん着たら暑いでしょうにね。

などである。阿蘇山麓での一例は、

○ヨンナリマッシェ。サミー バイタ。

(火鉢のそばに) お寄りなさいませ。さむいすわね。

(中女→青女)

である。

バンタ

佐賀県下に、「バンタ」が一定的によくおこなわれている。(「バンター」などとも言われている。) 熊本県下の「バイタ」と佐賀県の「バンタ」と、よくもこう対立相を見せているものではある。佐賀ことばでは、「そうですよ。」が「ソー バンタ。」である。これについて、長崎県下の人は、私に、“「そうパイ、アナタ。」という意味でしょうね。”と語ってくれた。私が佐賀県南部で聞いた「バンタ」例は、

○ナイ ナイ。ヨカ バンタ。

“はいはい。承知しました。”

などである。もののねだんをたずね、人が「いくら カンター。」と問えば、答えるほうは、「ゴエン(五円) バンタ。」などと言う。県下でまれに、「バンタ」が「パンタ」と発音されることもあるのか。私は県南で、「アナタ クジ(アクセント失) ユーチマデワ、イキッパンタ。と言われました。」(あなた、九十一歳までは生きますよと言われました。)との老男発言を聞いた。佐賀県下にあつて、

「バンタ」が、「カンタ」や「タンタ」「ダンタ」、あるいは「ナンタ」とつれあうこともまた、著名な事実である。熊本県下状況の「～イ～」形と、佐賀県下の「～ン～」形との対立するさまは、いよいよ明らかである。（「バイアナタ」的なものの「バンタ」など、佐賀県下では、どうして、「～ン～」の形がとられがちなのであろうか。根ぶかい方言風土というものが想察される。）

× × ×

「バイタ」「バンタ」などの分布は、肥筑地方も、上述のとおり、熊本・佐賀の二県を主とする。

柴田武氏編『お国ことばのユーモア』の中の西島宏氏「長崎県方言の四季」（長崎県諫早）には、

「ハッチャンもそろそろ太ッなって来たナ。もうじき食べらるるバイナタ。」
 <ハッチャン（さつまいも・八里半のなまり）>

というのが見える。「バイナタ」が生きている。

筑後大牟田市は、熊本県下に接する所であるが、かつて車中に出あったこの人は、「アツカ バイタ。」などの「バイタ」は言わぬと強調した。「バンタ」も言わないとのことであった。ところで、大牟田市北方の山門郡三橋町については、「ロクタン ツクヨル バンタ。（六段作ってますよ。）」などを、私は知友に教示されたことがある。佐賀県下なみに、こうして「バンタ」が見いだされるのか。

自余の福岡県下に関しては、私は、事例の言うべきものを持っていない。

長崎県下も福岡県下も、一般的には、「バイタ」「バンタ」の地域ではないらしい。

最後に、「バイタ」などはあっても、「タバイ」などはないことを指摘しておきたい。訴えことばとしては、「～タ」形のほうが、いっそう、安定のよいものなのか。

「シタ」

奥羽南部のことばに、「シタ」という特別のものがある。福島県下では、「シタ」が広くおこなわれているようである。菅野宏氏によるのに、県下のいわゆる中通りの北部では、

○ソイツ[ü]ワ シ[i]タ。コマッタ モンダ シ[i]タ。

そいつはシタ。こまったもんだシタ。

のような言いかたがなされているという。“郡山から南は、「ベ」の下にのみ、「シタ」がつく。”という。“会津でも「シタ」は「ベ」につける。”という。“でも、会津の「シタ」は、県北ほど自由でない。”とも、菅野氏は言われる。ここに、存立のたしかな「シタ」文末詞が認められようか。「ベ」の下に「シタ」がくる例は、「ナンダベ シタ。」(なんだろうシタ。)などである。私が会津北部で聞きとった「シタ」例は、

○コッチ[i]ノ ホーガ エーベ シ[i]タ。

こっちのほうか“ええでしょうよ”。(店屋のむすこが、客に品物をえらんであげる。)

などである。この土地っ子は、“「ソーダ[↑]ベ。」はふつうの言いかたで、目上には「ソーダ[↑]ベ シタ。」と言う。「シタ」は敬語みたいになる。女に多い。男はあんまり敬語はつかわぬ。”と説明してくれた。この中学生女にも、「〜ベ シタ」がはっきりと弁知されていた。思うのに、「シタ」の「シ」は、「モシ」の「シ」ではなかろうか。「タ」は「あなた」的な「タ」か。

福島県下を出はなれて北に山形県下にはいっても、なにほどかの「シタ」が聞かれるのか。斎藤義七郎氏の「山形県北村山郡東根町」(『日本方言の記述的研究』)には、

[oramo enanefita] (私も行かないよ)

などの例が見える。(p. 316)

六 自称系と対称系

以上、人称代名詞系の文末詞に、自称系のものと対称系のものとの二大流が見られる。(他称のものはないのが当然であろう。)

約して言えば、自称系のもの、「ワイ」「ワ」などが、方言上、全国に大勢をなしており(「バイ」などもおこなわれており)(「タイ」を「トワイ」起源のものが見れば、これもここに合わせおかれる。)、対称系のものは、九州方言下での強勢のほかは、より小勢である。この事實は、一見、ふかしぎでもある。「ネーアナタ」などの発言の一般的な可能性からすれば、対称系文末詞の勢力も、方言上に、さかんなものがあってもよいはずに思われる。しかし、事實はそうなっていない。このことからすれば、

人は、文表現を相手に持ちかけるにあたって、基本的には、「私」属の文末詞を用いようとするものなのか。(——「わたし」系の文末詞を出すことが、本性的なのか。)

との判断もなされなくはない。

それにしても、さきの、「タバイ」ではない「バイタ」など、「あなた」系のものをあとにつけて文末詞の安定形式を産みだすこともまた、いちじるしい事実である。よびかけのために、はっきりと「あなた」重点の言いかたをするのも、しぜんの理にかなったことなのであろう。

問題は、文末詞の対他性にある。「私」属で他に対していくか、「あなた」属で他に対していくか。どちらももつものことであるが、双方には、まさに対他性の質の相違がある。(そのさい、「私」を出していく訴えかけに重要性のあるらしいことも、よく想察される。)

人称代名詞系文末詞と感動詞系(文系)文末詞とは、関連するものであろう。「もし。」のよびかけと「あなた。」のよびかけとも、類型的地位を等しくしている。

第十六章 副詞系の転成文末詞

一 はじめに

副詞もまた、文中の遊離成分である。(遊離の度あいの大小は問わない。) 独立語と認められる副詞が、文末特定要素にも利用されやすいのは、当然のことであろう。その利用の習慣化が、副詞系文末詞を産む。

二 「ホンニ」の属

「ホンニ」が副詞であることは明瞭であろう。「ホンニホンニ」ともあり、これがまた、「ホニホニ」ともなっている。

こうした副詞が文末詞化することもまた、当然かと思われる。——一文の表現のあとに、あらためて、「ほんとに。」のつもりで「ホンニー。」などと言われれば、この種の言いかたが、やがて変じて、「……………ホンニー。」のような言いかたになる。

『仙台の方言』に、

「昔、とってお世話になりしたからまづ、ぎりしびしなっかえんってゆーよりわ、なぢょな事して上げもーしてもしたりいん、ほんに」(昔とてもお世話になりましたので、義理を果さなければならないどころか、どんな事をして差しあげても、満足なお礼にはなりません)

のような言いかたが見える。文末詞的な「ホンニ」が認められるか。

『和歌山県方言』には「さうやホンニ」が見え、「さうだ」とされている。

おなじく『和歌山県方言』には、「あります。」の意の「アルホニ」がある。(「さうだよ」の「ソウヤホニ」もある。) 和歌山県下には、「ホニ」文末詞がよく認められるらしい。

近畿地方には、諸方に「ホニ」文末詞が認められるか。京都府下にも滋賀県下にもこれがある。

「ホニ」は、転じて新潟県下などにもあり、東北地方にもある。私が岩手県下で聞いた一例は、「アクダレ^ニ ホニ[i]。」(「アクダレ^ニ」というのもあったねほんに。)である。

「アクダレ^ニ」は、“どんぐりのしぶをぬくための木灰液”。

「ほんとに」の意の「ホンニ」「ホニ」に対して、「ホント」という副詞もある。「ホント」もまた、文末詞化してもよいはずである。『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡善導寺町」の条には、

m………… タマガッテ クイモキリメーノ ホントー
驚いて 食べられもしないだろう、ほんとに。

とある。

ここにまた、「ホン」という文末詞も認められる。近畿地方や山陽地方にこれがある。滋賀県下の湖東・湖北には、ことに、「ホン」文末詞のいちじるしいものが見られるか。同県下には、「ホヤ ホン。」(そうだよ。そうですよ。), 「シタロ ホン。」(してあげようよ。), 「コンパンワ ドッコイモ イカン ホン。」(今晚はどこへも行かないよ。)などの言いかたがなされている。さてこの「ホン」も、「ホンニ」などに近いものであろうか。上の「イカン ホン」の「ホン」については、土地人の、“かならず行かぬとの強意。”との説明があった。(山陽地方では、「ホンニどうどう。」の副詞「ホンニ」にあたる「ホン」が、老年層によくおこなわれている。)

中部地方内にも「ホン」が存在するようである。私が、愛知県渥美半島で聞いたものには、

○アリャ ワリー ネーホン。

あれまあ、わるいわねえほんとに。(謝辞) (中女→藤原)
というのがある。

三 「ハヤ」の属

「はや」という副詞がある。これも文末詞化している。

能登半島では、「ナンモ ハヤ。」(どういたしまして。)など、「ハヤ」がつかわれている。『能登 木郎方言考』に見える例は、

いそがしいのにね=いそがしいガネハヤ

などとある。

富山県下には、「ハヤ」文末詞がよくおこなわれているか。大田栄太郎氏は、「富山」(『方言の旅』)で、

^{ジョウジョウ}常々来ましてハヤ, ^{ゴツツオ ハン}御馳走様で御座んすハヤ,

本当にハヤ, 申訳御座いませんチャハヤ……

と言った調子で実に綿々として尽きない(婦人にはハヤと尻上りにいう人が多い)。

と述べていられる。私は、富山市近在で、

○オハヨ ゴザイマス ハヤ。

お早うございますね。(中男→藤原)

などと、「ハヤ」を多く聞いている。

新潟県下の越後北部にも、「ありがとうございます。」の「オカタ ハヤ。」など、「ハヤ」がよくおこなわれている。

東北地方となっても、たとえば『福島県棚倉町方言集』に、「こお寒くてえ, 雪ふんな はや」などの例が見られる。

四 「ハー」「ヘー」の属

ハー

たとえば山陽地方でも、「ハーもうすんだか?」など、「ハー」が、「はや」の意でよくおこなわれている。「はや」の意の「ハー」、これが副詞であること

は、言うまでもあるまい。「ハヤ」に近い「ハー」が、文末詞としてよくおこなわれている。「ハー」文末詞のなかんずくさかんな地域は、東北地方であろうか。

国の南方から見ていくのに、まず、鹿児島県下に、問題事例がある。鹿児島市で私が聞いたことばには、少年男子のひとりごと、「アイタ ハー。」(あらしまったあ!)がある。屋久島のことばには、「シェンシェイガ キタド ハー。」(先生が来たぞ。)というのがある。硫黄島での一例は、「アント ミッ ミレ ハー。」(あれをみてみるよ。)である。富満ノリ子氏の「鹿児島方言におけるラ行子音の脱落」(『国文学攷』第二十七号)には、

オイゲントト、ハンゲントト、ニタイヨッタイヂャ ハア。

私の家のとあなたの家のと似たり、寄ったりですね。

の例が見える。

熊本県南にも、「セン カハー。」(しないか!)など、「ハー」文末詞が認められる。

九州北部、「福岡県築上郡岩屋村鳥井畑」(『全国方言資料』第6巻)にも、

m…………… ホニエム オリヨッタヨ ハー

骨も 折ったものだよ。

というのが見える。

中国地方の山口県下には「ハー」文末詞があって、さらに「ハン」「ハーン」という特異形が認められる。おもには、県西部にこれがあるのか。「マタ コー ハーン。」(また来ましようね。)は、県西北辺での一例である。「コレ ナンボ カハーン。」(これいくらですか?)、「イコ ヤハーン。」(行こうよ。)などの言いかたが、県西部にさかんである。「ゴエン クレサイ ハーンチャ。」(五円ちょうだいな。)などの言いかたもある。「ハーン」は「ハー」に属するものと見てよいのか。——「ハーン」の「ン」のよわいこともある。それにして

も、用法の自在化は、ここにいちじるしいものがある。

四国内にも、「ハー」のおこなわれることが、なくはないらしい。

近畿では、姫路ことばなどで、「ソーダ ハー。」(そうですよ。)の言いかたがおこなわれている。(『方言敬語法の研究 続篇』p.449)「マッ³⁾トッテ ハー。」(待ってほしいですわ。)などともある。播磨には、かなり広くにこの種の言いかたが認められるのか。「ダハン」ともある。(『播州赤穂方言集』にも、「ソーダハン」などが見える。)ところで、「ソーダ ハー。」などと「ハー」のきわだった言いかたがなされているけれども、これは本来、「〜ダハー」なのではないか。「〜ダス ワ」が「〜ダサ」になり、それがさらに「〜ダハ」になったであろう。これは、「〜ダハー」とも発言されがちのはずである。その「〜ダハー」は、「〜ダハン」にもなりやすかったろう。こう見られれば、播磨の「ハー」は、今、論外となる。

中部地方となって、石川県加賀に、

○ヨメサンニ イク トキワ シテ カツラ カブッテ イク ワイハー。

嫁さんに行く時には、かつらをかぶって行きさ。

などの言いかたがある。

富山県下には、「ハー」がよくおこなわれているか。(さきの「ハヤ」がよくおこなわれていることに関連していよう。)³⁾「コレレ ハー。」(おいでよ。)³⁾「スカート トッテ オイデ ハー。」(スカートをとっておいでよ。)など言われている。

新潟県越後北部にもまた、「ハー」がある。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

m………… キー³⁾ キリニ イッテ イナガッタガー トマッテハー

木を きりに 行って いなかったよ、 泊まってさ。 3) (ki^o)

というのが見える。

転じて「静岡県安倍郡井川村田代」(『全国方言資料』第7巻)にも、

m_1 アア ナンカイモ アッタ ハー
ああ、 何度も あった。

というのが見える。

関東地方にも、諸県下に、文末詞用法の「ハ」「ハー」が見いだされる。「千葉県安房郡富崎村布良」(『全国方言資料』第2巻)の例は、

f オヤジー セーモン ヤレサハー
旦那さん 祭文を やりなさいよねえ、

である。

「ハー」の間投詞も、関東地方に見られる。

『全国方言資料』第7巻の「東京都三宅村坪田」の条には、

f …… スルシ タッテ ハイッテクレバ オモンロクテ ハエ
旗を 立てて はいって来れば うれしくて ねえ。

などというのが見える。——「 m オー ^{起きたよ}オキテ ^{もう。}ハエ」などともある。

東北地方には、「ナハ」や「ネハ」の複合形もあって、まことにここが、「ハ」文末詞の本場のようなでもある。各県下に「ハ」文末詞の通用が見られて、「ハ」は、東北方言の一特徴にもなっている。

福島県下では、まず、『福島県方言辞典』に、

エゲハ〔句〕行ってしまへ(ハは感動の助詞)

などの記事が見える。「ハ」は、間投詞となってはたらいでもいるが、明らかに、文末詞のはたらきもある。県東北部での一例は、

○シ[i]パイサ オンナリャーシ[i]タ ガーハ。

芝居に“もう行ったか”。

である。『会津若松市方言集稿』に見える一例は、「オラ^ハ ヤメンベ^ハ

私は（もう）止さう。」である。『全国方言資料』第1巻の「福島県河沼郡勝常村」の条には、

fアイ ノーイッケチデ ハー グイット ブッケーッタマンマ シンデンシ
 はい、脳出血で 急に 倒れたまま 死んでし
 マッタナンシ ハー
 まったのです

というのが見える。

宮城県下南部での例は、「ヤメッペ [↑]ハー。」（やめよう。）などであり、東北部での例は、「オソク[ü] ナッカラ, ケ[kö] ライン [↑]ハー。」（おそくなるから“もう帰っていきなさい”。）などである。宮城県下には、「ネハ」などの複合形は見られまい。『仙台方言集』は、「ハァ」「ハ」について、「すべて詞の下に用ゆ。」との説明をくだしている。『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、

mア ケッテグワヤー クサグ ナルモノ ハー
 ああ 帰っていくよ 暗く なるから ね。

というのが見える。

山形県下となつては、前二県以上に、「ハ」文末詞通用の大なるものがあるか。——以下の諸県がまた、これにつづいて、「ハ」通用の大を示す。『山形県方言集』には、

すねは suneha 連続語 しないよ 最上, 村山 置賜

などとある。「は」が「よ」と言いなおされているのが注目される。方言絵はがきには、「ね」との言いかえがある。本県下には、「ハ」の「ファ」も見える。『全国方言資料』第1巻の「山形県南置賜郡三沢村」の条には、

mキョーワ トンナ ゴチソーニ ナリモーシテ ファー
 きょうは たいそう ごちそうに なりまして、

とある。「ハ」の盛行とともに、その複合形も、いろいろに見られる。「ナハ」があり、「ネハ」がある。県東部での「ネハ」例は、「サム[ü]イ ネハ。」

(さむいねえ。 “もうさむくなった。”) などとある。「ゾハ」複合形もあり、「ゼハ」もあるらしい。「カハ」もおこなわれており、県東北の新庄で私が聞いたものには、

○オメ^アーデ ス[ü]ス[ü]ハキ [kçi] デギ [gçi] タ カハー。

おまえさんのうちではすすはきもうすんだかい。

がある。『笛吹き掣 最上の昔話』には、「家^えさ^け帰^{みち}る道^{わが}が、判^{わが}らねぐなってしまったどは。」などというの見える。——「トハ」であろう。

本県下の「ハ」文末詞についてそのはたらきを見るならば(前二県にも通じることである。), 第一には、「はや」とか「もう」とかの色あいが、そこに多少とも点じられているかに思われる。が、ものが文末詞化していることは、言うまでもない。用いられるばあいをたずねてみるのに、ひとくちには、用法自在と言える。命令表現のばあいにも、否定の意の表明のばあいにも、単純な説明の表現のばあいにも、勧誘表現のばあいにも、意志表現のばあいにも、あるいは問いのばあいにも、「ハ」文末詞が活用されている。土地の人は、「ハー」が強調をあらわすなどとも言い、また、“「ハー」があるためにことばがやわらかくやさしく聞こえる。”とも言う。『全国方言資料』第1巻の「山形県南置賜郡三沢村」の条に見える、

*m*ナゲテ ハー

捨てて ねえ。

などは、通常の「ハー」とでも言うべきものを示してはいないか。

秋田県下に、「ハー」についての、山形県下のによく接続した状況が見られる。「ふぁ」もあり、『秋田方言』には、

あらあやめるあは(ふぁ) (已等[△]は止めるわね)

などというのが見える。県東部での「ハー イガネ ハー。」(もう“行かないことにするよ”。)には、副詞の「ハー」が見えて文末詞の「ハー」が見える。県西南部域内には、「チシテ ハ。」(“どうしてか?”)の言いかたの慣用があるという。県下一般に、「何々だよ。」の「よ」と言いなおしてよい「ハ」が、よ

くおこなわれていよう。ところで、男鹿半島で私が聞いたものに、「ガッコ
ハヤヘ ^ハチャー。」(“漬けものを切れ。”)というのがある。この「チャー」は、
何なのか。——「はや」的なもので「ハー」に近いものでもあるのか。本県
下の複合形としては、「ナハ」「ネハ」などがとりたてられる。「ネハ」例は、
「ッダ ^ネハー。」(そうだねえ。)などである。

つぎには、岩手県下の同趣状況を見よう。間投の「ハ」もあれば、文末の「ハ」
もある。「ハ」は、このように利用せられるべきものであろう。) 県北の人の
説明には、“「ハー」はことばをつよめる時にも、また、「もう」の意味の時にも
つかう。”というのがあった。『全国方言資料』第1巻の「岩手県宮古市高
浜」の条に見える、

*m*ソレデワ マー ミナサンニ ヨロスク ハー

それでは まあ みなさんに よろしく。

は、受けとりやすい「ハ」文末詞の実例であろう。私が県中央東部で聞いたも
のには、

○オアリ[*i*]ガトー ゴザンシ[*i*]タ。ワザワザ ^ハー。

ありがとうございます。わざわざねえ。 (大女間)

などがある。「ドモドモ ^ハ。」(どうもどうもね。)というのものもある。『全国方
言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条には、

*f*ウーン ソレダケデ エカラ カウナー マズ ヤマヤマ アルドモ

うん、 それだけで いいから、 買うのは まあ たくさん あるけれど

アトデ カウカラ ハ

も あとで 買うから ね。

というのが見える。本県下にも、「ファー」がある。おなじく「胆沢郡佐倉河
村」の条に、

*f*ンデスモナ ミナ キケーデ ザクザクド キッテ ニテファー ソツ

そうですね、みんな 機械で ザクザクと 切って、 煮てねえ それ

クッタモンダ

を 食べたものだ。

というのが見える。本県下について注意すべきは、「何 シタ ハン。」など、「ハン」形も見えることである。盛岡市中心のものか。複合形には「ナハ」があり「ナッハ」もあるらしく、なお、「ナハン」がある。（「ナフン」もあるらしい。）「ナハ」のおこなわれることはさかんであり、“これはしたいどうしのことば。なれた間のことば。”などの説明も聞かれる。——現地で、私は、「ナハ」を言ってもらうことが、容易にはできなかった。「ナハ」は、盛岡市方面から花巻市方面にかけてよくおこなわれていようか。花巻の年輩の人で、“子どものころは「ナハ」がなかった。”と言ってくれた人がある。（“花巻のむかしからのことばは、「アノ ナサ。」〈あのね。〉で、「ナハ」は盛岡からのことば。”）さて、上にしるした「ハン」の「ナ」にむすびついたもの、「ナハン」がまた注目される。“盛岡の「ナハン」ことば”との言いぐさもある。「あのね。」が「アノ ナハン。」である。花巻市でも、「アノ ナハン。」「アノ ナハン。」（「ナハン」は男の人のばあい、と教示された。）などの言いかたが聞かれる。土地に、

「ナッシ」はよいことばで、「ナハン」は同僚以下に

という説明もある。本堂寛氏には、「岩手県方言における文末助詞『ナハン』について」（『国語研究』8）のご発表がある。

青森県下には、自由な使用の「ハ」がおこなわれるとともに、「ネハ」複合形がよくおこなわれている。まず「ハ」の例をあげるならば、

○アサ^ハエイ ク[ü]ー^ハベ^ハー ^ハー。

朝食をたべようよ。

などがある。「ネハ」のおこなわれることは、津軽にさかんである。弘前市では、

「ネサ」は、男女共用だが主として男用。「ネハ」は女用のようである。

との状況があると説く土地人もある。弘前弁での「ネハ」例は、「ソダ^ハ ネ^ハー。」（そうだねえ。）などである。私が弘前市内で聞いた説明には、

「アツ〔ü〕（暑い） ネシ〔i〕ー。」は男のことば。
 「アツ〔ü〕（暑い） サー（サ）。」は「シ」よりもすこし上品か。
 「アツ〔ü〕（暑い） ネハー。」はおもに女のことば。ただし男も
 というものもある。

複合形の存立ともなれば、等しく東北地方内にあっても、やはり、地域相が見られる。

北海道地方にも、東北地方の「ハ」に相当するものが見られるのであろうか。

へー

「へー」も、「はや」からのものではないか。「ハー」も、「へー」と同類のものであろう。しかしながら、「ハー」と「へー」とは、語感の相違が大きい。このゆえに、私は、「へー」をひとまず別類とする。

「ハー」のさかんな東北には、「へー」の見られることがすくない。『秋田むがしこ』の、

「^{あげ}赤え^{まま}飯食て来た。」と云う^{（ゆうのだったけどさ）}ただけどへエ。

とある「へエ」は、ここにとりあげてよいものであろうかどうか。『野辺方言集』には、「へ（感）」についての、

ヨに当る。「したへへ」は「^{（ママ）}為たまへよ」にある、

との説明が見える。

中部地方で本題の「へー」が見られる。長野県西北隅での例には、

○……………ワカラネー ワイへー。

わからないよもう。（中学生男）

がある。「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」(『全国方言資料』第2巻)には、

f………… ヨー アイッタ モンダへ
よく 歩いた ものですよ、

というのが見え、

m………… フタブレチマッタ キョウヘー
疲れてしまった、 きょうは。

などというのが見える。

愛知県三河西南隅の碧南市のことばとして私が教えられたものには、「ヤイ
ヤイ。ナイタ カヘー。」(おいおい。泣いたかよ。八歳兄→幼妹)「アッ
チ 行ッテ ヘー。」などというのがある。本題の「ヘー」が見られるのであろ
うか。

『京言葉』には、

ヘーをナーに続けて使ふ事も多い。

あのなヘー、あんなヘー (あのね)

は会話で相手の注意を惹く為に盛んに使はれる。京言葉として特徴のある
語法である。

との記述が見られる。これは、どういう「ヘー」なのであろうか。

滋賀県下にも「ナーヘ」がある。『滋賀県言語の調査と対策』には、

膳所〔女〕では、「来タンヤヘ」のように、終助詞「ヘ」を「よ」の意に用
いる。

とあり、「終助詞『ヘ』」とされるものが見えるが、これはどういう「ヘ」な
のであろうか。

九州、大分県下では、豊後西北域に「ヘー」文末詞がある。ところでそれは、
「ナイ ヘー。」(ない?)「アンター マー、イツ モドッテ キタ ヘ。」(あ
んたはまあいつもどってきたの?)などと、問いによく用いられている。「バ

カラシー。ダイガ イク^ヘ。」(ばからしい。だれが行くものですか。)など、「へ」が反撥表現にも用いられている。こうした「へ」は、文末詞「カイ」の「ケ」からのものではなからうか。「へ」が「トへ」ともあり、これは「のかい」にあたる。

「大分県白杵市諏訪津留」(『全国方言資料』第9巻)には、

mトシュー トリガイモ ナク フント ヘー

年を 取りがいも なく、まったく へえ。

というのが見える。この「へー」は、「はや」などに相当するものではなからうか。

長崎県下には、また、「はや」相当のではない「へー」がある。長崎市のことばで、「ド^コニ イッタ^トへー。」は、「どこに行ったの? <友人以下に言う。>」であるという。市内で、問いの「へー」(「トへー」も)がかなりおこなわれているらしい。——女性に用いられるもののようである。

南島、沖縄本島での、旧の女学校での生徒ことばに、「あの ネーへー。」
「あれは なくしても いい サーへー。」などというのがあったという。

五 「モー」の属

副詞「モー」が文末詞化することも、あってよいことではなからうか。

『鹿児島語法』に見られる、

○ナイガモォ(オォ)＝なあに、そんなことはない。

は、「モー」文末詞を示すものであろうか。

「宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内」(『全国方言資料』第9巻)には、

f₁………… アテー トキナー イソガシュ アユミキランキ モ

暑い ときには 急いで 歩くことができないから、も

ー

う。

というのがあある。

「長崎県福江市上大津」(『全国方言資料』第9巻)には、

*m*キョーア オカゲデ ヨカッタヨ コラ モー

きょうは おかげで よかったよ、これは もう。

というのがある。同「長崎県南松浦郡新魚目町浦桑」には、

m………… タイソー オシエワニ ナッテナー モー

たいそう お世話に なったね、もう。

などである。

佐賀県下に関しては、岡野信子氏教示の唐津市神集島の例をひくことができる。

○イマワ ソヤナ キバラン。リクツバツカリ ユーチ モー。

(老女→岡野氏)

などの言いかたがなされているという。

北九州市域での「モー」は、岡野氏教示の、

○ヨー フトッテカラ モー。

(“よその子のよく太っているのをほめる。”)

などである。

「大分県白杵市諏訪津留」(『全国方言資料』第9巻)には、

*m*サーリャ モー コリャ モー シェカイガ チゴータ $\left(\begin{array}{l} \text{ホントー} \\ f \\ \text{まったく。} \end{array} \right)$

さてさて、もう これは もう 世の中が 違って、

ナニモカニモ ホントジャ モー

なにもかも まったく もう……。

というのがある。これには、「モー」の自由な使用が見える。

中国・四国・近畿・中部でも、方言習慣と見られるほどにはなっていない、文末の「モー」の言いかたなら、それは、随所に聞かれることであろう。

『福島県方言辞典』には、

ソーガーマ [句] さうですか

との記事がある。「ガーマ」は「カマ」であろうか。この「マ」は、本題のに等しいものなのかどうか。

六 「マツ」の属

宮城県南の、

○ミ[i]テ ク[ü]ナイン マツ[ü]。

見てちょうだいよ。

では、「マツ」文末詞が見られよう。副詞「マツ」（「マンヅ」「マンツ」など）は東北によくおこなわれており、したがって、これの文末詞化も、東北地方に認められる。

山形弁での例は、

○ダレカ イネー カマンヅ。

だれかいなかねまあ。（中女）

などである。

ひるがえって、『仙台の方言』には、

「邪魔だと思ってすまこさおつけてめーりしたまづ」（邪魔と 思つて 隅に 押しつけてまゐりましたよ）

などの「まづ」例が見える。

「まづ なんつまづおら、どーでんしたやまづ」（ひどくおどろいたよ）

などともある。私が聞いた仙台弁での一例は「ツ[ü] ケタンダソーデ ガス[ü] マツ[ü]。」（つけたんだそうでござんすよ。老女→中男）である。

『秋田方言』には、「あぎれたなまんつ」（あぎれたなまあ）などが見える。

「岩手県胆沢郡佐倉河村」（『全国方言資料』第1巻）には、

fワキサ ワキノ バンバドオンサ シッカカッテ アカネーカラ
よそに よその ばあさんのところに ひっかかっては いけないから

アカス モテ イガヘーデ マンズ

あかりを もって おいでなさい。

というのが見える。

福島県下にも、「マツ」文末詞が認められる。青森県下にも、これがあるろう。

東北地方に関連して、北海道内にも、「マツ」文末詞があるろう。『全国方言資料』第1巻の「北海道松前郡福島町白符」の条の、

mヤー オレー テッデーモ シテー イラレナエマス イマ ソコ
やあ わしは 手つだいなんか しては いられないよ いまは。その
マデ マー ヨッコ アッテ イグドコダカラ
辺まで まあ 用が あって 行くところだから。

は、その一例になるのか。

転じて中部地方内にも、「マツ」文末詞が認められる。「新潟県岩船郡朝日村高根」（『全国方言資料』第2巻）には、

mイヤイヤ ホンネ マズ
いやいや、ほんとうに まあ。

などというのがある。

私が長野県北で聞いたものには、

○イロイロダ ワー。ヒラケタ コター マツ。

いろいろだよ。開けたことはまあ。 （中男→藤原）

などの事例がある。

「マツ」文末詞は、概して東国系のものとされるのではなからうか。

『大隅肝属郡方言集』に見られる、

ホンニ、マツ 本当にまあ。

などの「マツ」は、「まつ」を考えしめるものなのだろうかどうだろうか。

七 「ドーモ」の属

『全国方言資料』第2巻の「長野県上伊那郡高遠町山室（旧三義村）」の条には、

m……………¹⁾ ヒルデーモ シルダーエ ドーモ
 昼寝でも しますよ、 どうも。 1)「ヒルネ」と言ったつもりと…。

というのが見える。文末詞的な「ドーモ」が見られようか。

『全国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条には、

*m*ハエ ハエ $\left(\begin{matrix} \text{ハエ} & \text{ハエ} \\ f & \end{matrix} \right)$ ドーモ ナントモ ハー アリガトー
 はい はい。 どうも なんともし ありがとう
 ゴザリマス ドモ
 ございます、どうも。

というのがある。

「どうも」という副詞にも、むしろ、文末詞化の可能性があろう。

第十七章 接続詞系の転成文末詞

接続詞系の転成文末詞ができて当然であろう。接続詞は、文中、その頭部に立って、すでに遊離的に存在するものだからである。

「サラ」が、もし「されば」的なものであった時は、その文末にはたらくものは、接続詞系文末詞とすることができる。

広島弁に、「ナンチューー コト ナラホイテ。」(なんということなのだよ?)などと、「ホイテ」でむすぶ言いかたがある。接続詞「そして」にあたる「ホイテ」の文末詞化が認められそうである。

第十八章 感動詞系（文系）の転成文末詞

第一節 総説

ここには、感動詞系（文系）と考えられる転成文末詞をとりあつかう。

従来、私は、「文系」の語を頻用してきた。文系とは、「さよなら モシ。」（さよならね。）の「モシ」などをもって言うものである。「モシ」は、通常、「もし。」あるいは「もしもし。」などと、よびかけに用いられ、これらが、独立の文表現になっている。特殊短形の文表現である。このゆえに、私は、「さよなら モシ。」などでの「モシ」、およびこれに類するものを、指摘の簡にしたがって、文系の転成文末詞とよんできた。

しかしながら、文表現として慣用されることの度のいかにつよいものであっても、文が語に還元されないはずはない。どのような文表現も、これを単語論の次元にひきおろせば、それは、みな、品詞弁別の対象になる。「もし。」という文表現もまた、当然、単語論次元で品詞に処理されるはずである。ところで、「もし。」は、どのような分析作業をおこなっても、これに二単語以上を析出することはできない。「もし。」は「もし」一単語からなる。さて、この単語「もし」は、品詞論上、感動詞と見ることができよう。この見地にたてば、「さよなら モシ。」などの「モシ」文末詞は、感動詞系の転成文末詞とされる。

以下には、感動詞系の名を採用していくことにしよう。

文系または感動詞系の転成文末詞とされるものには、第一に「モシ」の属がある。この中には、「ナモシ」以下の複合形もあって、「モシ」の属は大群をなしている。つぎに「オイ」「コレ」などがあり、「ソラ」「ホラ」などもある。その他なお、諸種のものをとりあげることができる。

文系の概念は、広義にこれを解釈することもできよう。たとえば、「きょうはさむいなあ。」などの言いかたでの「ナー」も、これは、文系のものと見られないことはなからう。「わかった ナ。ナ。」（わかったね？ね？）などというのを見るのに、第二センテンスは、「ナ」一語で成りたっている。「ナ」「ナー」のよびかけは、発言者の表現意図の最終的な訴えとして、相手がたに全的にひびいていくものである。その効果は、文表現さながらのものである。

それにしても、「モン」や「ホラ」のばあいは、「ナー」などのばあいにくらべて、語詞そのものに実内容がある。——あるいは、実内容が明らかである。今はとくに、この種のものについて文系を云々することにしたい。

以下の感動詞系（文系）文末詞の記述にあたっては、もとよりのこと、その文末詞の用いられる生活、人間生活を見ることにつとめたい。

叙述はもっぱら簡約を旨としなくてはならないことを、ここにおことわりする。

第二節 「モン」の属

「モン」その他のもの、「ナモン」以下のものを、ここに記述する。

一 「モン」ほか

「申す」の一語が、古来よく用いられてきたことは、明らかな事実であろう。人の、言語表現の生活にあって、「言う」の謙遜語「申す」は、じつに肝要不可欠なものであった。

この「申す」から、「もし」が出たであろう。

肥後南部では、

○ゴメンクダハンモーン。

ごめんくださいませ。

などと言っている。「申す」が「モーシ」となっている。薩摩半島南辺でのことばには、

○アユ ミデ ミヤイモーシ。

あれを見てごらんくださいませ。

との言いかたがある。九州南部に「申す」の自由な運用が見られ、かつ、つぎのような言いかたも見られる。(瀬戸口俊治氏教示)

○モ アンタガヤ イガン モシ。

もうあしたからは行きませんよだ。

——「もし」の文末詞然とした存在が見られるとしてよいのか。

九州南部のことはおくとしても、熊本県下・福岡県下・大分県下などには、明らかな「モシ」文末詞が認められる。

○チョット アータ モーシ。

ちょっとあなた！

は、熊本県下での一例である。

○シェンシエ モーシ。

先生！（“ごはんをちょっとあがってくださいませ。”というところである。）

は、福岡県下での一例である。

○マー オアガリマセン カモシ。

まあ、お上がりになりませんかね。（老女→藤原）

は、大分県下での一例である。総体に、年寄りの（しかも女に）「モシ」文末詞が、よりよく生きていようか。人々は、「モシ」に、“敬語の意味”を感知してもいる。

愛媛県下にも、「モシ」文末詞がある。

大阪府下・和歌山県下にも、「モン」文末詞がある。

尾張地方にも、「モン」文末詞がある。

『信州方言読本 語法篇』にも、「そーだでもみし（そうですね）」などが見える。「モン」が「ミン」に転じているのであろうか。

「モン」が文末詞として利用されるうちには、このような音転もおこるのが当然であろう。

山梨県下にも、「モン」などの文末詞があるのかもしれない。

関東地方で、埼玉県下（主としては、西部の秩父地方）・群馬県下に「ムン」が存在していて、注目をひく。——「モン」が「ムン」になっているのであろう。

秩父地方で私が聞きとめた例には、

○テリスギルホド テリマンタカラ ムン。

照りすぎるほど照りましたからねえ。 （老女→中男）

○デー ソーダンベ ムンアー。

ああ、そうでしょうねえ。 （老女→藤原）

（「ムン」の下に文末訴え「ア」音も見える。）

などがある。今日も、老人たちは、しきりに「ムン」を言っており、先般の調査時にも、人々は、初対面の私にたちまち「ムン」ことばを出すありさまであった。

秩父地方から群馬県下にかけては、関東地方の西北山地域である。関東地方のこうした部位に、「モン」ことばは残存している。しかも、音相を「ムン」に変えて、ものはよく生きている。群馬県下ともなれば、その東北などに「ムサ」もある。

○先生様おらが子はヘシやくざ子でムサ（ヘシとは大変）
などと言われているという。（斎藤博美氏教示による。）

『茨城県方言集覧』の、

おあいばせもーし 御苦労ノ義 多賀郡

というのも、ここにあげておいてみよう。

東北地方内にも、「ムシ」文末詞がある。

古書『仙台方言』には「ムシ。モサ。ムサ。ミシヤ。ムシヤ。」の指摘があり、皆人を呼ぶの詞なり。ムシは申しの転訛なり。モサ。ムサは稍卑き人に対して用ゆ。ミシヤ。ムシヤは。等輩にも心安(ママ)やすき者に用ゆ。モサ以下の四言ともに。尊貴に対しては用ひず。

との記述が見える。仙台地方にかぎらず、諸方に、むかしは、たしかに、このような「モン」類があったのだろう。

仙台方面では、今日も、買い物にはいる時などのことば、「モーシ[i]」がおこなわれている。岩手県下にも「モーシ[i]」[↑]などがある。

岩手県下にも、「モン [mosü]」文末詞が存在している。「ムシ[i]」も存在しているのか。『気仙方言誌』には、「どごさムシ (どこへいくのか)」「山さムシ (山へ行きます)」などの例が見える。

青森県下北半島の田名部で、私は「ミシ[i]」を聞いたかと思うが、今は、定かとはしがたい。県「南部」地方内に「モン[i]」がありもするか。

「モン」のよびかけが、国の東西に今日も見いだされるのは、もっともなことであろう。——「申す」ことばの遍満に正比例することだと思われる。

が、今日すでに、「モン」ほかの文末詞は、ほとんど、老年層のものになっている。さしもの上品なことばづかいも、今後はこれが、いよいよ衰退していくのではないか。

二 「シ」ほか

「モン」の語感が、今日、私どもに‘古風’を思わせるのに対して、「モン」

の略形「シ」は、かならずしも‘古風’を思わせないだろう。「モシ」文末詞の運命がはなはだしく落ちめであるのに対して、「シ」文末詞は、今日なお、そうしたの現勢力を認めしめるものである。この「シ」が、第一には、東北地方によくおこなわれており、つづいて、近畿地方までに、「シ」の分布を見わたすことができる。概して「シ」文末詞は、東方系のものとなっている。

「モシ」が「シ」になったのは、しぜんのうつりゆきであろう。「ます」も、「あります」からは「ありんす」となってもいて、「ます」の「ま」は消えようとしている。東北方言では、「イギス[ü]。」（行きます。）などと、「ます」が「ス」に簡約されている。「です」にしても、私どもが、いそいで「そうです。」を言ったばあいなど、「そーす。」と言われもして、「す」ができています。「です」「ます」に、「モス」は似ている。

「モシ」のよびかけが「シ」ともなれば、表現効果はおおいに変わってくるのが当然であろう。次項に述べる「モ」略形になっても同様である。

以下、国の東西にわたって、「シ」文末詞の存立と活動とを（——すなわち、「シ」文末詞の用いられる生活を——）見ていく。

中国四国の地方や九州方面に、「モシ」系の「シ」の文末詞の見べきものがほとんどないのに対して、近畿地方には、これがある。これは、どう解すべきであるか。

「モシ」は、元来、全国に弘通したものである。この点では、文化上の中心地域であった近畿には、「モシ」系と見られる「シ」文末詞が残留していても、至当とされよう。

中国四国・九州方面にこれがほとんど見られないのは、地方的事情によって、「シ」文末詞の習慣がうち消されたと思われようか。——あるいは、その「シ」文末詞の生活が、はじめられもしなかったのかもしれない。

九州内などの問題事例は措いて、今は、近畿での様相を見ていくことにしよう。大阪弁に、

○ウチ ソンテ ヨト シラシ シー。

わたし、そんなこと知らないのよ。

などの言いかたがある。女性に「シ」が用いられている。私はこれを、柳田国男先生のお説に追随して、「モン」系の「シ」文末詞と見る。

もっとも、先生は、『国語の将来』の中で、「雨も降るし疲れても居るから寝よう。」といったような言いかたでの「シ」を問題にしてもいられる。もし、「雨も降るし」などの「し」をとるとなれば、これは、関西九州にもいちじるしい言いかたである。私は、この「し」もさることながら、大阪弁の「シ」は、「もし」の「し」であろうと思う。

大阪府、南河内郡下での調査結果からすると、このほうでは、「ナモン」が現に老人につかわれている。「モーシ」文末詞もつかわれている。四国や紀州に、「ナモン」「ノモン」や「ノシ」などが見られる現状と考えあわせるのに、大阪府下に「ナモン」が見いだされるのは、注目すべきこととされる。したがってまた、私は、大阪府中心に「シ」文末詞がよくおこなわれているのも、「モン」系の「シ」とされるものであろうと考えたいのである。南河内郡下でも、「ナモン」のおこなわれるところに、ならんで、

○ホントヤ シー。

ほんとなのよ。

などの言いかたがおこなわれている。「シ」が、限られて女性のことばであるのも、特定の「モン」といったようなものを思わせやすいのではないか。

和歌山県下の「シ」を見る。『和歌山県方言』に、

ナイテンノヤシ 泣いてゐるのです

とある。県下の北部におこなわれているものようである。「〜ノヤ」で言いきって、そのあとにおいてある「シ」は、文末詞の「シ」に相違あるまい。大阪府下と同一のものであろう。同書に、「アタイノヨシ（私のです。）」というもある。「私の ヨ」の言いかたのうえに、さらに「シ」がおかれている。土地の人は、「ヨシ」ということばを自覚してもいるようである。県北では、

「ヨシ」がよく聞かれ、

○イテ キテ オクレ ヨシ。

行ってきておくれよね。

○インデ オチャ タベ ヨシヨ。

帰ってごはんたべなさいね。 （老女→孫幼男）

などがある。「ヨシ」の一体性がつよいので、「ヨシヨ」とも言われるのであろう。県中部にも、さらに県南西部にも「ヨシ」が認められる。「ヨシ」の言いかたはさかんであって、自由に「サーヨシ（さうですね。）」（『和歌山方言集』）などとも言われており、さらには、「ヨシ」からの「ヨス」もひきおこされている。『和歌山県方言』には、

イキヨスナ 行くな

危い所なんかへはイキヨスナ。

などの例が見られる。——「ヨシ」が、五段活用動詞の連用形に相応する形なので、人は、五段活用動詞利用の生活に類推して、「ヨスナ」の言いかたをひきおこしたのであろう。（「行き」に対する「行くな」のようなものである。）なおおもしろいことに、本県下には、「シヨ」もよくおこなわれている。『和歌山県方言』には、

シテンノヤツシヨ してゐるのです

などがある。「シテンノヤツ」は、「しているのやつ」だろう。「シヨ」は、単純に付置されたものと思われる。

和歌山県下に隣る三重県下・奈良県下には、「シ」について述べるべきものが、私には、ほとんどない。奈良県南部の十津川で聞いた、

○ココノ オト^ーワ ヨルノ メヨ^ー トリニ イタンジャ シー。

うちの亭主は「夜の目」（赤松の幹の内部の油ぎった部分 松明用）
をとりに行ったのよ。 （主婦）

は、和歌山県下の「シ」とおなじものであろうか。三重県下の志摩にも、問題事例があるかもしれない。

大阪府下・和歌山県下に対応する、「ヨシ」文末詞の領域は、京都府下である。このほうにも、「ミ ヨシ。」（見なさい。）「シ ヨシ。」（しなさい。）などの言いかたがおこなわれている。「シ」はどうなのか。私はかつて、京都市内で、

○オ^ラロ ア^キマシタ シ。ド^ーゾ。

おふろがあきました。どうぞ。 （青女→藤原）

との言いかたを聞いたことがある。——これの「シ」は、「モシ」の「シ」ではなからうか。それにしても、京都弁では、「ヨシ」がよくおこなわれて、「シ」が比較的聞かれにくいらしいのは、おもしろい事実である。

滋賀県下では、「シ」がよく用いられている。湖西の一例は、

○コ^メ ナ^カッタラ モ^テ クル シ^ー。

米がなかったら持ってくるよ。 （老男→中男）

である。——男性が「シ」を言うのを、私は聞いた。『滋賀県言語の調査と対策』にも、

終助詞「シ」 甲賀郡^{しがらき}信楽では、男女・老若ともに、「ソーヤシ」（そうだよ）のように、終助詞「シ」を「よ」の意に用いる。

との記事が見える。滋賀県下で、「シ」形文末詞がおこなわれているとおもったら、それは男女に見られもするというのは、また、注目すべきことである。いわば、近畿の東北辺に、ものの利用の変転のさまが見られるということか。

さて、大阪流の「シ」は、西の兵庫県下にたどられる。神戸市域では「シ」がさかんであり、姫路ことばにも、

○イ^カンノヤ シ^ー。

行かないのよ。

などとする。『赤穂言葉の研究』にも、

あ^たし そんな事 知^のラヘンヤシ^イ。

などの例が見られる。

つぎに、中部地方について、私どもは、問題の「シ」の存立と活動とをたど

り見ることができる。

はじめに、北陸道が注意される。

まず、福井県下では、愛宕八郎康隆氏の調査によるのに、越前に「シー」「カシ」「ガシー」「ガイシー」が見える。方言書にも、越前の「シ」が見え、また、「ガシー」「ガイシー」が見える。

「カシ」は、近畿のに関連するものか。

石川県下の能登にも、「カシ」がよくおこなわれている。

○イラン カイシー。

いりませんかね。（もの売りの人のことば）

などと言われている。能登西岸で聞かれたものには、

○イカン ワイシー。

行かないよ(わ)。

などのことばづかいがある。

○ソーヤ ワシ。

（“そうやわいね。”）

との言いかたもある。もとよりのこと、能登に、単純な「シ」もおこなわれている。

○ネツァー デンヤロ シ。

熱は出ないだろうよ。

とある。愛宕氏は、加賀にも、「ガイシー」を見いだしてられる。私が白山麓で調査したものには、

○ソージャ ナイケドガ シ。

そうじゃないけどね。（中女→藤原）

などがある。

富山県下もまた、「シ」のおこなわれる所のようにである。愛宕氏の調査には、「シー」「カイシー」「ガシー」「ガイシー」が見える。その一事例は、

○ナン シー。

なんだい？

である。「シ」の品位は、さほど高いものではないのであろう。

新潟県下となっても、また、北陸道の一域であるのにもふさわしくと言おうか、「シ」が、南北に見いだされるようである。押見虎三二氏によるのに、南辺の秋山郷には、

○セータンナシニ モローテ モーシワケ ネーッケシ。

ひっきりなしにもらって申し訳のないことでしたね。

(中女→中女)

などの言いかたが見られる。同地に、「ナンメー クレー ツカッタッケッソ (何枚ぐらい使ったかなあ。)」などもある「ソ」もまた、「シ」に類するものか。越後南部東方での昔話や、越後中部の昔話などにも、「シ」や「カシ」が見える。新潟市での例には、

○ドヤンケ シ。

“どうだったかね。”

などがある。越後北部ともなると、

手もぎれてしまったっス。

などもある。(『岩船地方昔話集』)——山形県下に一般的な「シ(ス)」に共通する態のものがここに見られる。新発田市方面でも、「シ」「カ(ガ)イシ」などがよくおこなわれている。“ていねいなことばの時に「シ」をつかう。”と言われている。新発田ことばの「コイ シ。」は、よびかけの時につかうことばで、「あのね。」よりはよいことばであるという。“すこし目上のものにつかう。”とのことである。——人をよぶ時に、「コイ(エ)。「コイ(エ)。」と言うよしであり、この「コイ。」に対するものが「コイ シ。」である。「シ」は、たしかに、「もし」的なものであろう。

佐渡は、「シ」の見いだしにくい所なのか。

転じて、南の岐阜県下となっても、「シ」のおこなわれるのは、あまり見られないのかもしれない。『飛驒のことば』には、

「そーかいし」（そうですか。） 莊川村

などが見られる。『岐阜県方言集成』にも、羽島郡の「あのし（あのねえ。）」などが見える。

愛知県下もまた、「シ」のよわい所である。尾張地方では、「モン」の「シ」よりも、「モン」の「モ」が（多くは複合形で）よくおこなわれている。ところで、三河奥には、

○ドー オシタイ シ。

どうなさいましたの？

などとあり、男女が「シ」をつかっているようである。「ソー カイシー。」（そうですか。）などともある。

さて、長野県下となると、北陸路についてとも見られようか、「シ」の、かなりよくおこなわれているありさまが認められる。北部での一例は、

ソウジャアネエシ（さうではないよ）

である。（『信州北部方言語法（上）』）「カシ」「シヨ」もおこなわれている。『信州上田附近方言集』に見える例は、

シラネーシ 知らず。シラナイヨの意。

などである。『全国方言集』には、長野県伊那郡の、

ゾイシ 尾語に付する語

が出ている。

長野県下に隣って、おなじく内陸地方の山梨県下にも、「シ」がよくおこなわれているらしい。私が、県西南部でとらえた一例は、

○オマン コッチ コー シ。

あんたこっちへおいでなさい。

である。「イケッ シー。」は、「行かないか！」であるという。なお、小男が私に語ってくれたことばには、

○トマッテ イケ シー。

泊まってお行きよ。

があった。山田正紀氏の『山梨県方言の諸相——資料篇——』には、

国中地方には動詞の命令形について勧誘を示すものに「し」といふのがある。

との記事が見える。例としては、「これを見ろし。」などがあげられている。

ところで、静岡県となると、今、私は、「ン」を指摘することができない。

関東地方が、また、だいたいは、「ン」をとらえしめない所である。(——東海、静岡県下の状況が、関東地方の大勢につづくというわけなのか。)

ただ、群馬県下ともなると、これはまた、長野県にもつながっていることもあってか、南西部に「ン」が見られる。

ソーダ^ニシ(北甘楽郡富岡附近)

などである。(『季刊 国語』昭和22年冬季号 3)——「ン」は、「そーだよ」の「よ」にあたるという。県下になお、「ン」の分布が認められるらしい。

『茨城方言集覧』には、「そーだし(左様デアルトイフ意)」(多賀郡 稲敷郡)などの「ン」が見える。当地方の「ン」については、福島県下の「ン」との相関を考えてよかろうか。

となって、一般的には、関東に「ン」がごくとぼしいとされる。

福島県以北が(北越以北とも言える)、「ン」のさかんな領域である。といっても、ものは、人々に、「ス」とも受けとられがちである。「ン[i]」「ス[ü]」ともに、ものは、「もし」の「し」であろう。(「ン[i]」の発音は、とかく、「ス」に聞きとられがちである。)東北地方の方言生活を、一事実によってえがいてみよと言われれば、私は、この「ン」「ス」を観点としてみたいとも思う。(「そうだ。」の「ンダ。」もあるけれども。)

福島県下に、まず、「ン(ス)」がさかんである。会津地方にことにさかんか。人は、「ン」を、“接尾語であって、つよい意味をあらわす。「ネ」に似た意味がある。”などと言う。また、“「ン」は謙遜のことば。「ネ」よりもちょっとち

がう。鄭重な敬意をあらわすようである。おちついたことばだ。”などと言う。“「シ」は、こちらと相手の人とをむすびつけるはたらきをする。接着剤だ。Let us のような、さそう気もちがある。”などとも言う。会津若松弁の一例は、

○キョーダイガ、ミンナ カイスイニ キテタンダ シ。

兄弟が、みんな海水浴に着てたんですわ。 (結婚三十年の妻君
→宮田アナウンサー)

である。『福島県方言辞典』には、会津の「アットモン(ありますとも)」が見える。会津西南隅の檜枝岐村には、「シュウ」があるという。菅野宏氏は、「方言の旅——東北地方 檜枝岐——」(『NHK国語講座』昭和31年8・9月)で、「終りにつける助詞的な語に、『シュウ』という敬語があります。」とされ、

コナタドチノホーカラコラレタシュウ。

などの例をあげていられる。「シュー」は、磐城にも見られる「ショ」に関係の深いものではなかるうか。「ショ」は、「シヨ」複合形ではないか。磐城北部の「ショ」例は、

○コイツ〔ü〕 ナンダ カシヨ。

これは何ですかね?

などである。このほうに、「ソー カシ〔i〕。」(そうですか。)の言いかたもある。磐城南部にも「ショ」がある。「シ」は、磐城地方の広い範囲に見られる。

○ハヤク〔ü〕 オマイモ ヤバ シ〔i〕ー。

早くあんたも行きましょう。

は、白河市での一例である。

福島県下の、「シ」に関する複合形文末詞には、なお「ゾシ」がある。私は、「ソーダ ソシ〔i〕。」(そうだぞ。)というのを、かつて福島駅で聞いた。「カシ(ガシ)」のおこなわれることがさかんである。会津例は、

○センセモ、イガル〔ü〕 ワケダ ガシ〔i〕。

先生も、行きなされるわけですか? (中女→中男)

である。——「カシュー」ともあるか。県東部、相馬の「カン」例は、

○ソー カシ[i]。

“そうであるか。”

である。「カン」は、方言書に「カス」ともある。「一シ」の母音が、中舌音であるためのことであろう。諸方言書に、「カセ」も見える。「何々だから」の「から」と「シ」とのむすびあった「カ(ガ)ラシ」が、複合形の文末詞になっている。『会津方言集(増訂版)』には、「ソ^ニネ^エー、ガ^ッコ^ーノダガラ^シ。」(いいえ学校のです。)が見える。菅野宏氏は、「福島のといてい語」(『言語生活』第二十九号)で、

会津でいちばんといていなのは「がらし調」

と述べていられる。県下の広くに、「シタ」の複合形がよくおこなわれている。『会津方言集(増訂版)』での一例は、

マ^ットア^ンベ^エーシ^タ (句) もつとあるだらう。

である。県東北部の一例は、

○ソイツ[ü]ワ シ[i]タ。コマ^ッタ モンダ シ[i]タ。

そいつはだなあ。こまったもんだなあ。

である。県下の広くに、「ベ」の言いかたのもとに「シタ」のくることが多いようである。「シタ」の「タ」はなんであろうか。「アナタ」「アンタ」の「タ」を考えることはできないのか。

宮城県下の状況は、福島県磐城地方の状況によくつづいている。磐城・宮城県下の状況のほうが、会津のより単純であらうか。宮城県下での「シ」の用例の代表的なものといえば、「ナ=「i」ッ シャ。」(なんですか?)、「ア^ッ シャ。」(あのね。)などであらうか。「シ」文末詞の付着していることが明らかである。「シャ」音をかもしているのは、「シ」のもとに、文末訴え「ァ」音がともなっているからであろう。

○ソー^ッ シャー。ソー^ッ シャー。

そうですわ。そうですわ。(中女間)

は、県北での、おおいに肯定することばである。『仙台の方言』には、「なにす（何ですか）」などの記事が見える。松島湾岸で私が聞き得たもの、

○ダゲットモッ シャー。

では、「だけれども」の言いかたのものと「シ+ァ」が見える。宮城県下では、文末訴え「ァ」音の熟合した「シャ」が、じつによく慣用されている。

宮城県下の、「シ」に関する複合形の文末詞としては、第一に、「ノッシャ」が指摘される。「あんたはどこへ行くの？」は、「アンター ドゴサ イグ〔ü〕ノッシャー。」と言われている。「ノッシャ」の聞かれることが、また、県下に多い。伝達表現の「トッシャ」などもある。

山形県下に、「シ」文末詞のおこなわれることがさかんである。人は多く、かんたんに「ス」と表記している。いずれにもせよ、ていねいな表現をかもす、「もし」の「し」が、さかんにおこなわれていると見られる。（「ス〔ü〕」の発音が優勢か。）県南で私が聞いたものには、

○ナシ〔i〕ト ユ〔ü〕ー コトバワ タイ〔i〕ヘンニ〔i〕 リッパニ〔i〕
ツ〔ü〕カッテル〔ü〕 ワケダ ス〔ü〕。

（このへんでは、）「ナシ」ということばは、たいへんにりっぱにつかっているわけですよ。（老女→藤原）

（熟した「ナシ」がある。「ナシ」は、「ナーン」「ナモン」に近いものではないか。「ナシ」とともにおこなわれている「シ（ス）」は、「もし」を思わせやすいものであるう。）

○ムカシャ アイナンテ ユ〔ü〕ッテタンダッ シ〔i〕。

むかしは、「アイ。」（返事ことば）なんて言ってたんですよ。

などがある。県南の米沢に関する『米沢言音考』には、つぎのおもしろい記事が見える。

も於す。又、し。ます。「読みもおす」「読むし」「致しも於す。」「しるし」
米沢には、元来、ますト云フ語ヲ用ヒズ。ますト云フベキ所ニハ、老人ハ、
申スヲ用ヒ、他ハ皆、しト云フ。ますハ、まをすノをヲ、脱シタル語ナリ。

「申す。又、し。」とあるのが注目される。また、「読みもおす」「読むし」などとあるのが注目される。県西北の庄内地方は、「ス(シ)」文末詞のあまりおこなわれない所か。私自身の調査経験では、そのように言える。ところで、『荘内語及語釈』には、「今日は来るし(今日は来ルサ、来ルヨ、来ルトモ)」などの例が見える。山形県下にあっても、「シ」に文末訴え「ァ」音のついた「シヤ」が見いだされる。私は、県南や山形市地方で、これを聞いている。

山形県下の、「シ」に関する複合形の文末詞には、「ゼッス」「カス(「ガッス」とも)」「シタ」などがある。

○オボエルカモ ジャネー シタ。

(わしもけいこしたら、おまえさんのようなことばを)おぼえるかもしれないよ。(考女→藤原)

は、山形市を西南にすこしはずれた土地での「シタ」例である。(p. 316)

秋田県下にも、また、「ス(シ)」がさかんである。他県下でのばあいと同様に、この文末詞が、簡潔にはたらきながらも、一文の表現を、早くも、やわらかで(あるいは、おだやかで)、したしみのあるもの、かなり品のよいものにしてている。県下の西南隅には、——さきの庄内地方につづいて、「ス」のおこなわれることがとぼしいのか。全県下での「シ(ス)」の自由なおこなわれざまは、まず、「あの ス。」(あのね。),「おとうさんし(「し」は「尊称の接尾語」)」<『秋田方言』>,「んでねあし(さうでないのに)」<『秋田方言』>のようなありさまである。私が、県東、田沢湖の南方で聞いた事例は、

○アツツァ ゴツツォン ナッタッ ス[ü]ー。マンヅ[ü] マンヅ[ü]。

あねさんご馳走になりましたね。ではまあ、ごめん。

(老女→中女)

などである。「そういうことをしています。」の「います」も、「イル[ü]ッス[ü]ー」である。——これで、「いますのよ」といった気分になる。

○ヤダ[ü]バマエノ ホーッガ チ[i]カイ[i] ス[ü]ー。

役場前(バス停留所のこと)のほうが近いですよ。(郵便局へ行くの

には) (中女→藤原)

のような言いかたは、「ス」が独立の訴えことばであることを、よく示しているよう。「ベ」の推量の言いかたでおわったものを訴えるためにも、「シ(ス)」がつけられる。さて、県西男鹿半島で聞いた「シ」例には、

○ ンメサンガダ ドコサ イク[ü] シ[i]。

あなたがたはどこへ行きますか？

(「シ」をつければ上品になるという。)

があり、県北で聞いたものには、「ンデ ネ ス[ü]。」(そうではありません。)がある。(県北で、人は、“よく「ス」がつく。”と言っていた。)
「シ」の訴えが、さらに文末訴え「ァ」音をとまなうと、「シァ」になり「シャ」になる。県下の南北に「シャ」が聞かれる。「アフ シャー。」(あのね。)は、本荘町での一例である。「セァ」と聞かれるものも、「シァ」に等しいものなのか。

本県下の、「シ」に関する複合形の文末詞には、「シ(ス)ヨ」「スカ」などがある。近森繁春氏の『大館方言』には、「いたすか」についての、

正確に言えば「いたッすか」が本当ただと思う。御在宅ですか、おいですか、の意である。

との説明が見える。明らかに、「スカ」が見てとられよう。「行く スカ。」などのばあいも、同趣だと思われる。

岩手県下にも、「シ(ス)」のおこなわれることがいちじるしい。花巻市で聞いた説明には、「チャ」は農家で「ス」は商家でおこなわれる、というのがある。「ス」は、敬卑心理から言えば、相手をよく待遇しようとする心理のものと言いうるようである。本県下全般に「シ」のよくおこなわれるさまは、「あの シ(ス)。」(あのね。)や、「お客さん シ(ス)ー。」や、「マタッシャ またくるからね (別れのことば)」(『岩手方言の語彙<旧伊達領>』)などの流布にも、それを見ることが出来る。花巻弁の「何をあげましょうか。」は、「ナニ[i] アゲル[ü] ス[ü]。」である。「〜ベ」の推量の言いかたの下にくる「シ(ス)」,
「ベ シ(ス)」と聞こえることばづかひも、よくなされている。県北で

聞いた「そうではない。」は、「ソッデ $\overline{\text{ネァ}}$ ス[ü]。」である。森岡市南郊近くの一例は、

○コク[ü] $\overline{\text{ポー}}$ ショク[ü]ノワ、イク[ü] $\overline{\text{ラダッタ}}$ ケッ ス[ü]。

国防色のは、いくらだったのかね。(客の来たのに 応待しながらの 発言) (店の主婦→夫)

である。

本県下の、「シ」に関する複合形の文末詞には、「トシ(ス)」「ドシ(ス)」「トイス」「トシ(ス)ヤ」「テス」「スヤ」「スカ」などがある。

○オン $\overline{\text{メァー}}$ オス[ü]ス[ü] タン $\overline{\text{ベル}}$ [ü] ス[ü]カ。

あんたはおすしをたべるかね？

は、「スカ」の一例である。『平泉方言の研究』には、

あえずあまっこしっしゃ(あれは馬です)

わがんねあのしっしゃ(わからないのです)

などの言いかたが見える。同書では、

「しっしゃ」を「しっしょ」ということがあるが、これらは「す」に「よ・や」がついて訛ったものらしい。

との説明が見られる。

青森県下にもまた、「シ(ス)」文末詞のおこなわれることがさかんである。岩手県下につづいて、県東部の「南部」地方に、「シ(ス)」がよくおこなわれている。

○カ $\overline{\text{ッチャ}}$ ハヤ $\overline{\text{グ}}$ [ü] ママ ク[ü] $\overline{\text{ベ}}$ シ[i]。

母ちゃん、早くごはんをたべようよ。

などとある。「キョーア $\overline{\text{エァ}}$ シ[i]。」というのは、家の人が行商の魚屋に、「きょうはいいわよ。(いらないわ。)」とことわるところである。北の野辺地町で聞いた「コ $\overline{\text{ッチサ}}$ キ[kç̥i]テ $\overline{\text{エ}}$ ヒ[i]ー。(「テ $\overline{\text{エ}}$ ヒー」は、「 $\overline{\text{テ}}$ ヒー」に近く聞こえた。)(こっちへおいで。)の「ヒー」が、「シー」にあたるものなのかどうか。『五戸の方言』には、「学校さ行くベスイ(行きませうよ)」

などの実例が見える。「〜ベ」の推量表現の言いかたのあとに「ス（シ）」のくることが、比較的耳だたしいか。『青森県方言集』には、「この花こ エガベシ（この花はいゝでせう）」などの実例が見える。「〜ベ シ」に関しては、人に、「ベシ」という古語助動詞を認めようとする説がある。たとえば、「ハヤククル^{ベシ}」などの用例について、これに命令の意がこめられているようだとし、^{ベシ}が想定されている。しかしながら、私が「南部」地方で聞いた例には「イ^グベ^{ース}[ü]。」があり、土地の人は、これを、「行くことにしましょ^う。」だとした。「イ^エデ^{ァー} マ^ッテ^ンダ^ー、イ^グベ^{ース}[ü]。」は、「うちではまっているだろうから、帰ることにしましょ^う。」であるという。「ベシ（ス）」が、このように「ベース」ともあり、上二例は、明らかに自分のことを言っている。たとえ、相手への命令の意のものがあつたとしても、他方に、こうした「ベース」もあるのが事実だとしたら、いそぎ「ベシ」助動詞を認めることは困難になる。上二例の「ベース」は、「〜ベ^{ース}」と表記してしかるべきものであろう。『青森県方言集』には、「アノス」があつて、「『アノネ』の意」とされている。諸方言文献が、「シ（ス）」に対して、「ね」や「よ」や「さ」をあてている。土地の研究者が、「ベシ」ならぬ「シ」を、単独の要素と認めている。「ハヤククル^{ベシ}」などのばあいも、「シ」を分別することができるのであろう。津軽半島で聞いた説明には、

「コレ オメ ヤ^ッタ^ンダ^ベ シ[i]ー。」（これはおまえがやったんだらうね？）というの、^シのつかないのよりも、多少上品だ。

というのがある。「モシ」系と考えられる「シ」の、文表現を好品のものにしていくはたらきが認められてよいのであろう。津軽平野で聞いた表現には、

○コレ ^シ[i]ー。アレ ^シ[i]ー。

これですか。あれですか。（フィルムをくださいと 買いに来た人に対して、店の主人が答えることばである。）

などがある。津軽で、「シ」のむすびが「チャー」と聞こえるものも、私は受けとめることができた。これは、「シ」文末詞に、文末訴えア音のそわつた「シ

ァ」なのであろう。「シァ」の「シャ」が、宮城県地方でのほどではないにしても、かなり聞かれるか。

本県下の、「シ(ス)」に関する複合形文末詞には、「デバ(てば)シ(ス)」その他がある。

北海道地方にも、道南その他に、「シ(ス)」がある。「〜ベシ」も、よくおこなわれているらしい。北海道にも、だいたい、北奥の「シ(ス)」文末詞の垂流状況が見られよう。

東北地方・北海道地方の「シ(ス)」に関しては、「モン」起源を認めないむきもあろうか。中には、「候」系を推想する説も見えるようである。しかし、私は、第一に、「シ(ス)」の、遊離要素としての独自性を認める。「シ(ス)」の、短小ながら一個独自の表現要素であることが注目される。この「シ(ス)」は、「もし」に該当すると考えても、不当ではないものようである。比肩しうる両者ということからは、「シ(ス)」について「もし」起源を考えることが、比較的容易のようである。加えて東北地方にも、「ナモン」「ナムシ」「ナモ」「ナム」などが現にあり、むかしは今日以上に方々に、この種のものがあつたらしい。次項に述べるように、福島県下などには、「モン」の「モ」もある。こうした事情のもとでは、東北地方・北海道地方に存在する「シ(ス)」について、「モン」起源を考えることが適切なのではないか。

「シ」文末詞に関する複合形として、上来「カシ」や「テバシ」その他をあげてきた。ここにかえりみられるのは、「ナシ」や「ノシ」などである。「カシ」をあげるのなら「ナシ」などもあげてしかるべきではないか、ともされようか。

ここで私は、一つのことわりをしておきたい。「ナシ」などは、「ナモン」によく関連したものと考えられる。「ノシ」も、「ノモン」によくつながるものと考えられる。さてその「ナモン」や「ノモン」は、「エモン」とともに、完結体としてのおもむきが顕著である。もともと、「モン」に他のものが加わった複

合形であるけれども、それらおのおのでの熟合度が高まって（頻用にとまなうことであろう。）、それらおのおのは、きれいに一体的なものになっている。このため、私は、「ナモン」以下のものを、別途にとりたてようとする。したがって、「ナモン」に密接した略形「ナン」, 「ノモン」に密接した略形「ノシ」なども、それらの完結形のもとでとりあつかうことにする。

三 「モ」ほか

文末詞「モン」が、「シ」文末詞を産んだと同様に、「モ」文末詞を産んでもいる。言いかえれば、「モン」形は、上略による「シ」形ともされ、下略による「モ」形ともされたのである。

言語大衆の文末詞創作は、いかにも自在である。地域地域によって、人は、その土地ふうの言語感情のままに、また、言語心理のままに、「モン」を、あるいは「シ」におしつづめ、あるいは「モ」におしつづめた。敏捷な言語操作がそこにあつたと言える。——みな、生活表現の必要と、生活表現上の当意即妙とによることであろうか。

「モン」系の「モ」文末詞は、西は九州内に見られる。筑後が、そのおもな分布域である。柳川市の城内ことばでは、

○オシツマリマシタ モ。

おしつまりましたね。 （老女間）

○シロウチワ コージバツカリ ネ。マチワ ナカ モ。

城内は小路ばかりね。町はないわ。 （中女→青男）

などがある。柳川ことばでは、「ノモ」というのもよくおこなわれており、「カンモ」「タンモ」もある。筑後南部の八女郡でも、私は、「カンモ」「タンモ」を聞いている。「ウレシカッタ タンモ。」など。八女郡に、単独の「モ」もおこなわれているのか。福岡県下の筑前太宰府のことば、

○ソレゾ ホーガ ヤスイデシヨー モ。

“そっちが安いでしょう。(だからそっちを買いなさいよ。)”

(若妻→夫)

というのは、いま問題にしている「モ」文末詞をとりたてしめるものなのかどうか。

「モノ」の略形の「モ」と「モン」の略形の「モ」との区別が、ときに、むずかしい。

私が天草下島の本渡市で聞いたことばに、

○ドケー イカス カンモイ (モーイ)。

どこへいらっしゃいますかね？

(年寄りだけのことばだという。)

などというのがある。「カンモイ」の「モイ」は、「モン」の「モ」に関係のあることばなのかどうか。

近畿南部のいわゆる熊野路のことばに、「モン」の「モ」があるか。村内英一氏の「文末助詞の考察」(『和歌山大学学芸学部紀要』<人文科学Ⅲ>)には、和歌山県東牟婁郡北山村のことば、

○キヨー ワ ゴタイゲサマデ ゴザイマスナモ。

今日は御大儀でございましたね。(北山村)

○ヨー マトクリ ヤーシタ エモ。

よく来て下さいましたね。(同)

○ドウゾ アガッテ チヨーダイモ。

どうぞ上って下さいね。(北山村)

○ユカゲン ワ ドーダイモ。

湯加減はどうですかね。(同)

がとりあげられている。(氏の表記のまま)「ナモ」「エモ」とともにおこなわれている「モ」は、「モン」系の「モ」であろう。(それにしても、ここに、愛知県下などでのと同様の、「モ」出現の諸相が見られるのは、おおいに注目される。)

中部地方の尾張・美濃の地方が、全国でもとりわけ、「モ」文末詞のおこなわれることのさかんな所である。

まず尾張を見るならば、『全国方言資料』第3巻の「愛知県海部郡立田村小家」の条には、

f エー (m ナー) セーフ モッテ イットクレーモ
ええ、 (m) さいふを 持って 行ってくださいよ。

というのが出ている。尾張地方で主としておこなわれているものは、「モ」に関する複合形であろうか。「ナモ」「エモ」「ザエモ」「ゾエモ」「ゼーモ」「カモ」「カイモ」「ケアーモ（キヤーモ）」「ガイモ」「ギヤーモ」「ターモ」「ワイモ」「ワモ」などがある。

○コンチャ アッタコ ゴザイマス テーモ。

今日はあたたかございますわね。 (中女→中男)

は、尾張西部での「ターモ」の一例である。

美濃地方にも、劣らず「モ」がよくおこなわれているか。『岐阜県方言集成』には、郡上郡の「しらんも〔句〕知らないよ。」が見える。『郡上方言』にも、「オラ シランモ (ぼくしらねえよ)」が見える。

飛驒に、「モシ」系の「モ」が見いだされるのかどうなのか。『岐阜県方言集成』には、「行かずも＝行くだらう。」<吉城郡>があげられていて、「も」は感嘆詞だとある。これだけでは、「も」が「モノ」系の「モ」かとも思われてくる。美濃にも、複合形の「ナモ」「エモ」「ゾエモ」「ゼモ」「カモ」「カエモ」「ケモ」「キヤーモ」「ギヤーモ」などがある。

北陸地方に、たぶん、「モシ」系の「モ」はないのであろう。

関東地方の群馬県下に、問題事例がある。『全国方言集』に、利根郡の、

ソーダ「メ」 そうですぬの意

が見える。また、北甘楽郡の、

メー 語尾に付するネーの意

が見える。こういう「メ」は、「モシ」の「モ」の転「ム」に近いものなのか。

『八丈嶋仙郷誌』には、「何か アニンカモ」というのが見える。この「モ」は、どういう「モ」なのであろう。

東北地方では、福島県下が問題にとむ。(前述 p. 536)『全国方言資料』第1巻の「福島県河沼郡勝常村」の条には、

*m*イ ック ツケテ イカシエーモ¹⁾

一服 つけて おいでなさいよ。 1)「モ」は「もし」の略か。

とある。『福島県方言辞典』には、

モ〔助〕敬語の助詞○「行つて来やつたのかも」(御出でになつたのでありますか)

との記事が見える。——会津のことばであるという。「敬語」とされている「モ」は、「モシ」系のものではないか。同書では、別に、

特別の終助詞であって敬語となるものである。丁寧に言ふ場合に用ゐる。との説明も見られる。私が、会津南部の人から聞いた、その土地ことばの例には、「ソー カンム。」がある。老若男女が、対等関係でこの言いかたをしているという。

「山形県東田川郡黒川村」(『全国方言資料』第1巻)の、

*f*エマダバ アノー エー ヤンベー シサケ アッペーサケダカ ア

今では あの いい ぐあいに するから³⁾ ぐあいがいいためか⁴⁾ あ

ンマリ ノコラネーヨダモ 3)「焼くから」の意。

まり 残らないようです。 4)「もちの焼けぐあいがいいためか」の意。

の「ノコラネーヨダモ」の「モ」は、「モノ」系のものか。

「岩手県胆沢郡佐倉河村」(『全国方言資料』第1巻)の、

*f*ソアレタッタモ¹⁾

そういうことだったね。 1)「ソアレ」は、「そう言われ」の転。

の「モ」も、問題の「モ」である。

東北地方で、おもに福島県会津地方に、「モン」系の「モ」文末詞が見られるのだとしたら、これは、どう解すればよい分布なのであろうか。

ものの存在と分布とは、解しがたいことが多い。

「モ」に関する複合形の「ナモ」や「エモ」は、「ナモン」なり「エモン」なりのもとでとりあつかう。「ナモ」は、おそらく、「ナ」に「モン」の「モ」を加えてつくったものではあるまい。「ナモン」から「ナモ」ができたのであろう。「エモ」についても、同様のことが考えられる。

四 「ナ（ノ）（ネ）（ニ）モン」「エモン」の成形

「モン」に関して「ナモン」などの言いかたも認められるのは、周知のことであろう。「モン」からすれば、「ナモン」などは複合形である。（民間の人たちも、この複合形に気づいている。たとえば、伊予舟の「ナモン」について、高知県の人が、“「ナー」と言っておいて、むこうさんはがてんがいったかどうか、よびかけるために、「モン」と言う。”と話すのを、私は聞いたことがある。また、筑前糸島半島で聞いた、土地っ子の説明には、“ $\overline{「ナ」}$ ワ $\overline{イリ}$ マッ $\overline{シェン}$ 。”（「ナ」はいりません。）というのがある。——「ナモン」についてたずねたのに対する返事であった。ただし、ここに「ナモン」がおこなわれているのではない。）

しかしながら、一般には、「ナモン」などが、一体的なもの、一体性のものとわきまえられていよう。「ナー」のよびかけに似たようなものに、「ナモン」のよびかけがあると考えられていがちである。こういう点からして、私は、「ナモン」などの形を、複合形らしさをこえた準単純形とも考えてみる。

その、準単純形らしさを保証するがごとくに、「ナモン」からは、「ナーン」などが、「ノモン」からは、「ノーン」などができている。

要するに、「ナモン」での「ナ+モン」, 「ノモン」での「ノ+モン」などは、

おのおのでの、二要素の熟合が強大であると解され、それゆえ、「ナモン」や「ノモン」などの、かなり純化された一体性が認められる。単純感声的な「ナ」がまずきて（あるいは「ノ」がまずきて）、やがて、「モン」というような、内容のあるものがくれば、両者の熟合は、緊密になるのが当然ではないか。「ナー」とよびかけ、さらにつよく訴えようとして、人は、「モン」とつけ加える。訴えの推進・展開・進歩である。強調表現の安定形式「ナモン」「ノモン」などが、ここに生じた。生じたものの一体性が、つねに、そのアクセント成態に明らかである。

「モンナ」「モン」などの言いかたも、できてよかったのではないか。しかし現実には、このようなものはおこなわれていない。やはり、感動的に「ナー」などと訴え、ついでことをわけて訴えていくがごとくに「モン」とよびかけるのがしぜんだったろう。そういう点では、単純感声的なナ行音について等しく単純感声的なヤ行音系の「エ」が、「モン」に先行してもよいわけである。「エモン」は、「ナモン」などについて、できてよいはずのものであった。

以下に、一体性のものと見られる「ナモン」「ノモン」その他を、順次、記述していく。おのおのに属する派生形と考えられるものも、そこそこでとりあげていきたい。

もし、ナ行音文末詞にはじまる、「モン」関係の複合形→熟合形を、成形の可能性を見て列挙するならば、「ナモン」「ノモン」「ネモン」「ニモン」「ヌモン」があげられる。ついでには、ヤ行音関係の「エモン」などが考えられる。可能性はこうであるけれども、現実には、「ネモン」や「ニモン」「ヌモン」はおこなわれていない。しかし、「ネモン」系に属する「ネーン」「ネン」など、「ニモン」系に属する「ニーン」などは、現におこなわれている。

これらのことは、注目すべき事態であろう。成形の可能性と現実にものが採用されていることとは、へだたりがある。そこそこの方言世界の人たちの、言語生活上の好みとも言うもの、また、自然選択とも言うものが、こ

のへんにあるう。

五 「ナモシ」類

上項に言うもののうち、なかんずく勢力の大きいのは、「ナモン」類であろうか。「ナ」の流通の広大に即応して、「ナモン」の広分布が見られる。「ナモン」類の分布で、より注目すべきは、九州地方・四国地方・中部地方・東北地方である。

九州地方にあっては、とくに、肥筑地方が問題視される。

薩隅地方には、問題の事象がなさそうである。とはいいいながら、一つの問題事例があるのを、ここにとりあげておかななくてはならない。上村孝二氏編の『鹿児島県熊毛郡上屋久町宮野浦方言』（『方言録音シリーズ 7』）には、

………… warae ninjakana moN zjaqtananao

…………, すごく にぎやかな もの だったがね。

との文例が見られる。「nanao (がね)」とある「ナオ」は何であろう。外形上、「ナモン」の「ナモ」に近くはある。が、「ナ」文末詞に鹿児島県下特有の「オ」文末詞がそなわったものなのかもしれない。

肥後、熊本県下では、原田芳起氏『熊本方言の研究』に、

上向きには「なう」（「な申」し）の転「なもし」があつた。

との記事が見える。私の、阿蘇山南麓調査の経験では、老人のことは、

○フットル ナモン。

降ってますね。

○サミー ナモン。

さむいですね。

などの「ナモン」例を聞くことができた。“八十歳くらいの老人が言う。”とのことであった。“尊敬して言う。”のでもあるという。この地ではまた、「ナーアタモン。」とのよびかけことば・つけそえことばを聞くことができた。[……

…「ナーアタモシ。」などとも言われている。つよいよびかけとして、「ナーアタモ^ーシ。」というのがおこなわれてもいる。これらは、「ナ」と「モシ」とのあいだに、「アタ（あなた）」のおかれたものである。この形態が縮約されて、「ナータモシ」ともされている。（「アタモシ」というよびかけことばもおこなわれている。）

長崎県下は、わけでも、「ナモシ」ことばのよく見られる所である。まず、島原半島に、「ナシ」「ナーシ」がさかんである。「カナシ」「カナ^ーシ」などもおこなわれている。長崎市域を東に出はなれての一地、古賀村（島原半島からの関連も認められる地域）に、「ナモ」がおこなわれている。私は、林田明氏の教示により、氏とともに、ここに調査に出むいたことがある。土地の人々は、「古賀だけが「ナモ」を言っている。」と説明してくれた。事例は、

○モッテ イカ^ンナ ナモ。

持っていかなくちやねえ。

などである。「ナモ」と言うと、うやまうような気もち。」との説明があった。「男も女も全部つかう。年寄りがおもにつかう。中年の人でもやっぱりつかいナサル。」などともあった。私は、県北でも、車中、^{みくりや}御厨の人、老女の「ドッコモ ナモ。」（どこもねえ。）などというのを聞いたことがある。一方、福江島西南端部の調査のさいにも、「ナモ」を聞くことができた。

○ナン^ア ワカリマス カナモ。

なんの、わかりましようかねえ。（もう八十五歳になるから、何もわからぬと謙遜する表現である。）（老女→藤原）

などと言われている。福江島のうちには、なお、他地点にも、「ナモ」が見いだされるのではなからうか。ただし、私が、上の調査地点で土地の識者から受けた調査カード検閲の結果には、一般には「ナモ」はなしとの注記が見える。ところで、県北の壱岐島では、「ナモシ」「ナモ」がよくおこなわれているようである。私は、ここに、豊永徳氏の調査結果を引用してみたい。氏は、『ナモシ』は在・浦共に使われ、大体島全体で聞かれるように思う。在ではこれを

『ナーモン』と長く、^{あしべ}芦辺浦ではこれを必ず『ナモン』と短く言う。」と言われる。また、「『ナモン』の『シ』の落ちた形で『ナモ』がある。人によっては『ナム』と聞える事もある。このコトバは、在ではあまり聞かれない。専ら、芦辺浦の漁師、魚商人の間に聞かれるコトバである。」と言われる。

○ヨカッタ ナーモンシアナタ。

などの言いかたもおこなわれているらしい。対馬にも、「ナーモン」「ナムシ」などがおこなわれている。大浦政臣氏の「対馬北端方言集(二)」（『方言』第二卷第三号）には、

ナァモン、ナムシ 同意を求める時の詞
とある。

「佐賀県東松浦郡有浦村」（『全国方言資料』第6巻）には、

*m*チャットシテ イクトナーシ

ひょっとして 行くとねえ、

というのが見える。私はかつて唐津市で、唐津の「町のことば」（非城内弁）

○ホンナ コテ ナーモ。

そうですわねえ。

などというのを聞きとめている。“「ナーモ」がことばのあとにつく。男も言う。短く「ナーモ」とも言う。”などともあった。佐賀県北の、こういう分布は、長崎県本土北部の状況につながるものを示すか。（豊永徳氏も、かつて書信で、「北松地方<北松浦郡>に文末助詞「ナーモン」が聞かれる所を発見致しました。」と報じてくれている。）

さて、福岡県筑前西部ともなると、「ナーモン」ことばは、見いだしかねるようである。（——筑後には「ノモ」があるけれども。）ところで、筑前東部の嘉穂郡内には、「ナーシ」「ナン」がある。

○タイガイ モー ソゲー アロー ナーシ。

“たいがいもう、そのようにあるでしょうねえ。”（考女→老男）などと言われている。筑前東部には、なお他地にも、「ナン」などがあるか。

大分県下では、『大分県方言の旅』第1巻に、玖珠郡北山田村の「エズ シチナモ（こわくてねえ。）」が見える。豊後西北部でのことである。所によっては、このように、「ナモン」ことばが、孤立的に存在していてもいるのであろうか。大分県一般は、「ナモン」ことばの地ではなさそうである。その状況が、中国地方につづいている。

中国地方は、総体に、「ナモン」ことばを見せない所である。その、一種の空白状態が注目される。（岡山県内にいくらかの問題事実があるかもしれないけれども、それらは、今、言うにたりないことに思われる。）

なお、中国地方につづき、兵庫県下、京都府下のあたりも、ほぼ、問題事実の見いだされない地域である。

四国地方は、叙上の本土西部の状況とは反対に、「ナモン」ことばを見せている。とりわけ、愛媛県下と徳島県下とが、問題の地域である。

愛媛県下では、精粗は別として、ほぼ全般に、「ナモン」が見いだされるようである。ただし、「ナモン」ことばのさかんであったらしい中予方面でも、「ナモン」は老年層のていねい語になっており、県下一般に、「ナモン」ことばは、退潮いちじるしいものである。「ナモン」は、今日、見いだされるのが、おもには、中予・東予である。中南予ざかいとも言うべき地位にある海上の青島には、「アノ ナモン。」（あのねえ。）などの言いかたがあるという。（ただし、年寄りのことばとのよしである。）南予南部にも、「ナモン」が見いだされるもする。宇和島でも、“ちょいちょい言う。”よしである。

愛媛県南部、すなわち、南予には、「ナーン」「ナシ」のおこなわれることがいちじるしい。「ナーン」の一例は、

○アリヤイデ ナーン。

ありあわせでねえ。（謙遜のことば）

である。南予での「ナシ」と「ナーン」との出てきかたは、不規則的である。

随時に、「ナシ」となったり「ナーシ」となったりするようでもある。宇和島市で聞いた話しには、“ええ、チヨイチヨイ ナシ。”（ええ、ちょいちょいねえ。）というようなものがある。“「ナシ」を言いますね。”と私が言ったのに対する応答であった。南予に「ナンシ」もあるらしいが、定かではない。

愛媛県南部に隣る高知県西南部は、「ノーシ」のさかんな所である。伊予がわの「ナー」「ナーシ」が、土佐がわの「ノー」「ノーシ」と対立している。とはいいながら、高知県がわにも、「ナシ」「ナーシ」が見いだされる。『全国方言資料』第8巻の「高知県幡多郡大月町竜ヶ迫」の条には、

f………… チット シゴト シテ モライタイノジャガナーシ $\left(\begin{array}{l} \text{ハー} \\ m \\ \text{はあ。} \end{array} \right)$
 ちょっと 仕事をして もらいたいんですがねえ。
 オジサン キテ モラエマエカナーシ
 おじいさん 来て もらえないでしょうかねえ。

などが見いだされ、また、

f オットロシヤ ソリヤ ヨワッタナシー
 まあまあ、 それは お疲れでしたね。

などが見いだされる。（ちなみに、「オットロシヤ」は、愛媛県南部にもよく聞かれることばである。）高知県西南部に、あるいは、「ナンシ」もあるのか。県下の他地域では、通常のところ、「ナモシ」ことばがおこなわれていないようである。

徳島県下となって、「ナモシ」の存在は、かなりいちじるしい。県南に見いだされやすいが、県北にもあるようで、けっきょく、県下の諸地域に、「ナモシ」が見いだされることになる。が、今や、徳島県下でも、「ナモシ」ことばは、老女などの、ていねいことばになっているらしい。県南沿岸地方では、「ナモシ」ことばがよく聞かれる。「ラジューナ セイカツジャ ナモシ。」（不自由な生活ですねえ。）などとある。「行ってるんですか？」は、「イッキョンカ。」「イッキョン カナモシ。」などとあり、「イッキョン カナモ。」ともある。人は、「ナモ」のほうが多く聞かれるとも言っている。——ただし、老人

からのことである。南岸比和佐町で聞いた話しには、“[ナモン]を言う。敬語にちかい。女の人がとくにつかう。「ナモ」も言う。”というのがある。比和佐町から西の牟岐町で聞きとめた例には、

○サムイ ナモン。

さむいですね。(女ことば 男は「フー」)

がある。牟岐からさらに西に至れば、県西南隅域とも言える地域に、「ナモン」があつて、「ナオン」もある。

○ソーデス ナオン。

そうですねえ。

などと言われている。「ナオ」がいちじるしいが、これはおそらく、「ナオン」からのものであろう。「ソージャ ナオ。」(そうですねえ。)などと言われている。外来の私に対しても、“何々ニ ナルト ナオ。”(何々になりますとねえ。)などの言いかたがなされた。土地の女性教師は、“だいぶん、自分の目上の人でないで、「ナオ」はつかいませぬ。「ナオ」はとくべつていねいなんです。敬語法になります。「ナモン」と同質です。”と話してくれた。「ソーデス ナモ。」(そうですねえ。)とも言われている。心あらたまつた時など、しぜん、「ナモ」形が出るのか。いずれにもせよ、「ナオ」もよいことばであり、この特定形が、独自の表現効果をかもしている。徳島県南部の奥地にはいって調査した時には、そこで、私は、「ナモン」関係のものを聞くことができなかった。県下の北部に関しては、まず、「阿波美馬郡方言語彙」から、

ナモン(熟)「ナーモン」の略。

との記事を引用しておきたい。

香川県下に関しては、言うべきものがない。しかしながら、四国での、以上のような分布状況は、「ナモン」ことばが、本来は、四国地方にかなりよくおこなわれ得たものであることを示してはいないか。

近畿地方では、大阪府・和歌山県下・滋賀県下が、注目をさそう地域である。

滋賀県下の状況は、岐阜県下のそれに連続するものでもあるが、それにしても、近畿にあって、とくに、この地域と紀州方面その他とが対応して同一問題を見せているのは、興味ぶかいことである。——近畿の中心部を京阪神と見れば、上の両地域は、中心部の外がわにあって対応する。

大阪府下では、河内の中河内郡・南河内郡に、「ナーモン」「ナモン」などがある。泉州にも「ナーモン」があるか。南河内郡で私が聞き得たものには、

○ナ^ンナト ス^キナ モ^ノガ ナ^ケナ ナ^モン。

何なりとすぎなものがなくちゃねえ。 (老男→藤原)

などがある。私は、老男女から「ナモン」を聞いた。「ナーモン」と言われることもあった。なお、ここで、「ナーシ」も聞かれた。

和歌山県下になると、『全国方言資料』第4巻の「和歌山県日高郡竜神村大熊」の条に、

mオー マー ナンジャナーシ ンー ソコソコデナ ゲンキデ
ええ。まあ なんだねえ、 どうやらこうやらでね 元気で
ハタラキヨルヨー
働いているよ。

とある。『和歌山県方言』には、県南の「ナイモン(ねえ)」が見える。「奥熊野地方の言語」には、

七色村では「なもし」の形があるのは紀州では珍しい。

とある。県東南部の北隅に「ナモ」や「エモ」などのあることは、すでに指摘した。(p. 538)

奈良県下には、「ナモン」ことばが見えないようである。

三重県下となって、伊勢湾北部沿岸には、「ナモ」がある。愛知県下のそれに接続するものであろう。

さて、滋賀県下は、さきにもふれたが、湖東湖北が問題の地域である。「ナモン」が見いだされなくもないけれども、主としておこなわれているのは、「ナーシ」である。「ナシ」もある。

○アノ ナーシ。ナーシ ユー ワナー。

あのねえ。「ナーシ」って言うわねえ。

は、彦根ことばでの「ナーシ」例である。県東南の「ナーシ」例は、「ツヤ ナーシ。」（そうですねえ？）などである。『全国方言資料』第4巻の「滋賀県犬上郡多賀町萱原」の条には、

fイヤ タカイ チュコト アリヤシメンナ ミナ コンナモンデス
 いや 高いと いうことは ありませんよ。 みんな こんなものです
 ガナシ
 よ。

とある。

中部地方の北陸路となると、滋賀県下のもののつづきが、ほとんど見られない。

福井県下には、「ナモシ」ことばの言うべきものが、ほとんど見いだされないありさまである。

石川県下もまた、同様である。

富山県下となって、「ナモ」の使用が見いだされるようである。富山市西北郊で私が聞いた例には、

○ナカナカ ナモー。デキニケー。

なかなかねえ。できにくいですよ。 （老女）

などがある。人は、「年寄りが「ナモ」をユワレル。」とも、「「ナモ」はイミをツヨ スル コトバ。」とも言っていた。越中南境で聞いたものは、

○オカズワ ナモ。ワズカナ モンデスカラ。

おかずはねえ。わずかなものですから。

である。やはり、「ムカシノ ニンゲン」が「チョイチョイ」「ナモ」と言うらしい。愛知県下の刈谷町で聞いた話しには、「富山の東砺波郡では「ナモ」をつかっている。福野町や城端あたり。」というのがある。「ナモ」のさかんな愛

知県の人が、富山県下についてこう言っているのがおもしろい。『全国方言資料』第3巻の「富山県下新川郡入善町小摺戸」の条にも、

mウン マイニチ アッデ ナモ

うん、毎日 あれで ね、

というのが見える。「ね」とされている「ナモ」は、「ナモン」の「ナモ」であろうか。

新潟県下では、一般には、「ナモン」ことばがおこなわれていないであろう。ところで、『越佐方言集』には、

間投詞ノなあ、ない、ねい、のを、のし、ねし、なみハ雅言ノなむニ当ル。との記述が見える。この「なみ」が、もしも、福島県檜枝岐の「ネミ」に近いものであったら、新潟県下にも、特異な「ナモン」ことばが認められることになる。(「ネミ」は、「ネ」と、「もし」系の「モ」に近い「ミ」とからなるものではなからうか。「ナモ」「ナム」に、「ネミ」は近いものであろう。)水沢謙一氏の『昔あったてんがな』には、

「今日は天気がいいが、仲間がや、刈ろうねか。」

「そうだなも。」

などとあって、「ナモン」の「ナモ」らしいものが見える。押見虎三二氏の教示によれば、県南秋山郷では、

○オラ ジーチャンナ オルカナモ。 (老・女→訪問)

私共の家の ジーチャンは おるでしょうか。

などの言いかたがおこなわれているという。新潟県下に、もとは、「ナモン」ことばがかなりおこなわれてもいたのであろうか。

岐阜県下の美濃に、「ナモン」ことばがさかんである。まず、「ナモン」形がいくらかおこなわれている。「ナムン」もある。「エーライ ナムン。」(ほねがおれますねえ。)は、私が、美濃北部で聞いたものである。美濃に、わけてもさかんなのは、「ナモ」であろう。——これは、飛騨東南部にも見える。(「ナモ」の「ナモン」もある。)

○ヨー アンタ タスカッタ ナモ。

よくあなたは助かりましたねえ。(原爆から) (老女→藤原)
は、私が岐阜市内で聞いたものである。「ナモ」は、尾張地方にもさかんである。尾張と美濃と、いずれが本源の地なのであろうか。美濃に、「ナモ」からの「ナム」も、いくらか聞かれる。

愛知県下では、「ナモシ」が、尾張・三河の両方におこなわれている。尾張では、「ナモシ」と「エモシ」とがつれあっているようでもあるが、三河では、そのようなことはないか。三河北部での「ナモシ」例は、「ソーデ ナモシ。」(そうでねえ。)などである。渥美半島南岸の調査のさいには、人の、「子どものころ、年寄りが「ナモシ」をつかっていた。」と言うのが聞かれた。尾張には、「ナモシ」がそうとうに古くからおこなわれてきたのであろうか。(ところで、「モシナ」の言いかたは、今日の方言の中には、その地位をしめていない。)尾張に「ナモ」のさかんであることは、さきにふれた。名古屋弁のことは、「ナモ」ことばとも言われている。尾張地方に「ナモ」と「エモ」とが併存しており、この両者が、地方人の生活の中で、おれあいよく息づいている。芥子川律治氏の『なごやことば』には、

ナモは上町言葉で上品な言葉であり、エモは下町言葉でナモよりも下位の言葉であると意識されていたのである。

との記述が見える。いずれにしても、両者は、女性語としうるものであろう。しかし、今日はもはや、若い世代の人々には、これがあまりおこなわれていない。「ナモ」は尾張のものであって三河ではおこなわれていないと、人々に言われがちでもあるが、そうでもないらしい。一知友は、三河のいく地かに「ナモ」のあることを指摘している。(三河の「ナン」に、「ナモ」からのものがあるのかどうか。)三河北部での一例は、

○カシ クンナ。クンナ。クンナ ナモ。

菓子をちょうだい。ちょうだいよ。ちょうだいねえ。

(子ども→おとな)

である。尾張地方は、「ナモシ」をよりさかんにつかっていたので、いきおい、「ナモ」をよく用いるようにもなっているのか。名古屋弁の「ナモ」例をあげる。

○ヨー マンザイシガ マネスルガ ナモ。

よく漫才師がまねをしますがねえ。

尾張で、「ナーモ」も聞かれる。「ナモ」の複合形には、「ゾエナモ」「カナモ」「ワナモ」などがある。「ナム」も聞かれ、知多半島での例には、

○カナワンデ ナム。ソヤー。

こまるからねえ、それはもう。

などがある。（江端義夫氏教示）

長野県下が、岐阜・愛知の二県に関連して、「ナモン」ことばをよく見せている。問題になるのは、県南の地域である。ここの、木曾川流域と天竜川流域とに、問題の諸事象が見られる。岐阜県美濃での「ナモン」ことばの状況からすれば、木曾谷に見られる「ナモン」ことばは、いかにもと、首肯しやすいものである。天竜川流域のものは、どういう系脈のもとにあるのだろうか。私どもは、山峡のこの地帯にも「ナモン」ことばのかなりよく見られるのからして、三河地方にも「ナモン」ことばのかなりつよかったらしいことを想像したくなる。南信飯田市方面には、「ナモン」がある。『上伊那方言集』には、

名古屋から飯田にかけて盛に使用されている呼掛の「なむ」「なもし」「なーし」等は太田切川まで使用され、それ以北では使われません。

との記事が見える。天竜川域、伊那谷に、「ソーダ ナムシ。」「サヨーダ ナムシ。」などと、「ナムシ」がよくおこなわれているらしい。「ナムシナムシトイワマイ ナムシ。」との言いぐさもある。「ナンシ」もある。「ナンシ」は、県中部東方にも見えるようである。中部に「ナイシ」もあるらしい。「ナーシ」は、県南の伊那谷にも木曾谷にもよく見られるようである。『信州下伊那郡方言集』には、「あのナーシ、お父さんがナーシ。もう御飯にしてお呉れと言ったに」とある。佐伯隆治氏の「信州東築摩郡方言集」（『方言』第六卷第十一号）にも「ナーシ」が見える。「ナモン」ことばは、旧来、県下にかなり広くおこな

われたのか。「ナーシ」からの「ナシ」もあって、これは、木曾谷に見られる。島崎藤村の「幼き日」（『藤村全集』第五巻）にも、「祖母様、お前さまは眞実ほんたうの祖母様かなし……」とある。県南に「ナモ」があり、「ナム」がある。県北にも「ナモ」があるのか。飯田市で私が土地ことばを聞いた時には、「ソーダナム。」などの「ナム」が、じつにはっきりとした「ナム」[nam]であった。（「ナン」にはならなかった。）人は、「善光寺さんがあるからナムだ。」などと、笑いながら言っていた。伊那谷に「ナン」もおこなわれている。「ナムホイ」「ナンホイ」の言いかたも、この地方に見られる、一つの熟した文末詞である。

静岡県下・山梨県下となると、「ナモン」系文末詞について言うべきものが、もはや、見いだしかねるありさまである。これは、関東地方での、「ナモン」系文末詞の不毛によく関連するありさまと見られよう。

広く関東地方に、「ナモン」系文末詞が認められないのは、注目にあたいる。私見にすぎないけれども、「ナ」に「モン」を累加して、「ナーモン」などとよびかけることは、関東の気風に合わなかったのではないかと察せられる。短直な句法や、いわゆる歯ぎれのよさなどを特性とする方言風土には、「ナーモン」などは、悠長にすぎたのではないか。ある種の悠長さとやわらかみとを持った「ナーモン」（→ナモン）の類が、愛知県・長野県以西に、今日なお優勢であるのは、中部西半をふくめて国の西半地方が、そうしたものを好む方言風土をなしてきたとも言えるのであろうか。

愛知県地方、それに関連する長野県下の、連関西性は、かねて注視せられるところである。

尾張・美濃の地方に「ナモ」がさかんなのは、これまた連関西性の事態として、注目されるものである。関東に「ナモン」形が成立したとしたら、そこでも、略形「ナモ」が成立してもよかったようなものであるが、「ナモン」のない所に「ナモ」などのあるはずはない。「ナモ」は、連関西性の地域で、ものやわらかな情感のもとに創作されていると見ることができよう。

「ナモ」が、女性の文表現または女性的な文末表現によく用いられているのもってしても、関東に、——男性的な気分の表現の比較的良好認められる関東域に、「ナモン」などのおこなわれるべくもなかったことが想察されよう。

ところで、『全国方言辞典 補遺篇』には、「ナムシ」の条下に、「千葉県君津郡小櫃。」の指摘が見える。今、私は、これについては、問題を感じると述べるほかはない。君津郡南部での一週間調査では、私は、「ナモン」系の何ものも見いだすことができなかった。

つぎに、東北地方となると、ここは、関東地方とはおおいに異なって、「ナモン」系文末詞の諸相を見せている。そのさまは、盛大とも言える。ここはまた、関東域のとは相違した気風の地なのか。「ナモン」の形、「ナムシ」なども、以前にはおこなわれていたらしい。「モン」系と私が見る「シ」の、東北地方にさかんなのは、既述のとおりである。

まず、福島県下に、「ナモン」系文末詞がかなりつよい。といっても、存在する形は、「ナーン（ス）」「ナシ（ス）」などである。

「ナーン」と「ナース」とが両存するのではない。「ナシ」と「ナス」とが両存するのではない。聞こえてくるのは、「ナーン[i]」「ナース[ü]」、
「ナシ[i]」「ナス[ü]」である。が、存立しているのは、「なもし」系の
「なーし」「なし」にほかならない。

こういうことは、全東北地方について言うべきでもある。

県下で、「ナーン」が会津地方に見られる。「トス[ü] トット ナース[ü]。」
(年をとりますとねえ。 老女→藤原)は会津北部での一例である。「ナーン
(ス)」の発音者たちには、とかく「ナシ(ス)」も出がちである。いずれにしても、「ナモン」系の文末詞を発言していることには変わりがないとされよう。「ナンシ(ス)」が、また、会津地方によく聞かれる。「ナシ」のおこなわれることは、県下の中通り以西にいちじるしい。

○ヨグ[ü] キ[kçi] ラッタ ナシ[i]。

よくいらしたわね。

は、いわゆる会津弁での一例である。「ナシ」は、男女によく用いられている。福島市での一例は、「サム[ü]イ ナシ[i]。」である。ていねいなばあいに「シ」をつかうという。飯豊毅一氏の「福島県における文末助詞——岩瀬郡天栄村を中心として——」（『方言研究年報』第一巻）には、

○スナタ ドコサ イッテ キタ ナモ。

あなたどこに行ってきましたか。〈新鶴村——若松市近郊〉
というのが見える。この「ナモ」は、「ナモシ」系の「ナモ」であろうか。『福島県方言辞典』には、「ナモ」についての、

特別の終助詞であって敬語となるものである。丁寧に言ふ場合に用ゐる。

そうだなモ。(さうでございます)

との記事が見える。私は、会津西北部で、土地の人の記録の中から、「寒くなったナーモ(さむくなりましたナー)」などという文例を得た。上の『福島県方言辞典』には、

ナム[助]ね○「そうだなむ」(さうですね) 会北

というのも見える。かの檜枝岐には、「ネミ」のあることが報じられている。(p. 573)「ナモ」「ナム」「ネミ」は、一連のものではないか。「ナモ」に関しては、さきに、いくらか述べるところがあった。今、会津地方にも、「ナモ」類の見いだされるのは、興味ぶかいことである。「ナモシ」ことばは、旧時、ともかく、東北地方にも広く存在したのではなからうか。会津に「ナモ」「ナム」があって、しかもその南峡に、「ネ」系の変形「ネミ」も孤存するのは、いかにも旧時の、「ナモシ」ことばの広汎な流布を思わせるようである。

ところで、宮城県下は、今日、「ナモシ」系文末詞を、あまり見せていない。「ナシ(ス)」が、南域に見いだされる程度である。方言古文献には、「ナモシ」「ナムシ」「ナイシ」などの指摘が見える。以前は、当地方にも、「ナモシ」ことばがおこなわれていたというわけか。「モシ[i]ー。」(他家にはいっていく時のことば)など、「モシ」ことばが今日よくおこなわれているのからすれば、

当地方に、「ナーモン（→ナモン）」などの複合形をおこすことがあったとしても、しぜんだったとしなくてはなるまい。

西隣山形県下となると、ここでは、「ナモン」系文末詞のおこなわれることがさかんである。それはまさに、福島県西部の会津状況によく連続するものと見てよかろう。山形県下の東北部に、まず、「ナオンス」が見られる。新庄弁では、「サミ〔ī〕ー ナオンス〔ü〕。」（さむいですね。）、「アヅィ〔ī〕 ナオンス〔ü〕。」（暑いですね。）などがある。「ナオンス」は、主として目上に用い、およそ同等以上に用いるものであるという。（目下には「ナー」だ、とのことである。）「ナオンス」も、「ナモン」系の中のなにがしと見てよいものではなからうか。つぎに、「ナーン〔ī〕」があり、これは、主として県南におこなわれている。「ナンシ」もある。これも、県南のもののようにである。つぎには、「ナッシ」が、県南・県中部というあたりに、よくおこなわれている。方言文献には「ナッス」などともあるけれども、要は、「ナッシ〔ī〕」的なものであろう。「ナモン」ことばには相違あるまい。おなじく「ナモン」ことばとされる「ナシ」がまた、県南部位によくおこなわれている。（「ナシ」「ナス」の二形があるわけではない。）「ナッシ」と発言する人が、「ナシ」と発言してもいる。外村繁氏の「東北」には、「なんぼか寒かつたべなつす。このあたりは山と木ばかりで、何一つないんだもんなす。」の会話が見える。「ソーダ ナシ〔ī〕。」は、米沢弁での「ナシ」例である。

秋田県下・岩手県下の両者に、「ナモン」系文末詞のおこなわれることがいちじるしい。ところで、秋田県下では、主として「ナンシ」がおこなわれている。「ナモン」形も県下にあるかもしれないけれども、目下では、それは、言うにたりないものであろう。「ナモ」も、おこなわれていない。「ナーン」というのも、およそ微弱である。「ナシ」形も、よわいものなのであろう。「ナンシ」は全県下によく見られ、たとえば、「ソーダ ナンシ。」（そうですね。）と言えば、発言者は、「ナンシ」で、相手を“うやまっている”のだという。横手弁での一例は、

○キョーノ オテンキ[i] イカタ ナンス[ü]。

きょうのお天気はよかったですね。

である。「ナンス」は、「ナ」に「ス」のついたものに「ン」がはいったものではあるまい。「ナモン」からのものであろう。「ナンシ」と「ナーシ」とのいずれだろうか、と思われるようなものも、県下で聞かれる。「ナーシ」と聞こえたりするものもある。「ナンシ」が「ナシ」に近く聞こえることもある。方言文献にも、「ナシ」の記載が見えている。県中央東部、田沢湖に近い所の一中年男子は、調査の私に、“つつしんだ、うやまったようなことばづかいになれば、男でも「ナシ」をつかいますな。”と語ってくれた。そうではあるが、この地で私が書きとめた、「ニングラツ[ü] サングラツ[ü] コロダ ナシ[i]。」(二月三月ころですね。老男→藤原 焚き木つくりの話し)などに対して、土地の識者は、「ナシ」を「ナンシ」と訂正された。

岩手県下での「ナモン」ことばの様相は、比較的複雑である。東北地方であっても、本県下は、なかんずく、奥羽での「ナモン」ことばの歴史を、よく示してはいないか。まず、「ナモン」そのものがある。『岩手県釜石町方言誌』の八重樫真氏は、永田吉太郎氏に寄せられた私信(『方言資料抄 助詞篇』p. 423)の中で、

九十で没した祖母など「ナモン」「ナムシ」と云ふのを以てすれば 漱石の「坊ちやん」などに見える「ナモン」_{なあ申し}と本来同一のものかとも思はれますが

と述べていられる。私はかつて、花巻市で、土地人の、“いなかの大きい百姓家の品のよいおばあさん、うんと年寄りの人が、「アノ ナモン[i]。」(あのねえ。)[サム[ü]ー ナモス[ü]。」(さむいですね。)と言う。”との説明を受けた。『全国方言資料』第7巻の「岩手県九戸郡種市町中野」の条にも、

*m*トナリノ ババー ハエーナモン。

└ 隣の ばあさん、早いね。

*f*ハーイ

はい。

とある。県下の諸地に、「ナモン」または「ナムン」が残存しているらしい。方言文献にも、その記載がある。本県下で、そのような「ナモン」ことばの流れのもとに、「ナンシ」や「ナッシ」「ナン」が成立している。——「ナンシ」は、秋田県下のに類同するものである。本県下中部東寄りでの一例は、

○キョーワ バカニ〔i〕 アツ〔ü〕イ ナンス〔ü〕。

きょうはばかに暑いですね。

である。私の、一県北女性についての調査経験で言うならば、その人には、「ナッシ」と「ナン」がこもごも出た。「キョーワ カゼァ ツ〔ü〕ヨク〔ü〕ナリ〔i〕マス〔ü〕ベ カナッシ〔i〕。」（きょうは風がよくなりますますでしょうかねえ。）との言いかたがなされたかとおもうと、「キョーワ カゼァ ツ〔ü〕ヨク〔ü〕ナル〔ü〕ベ カナン〔i〕。」との言いかたがなされた。それはともかく、「ナッシ」「ナン」は、県下によくおこなわれている。県下に、「ナモ」もあるのか。『岩手方言の語彙』には、

ソウサナモ そうですね！

などの記事が見える。

さて、青森県下は、岩手県下の状況を受けてと言いたいほどに、東部の「南部」地方で、「ナッシ」「ナン」がよくおこなわれている。「ナッシ〔i〕」と「ナン〔i〕」とは、ほとんど紙一重である。「アッチ〔i〕 ナシ〔i〕。」（暑いね。）と言われている「ナン」が、私どもには、「ナッシ〔i〕」と、すこしくつまりぎみにも聞こえる。だいたい、「ナン」のおこなわれることがさかんである。「南部」は「ナン」と言われている。「ナン〔i〕ー」などの言いかたも、よく聞かれる。いずれにしても、「ナン」はよいことばであり、土地の人も、“自分の主人に「ナン」と言うのは敬語。”などと言っている。“ツー サナツー。”（そうですねえ。）というのは、中年男子が、私の“「そうさ。」との言いかたに、「ナツー」が加えられている。”と言ったのに答えてのことばである。本県下に「ナンシ」もある。が、これの存立も、やはり「南部」内にとどまっている。本県

内に、「ナモン」形もあるのか。小林好日氏の『東北の方言』には、北津軽の「ソーダナモン」が見える。私は、「南部」地方の南方で、「ナムシ」を聞いている。「ソーダ ナム[ü]シ[i]。」(そうですね。)などとある。人は、「年とった人が、今でもやっています。」と言う。「男も言った。」と言われているのは、かつてはということであろう。「ナムシ」から「ナーシ」へは、二・三步の距離である。私は、「ナムシ」の聞かれた所で、「ナーシ」も聞くことができた。

○サケッコ ナーシ[i]。

酒をね。(“酒を飲んでごはんをたべて長生きする。”という話してである。)

は、一老婆の、私に対する発言である。「ナモン」のほかに、「ナモ」も存在するのか。『東北の方言』には、北津軽の「ソダナモ」などが見える。

「ナモン」類での東北地方の状況は、ずいぶん複雑である。この全体状況は、要するに、古来、国の中央からはなれたこの地方にも、「ナモン」類の表現生活のよくおこなわれてきたことを示すものであろう。さきには、「モン」の「シ」と私が解したものの、東北地方での盛行が見られたが、今、私どもは、「モン」の「シ」も、あのように認められるはずだとも言ってよいと思う。

東北に「ナシ」「ナッシ」がよくおこなわれても、また、「ナンシ」もよくおこなわれても、「ナーシ」は、さほどにはおこなわれていないのは、一つのおもしろいことと見られる。「ナーシ」の発言には、どことなく悠長なところもあるか。こういうものは、東北に、さまでは根づかないのか。東北も、南奥内には、「ナーシ」が比較的よく認められる。

北海道地方については、私は、「ナモン」類に関して言うべきものを、今、ほとんど持たない。

北奥方言をひく南部北海道の地などには、「南部」系の「ナシ」などを存して

もいるか。

「ナモン」類のおこなわれることは、全国にわたってかなりいちじるしいものがある。事象を全然見せない中国地方というような例外もあるけれども。「ナモン」類の通用は、「ナ」の通用にも深くかかるものに相違あるまい。

「ナモン」類が、西は九州にもいくらか分布し、東は東北地方にも広くその分布が見られるのは、おそらく、かつて「ナモン」類が全国的によくおこなわれ得たことを示すものであろう。（ここに、中国地方は、本来、「ナ」文末詞よりも「ノ」文末詞をよくおこなうところである。——「ナモン」類は、存立のしようもなかったとされよう。）全国的分布の傾向にあって、「ナモン」類の中の「ナッ」「ナシ」ともなると、これらは、東北地方に多く、「ナモ」ともなると、これは、中部地方以西に多い。語感の相違を考えてみるのに、興味ぶかい分布がここにあると言えそうである。

「ナシ」などを「ナモン」系のもつと見ることは、ほぼゆるされるのではなからうか。私に比較的好くわかる、伊予の「ナモン」類で言えば、中予にさかんであった「ナモン」と、南予にさかんな「ナーン」とは、語感上でもよく接続している。「ナーン」地域での「ナシ」は、まったく、「ナーン」の縮約形のようなものである。

東北地方では、「ナ」に、単純な「シ」の累加されることがなくもなかったかもしれない。そうあっても、後接の「シ」は「モン」と解されるから、「ナシ」は、けっきょく、「ナモン」ことばである。

「ナモン」類の諸変相に、それごとの、表現価値の独自性があるか。あっても当然のことと解される。簡略形は、事前の形態よりも、表現心意のより簡素なものをあらわしがちでもあろう。それにしても、「ナモン」類に属するおのおのは、みな、中等度以上の品等の、特定の待遇気分をあらわすものに相違あるまい。便利な微妙要素が、しきりに製作されたものではある。

六 「ノモン」類

「ノモン」類の分布と勢力とは、「ナモン」類のそれに劣る。「ノ」文末詞の全国的な勢威は、「ナ」文末詞の全国的な勢威に、さほど多くは劣らないかのようであるのに、「ノモン」類と「ナモン」類とは上述の逕庭があるのは、どうしたことであろうか。察するのに——まったくの一策であるけれども、「モン」のていねいな言いかたは、「ナ」とはむすびあいがちであっても、やや素朴な「ノ」とは、むすびあいにくかったのではないか。「ノ」、つまり、「ノ」文末詞ゆえに、「ノモン」類は、さほど盛大とはなりにくかったことかと思われる。

とはいいいながら、「ノモン」類も、次項以後にとりあげる、「ネ」文末詞・「ニ」文末詞に関する「モン」ことばに比較するならば、いちだんとさかんな勢力者である。分布域は、やはり国の東西にわたる。九州は西北部にこれが認められ、中国には言うべきものがなくて、四国は、伊予・土佐にこれがそうとうに見られる。近畿南部も、「ノモン」類の問題地域をなしている。中部地方にまた注目すべき地域があり、関東にはほとんどものがなくて、東北地方にまた、いくらかの言うべきものがある。北海道については、言うべきものを、今、私は持たない。

九州では、主として福岡県筑後地方に、問題の事象が認められる。早く人々に知られているのは、柳川市などの「ノモ」ことばである。(p. 537) 柳川市内の、いわゆる城内ことばでの一例は、

○ナンテロ イーメシタ ノモー。

なんとやら言いましたねえ。 (初老女→夫)

である。ここでの「ノモ」ことばは、おもに女性に聞かれるのか。さて、「ノモン」の「ノモ」は、筑後内に、かなり広く見いだされるようである。筑後川河口の大野島でも、

○ホー ソギャン ノモ。

ほう、そうですか。 (老男→青女)

などの言いかたがおこなわれている。——ここでは、男女の別なく、中年以上に「ノモ」がおこなわれているという。「ノモ」は、外来者にも、礼を失しない程度で、したしみぶかく言うものようである。筑後南部でのものは、「暑カノモー。」などである。筑後に、「ノモー」の形もよく出るようである。「ノモ」もあり、また、「ノンモ」もあるらしい。

筑後内に「ノモン」もおこなわれていたのか。『浮羽方言』には、

のもし(なもし) ですねー。のー申す(古)

との記述が見える。

他方、「ノシ」の形も筑後内に見える。筑後南部には、「ノシヤ」もあるか。 (『福岡県内方言集』)

転じて、長崎県下に、いくらかの問題事象が認められるか。島原半島には「ノーン」がある。かつて、土地の人は私に、“目上には「ノーン」だ。”と語ってくれた。『島原半島方言集』には、「ノンシ」も見える。

林田明氏は、「長崎市方言の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)で、

○イキマスケン ノーン。

行きますからね。 (初老男→老男)

など、「ノーン」をとりあげていられる。——「『ノーン』は、稀に老人同志の会話にきかれる上品なものである。」という。愛宕八郎康隆氏によれば、長崎市での「ノーン」は、“いくらかよいことば”である。

旧年のこと、吉町義雄氏は、はがき通信によって、「対馬の厳原で瀧山政太郎翁の夫人がやはり『ノーン』を一々つけていたのが耳に残っています。」との事実を教示せられた。

長崎県下にも、いくらかの「ノシ」が見いだされる。『島原半島方言集』『嶋原半島方言の研究』『肥前千々石町方言誌』などに、その記事がある。知友の豊永徳氏も、“長崎に「ノシ」ことばがあったよし、聞きました。”と教えてく

れた。

ついでには四国地方が、注目の対象域になる。

まず、愛媛県下に、「ノモン」その他がさかんである。「ノモン」は、主として、県北域におこなわれている。——島嶼部にもである。おもしろいことに、島嶼部の大三島では、その、中国山陽系の方言状態の中で、純四国系とも言える「ノモン」が見られる。(もっとも今日は、これが、主としては古老界のものとなった。) 本土、伊予北部での「ノモン」例は、「アライ イモン。」(ありますよ。), 「マー エー ガノモン。」(まあいいじゃありませんか。——と言って客をひきとめる。) などである。「ノモン」のおこなわれる所では、これがたいてい、女ことばになっていようか。県本土北域で聞いた話しには、「「ノモン」と「ノーン」との両方を言う。「ノーン」のほうを多く言った。」というのがある。県中部(中予)の、松山市寄りの島にも「ノモン」があるか。

本県北域に、「ノーン」もかなりおこなわれている。——が、しだいにその勢力が落ちてきていよう。北部島嶼での一例は、

○ヨイヨ シズクケン ノーン。

たいへんなつきますからねえ。

(初老男→老男)

(「シズク」は、まだもの言えない、がんぜない子がなつくの言う。)

である。「ノーン」は、女ことばとはきめられないものである。のみならず、かつては男女の子どもたちも、「アア ノーン。」(あのね。) などと言ってあそんでいた。

愛媛県下のつぎには、高知県下が目される。本県下には、第一に、「ノーン」がさかんである。——「ノー」とともに「ノーン」がよくおこなわれている。といっても、今は、「ノーン」が、中年以上、主としては老年層のものになっているか。私がかつて、高知市西方の南岸地点を調査した時には、「ノー

ン」が女性の通用語であるのを見ることができた。それにしても、「ノーン」は、“すこしよく言うつもりで”つかわれている。県西部での「ノーン」例は、

○ドナ^ナタモ オイデマ^セザツロー ノーン。

どなたもおいでになりませんでしたでしょうねえ。

である。県東部での一例は、「オセワ^セジャッタ ノーン。」（おせわさんでしたねえ。）である。

「ノンシ」がまた、本県下に、かなり見わたされる。ことに県西南部には、これがよくおこなわれているか。このほうでは、「ノーン」と「ノンシ」とに、表現上、敬意度の差はないらしい。

愛媛県南には、「ノーン」や「ノンシ」がなくて、高知県下には、これらがよくおこなわれている。両方の差異は、何と見るべきか。愛媛県南に「ナーシ」「ナン」はさかんである。けっきょく、ナ行音文末詞のとりかたのちがいが、この結果になっているのにほかなるまい。愛媛県北域内に「ノーン」があつて、かつ、そこに隣る高知県内にも「ノーン」がさかんであるのは、双方、「ノ」をよく用いる地域ということか。

高知県下に、「ノッシ」もあるらしい。「ノシ」もある。しかし、これらの勢力は、よわいものようである。

本県下にまた、「ノーセ」の形が見いだされる。県下の中部東部に見いだされがちのものか。「ノーゼ」というのもあり、中部では、「アノ[↑] ノーゼ。」（あのねえ。）などの言いかたもおこなわれている。「ノーセ」は、「ノーン」に近いものであろうか。（——「ノーセ」の形になったのには、「ノーゼ」の影響があったかもしれない。）「ノーゼ」は、その成立に、どうどうしておくれの意の「どうどうシトーゼ。」（どうどうして オーゼ。）の「トーゼ」のさしひびきを受けたものであろうか。

香川県下には、言うべきものがない。徳島県内に、いくらかの問題事象があるのか。金沢治氏の『柊のうた』には、

海部も、土佐近くへなると「ノーン」となりますが、これは年のいった人

の中だけに使われている様です。

との記事が見える。同氏の『阿波言葉の辞典』には、

ノース〔感〕感動の文末助詞「ノ」に感動の助詞「シ」がついたもの、
 (祖谷)古

とある。——畏友井上一男氏の「徳島県祖谷方言語彙」(『方言』第六卷第七号)にも、「ノース」が見える。いずれも、土佐や伊予に関連する地域でのことである。

「ノ」文末詞のよわい香川県下・徳島県下では、「ノモン」類も一般的ではないというわけであろう。

近畿では、まず淡路島が目され、つぎに、広く、紀州方面が目される。これは、いかにもよく、四国地方の「ノモン」類の分布との関連を思わせて、興味が深い。——ことに、紀州での「ノシ」「ノース」「ノンシ」の分布と、四国南がわでの「ノース」「ノシ」「ノンシ」の分布とが、あい牽引しあうありさまであるのは、方言上の南海道系脈をよく思わしめるものとして注視される。

紀州の和歌山県下には、南北にわたって、「ノシ」のさかんな使用が認められる。——感声系の「ノ」文末詞の通用に並行するものであろう。県下も、南部のほうが、「ノシ」の、よりつよい慣用を見せているであろう。——感声系の「ノ」が、よりつよくおこなわれているからであろう。「ノシ」は、南北で、ていねいなことばとして用いられているようである。和歌山市域でも、「ワタジャ、ノシ。キョーワ、ノシ。」(わたしはねえ。きょうはねえ。)のように言われている。県中部奥での、「ソー、カノシ。」(そうですか。)は、一老女の、私への、ていねいなことばづかいであった。(“「ノシ」は他人さまに言う時。”などともあった。)紀州中部の一老男は、かつて私に、“大阪アタリノ、人ワ、キシュー、コトバワ、シマイニ、ノシ、ツクル、ユーテ、ワライマスラー。”(大阪あたりの人は、紀州ことばはおしまいに「ノシ」をつけるというて笑いますよ。)と語ってくれた。新宮で聞いた話しには、“ノシワ、トシヨリノ、ヒトワ

ツカウ フー。”（「ノシ」は年寄りの人はつかうねえ。）というのがある。「ノシヨ」との複合形もおこなわれている。

和歌山県下に、「ノシ」については「ノンシ」が、比較的よくおこなわれている。これは、中部以南によく見られるようである。串本では、「フンシ」が上品語であるという。同地での一例は、

○イツモ セワニ ナッテ フンシ。

いつもせわになりましてねえ。

である。

「ノージ」は、おなじく、中部以南に認められるようである。その勢力はよい。「ノシ」短呼のほうに、一般の嗜好があるというわけであろう。

県下に、「ニセ」などもあるらしい。

三重県下の西南部は、等しく紀州として、和歌山県南の状況によく通うものを見せている。第一には、「ノシ」のよくおこなわれているのが見られる。『「ノシ」コトバ』の通念が、この地域の人にありもする。和歌山県新宮市から東北にはいった三重県山地での問い聞きのさいは、人が、“「ノシ」はていねいなことば。いんぎんなことば。”“「ノシ」は四十以上の人がつかう。女ことば。”と言っていた。

○ジャーエ、エライ コッチャ フシ。

“そうかえ”，たいへんなことですねえ。（人の死去に言う。）

は、「ノシ」ことばの一例である。三重県紀州の西半部内では、男の人も「ノシ」をつかっている。この地方に、「ノシェ」もある。——「ノシ」に関係の深いものであろう。ちなみに、「ニシェ」もある。

この地方に、「ノージ」もいくらか聞かれる。「ヨー フル コツタル ノージ。」（よく降ることですねえ。老女→中男先生）などとある。

「ノシ」は、志摩半島にもあるらしい。私が半島東岸を調査した時には、「ノシ」は前代のことばとあった。

三重県紀州分には、「ノイシ」もある。（「ノイセ」もあるか。）「アン アイ

シ。」(あのねえ。)などとある。——志摩半島にも「ノイン」があるのか。

三重県下では、ともかくも、南域が問題の地域である。ここに、「ノンシ」なども見いだされるのかもしれない。

紀州地方に関連して、奈良県南隅が、やはり、「ノシ」などを見せている。

近畿の他地方は「ノモン」類空白であって、中部地方が、「ノモン」類を見せる。

愛知県下には問題の事象がかなり多彩であって、この状況は、近畿南部とこの方面との底脈をうきぼりにするかのようである。

まず、「ノモン」形がある。私は、渥美半島でこれを聞いた。「ソーダ ノモン。」(そうですねえ。)などと言っている。調査時、すでに、“だんだんなくなっていくことば。”と言う人があった。おばあさんたちが「ノモン」をつかうともあった。三河に「ノーン」があり、「ノシ」がある。三河北部には、「フーシ ノーシト イワマイ ノーシ。マタマタ ノーシト ユッタ カノーシ。」(「ノーシノーシ」と言うまいよねえ。またまた「ノーシ」と言ったかねえ。)との言いぐさもある。三河に「ノシン」もある。さてまた、「ノモ」も愛知県下であり、佐藤虎男氏は、尾張の西北部で、

○イチノミヤニ オラレル ワノモ。

一宮にいられるワノモ。(老男→佐藤氏)

というのを聞いていられる。

愛知県下につづいて、岐阜県下美濃にも、「ノーシ」があり「ノシ」がある。飛騨にも「ノシ」があるか。土田吉左衛門氏は、「飛騨白川の方言」(『NHK 国語講座』昭和31年12・1月)で、

「おらこそ、おおぞさでござってのし」(私こそ却って大変頂戴致しましてどうも……)

との言いかたをあげていられる。美濃には、「ノモ」もある。「キョービデラ ノモ。」(今日ではねえ。), これは、老男の、私に対することばである。美濃に、

「ノンシ」もあるのか。

静岡県下は、もはや、「ノモン」類の現用を見せない所かとも察せられるが、『静岡県方言辞典』には、「さうだノーシン。」「あなたよう来たのんし。」などが見える。

長野県下は、愛知・岐阜の二県につづいてということでもあろうか、木曾に「ノーシ」があるという。「ソーダ プーシ。」は、“おとなしいことば”とのことである。青木千代吉氏の「長野」（『方言の旅』）には、県最北の下水内郡下のことば、「でえぶ涼しくなって来たのし。」などというのが見える。

新潟県下が、注目される地域である。第一には、長野県北の「ノン」存立につらなるがごとく、越後南辺の秋山郷が「ノッシ」を示す。押見虎三二氏の調査例は、

○イマカラ カンゲールト ヨメノヨード ノッシ。

今から（あの時のことを）考えてみると夢のようだね。

（老女→押見氏）

などである。明らかに「ノッシ」と言っているようであり、押見氏は、「ソレカラ ノッシー。」というのを、私に口授された。越後に、「ノン」が広くおこなわれている。（北に寄るほど、「ノン」は、よりよく聞かれるのか。）「ノシ」表現の品位は、さほど高いものではなさそうである。県中部方面には、「ノンシ」もさかんのようである。「越後勢ノシノンシと押し出し」との川柳もあるという。

新潟県下を除く北陸では、「ノモン」類が、通常、おこなわれていないのではないか。ところで、能登半島西北岸での、私の一つの聞きとりに、そのへんの一・二地でおこなわれるという、「コリャ ダレノガイノーシ。」（これはだれのかねえ。）がある。どういう「ノーシ」なのであろうか。

中部地方内での、「ノモン」類の分布には、——近畿での分布とも思いあわされて、深く考えさせられるものがある。近畿中部以北に見られない「ノモン」類は、北陸の、近畿に関連の深い地域にも、見られないことになっている

のか。

中部地方の静岡県・山梨県などの状況については、関東地方の、「ノモン」類無縁のさまが見わたされる。

ただし、房総半島南部に関しては、館山育男氏の「房州言葉で作られた歌」（『方言』第二巻第九号）に、

「のんし」或は numji は山間地方の老人が稀に使ふだけで現今のはお又はねえと云つてゐます。

この記事が見える。ここでの、「ノンシ」などの孤存は、全国での「ノモン」類の分布のもとにあって、どういうことを意味するのであろうか。

群馬県下に、「ノームシ」が存在するかのように教示してくれた人があるが、ことはまったく定かでない。

東北地方もまた、言うべきことのすくない地域である。

福島県下には、会津地方に、「ノシ」がありもするのか。

山形県下の『米沢言音考』には、「此ノシヲ、又、のし、のんし、(のんす)」とのことばが見える。(ここに、「し」本位の説明がなされているのからすれば、「のし」にしても、著者は、「の+し」と考えているのかと、察せられもする。)山形県の庄内弁には、感声系「ノ」文末詞のおこなわれることがいちじるしくて、かつ、「ノシ」のおこなわれることがいちじるしい。「サンビ[i]ー フシ[i]。」(さむいですね。)など。「ノッシ」も聞かれる。「サンビ[i]ー ヒ[i]ダ フッシ[i]。」(さむい日ですねえ。)は、老女の一発言例である。

東北地方も、山形県下と福島県西部とが問題視されるとすれば、これは、新潟県下の既述状況につながるものかとも解されて、興味が深い。

宮城県下には、『仙台の方言』の、

「なにあっけらぼんとしてんのっしゃ、あつことでもありすか」(何をぼんやりしてゐるのさ、心配事でもありますか)

など、「ノッシャ」が聞かれるが、これは、「ノモン」類の「ノシ」に近いものではない。助詞系の転成文末詞「ノ」に、「モン」の「シ」がつけ加えられたものが、「ア」音をともなって、「ノッシャ」になっている。

岩手・秋田の二県以北となると、北海道にもわたって、「ノモン」類は見いだされないようである。

岩手県北などに、問題事例があるかとも思われるが、おそらくは、別のものである。

「ノーン」以降「ノシ」までの諸形をとりまとめて観察すれば、これらもやはり、国の東西に分布していると言える。しかし、西に、より優勢なものがあることは、上述のとおりである。「ノモン」となると、これは、西系の分布になっている。「ノモ」というのも、だいたいそうである。

七 <ネモシ>類

「ナモン」「ノモン」に対しては、「ネモン」もできていてよさそうである。しかし、じっさいには、「ネモン」が見あたらない。「ネ」そのものの分布は広いのに、「ネモン」形の存立するものが見あたらないのは、どういうことであろうか。「ネ」の、[e]母音を持ったものに対しては、「モン」は、契合していきにくかったのかもしれない。

「ネモン」は見られないけれども、「ネーン」「ネシ」など、「ナーシ」「ナシ」・「ノーン」「ノシ」などに相当するものは、諸方言上に見いだされる。「ネシ」の中には、「ネ」に別箇の「シ」のむすびあわされたものもあるかもしれないけれども（「ネーン」にも、「ネー」に「シ」のむすびあわされたものがあるかもしれないけれども）、できあがった「ネーン」や「ネシ」は、まさに、「ネモン」系のものと言ってもよいものである。

この類のものは、「ナモン」系・「ノモン」系のさかんな四国・近畿・中部地方西南部にはほとんど見いだされなくて、おもに東北地方に見いだされる。東

北では、「ネ」にも「シ」が自由につけられて、このような結果が生じてもいるのであろうか。

青森県下は、なかんづく、「ネシ[i]」「ネーシ[i]」のさかんな所であろうか。津軽には、「ネシ[i]」のおこなわれることが、とりわけさかんである。——「南部」地方にも、「ネシ[i]」があるけれども。青森県下での「ネシ[i]」は、いわば、よいことばである。弘前弁での、「イ[i]ズ[ü] ミ[i] デモ イ[i] ネシ[i]ー。」(いつ見てもいいですね。)など、じつにきれいなことばである。津軽での「ネシ[i]ー」といったような言いかたに接していると、「ネシ」は、「ネ」に「シ」をつけたものかとも思われる。「ソндаデバ ネーシ[i]ー。」(“なるほどそうだ。”→“相手の話しに同調している。”)などというのでは、なおもって、「ネ」+「シ」がよくうかがわれようか。それにしても、「ネシ」を「ネモシ」系の一態と見ることには、難がなかろう。『青森県方言集』には、「ネシ」についての、「ね、の意。ナスと同意<南部地方>」との記述が見られる。青森県下に、「ネシ」の変形「ネシ[i]ャ」も、よく聞かれる。「ネシ」に関する複合形「カネシ」などもある。

秋田県下にも、「ネシ[i]」がかなりよくおこなわれており、『秋田方言』には、「ねあす」の形も見える。「ネーシ」もあって、男鹿半島では、かつて、「キューワ サンビ[i]ー ネーシ[i]。」(きょうはさむいですね。)などのあいさつことばを聞くことができた。

岩手県下には、「ネンシ[i]」「ネシ[i]」,「ネァシ[i]」「ネァンシ[i]」「ネァーンシ[i]」などがある。県下の方言文献には、「ネンス」「ネス」,「ネァス」「ネァンス」「ネァース」の形が見られる。「ネス」などが、やはりよいことばとして用いられており、「長いあいだお会いしませんでした ネス。」などの言いかたが、よそものの私どもにも、ここちよくひびく。県東岸宮古市のことばを聞いた時には、「ハヤエイ ネンス[ü]。」(早いですね。)などが聞かれた。県東南隅のことばを聞いた時には、「ネァンス[ü]」「ネァス[ü]」がよく聞かれた。

宮城県下にも「ネシ〔i〕」がよく聞かれ、県下に、「ネンス〔ü〕」「ネェンス〔ü〕」もよく聞かれる。仙台弁に「ネス〔ü〕」がいちじるしく、「ハエー モンデ ガス〔ü〕 オンネス〔ü〕。」（早いものですよ。）などが聞かれる。「カネス〔ü〕」などの複合形もある。県下に、「ネーン〔i〕」の形も、かなり見られるのか。人は、「ネーン」を、“多少敬意をこめて”言うものだともしている。

山形県下には、「ネシ」の見られることがすくないか。これに反して、新潟県越後北域には、「ネシ〔i〕」がさかんである。

奥羽の福島県下には、「ネンシ」「ネシ」がいくらか見いだされる。西南山峡の檜枝岐には「ネミ」がある。菅野宏氏は「檜枝岐の方言」（『方言と文化』）で、

「いい天気ですね」は「イエイソラダネミ」というすてきなあいさつであります。

とするしてられる。さきに、私は、新潟県の『越佐方言集』に、「ナモン」系と考えられる「ナミ」を見た。「ナミ」と、ここの「ネミ」とは、形態上、比較されてよいものではないか。（p. 551）

関東地方の茨城県下にも、いくらか「ネシ」が見いだされるか。これより南方となると、もはや「ネシ」などが見られない。（中部地方で、新潟県下のいくらかだけが、東北地方につながる。）

北海道地方のうちには、「ネス」「ネッス」「ネース」が見いだされる。石垣福雄氏の「北海道 檜山郡江差町」（『日本方言の記述的研究』）には、「ネス、ネッス」の指摘があり、

共通語の「ネ」に当たるものであるが、方言の「ノ」、「ナ」などよりもていねいで、種類の助動詞の下について、親愛の情を添える。適用範囲は広くない。老婆くらいしか使わない。

との記述が見える。『全国方言資料』第1巻の「北海道美唄市西美唄山形」の条には、

f ホーシテ ホダナ ネース

そして そうだ ねえ

などである。

以上のほかに、見いだしうるものをひろうならば、一つに、長野県南に「ネンシ」があるらしい。二つに、橘正一氏は、「ナモシの分布」(『方言』第五卷第二号)で、遠州新居町の「ネーシ」、三河宝飯郡の「ネンシ」を指摘してられる。三つに、滋賀県下には、「ネーシ」「ネン」などが見いだされるのか。四つに、『対馬南部方言集』には、「あんネエン」「さうしてネエン」などが見える。「ネエン」は、「ねえ」のすこしていねいなものであるという。山本俊治氏教示の、「対馬仁田村」での実例は、「ソーデ ネン。」などである。ここに、「ネーシ」もあるという。

八 <ニモシ>類

島原半島内に、「ニーシ」がよくおこなわれている。「ニシ」もある。『嶋原半嶋方言の研究』『島原半島方言集』に、「ニーシ」「ニシ」の実例が見える。「よく出来たニーシ」などとあるのからすれば、ここに、「ニモシ」相当の「ニーシ」が認められるとされよう。ここでの「ニシ」は、「ニーシ」からきたものか。

熊野路に「ニシ」があり、「ニセ(「ニシエ」も)」がある。これらは、すぐに「ニモシ」を思わせはしないけれども、感声系の「ニ」文末詞のはたらくものには相違なさそうである。

「ネモン」のばあい似て、「ニモシ」も、このままの形が、「ナモン」などと同様にできておこなわれることはなかつたらしいが(今は、そう想像するよりほかはないありさまであるが)、「ニモシ」系とされる形、あるいはそれに関係のある形は、以上のように、感声系「ニ」文末詞の分布域内に認められる。

東北、青森県下にあると言われる「ニス」は、どういうものなのであろうか。——はたして、感声系「ニ」文末詞に関するものなのであろうか。『青森県方言集』には、「アノニス」についての、

「アノネ」の意<南部地方>

との説明が見える。此島正年氏も、『方言の旅』の「青森」の条で、「下北はニシを用います。」と述べていられる。『青森県五戸語彙』にも、「野辺地ではニスを使うという。」との記事が見える。私自身も、じっさい、青森県東部の、いわゆる「南部」の地方を旅行して、たとえば野辺地などで、「=[i]シ[i]」のようなものを聞いている。このようではあるが、私は、以上の「ニシ」「ニス」の聞こえが、純粋の感声系「ニ」文末詞のはたらくものとは、いまだ断じ得ない。当地方で、「ニス」と「ネス」との境は、そんなに明瞭ではない。

青森県下に、本来的な「ニシ」があったとする。そのばあいには、「ニ」+「シ」が考えられやすいのではないか。——「ニモシ」的なものは、なんら聞かれないからである。「シ」がつけ加えられる「ニ」があったとするならば、当地方でのその「ニ」は、どういう「ニ」であらうか。感声系の「ニ」文末詞が、独自におこなわれることは、当地方に、どうもなさそうである。

九 <ヌモシ>類

さきの、橘正一氏の「ナモシの分布」には、

ヌーンシ 安房山間部（老）

ヌス 青森ヶ下北グ

の記述が見える。（安房山間部のものについては、さきに、p. 570 でとりあげた。）

「ヌモシ」類としうる「ヌス」や「ヌンシ」が、じっさいに成立したのであろうか。「ヌ〜」の形は、なんらか、他のものからの転形などではなからうか。

感声系の「ヌ」文末詞存立の、一般的困難・消極については、多く言う必要

がなかるう。「ヌ」文末詞のほとんどおこなわれないうところに、「シ（もし）」文末詞の結合せしめられる道理も、見いだしがたいことである。

十 「エモシ」類

「エモシ」類をとりたててゐることは、現に可能である。第一に、愛知県下に、「エモシ」がある。尾張西部で私が聞いた一例は、「ソレデ^レ エモシ^ー。」（それでね。）である。——これは、初老男の発言であつた。当地では、“ていねいには、「ナモン」とか「エモシ」とか言う。”とのことであつた。第二に、岐阜県下の『岐阜県方言集成』にも、岐阜県美濃西北の本巣郡の「えもし」が見える。「さうかえもし。さうですか。」とある。橋正一氏の、さきの「ナモシの分布」には、「エモシは三河宝飯郡にある。『そうかエモシ』『おいでますかエモシ』などと使ふ。これが尾張まで来ると、尻が切れて、エモとなる。」との記述が見える。

『岐阜県方言集成』には、美濃北部の郡上郡の「えむし」も見られる。「ごめんしとくれえむし〔句〕ごめん下さいませ。」とある。

尾張には、略形「エモ」のおこなわれることがさかんである。「モン」の「モ」がよくおこなわれるのととも、「エモ」がよくおこなわれている。主として、女性の世界にあつてのことであろう、名古屋での一例は、

○アノ エモ。ウチノ ナコガ エモ。オラン キャーモ。

あのねえ。うちの花子がねえ。いませんかね？

である。「モン」の「モ」が単純によくおこなわれるくらいであるならば、「エモシ」も、「エモ」とされて当然であろう。「モ」「エモ」二者がつれあつて、尾張弁の一情調をささえていようか。

尾張西部での一婦人は、「標準語」ということもよく知っており、鄭重な表現法にも慣熟していたが、ものをていねいに言おうとすればするほど、「エモ」をよく言った。——「エモ」は、待遇表現法の頂点におかれてい

るかのようであった。

美濃にも、「エモ」がよくおこなわれている。長野県南にも「エモ」がある。和歌山県下の熊野路のとび地に「エモ」があることは、村内英一氏によって報せられた。氏の「文末助動詞のニュアンス」（『言語生活』第十七号）には、「ヨー マクトリ ヤーンタ エモ。（よく来て下さいましたね。相手への親愛と敬意）」が見える。この方面での「エモ」の存在は、尾張や美濃での「エモ」成立が、けっして特域的なものではないことを思わせよう。

さて、東北の『秋田方言』には、「えず」が見える。

えずは対話の時々々な言葉として婦女子の間によく用ひられる。「ね」に似てる。

などとある。（「あのえず。」は、「あのね。」であるという。）「えず」は、「え」に「ず」を加えたものか。『秋田方言』には、「えせあ」などの形も見える。

小林存氏の「越後方言の結語法概観」（『国語研究』第十卷第七号）には、

エシ、中蒲原郡一部には

お前も行くエシ

といふ言葉がある。「行く意志なのか」といふ風の定まつた範囲内の疑問辞である。そして愈々行くと答へられると

ソーカエシ

といふ、「さうかのー」といふ言葉がカエシなのである。蒲原から岩船郡ではこのカエシがカンとなつてゐる。

との記述が見える。「エ」助詞に「シ」の加えられた「エシ」が見られようか。

「エ」助詞に「シ」（もし）の加えられたものも、形態上、「エモシ」系とされもする。

※ ※ ※ ※ ※

「ナモシ」類以下の諸態は、方言上の文末詞として、一種異風のものとする

ことができよう。まことに、独特の形態である。

これらが、過去のどの時期にか、かなりつよいきおいを見せて、広く全国的によく生きたことは、日本語の文末詞の歴史的な発展として、はなはだ注目すべきものである。

ただし、国土上に、たとえば、中国地方・近畿西北地方・九州地方南部東部など、ほとんどそれらの分布を見せなかつたらしい地域があるのは、別に問題としなくてはならないことである。

それはそれとして、「ナモン」類以下のものの今後の存立は、どうなっていくものであるか。「モン」単独のよびかけことばは、今後もしきりに利用されようとも、「ナモン」「ノモン」などという形態は、方言上の、いわば古典的なものとして、いよいよ置き去られていくのではなかろうか。それにしても、「ナモン」系の「ナン」,「ネモン」系の「ネシ」など、独特の短形をなすものは、方言上に、今後もお、つよいきおいを發揮していくのではないか。濃尾の「エモ」にしてもそうである。

第三節 諸他の感動詞系文末詞

一 「オイ」の属

相手をよぶことば、「オイ。」という文表現は、感動詞「オイ」一語からなりたっている。「オイ」感動詞は、このように、訴えることのもっとも直接的な文表現に利用されがちである。——「モン」感動詞のばあいには似ている。「モン」が文末詞化しているように、感動詞「オイ」もまた、文末詞化している。佐伯隆治氏の「信州北部方言語法（上）」には、

アア困ッチャッタオイ（あゝ困つたなあ）

重テイヤオイ（重たいなあ）

のような文例が見える。「オイ」はここに、文末詞然としてはいないか。『信州

佐久地方方言集』にも、

ソウカオイ（句） さうですか。

の記事が見える。「オイ」の訴えは、しぜんに「オエ」などとも言われているか。

山口幸洋氏の『静岡県浜名郡新居町新居方言（2）』には、

ワ「ー ソイジャ」ー ヤッ「テミンサ」イオ」イ

わあ、それではやってみなさいよ（テープ再生を）

との文表現が見える。

『全国方言資料』第2巻の「埼玉県秩父郡両神村」の条には、

fシカタガ ネーカラナー ヤッダヨーオイ

仕方が ありませんからねえ やるんですよ、ねえ。

というのがある。

『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

fホト カタンダオイ

奉灯を かつぎましたよ。

というのが見える。

私が、秋田県男鹿半島で聞いた、「ドーカ タノムデ オイ。」（どうかたのむよ。）など、「オイ」が、第二文としてさっそくにつけ加えられたものようでもあるけれども、ものは、たしかに、特定文末部であった。——「オイ」が、調子ことばとも言えるものであった。「オイ」感動詞には、このように、文末詞化の一般的可能性が認められるようである。相手によびかけるものとしての効果の大きは、言うまでもない。

「なあモン」というのとおなじように、「なあオイ」が言われてもいよう。

『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡善導寺町」の条には、

fコンダ ニジゲデ ナオイン マタンタビャ オリゲー

「今度は あなたのうちに ね、 その次の機会には おれのうちに

コイ

来い」

とある。「ナオイ」も、ここにとりあげてみてよいものか。

ちなみに、与論島には、

wuđui fi[ambo: mi:đui jitja: jai. (中女→同)

＜踊り 為なければ 雌鳥 為ては ヤイ。＞

踊りができなきゃ、めん鳥をすればいいのよね。

などの言いかたがあるという。(町博光氏「与論島朝戸方言の文末詞」)氏は、[jai]を「おい」としてられる。

二 「ヨイ」の属

よびかけことばに、「ヨイ。」の文表現がある。「ヨー。」とのよびかけ文表現は、男性たちに、しばしばおこなわれがちのものである。

私の、故郷(瀬戸内海大三島)での生活語経験には、つぎのことがある。男青年たちには、成人男性たちと同様、「ヨイ。」とよびかける習慣があったが、私ども、男児にはなかった。しかし、「だれそれさん ヨイ。」と、人名をあげて相手によびかける習慣は、私ども男児につよかった。男青年以上のおとなたちにも、むろん、「だれそれさん ヨイ。」の習慣があった。私の言語心理では、自分らのつかった「ヨイ」が、よびかけ用の特別な文末詞である。

大三島の所属する愛媛県の、本土北域などには、

○サヂャ ナイ カヨイ。

さむいじゃないかきみ。(中男間)

などの言いかたがある。

『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県薩摩郡鹿島村鹿島」の条には、

mシオ ヨーイ → fオー

シオ よ。 はい。

との問答が見える。

三 「ホイ」の属

「ホイ。」と、男性が威勢よく応諾の返事をしたりすることがある。「ホイ」感動詞が、さっそくに、特別な文表現にしたてられている。

愛知県三河北部には、女性のよびかけことば「ホイ。」があるという。(かつてこれを聞いた時は、“子どものよびかけことばは「アィ。」で、大きくなると「オイ。」だ。”ともあった。)

三重県尾鷲で聞いたことばには、「見なさいな。」の意の「ミヨ ホイナー。」がある。「ナ」がはいると、ていねいになるという。「ナ」の前の「ホイ」は、「ほれ」的なものか。この地で、「行くな。」と禁止する時にも「イクナ ホイナー。」と言っている。

全国で、「ホイ」の比較的よく聞かれる地域は、三河から信州・遠江にかけてではなかろうか。渥美半島で私が聞いたことばには、「ハズカシーデ アンホイ。」(はずかしいからねえ。)などがある。——「アンホイ。キョーワ アツイ アン。」(ねえ。きょうは暑いね。)などとも言われている。信州南部には、「ナムホイ」「ナンホイ」が聞かれる。飯田方面の、むかしのよびかけことばには、「ムツマー ホーイ。」(むつまあ<人名>よお。)というようなのがあったよしである。

新潟県の『岩船地方昔話集』(『伝承文芸』第三号)には、「それだどもほいす。」などの言いかたが見える。

私がかつて、滋賀県米原での調査にしたがった時は、

○コンバンワ ドッコイモ イカン ホン。

今晚はどこへも行かないよ。

などの言いかたが聞かれた。「ホン」は、“先方に得心させるのだ。”とのことであつた。なお、「ホン」をつけると、言いまわしとしての上品さは失われるという。彦根などでも、「ホン」が聞かれるようである。こういう「ホン」は、「ホイ」とはちがう。(p.499)

『山形県方言集』には、「あの子供はきかねんだつてほい。(あの子供はきかないと云ふ事だよ。)」と見える。『仙台の方言』にも、

「おごさま, わこさま, あそばされほい」(女兒の簡単なあそびの歌)との記事がある。

林田明氏の教示によれば、長崎県五島列島内には、一般男子の、「えんりょせんでんよかひゃん。」(“ご遠慮なさるな。”)との言いかたがあるという。今、にわかには解しかねる「ヒャン」であるけれども、ここにかかげておく。

さきの町氏の論文には、「えい」というのもあるので、参考までに、一文例をここにかかげておく。

○Fumanai ?ukan ?ei. (初老女→中女)

<ここに 置かむ エイ。>

ここに置こうよ。

四 「コラ」の属

「オイ。」などのよびかけことばは、用いられる感動詞が、「イ」音におわるものである。「コラ。」などのよびかけことばは、「ラ」音におわる感動詞が採用されている。この方面の感動詞もまた、文末詞化している。

九州南部の種子島には、

○コンニャ ユキチャロー ナーコラー。

今夜は雪だろうなあ。

などの言いかたがおこなわれている。——「コラー」が「ナー」に直続しており、その間に、休止などはない。「コラー」は「コレは」であろうけれども、今は、それが、文末詞化していると見ることができよう。種子島には、「コリョー ミレ コラー。」とともに、「ソリョー ミレ ソラー。」「アリョー ミレ アラ。」などの言いかたも、おこなわれているという。「コラー」などが、文の部分である。(添加の第二センテンスではない。)鹿児島県下には、広く、文末詞ふうの「コラ」が見られる。

讃岐には、「あのね。」の意の、「アノ ノコラ。」があるという。

『仙台の方言』には、

「おらえのわらしこ、まだ〜そべこでわかりいんこら」（うちの子は未だ甘へつ子で仕様がないうよ）

などの言いかたが見える。

五 「ソラ」の属

「コレ！」や「ソレ！」のよびかけことばが「コラ！」や「ソラ！」の形になると、これらはまったく、特定の文形になってくる。——品詞的には、まさに感動詞的である。

「ソラ！」の感じのものが特定文末部にはたらいており、そこに、感動詞系（文系）の「ソラ」文末詞が成立している。薩隅地方に、こうした「ソラ」が認められる。薩摩南部での一例は、

○タマス[ü]イレッ ベンキョ セント ソラ。

精を出して勉強しないとね。

である。土地の人は、「ドカ タノン 下ソラ。」（どうかたのむよね。）など「ソラ」をつけると、おしつける意になるという。——“どうでもたのむ意。”などとも言われている。大隅半島東岸での一例は、「ケマガッタ ガソラ。」（曲がったじゃないのほら。）である。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条には、

mオヨ ソーシェナー マー ダイソーロヨラセンガ モー ゾラ
うん、 そうしてね まあ 大騒ぎだから もう ほら。

とある。同第9巻の「鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦」の条には、

fチャモ ノマエンガ ソア
茶も 飲みませんか、そら。

とある。「ゾラ」や「ソア」が目される。

『喜界島方言集』には「ソー」の指摘があり、「助詞。軽い命令を表はす。」

との解説がある。

イヂ クン ソー 行って来たらどうだ。

との例が見える。「ソー」は、どういうものであろうか。

薩隅地方につらなつて、宮崎県南部には、薩隅地方と同様の「ソラ」が見える。青島近くでの一例は、

○ガッコノ センセーノ キナサッタ ソラ。

学校の先生がいらっしゃったよねえ。

である。——この方面でも、文末詞化した「ソラ」が、きわめて自由につかわれている。

さて、九州を出はなれて和歌山県下にも、問題事例があるか。『和歌山県方言』には、

マイレソラ 参りませう

などの言いかたが見られ、「一緒にマイレソラ。」という文例も見える。——「ソラ」をとりたてしめるものか。

つぎに新潟県下に「ソラ」がある。押見虎三二氏によれば、南辺の秋山郷には、

○ジュンコ ホーラ センセーカラ ヒロモロタガソラ。

順子そら先生からおいしいものをもらったがそら。

のような言いかたがおこなわれているという。——「ホーラ」のことばづかいがなされていて、かつ、文末に「ソラ」が見える。都竹通年雄氏の「日本語の方言区別けと新潟県方言」(『季刊 国語』昭和24年度 1)には、

命令の下におくソラ(ただし東部に)

との記事が見える。長岡六日町の「食えそら」というのも見える。『全国方言資料』第8巻の「新潟東佐渡郡羽茂村大崎」の条には、

f………… ドーシュート オモーテ クットニ ソラ
 どうしようかと 思って ほんとうに ほら。

とある。新潟県下は、問題の地域であろうか。

『仙台の方言』には、「こら、そら、ほら、あら、どら。」についての、「事物の指示代名詞これそれほれあれどれの訛つたもの。」という説明が見える。同書の、「そら」の見えるものとしては、

「おばんつあんのおてーひけーてあげ申せ、そら」（おばあさんのお手を引いておあげ、さあ）

などをひくことができる。——「（～）おあげ、さあ」と表記されているのによっても、「そら」の、完全には文末詞化していないことがうかがわれよう。

新潟県 越後 北部の海島、粟島には、「ソダ ソロ。」（“そうであります。”）、
「イッテ キタ ソロ。」（“行ってきた。”）、^{（アクセント失）}「オーシケダ ソロ。」（“大時化だ。”）、^{（アクセント失）}「ヤスミダ ソロ。」（“休みだ。”）、^{（アクセント失）}「ヤスンダ ソロ。」（“休んだ。”）など、「ソロ」文末詞がいちじまるしい。年寄りの人がさかんに「ソロ」をつかっているという。剣持隼一郎氏も、「粟島浦村の言語（一）」（『高志路』201号）で「ソロ」をとりあげられ、「丁寧の終助詞かもしれない。」と言われ、

ソーシャーソレデエーソロ（それじやーそれでいいですよ？）

などの例を示していただける。人は、この「ソロ」について、「そうろう」ことばかとも見てもいるか。実際は、「ソラ」からのものではないだろうか。粟島には「コロ」もおこなわれており、「コー シタ コロー。」（こうした“とき”。）のような言いかたがなされている。（こうした「コロ」も、「コラ」からのものかと思われる。）

「ソロ」文末詞の見いだされるのを、今、列挙してみよう。北の青森県津軽郡下に、「ゴツツォニ ナテ ソロー。」のような言いかたがあるという。「東京都利島村」（『全国方言資料』第7巻）に、

f ハンジラー アズマヤエ イッテ インダソーロー トシマニ

ハンジが あずま屋へ 行って いなかったんですね、利島に。
（東京の瀬戸物屋の名）

などの言いかたがおこなわれているという。『全国方言資料』第3巻の「石川県輪島市名舟町」の条には、

mアー ドーカ ンナラー カ タノミッソロ

どうか それでは 頼みますよ。

とあり、これの「タノミッソロ」のところに、「頼み候」との脚注が見える。和歌山県南部には、「アノソロ（あのね）」などの言いかたがあるらしい。（『串本町誌』による。）

私は、諸方言上に、「そうろう」ことばは、にわかには認められないだろうと考えている。（『方言敬語法の研究 続篇』p.151）今日の方言に、古来の「そうろう」ことばを認めようとしても、現実の、「ソロ」のとり用いられかたがあまりにも奔放なので、いくらかの不安を感じる。

六 「サラ」の属

隠岐では、島前ことばに、「サラ」がさかんであるという。「ドーゼンデ サラを 付けんのは ワンパッカリデ サラ。」との言いかたがあるよしである。「サラ ツカッタ サラ。」（あれまあ、サラをつかった そら。）との言いかたもなされている。隠岐のみならず、出雲北東部、および伯耆西部の一部にも、「サラ」がおこなわれているという。（以上、神部宏泰氏の教示による。）広戸惇氏の『山陰方言の語法』にも、同様に、「サラ」の指摘が見える。「サラ」の本源は何か。「ソラ」からのものか。あるいは、「それは」の「ソリャー」>「ソラー」から「サラ」ができたということも考えられるか。別に、「されば」の意の、なんらかの接続詞が母胎になって、そこから、今の「サラ」がうまれたということも考えられるか。室山敏昭氏教示の鳥取県西伯郡下の一例をあげるならば、「イヌッ サラッ。」（帰るからね。 青男間）というのがある。いずれにもせよ、今日では感声系文末詞と認められる「サラ」が、方言上にある。

「それはそう さ。」などの「サ」とはちがった、「さあ。」系の「サー」がある。通常はこれが、文頭にたって、感動詞としてはたらいていよう。「サー、どうだ カナー。」など。文頭にはたらく「サー」が文末にはたらくことになれば、そこには、感動詞系の文末詞がうまれる。薩摩半島南部の言いかたには、

「アガロ サー。」（“さあ上がれ。”）などというのがある。広島県安芸南部内には、

○ソーデ ガンス ヨサン。

そうでござんすよ。

との言いかたがある。「サン アノ トキニ。」（さああの時に。）などの言いかたもあるから、「サン」は、「サー」に近いものと判断されよう。東北地方の青森県下・秋田県下には、文末詞複合形「ネサ」のおこなわれることがいちじるしい。秋田県例は、「イッタラ ネサ。」（行ったらねえ。）、「コマッタ ネサ。」（こまったねえ。）である。土地人は、これらを説明して、「ネサ」は「ネハ」とおなじだと説く。「ハ」に対応せしめられる「サ」は、「さあ」的なものではなからうか。日野資純氏の「津軽方言の文法に関する一考察」（『国語学』第二十輯）には、「サケコカナンカエレダラネサ。』（酒か何かを入れたら〔どうでしようね〕）」などの事例が見える。氏は、「この『ネハー・ネサー』両者は弘前地方の特色としてよいかも知れない。」とも述べていられる。

七 「ホラ」の属

九州の南部には、「ホラ」文末詞が認められる。鹿児島県硫黄島の、「ソゲンセント ゴワン ガホラ。」（そんなにしなさいますなよ。）というていねいな言いかたでは、「ホラ」文末詞がとりたてられる。薩摩半島西南の笠沙半島で聞いたものには、「ヒトガ ワロウ ガホラ。」（人が笑うわよ。）がある。

天草島でも、

○イーエー、ナンニモ アータホラ。

いいえ、なんにもあなた。（「ご迷惑をおかけしますね。」というのに
対する応答）

などの言いかたがおこなわれている。『全国方言資料』第9巻の「熊本県本渡市佐伊津」の条にも、

mホラホラー クロマンドモ マゲーモ コーテキタゾー ホラ

ほらほら 「くろまん」でも 孫にも 買ってきたよ、 ほら。
 というのが見える。

熊本県、熊本市南方一集落のことばには、「ミテ ミン ナーホー。」（見てみない？）「ミテ ミー ホー。」（見てみろよ。）というのがある。この「ホー」は、「ホラ」に近いものか。

ちなみに、南島の与論島には、「あのね。」の「アヌ ヨハイ。」があり、「アヌ ヨホー。」がある。

「大分県臼杵市諏訪津留」（『全国方言資料』第9巻）には、
 f………… チョーチンニ ヒュー トウケテ ホラ
 ちょうちん〔提灯〕に 灯を つけて……。そら。
 というのが見える。

四国の徳島県下にも、「ミテ ヨイ ホラ。」（見てこいよ。）などの言いかたが聞かれる。

『和歌山県方言』には、「アノホロ（あのそれ。）」というのが見える。県南のことばのようである。

中部地方の渥美半島では、かつて私は、
 ○イッペン ミテ ホー。ミナオンテ ホー。

一度、見て“ね”。見なおして“ね”。

との言いかたを聞きとめた。——土地の識者は、この「ホー」を、「ね」と言いかえつつ、かつ、「「ホレ」だ。」と説明した。

東北地方でも、「ホラ」文末詞が聞かれる。福島県下にそれがあり、宮城県下にもある。『仙台の方言』には、

「もつとえりこかすとかっこえがすほら」（もつと衣紋を抜くと恰好がよくなるよ）

などとある。岩手県下などでも、「ホラ」が聞かれる。

※ ※ ※

「ホレ」が「ホラ」同様のものにもなっているか。（「ホレ」に「ソレ」が観察されるとしても、できた「ホレ」の用法には、自在な展開があってもよいことであろう。）

徳島県下には、「タベ ホレ。」（おたべなさいよ。）などの言いかたが見られる。（金沢浩生氏による。）——「ホレ」は、命令的表現を受けることが多いもののようである。

和歌山県下・京都府下・滋賀県下などにも、「ホレ」文末詞が認められる。

○アレ、ナンヤラ デテル ホレ。

あれ、何やら出てるわ。（初老女→幼男）

は、滋賀県湖西での一例である。

こうした「ホレ」の言いかたは、共通度の高いものになっていよう。全国の所々に、「ホレ」のしぜんの言いかたが聞かれる。関東地方でも、間投詞ふうの「ホレ」が聞かれ、また、文末詞ふうの「ホレ」が聞かれる。

奥羽でも、広く「ホレ」文末詞が認められようか。福島県下にも、その「ホレ」がよく見られ、宮城県下にも、「タイコ ハタイテ ホレ。」（太鼓をたたいてさ。）などとある。

『山形県方言集』には、「さつき云つたとほりやつぱりほだどほれ。（先程云つた通り矢張りさうだとそれ。）」などとある。

「ナーホレ。」（なあ！）などの言いかたは、広くおこなわれているものであろう。

岩手県下での「ホレ」は、

○ウ[ü]エサ アガッテ イケバ ホレ。

上にあがっていけばさ。（老女）

などである。

北海道地方での、「北海道松前郡福島町白符」(『全国方言資料』第1巻)の条には、つぎのものが見える。

fアー ソレアノー ハリ ホレ イッボン ロクジューエンダシ (m
 ああ そうかね。 針は ほら 1本 60円だし、
 アー) テグス アレー ジューゴエンダッテアエ (m アー) セバ
 糸は 15円だよ。 じゃ
 ナンボネ ナンダネ (m ヘバー) ホレ
 あ いくらに なるかい。 (m そうすると) そら。

最後の「ホレ」が注目される。

佐藤虎男氏の「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」(『方言研究年報』第一巻)には、紀州長島の、

○ソレデモ アレ サ, ホリー。

でも、あれですよ、ほら。(なんとかいったっけ)。

(青男→中男)

というのが見える。

八 「ハラ」の属

「ホラ」文末詞に近い「ハラ」文末詞がある。

鹿児島県下には「ハラ」文末詞のおこなわれているのが注目される。種子島の例は、「キヤイ ハラー。」(おいでよね。)などである。瀬戸口俊治氏によれば、同島では、「ヨカオ カラー。(休みましょう。)」などの言いかたもおこなわれているという。——「カラー」の「ラー」は、「ハラー」からのものである。薩摩半島南辺で私が聞いたものには、「アユ ミデ ミヤイ ハラー。」(あれを見てみなさいな。), 「アユ ミン ミレ ラー。」(あれを見てみろよ。)な

どがある。

越前海岸でかつて私が聞いたことばに、「ナント ユータ ハレ。」（何と言ったね？）というのがある。（“何という駅だったかね？あれは。”というこちのことばであった。）「ハレ」の本源は何であろうか。今は、結果論的処置として、これを、「ハラ」のもとにかかしておく。

「オイ」や「ヨイ」などは、「イ」におわる形態である。それらに対して、「コラ」「ハラ」などの、「ラ」におわる形態がある。よびかけ文末詞に、「〜イ」や「〜ラ」の形のもの通用しているのが注意される。

以上の、一の項から八の項までのものが、対他のよびかけ性のつよいものであるのに対して、つぎに、九以下の、自己感動を言うことのつよい性質のものがある。

九 「アッ」の属

広島県安芸奥の八幡には、

○ヨー シテ ヤンサッテ アッ。

よくしてございましてね。

のような言いかたがおこなわれており、慣用の「アッ」文末詞が見られる。——これは、当地での一週間調査のさい、確認されたものである。

『福井県方言集』に見える、丹生郡の、「オヨー、コノアメノフルナカニ、ドコヘイッテキャンタンジャアイ。（おゝ、此の雨の降る中に、どこへ行って来たのですか。）」の「アイ」は、ここにならべかかぎてよいものであるのかどうか。「ア」などの感声的なものは、人にしぜんに出がちのものでもあろう。が、その中に、土地によっては、方言要素に定着せしめられたものがあるはずである。

十 「ハイ」の属

一文の表現をしおえたたたんに、みずから「ハイ」と言っただけその表現をむすぶ習慣が、ままた、人に認められよう。地方の老年層の人たちには、その「ハイ」に相当する「ヘー」が聞かれもする。「ウン」や「フン」のつけそえられるのも、世上、しばしば聞かれよう。地方の、やや古風なつけそえことばには、「オイ」というものもある。(返事の「オイ」が利用されたものである。) そうしたものが、あるいは臨時的にも、文末詞ふうである。ときには、——所により人によって、それらが文末詞化している。

広島県安芸中部でのことばづかいに、

○カミネノ ホーカラモ ダイギリ キトッテデ ガンス ヨアイ。

上根のほうからも“だいぶん”嫁に来てらっしゃいますよ。

などというのがある。この「アイ」は、対等や目上へのことばであるという。“話しの真実性を訴える時に用いるもの。女ことば。中年以上の人がつかう。男は「エー」と言う。”よしである。「アイ」は、「ハイ」に近いものかどうか。

富山県下には、たとえば高岡市内で「コレレ ハイ。」(おいでよ。), 「イカレ ハイ。」(お行きよ。)などが聞かれる。“男よりも女が多い。年寄りもつかう。やさしい感じがする。”という。(愛宕八郎康隆氏教示)——「早う」の「ハイ」も考えられるか。『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、

fカタンダアイ

かつぎましたよ。

というのが見え、なお、

fホト カタンダオイ

奉灯を かつぎましたよ。

というのも見える。

石垣福雄氏の「北海道檜山郡江差町」(『日本方言の記述的研究』)には、「ハ

イ」の指摘があって、

共通語の「ヨ」に似ているが、相手の意見を強く肯定するときに用いる。

多く女性が用いる。 ソンダハイ「そうですよ」

とある。

高橋俊三氏教示の、南島、与那国島比川の「ベンキョー キティガラ アンビ ハイ。(勉強してから遊びなさい。中・女→少・女)」というのは、どういう「ハイ」であろうか。

愛媛県南部の八幡浜のことばに、「ヘン」がある。「ソー カヘン。」(そうですか。),「ナイ カヘン。」(ないですか?)などの言いかたが聞かれる。電話での聞きかえしにも、「ヘーン。」の言いかたがなされるという。文末詞「ヘン」は、およそ、「ヘー」(返事ことば)に近いものか。

広島市東郊の坂という所には、「何々しンサイ。ヘーヨ。」(何々しなさい。ヘーヨ。)との言いかたがおこなわれているという。これの「ヘー」も、ここにおいて考えてよいものか。

十一 ハテ デー ドレ (デー)

『和歌山県方言(其一)』に、

アラハテ 有るでしょう

というのが見える。「ハテ」文末詞がとりたてられるか。

南島の与論島には、

Ōna:kati pentʃi wugamaŋ de:. (老女→同)

<中に 入って 拝まむ デー。>

中に入って拜んで行こうよ。

などの言いかたがおこなわれている。(町博光氏「与論島朝戸方言の文末詞」『方言研究年報 統一』)町氏は、[de:]を「さあ」としてられる。

私が広島県安芸のうちで聞いたものに、

○ハヨ イッテ コイ ヤー。デー。

早く行ってこいよ。ねえ。

というのがある。(この土地では、「デー」がよくおこなわれているという。) この「デー」は、「ドレ」的なものか。それが、いまや、文末詞化しようとしているようである。

東北地方のうちには、文末に「ドール」をつける所もあるのか。私は、かつて、東条操先生から、山形市でのこととして、これをうけたまわった。

十二 「まあ」の属

「まあ やめとこう。」では、「まあ」が副詞のさまである。「マー、どうしたんでしょー ネー。」では、「マー」が感動詞と受けとられる。諸方言上、文末にはたらく「マ」、——したがって、私が転成文末詞と見る「マ」は、一般的には感動詞系のもつと見ることができよう。(副詞「まあ」も、感動詞「マー」の一定着形式かもしれない。)[「マ」文末詞の出自が、ときに、副詞系のものであったとしても、当の文末詞の「マ」の実情は、はなはだしく感声的なものであり、したがってこれは、感動詞系のものに該当すると解釈することが容易である。

「まあ」という感動詞を利用して、これを文末に用い、自己の一般的な感動を率直に表明するのは、日本語にふつうの習慣と見てよからう。

ところで、北陸地方内には、感動詞系「マ」文末詞と見られるものの頻用があって、全国的には、これがとくに注目される。福井県越前から新潟県越後にかけてが、「マ」文末詞の頻用地帯である。福井県越前で、「ンダイ マ。」は、「ちょうだい。」である。私は、かつて、越前海岸のバスで、若い車掌が、“モット ハイッテ オクレー マ。”(もっと奥へはいってくださいよ。)と言うのを聞いた。命令・詠えの表現の時に、「マ」が用いられる。石川県下には「マ」

がさかんであり、「マン」形もよく聞かれる。「いらっしやいました。」は、「イ
ラッシ マ。」「イラッシ マン。」と言われている。能登半島東北部の南岸で
の「マ」例は、「イワント オカーシ マ。」（言わないでおおきよ。）などであ
る。能登半島西岸での「マ」例は、「アガーマッシ マ。」（あがりなさいまし
な。）などである。富山県下にも、「マ」がよくおこなわれている。「マン」も
ある。「アスンニ コイ マ。」（あそびに来いよ。）は、したい間がらでのこ
とばである。

○チョッコ キテ クダハレ マン。

ちょっと来てくださいな。

は、「マン」の例である。やはり、命令・詠えの表現に、「マ」「マン」がよく用
いられている。新潟県下の、越中寄りの地の「マ」例は、「コッチー コザイ
マー。」（こっちへおいでなよ。）などである。越後も、南西寄りの地に、よく
「マ」文末詞が認められるのか。ところで、『全国方言資料』第8巻の「新潟県
佐渡郡羽茂村大崎」の条にも、

fソコン トコニデモ ナゲトイチ クリー マー

そこの ところにでも ほうっておいて ください、まあ。

などとある。

中部地方の、非北陸の 地方については、「マ」文末詞の、いちじるしい方言
習慣をとりたてることができかねる。「マ」どめは、あまりおこなわれていな
いか。

ところで、『千葉方言 山武郡篇』には、「コーま（来い）」が見える。「全国
珍語奇語集」（『言語生活』第三十五号）に寄せられた、野口伸子氏の「千葉
県」の条にも、

来いの気持でコーヨ、お出でよの気持でキタイマは上総東部に広く、この
マ（まあ）は、ヨぐらいの気持で使われている。

との記事が見える。

埼玉県下や栃木県下にも、「マ」文末詞がなくはないのか。

東北地方の福島県下には、「マ」文末詞のおこなわれることが、ややいぢるしいか。『福島県棚倉町方言集』には、「小さく^くって、着られ^っかま。辛く^くって、食われ^っか、ま」などというのが見える。『会津方言集（増訂版）』には、「アンナオドゴニ、ソソナテガミ、カゲ^ッカマ^マァー。（あの男に、そんな手紙が書けるものか。）」などというのが見える。『福島県方言辞典』には、「反語の場合はガにマアを添へてガマア、（カマア）となることが多い。」との記述が見える。『全国方言資料』第1巻の「福島県河沼郡勝常村」の条には、

fアノー デキデダカラ マー フロデモ ヘーッテ マー
あ の （食事が）できているから まあ ふろにでも はいって。まあ
クタビッチャベガ マ
くたびれたでしょうが まあ。

というのがある。

山形県下にも、「よ」相当の「マ」文末詞が認められる。

宮城県下・岩手県下・青森県下などにも「マ」がある。下北半島で私が聞いた、「マダ ク[ü]ライ マァー。」（また来るわね。）の「マァー」は、何であろうか。

「北海道松前郡福島町白符」（『全国方言資料』第1巻）には、

mアー コレ オドコノ コドモダマシ ヒトツ デーテミレバ エーセァ
ああ、これ 男の 子だよ、 ひとつ 抱いてみれば いいさ。
というのが出ている。「よ」と言いかえられている「マシ」は、「マ+シ」で、問題の「マ」をとらえしめるものか。

転じて九州地方を見れば、このほうに、「マ」文末詞が広く見わたされる。

まず、鹿児島県下には、「マン」形があって、注視される。『全国方言資料』第9巻の「鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山」の条には、

fユルットゥ シエイマーン

ゆっくり しなさいよ。

というのがあつた。薩摩半島でも「マン」がよくおこなわれており、「コンタ
オーガタライ マン。」(“これはおれんだ。”)などというのが聞かれる。「マ
ン」は、「マ」に隣るものなのか。「マ」「マー」もよくおこなわれている。「ソ
ヌン ドッサイ キレバ ヌッカ コダ マ。」(そんなにたくさん着ればぬく
いだらう?)など、短呼の「マ」の熟用が、他地方人の耳をうつ。

宮崎県下にも、「マー」「マ」が聞かれる。

長崎県下にもまた、「マー」をかなり見せている。「こる ば みれ まー
(これを見る)」は、『嶋原半嶋方言の研究』に見えるものである。佐賀県下・
福岡県下・大分県下にも「マ」がある。大分県南での一例は、

○ソ^ンナ^ラ マー コ^ッチー ア^ガッテ ク^レン マ。

そんならまあこちへ上がっておくれな。

である。

「マ」「マン」に関する複合形も認められる。

○ナイガ モドラユ カイマン。

“どうして、もう帰ってこられるでしょう。帰るはずがないわ。”

(老女→中男)

は、鹿児島県下のものである。

中国地方でも、出雲の「ココエ コエ マー。」(ここへ来いよ。)など、方
言習慣の「マー」が聞かれもする。

特記すべきは、広島県下の尾道市域、ならびに、その南方の横島・百島に聞
かれる「ノマ」である。「ソシテ ノー。」(そうしてねえ。)の「ノー」はわる
いことばであつて、「ホンマジャ ノマ。」の「ノマ」は、よいことばであるとい
う。「アツイ ノマ。」「サムイ ノマ。」などとも言われている「ノマ」は、
ナ行音文末詞の「ノ」に「マ」文末詞のつけそえられたものではないか。それ
が、「ノーマー」という形よりも「ノマ」という形におさめられているところが

おもしろい。複合形文末詞の生産・製作というものは、こういうものではなからうか。

四国にも、「マ」文末詞の一般的使用が、かなりの程度、認められよう。

その中にあって、たとえば、香川県下の「ミ マ。」(見ておみ。); 徳島県下の「コレ クレ マー。」(これをくれよ。)など、方言色のかなり濃いものも、転々と見いだされる。

近畿地方の概況も、まずは、四国と同趣のものであろう。

紀州串本で聞いたものには、「アレ ミヤハンシ マー。」(あれを見なさいよね。)などの、土地におちついた「マ」がある。土地の人は、“念を入れると、すべて「マー」がつく。”と語ってくれた。紀州は三重県下にはいっても、似たような「マー」が聞かれ、「コッチ ウツジャガレ マー。」(こっちへ来やがれよ。)などともある。

「三重県志摩郡浜島町南張」(『全国方言資料』第4巻)には、

fアー マー ハヨー ハイラシャレマー

ああ。まあ 早く おはいりなさいな。

などが見られる。志摩地方に「マー」はよくおこなわれており、「みよまーえー(見なさい)」などともある。(『三重県方言資料集 志摩篇』)

私が舞鶴市城北端部で聞いた一例には、「オマイ コッチ ゴンセ マー。」(あんたこっちへおいでよね。)がある。

「マ」文末詞のような、訴え音効果の穏当なものは、今後はその勢威の大ききたすことがなくても、将来長くとりおこなわれるのではなからうか。

十三 「ヤレ」の属

以下に述べる「ヤレ」文末詞については、早く、柳田国男先生に、「我は」の

お説がある。『言語研究』第一号に寄せられた、先生の「鴨と哉」には、
 福島県の南部で「すきにしろヤレ」、「おらやだヤレ」などいふヤレが、
 やはり此列に入るべきものであることから推して考へると、我我に馴染の
 深い「ヤレうれしや」・「ヤレあぶない」などのヤレも、「遣る」から作つ
 た命令形とは考へられない。是等も多分大昔以来、歌と口語とには常に用
 るられ、文章の中へは入り得なかつた「我は」の変化であらう。

との記述が見える。『毎日の言葉』には、

……越後の平野では、このワがバに變つて居て、女たちもよく使ふこと
 は、次の様な笑ひ歌にも現はれて居ます。

おや〜、どうしよーば

おかゝどうしよーばのし

どうしよーばたつてどしよーばやれ

(中略) 其おしまひのヤレも、亦一つの「我は」であつたやうですから、

……。

とある。もし、この起源説によって、ことを通時論的に考えるとすれば、今からとりあげようとする「ヤレ」を、感動詞系（文系）とすることはできかねる。

ところで、「ヤレ ウレシ ヤ。」などの「ヤレ」、あるいは、「やれ打つな
 蠅が手をする足をする」の「ヤレ」などとなると、これらは、現実に、感動詞
 ふうである。ものは、感動表現に役だっていよう。この点をとれば、私どもは、
 文末に定着した「ヤレ」を、感動詞系文末詞として処理することができる。

以下にとりあげる文末詞を、感動詞系文末詞とすれば、「ヤレ」形に近い「ヤ
 イ」形なども、合わせて、感動詞系文末詞として処理することができる。

「ヤレ」文末詞に関しては、念のために、なお一・二の想察をつけ加える
 ことができなくもない。命令の言いかたをしめくくって「ヤレ」文末詞が
 はたらくばあいなどの「ヤレ」について見るのに、これの成立には、「ヤ
 ル」尊敬表現法助動詞の命令形「ヤレ」の使用の習慣がさしひびいたかとも
 察せられるのである。つぎに、まったく抽象的な想察であるが、「ヤレ」

は、ヤ行音文末詞の「ヤ」と柳田先生の言われる「われ」の「れ」との結合かとも思い見られる。——こう、思い見てもよいことが考えられる。つぎにまた、「ヤレ」を、単純に、「ワレ」からの転訛形と見ることも可能か。「ヤレ」文末詞は、すでに、狂言の詞章にも見いだされる。佐々木峻氏は、つぎの事例を教示せられた。

○うちへ入て、どじやうのすしを、^ほはう、ばつて、もろはくをくへやれ。

(大蔵流狂言虎明本「すゑひろがり」)

○何とがなせうやれ。(大蔵流狂言虎明本「したうはうがく」)

ともあれ、「ヤレ」文末詞は、国の東西にたどられる。

九州で聞き得たものには、唐津城内弁の「イキンサイ ヤレ。」(行きなさいよ。)がある。これを口授した二老女は、その家郷の“おじいさんのことば”にこれがあったと言った。

『全国方言資料』第9巻の「長崎県下県郡厳原町豆酛」の条に見られる、

m トウカー ヨカッターナー ヤン

それから よかったねえ。

の「ヤン」は、ここにとり合わせて見てよいものであろうか。

中国地方の山陰がわは、「ヤレ」文末詞をよく見せる所として注目される。まず、出雲地方に、「コイ ヤレ。」(来いよ。)[キ [kç̥i] タ ヤレ。」(来いよ。)などと、命令形の言いかたの下で「ヤレ」がよく用いられている。「チョッコアレ ミ [i]ー ヤイ。」(ちょっとあれを見ろよ。)などの言いかたもおこなわれている。

つづいて鳥取県下に、「ヤレ」のおこなわれることがさかんである。「アレ ミッサイ ヤレ。」は、「あれを見なさいよ。」である。出雲地方でも当県下でも、「ヤレ」は、同輩以下に多く用いられ、ときに、目上にも用いられる。鳥取県下に、命令の言いかたを受けるのではない「ヤレ」も見られる。『鳥取県方言辞典 後編』には、「もんだぞやい (もんだに全じ)」なども見られる。

近畿内にも、「ヤレ」が見いだされる。兵庫県川辺郡のことは、柳田国男先生の『毎日の言葉』に、

大阪附近に行つて見ても、川辺郡の山村などではシランヤレ、又はソウダヤレなどと謂つて居ります。

と見える。大阪府下に、「ヤイ」形があるか。

三重県南部に「ヤレ」がある。中野朝生氏の「北牟婁地方の助詞について」（『三重県方言』第8号）には、「早く行こうたら」の「ハヨイコヤレー」が見える。福田学氏の「熊野方言における文末辞について（熊野市・南牟婁郡）」（『三重県方言』第8号）には、「書き給え。」の「カケヤレ（紀和町西山、熊野市五郷、神川町）」が見える。大田栄太郎氏の『三重県方言』にも、度会郡の「コヤレ（来い）」が見える。志摩にまた「ヤレ」がよく見られ、やはり、命令の言いかたを受けるのではない「ヤレ」も見られる。さて、近畿南辺での以上の「ヤレ」に関しては、「ヤナレ（ワレ）」のことが考えられなくもない。近畿南部内に、「行こレ。」「行こラ。」などの言いかたがかなりよくおこなわれているからである。

さて、近畿内の他地域にも、以前は、「ヤレ」文末詞のおこなわれる所があったか。（今もあるか。）

中部地方となると、また、「ヤレ」文末詞のおこなわれることのかかなりいぢるしいさまが見られる。

北陸に「ヤレ」がかなりよくおこなわれており、越前では、「ハヨ 来イ ヤレー。」「ハヨ 行ケー ヤレ。」などとある。越前奥で、「ヤー クダーレ ヤレー。」（やあくださいよ。）などの言いかたもなされている。——「ヤレ」はつけそえことばだと、土地の人も考えている。愛宕八郎康隆氏によるのに、「ヤレ」の、命令の言いかたではないものをしめくくる事例も多い。

○チーモ マンナカ コンデ、アカン ヤレ。

ちっともまんなかに来なくて、だめだわ。（祝いごとの餅なげ行事に

ついて言う。 中女)

『石川県方言彙集』には、「やれ」を「ヨ」とする解が見え、

「行けよ」ヲ「行けやれ」ト云フガ如シ

との記事が見える。『全国方言資料』第3巻の「石川県石川郡白峰村白峰」の条には、

fソソナラ イッタ ツイデニ ナンカ コーテキテクレヤレ

それでは 行った ついでに なにか 買って来てください。

というのが見える。

「富山県下新川郡入善町小摺戸」(『全国方言資料』第3巻)にも、

f………… タマゴ アンタトコニ アッターラ フタツ ミツ カシテ

卵が あなたのところに あったら 2つ 3つ 貸して

クレヤレー

くださいませんか。

などというのが見える。

新潟県下は、「ヤレ」のよくおこなわれている所であろうか。先引の「どしよーばやれ」の「やれ」は、命令の言いかたを受けているものではない。命令の言いかたではないばあいの「ヤレ」使用が、多く見られるようである。ところで、県南秋山郷には、命令形に後続する「ヤレ」があるという。『全国方言資料』第2巻の「新潟県岩船郡朝日村高根」の条には、

f………… ムカシカラ ミデバ ラクダワヤレ

昔に 比べれば 楽になりましたよ。

というのがあり、また、

fナンジダラ オッカネー メ シタワイ ホントニ

どんなにか 恐ろしい 目を みましたよね、ほんとうに。

というのがある。

岐阜県下にも、問題の「ヤレ」があるか。『福岡地方方言考』には、「もう行つて来たやれ(もう行つてきたよ)」などというのが見える。同書の、「やれ」

についての説明は、

「やれ」は感動詞で「やよ」に同じく人を呼びかくる声である。音便で「やんれ」などゝも云ふ。感動の意を含む

というのである。

つぎは、愛知県下の三河で、「ヤレ」がよく聞かれる。高瀬徳雄氏の「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」（『方言研究年報』第一巻）には、

○イマ ナンジダ ヤイ。

（おい）いま何時だ。 （青男→同）

○ヤイ オレニモ チョット サワラカイテクリョー ヤイ。

（水のひいた川で、うなぎをとらえた友達に） （小男→同）

などの例が見える。第二例には、「ヤイ」のよびかけがあって、「ヤイ」の文末詞が見える。氏は、「ヤレ」は命令の言い方につくことが多く、男女共に用いる。“之がつくことによって、ねんごろな言い方になる。従って命令表現の場合にはそれをやわらげる。”と、私に教示された。三河には、広く「ヤレ」文末詞がおこなわれているらしく、東北部の「愛知県南設楽郡作手村菅沼」（『全国方言資料』第3巻）にも、

mソイジャ ツリアイ チョーチンデモ ツケテアゲヨヤイ

それでは ちょうちんでも つけてあげなさいよ。

などがある。私は、南部の渥美半島で、「オマエ コレ シテ オクレ ヤレ。」（あんたこれをしておくれよ。）、「キタナイ ヤレ。」（きたないなあ！）などの例を聞いた。——命令形を受けるとはかぎらず、「ヤレ」の自由な用法が見られる。土地の人は、「オクレ ヤレ。」などについて、“下のものに、つよくだのむ時。”“上のものには言わぬ。”と語った。

静岡県内にはいっても、「ヤレ」文末詞を見ることができる。それは、命令形を受けることにきまったものではなくて、用法の自在さが見られる。私が浜名郡下で聞いた一例には、「ホーンニ ヤレ。」（ほんとにまあ。）というのがある。

長野県下にも「ヤレ」が広くおこなわれており、ここでもまた、命令形、命令表現を受けるのではない用法も見られる。『全国方言資料』第2巻の「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条には、

f ソンナ コトガ デキタ モノァ アラズカヤヤレ
 そんな ことが できた ものが あるものですかね、

というのがある。同書の「長野県西筑摩郡新開村黒川西洞」の条にも、

m………… ナニモ ナカッタニヤレ
 何も なかったねえ。

などとある。もっとも、「ソー シロ ヤレ。」(そうしろよ。)など、命令形を受ける「ヤレ」もよく聞かれる。——こうしたものは、“子どもや目下に言う。”とも、土地の人に言われている。南の飯田市で私が聞きとめた例は、「チョット マチナイ ヤレ。」(ちょっとおまちよ。), 「マー アガレー ヤレ。」(まあ上がれよ。)などである。——「ヤレ」は、“ぞんざいだけれども、ごくしたしみがあがり、うちとけた言いかたである。”という。命令形を受ける「ヤレ」を見ていると、これが、「どうどうしヤレ。」などの「ヤレ」尊敬法助動詞からのものではないことが、よく想察される。——「我は」的な「我」を言うものか、元来、単純なよびかけ感声的なものなのかは、依然として定かではない。(現実の「ヤレ」の様相が、いわば感声的なものであることは認められよう。)信州の一人知人は、“「コイ ヤレ。」は、はっきりこっちへ来いというところ、「コイヤー。」は、よぶだけのことば。”と言った。『信州上田附近方言集』には、

ヤレ (感) 「かな」と同じく用ゐる老人の語。

との記述が見える。

山梨県下にも、「ヤレ」文末詞がよくおこなわれている。『方言と土俗』第四巻第九号をおおう、石川緑泥氏の「山梨県河内方言」には、「ヤレ」についての、

助詞、命令形につける「ヨ」に同じ、(例)早く来い「ヤレ」

との解説が見える。私も、県西南部で、

○オチャデモ ニテクレ ヤレ。

お茶でもわかしておくれよ。 （老女→嫁中女）

○タマニャー アソビー コー ヤレ。

たまにはあそびにおいでよ。

など、命令形、命令表現を受ける「ヤレ」の実例を多く聞いた。「シチョー ヤレ。」は、「してはいけない。よしなさい。」である。用法のはばは、本県下では、ややせまいのか。県西南部の一老男は、私に、

“「コレを 見ロ ヤレ。」の「ヤレ」だけは、「オマケノ コトバ」だ。”と語ってくれた。また、同地方で聞いた説明に、“「オレノ ウチー コー ヤー。」など、「ヤー」をつけてやわらかく言う。”というものもある。

中部地方域は、「ヤレ」文末詞をよく見せる所である。

転じて関東地方となると、「ヤレ」文末詞のおこなわれかたは、はるかにすくないありさまである。しかも、そのおこなわれるものは、主として関東西北部に見られ、これは、中部地方の「ヤレ」分布によく連続するものである。関東も、いわば中部地方に関連する山地帯にこれが見られるのは、分布の自然を示すものであろう。大橋勝男氏の『関東地方域方言事象分布図』第二巻のMap. 23には、「“来う YARE,” という言いかたをする」地点が、群馬県西北地帯に9地点、埼玉県西北地帯に3地点、見える。

栃木県下の『本県に於ける方言訛語の調査』には、上都賀郡の、

サウダヤレ さうだ、然り

が見える。

東北地方には、その南部域に、いくらかの「ヤレ」分布が認められる。福島県下が、その主地帯のようである。東の『福島県棚倉町方言集』には、

「おらやだやれ。 そおだごと、おらしんにえやれ。 好きにしるやれ。」

などが見られる。西の『会津方言集（増訂版）』には、「ヤレ」についての、

「かな」の意。老人の語。「ソーデヤレ」（さうですかな。）

という説明が見える。「ヤレ」の用法には、自在のものがあるのか。

山形県の南部内にも、「ヤレ」文末詞があるのか。——定かではない。

東北も、「ヤレ」文末詞のおこなわれることが、南部域にとどまっているのは、私どもに、「ヤレ」文末詞のできたてや性格を、よく想像させるようでもある。「ヤレ」のよびかけは、東北の風土には、あまり根づきやすくはなかったものなのか。

「ヤレ」の用法の広狭は、つねに問題になる。それはおくとして、今は、つぎのことが言いたい。文末詞「ヤレ」がはたらけば、そこでの表現は、相手へのうちかけそのことの、やわらかなもの、ややよわいものになる、と。(どことなしに、うちかけの漠然としたものが感じられる。)

「ヤレ」文末詞の出自が何であろうとも、これの現実の用法は、はなはだ文表現的である。この点で、「ヤレ」は、感動詞系文末詞とすることができる。

じっさいには、「ヤレ」文末詞に、純感動詞系のものと、「我は」系のものがありうるのかもしれない、と想定することは、ゆるされまいか。

十四 別趣のやや長形のもの

兵庫県淡路島の南辺に近い小島、沼島には、

○ヨ^ランセ エイ^ノー。

“寄ってください、わかったか。”

などの言いかたがある。「エイノ」は、「よろしいね。」にあたるものか。しかしながら、今は、「ゴ^ンセ エイ^ノー。」(おいでよね。)などともあって、「エイ^ノー」が、よく文末詞ふうである。——ものは、語としては、感動詞的なものになってもいる。

私が、山口県長門北部の青海島で聞いたものには、

○エ^ーナ イ^ッサ^ェイ。

“ええなあほんと。”

などという「イッサイ」ことばがある。「イッサイ」〈女性〉、「イッシー」〈男性〉ともある。これらは、——ことに「イッシー」ともあると、語としては、感動詞ふうのものと受けとられる。であれば、ここに、感動詞系の文末詞が認められるとされる。

白石寿文氏の教示によるのに、熊本県八代市域内には、

○ハヨ モッテ モチアガランバ 下ーイ。

早いと子供を生んでしまって生み終わらないとどうもねえ。

などの言いかたがあるという。「下ーイ」は、起源がどうであろうとも、現実には、感動詞系文末詞とも見てよいものになってはいないか。

和歌山県南辺方面には、“そうです。”の意の「ツヤ マッテーン。」ということばづかいがある。「ツヤ」の「ヤ」が指定断定の助動詞であるとする、[↑]「マッテーン」は、そのあとにおかれた特定文末部と見られよう。じつはこの方面に、「マッテン」ことばがある。「アカン マッテン。」（あきません。）「ヨワッタ マッテン。」（よわたたなあ。）など。今は、この不可解な「マッテン」ことばを、感動詞系文末詞にも相当するもの（そういう音形になってしまっているもの）とも見ておこうか。（「行き マッテンス」「行く マッテンス」などの言いかたもあるので、「マッテン」を、かんたんにはとりあつかうことができないけれども。）

十五 おわりに

相手によびかけることば、また、みずから自己の感動を吐露することばは、感声の世界に、無限に成りたつものであろう。そこには、いろいろな感動詞系文末詞の成立の、いわば無限の可能性が認められる。ただ、そうしたものが、個人の、ある表現現場での衝動的な産物であるばあい、これの、社会化するかしないかは別問題である。言うところの無限の可能性の中であって、実際には、感動詞系文末詞成立の、なにほどかの限定が見られるようである。

広島弁には、「チニ ユー コトモ ナー。」(とんでもない!)との言いかたがある。成人の男女に、これが聞かれる。「ユー コトモ ナー」は、「言うこともない」であろう。しかし、この長形のものが、「ユー コトモ ナイ」との意識の外で、いわば文末詞ふうのものともされている。意味作用の分節の見られる表現要素にしても、このように、しだいに文末詞ふうのものともされる。そうなったものには、一種の、感動詞ふうのおもむきも見られる。人間の表現開拓には、このように、長形の意味作用分子を単純形式に持っていくはたらきもあろう。

結 語

方言文末詞<文末助詞>の研究をひとまず了したかに思える今の段階で、私は、次下のことばを結語としたい。

一つ。日本語方言状態の中には、原生的本来の文末詞の画然とした存立があり、かつ、諸品詞からの転成文末詞の、多岐で旺盛な成立がある。これは、日本語文法構造にもとづく特質的な事態であり、日本語の言語生活での必然的事実である。

二つ。文末詞<文末助詞>を広汎に認めて、日本語方言状態の中でのその活動を精視確把することは、現代日本語の研究ないし日本語研究のために、基本的に重要である。文末詞研究は、全文法研究の核心的事項ともされる。

三つ。文末詞<文末助詞>の、日本語「文表現」での機能は、まさに、深層心理学的にも汎社会学的にも、深究せらるべきものである。これによって確立される日本語学は、人間言語の学として、一般言語学の中に、独自の地位をしめるものであろう。

文末詞<文末助詞>研究の沃野に、文末詞<文末助詞>の言語学が樹立される。

筆者既稿、文末詞研究文献

- 1 『日本語方言文法の研究』 岩波書店 1949年（昭和24年）12月
- 2 「筑後柳河ことばの『メス』と『ノモ』」 『近畿方言』15 1952年（昭和27年）9月
- 3 「日本語表現法の文末助詞 一その存立と生成一」 『国語学』第十一輯

- 1953年（昭和28年）1月
- 4 『これからの国語』 角川書店 1953年（昭和28年）6月
 - 5 東条操編『日本方言学』の「文法篇」 吉川弘文館 1953年（昭和28年）12月
 - 6 『日本方言地図』の「文末助詞『ナモン』類その他の分布図」 吉川弘文館 1956年（昭和31年）10月
 - 7 「対話の文末の『よびかけことば』——ナモン類その他について——」 『広島大学文学部紀要』 1956年（昭和31年）3月
 - 8 「方言文末助詞（文末詞）の研究について」 『方言研究年報』第一巻 1957年（昭和32年）12月
 - 9 「日本語文法の記述体系」 『国文学攷』第二十三号 1960年（昭和35年）5月
 - 10 「Cessationals in the Japanese Dialects」 『Monumenta Nipponica』VOL. XIX NOS. 1—2 1964年（昭和39年）
 - 11 『A Dialect Grammar of Japanese』 『Sophia Univ. Press』 1965年（昭和40年）7月
 - 12 「瀬戸内海域の文末詞『ナー』『ノー』」 『方言研究年報』第八巻 1966年（昭和41年）3月
 - 13 「“山形弁”と“宮城弁”」 『国語学』70 1967年（昭和42年）9月
 - 14 「東北方言『文末詞』の一研究」 『方言研究年報』第十巻 1967年（昭和42年）9月
 - 15 「Word-Geography of Japanese」 『Zeitschrift für Mundartforschung』 1968年（昭和43年）
 - 16 『日本語方言文法の世界』 塙書房 1969年（昭和44年）7月
 - 17 『方言文末詞（文末助詞）の研究』 『広島大学文学部紀要』特輯号2 1972年（昭和47年）2月

あとがき

今、方言文末詞〈文末助詞〉の記述の全了を見るにあたって、心から開陳したいのは、全国諸地方の、方言の山野の人々——私に土地ことばを語ってくれた人々——への、感謝・感恩の思いである。無数とも言える多くのかたがたの教えなくしては、私は、何もなすことができなかつた。さて、この書が、それら多くの人々への謝恩のまことをあらわそうとすることのよすがであるとするならば、これは、その人たちにとって、なんと迂遠なものであることか。申しわけない思いがしてたえられない。

しかしながら、学徒としての私は、この道にしたがって、自己の成業を、なお、世に問わないではいられない。

問うにつけては、出版社に多大のご迷惑をおかけしている。これもまた、私には、心ぐるしいことである。

全篇、縮約の精説を旨とした。このため、簡潔記述の中にあっても、叙述法に、種々のくふうをこらしもした。

抽象的な説明や概括ふうの説明をおこなってもいるが、これらはその場でのやむを得ない処置であったことを了解していただけるならばさいわいである。もとよりのこと、これらもみな、私なりの実証作業によっている。

複合形文末詞を述べることは、じつにかんたんである。用法や分布を精説することがない。これは、一種の遺憾事であるけれども、書冊とページ数との制限上、やむを得なかつた。ただし、そこに述べられた簡潔なことばも、私なりの実証作業によっているものであることは、多く言うまでもない。

上・中・下の三巻をまとめたのち、知り得た文末詞がいくつかある。既知のもの分布について、新しく知り得たこともある。

つぎに、それらを摘記しよう。

町博光氏の教示によるのに、南島の西表島には、文末詞 [din] がある。

○p'anadu makkaribu' din.

鼻が曲っているぞ。

のような言いかたがなされているという。

おなじく町氏の教示によるのに、沖縄本島の国頭方言には、文末詞の「ヤン」(ヤーン、アジ)がある。

○イサーガラ ヤン。

どうだろうか。

のような言いかたがなされているという。

瀬戸口修氏の教示によるのに、種子島には、「ナーラ」「ナーコラ」「ナーツラ」などがある。

○ワッカ シモ ナーラ。

若い連中もナーラ!

のような言いかたがなされているという。

薩隅地方その他のうちの「イッチュタ チャイ。」(行くと言ったよ。)などに見られる「チャイ」は、「トチャイ」からのものか。現実には、「チャイ」が文末詞的である。

神部宏泰氏教示の天草下島のものには、つぎのがある。

○ナンデモ デキヨッタ ヲ チャンター。

何でもできていたんだよ。(老女)

豊前のうちには、文末詞「マイ」がある。「オマイ」系のものか。「イコ マイ。」(行こうよ。)は、岡野信子氏教示の一例である。氏はまた、豊前築上郡の「ベンキョー シュー アガ。」(勉強をしようよ。)を教示された。

友定賢治氏の「転成文末詞『ニ・ニー・ミー』について——岡山県新見市坂本方言における——」（大阪教育大学方言研究ゼミナール報告『くらしのことば』1）には、動詞系文末詞「ミー」が見える。

伊予の八幡浜市あたりでは、

○ハヨ セン カヘン。

早くおしなよ。

のように、文末詞「ヘン」がおこなわれている。当地方には、「だれそれさん。」と言われたばあいの返事ことば、「ヘーン。」がおこなわれている。「ヘンヘンヘン。ソー ヨ。」（はいはいはい。そうよ。）との言いかたもある。文末詞の「ヘン」も、「はい。」的なものか。八幡浜市から西、佐田岬半島には、「ソーカハイ。」（そうかね。）との言いかたがある。

但馬南部の山地で、私の聞き得たものに、「ナンタ」がある。「ナーアンタ」からのものか。

三重県南部の紀州でのこと、中野朝生氏の「北牟婁地方の助詞について」（『三重県方言』第8号）には、

ハヨイコヤソリ 「早く行こうったら」

というのが見える。

越中五カ山の細島の方言には、

○ドコイ 行カッサルイシ。

との言いかたがある。（57年12月9日のNHKテレビで、私はこれを聞いた。）文末詞の「シ」は、「もし」からのものか。

水沢謙一氏の『昔あったてんがな』<新潟県>にも、「シ」文末詞が認められるか。つぎの事例がある。

「婆さ、また何言わっるい。これはこんにゃくと言うもんどし。」

新潟県能生町小泊港のことばに、

○ハジメ イッタ セー。

はじめ言ったセー。

○カンモ エー セー。

勘もいからよ。

などというのがある。「セー」は、「ツエ」にも近く発言されている。別に、「ハイルツエ ネー。」(はいるからねえ。)というのも聞かれた。結果として、「セー」は、一つの新文末詞として認めてよいものではなからうか。

『越佐方言集』には、

○語尾ノゾヲざい、だい、ぜ、ナドイフ。コレ北蒲ノコトナリ。中蒲ニハば
いとイフ。

との記事が見える。「ばい」の形が目される。

『名古屋方言の語法』には、「キョン」などの文末詞が見える。「ホー キョ
ン さうかえ」,「読メル キョ ン 読めるかえ」との記載がある。なお,
『キョ ン』『ヨ ン』 敬譲の名詞をつくる『ソ ン』とともに残る 土族語の代表
的のものであるが、今は殆ど聞かれない。」とも書かれている。

群馬県下には、「メー」文末詞が見いだされる。「暑いメー」は、三ツ木美佐
枝氏の「群馬県甘楽郡南牧村尾沢地区の文末表現」(群馬県立 女子大学 国語学
研究室『篠木ゼミレポート』1・1982)に見られるものである。大橋勝男氏の
『関東地方域方言事象分布地図』第二巻の Map. 12 にも、「メー」がとりあげ
られている。

私が栃木県北で聞いたことばには、「コマッ ツォー。」がある。「こまるぞ。」
といったようなものであったか。

長西良輔氏の教示によれば、秋田県南の矢島地方に、

○ンダ[↑]ンダ ホ。

“そうでしょ?”

○ンダ[↑] モシヨ。

“何々ですnee。”

などの言いかたがおこなわれているという。

文末詞の存立は、無限性のものであろう。
この研究もまた、無限軌道を行くものである。

60(1985). 4. 15

引用（恩借）文献一覧

<上・中・下の三巻にわたる>

本文中に引用させていただいた諸文献を、深謝の意を表しつつ、以下に列記する。

近来の新発表あるいは新刊方言書で、拝見はしつつも、恩借にはおよばなかったものも、かず多い。それは、記述のはこびの簡約を旨としてのことでもあった。

文献の排列は、「地域別」とする。国の西南方から東北方へと、順次、かかげていく。最後に、「一般」としうるものをおく。

各地区および「一般」の内での排列は、著編者名のアイウエオ順によった。

注1 「 」でかこんだものは、論文・報告の類である。

注2 『 』でかこんだのは、著書一般、自作プリントもの、または雑誌である。

一 南島地方

- 伊波普猷「琉球語の掛結に就いて」『伊波普猷全集』第1巻（平凡社 昭49，4月）
- 岩倉市郎『喜界島方言集』（中央公論社 昭16，8月）
- 生塩睦子「沖縄伊江島方言の文末表現」『方言研究叢書』第5巻（三弥井書店 昭50，8月）
- 上村孝二「奄美大島」日本放送協会『方言と文化』（宝文館 昭32，10月）
- 北村力馬『奄美大島語案内』（窓月堂 昭2，11月）
- 金城朝永『那覇方言概説』（三省堂 昭19，8月）
- 金城朝永ほか「南島方言に於ける敬語法」『沖縄文化論叢 5 言語編』（平凡社 昭47，11月）
- 国立国語研究所編『沖縄語辞典』（大蔵省印刷局 昭38，4月）
- 田畑英勝「奄美大島」『言語生活』第七十一号（昭32，8月）
- 寺師寺夫「奄美大島に関する記述」『方言学講座』第四巻（東京堂 昭36，6月）
- 仲宗根政善「宮古および沖縄本島方言の敬語法——『いらっしゃる』を中心として——」九学会連合沖縄調査委員会『沖縄—自然・文化・社会—』（弘文堂 昭51，2月）
- 町博光「与論島 朝戸方言の文末詞——資料報告——」『方言研究年報 統一』（昭51，12月）
- 松田正義「沖縄で考えたこと」『国語通信』第3巻第9号（昭35，9月）
- 宮良当壮「南島方言採集行脚(一)」『方言』第一巻第二号（昭6，10月）
- 宮良当壮「南島方言採集行脚(二)」『方言』第一巻第四号（昭6，12月）
- 宮良当壮「日本語に於けるクワ(Kwa)行音群に就いて」『言語研究』第十・十一号（昭17，11月）
- 宮良当壮「東北方言と南島方言との比較研究」『帝国学士院紀事』第三巻第二号（昭19，7月）
- 宮良当壮「琉球民族とその言語」『日本の言葉』第1巻第4号（昭22，9月）
- 宮良当壮「風雪(3)」『月刊琉球文学』第1巻第3号（昭35，3月）
- 宮良当壮「風雪(5)」『月刊琉球文学』第1巻第5号（昭35，5月）
- 山下文武「奄美大島方言(一)」『鹿児島民俗』No.1（鹿児島民俗学会 昭29，4月）

二 九州地方

- 上畝勝『九州方言辞典』上巻〔中南部篇〕(九州民俗研究中南部同人会 昭38, 11月)
 神部宏泰「九州方言における文末詞『バイ』『タイ』について」『熊本女子大学国語国文学論文集』第五集(昭42, 2月)
 神部宏泰「方言基質論序説——九州方言の基質について——」『佐賀大学教育学部研究論文集』第27集(昭54)
 九州方言学会『九州方言の基礎的研究』(風間書房 昭44, 5月)
 都築頼助「九州方言の性格」『NHK国語講座』(昭32, 4・5月)
 日本放送協会『全国方言資料』第6巻 九州編(日本放送出版会 昭41, 11月)
 日本放送協会『全国方言資料』第9巻 へき地・離島編(Ⅲ) 九州(昭42, 5月)

鹿児島県

- 井上一男「種子島方言研究」『方言』第三巻第七号(昭8, 7月)
 上村孝二「南九州方言文法概説——助動詞・助詞——」『国語国文 薩摩路』第十二号(昭11, 12月)
 上村孝二「長島・獅子島の方言」『九大国文学会誌』復刊号(昭23)
 上村孝二「薩隅方言問答」『研究と実践—研究所紀要—』第1号(鹿児島師範学校教育研究所 昭24, 4月)
 上村孝二「鹿児島県下の表現語法覚書」『鹿児島大学文理学部研究紀要 文科報告』第三号(昭29, 3月)
 上村孝二「薩南諸島方言語法資料」『鹿児島大学 文科報告』第7号(昭33, 8月)
 上村孝二「上飯島瀬上方言の研究」『鹿児島大学法文学部紀要 文学科論集』第1号(昭40, 11月)
 上村孝二編『鹿児島県熊毛郡上屋久町宮野浦方言』『方言録音シリーズ 7』(国立国語研究所 昭43, 3月)
 木之下正雄「間投助詞ヲについて」鹿児島大学教育学部教育研究所『研究紀要』第10巻<人文社会科学篇>(昭33, 12月)
 小村秋豊「種子島のことば」『言語生活』第十八号(昭28, 3月)

- 獅子文六『南の風』（新潮社 昭17, 1月）
- 白沢龍郎「子供表現の文末に於ける音声効果について」『岸良方言の研究』（稿本 昭26, 4月）
- 瀬戸口俊治「鹿児島県岡网ヶ水方言」九州方言学会『九州方言の基礎的研究』（風間書房 昭44, 5月）
- 富満ノリ子「鹿児島方言におけるラ行子音の脱落」『国文学攷』第二十七号（昭37, 3月）
- 野村伝四『大隅肝属郡方言集』（中央公論社 昭17, 4月）
- 福里栄三「大隅方言概観」『方言』第四卷第五号（昭9, 5月）
- 北条忠雄「甌島語法の考察」『方言』第八卷第二号（昭13, 5月）
- 村林孫四郎『鹿児島語法』（郷土研究社 昭4, 9月）
- 山下光秋「鹿児島県鹿児島郡谷山町方言集 下」『方言誌』第八輯（国学院大学方言研究会 昭8, 12月）
- 吉町義雄「吐噶喇諸島方言」『旅と伝説』第十三卷第四号（昭15, 4月）
- 「鹿児島ことば（方言絵はがきより）」『方言』第二卷第五号（昭7, 5月）

宮崎県

- 岩本実「日向の高千穂方言」『宮崎大学学芸学部紀要』第17号<人文科学編>（昭39, 2月）
- 小田寛次郎「椎葉紀行」『方言研究』発会記念冊（昭15, 10月）
- 国立国語研究所『宮崎県都市方言録音資料』（国立国語研究所 昭42, 3月）
- 小林中学校『日向国小林地方を中心とする方言雑纂』（自家版 年月不詳）
- 柳田国男「あいさつの言葉(三)」『民間伝承』第十卷第五号（昭19, 5月）

熊本県

- 秋山正次「五家荘のことば（熊本）」『NHK国語講座』（昭32, 8・9月）
- 池辺用太郎『熊本県方言音韻語法』（九州方言研究所 昭8, 6月）
- 上村孝二「天草南部方言覚書——崎津方言——」『薩摩路』第11号（昭42, 1月）
- 倉岡幸吉『肥後方言集』（自家版 昭31, 3月）

- 斎藤俊三『熊本県南部方言考』（熊本県南部方言考刊行会 昭33, 2月）
 坂本久之進「葦北郡昔話」『昔話研究』第七号（昭10, 11月）
 白石寿文「熊本県八代市二見町方言の文末詞について」『国語教育研究』第二号（昭35, 11月）
 能田太郎「肥後南ノ関方言會話誌」『方言と土俗』第二卷第九号（昭7, 1月）
 能田太郎「肥後南ノ関方言會話誌(二)」『方言と土俗』第三卷第二号（昭7, 6月）
 能田太郎『肥後南ノ関方言類集 用言篇』『方言と土俗』第四卷第八号（昭8, 12月）
 能田太郎「玉名郡昔話(一)——熊本県玉名郡南関町——」『昔話研究』創刊号（昭10, 5月）
 原田芳起『熊本方言の研究』（日本談義社 昭28, 1月）
 丸山学「天草島民話」『昔話研究』第十一号（昭11, 3月）

長崎県

- 大浦政臣「対馬北端方言集(二)」『方言』第二卷第三号（昭7, 3月）
 小川信一『長崎県西彼杵郡樺島方言』（中国民俗学会 昭9, 5月）
 古賀十二郎編「長崎方言集覽」『長崎市史 風俗編』（長崎市役所 大14, 11月）
 品川緑朗「長崎ところどころ」『言語生活』第六十四号（昭32, 1月）
 島原第一尋常高等小学校『島原半島方言の研究』（島原第一尋常高等小学校 昭7, 5月）
 清水康子「式見へ行って」『長崎大学方言研究会会報』第一号（昭43, 7月）
 滝山政太郎『対馬南部方言集』（中央公論社 昭19, 9月）
 種ヶ島克巳『平戸方言語法草案』（稿本 昭和10余年？）
 西島宏「長崎県方言の四季」（長崎県諒早）柴田武編『お国ことばのユーモア』（東京堂 昭36, 11月）
 橋浦泰雄「肥前五島方言集」『方言』第一卷第二号（昭6, 10月）
 林田明「長崎市方言の文末助詞」『方言研究年報』第一卷（昭32, 12月）
 山口麻太郎『壱岐島方言集』（刀江書院 昭5, 7月）
 山口麻太郎『続壱岐島方言集』（春陽堂 昭12, 2月）
 山本靖民『肥前千々石町方言誌』（自家版 昭4, 7月）
 山本靖民『島原半島方言集』（湯江中学校 昭28, 5月）

佐賀県

- 小田寛次郎「佐賀県藤津郡久間村地方方言」 『方言誌』第十四輯（昭10，6月）
- 小野志真男「佐賀」 『言語生活』第十五号（昭27，12月）
- 小野志真男「佐賀県方言区画概観」 『佐賀大学教育学部研究論文集』第四集（昭29，11月）
- 佐賀県教育会『佐賀県方言辞典』（河内汲古堂 明35，6月）
- 清水平一郎『佐賀県方言語典一斑』（平井奎文館 明36，10月）
- 野口隆「佐賀昔話」 『昔話研究』第十九号（昭12，5月）
- 山口麻太郎「佐賀県馬渡島の方言」 『方言』第二卷第十号（昭7，10月）
- 吉村一男「佐賀県東松浦郡唐津市方言集」 『方言誌』第十四輯（昭10，6月）

福岡県

- 浮羽古文化財保存会『浮羽方言』<『宇枳波』第三号>（昭32，4月）
- 梅林新市『複製本^{福岡県}方言集』（福岡土俗玩具研究会 昭9，2月）
- 太田省三『『ぶうぎゃ』と『来よんなる』』 『言語生活』第五十四号（昭31，3月）
- 岡野信子「北九州生活語の文末助詞」 福岡県立若松高等学校郷土研究会『研究紀要』第六集（昭29，12月）
- 岡野信子「島郷生活語における形容詞——その構成と表現——」 同上誌第十集（昭35，3月）
- 岡野信子「助詞『カラ』の生態——若松市島郷地区における——」 『北九州 国文』第七号（昭32，6月）
- 岡野信子『『アガ』と『マイ』』 広島大学方言研究会『方言研究会報』第七号（昭40，6月）
- 加来敬一「福岡県方言の語法」 『北九州 国文』第五号（昭30，3月）
- 堤妙子「北九州の『ち』『ちゃ』」 『言語生活』第四十八号（昭30，9月）
- 福岡女子師範学校生徒氏『久留米地方方言』（久留米市誌方言部の写し）（昭10，8月）
- 望月克巳「ことばじりに残る代名詞」 『言語生活』第二十六号（昭28，11月）
- 安田喜代門「福岡県の方言」 日本放送協会九州支部『放送講演集 九州方言講座』

(日本放送協会九州支部 昭6, 5月)

吉村タツコ『福岡県遠賀郡中間町附近方言集』(稿本 年月不詳)
『博多ことば』(方言絵はがき)

大分県

- 糸井寛一「大分県方言とところどころ」『言語生活』第六十六号(昭32, 3月)
大分県立第一高等女学校国文会『豊後方言集』第二輯第三輯(昭9, 3月 昭11, 3月)
大畑(池田)勘「大分県南部の方言の文末助詞」『方言研究年報』第一巻(昭32, 12月)
岡野信子「コン・コ・テコ・トコ」『言語生活』第五十号(昭30, 11月)
里木健二「日田方言の研究」『烏陽』創刊号(日田中学校校友会 昭22, 9月)
土肥健之助『大分県方言類集』(甲斐書店 明35, 12月)
堀江与一・原田兵太郎『大分県方言考』(大分県師範学校国漢学部会 昭8, 11月)
松田正義「方言の旅 大分県」『NHK国語講座』(昭30, 8・9月)
松田正義「大分郡西庄内村」『大分県方言の旅』第1巻(NHK大分放送局 年月不詳)
松田正義・糸井寛一「東国東郡国東町」『大分県方言の旅』第2巻(NHK大分放送局 昭31, 11月)
松田正義・糸井寛一「宇佐郡院内村東院内(1)」『大分県方言の旅』第3巻(NHK大分放送局 昭33, 3月)
松田正義『方言生活の実態』(明治書院 昭35, 9月)
三ヶ尻浩『大分県方言の研究』(明文堂 昭12, 4月)

三 中国地方

- 生田弥範『山陰方言概論』(今井書店 昭25, 12月)
生田弥範『山陰方言雑考』(立林書店 昭31, 5月)
日本放送協会『全国方言資料』第5巻 中国・四国編(昭42, 1月)
日本放送協会『全国方言資料』第8巻 へき地・離島編(Ⅱ) 中部・近畿
中国・四国(昭42, 4月)
広戸惇『山陰方言の語法—出雲・隠岐・石見・伯耆—』(島根新聞社 昭24, 11月)

- 藤原与一『瀬戸内海言語図巻』上巻下巻（東京大学出版会 昭49，3月11月）
山田正紀「瀬戸内海島嶼方言資料」『方言』第二巻第六号（昭7，6月）

山口県

- 榎垣実「山陽道の巻<防府から下関まで>」柴田武編『方言の旅』（筑摩書房 昭35，9月）
神鳥武彦「文末助詞の生態—瀬戸内海西部島嶼方言について—」『方言研究年報』第一巻（昭32，12月）
中川健次郎『小串町覚え書』（自家版 昭29）
原安雄『周防大島方言集』（中央公論社 昭18，2月）
梅光女学院大学方言研究会「山口県豊浦郡豊北町大字阿川の方言表現法」『梅光方言研究』第1号（昭54，6月）
森田道雄『山口県柳井町方言集』（橋正一発行 昭6，5月）
山口高等女学校国語研究部『山口県方言調査』（山口高等女学校校友会 昭7，3月）

広島県

- 江田島町役場「方言」『江田島町史』（江田島町役場 昭33，3月）
岡田統夫「備後地方の『モー』ことば」『国文学攷』第二十七号（昭37，3月）
三原市役所^{総務課}『三原市大観』（広島県三原市役所 昭26，11月）

島根県

- 岡義重「島根県」<全国珍語奇語集>『言語生活』第三十五号（昭29，8月）
加藤義成「中央出雲方言語法考」『方言』第五巻第四号（昭10，4月）
神部宏泰「隠岐方言のナ行音文末詞」『佐賀大國文』第2号（昭29，8月）
神部宏泰「隠岐島五箇方言の文末助詞」『方言研究年報』第一巻（昭32，12月）
神部宏泰「隠岐方言の文表現上の『ワ』類文末詞」『国文学攷』第六十六号（昭50，3月）
後藤藏四郎『出雲方言考』（郷土改善会 昭2，10月）

篠原実『鳥根県鹿足郡方言の調査研究』(鳥根県立津和野高等女学校学友会 昭11, 8月)

鳥根女子師範学校『隠岐島方言の研究』(鳥根女子師範学校 昭11, 9月)

高橋龍雄「文章としての方言の妙味」『方言』第二卷第八号(昭7, 8月)

千代延尚寿「石州中部地方に於ける接尾語と接頭語」『方言』第三卷第一号(昭8, 1月)

千代延尚寿「石見ことばの種々相」『方言』第六卷第十二号(昭11, 12月)

西谷登七郎「郷土方言小識(鳥根県那賀郡^{シモコフ}下府村)」『方言』第二卷第八号(昭7, 8月)

鳥取県

生田弥範『因伯方言考』(就将尋常小学校 昭12, 2月)

生田弥範『西伯方言集』(稲葉書房 昭28, 7月)

石黒武顕『鳥取県方言辞典 後編』(鳥取県方言研究会 昭27, 12月)

稲田浩二・福田晃『大山北麓の昔話』(三弥井書店 昭45, 5月)

岩田勝市『^{因幡}因伯方言輯録』(自家版 昭7, 8月)

岡山県

佐伯隆治『岡山県小田郡方言集』(土俗趣味社 昭10, 9月)

四 四国地方

日本放送協会『全国方言資料』第5巻 中国・四国編(昭42, 1月)

藤原与一『四国三要地方言 対照記述』『昭和日本語の方言』第2巻(三弥井書店 昭49, 10月)

山田正紀「瀬戸内海島嶼方言資料」『方言』第二卷第六号(昭7, 6月)

愛媛県

- 岡野久胤『伊予松山方言集（昭和の浜萩）』（春陽堂 昭13，3月）
 上浦町誌編さん委員会『愛媛県上浦町誌』（上浦町役場 昭49，9月）
 北浦小学校『伯方島誌』（伯方町立北浦小学校 昭42，4月）
 国村三郎『宇和島語法大略』（自家版 年月不詳）
 杉山正世「愛媛県宇和島市」 国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』（明治書院 昭34，11月）
 武智正人『愛媛の方言』（愛媛大学地域社会総合研究所 昭32，5月）
 増田実『南宇和方言の性格』（自家版 昭32，10月）

高知県

- 大西志典「十和村方言メモ」 『幡多方言』第10号（昭35，9月）
 佐藤仙一郎「土佐方言の記述語法」 『方言研究』第4輯（昭16，10月）
 土居重俊「土佐方言語法（下）」 『方言』第七卷第八号（昭12，10月）
 土居重俊『土佐言葉』（高知市立市民図書館 昭33，9月）
 土井八枝『土佐の方言』（春陽堂 昭10，5月）
 浜田数義「幡多方言における敬卑表現」 『高知県立中村高等学校研究論集』第一号（昭31，1月）
 宮地美彦『土佐方言集』（富山房 昭12，10月）

徳島県

- 井上一男「徳島県祖谷方言語彙」 『方言』第六卷第七号（昭11，7月）
 金沢治「阿波方言の語法」 『方言』第二卷第一号（昭7，1月）
 金沢治「阿波美馬郡方言語彙」 『方言』第四卷第二号（昭9，2月）
 金沢治『椛のうた』（金沢治先生還暦記念刊行会 昭34，8月）
 金沢治『阿波言葉の辞典』（徳島教育会 昭35，3月）
 金沢治「阿波の味」 『フォト』（昭43，3月）

- 金沢造生「今日の阿波ことば」 『阿波方言』第三卷第一号(昭31, 3月)
 徳島県立小松島高等女学校『言葉の修養』(自家版 昭8, 9月)
 澤口正治「感動詞あれこれ」 『言語生活』第七十六号(昭33, 1月)
 宮城文雄「徳島県」 <全国珍語奇語集> 『言語生活』第三十五号(昭29, 8月)

香川県

- 桂又三郎『小豆島方言』(中国民俗学会 昭8, 9月)
 草薙金四郎『讃岐の方言』(高松ブックセンター 昭37, 11月)
 陸田稔「讃岐特殊方言」 『方言』第四卷第二号(昭9, 2月)
 脇田順一『讃岐方言之研究』(香川県師範学校附属小学校 昭13, 11月)

五 近畿地方

- 榎垣実『京阪方言比較考』(土俗趣味社 昭23, 5月)
 榎垣実「近畿地方の方言」 『国語学辞典』(東京堂 昭30, 8月)
 佐藤虎男「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」 『国文学攷』第十七号(昭32, 4月)
 佐藤虎男「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」 『方言研究年報』第一卷(昭32, 12月)
 西宮一民「三重・奈良・和歌山」 『方言学講座』第三卷(東京堂 昭36, 4月)
 日本放送協会『全国方言資料』第4巻 近畿編(昭41, 9月)
 日本放送協会『全国方言資料』第8巻 へき地・離島編(Ⅱ) 中部・近畿
中国・四国(昭42, 4月)

兵庫県

- 岡田荘之輔『但馬国温泉町方言記』(自家版 昭31, 11月)
 壁谷真蔭「兵庫神戸の方言小纏」 『方言』第五卷第十一号(昭10, 11月)
 壁谷真蔭「神戸方言『あんなにこんな』」 『兵庫方言』2(昭30, 12月)
 清瀬良一「神戸方言の文末助詞」 『方言研究年報』第一卷(昭32, 12月)

- 佐伯隆治『播州赤穂方言集』（自家版 昭26，4月）
 鹿谷典史『神戸方言集』（神戸郷土研究会 昭14，10月）
 田中万兵衛『淡路方言研究』（福浦葦文堂 昭9，7月）
 中谷竹藏『赤穂言葉の研究』（赤穂高等女学校校友会 昭7，4月）
 服部敬之「淡路方言における一事象——洲本市近辺における一段活用動詞の五段化傾向——」『国文学攷』第二十七号（昭37，3月）
 原朗「播州方言の助詞」『国文論叢』第四号（昭30，11月）
 原朗「神戸と比較した播州高砂市方言の語法抄」『兵庫方言』3（昭31）
 増田欣『淡路方言覚書』（稿本 年月不詳）
 山田潤三「赤穂方言の表現法」兵庫県方言学会『播州赤穂方言の研究 語法編』（兵庫県方言学会 昭31，11月）
 山本俊治「阪神間の方言」『兵庫方言』2（昭30，12月）
 和田実「淡路の語法——（1）」『近畿方言』1（昭25，3月）
 和田実「兵庫県高砂市伊保町（旧 印南郡伊保村）」国立国語研究所報告16『日本語の記述的研究』（明治書院 昭34，11月）

大阪府

- 榎垣実「貝塚市の方言」『貝塚市史』第二卷（昭32，3月）
 木谷蓬吟「翻訳大阪ことば」牧村史陽編『大阪弁』第二輯（清文堂書店 昭23，4月）
 今東光『鬮鷄』＜角川小説新書＞（角川書店 昭32，8月）
 佐藤虎男「大阪府方言の研究（3）——泉南郡岬町多奈川方言の文末詞（二）——」
 『大阪教育大学 学大國文』第十八号（昭50，2月）
 笑福亭松鶴「^{大阪}落語 豆屋」牧村史陽編『大阪弁』第一輯（清文堂書店 昭23，4月）
 竹内徹『和泉方言の研究』（大阪府立佐野高等学校国語研究室 昭24，12月）
 南要『和泉郷荘村方言』（郷荘民俗会 昭10，1月）
 前田勇『大阪弁の研究』（朝日新聞社 昭24，8月）
 牧村史陽「大阪弁集成」牧村史陽編『大阪弁』第三輯（清文堂書店 昭24，8月）
 山本俊治「大阪方言における待遇法（2）」『近畿方言』8（昭25，10月）
 山本俊治「会話における述部表現一助動詞・文末助詞の表現性について」『武庫川学院女子大学紀要』第一集（昭29，2月）

- 山本俊治「大阪方言における文末助詞(池田市のことばを中心として)」『方言研究年報』第一巻(昭32, 12月)
- 山本俊治「大阪方言『ネン』」『国文学攷』第二十七号(昭37, 3月)
- 吉岡たすく「近畿地方」<共通語教育のあり方> 日本放送協会『方言と文化』(宝文館 昭32, 10月)

和歌山県

- 榎垣実「紀州ことば(6)」『和歌山方言』6(昭30, 7月)
- 榎垣実「近畿地方 大島」<奥地・離れ島のことば> 日本放送協会『方言と文化』(宝文館 昭32, 10月)
- 大田栄太郎『和歌山県方言(其一)』(広文社 昭5, 中秋)
- 大田栄太郎『和歌山県方言(其二)』(広文社 年月不詳)
- 岸田定雄「熊野のことば(上)——瀬峡・北山峡附近を中心として——」『和歌山方言』3(昭29, 12月)
- 串本町役場『和歌山県西牟婁郡串本町誌』(串本町役場 大13, 8月)
- 楠見敏雄「有田郡西四月村方言語彙について」『和歌山方言』5(昭30, 4月)
- 楠本実二「奥熊野地方の言語」 地方史研究所『熊野』(地方史研究所 昭32, 7月)
- 杉中浩一郎「セキレイの紀州方言」『近畿方言』5(昭25, 7月)
- 杉村楚人冠「和歌山の方言中の否定詞」『方言』第四巻第五号(昭9, 5月)
- 杉村楚人冠『和歌山方言集』(刀江書院 昭11, 9月)
- 高瀬軍治「高野ロ方言集」『方言』第三巻第二号(昭8, 2月)
- 前田勇「ポスト」『和歌山方言』5(昭30, 4月)
- 松本正信『紀州の方言』(自家版 昭11, 8月)
- 村内英一「文末助詞のニュアンス」『言語生活』第十七号(昭28, 2月)
- 村内英一「文末助詞の考察」『和歌山大学学芸学部紀要』(人文科学Ⅲ)(昭28, 3月)
- 村内英一「語法調査試案」『和歌山方言』4(昭30, 1月)
- 村内英一「熊野方言の問題点——和歌山県がわの——」『三重県方言』第8号(昭34, 7月)
- 村内英一「和歌山県東牟婁郡高池町(新・古座川町)」 国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』(明治書院 昭34, 11月)

- 森彦太郎『南紀土俗資料』（土俗資料刊行会 大13, 3月）
 与田左門『^{紀北}方言 一段活用動詞の未然形』『方言』第八卷第二号（昭13, 5月）
 和歌山県女子師範学校・和歌山県立日方高等女学校『和歌山県方言』（和歌山県女子師範学校 和歌山県立日方高等女学校 郷土研究室 昭8, 3月）

三重県

- 石倉武七「紀伊長島を中心とする地域の敬語表現について」『三重県方言』第1号（昭30, 10月）
 伊藤理子『桑名町中心ノ方言訛語』（稿本 年月不詳）
 巖佐正三「志摩答志の言語調査——中間報告——」『三重大学学芸学部研究紀要』第八集（昭27, 11月）
 巖佐正三「平古に残る桑名武家ことば——アクセント・語法について——」『三重県方言』第3号（昭31, 12月）
 榎垣実「志摩方言——文例訳利用の一例——」『近畿方言双書』第一冊〈東条操先生古稀祝賀論文集〉（昭30, 4月）
 榎垣実「南伊勢地方のヤンカ」『三重県方言』第14号（昭37, 5月）
 太田一平『松阪の方言』（『三重県方言』第12号〈特集〉 昭36, 4月）
 大田栄太郎『三重県方言』（自家版 昭5, 4月）
 北浦謙「伊賀地域に於ける児語の研究(1)」『三重県方言』第1号（昭30, 10月）
 北岡四良『三重県方言資料集 志摩篇』（自家版 昭32, 2月）
 北岡四良『三重県方言資料集 伊賀篇』（自家版 昭33, 1月）
 北岡四良『三重県方言資料集 南勢篇 上』（自家版 昭34, 5月）
 牛歩編『をわせことば』（尾鷲印刷合資会社 昭10, 12月）
 倉田正邦「桑名武家ことば語彙」『三重県方言』第2号（昭31, 9月）
 佐藤虎男「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」『方言研究年報』第一卷（昭32, 12月）
 鈴木敏雄「志摩越賀の会話」『三重県方言』第5号（昭33, 5月）
 鈴木敏雄「志摩町越賀・和具の会話」『三重県方言』第13号（昭36, 12月）
 高田昇「三重県北牟婁郡尾鷲方言」『方言誌』第十五輯（昭10, 12月）
 玉岡松一郎「志摩崎島方言集」『方言』第五卷第九号（昭10, 9月）
 中野朝生「北牟婁地方の助詞について」『三重県方言』第8号（昭34, 7月）

- 東一郎「海山町の方言」 『三重県方言』第8号(昭34, 7月)
 福田学「熊野方言における文末辞について」 『三重県方言』第8号(昭34, 7月)
 馬杉宗伸「御座方言と敬語的表現」 『三重県方言』第5号(昭33, 5月)
 三重県度会郡教育会『地方方言集』(宇治山田市殖産組印刷 大3, 3月)
 三重県立桑名高等女学校『方言訛語集』(自家版 昭8, 2月)
 三島由紀夫『潮騒』(新潮社 昭30, 1月)
 山口幸洋「尾鷲方言の談話資料分析」 『三重県方言』第24号(昭42, 12月)
 山下喜善「桃取方言集一言語生活指導の上から」 『三重県方言』第5号(昭33, 5月)
 横井照秀「津市地方の方言と童謡」 『田舎』第五号(昭9, 5月)

奈良県

- 岸田定雄「奈良県吉野郡の方言調査」 『方言』第二卷第二号(昭7, 2月)
 崎山卯左衛門『中和郷土資料』(森島書店 昭8, 6月)
 新藤正雄『大和方言集』(大和地名研究所 昭26, 10月)
 都竹通年雄『奈良県北部方言覚書』(近畿方言学会 昭30, 12月)
 辻村佐平『菟田之方言』(自家版 昭14, 10月)
 西宮一民「奈良県天理市の方言」 『天理市史』(昭33, 3月)
 西宮一民「奈良県方言の待遇表現について」 『国語学』36(昭34, 3月)
 西宮一民「奈良県磯城郡織田村(新^{シネ}大三輪^{オホミワ}町)」 国立国語研究所報告16 『日本方言の記述的研究』(明治書院 昭34, 11月)

京都府

- 井上正一『丹後網野の方言』(近畿方言学会 昭39, 3月)
 榎垣実『京言葉』(高桐書院 昭21, 12月)
 榎垣実「京おんなの京ことば」 『放送文化』第25巻第1号(昭45, 1月)
 境田二郎「関西方言」 『国文学解釈と鑑賞』第三十八号(昭14, 7月)
 馬淵一夫「口丹波語の諸相」 『言語生活』第三十八号(昭29, 11月)

滋賀県

- 井之口有一『滋賀県言語生活実態調査と対策（中間報告）—滋賀県方言調査報告（第一回）—』（昭26）
- 井之口有一『滋賀県言語の調査と対策——方言調査編——』（自家版 昭27, 7月）
- 岩本一男『滋賀県方言の語法に就いて』（研究物 年月不詳）
- 大田栄太郎『滋賀県方言集』（刀江書院 昭7, 3月）
- 笈五百里「岐阜・滋賀」 日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』（宝文館 昭31, 9月）
- 笠松芙蓉「近江の童謡」 『田舎』第三号（昭9, 3月）
- 佐藤虎男「滋賀県東辺, 東浅井郡吉槻部落とその周辺」 『国文学攷』第十七号（昭32, 4月）
- 滋賀県立大津高等女学校『正しい日常語』（滋賀県立大津高等女学校 昭8, 9月）

六 中部地方

- 愛宕八郎康隆「北陸道方言のイ音尾について」 『国文学攷』第二十二号（昭34, 11月）
- 金田一春彦「中部地方」 日本放送協会『方言と文化』（宝文館 昭32, 10月）
- 日本放送協会『全国方言資料』第2巻 関東・甲信越編（昭42, 2月）
- 日本放送協会『全国方言資料』第3巻 東海・北陸編（昭41, 12月）
- 日本放送協会『全国方言資料』第7巻 へき地・離島編（Ⅰ）（昭42, 3月）
- 日本放送協会『全国方言資料』第8巻 へき地・離島編（Ⅱ） 中部・近畿 中国・四国（昭42, 4月）

福井県

- 大野郡教育会研究部『大野郡口語法並音韻調査』（大野郡教育会研究部 大5, 4月）
- 佐藤茂「ていねいさのずれ」 『言語生活』第二十九号（昭29, 2月）
- 永江秀雄『福井県遠敷郡上中町に於ける方言』（稿本 昭30, 8月）

- 福井県福井師範学校『福井県方言集』(福井県福井師範学校 昭6, 7月)
松崎強造『福井県大飯郡方言の研究』(福井県大飯郡教育会 昭8, 8月)

石川県

- 愛宕八郎康隆「能登島向田方言の文末助詞」『方言研究年報』第一巻(昭32, 12月)
石川県教育会『石川県方言彙集』(石川県教育会 明34, 12月)
岩井隆盛「海土(船倉)方言の概観」『国語方言』第二号(昭27, 12月)
岩井隆盛「能登の『応答』」『言語生活』第四十八号(昭30, 9月)
岩井隆盛「石川」日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』(宝文館 昭31, 9月)
岩井隆盛「白山の麓(白峰の牛首)」日本放送協会『方言と文化』(宝文館 昭32, 10月)
岩井隆盛「方言」白峰村史編集委員会『白峰村史』下巻(白峰村役場 昭34, 4月)
岩井隆盛「石川県金沢市彦三一番丁」国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』(明治書院 昭34, 11月)
岩井隆盛「対人関係の辞的形式——石川方言を例として——」『石川国語方言学会 二月会報』(年不詳)
木村尚『普通語対照 金沢方言集』(宇都宮書店 明42, 9月)
中山随学『松任地方の方言』(町川印刷所 昭4, 11月)
長岡博男「金沢地方の方言『に』の一考察」『方言』第三巻第一号(昭8, 1月)
野田浩「能登島(中乃島)向田・曲りの言語」『石川国語方言学会 十月会報』(昭28)
馬場宏『能登 木郎方言考』(自家版 昭32)
馬場宏「木郎方言考(其の三)」『国語方言』第四号(昭34, 3月)
著者不詳『能登国鹿島郡方言』(七尾春成印刷 年月不詳)
『加賀ことば』(方言絵はがき)

富山県

- 大田栄太郎「富山」日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』(宝文館 昭31,

9月)

- 大田栄太郎『越中の方言』(北日本新聞社 昭45, 9月)
- 河内洋佑「富山県井波地方の“なっぺん”」『言語生活』第八十六号(昭33, 11月)
- 富山県教育会『富山県方言』(山田印刷所 大8, 3月)
- 富山市教育委員会『富山市児童言語調査』第四集(富山市教育委員会 昭29, 3月)
- 富山市教育委員会『富山県方言集成稿(一)』(富山市教育委員会 昭34, 4月)
- 富山市教育委員会『富山県方言集成稿(二)』(富山市教育委員会 昭35, 2月)
- 林政二『砺波方言の研究』(自家版 昭16, 6月)

新潟県

- 岩井隆盛「北陸道の巻<直江津から佐渡へ>」柴田武編『方言の旅』(筑摩書房 昭35, 9月)
- 岩倉市郎「南蒲原郡昔話(二)——新潟県南蒲原郡葛巻村其他——」『昔話研究』第二号(昭10, 6月)
- 大橋勝男ほか「新潟県中蒲原郡横越村川根谷内方言」新潟大学方言研究会『方言の研究』創刊号(昭44, 3月)
- 大橋勝男「新潟県北蒲原郡豊栄町高森方言の文末訴え微妙音」『方言の研究』第二号第二冊(昭45, 3月)
- 押見虎三二「秋山郷方言の語法資料」(プリント 年月不詳)
- 押見虎三二「佐渡方言の文末助詞について——両津市大字片野尾における——」『方言研究年報』第一巻(昭32, 12月)
- 川島主税「新潟県佐渡郡方言」『方言誌』第十八輯(昭12, 1月)
- 剣持準一郎「粟島浦村の言語(一)」『高志路』第二〇一号(昭39, 4月)
- 幸田文時編『さとことば』(発行者栗原九十九 大14, 9月)
- 国学院大学民俗文学研究会『岩船地方昔話集』『伝承文芸』第三号(昭40, 3月)
- 小林存『越後方言考』(高志社 昭12, 11月)
- 小林存「越後方言の結語法概観」『国語研究』第十卷第七号(昭17, 8月)
- 小林存『越後方言七十五年(完)』(高志社 昭26, 12月)
- 新発田尋常高等小学校国語研究部『^{我が校に}於ける不正語矯正実施方策』(昭11, 11月)
- 渋谷玲子「三光方言の待遇表現」『国文学会誌』五号(昭36, 3月)
- 鈴木棠三「佐渡昔話」『昔話研究』第十六号(昭11, 8月)

- 鈴木棠三編『佐渡昔話集』（民間伝承の会 昭14, 8月）
 高島康吉「サロ弁について」 『言語生活』第四十四号（昭30, 5月）
 田上桃咲「紫雲寺郷の古童謡（下）」 『高志路』第一卷六月号（昭10, 6月）
 田中勇吉『越佐方言集』（野島書店 明25, 12月）
 都竹通年雄「日本語の方言区別けと新潟方言」 『季刊 国語』昭和24年度 1（昭24, 5月）
 野口幸雄「西酒屋方言の待遇表現体系」 『日本方言研究会第14回研究発表会発表原稿集』（昭47, 5月）
 細野哲雄「ふるさとのおなまり」 『言語生活』第百七十六号（昭41, 5月）
 丸茂武重「粟島採取録」 『方言誌』第三輯（昭7, 7月）
 水沢謙一「昔あったてんがな」（長岡史蹟保存会 昭31, 11月）
 和田初栄「新潟県北魚沼郡小出方言の文末詞——「カ」・「イ」・「ケ」・「ヤ」——について」 『方言の研究』創刊号（昭44, 3月）

岐阜県

- 荒垣秀雄『北飛驒の方言』（刀江書院 昭7, 3月）
 恵那郡教育会『東濃方言集』（恵那郡教育会 明36, 4月）
 岐阜県恵那郡福岡中学校文化部『福岡地方方言考』（自家版 昭28?）
 岐阜県立郡上高等学校方言研究会『郡上方言』第一集・語彙編（岐阜県立郡上高等学校方言研究会 昭27, 6月）
 瀬戸重次郎『岐阜県方言集成』（大衆書房 昭9, 6月）
 土田吉左衛門「飛驒白川の方言」 『NHK国語講座』（昭31, 12・1月）
 土田吉左衛門「飛驒白川の方言」 日本放送協会『方言と文化』（宝文館 昭32, 10月）
 土田吉左衛門『飛驒のことば』（濃飛民俗の会 昭34, 8月）

愛知県

- 稲垣史生「“ござる”言葉考」 『放送文化』第24巻第9号（昭44, 9月）
 今泉忠義「東三河と西浜名」 『方言』第七巻第八号（昭12, 10月）

- 今枝清胤複製『名古屋教育会編 名古屋ことば』（自家版 昭7，4月）
- 岡田稔「名古屋弁の移り変わり」 『NHK国語講座』（昭32，12・1月）
- 加賀紫水『尾張乃方言 続篇』（土俗趣味社 昭7，7月）
- 芥子川律治「愛知」 日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』（宝文館 昭31，9月）
- 芥子川律治『なごやことば』（市経済局 昭31，12月）
- 黒田鉦一「名古屋地方の方言『ナモ』の研究」 『方言』第一巻第四号（昭6，12月）
- 佐藤虎男「愛知県・三重県海岸線の文末助詞」 『方言研究年報』第一巻（昭32，12月）
- 柴田武「東海道の巻<東三河と西三河>」 柴田武編『方言の旅』（筑摩書房 昭35，9月）
- 鈴木規夫『南知多方言集』（土俗趣味社 昭8，9月）
- 鈴木規夫『名古屋方言の語法』（土俗趣味社 昭9，4月）
- 関山和夫「芸どころに脈うつ“おきゃあせことば”名古屋弁の命脈」 『放送文化』第22巻第1号（昭42，1月）
- 高瀬徳雄「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」 『方言研究年報』第一巻（昭32，12月）
- 谷亮平「豊橋方言の音声と語法」 『方言』第二巻第四号（昭7，4月）
- 谷川三郎「尾張方言転訛語の小研究」 『尾張乃方言 続篇』（土俗趣味社 昭7，7月）
- 三河渥美町立伊良湖岬中学校「方言表」 『中学校において話す力をのばすにはどうすればよいか』（研究物 年月不詳）
- 山口幸洋「細谷で聞いた『花咲じい』」 『土のいろ』復刊第十号（昭33，4月）
- 「名古屋言葉（方言絵ハガキ）」第二輯 『方言』第二巻第十一号（昭7，11月）

静岡県

- 岩井三郎「静岡県井川村方言の考察」 『方言研究』第四輯（昭16，10月）
- 内田保太郎「浜名郡鷺津町付近 <挨拶方言>」 『土乃以路』第十二巻第四号（昭10，12月）
- 後藤一日『遠州の方言』（美哉堂書店 昭43，2月）
- 坂野徳治『静岡県島田方言誌』（三琳書屋 昭37，12月）

静岡県師範学校・女子師範学校『静岡県方言辞典 附 ^{音韻法} _{口語法}』(吉見書店 明43, 3月)

静岡県立島田高等学校文学クラブ言語研究班「大井川上流方言の研究 語法編」
『東雲』8(静岡県立島田高等学校文学クラブ 昭27, 11月)

鈴木脩一「静岡県 ^{志太郡} _{榛原郡} 川根地方方言」『方言誌』第十輯(昭9, 5月)

高井松一郎「挨拶方言 磐田郡山香村地方」『土のいろ』第十二巻第四号(昭10, 12月)

寺田泰政「大井川流域方言の概観」『国語研究』第六号(昭32, 4月)

寺田泰政「動物の出て来ることば遊び」(静岡県磐田郡) 柴田武編『お国ことばのユーマア』(東京堂 昭36, 11月)

徳田晴彦「岳陽語法一用言之部一」『方言』第五巻第二号(昭10, 2月)

徳田政信「静岡県 ^{静岡} _県 岳南語法一助助辞之部一」『方言』第六巻第五号(昭11, 5月)

望月誼三「静岡」日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』(宝文館 昭31, 9月)

山口幸洋「井川村方言の語法実際」『近畿方言双書』第一冊<東条操先生古稀祝賀論文集>(昭30, 4月)

山口幸洋「感動詞に関する浜名郡新居方言」『土のいろ』復刊第五号(昭31, 8月)

山口幸洋『静岡県本川根方言の文』(“静岡県の方言”の会 昭40, 9月)

山口幸洋『静岡県小笠郡大東町大坂方言(上)』(自家版 昭49, 4月)

山口幸洋『静岡旧市域方言』(自家版 昭49, 4月)

山口幸洋『静岡県浜名郡新居町新居方言(2)』(自家版 昭53, 2月)

長野県

青木千代吉『信州方言読本 語法篇』(信濃教育会出版部 昭23, 10月)

青木千代吉『信州方言読本 発音篇』(信濃教育会出版部 昭26, 6月)

青木千代吉「長野」柴田武編『方言の旅』(筑摩書房 昭35, 9月)

井上福実『信州下伊那郡方言集』(昭11, 8月)

上田中学校国漢科『信州上田附近方言集』(大正堂書店 昭7, 10月)

大沢心一『信州佐久地方方言集』(自家版 昭16, 11月)

佐伯隆治「長野市及び上水内郡方言集」『方言』第四巻第一号(昭10, 12月)

佐伯隆治「信州東筑摩郡方言集」『方言』第六巻第十一号(昭11, 11月)

- 佐伯隆治「信州北部方言語法(上)」 『国語研究』第十卷第七号(昭17, 8月)
 佐伯隆治「信州北部方言語法(下)」 『国語研究』第十卷第八号(昭17, 9月)
 斉藤武雄『下高井の言葉(語彙)』(下高井教育会 昭36, 1月)
 畑美義『上伊那方言集』(自家版 昭27, 1月)
 福沢武一『信州方言風物誌 第一』(柳沢書店 昭31, 12月)
 福沢武一『信州方言風物誌 第二』(柳沢書店 昭32, 7月)
 福沢武一『信州方言風物誌 第三』(柳沢書店 昭33, 6月)
 山崎栄雄「信州松代のことば」 『言語生活』第五十二号(昭31, 1月)

山梨県

- 石川緑泥「山梨県河内方言」 『方言と土俗』第四卷第九号(昭9, 1月)
 春日正三「山梨県南巨摩郡身延町の言語生活」 『立正大学人文科学研究 所 研究 報 告』2(昭39)
 清水茂夫「奈良田ことばの語法」 稲垣正幸・清水茂夫・深沢正志共編『奈良田の方言』(山梨民俗の会 昭32, 8月)
 清水茂夫・渡辺宦弘「西山村方言の語法」 『西山村総合調査報告書』(山梨県 教育 委員会 昭33, 3月)
 田中清昭「新しい形容詞」 『言語生活』第三十八号(昭29, 11月)
 土橋里木「昔話に見る富士北麓の方言」 『NHK国語講座』(昭33, 2・3月)
 深沢泉『甲州方言』(地方書院 昭36, 10月)
 望月克己「山梨県峡南地方の敬卑の表現」 『言語生活』第五十四号(昭31, 3月)
 山田正紀『山梨県方言の諸相——資料篇——』(山梨言語地理学会 昭9, 3月)

七 関東地方

- 上野勇「群馬・埼玉」 『方言学講座』第二卷(東京堂 昭36, 3月)
 大橋勝男『関東地方域方言事象 分布 地図』第二卷<表現法篇>(桜楓社 昭51, 2月)
 日本放送協会『全国方言資料』第2巻 関東・甲信越編(昭42, 2月)
 日本放送協会『全国方言資料』第7巻 へき地・離島編(I)(昭42, 3月)

山田修「共通語教育のあり方 関東甲信越地方」 日本放送協会『方言と文化』(宝文館 昭32, 10月)

神奈川県

日野資純「相模方言の素描」 『国語学』第九輯(昭27, 5月)

日野資純「相模ことば」 『言語生活』第十八号(昭28, 3月)

日野資純「神奈川県」<全国珍語奇語集> 『言語生活』第三十五号(昭29, 8月)

日野資純「方言文法論の実践—相模方言を例として—」 『駒沢大学研究紀要』通巻第17号(昭34, 3月)

日野資純「神奈川県愛甲郡煤ヶ谷村」 国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』(明治書院 昭34, 11月)

日野資純・斎藤義七郎『神奈川県方言辞典』(神奈川県教育委員会 昭40, 3月)

山本靖民「神奈川県方言資料」 『方言』第三卷第四号(昭8, 4月)

東京都

浅沼悦太郎『三宅島・御蔵島方言全集』(七島文化研究会 昭12, 3月)

飯豊教一「八丈島方言の語法」 国立国語研究所論集1『ことばの研究』(昭34, 2月)

巖谷大四「敬語雑感」 『放送文化』第19巻第8号(昭39, 8月)

円地女子『ことよ』と『だわ』 『言語生活』第六十号(昭31, 9月)

大島一郎「三宅島及び御蔵島方言の語法」 『国学院雑誌』第五十八巻第六号(昭32, 10月)

大島一郎「伊豆列島方言の語法(Ⅱ)」 『国語学』49(昭37, 6月)

大島一郎「伊豆諸島方言における意志と推量の形」 『日本方言研究会第5回研究発表会発表論集』(昭42, 11月)

大脇繁吉『八丈嶋仙郷誌』(大脇商店 大13, 1月)

金田一春彦「伊豆列島の言葉」 日本放送協会『方言と文化』(宝文館 昭32, 10月)

斎藤秀一編『東京方言集』(自家版 昭10, 1月)

高津勉『くろしおの子(青ガ島の生活と記録)』(新日本教育協会 昭30, 8月)

- 丸尾芳男「八丈島方言」 『方言誌』第一輯（昭6，12月）
 宮川敏雄「冬の夜にウチワの話」（神津島） 柴田武編『お国ことばのユーモア』
 （東京堂 昭36，11月）
 宮本馨太郎『八丈島三ツ根島村方言集』（土俗趣味社 昭11，5月）
 柳田国男編『伊豆大島方言集』（中央公論社 昭17，6月）
 「口語法取調 音韻調査」 『八丈島教育会報』第二号（筆写物によったため年月不
 詳）

千葉県

- 浅野栄一郎「千葉県長生郡一宮町方言」 『方言誌』第十六輯（昭11，6月）
 大岩正仲「千葉県館山市竹原（旧九重村）」 国立国語研究所 報告16『日本方言の記
 述的研究』（明治書院 昭34，11月）
 斎藤達夫「東総地方方言集」 『方言誌』第三輯（昭7，7月）
 館山育男「房州言葉で作られた歌」 『方言』第二卷第九号（昭7，9月）
 塚田芳太郎『千葉方言 山武郡篇』（千葉方言刊行会 昭9，5月）
 野口伸子「千葉県」＜全国珍語奇語集＞ 『言語生活』第三十五号（昭29，8月）
 宮本馨太郎「房州平館方言資料」 『方言』第六卷第七号（昭11，7月）
 本山桂川『千葉県郡別方言集 上篇』（日本民俗研究会 昭7，4月）
 本山桂川『千葉県郡別方言集 中篇』（日本民俗研究会 昭7，7月）

埼玉県

- 池ノ内好次郎『埼玉県入間郡宗岡村言語集』（自家版 昭5，9月）
 大久保忠国「埼玉方言の語法」 『ニュースクール』7（昭25，7月）
 斎藤広一「ビッキをくれない」（秩父地方） 柴田武編『お国ことばのユーア』（東京堂
 昭36，11月）
 杉山正世『埼玉県川越市近傍言語集稿』（自家版 昭5，8月）
 秩父市教育委員会『秩父の伝説と方言』（秩父市教育委員会 昭37，5月）

群馬県

- 有川美亀男「上州ことば」 『言語生活』 第二十号(昭28, 5月)
- 井口実「上州言葉の『ノオ』と『ナア』」 『言語生活』 第二十六号(昭28, 11月)
- 上野勇『万場の方言』(自家版 昭27, 6月)
- 上野勇『ことばのスケッチー利根のことば一』(高城書店出版部 昭34, 9月)
- 片貝政一「桐生市及びその周辺の方言」 『季刊 国語』 昭和23年春季号 1(昭23, 4月)
- 桐生市乙種学事会『桐生地方に於ける方言訛語調査』(自家版 昭11, 2月)
- 小島英男「多野北甘地方の語法」 『季刊 国語』 昭和22年冬季号 3(昭23, 1月)
- 神保広至「群馬郡の語法」 『季刊 国語』 昭和22年冬季号 3(昭23, 1月)
- 反町勝美「勢多(東部)山田(北部)の語法」 『季刊 国語』 昭和22年冬季号 3(昭23, 1月)
- 都九十九一編『村のことば——群馬県勢多郡横野村——』(上毛民俗の会 昭27, 3月)
- 中沢政雄『佐波方言之研究』(自家版 昭17, 9月)
- 中沢政雄「群馬方言概説」 『季刊 国語』 昭22和年冬季号 3(昭23, 1月)
- 中沢政雄「群馬県利根郡片品村言語調査報告」 『季刊 国語』 昭和24年度 1(昭24, 5月)
- 中沢政雄「群馬県」 『NHK国語講座』(昭30, 6・7月)
- 山田修編『きご先生とすりばち学校』(あすなろ書房 昭45, 5月)

栃木県

- 大田栄太郎『栃木県方言』(自家版 昭5, 2月)
- 田代黒龍『高林村郷土誌』(稿本 明44, 5月)
- 栃木県師範学校『本県に於ける言語訛語の調査』(栃木県師範学校 昭13, 3月)
- 中沢政雄「栃木」 日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』(宝文館 昭31, 9月)
- 「栃木県塩谷郡泉村方言集」 『芳賀郡土俗研究会報』 第二卷第二号(昭6, 3月)

茨城県

- 茨城教育協会『茨城県方言集覧』（茨城教育協会 明37, 4月）
- 田口美雄「茨城県方言の考察——主として音韻・語法について——」 『茨城県総合郷土研究誌 民族』（昭14）
- 長塚節『土』（春陽堂 大15, 9月）
- 野元菊雄「茨城」 日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』（宝文館 昭31, 9月）

八 東北（奥羽）地方

- 小林好日『東北の方言』（三省堂 昭19, 3月）
- 仙台税務監督局『東北方言集』（東北印刷株式会社出版部 大9, 8月）
- 都竹通年雄「日本語の方言 東日本の巻」 金田一春彦編『日本語の種々相』（大月書店 昭30, 11月）
- 日本放送協会『全国方言資料』第1巻 東北・北海道編（昭41, 10月）
- 日本放送協会『全国方言資料』第7巻 へき地・離島編（1）東北・関東（昭42, 3月）
- 芳賀綏「＜方言の実態＞東北・北海道」 『国文学 解釈と鑑賞』第十九巻第六号（昭29, 6月）
- 北条忠雄「東北方言に於ける対者尊敬『ス』の本質」 『国語学』第六輯（昭26, 6月）
- 宮良当壮「東北方言と南島方言との比較研究」 『帝国学土院紀事』第三巻第二号（昭19, 7月）

福島県

- 安達善吉『会津方言集（増訂版）』（昭9, 4月）
- 飯豊毅一「福島県における文末助詞——岩瀬郡天栄村を中心として——」 『方言研究年報』第一巻（昭32, 12月）

- 五十嵐正巳『会津若松市方言集稿』(自家版 昭11, 4月)
- 一谷清昭「福島県」<全国珍語奇語集>『言語生活』第三十五号(昭29, 8月)
- 岩崎敏夫『相馬方言集』(岩磐郷土研究会 昭28, 7月)
- 大石初太郎「悪いことば, いいことば」『言語生活』第百四十号(昭38, 5月)
- 大田栄太郎『福島県方言』(自家版 昭5, 1月)
- 香内佐一郎『福島方言集』(岩磐郷土研究会 昭28, 5月)
- 児玉卯一郎『福島県方言辞典』(西沢書店 昭10, 7月)
- 佐藤喜代治「福島県方言の敬語法」『文化』第二十二巻第四号(昭33, 7月)
- 菅野宏「福島のていねい語」『言語生活』第二十九号(昭29, 2月)
- 菅野宏「方言の旅——東北地方 檜枝岐——」『NHK国語講座』(昭31, 8・9月)
- 菅野宏「檜枝岐の方言」日本放送協会『方言と文化』(宝文館 昭32, 10月)
- 高木稲水「磐城方言考(二)」『方言』第五巻第三号(昭10, 3月)
- 武井孝子「会津民謡と方言」『方言』第四巻第五号(昭9, 5月)
- 野元菊雄「みちのくの巻(2)——太平洋筋の巻——<福島市・会津若松市>」柴田
武編『方言の旅』(筑摩書房 昭35, 9月)
- 福島県立安積中学校国語漢文科『方言調査資料』(調査物 昭9, 3月)
- 武藤要『福島県中村町方言集』(一言社 昭6, 10月)
- 武藤要『福島県棚倉町方言集』(自家版 昭7, 2月)
- 山口弥一郎『会津方言集』(増訂版)(岩磐郷土研究会 昭28, 8月)

宮城県

- 大里源右衛門序『仙台方言』(年月不詳)
- 大橋勝男「宮城県の方言の文末訴え音」『方言の研究』第2号第2冊(昭45, 3月)
- 菊沢季生「宮城県方言文法の一斑」『国語研究』第二巻第四号(昭9, 4月)
- 斎藤義七郎「宮城・山形」『方言学講座』第二巻(昭36, 3月)
- 世古正昭『細倉の言葉』(三菱金属鉱業株式会社細倉鉱業所文化会 昭31, 3月)
- 田村寂秋『仙台方言集』(通信文化の会 昭26, 3月)
- 土井八枝『仙台の方言』(春陽堂 昭13, 4月)
- 藤原勉「仙台方言」『仙台市史』6<別篇4>(仙台市役所 昭27, 3月)

山形県

- 内田慶三『米沢言音考』（目黒書店 明35, 10月）
- 大井五郎「庄内はおちゃのでどころ」 『言語生活』第二十二号（昭28, 7月）
- 斎藤義七郎『村山方言会話集』（自家版 昭17, 3月）
- 斎藤義七郎「勸奨的語法『○○ンダ』（山形県村山地方の例）」 『言語生活』第七十八号（昭33, 3月）
- 斎藤義七郎「山形県北村山郡東根町」 国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』（明治書院 昭34, 11月）
- 斎藤義七郎「宮城・山形」 『方言学講座』第二卷（昭36, 3月）
- 斎藤秀一「庄内方言の副詞」 『方言と土俗』第四卷第一号（昭8, 5月）
- 佐藤義則『羽前最上小国郷のトント昔コ』（自家版 昭41, 2月）
- 外村繁「東北」 『中央公論』（昭25, 5月）
- 野村純一・敬子『笛吹き笹 最上の昔話』（東出版株式会社 昭43, 6月）
- 三矢重松『荘内語及語釈』（刀江書院 昭5, 7月）
- 宮良当壮「山形県方言調査の思ひ出」 『出羽方言研究彙報』第一輯（昭25, 2月）
- 山形県師範学校『山形県方言集』（山形県師範学校 昭8, 1月）
- 横山辰次「山形県置賜方言語法」 『方言』第五卷第十二号（昭10, 12月）
- 『方言絵はがき 山形ことば』（方言絵はがき）

秋田県

- 秋田県学務課『秋田方言』（秋田県学務課 昭4, 11月）
- 今村義孝『秋田むがしこ』（未来社 昭34, 9月）
- 内田武志『鹿角方言考』（刀江書院 昭11, 9月）
- 近森繁春『大館方言考』（自家版 昭28, 4月）
- 寺田伝一郎「平鹿郡昔話」 『昔話研究』第二卷第八号（昭12, 6月）
- 湯沢幸吉郎「語法上から見た秋田方言」 『国語史概説』（八木書店 昭18, 1月）
- 渡辺喜恵子「馬瀬川（秋田県能代北）」 『文芸春秋』（昭34, 9月）

岩手県

- 伊能嘉矩『遠野方言誌』(郷土研究社 大15, 6月)
- 『気仙方言誌』(金野静一「第1部語法論」菊池武人「第2部語彙」 自家版 昭39, 11月)
- 国学院大学民俗文学研究会『岩手県南昔話集』 『伝承文芸』第六号(昭43, 4月)
- 小松代融一『平泉方言の研究』(岩手方言研究会 昭29, 10月)
- 小松代融一「岩手」 日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』(宝文館 昭32, 10月)
- 小松代融一『岩手方言の語彙』<岩手方言研究第三集>(岩手方言研究会 昭34, 11月)
- 小松代融一「岩手」 『方言学講座』第二卷(東京堂 昭36, 3月)
- 高橋藤作『西和賀方言の研究』(岩手県和賀郡川尻尋常高等小学校 昭9, 11月)
- 野元菊雄「みちのくの巻(2)——太平洋筋の巻——<盛岡市・水沢市>」 柴田武編『方言の旅』(筑摩書房 昭35, 9月)
- 藤原貞次郎「稗貫郡昔話一陸中稗貫郡湯口村一」 『昔話研究』創刊号(昭10, 5月)
- 本堂寛「岩手県方言における文末助詞『ナハン』について」 『国語学研究』8(昭43, 8月)
- 八重樫真『岩手県釜石町方言誌』(千葉市川町日本民俗研究会 昭7, 3月)
- 『岩手方言』第二輯(方言絵はがき)
- 『盛岡方言』第一輯(方言絵はがき)

青森県

- 青森県『青森県方言訛語』(青森県庁 明41, 9月)
- 北山長雄『津軽語彙』(自家版 昭8, 1月)
- 北山長雄『津軽方言語釈(副詞の部)』 『方言』第五卷第七号(昭10, 7月)
- 工藤祐「買物言葉」 『民間伝承』第十九卷第九号(昭30, 9月)
- 国学院大学民俗文学研究会『下北地方昔話集』 『伝承文芸』第五号(昭42, 3月)
- 此島正年「青森」 『言語生活』第十四号(昭27, 11月)

- 此島正年「青森」 日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』（宝文館 昭31，9月）
- 此島正年「青森」 『方言学講座』第二卷（昭36，3月）
- 佐藤政五郎「南部方言訛語序説」 『郷土号』第四号（昭11，4月）
- 菅沼貴一『青森県方言集』（青森県師範学校 昭10，6月）
- 滝野沢栄一「津軽方言の語法」 『方言』第五卷第二号（昭10，2月）
- 都竹通年雄「方言文法論の方法」 『国語学』第十二輯（昭28，7月）
- 寺井義弘『青森県南部方言考』＜昭和37年度研究資料1＞（八戸市教育委員会 昭37，10月）
- 中市謙三『野辺地方言集』（三元社 昭11，8月）
- 能田多代子「三戸郡五戸町昔話」 『昔話研究』第二卷第十二号（昭12，10月）
- 能田多代子『五戸の方言』（国学院大学方言研究会 昭13，3月）
- 能田多代子『青森県五戸語彙』（自家版 昭38，2月）
- 日野資純「津軽方言の文法に関する一考察」 『国語学』22（昭30，3月）
- 宮良当壮「青森県の方言（1）」 『日本の言葉』第1巻第1号（昭22，6月）
- 『津軽方言えはがき』第一輯，第二輯（方言絵はがき）

九 北海道地方

- 石垣福雄「北海道」＜全国珍語奇語集＞ 『言語生活』第三十五号（昭29，8月）
- 石垣福雄「北海道」 日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』（宝文館 昭31，9月）
- 石垣福雄「北海道檜山郡江差町」 国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』（明治書院 昭34，11月）
- 石垣福雄「北海道は方言試練の場 死滅したことばと生き残ることば」 『放送文化』第22巻第2号（昭42，2月）
- 小野米一編『北海道奥尻島方言の研究』（北海道教育大学旭川分校国語学研究室 昭51，2月）
- 小野米一編『北海道漁村方言の研究—南茅部のことばと生活—』（北海道教育大学旭川分校国語学研究室 昭52，3月）
- 小野米一編「礼文島方言調査報告」 北海道教育大学旭川分校国語学ゼミナール『ことのほ』15号（昭52，3月）

- 佐藤誠「^{おがしい}大鯿, 大鯿いらないか」(北海道江差) 柴田武編『お国ことばのユーモア』
(東京堂 昭36, 11月)
- 佐藤誠「お前のうちにカラス住んでるか?」(函館市の山背泊, 穴瀬方面) 柴田武編
『お国ことばのユーモア』(東京堂 昭36, 11月)
- 土居重俊「北海道方言素描」『方言研究』第五輯(昭17, 6月)
- 中村美佐雄『北海道風土記 童戯と方言』(帝都出版社 昭21, 7月)
- 日本放送協会『全国方言資料』第1巻 東北・北海道編(昭41, 10月)
- 渡辺茂『北海道方言集』(楡書房 昭30, 8月)

十 一般の部

- 天野祐吉「野次馬最前線」『放送文化』第35巻第3号(昭55, 3月)
- 池上禎造「近世」国語学会編『国語の歴史』(秋田屋 昭23, 10月)
- 稲垣史生「“ござる”言葉考」『放送文化』第24巻第9号(昭44, 9月)
- 岩波文庫『大蔵虎寛本能狂言 下巻』(岩波書店 昭20, 1月)
- 大西雅雄「『ねー』の種々相」『音声学協会会報』第14号(第3巻第4号)(昭4,
5月)
- 金田一京助『国語の変遷』(日本放送協会 昭16, 2月)
- 佐藤虎男「転成文末詞『ニ(ニ一)』について」『国文学攷』第五十七号(昭46, 11
月)
- 静岡県警察部刑事課『全国方言集』(自家版 昭2, 7月)
- 橘正一「ナモシの分布」『方言』第五巻第二号(昭10, 2月)
- 都竹通年雄「方言文法」『国文学 解釈と鑑賞』第十九巻第六号(昭26, 6月)
- 東条操『全国方言辞典』(東京堂 昭26, 12月)
- 東条操編『日本方言学』(吉川弘文館 昭28, 12月)
- 東条操『全国方言辞典 補遺篇』(東京堂 昭29, 12月)
- 東条操『分類方言辞典』 都竹通年雄「小詞」(東京堂 昭29, 12月)
- 永田吉太郎『方言資料抄 助詞篇』(自家版 昭8, 11月)
- 永田吉太郎「終助詞私見, シを中心として——方言語法の問題(五)——」『方言』
第四巻第十一号(昭9, 11月)
- 新村出『国語学叢録』(一条書房 昭18, 11月)
- 藤原与一『日本語方言文法の研究』(岩波書店 昭24, 12月)

- 藤原与一『日本語方言の方言地理学的研究』〈英文〉(タトル商会 昭31, 10月)
- 藤原与一「国語諸方言上の『ダ』『ジャ』『ヤ』」 『広島大学文学部紀要』第15号(昭34, 3月)
- 藤原与一『日本語の方言文法』〈英文〉(上智大学モニュメント・ニッポニカ No.20 昭40, 7月)
- 藤原与一『瀬戸内海言語図巻』上巻下巻(東京大学出版会 昭49, 3月11日)
- 藤原与一『方言敬語法の研究 続篇』(春陽堂 昭54, 5月)
- 北条忠雄「方言語法に関する管見及び考察(三)」 『方言』第七卷第八号(昭12, 10月)
- 本堂寛「地方特有語についての言語地理学的一考察」 『文化』第二十一卷第四号(昭32, 7月)
- 前田勇「終助詞『ぞ』, 江戸・上方のそれについて」 『国語学』40(昭35, 3月)
- 松下大三郎『標準日本口語法』(中文館書店 昭5, 2月)
- 村内英一「文末助詞のニュアンス」 『言語生活』第十七号(昭28, 2月)
- 文部省『標準語と方言』第3集(一あらたまってものを言う場合にも出る方言について一) 国語シリーズ 43(明治図書出版株式会社 昭36, 1月)
- 柳田国男「鳴と哉」 『言語研究』第一号(昭14, 1月)
- 柳田国男『国語の将来』(創元社 昭14, 9月)
- 柳田国男『毎日の言葉』(創元社 昭21, 6月)
- 山田孝雄『日本文法学概論』(宝文館 昭11, 5月)
- 山本俊治「会話における述部表現—助動詞・文末助詞の表現性について—」 『武庫川学院紀要』第一集(昭29, 2月)

索引

○二種の索引を設定する。

○語句排列は、アイウエオ順によらないところもある。

I 方言事象索引

〔ア〕

アータ	479, 480, 481, 483
アイ	401, 591, 592
アエ	401
アガ	474
アガ	612
アシ	612
アタ	479, 480, 481
アター	479
アタッ	479
アタナ	482
アタモシ	544
アッ	591
〔アナタ〕の属	479
アナタ	363, 480, 481, 482, 484
アナタヨ	481
〔アラー〕式の言いかた	400
アラア (決意を指示する)	471
アリヤン	317
アン	33
アンシ	470
アンジャー	470
アンジャー	470
アンタ	480, 481, 482, 483, 488

アンター	483
アンタナ	481, 482, 484
アンタナー>タナー>タン	73

〔イ〕

イカナ	321
いそ	376
イッサイ	607
イッサエイ	607
イッシー	607
イニ	27
イヤ	231, 232
イロ	162

〔ウ〕

ウエイ	396
ウエ	389
ヴェ	414
ウエイ	396
ウエイネ	398
ウエ	381, 386, 392, 396
ウエーネ	398
ウエネ	398
ウエヨ	391

ウエレー	463
ウオ	392
ウチ	380
ウン	592

〔エ〕

エ	129
えい	582
エイノ	606
エー	592
エカ	368
エシ	577
えす	577
えむし	576
エモ	538, 539, 541, 549, 552, 576, 577, 578
エモン	541, 542, 552, 576, 577
エモシ	576
えもし	576
エレ	464

〔オ〕

オ	325, 337, 338, 339, 340, 341, 342
オイ	516, 578, 579, 591, 592
おい	580
オエ	579
オーン	339, 341
オナ	340
オナエ	339
オナッス	340
オネ	339
オネス	339
オノ	340
「オマイ」の属	474
オマイ	475, 485
オマエ	475

オマス	ワ	427
オマヤ		475
オメー		476
オヤ		339
「オレ」の属		449
おわ		201
オン	325, 337, 338, 339, 340, 341, 342	
オンシ		469
オンセ		341
オンナ	339, 340	
ナンネ		339
オンネシ [i]		341
オンノ		341
オンヤ	339, 340	
オンワ		440

〔カ〕・〔ガ・ガ〕

カ	368, 370
カ・カイ	153, 154
カ——カン	193
「ガ(ガ)・ガイ(ガイ)」の属	128
南島地方の「ガ」	130
九州地方の「ガ・ガイ」ほか	131
中国地方の「ガ・ガイ」ほか	138
四国地方の「ガ・ガイ」ほか	141
近畿地方の「ガ・ガイ」ほか	144
中部地方の「ガ・ガイ」ほか	147
関東地方の「ガ・ガイ」ほか	151
東北地方の「ガ・ガイ」ほか	153
北海道地方の「ガ・ガイ」ほか	154
ガ・ガイ	136, 137, 155
ガ(ガ)・ガイ(ガイ)	149
ガ	15, 130, 147, 148
ガ	2, 11, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 143, 144, 146, 147, 148, 149, 150, 152
ガ(ガ)	16, 128, 129, 145, 149, 154

ガ (→ガー)146
 ガ→ガイ141, 142
 ガ十エ (「ガエ」も)145
 カー367, 369, 370
 ガー128, 130, 133, 145, 147
 ガー2
 ガーエ136
 ガーチャ239
 ガーモ512
 ガーレ465
 カイ133, 369, 510
 カイ>「ケー・ケ」140
 ガイ→ガエ149
 ガイ133, 134, 135, 136, 137, 138, 139,
 141, 146, 149
 ガイ (ガイ)129, 145, 149, 150
 ガイ→ゲ138, 140, 141, 146
 カイアータ490
 ガイエ146
 ガ (ガ) イエ129
 カイシ525
 カ (ガ) イシ526
 ガイシ146, 150
 カイシー525
 ガイシー525
 ガ (ガ) イゾ129
 カイタ410, 490, 491, 494
 ガイタ491
 カイチャ239
 ガイチャ150, 239
 ガイチャ (ガイチャ)150
 ガイトコト150
 ガイナ146
 ガイニ33, 34
 ガイニ33
 ガイネ150
 ガ (ガ) イネ129
 ガ (ガ) イノ129

カイモ539
 ガイモ151, 539
 ガ (ガ) イヤ129
 ガ (ガ) イヨ129
 カエ129, 153
 ガエ134, 135, 136, 137, 141, 145, 146
 ガ (ガ) エ129
 がえ150
 ガエイ149
 ガエイネー (ガエイネー)150
 ガエ (ガエ)129
 ガエーシ150
 ガエニ33
 ガエニ33
 カエモ539
 カケ368
 ガサ147
 カシ525, 527, 530, 536
 カシ (ガシ)529
 ガシ525
 ガシテ315
 カシュー530
 カシラ209, 211
 カシラン209
 カス530, 532
 かすら209
 カセ530
 カタイ74
 カチャ237
 カチャ241
 ガチャ239
 ガチャ→ガッチャ239
 ガッス532
 カッチャ243
 ガッベ197
 カデ99
 ガデ99, 143, 144
 ガデ→ガレ144

カテテ225
 カテテケ225
 カテテヤ225
 カテテヨ225
 ガナ134, 142, 146
 ガ(ガ)ナ129
 カナーシ544
 カナシ544
 カナタ485
 ガナタ485
 カナモ553
 カナンタ491
 「ガニ」の属165
 ガネ151
 ガ(ガ)ネ129
 カネシ572
 カノ6
 ガノ138, 150
 ガ(ガ)ノ129
 カノバイ410
 カハ505
 ガベガ197
 カヘン613
 カマア596
 ガマア596
 カマイ478
 「カモ」の属162
 カモ539
 ガヤ136, 139, 142, 147, 151
 ガ(ガ)ヤ129
 ガヨ134, 139, 140, 142, 143, 151
 ガ(ガ)ヨ129
 ガヨー139
 「カラ」の属155
 カラ156, 157, 158, 452
 ガラ156, 157
 カラー590
 カラシ156

カ(ガ)ラシ530
 ガラシ156
 カラッシ157
 カラニ29
 カリ158
 カレ99, 452, 453, 454, 460, 465, 466
 ガレ142, 147, 453, 460, 465
 カワ438, 439
 カン371
 ガン148
 ガン137, 138, 139, 141, 142, 146, 148,
 311
 ガン→ガーン152
 カンシ470
 感声の文末詞「ダ」175, 176
 カンタ410, 485, 490, 491, 495
 ガンダ146
 カンタナ491
 カンタン491
 カンモ537

〔キ〕・〔ギ〕

キ160
 キー370
 キサー470
 キサマ469
 キサン470
 キシャン321
 キヤ198
 キヤー365, 369
 ギヤ(ギヤ)ー129
 キヤーモ539
 ギヤーモ151, 539
 キョン614

〔ク〕・〔グ〕

クサ166, 167, 271, 492

クサイ167, 411
 クサイ→サイ168
 クサタナ492
 クサナ167, 169
 クサマイ169
 クサレ167
 クサン168
 クサンタ168, 492
 クサンモ168
 クシャー168
 クセー (クシエー)168
 クヤイ393
 「クライ」の属169
 クライ358, 359
 クレー360
 グレー360
 グレン360

〔ケ〕・〔ゲ・ケ〕

「ケ」の属197
 ケ159, 367, 368, 370, 371, 510
 ゲ136, 149, 460
 ゲ (ゲ)149, 150
 ケァ198
 ケァー369
 ゲァ (ゲァ)129
 ケァーモ (キァーモ)539
 ケー198, 365, 366, 367, 368, 369
 ゲー149
 ゲー133, 141, 145, 154
 ゲ (ゲ)129
 ゲー (ゲー)149, 150
 ゲーネー (ゲーネー)150
 ケーノー368
 ゲーノー150
 ケカ368
 ゲチャ150

ゲッチャ150
 〜けどワ441
 「ゲナ」の属194
 ゲネ150
 ゲネー (ゲネー)150
 ゲノ150
 ケモ539
 ケヤ368
 ゲヤ145, 150
 ケヨ368
 「ケレド」の属163
 「ケン」の属159

〔コ〕・〔ゴ〕

コ343
 コイ308, 309, 311
 コイ (エ)308, 309, 310
 ゴイナ306
 コー343, 365
 ゴー304, 305
 コーツ346
 ゴーナ305
 ゴサ442
 ゴザ306, 307
 ゴザイ (エ)310
 「コソ」の属165
 コソ271
 コソ→クソ166
 コタ345, 346
 こた356
 ゴタ357
 ごた356
 ゴダ356
 コター345, 348
 コチ346
 コチー345
 コツ345, 346

コッ	343
ゴツ	345
コッテ	346
コテ	344, 345, 346, 352, 353, 354, 356, 357
コデ	356
ゴテ	344, 346
ゴデ	352, 356
コティ	345
コテー	344
コデー	344
ゴテー	345
コテサー	354
「コト」の属	343
コト	324, 343, 345, 348, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 358
コド	357
ゴト	355, 356, 357
ゴド	355, 356, 357
ゴド	355
コトイ	348, 352, 353
コトイ (ナヌノ)	353
コトイ (ノウ)	347
コトイナ	348
コトイナー	353
コトイネ	348
コトイネー	347
コトイヤ	348
コトヨ	354
コナ	469
コラ	371, 372, 582, 585, 591
コラー	582
コリ	366
「コレ」の属	364
コレ	363, 364, 366, 372, 378, 516
コロ	585
ゴロージ	305
コン	367

ゴン	311
コンタ	469
ゴンナ	305

〔サ〕・〔ザ〕

サ	247, 419
ザ	104, 200
サー	381
ザー	200
サーヘー	510
ザエモ	539
サガ	139
サカー	160
「サカイ」の属	160
サコー	310
サラ	515, 586
ザレ	463
サン	317
サンセ	317

〔シ〕・〔ジ〕

シ	520, 521, 522, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 535, 537, 556, 613
シ (ス)	526, 528, 531, 532, 533, 534, 535, 536
シ [i]	528
ジ	107, 108
シャ	533
シー	525, 535
シー	195
ジー	107
ジェー	123
シカ	201
シタ	316, 496, 530, 532

シテ312, 313, 315
 シター313
 シテナ313
 シテヤー316
 シテヨ (ヒテヨ).....314
 シニー316
 シャ246, 248, 530, 531, 532, 533, 536
 「ジャ」の属.....181
 ジャ 123, 125, 170, 182, 184, 185, 186, 188
 ジ (ヂ) ャ124
 ジャ (ジャン).....122
 ジャ→ジャン189
 シャー535
 ジャー122, 183
 ジャン123, 124, 182, 183, 185
 ジャンカ123
 シュー529
 シュウ529
 シヨ523, 527, 529
 シ (ス) ヨ533
 ショ529

[ス]・[ズ]

ス374, 533
 ス (シ).....532, 535
 ス [t̚].....528, 531
 ズ200
 ズ (ヅ) ャ292
 ズ (ヅ) ァー293
 ズエ290
 スカ533, 534
 ズバ207
 スヤ534

[セ]・[ゼ]

ゼ..... 86, 97, 104, 110, 115

ゼ→ジ101
 ゼ→デ.....96, 105
 セァ533
 ゼアイ389
 セー377
 ーセー614
 ゼー293
 ゼーモ539
 ゼッス532
 (〜)セナー393
 ゼハ505
 ゼモ539

[ソ]・[ゾ]

ソ201, 373, 374, 375, 377, 526
 ソ (ホ).....8
 ゾ104
 ゾ→ド.....42
 ソア583
 ソイ376
 ソイナ374
 ソイネ374
 ソイノ374
 ソイヤ374
 ーソエ614
 ソエ376
 ゴエナモ553
 ソエノ374
 ゴエモ539
 ソー376, 583, 584
 ソカ374
 ソカナ374
 ソカン374
 ゴケ368
 ソケー374
 ゴシ529
 ソデ.....93, 374

ゾデ	98
ゾデー→ゾレー	99
ゾハ	505
ソバイ	412
ぞまい	478
ゾヨ→ゾイ	56
ゾヨ>ゾイ>ドイ>ダイ	78
ソラ	516, 583, 584, 585
ゾラ	583
ソリ	613
ソリャー>ソラー→サラ	586
「ソレ」の属	372
ソレ	363, 364, 378, 589
ゾレ	460
ソレー	374
ソロ	585, 586
ゾワ	439

〔夕〕・〔ダ〕

タ	67, 74, 480, 482
「ダ」の属	170
「ダ」文末詞の存立と活動	171
ダ	79, 80, 83, 84, 116, 170, 180, 184
ダ>サ	139
ダ→ダイ	173, 174
ター	67, 68, 71, 72, 74, 76, 77
ダー	2, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 171, 175, 179
ターイ	66, 70
ダーイ	79
ダーイ	78, 82
たーイ	70
ダーカイ	179
ターヨ	66
ターナ	68, 70, 480
「タイ」文末詞	60

九州方言の「タイ」の属	60
九州外での「タイ」文末詞	74
タイ	60, 61, 62, 64, 65, 66, 67, 69, 70, 72, 73, 74, 76, 77, 80, 82, 172, 402, 406, 411
タイ→タ	67
タイ>ダイ	78
タイ→テー	68
タイ→トイ	63
タイ→トゥイ	63
「ダイ」文末詞	77
九州方言の「ダイ」の属	78
九州外での「ダイ」文末詞	84
ダイ	77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 171, 172, 178, 180
ダイ→ダ	172
ダイ→ダ	78, 171
ダイ→ダー	78, 171
ダイ→ラー	81
ダイ→ライ	81
タイエ	71
タイタ	68, 410, 491, 494
ダイタ	492
タイデ	90
タイナ	68, 69, 70, 71, 72
ダイナ	78
タイナー	70
タイナター	71
タイネ	70, 71, 72
タイノ	70, 71, 72
タイノ	74
タイマー	70
ダイヤ	174
タイヨ	71
タウ	67
タエ	67, 68, 76
ダカ	174, 178, 179
ダカ→サカ	175

ダガ139, 140, 180
 タ (→ダ) 行文末詞86
 ダゲ147
 ダゲナ195
 ダゼ178
 ダデ95, 174
 タナ70, 71, 480, 481, 482, 484
 ダナ81, 172, 174, 178
 タナー70, 73
 タナーチコ272, 482
 タナーヨ482
 タナイ480
 タナチコ272, 482
 タナン480
 ダニ35, 36, 38, 78, 178
 タネ481
 ダネ178
 ダノ178
 タバイ495, 497
 ダハン177, 502
 タマー70
 タマイ478, 493
 ダヤ178
 ダヨ178, 179
 タラ209, 210, 211, 212
 tari77
 ダワ174, 179, 423, 433, 434, 437
 ↗
 ダワ436
 ～ダワ442
 ダワナ178
 ダワネ178
 タン68, 69, 70, 71, 72, 73
 ダン80, 81, 82, 84, 171, 178, 180
 タンガ66
 タンタ71, 410, 486, 491, 492, 495
 ダンタ81, 172, 492, 495
 ダンニ36
 タンモ71, 72, 481, 537

ダンモ82, 172

[チ]・[ヂ]

チ266, 275
 チ チコ263
 チー269
 チー102
 チュ248, 251, 274
 チュ——トゼ46
 チューン235
 チカ269
 チガ269
 チケ269
 チコ270, 271, 272
 チコタナ482
 チコタナー272
 チチ267
 チッ269
 チテー269
 チ [i] ネ95
 チヤ232, 233, 234, 237, 245, 252, 273
 チャ208, 221, 228, 229, 230, 231, 232,
 233, 234, 235, 237, 240, 244, 245,
 246, 247, 249, 250, 252, 253, 533
 チヤ チャ227
 チヤ→チャー230
 チャ→チャイ239, 244
 チャ→チャン236
 チヤ95
 チャ95
 チ (ジ) ャ115, 116, 117, 118, 119,
 120, 121
 チャー228, 243
 チャー183
 チャイ228, 245, 612
 チャス201
 チャナ247

チャネ	247
チャヤ	247
チャン	229
チャンター	612
チュ	258
チュア	254
チュアー	256
チュイ	254
チュー	253, 254, 255, 256, 258, 273
チュー チュ	253
チュー→ツ	285
チューカイ	288
チューゼ	287
チュータイ	254
チュータラ	210, 255
チューテ	255
チューナ	257
チューニ	256
チューノニ	255
チューモ	254
チューモン	254
チューヨ	257
チューワ	222, 255, 256
チューワイ	258
チュカイ	255, 288
チュカイ→ツカイ	288
チュゲ	256
チュッ	254
チュッタラ	257
チュナ	254
チュノニ	256
チュモン	254
チュヤ	257
チュワ	254
チュワー	254
チュワイ	254
ちゆん	258
チュンヤ	256

チヨ	259, 260, 265, 266, 268
チヨ	259, 263
ヂヨ	96
ヂ [i] ヨ	95
チヨイ	260
チヨ	265, 268
チヨ	258, 263
チヨイ	260
チヨガナ	262
チヨゼ	262
チヨゾイ	262
チヨナ	262
チヨワ	262
チヨナ	263
チヨノ	261
チヨワ	261
チヨワナ	261
チン	268

〔ツ〕・〔ヅ〕

ツ	286
ツ (ヅ)	293
ツ・ヅ	285, 289
ヅ	292, 293
ツァ	290
ツァ	288
ヅァ	292
ツァエ	241
ヅィ	292
ヅィーヨ	292
ツ	286, 288, 293
ツ (ヅ)	290
ヅ (ヅ)	286, 289
ツゼ	287
ツウド	289
ヅエ	292
ツオ	291

つお290
 ツォー614
 ズ〔ü〕オン341
 ズ〔ü〕オンネシ〔i〕341
 ツカ44, 46, 287, 288
 ツカ286
 ツカー286
 ツカヨ287
 ツケ289
 ツケア292
 ツコッタ289
 ツコッタナ289
 ツゼ287
 ツゾ287, 288, 289
 ツゾヨ287
 ッタイ69, 72
 ツッテ293
 ツデ288
 ツテナ288
 ツナ289
 ツナイ289
 ツナン289
 ツノ286
 ツノー288
 ッパイ407
 ツバイ406, 408, 409, 410
 ツパエ408
 つもっ291
 ズモンナ→ズモナ294
 ツヨ46
 ツワ287, 288
 ツワ——ツワ289

〔テ〕・〔デ〕

テ222, 273, 274, 275, 276, 277, 278,
 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285
 「テ」の「チ」274, 276, 282

「デ」の属85
 南島地方の「デ」ほか87
 九州地方の「デ」ほか87
 中国地方の「デ」ほか92
 四国地方の「デ」ほか95
 近畿地方の「デ」ほか99
 中部地方の「デ」ほか104
 関東地方の「デ」ほか109
 東北地方の「デ」ほか111
 北海道地方の「デ」ほか114
 デ85, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94,
 95, 97, 99, 100, 101, 102, 103, 104,
 105, 106, 107, 108, 110, 112, 114,
 115, 128
 デ→ジ100, 101
 デ→ジ(ヂ)101
 デ——ゼ98
 デ→ヂ86, 88, 89, 90, 94
 デ→リ101
 デ→レ92, 97, 105
 テァ283
 「デア」「ヂ(ジ)ャ」「デワ」115
 東北地方・北海道地方の「デア」
 「ヂ(ジ)ャ」117
 その他地域での「デア」「ヂ(ジ)
 ャ」形121
 デワ126
 デァ115, 116, 117, 118, 119, 120, 121,
 125, 126
 デアー121
 デァー127
 テァス201
 ディ87
 ティコト350
 デイナ98
 テイヤ220
 ディャ87, 171
 テー274, 313

デー……………91, 108, 110, 113, 284, 594
 デー [↗]……………86, 94, 112
 デー→レー……………98
 デーニ……………27
 テーモ……………539
 テーヤ……………214, 215
 テエヤ……………220
 テーン……………223
 デオ……………89
 でお……………113
 デカ……………98, 100
 デガ……………143
 デカイ……………98
 テコト……………350
 テス……………534
 ～デスラ……………390
 ～デスラー……………390
 ～デスライ……………390
 ～デスワ……………427
 デゾ……………98
 テチ……………226, 267
 テチサリ……………227
 テテ……………226
 テテ(テチ)……………224
 テテケ……………225
 テテナ……………225
 テテヤ……………225
 テナ……………277
 デナ……………106
 テバ……………202, 204, 205, 208, 211, 212, 252,
 350
 テバ→デバ……………206
 デバ……………203, 205
 デバサ……………206
 テバシ……………536
 デバ(てば)シ(ス)……………536
 デバナ……………207
 デバヤ……………206

デバヤー……………205
 での……………340
 テヤ……………213, 215, 216, 217, 219, 220, 221
 テヤ—チャ……………218
 テャ……………238
 デヤ……………93, 95, 101, 102, 103, 104, 105,
 108, 114, 120, 121, 125
 でや→れあ……………120
 テヤー……………214, 215
 テャー……………214, 238
 デョ……………93, 95, 96, 97, 101, 102, 103, 104,
 105, 108
 デョ→ジョ……………109
 デョ→ジョ……………102
 デョ→デョ(ジョ)……………98
 テラ……………223
 デラ……………223
 「～てラー」式の言いかた……………401
 テワ……………221, 222
 デワ……………87, 115, 127
 てわい……………222
 テン……………279
 テンガノ……………227
 伝達の「トイ」……………56

〔ト〕・〔ド〕

「ト」の属……………41
 ト……………6, 8, 41, 42, 43, 45, 46, 50, 51, 52,
 86
 ト(ド)……………53, 54, 55, 56
 ト→ツ……………44, 45, 46
 ト→ド……………52
 ト→トン……………44
 トイ……………41, 48, 52, 56, 57, 59, 60
 トイ>タイ……………62, 63
 トイ→テ……………58
 トイス……………534

トイデー……………92
 トイナ……………58
 トイナー……………59
 トイニ……………33
 トイネ……………58, 59
 トイノ……………58, 59
 トイノ→テノ……………58
 トイヤ……………58, 59
 東京語の「ワ」……………434
 どうどうしマッサ……………419
 トエバイ……………409
 トー……………44, 54, 71
 トーイ……………607
 トオメーナサエー……………297
 ドーモ……………514
 トオモイナサレ……………297
 トオモワッサエマセ……………298
 ドーレ……………594
 トカ……………43
 ト(ツ)カ……………45, 46
 トカナ……………45
 トキャー……………44
 トゲナ……………194
 トコ……………271, 349, 351, 352, 362
 トゴ(トコ)……………361
 トゴイ……………361
 トコゾ……………351
 トコタ……………350
 トコターナー……………350
 トコト……………348, 349, 350, 351, 352
 トコトイ……………349
 トコトイネ……………351
 トコトニャー……………351
 トコリ……………361
 トコレ……………361
 トコレー……………360
 トコロ……………358, 360
 トサ……………52, 56

トシ(ス)……………534
 ドシ……………54
 ドシ(ス)……………534
 トシ(ス)ヤ……………534
 ～ドスワ……………429
 トターイ……………69
 トタイ……………68, 69, 71, 72
 トヂャイ……………612
 トッシャ……………531
 トッショ……………53
 「トテ」の属……………160
 トテ……………212
 トデバイ……………409
 トド……………44
 トネ……………46
 ト(ツ)ネ……………44
 トハ……………505
 トバ……………445
 トバイ……………405, 406, 408, 409, 410, 412
 「ト・バイ」→ダイ……………83
 トバイエ……………408
 トバナ……………446
 トバン……………408
 トヘ……………510
 トヘー……………510
 トマサイ……………298
 トマッサイ……………298
 トマッサイ(エ)……………298
 トマッセ……………298
 トマハイ……………298
 トミ……………296, 301
 トミー……………296, 300, 302
 トミーナー……………301
 トミタガエー……………302
 トミナイ……………301
 トミナサイ(トミナサエー)……………302
 トミナサイマセ……………302
 トミナハイ……………302

トミヤ302
 トミンサイ301, 302
 トミンサイナー301
 トミンサンセ301
 とみんしゃー302
 とみんせー302
 トメー296, 297
 トメー→トミー301
 トメーサイ296
 「トモ」の属160
 「ドモ」の属164
 ドモ514
 ドモ→ドン164
 トモイ295, 296, 297
 トモイサンセ295
 トモイナサイ296, 297
 トモイナサイマシエ297
 トモイナサンセ296
 トモイナハイ297
 トモイネ299
 トモイマセ296
 トモインサイ295, 296, 297
 トモエ295, 297
 トモエー295
 トモエサン295
 トモエサンセ295
 トモエタイ74
 トモナー298
 トモエナハエマへ297
 トモヤ296
 トモヤー295
 トモワッシャイ298
 トモワッシャイ(エ)298
 トヤ43
 トヨ43, 45, 46
 ト(ツ)ヨ44
 トヨ>トイ>タイ62, 63
 ドレ460, 594

ド(ぞ)レ453
 トワイ385
 トワイ>タイ63, 65
 トワイ→タイ64, 497
 「ト・ワイ」→タイ83
 トン45, 46

〔ナ〕

ナ363, 431, 517, 562
 ナー321, 363, 517, 547
 ナーアータ486
 ナーアタ485, 486
 ナーアタモーシ544
 ナーアタモシ486
 ナーアンタ484, 486, 487
 ナーコラ612
 ナーシ531, 541, 544, 545, 546, 547,
 549, 550, 553, 558, 560, 561, 565,
 571
 ナーシ(ス)555
 ナーシ[i]555, 557
 ナーシ546
 ナース [ü]555
 ナーソラ612
 ナータ485, 486
 ナーヘ509
 ナームシ545
 ナーモ553
 ナーモ545
 ナーモーション549
 ナーモシ545, 549, 554
 ナーモシ(→ナモシ)557
 ナーラ612
 ナーレ454, 460, 465, 466
 ナーション558
 ナーント487
 ナアンタ484

ナイ321, 384
 ～ナイ390
 ナイシ553, 556
 ナイモン (ねえ).....549
 ナエタ487
 ナオ543, 548
 ナオイン580
 ナオシ548
 ナオンス557
 ナケノ432
 ナサ507
 ナサライ390
 ナシ.....531, 536, 537, 544, 545, 547, 549,
 554, 556, 557, 558, 559, 560, 561,
 565, 571, 578
 ナシ (ス).....555
 ナシ [i].....555
 ナシ546
 ナシ [i] -559
 ナス557
 ナス [ü].....555
 ナセ376
 ナタ484, 485, 486, 487
 ナター477, 485
 ナッシ559, 560, 561
 ナッシ507
 ナッシ [i].....557
 ナッス557
 ナッタ485
 ナッハ507
 何々だ[↑]ワ434
 何モ364, 377, 378
 ナネ431
 ナハ503, 504, 506, 507
 ナバイ412
 ナハン507
 ナフン507

ナマイ477
 ナミ573
 ナム536, 552, 553, 554, 556
 ナムシ.....536, 551, 553, 555, 556, 558,
 559, 560
 ナムホイ554
 ナモ.....378, 536, 538, 539, 541, 544, 547,
 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555,
 556, 560, 561
 ナモ545
 ナモシ.....294, 484, 516, 517, 522, 531,
 536, 537, 541, 542, 543, 545, 546,
 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553,
 554, 555, 556, 558, 559, 560, 561,
 562, 571, 578
 ナモシ576
 ナモン551
 「ナラ」の属.....191
 ナラ170, 191, 193
 ナラ→ナ192
 ナラ→ナー192
 ナラ→ナイ191, 192, 193
 ナライ193
 ナラナ192
 ナリャ193
 ナリャー192
 ナレ.....453, 454, 460, 462, 463, 465, 466,
 467
 ナン193, 552, 554
 ナンシ547, 553, 557, 558, 559, 560
 ナンシ (ス).....555
 ナンス558
 ナンタ.....381, 410, 484, 485, 486, 487,
 495, 613
 ナンタイ69
 ナンホイ554

〔ニ〕

「ニ」の属	23
九州地方の「ニ」	23
中国地方の「ニ」	25
四国地方の「ニ」	28
近畿地方の「ニ」	30
中部地方の「ニ」	33
関東以北地方の「ニ」	38
ニ	23, 26, 27, 29, 31, 32, 33, 34, 36, 37, 39, 40, 574, 575
ニ (ニー)	35
ニ一	26, 28
ニ一シ	542, 574
ニサ一	32
ニシ	574, 575
ニシユ	567, 574
ニス	575
ニセ	574
ニナ一	30
ニモシ	542, 574
ニャエン	201
ニャワ	427
「ニロ」の属	162
ニン	24

〔ヌ〕

ヌ	575
ヌス	575
ヌマイ	478
ヌモシ	542, 575
ヌンシ	575
ヌンタ	489

〔ネ〕

ネ	202, 528
ネーション [i]	572
ネアース	572
ネアシ [i]	572
ネアス	572
ネアス [ü]	572
ネアンシ [i]	572
ネアンス	572
ネアンス [ü]	572, 573
ネ一シ	542, 571, 574
ネ一シ [i]	572, 573
ネエン	574
ネ一シー	574
ネ一ス	573
ネ一タ	489, 490
ネ一ヘ一	510
ネサ	587
ネサ——ネハ	587
ネシ	542, 571, 572, 573, 574, 578
ネシ [i]	572, 573
ネシ [i] —	572
ネス	572, 575
ネス [ü]	573
ネタ	490
ネッス	573
ネハ	503, 504, 506, 507
ネミ	556, 573
ネモシ	542, 571, 572, 578
ネヤ	370
ネレ	466, 467
ネワ	417
ネン——ネ	13
ネンシ	573, 574
ネンシ [i]	572
ネンス	572

ネンス [ü].....573
 ～ネンワ429

[ノ]

「ノ・ン」の属.....4
 南島地方について5
 九州地方の「ノ・ン」.....6
 中国地方の「ノ・ン」.....7
 四国地方の「ノ・ン」.....9
 近畿地方の「ノ・ン」12
 中部地方の「ノ・ン」15
 関東地方の「ノ・ン」17
 東北地方の「ノ・ン」19
 北海道地方の「ノ・ン」22
 ノ.....4, 6, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16,
 17, 20, 22, 363, 562, 566
 ノイシ567
 ノイセ567
 ノイタ489
 ノエタ489
 ノー10, 14, 547, 597
 ノー[↑].....10
 ノーアタ488
 ノーアナタ488
 ノーアント488
 ノーカー365, 369
 ノーケャー (キャー).....369
 ノーケー365, 369
 ノーシ.....541, 547, 563, 564, 565, 566,
 567, 568, 569, 571
 ノーシ563
 ノーセ565
 ノーゼ565
 ノータ489
 ノーナタ487, 488, 489
 ノーナンタ487
 ノーマイ477

ノームシ570
 ノーモ563
 ノーラ457, 461
 ノーレ454
 ノーロ452, 453
 ノーンタ489
 ノカ368
 ノケ368, 370
 ノケャー369
 ノケヤ368
 ノシ.....522, 536, 537, 563, 565, 566, 567,
 568, 569, 570, 571
 ノシエ567
 ノシヤ563
 ノシヨ567
 ノシラ457
 ノシン568
 ノッケ368
 ノッソ565, 569, 570
 ノッソヤ20, 531, 571
 ノデ.....96
 ノナー17
 ノナタ487, 488, 489
 ノネ.....22
 ノマ597
 ノマー478
 ノマー[↑]477
 ノマイ.....381, 477, 478, 480, 484, 485,
 486
 ノモ537, 562, 563, 568, 571
 ノモイ477, 478
 ノモー563
 ノモシ.....294, 522, 537, 542, 562, 564,
 566, 568, 569, 570, 571, 578
 ノヤ→ネン.....13
 ～のや ワ429
 ～のや ワ→ネヤ ワ427
 ノラ457, 461

ノワ	420, 424, 438
ノン	7, 9, 10, 11, 12, 13, 16
ノンカ	12
ノンシ	563, 565, 566, 567, 569, 570
アンシ	567
ノンタ	489
ノンモ	563
ノンヤ	12

〔ハ〕・〔バ・パ〕

ハ	503, 504, 505, 506, 507, 508
「ハ」の属	443
バ	203, 208, 446, 447, 448
ハー	500, 501, 502, 503, 504, 505, 506
バー	203, 444, 447, 448
ハァ	504
バーイ	405, 406, 408, 409, 411
ハーン	501
ハイ	592, 593
パイ	414
「パイ」の属	402
バイ	60, 61, 62, 64, 65, 66, 69, 72, 73, 163, 382, 383, 403, 405, 406, 407, 408, 411, 413, 415, 445, 446, 497
ばい	614
バイアータ	403, 494
バイアタ	403
バイアンタ	494
バイタ	66, 403, 410, 493, 494, 495, 497
バイナ	403, 408, 409, 410, 412, 443
バイナイ	412
バイナタ	495
バイナン	409
バイネ	403, 408, 412, 446
バイノ	409, 410
バイノーマイ	412
バウ	403

バーウ (bō)	410
バエ	403, 407, 412
バェ	405
バエー	415, 448
バオ	403, 407
バオマイ	445
「バシ」の属	161
「バッテン」の属	164
ハテ	314, 593
バナ	443, 444, 445, 446, 449
バナーシ	444
バナイ	444
バナタ	445, 485, 486, 493
バナン	444
バネ	446
バノ	444, 446
バマイ	478, 493
ハヤ	500
「バヤ」の属	162
バヤ	444, 445, 446, 448
バヨ	444
ハラ	590, 591
ハラー	590
ハレ	591
ハン	501, 507
バン	68, 71, 403, 405, 407, 409, 410, 411, 444, 446
バンタ	494
バンタ	410, 486, 494, 495
バンター	494
バンタイ	72
ハンナ	476
バンモ	412

〔ヒ〕・〔ビ〕

ヒー	534
ヒテ	313

ビヤ415
 ビヤー506
 ビャー403, 407, 409
 ビャン582
 ビョー196

[フ]

ファ504
 ファー506
 フン592

[へ]・[べ・ペ]

へ510
 「べ(ペ)」の属195
 ペイ196
 へー500, 508, 509, 510, 592, 593
 べー403, 407, 411, 413
 べー (ペー).....195
 べー195
 べース535
 ベータ403
 べおの340
 ベシ535
 ベシ(ス).....535
 ベッチャ251
 へハナ393
 ベラ465
 へン593, 613

[ホ]・[ボ]

ホ373
 ホ614
 ボ408
 ホイ581

ホイテ515
 ホイノ374
 ホー588
 ボー204, 403, 408, 410
 ホカ374
 ホニ498, 499
 ボマイ478
 ホラ516, 517, 587, 589
 ホレ588, 589
 ホン499, 581
 ホント499
 ホンニ498

[マ]

マ594, 595, 596, 597, 598
 マー597, 598
 まあ594
 マイ475, 478, 612
 マサー393
 マサイ393
 マシ596
 マスラ390, 393
 マスラー390
 マスライ390
 マツ513
 マヅ512, 513
 マッサイ393
 マッチャ251
 マッテン607
 マッテン607
 「マデ」の属169
 マデナエ320
 マレ466
 マン595, 596, 597
 マンズ513
 マンツ512
 マンヅ512

[ミ]

ミ300, 303, 613
ミ303
ミシ519
ミシ [i]520
ミシヤ520
ミヤール301
ミンサイ301
ミンシ304

[ム]

ム340, 540
ムイ326
ムサ519, 520
ムシ519, 520
ムシ [i]520
ムシアー519
ムシヤ520
ムヌ325
ムン325, 326, 329, 331, 335
ムンカイ331
ムンナ330, 331
ムンヨ331

[メ]

メ476, 539, 540
メター596
メー540, 614

[モ]

モ161, 325, 330, 332, 334, 335, 337, 340, 342, 521, 527, 537, 538, 539, 540, 541
---	---

モイ538
モウ294
モー510, 511
モーシ518, 522
モーシ [i]520
モーシ [i]520
モーシ329, 330
モサ520
モツ294, 363, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 524, 527, 537
モシ [i]520
モシヨ614
モナ336, 340, 341, 342
モナタ485
モナッス340
モナモ377
モニ329
モヌ328
モネ327, 328, 329, 340, 342
モネー328
「モノ」の属324
モノ324, 325, 327, 329, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 340, 341, 342, 343
ものお332
モノカ337
モノナ340
モノネ337, 342
モヤ336
モン325, 326, 327, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 340, 341, 342
モン→ムン327
もんお332
モンカ337
モンガ335
モンシ335
モンタイ68

モンデ……………93, 334
 モンナ……………325, 327, 328, 329, 330, 331,
 333, 334, 339, 340
 モンナー……………332
 モンナイ……………328
 モンナキ……………365
 モンナケ……………365
 モンナタ……………485
 モンニュ……………327
 モンネ……………325, 327, 328, 330, 337, 339,
 342
 モンノ……………328, 330, 331, 336
 モンノマイ……………330, 477
 モンノモ……………330
 モンバ……………445
 モンバイ……………408
 モンマ……………334

〔ヤ〕

「ヤ」の属……………190
 ヤ……………170, 186, 309, 363, 600
 ヤー……………232, 308, 311
 ヤーシー……………612
 ヤイ……………392, 400, 599, 601, 603
 ヤエ……………401
 ヤカ……………191
 ヤサ……………191
 ヤシ……………612
 ヤゾ……………191
 ヤデ……………190
 「ヤラ」の属……………161
 ～ヤリ……………459
 ヤレ……………598, 599, 600, 601, 602, 603, 604,
 605, 606
 ～ヤレ……………459
 ～ヤロ……………459
 ヤワ……………191

～ヤ<指定断定助動詞> ワ……………426
 ヤン……………600

〔ユ〕

ユー コトモ ナー……………608
 ユータラ……………210

〔ヨ〕

ヨ……………37, 88, 188, 202, 363
 ヨイ……………580, 591
 ヨー……………87
 ヨーレ……………466
 ヨカイ……………366
 ヨケ……………368
 ヨシ……………522, 523, 524
 ヨシヨ……………523
 ヨス……………523
 ヨスナ……………523
 ヨラ……………457
 ヨラヨ……………457
 ヨラレ……………457
 ヨレ……………466
 ヨワ……………417, 439

〔ラ〕

ラ……………176, 455, 456, 460, 461, 462, 464,
 468
 ラー……………199, 381, 384, 385, 390, 590
 ライ……………384, 385, 390, 455, 457, 458, 460,
 461, 462, 468
 ライラ……………458
 ラエ……………457, 461
 ラヨ……………456
 ラヨー……………461
 ラン……………458, 461, 463

〔リ〕

リ	459
リー	102

〔レ〕

レ	451, 453, 454, 455, 459, 463, 464, 465, 467, 468
レア	467
レイ	460
レー	460, 463, 471, 472
レヤ	464

〔ロ〕

ロ	456
ロヨ	461

〔ワ〕

「ワ」の属	415
ワ	126, 127, 128, 389, 391, 401, 415, 417, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 428, 430, 431, 432, 435, 437, 438, 439, 497
ワ	434
ワ	424, 426, 427, 428, 435
ワー	386, 389, 392, 416, 419, 420, 421, 423, 424, 425, 427, 428, 431, 432, 435
ワー	428, 431, 432
ワー	423, 426, 434
ワーイ	382, 383, 405
ワード	441
ワーン	396

「ワイ」の属.....380

ワイ	61, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 389, 390, 391, 392, 394, 395, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 407, 417, 424, 425, 471, 497
----	---

ワイ>バイ.....64

「ワイ」内在の言いかた.....435

ワイエー	398
ワイカ	398
ワイサ	381, 398
ワイシ	381, 391, 394, 398
ワイシー	525
ワイシャ	391
ワイシヨ	394
ワイタ	493
ワイナ	381, 385, 391, 393, 394, 397, 398
ワイナー	400
ワイニ	33, 35
ワイニャ	398
ワイネ	381, 385, 393, 397, 398
ワイネン	75
ワイノ	381, 391, 393, 394, 397
ワイモ	398, 539
ワイヤ	391, 393, 394, 397
ワイヨ	385
ワエ	383, 386, 417, 423, 432, 433, 434
ワエ	396
ワエアー	396
ワエー	386, 392, 400
ワエーモ	398
ワカ	368
ワガ	471
ワカイ	366
ワケ	358, 359, 431
ワケー	359, 431
ワケサ	358
ワケノ	432

ワケヤ432
 ワケヨ432
 ワサ417, 419, 428, 430, 434
 ワサナー429
 ワシ380, 417, 428, 437, 525
 ワシテ313, 314
 ワシヨ428
 ワダ176, 425, 428, 429
 ワダー425
 ワタシ379
 ワッチャ243
 ワテ429
 ワデ96, 98, 99, 102, 127, 424, 426
 ワテナー429
 ワナ417, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 433, 434, 436, 437, 439, 442
 ワナ422, 433
 ワナー422
 ワナー427, 428, 433
 ワナシ441
 ワナモ553
 ワニ419
 ワニー428
 ワニャー398
 ワネ417, 420, 422, 423, 424, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 436, 437, 439, 442
 ワネー431
 ワネー431
 ワネー434
 ワネヤ424
 ワノ417, 421, 423, 424, 425, 429, 430, 431, 433
 ワノー422, 425
 ワモ539
 ワヤ417, 424, 427, 428, 430, 432, 434, 436, 441

ワヨ380, 417, 421, 424, 425, 427, 428, 429, 431, 433, 435, 436
 ↑
 ワヨ424
 ワラ456
 わら471
 ワリ471
 わり455
 ワリャ473
 わりや471
 「ワレ」の属450, 470
 ワレ451, 452, 453, 455, 458, 462, 471, 472, 473, 600
 ワレ, ワイ463
 ワレ>アレ>レ472
 我は598
 ワン383, 384, 392, 396, 400

〔ワ〕

ヲ341
 ラン341

〔ン〕

ン4, 5, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 22
 ンカシランガ142
 ンセ567
 ンタ489
 ンター481
 ンヂー102
 ンデ92, 93, 94, 95, 96, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104
 ンデイヨ98
 ンデー102
 ンデヨ98
 ンナ38
 ンナイ193

ンナエ	193	ンナラカ	193
ンナラ	191, 193	ンナン	193
ンナライ	193	ンモイ	478

II 事項索引

〔ア〕

- あいさつことば……………480
 会津弁……………437, 556
 会津若松弁……………529
 相手によびかけることば……………607
 [ai] 連母音相互同化……………140, 142
 上がり調子……………415, 485
 アクセント……………434
 アクセント成態……………542
 あつらえの表現……………108
 あつらえ……………118
 [a] 母音連続……………477
 安定形……………394
 安定形式……………484, 497

〔イ〕

- 言いかけ表現……………19
 言いきりの表現……………421
 言いさしの文表現……………85
 「言う」に関する文末詞……………212
 伊賀弁……………428
 諫早ことば……………486
 意志表現……………238, 505
 石巻弁……………339, 356
 出雲弁……………164
 伊勢ことば……………32
 一ノ関弁……………250
 意味機能……………350
 意味作用……………221, 297, 608
 祖谷弁……………425
 伊予弁……………28, 303, 388, 389, 541

〔ウ〕

- 受けひき……………19, 21
 打消……………93
 打消助動詞……………387, 390
 訴え……………86, 272, 363, 533
 訴えの推進・展開・進歩……………542
 訴え音効果……………598
 訴えかけ……………202, 497
 訴えかけのことば……………468
 訴え効果……………321, 386
 訴えの効果……………85, 318, 363
 訴えことば……………86, 128, 165, 196, 208,
 211, 212, 238, 495, 533
 訴え作用……………312
 訴え手段……………1
 訴え心理……………468
 訴え性……………170, 190
 訴え成分……………253
 訴え要素……………1
 訴え力……………116
 宇和島弁……………211

〔エ〕

- 詠嘆……………69, 403
 越後弁……………162
 越中ことば……………463

〔オ〕

- 大阪弁……………169, 277, 394, 521, 522
 応答……………86, 93

大牟田弁	72
岡山弁	387, 388
隠岐方言	28
隠岐島方言	423
おさえの効果	49
尾鷲ことば	461
尾張弁	576
音韻形	411
音韻地盤	66
音韻論	62, 409
音訛	129, 139, 381
音訛形	409
音感	115
音形	413, 415, 607
音形態	211
音効果	115, 155
音相	61, 519
音調	423, 435
音転	519
女ことば	548, 564, 592
音便	603

〔力〕

開音節言語	129
会話表現	202, 299
係助詞	3, 165
格助詞	3, 50, 51, 56, 85, 128, 135, 158, 211, 293
格助詞系	42, 86
訛形	386, 461
下降調	417, 423, 424, 425, 426, 432, 433, 435, 437
下降調の短呼	53
鹿児島弁	254
唐津城内弁	600
城内弁	412
城内ことば	562

非城内弁	545
城外弁	345
軽米弁	291
河内弁	473
関西系	85, 226, 399, 483
関西的	22
簡小文表現形	3
感声系文末詞	586
感声系	1, 33, 172, 566, 570, 574, 575
感声系の文末詞	1
感声的	591, 594, 604
感声的文末詞	23, 175, 176
感嘆詞	225, 421, 539
感嘆表現	6, 9, 10
感嘆文	5, 415
関東系	204, 211, 353
関東的	210
関東的(→東国的)	22
間投詞	503
感動詞	3, 294, 516, 578, 579, 581, 582, 586, 594, 603
感動詞系(文系)の転成文末詞	516
感動詞系(文系)文末詞	497
感動詞系文末詞	578, 586, 599, 606, 607
感動詞系(文系)	516, 517, 583, 599
感動詞系	372, 516, 594, 606
感動詞的	583, 606
間投助詞	367
感動表現	599
間投文	58
関東弁	426
勧誘の言いかた	468
勧誘表現	505
勧誘の表現	35, 457

〔キ〕・〔ギ〕

聞こえの効果	253
紀州ことば	566
機能価値	61
機能差	61
疑問詞	448
疑問表現	281, 316
疑問文	448
逆接の接続助詞	11, 163, 166
九州弁	6, 60, 164, 327
九州方言	41, 42, 56, 60, 63, 64, 65, 73, 75, 77, 83, 84, 85, 131, 270, 403, 404, 408, 479, 486, 497
九州南部方言	78
共時論的	5, 57, 390, 443
強調詞	272
強調表現	542
強調の表現	153, 155
共通語	4, 17, 18, 41, 86, 149, 155, 158, 209, 212, 222, 253, 265, 325, 336, 342, 343, 358, 435, 439, 489, 593
共通語意識	427
共通語化	281, 401
共通語界	115, 325
共通語習慣	115
共通語法	285, 372
京都弁	2, 334, 524
京言葉	509
拒否表現	204
近畿系の文末詞	314
近畿弁	160, 380, 393, 417, 426
近畿方言風土	426

〔ク〕

串本ことば	456
国頭方言	612
球磨弁	405
熊本弁	165

〔ケ〕・〔ゲ〕

敬意性	86
敬意度	565
敬語法	142, 194, 195, 386, 548
敬讓の名詞	614
敬卑心理	533
形容語	3, 320, 322
形容詞	320, 321, 322
形容詞系の転成文末詞	320
形容詞・形容動詞	3
形容動詞	322
形容動詞系の転成文末詞	322
形容動詞系文末詞	322
言語意識	403
言語界	435
言語感情	92, 537
言語心理	537, 580
言語生活	253, 367, 542, 609
言語体験	63
言語大衆	537
言語表現	517
原生的本来の文末詞	609
謙遜語	517
謙遜のことば	528, 546
現代日本語の研究	609
現代方言	415

〔コ〕・〔ク〕

「来い」に関するもの	308
高調	424, 425, 432
肯定表現	142
高平調	427
抗弁表現	342
語幹	140
語感	390, 425

告知性	93
告知の用法	97
告知表現の用法	92
語形分布	140
古語助動詞	535
ことば調子	485
「コト」文末詞の存立と活動	343
「ご覧」関係の文末詞	306

〔サ〕

佐賀弁	167, 485
下がり調子	415
さそいの表現	133, 460
薩摩弁	384
佐渡弁	335
作用言	318
山陰本位	138, 140
山陽系	26
山陽本位	138

〔シ〕・〔ジ〕

子音転訛	404
辭去のあいさつ	417
辭去のことば	100
自己感動	591
指示機能	363
指示代名詞	372, 585
自称	379, 473
自称系	418, 421, 431, 451, 452, 453, 455, 456, 472, 473, 497
自称系と対称系	497
自称系・対称系	418
自称系の文末詞	454
自称代名詞系	456
士族語	614
辭退のことば	442

指定断定助動詞	13, 64, 66, 426
指定断定の助動詞	14, 36, 62, 126, 170, 171, 174, 175, 176, 607
自得の表現	7
新発田ことば	526
事物代名詞	363, 365, 366, 372
事物代名詞系文末詞	372
事物代名詞系の文末詞	364, 378
事物代名詞の文末詞	378
事物代名詞の文末詞化	364
終止法	149
終助詞	415, 540
主格助詞	155
熟合形	542
熟合習慣	208
熟合度	537
純四国系	564
順接の接続助詞	156, 159, 160
準体助詞	42, 43, 47, 48, 50, 56
準体助詞系のもの	56
上昇調	417, 424, 425, 426, 427, 428, 435
上昇調の文アクセント	96
庄内弁	163, 249, 441, 570
上品語	210, 354, 435, 567
省略形	484
省略法	18, 386
助詞	23, 128, 208, 214, 222, 298, 418, 577, 583
助詞系の転成文末詞	3, 4, 571
助詞系転成文末詞	85, 155
助詞系文末詞	4, 5, 16, 27, 40, 86, 169, 285
助詞系	4, 33
助詞系の文末詞	10, 273
女性語	272, 336, 435, 552
女性の文表現	555
助動詞	116, 118, 126, 170, 175, 177,

	186, 187, 188, 190, 191, 194, 195, 197, 199, 201, 239, 415, 535
助動詞系の転成文末詞	170, 191
助動詞系文末詞	185
助動詞系	171
助動詞系の文末詞	76, 170
助動詞表現	75
尻さがりのアクセント	430
親愛敬語法	92
心懐の表現	338
新庄弁	557
深層心理学	609
人代名詞	415, 468
人代名詞系文末詞の使用と伝播・伝流	453
新文末詞	203, 272, 288, 614
一個新生の文末詞	338
心理表現	342

〔ス〕・〔ズ〕

推量表現	78, 79, 80, 81, 82, 83, 338, 535
非推量表現	83
ズーズー弁	308
「する」系文末詞	314

〔セ〕

生活語	78, 116, 402
生活語経験	580
生活表現	537
制止・禁止の表現	141
接続詞	515, 586
接続詞系の転成文末詞	515
接続助詞	2, 3, 48, 49, 50, 56, 85, 86, 91, 94, 95, 99, 104, 106, 107, 109, 128, 135, 155, 156, 158, 160, 274

接続助詞系	27, 86, 89, 91, 94, 95, 100, 102, 107
接続助詞系の文末詞	90, 105, 135
説明表現	11
説明の表現	7, 505
仙台弁	196, 246, 289, 338, 439, 512, 573

〔ソ〕

尊敬表現法助動詞	599
尊敬法助動詞	604

〔タ〕・〔ダ〕

待遇気分	561
待遇表現	142, 484
待遇表現法	485, 576
体言	407, 408
体言止めセンテンス	362
体言文	362
対称	379, 473
対称代名詞	468, 469, 470, 471, 484, 485
対称代名詞系文末詞	471
対称代名詞系	457, 474
対称系文末詞	497
対称系	472, 473, 479, 497, 451
対他のよびかけ性	591
代名詞	363
代名詞系の転成文末詞	3, 363
代名詞系文末詞	363, 364
代名詞系	451
対話の文末詞	378
濁音化	77, 83, 133, 153, 154
濁音形	154
短呼	51, 143, 424, 435, 461, 567, 597
短呼形	454

短呼下降	423, 425, 428, 429, 430
丹後弁	429
単語論	516
単語論次元	516
単純感声	8, 10, 542
単純形の文末詞	484

〔チ〕

地方共通語	382
中国山陽系	564
中止的表現でのよびかけ	438
中止的要素	2
中舌音	530
中予弁	141
長音化	70, 329
長形の意味作用分子	608
長呼	179, 406, 423, 425, 428, 430
長呼形	408, 420
調子ことば	579
長大文末詞	142

〔ツ〕

通時論的	599
通用語	565
津軽弁	341, 448
つけそえことば	543, 592, 601
坪田方言	109
つよい訴え	344
つよいよびかけ	204, 544

〔テ〕・〔デ〕

低待遇価の表現	73
ていねい気分の表現	137
低品位の表現	311
転訛形	368, 396, 600

転成文末詞	1, 2, 3, 23, 169, 202, 320, 516, 609, 613
転成の文末詞	1
転成文末詞の諸領域	3
転成文末詞の生成	2
伝言法	275, 276
伝言表現	44, 45
伝達表現	42, 56, 57, 60, 531

〔ト〕・〔ド〕

問いの表現	7, 8, 44, 130, 144, 350, 354, 368, 447
問いの文末詞	5, 6, 11
東京語	8, 17, 20, 86, 109, 210, 224, 281, 289, 324, 325, 390, 417, 435
東京語本位	336, 343, 358
東京弁	160, 293, 350, 354, 424, 425
東国系	203, 204, 513
東国的	208
東国地方本位	210
東方系	521
動詞	2, 202, 203, 221, 273, 312, 318
動詞系の転成文末詞	202
動詞系転成文末詞	259
動詞系文末詞	202, 212, 252, 253, 292, 293, 294, 303, 308, 317, 318, 613
動詞系の文末詞	202, 219
動詞の文末詞化	318
動詞の命令形	528
動詞命令形	175
高前ことば	586
東北弁	54
東北方言	286, 503, 521
東予弁	141
特異な複合形	139
特定慣用文	3, 372

特定の意味作用	312
特定の訴え	272
特定の訴えことば	304, 324
特定の訴えかけことば	304
特定の訴え要素	299
特定の文形	583
特定文表現習慣	3
特定文末詞	166, 579
特定文末部	156, 325, 583, 607
特定要素	3
土佐弁	11
土地ことば	540, 554, 611
鳥取弁	387
怒罵の表現	475
豊橋方言	209, 396

〔ナ〕

内在形	397
内部分化	363
長岡弁	279
中津ことば	482
ナ行音	542
ナ行音文末詞	484, 542, 565, 597
名古屋弁	552, 553
南島方言	253, 372

〔ニ〕

新潟ことば	352
西系	114, 571
日本語	594, 609
日本語学	609
日本語研究	609
日本語の文末詞	578
日本語「文表現」	609
日本語文法構造	609
日本語方言状態	609

二人称代名詞	474
人間言語の学	609
人称代名詞	363, 379, 469
人称代名詞形	380
人称代名詞系文末詞	497
人称代名詞系の文末詞	497
人称代名詞の文末詞	379
人称代名詞<自称>系の文末詞	379
人称代名詞<対称>系の文末詞	381, 451, 468

〔ハ〕

派生形	542
八丈島方言	151, 152
発音基底	338
発音風土	366
花巻弁	533
反抗・反駁の表現	93
反駁表現	267
反語の表現	447
反語法	348
汎社会学的	609
反拗表現	510

〔ヒ〕

東系	114
比川方言	87
非感声系の転成文末詞	1
非感声系の文末詞	1
非感声系のもの	1
彦根ことば	550
卑称	470
肥筑方言	83
否定表現	350
氷見ことば	463
姫路ことば	502

表現意図	517
表現価	98
表現開拓	608
表現価値の独自性	561
表現形	275
表現形成	468
表現効果	155, 342, 521, 548
表現差標	93
表現習慣	27
表現心意	561
表現性	305
表現生活	84, 305, 560
表現世界	490
表現の品位	569
表現品位	485
表現分子	1
表現法	152, 196, 216, 217, 221, 243, 342, 354, 424
表現要素	536, 608
標準語	430, 576
標準語法	253
弘前弁	507, 572
品位差	369

〔フ〕・〔ブ〕

風土差	357
風土性	486
複合形	67, 102, 140, 151, 178, 247, 313, 314, 444, 557
複合形文末詞	13, 45, 46, 67, 129, 191, 294, 328, 476, 480, 484, 490, 529, 536, 611
複合形の文末詞	68, 71, 72, 93, 98, 108, 115, 117, 129, 142, 143, 146, 150, 178, 239, 241, 243, 339, 385, 388, 391, 393, 397, 398, 409, 410, 412, 417, 530, 531, 532, 533, 534

複合形文末詞の生産・製作	598
副詞	3, 225, 498, 499, 500, 505, 510, 512, 514, 594
副詞系の転成文末詞	498
副詞系文末詞	498
副詞系	594
文アクセント	55, 95
文系の転成文末詞	516
文系	294, 372, 516, 517
文系の文末詞	294, 308, 319
〔文〕的なよびかけ	379
文表現	1, 2, 65, 106, 128, 137, 156, 165, 202, 232, 272, 296, 304, 312, 318, 319, 320, 322, 324, 344, 362, 363, 497, 516, 517, 535, 578, 580
文末訴え	519, 530, 531, 532, 533
文末訴えア音	535
文末訴え音	5, 127, 369
文末詞	1, 3, 4, 22, 56, 115, 202, 318, 324, 363, 517, 612
文末詞<文末助詞>	609
文末詞化	2, 3, 23, 24, 26, 29, 40, 41, 42, 43, 48, 49, 50, 56, 85, 106, 122, 123, 126, 128, 132, 135, 155, 156, 158, 159, 165, 167, 197, 201, 212, 214, 256, 261, 269, 293, 295, 296, 300, 305, 307, 308, 312, 320, 321, 322, 324, 356, 358, 359, 360, 361, 363, 372, 374, 379, 380, 469, 470, 471, 483, 498, 499, 500, 505, 510, 514, 515, 578, 582, 584, 585, 592, 594
文末詞化の一般的可能性	579
文末詞界	115
文末詞機能	51
文末詞機能発揮者	13
文末詞形	5, 387
文末詞性	329

文末詞創作537
 文末詞調157
 文末詞的なはたらき449
 文末詞的な役わり24
 文末詞的役わり379
 文末詞的用法483
 文末詞<文末助詞>の言語学609
 文末詞の広野1
 文末詞の対他性497
 文末詞複合形587
 文末助詞474
 文末助詞化169
 文末心情364
 文末特定成分404
 文末特定要素85, 498
 文末特定分子325
 文末特定の訴えことば116, 321
 文末特定の訴え分子318
 文末特定表現法318
 文末表現555
 文末付随の訴え音20

[へ]

返事ことば13, 593, 613

[ホ]・[ボ]

母音530
 方言界4, 325, 342
 方言形373
 方言習慣511, 595, 597
 方言上の北海道系派566
 方言上の文末詞577
 方言生活41, 144, 202, 528
 方言世界92
 方言相143
 方言の風土性306

方言表現法142
 方言風土22, 128, 155, 372, 378, 495,
 554
 方言文献31, 110, 112
 方言古文献556
 方言文末詞129
 方言文末詞<文末助詞>609, 611
 方言要素591
 北奥方言560

[マ]

松山弁10, 141

[ミ]

未来形79
 「見る」に関するもの300

[ム]

昔話のことばづかい451
 無限軌道615

[メ]

名詞80, 324, 363
 名詞系の転成文末詞324, 362
 名詞系文末詞324, 362, 364
 名詞構文362
 名詞どめの表現444
 命令意識296
 命令形600, 602, 603, 604, 605
 命令表現49, 56, 430, 431, 439, 457,
 460, 505, 603, 604, 605
 命令的表現589
 命令・詠えの表現594, 595
 命令・勸奨の表現350

命令表現法296

〔モ〕

「申す」に関するもの294

目的格402

問尋表現10, 12

〔ヤ〕

八重山方言163

ヤ行音系542

ヤ行音文末詞600

山形県東根市方言210

〔ユ〕

遊離成分312, 498

遊離要素536

〔ヨ〕

用語気分385

用語品位247, 385, 476

横手弁557

与那国島比川方言131

米沢弁557

よびかけことば2, 20, 209, 305, 474,
543, 544, 578, 580, 581, 582, 583

よびかけのことば379, 380

子どものよびかけことば581

女性のよびかけことば581

よびかけ作用363

よびかけの体系415

よびかけ表現20

よびかけ文表現580

よびかけ文末詞591

よびかけの文末詞300

よびかけ用の特別の文末詞580

〔ラ〕

ラ行五段動詞393

〔ロ〕

老人語424

老年層のていねい語546

藤原与一(ふじわら・よいち)

略 歴

明治42年1月 愛媛県に生まれる

昭和12年3月 広島文理科大学卒業

昭和47年3月 広島大学文学部教授を退官

現在 広島方言研究所をいとなむ
広島大学名誉教授・文学博士

主要著書

『方言学』(三省堂・昭和37年)

『方言研究法』(東京堂出版・昭和39年)

『方言研究の回顧と展望』(方言研究叢書第1巻)

(三弥井書店・昭和47年)

『昭和日本語の方言』第1・2・3巻(同上・昭和48・49・51年)

『瀬戸内海言語図巻』上巻・下巻・説明書

(東京大学出版会・昭和49・49・51年)

昭和61年9月25日 ©

著 者 藤 原 与 一

発行者 和 田 欣 之 介

発行所 東京都中央区 株式会社 春 陽 堂 書 店
日本橋3-4-16

印刷所 三協美術印刷・製本所 丸山製本